

加賀藩史料

第拾五編

自天保拾年
至弘化四年

加賀藩史料第十五編

天保十年

正月朔日。前田齊泰、金澤城に年頭の賀を受く。

〔諸事要用雜記〕

正月元日

一、四つ六歩五厘御表へ御出、御小書院江御着座。諸大夫幷年寄中・御家老・若年寄獨禮被爲受、夫より御大廣間へ御出、人持・頭分一統御禮被爲受、被爲入候節御居間書院四之間に御着座、於舟之間鶴之庖丁御料理頭石黑兵左衞門相勤、御覽被遊、相濟御入被遊候事。

〔官私隨筆〕

正月元日

一、五時前登城。

一、一番座列申上り候は四半時前之所、今日は御出に少御間有之、列居之內半打。御小書院御禮相濟、御大廣間に而人持・頭分一統御禮濟。

一、右御禮九つ前濟。
一、二番座御禮は八つ前濟。
一、御のし頂戴如例。
一、鶴之御吸物御下被下由、御膳奉行笠間善七郎演述。御のし之次に差續き頂戴、再進なし。御酒二遍つぎ、控候而又出一遍つぐ。畢而御禮以同人申上候。此時若年寄も一列。但例は不詳よし也。

正月二日。謡初を行ふ。

〔官私隨筆〕
正月二日
一、御謡初に付、八つ鐘聞歸り候上出宅登城、暮合歸る。無別條。

正月四日。諸郡に夫食米等を貸與せんことを稟請し、尋いで許さる。

〔留　記〕
去年諸郡共作體不定、併御收納の儀は何方茂仝皆濟仕候得共、番作・夫食何茂指支申儀に御座候間、持高・請作高に不拘、十石の作高に御米一斗宛貸渡、其中格別難澁の所又は作高少分の者は、右二斗の割の外に見込米を御貸渡申度奉存候。總御米高の儀者、追而取圖り御達

可申候間、先前段の通早速御聞届御座候様仕度候、以上。

正月四日

駒井丹之丞

埼田達之助

御算用場

朱書

本文の趣承届候條、被得其意、追而石數治定の上は例之通書付を以申聞候樣可被申越候事。

己亥正月

御米渡り左の通り

一、二千四百八十石九斗四合

内六百六十八石五斗八合見込米　能美郡

一、四千五百三十石四升七合

内千二百五十石四合見込米　石川郡

一、千七百二十三石五斗六升四合

内六百五十八石五斗七升九合見込米　河北郡

一、二千六十八石三斗一升

内七百見込米　　　　　　　　　口　　郡
一、千二百四十五石二斗五升四合
内三十七石五斗見込米　　　　　奥　　郡
一、六千百十九石二斗三升九合五勺
内千七百廿一石四斗八升七合見込米　礪　波　郡
一、三千七百三十一石五斗一升
内九百石見込米　　　　　　　　射　水　郡
一、三千七百廿七石五斗八升九合
内千二百石見込米　　　　　　　上新川郡
一、千八百三十八石二斗二升五合
内六百十石見込米　　　　　　　下新川郡
〆惣御米高合二萬八千百六十四石六斗四升二合五勺

正月十一日。金谷御殿に福引を行ふ。

〔成瀬正敦日記〕

正月十一日

一、金谷御出御定日に付、八時前より御出被遊。

一、今日金谷御殿御福引に付、三人共御入後罷出候樣眞龍院樣被仰出候旨、此間御附頭申聞に付、當座之御請申上置、今日退出八ッ時過より三人共罷出候。御三之間に而御福引有之、人々當り候品頂戴仕候。且御吸物・御酒頂戴被仰付、夫々御禮、老女墅頭を以申上、七ッ半時頃右御用相濟退散仕候事。

但、江戸表御本宅御福引之節は、熨斗目上下之由に付、今日も申合右服に而罷出候へ共、御附頭等も服紗上下に候間、以來は熨斗目にはおよび不申事。

正月十七日。米價高直なるを以て米切手所持の者に賣出を命ず。

〔雜事日記〕

近年米價高貴に致賣買、下々難澁不少躰に候條、諸郡・諸町共米切手所持之者共、不貪利分賣出可申候。此上容易に不賣拂、高利を貪躰相聞ゆ候得者、無據調理之筋等有之候條、此段兼而申渡置候事。

一、天保九年米當場印之切手、幷給人切手・町藏印紙墅渡り切手共增印無之切手は、都而渡り方指留候條、切手等所持之人々者控相添、當月十八日より來月晦日迄之內、每日持主直に當場ゆ指出、增印を請可申候。當場印切手之內、當二月より之月附切手は不及增印、渡り方不

指支、給人切手并渡り切手之分は、二月以後之切手たり共、増印無之分は渡り方差留候筈に候條、給人々々より増印受相拂可申事。

正月十七日　御算用場

正月十八日。文政四年の改作法改革を復元すべきことを命ず。

〔郡方御觸〕

改作之御法、微妙院様御草創以來百數十年を經、時勢も移替候に付、文政四年御潤色被仰付候。然處其後改作御法違亂之筋等有之、御潤色之詮茂不相立族も有之。依之今般思召之趣有之、復元之趣を以重而御潤色被仰付候段被仰出、各役名并勤方も先規之通被仰付、御郡奉行百姓直支配被差止、如元十村支配に被仰付候。御郡奉行能・越之分は引越勤に被仰付候。ヶ處も此度御改被成候間、前々兩役振分り相勤候節之通可被相心得候事。

己亥正月

〔三州治農錄〕

百姓分代官儀、前々より十村・新田裁許・山廻より相勤候處、文政四年御仕法以來、御郡奉行代官被仰付候得共、一昨年より御郡奉行代官被指止、古法之姿を以、御郡年寄共江納方被仰付候段申渡置候。今般御仕法方如先規就被仰付候、右代官之儀も最前之通、十村・新田裁許・山

十七日は十八日にあらざるか

廻共可相勤候。口米之儀も以前之通被下候條、被得其意、御郡奉行・改作奉行江可被申渡候事。

亥　正　月

〔成瀨正敦日記〕

正月十八日

一、改作方御修補之趣を以、以前之通改作奉行・諸郡御郡奉行夫々役名御改、且御郡惣年寄等も、以前之通十村・御扶持人之名目に御改に付、今日夫々表方に而申渡有之候由。

〔諸事要用雜記〕

正月十七日被仰渡。

今般御郡方御仕法御潤色就被仰付候、御郡奉行百姓直支配被指止、如元十村支配に被仰付、御郡奉行等役名御改、別紙之通被仰付候事。

加州御郡方御用兼帶被仰付。御勝手方御用兼帶は御免。

內　藤　十　兵　衞

加州御郡奉行

廣　瀨　順　九　郎

能州口郡御奉行。宿村引越

槻　尾　甚　七　郎

能州奥郡御郡奉行。宇出津引越　篠原文次郎

礪波御郡奉行。杉木引越　前田彌五作

射水御郡奉行。小杉引越　不破嘉兵衛

上新川御郡奉行。岩瀬引越　平野知太夫

〔御用留帳〕

天保十年亥正月十八日御仕法替へ之事。

改作方御用
御勝手御用兼帯　安田新兵衛

同斷　駒井丹之丞

改作奉行　上月四郎左衛門

河合清左衛門

鈴木清之丞

崎田達之助

稻葉助五郎

名越彦右衛門

改作奉行
當分加人　松田左兵衛

比良左内
坂田良之助

右今般御詮議之趣有之、御郡奉行・改作奉行振分け、役名等右之通り御改に候條、可得其意候、以上。

亥正月十八日
上月四郎左衛門
河合清左衛門

〔三州治農録〕

今般百姓共御郡奉行直支配被指止、先規通十村支配に被仰付候へ共、支配方に付諸向引合方之儀は、是迄之通御郡奉行より引合可申候。此段御郡奉行・改作奉行江可申談候事。

亥正月

右寫之通、御用番年寄中被申聞候條、可被得其意候、已上。

正月十八日
御算用場

槻尾甚七郎殿

〔河合録〕

御扶持人十村等役列之事。

槻尾甚七郎は能登口郡奉行

無組御扶持人十村
無組御扶持人十村並
無組御扶持人十村列
御扶持人十村
御扶持人十村並
御扶持人十村列
平十村
平十村並
平十村列
右之通天保十年復元御潤色之刻被仰付候。
新田裁許
新田裁許並　此役先年も無之与相見得不見當候。文政二年高木村藤右衞門此名目に申付候後無之候。
新田裁許列
山廻
山廻列

無組御扶持人

御旅屋守

一、名列は一役々々古役列也。並役等御扶持高頂戴いたし候ものは、新古に不拘其一役之上列に成る。其役之内に御扶持頂戴之者數有之候へば、高の多少に拘はらず古役列、何人扶持与歟被下候者は頂戴之年月に不拘、御扶持高頂戴之者之次也。

一、新川郡泊町與三左衞門・安田村道三・入膳村三郎・若栗村文助・中新村覺右衞門五人は、永々御郡奉行直支配に被仰付置、永久被下米も有之、代々御扶持にも似寄申者に付、一役之上列に申渡候。但、其役に御扶持人有之時は、其次たるべき旨申渡置。

一、御扶持人幷平十村相同じ一統ゟ申渡す御用向等、先は郡順也。年頭御禮御料理頂戴者、三州打込列也。其餘御扶持人与申渡儀等有之列居仕時抔、三州打込古役列也。

一、歸役之者列者、乃至平十村之者一旦退役無役に罷成居、重而平十村に被仰付候節、歸役与申名目に而被仰付候へば、元之列に復する也。其名目無之時は、改而被仰付候譯故、元と之列に不加候。將又平十村之者一旦平十村列に相成、重而平十村に被仰付候時も前段同樣也。併臨時之詮議に而、列之儀申渡事に成來候。

但、分役も本文に付候事。

御扶持人十村同並同列を脱するか

〔三州治農録〕

巻目之上御算用奉行ゟ

無組御扶持人十村

同　並

同　列

右苗字爲名乘可申候。

平十村

同　並

同　列

右苗字名乘らせ申間敷候。

右今般御郡方御仕法、先規之通り就被仰付候、御郡惣年寄共等、最前之通十村之名目に被仰付候。依之苗字指省、都而取扱方前々之通可申付儀に候得共、御扶持人之儀は先是迄之通苗字爲相名乘、取扱方之儀も御扶持人・平十村共、先只今迄之通被成置候條、彌諸事無禮緩怠之族無之樣嚴重申渡候樣、御郡改作奉行ゟ可被申談候事。

亥　正　月

右寫之通御用番年寄中被申聞候條、被得其意、可被申渡候、已上。

正月十八日　　　　　　　　　御算用場

槻尾甚七郎殿

正月十九日。本多播磨守家來高橋彭次郎、本多大學の小者小左衛門を斬殺す。

〔高橋彭次郎一件〕

私儀昨十九日夜六半時頃用事有之、縁者同家來給人河崎市右衛門方へ可罷出与存、主家下屋鋪之内播磨守舍弟本多伊織門前へ通り懸候所、小者躰之者參り合、私へ向久助に候哉与申聞候に付、左樣に而は無之与申入候得共、重而久助に無之哉与申聞候に付、侍に候旨相答候所、御手前被致帶刀候者此方にも帶刀いたし居候与申聞、行當りに懸り候に付、手に而支候所、共儘足駄を脫ぎ、裾をつまげ飛懸り、雪積り居候上へ押倒し、拳を揚可及打擲に与いたし候に付、不得止事刀を以切はらひ、二・三刀計面躰を打候へば、ひるみ候に付おき上り候所、刀を可奪取いたし候に付、身を替り切先際ゟ左之手を添押込候得共、彼是いたし暫間取居候內、横より押込候得ば倒臥候に付、後ロ躰を一刀切込、引起咽を指留申候。其所ゟ右河崎市右衛門家來久藏与申者通懸り候に付、呼留、右及殺害候由申入、提灯燈し來吳候樣申入候所、無間

持來候に付、右久藏を番に付置、私儀一先歸宅いたし、父同家來高橋勘右衛門へも其段申入、家來小者召連れ最前之場へ罷越、番人付置、右久藏を相返申候。父勘右衛門儀は右伊織方へ及屆吳、私儀は罷歸り、右之趣書付相認め及斷申候。依而爲御檢使御出、最初提灯燈居候哉如何与被仰聞、小提灯を燈し出候得共無間も消候所、右之仕合致出來、取落急に見當り不申候に付、久藏へ提灯之儀申入候。右之躰には申述候へ共、及殺害候には外に何歟子細も無之候哉。且右之者本多大學殿小者小左衛門与申儀致承知候哉与被仰聞。外に子細有之及殺害候に而者聊無御座、前に申述候通りに御座候。且又小左衛門与申儀は、書附認差出後、大學殿役人中被參承知いたし候に付、其趣も達置申候。小左衛門死骸御見分之所、面躰に六ヶ所ヌ障候疵有、おとがひの裏に少々之小疵一ヶ所、後首髮はへ際に横に三刀計打込候躰に而、左之耳に懸り深疵一ヶ所、同後躰に横疵一ヶ所、咽に突込候疵一ヶ所、都合ヌ物疵十二ヶ所、刀數に而十四刀計に而仕留候与被仰聞、私申述候与は疵數致相違、此儀は如何与御尋。何分若輩之儀、氣合も懸り居、其節は爾与覺無之候得ども、何れ被仰聞候通り与奉存候段申述候所、何れにも此上御詮議之筋も可有之哉に付、今日より徘徊御差留被成候旨被仰聞、承知仕候。此外可申述品無御座候、以上。

本多播磨守家來給人

彭次郎は當年十七歳なり

高橋彭次郎 判

亥正月廿日

村井重左衛門殿

南保虎之助殿

言上紙面寫

中小將組高橋彭次郎儀、大學樣御家來小者及殺害候に付、檢使御乞被遊。依而私共一人幷手合小頭等、前々之通相詰候樣、篠井源五右衛門より申渡候。依而檢使宿中根角右衛門方ゟ仰付候。下宿白江甚九郎方へ被仰付候に付、昨朝六半時頃三宅豊太夫・松崎吉左衛門・私、幷彭次郎相組御目附山口甚八郎相詰、幷私共手合小頭等爲相詰候。大學樣より檢使宿新坂下唯念寺に御賴被成候御樣子に而、頭役倉知次郎四郎・給人横目役長谷川兵右衛門、其外諸役人都合九人御指出、彼方に相詰罷在候所、檢使與力昨夜六つ半時頃村井重左衛門・南保虎之助、下附足輕二人召連れ、此方樣檢使宿右角右衛門方へ罷越、彭次郎最初に呼出始末相尋、其外大學樣方御役人等手前相尋候上、同夜八時頃死骸見分罷越候に付、私儀も手合小頭等召連れ、同道仕見分仕候所、及殺害候儀相違無之与申聞、私儀も同樣に見屆申候。右疵所は面躰に六ヶ所刄障候疵有之、おとがひ之裏に小疵一ヶ所、左之手巨指に小疵二ヶ所、後首髮はへ際に横に三刀計、左之耳に懸り候深疵一ヶ所、後躰横疵一ヶ所、咽に突込疵一ヶ所、都合刄物疵

十二ヶ所、刀數に而は十四刀計に仕留有之候。右小者着物木綿紺綿入・同縞綿入・下古縞絆着し、裾をつまげ、帳箱封付物添紙面有之物風呂敷包を首に懸、素足に而仰向に倒れ罷在候。其邊に柄鞘懸而一尺六七寸計之脇刺、并足駄一足拔捨有之候。

一、高橋勘右衞門儀、檢使所に相詰罷在候へ共呼立不申候。

一、河崎市右衞門家來久藏与申者、同夜白江甚九郎横罷出候所、彭次郎聲を懸候に付、相答候に付、何者候哉此所に而手込に合せ候者有之、不得止事切殺、提灯も先達而消落候間、市右衞門方より提灯借呉候樣申聞候に付、其儘提灯火燈罷越候に付、召連れ死骸見分いたし、暫番に付置候に付、呼立久藏手前相尋候へ共、彭次郎申分通り相變儀無之候に付、無構相返口書取立不申候。

一、彭次郎儀兩度呼立候節、豐太夫・御番頭・私儀も差添出申候。彭次郎重而御詮議之筋も可有之哉与被存候に付、徘徊指留候段申聞候。別紙口上書寫貳通上之申候。

一、檢使與力江御賄方相詰罷在、都合四度出申候。今夕七半時頃相仕舞、何茂罷歸り申候。

依之奉言上候、以上。

亥正月廿日　赤尾淺右衞門

正月二十日。前田齊泰、政務に關する意見を諸士に徵す。

〔御親翰留〕

當年は參勤時節御用捨に而、六月中可致出府旨被仰出、此春は心靜に致在國忝事に候。就而者金龍院殿御敎諭之趣、猶此程取しらべ候處、誠に深き思召立に而、士風を正し三民を安養せらるべき御趣意を以、格別之御敎諭に御取掛、正に思召之趣可被仰出所無程御逝去、國家之不幸を今更存返し、一入殘念無申計候。我等未熟ながら、其御志を可受繼心得には候得共、兎角政事向不行屆、其上近年不作打續、且は不時物入等も多、下々取救方不得任心、是等之儀深令心痛候。去年以來米價も貴き樣子、下々可令難澁折から、處置之得失も可有之、先達而銘々心付之程申聞、何廉心得に相成、益を得候事不少候。尙此後之處置方等、心痛之程推計、何も心付之儀有之候はゞ、何事によらず少も不包可申聞候。且是より申出候儀も、下々會得難仕品有之候者、是又向後無泥時々可申聞候。將又政事之儀、第一人を得不申而は萬端難被行候處、兎角不明に而役儀之與奪も行屆間敷。就而は誰々に不寄何役申付候共、何とか勤兼候樣之儀等有之候はゞ、聊も不憚存底申斷出候儀、却而實儀と存候。斯申せばとて、當時在役之者共始妄りに身を謙り斷出候樣之趣意にては無之、尤其身之苦勞を厭、其役之繁冗を避候樣之類は、一圓取上申間敷候。是等之趣も序にまかせ申聞置候。

右之趣諸士一統江可被申渡候、以上。

正月二十日

長　又　三　郎殿

〔成瀬正敦日記〕

二月六日

一、當朔日御用番被相渡候被仰出之趣覺書左之通。

當年者參勤御時節御用捨に而、六月中御出府之儀被仰出、此春者御心靜に御在國被遊、忝御事に思召候。就而者金龍院樣御敎諭之趣、猶此程御取しらべ被遊候處、誠に深き思召立に而、士風を御正し、三民を御案養可被爲在御趣意を以、御格別之御敎諭に御取懸、追々思召之趣可被仰出處、無程御逝去被遊、御國家之御不幸を今更被爲思召返、一入御殘念之到思召候。御前御未熟ながら其御志を可被爲受繼思召には候得共、兎角御政事向不被爲行屆、其上近年不作打續、且者不時御物入等も多、下々御取救方不被得任思召、是等之儀深御心痛被遊候。去年以來米價も貴き樣子、下々可令難澁折から、御處置之得失も可有之、先達而銘々心付之程申上、何廉御心得に相成、御益を被爲得候事不少候。尙此後之御處置方、御上御心痛之程を奉推計、何も心付之儀等有之候者、何事によらず少も不包可申上候。且御上より被仰出候儀も、下々之便利不宜儀等、惣じて會得難仕品有之候はゞ、是又向後無泥時々可申上

候。將亦御政事之儀、第一人を不被得而者萬端難被行候處、とかく御不明に而、役儀之者御與奪も被爲行届間敷。就而者誰々によらず、何役被仰付候共、何とか勤兼候樣之儀等有之候はゞ、聊茂不憚存底申上斷出候儀、却而實儀与思召候。斯被仰出候とて、當時在役之者共を初、妄りに身を謙り斷出候樣之御趣意に而者無之、尤其身之苦勞を厭、其役之繁冗を避候樣之類は一圓御取上被成間敷候。是等之趣も被任御序被仰聞置候。

右之趣諸士一統江可申渡旨被仰出候條、御目見以上之人々江可被申渡候。心付之趣申上候儀、尤一旦之儀に而も無之、心付次第追々可申上旨被仰出儀條、申上方之儀者天保七年・同八年申渡候通相心得、心付無之人々者分而不及申上候事。

二　月

正月廿一日。金澤石引町より火を失す。

〔成瀨正敦日記〕

正月二十一日

一、今晩五ッ時前、小立野石引町丹後守殿向より出火、四軒燒失、外潰家二軒、五ッ半頃及鎭火。右に付卽刻二御丸江罷出、御近習頭を以御機嫌奉伺。

〔毎日帳書抜〕

丹後守は奥村榮實

正月二十一日

一、小立野下石引町出火、及大火、奉書火消申渡候事。

正月廿一日。領國の女京都より歸る際關所通手形を請けたるもの、取扱に就いて京都詰人より通牒す。

〔上田舊記〕

一、御領國之女他國𛀁罷越、其者江戸・京・大坂より御國へ罷歸り候節、碓氷・關川兩御關所幷柳ヶ瀨御關所通御手形申請、右之者歸着に候得者、無程爲御挨拶御書を以被仰遣候。然處舊臘能州鳳至郡輪嶋河合町木具屋清兵衛後家みき・娘兩人、京都より御國𛀁罷歸に付、御所司代間部下總守殿𛀁京都詰人參上、御手形申請、右娘兩人舊臘十三日歸着之處、御郡奉行より御達方延引に相成、右御挨拶御書之儀御延引に相成申候。依而當月八日、京都町飛脚不時立早飛脚歩以御書被遣候。右御書御使者持參之節、御挨拶方御延引に相成候段も被仰遣候。右樣御不都合に相成、且者不時立を以申遣候儀者、御不益にも御座候間、以來右樣御達方延引に相成不申樣、御郡奉行𛀁被仰遣置、右樣町奉行等𛀁も兼而心得有之樣被仰渡置候樣に奉存候。此段兼而御達申置候、以上。

正月二十一日　　　　鈴木淸左衞門等三人

鈴木淸左衞門等は京都詰人なるべし

長又三郎樣

正月廿六日。學校に文宣王の木主を納む。

〔渡邊兵太夫手記〕

一、正月廿六日文宣王木主播州殿御渡、御文庫江奉納。御草創之砌、横山山城殿より獻上之御畫像御用ひ御祭有之候處、今般木主御渡左之通被仰渡。

渡邊兵太夫江

聖像御飾御規式之節、是迄畫像を被爲懸候得共、此度御先代樣被仰付置候木主御渡被遊候之間、右木主を奉出、御備物等有之候樣可申渡旨被仰出候に付、右木主御手前へ相渡候條可被得其意候事。

亥正月

右木主明制に御倣、松雲公被仰付候品之由。御祭儀註御僉議有之御改、御爵御次より御渡。

二月朔日。初めて上丁の日に學校に釋菜の禮を行ふ。

〔宮私隨筆〕

二月朔日

一、例年正月朔日於學校聖像御飾御規式有之候處、今度被仰出之趣有之、二月上丁に可被仰

播州は本多政和

先代は前田綱紀

付、上丁之日差支候節は仲丁に可被仰付旨被仰出。今年は今朔日上丁に付、今日御飾有之筈之所、松雲院様御代被仰付置候至聖之木主有之、此間御渡に付、僉議之上今年より右木主を御用之事に相成、是迄之聖像は御次へ學校より直に返上之事に前月申渡有之候。且又儀註も是迄之分とは相改、年寄共主付之者も以來出座仕事に相伺。今年は朔日之儀内膳御用番に付、丹後守・播磨守迄罷出候事に伺、伺之通被仰出、今日揃刻限五時に付、のしめ上下着用、五時前出宅學校へ罷出。

一、出座之人々相揃列居申談候由之處、追付不差支由に付丹後守・播磨守も溜に而手を清め伺公所へ罷越。

但、手洗水は小藥鑵に湯を入取受置候事。

一、御飾出來之上丹後守等も拜禮仕候事。

一、御規式濟御簾下り候而其儘退座。

二月二日

一、松雲院様御代、水戸様之御様子御聞合に而被仰付置候祭器數品、幷大聖之木主、豎笏・祝板等、且又書物とも繪圖等前月被渡下、學校方執筆に右繪圖等爲寫候筈之所、繪圖は細圖に而執筆寫兼候に付、於御次爲御寫被渡下候様仕度旨、小左衞門を以申上候處、被聞召屆候

に付、翌四日右品々都而返上之。同人御取次也。但廟規祝文等之類は、執筆に爲寫置候也。

二月五日。改作方の用務に村役人ならざるものをして關係せしむべからざる事等を十村に令す。

［郡方御觸］

改作方御用之儀者、御隱密之品に付、其許中召仕候手代共誓詞も申付置候。然所右手代共等、樣子有之役所等より取放候者、其許中方へ出入いたし、いつしか御用方にも携居候向も有之由、共聞え有之候。其外村役人等、誓詞も不見屆置者之内にも、御用取捌所江入込候者も有之由。右樣之儀は御縮方も不相立沙汰之限りに候。人別可及穿鑿儀に候得共、今度之儀は令用捨候條、以來は御用方取捌之所へ、他之者出入堅爲致間敷、尤御用方に者聊携らせ申間敷候。手代召放候抔者、其許中宅へ出入候事すら遠慮可有之儀に候。

右之趣得其意、向後猥之儀有之候之時は、其許中手前嚴重可遂詮議候。

一、肝煎共御用方等に金澤へ罷越致止宿等候砌、宿元において酒等取はやし、右入用村萬雜に相懸候儀有之、甚以不屆至極沙汰之限りに候。若此末右躰之族聞前等於有之者、嚴重之咎方可申付候條、以來右樣之仕癖可相改候。

一、手代共宅々江村役人等宿いたし候者有之由、不屆至極に候。向後急度相止可申候。

其許は十村なり

右之趣夫々得其意、嚴重可相心得候、以上。

亥二月五日　　　　改作奉行

二月十八日。能登口郡の貯用林を御郡奉行の支配に屬し、御扶持人十村をして主附たらしむべきを告ぐ。

〔三州治農錄〕

口郡村々貯用林山之儀、享和二年以來御郡奉行支配に被仰付置、御扶持人十村ゟ右縮方申渡置、松木生育方等勢子相勤、增木等有之、伐木相願候分者、右御扶持人於手前遂詮議奥書を以、御郡奉行ゟ願書聞屆之上伐渡來候之處、文政四年御仕法後、都而山方御用御郡奉行引受取捌候に付、右貯用林幷御帳附木林之分、高松村貞右衛門ゟ右縮方主附御用爲相勤、年寄列に被仰渡、山廻役之振を以、十三石五斗役料米被下置相勤來候處、今般以前之通能州山奉行被仰付、山方之儀私御用無之段被仰渡候。右者往古御林山、幷一村一ヶ所之御林山方御用之儀与相心得罷在申候。依而右貯用林等之分は、先規之通私支配可仕儀与存候。就而者右縮方等之儀、如以前御扶持人十村ゟ申渡、右貞右衛門儀者、主附御用御指止に相成候而可然哉。若是迄之通、山廻兼役被仰渡置候儀に候得者、御代官千石可被仰付儀与存候。尙更右貯用林縮方等之儀、十村手前詮議仕候處、如已前被仰渡候而、生育方等御縮方少も相ゆるみ申儀者

槻尾甚七郎は能登口郡奉行

御算奉は御算用場奉行

無之、且右御用方格別煩敷品茂無之間、右十村江縮方等御用申渡候而、十村共於手前聊指支之筋者無之段申聞候間、猶御詮議御座候樣仕度候、已上。

亥二月十二日　槻尾甚七郎

御算用場

口郡村々貯用林山之儀、享和二年以來御郡奉行支配被仰付候故、此度能州山奉行被仰付候へ共、御自分支配可有之哉之旨等、委曲紙面被指越、御用番年寄中江茂相達候處、御自分支配有之、御扶持人十村江主附可申渡旨被申聞候條、可被得其意候、已上。

二月十八日　御算用場

槻尾甚七郎殿

二月廿四日。御算用場内に縮所を設くることを許す。

〔毎日帳書拔〕

二月廿四日

一、御算用場御圍内に、全牢屋と申に而も無之、縮所出來之儀御算奉より再往段々申聞、無據相聞候に付承届可申旨窺、伺之通被仰出。

二月廿七日。前田齊泰の子利義及利行、卯辰觀音山に宮參を行ふ。

正月廿二日

一、左之通御横目江今日申談。

來月廿七日甚五郎殿・豐之丞殿卯辰觀音院江御宮參被成、御戻之節金谷御殿江御立寄之儀被仰出候事。

正　月

甚五郎殿・豐之丞殿、來月廿七日卯辰觀音院江御宮參之節、御供之人々一統、熨斗目・上下不及相改、在合之品相用可申候。從者着東之分も勿論在來を用ひ、見苦儀者御貪着無之候。此段御供等之人々江可申渡旨被仰出候。

右之趣夫々不相洩樣可被申談事。

亥　正　月

二月廿七日

一、四ッ時甚五郎殿・豐之丞殿御出、觀音院御參詣。九ッ時過御立、九ッ半前金谷御殿江被爲入、八ッ半時前御立、御廣式江御戻被遊候事。

一、御供に而觀音院へ上り居候內、主稅・小左衞門被爲召御目見被仰付候。追付神前御拜に

一姫は市姫

付、兩人共伺公に罷出る。但主税儀は罷出候御作法に而も無之候へ共、右之通御目見被仰付、程なく御拜故、塩合宜故、右之通伺公に罷出候事。中陣左之方へ兩人共罷出。角尾・山森も伺公、御抱守御用達等は下陣に伺公。觀音院無住に付代勤寳幢寺罷出、是も御拜之節中陣右之方中程に、能しさり候而伺公之事。

一、觀音院に而御つくね飯・御煮染等被下候事。

一、山王社・一姫社・舞臺之方等へも御出之由に候へ共、其節は兩人共罷出不申候事。

二月廿八日。村方に於いて走人を豫防すべきことを告ぐ。

〔御用留帳〕

奔人等之儀は、於改作方別而重き御縮方も有之儀、何茂承知之通り候。然所近年走人多、中には一家內不在合者茂有之躰。右等御縮方之爲め、其村に而五人組之者も有之候得者、前廉其樣子不相知与申儀は無之筈に候。且村役人においては別而之儀に而、御縮方不相立不屆至極に候。以來走り人有之砌は、村役人を初五人組之者嚴重一々及詮議候。此段急速申渡し、裁許村々承糺、御縮方嚴重可相心得候、以上。

亥二月廿八日　　上月四郎左衛門

稻葉助五郎

諸郡無組御扶持人中

御扶持人中
十村中

二月。學校頭を廢して督學を置く。

〔觸留〕

御横目江

今般御學政御修補に付、學校頭御指止。右勤向、明倫堂督學・經武館督學相勤候樣被仰付候。

右之趣爲御承知申聞候條、寄々一統江可被申談候事。

二月

二月。百姓・頭振より提出したる願書は裁許十村の速に之を上達すべきことを命ず。

〔司農典〕

百姓・頭振願事、村役人江相達候而も、品に寄急に裁許々々江不指出に付、直に相達候得者、御縮方之儀を申立手代等不取揚、又村役人より者裁許江相達候而も、品に寄手代共手前に而

留置、裁許ニ不指出に付、永く役所ニ不指出向も有之故、下々に而者諸方ニ手筋を求め申込候様に相成候躰。左すれ者申込等いたし候儀も尤に相聞候。以來者役人共ニ急度申渡、百姓等より相願候品者、不依何事に早速裁許ニ相達、且裁許より者直様役所ニ可相達候。且百姓等より役人ニ不相達、直に裁許ニ指出候儀も間々有之躰に候得共、前段之通御縮方を申立不取揚由に候。以來は直々裁許ニ相達候者有之候はゞ取揚、直達之儀不相成譯、會得之行候様に申諭、重而より直達不相成趣爲申聞、其節之達物等者受取役所へ可指出候。乍去役人ニ相達候而も不取揚歟、又者取揚候而も裁許ニ不指出躰之分者、直達候而も尤取揚、役所ニ可指出候。兎角下方に者、村役人或者裁許手前に而物事滞り候様に存、疑惑有之候間、いかにも下方之儀早く役所へ相通候様致度、又上之意も下ニ早く通じ候様致度事に候。右之所何れも工夫有之取扱方懇に可致事。

亥　二　月　　　　　　　　　　改　作　所

二月。新に能美郡舟場島村・出合島村・燈臺笹明島村及び石川郡運上島村の名を設く。

［一村建村々調理帳］

天保十年二月　　　　能美郡山上組　　　　舟場島村

右舟場島村之儀、上清水・下清水・田子嶋村三ヶ村之名目相調一ヶ村に相成居、諸書物等紛敷候に付、以來舟場島村与相唱度旨、天保十年御願申上候所、唱替御聞届之事。

山上組　出合島村

右出合島村之儀、田子島村与九郎島新村与兩村御高打込、一ヶ村に被仰付、出合島村与相唱度旨天保十年二月御願申上候所、御聞届相成、田子島村・與九郎島新村与申名目退轉之事。

山上組　燈臺笹明島村

右燈臺笹明島村之儀、灯臺笹明島村与二行に相調、諸書物等紛敷候に付、已來燈臺笹明島村与相唱度旨、天保十年十月御願申上候所、唱替御聞届之事。

石川郡山島組　運上嶋村

右運上島村之儀、寛文二年番田村・上安田村領開發被仰付、同三年一村建に被仰付、番田新村・上安田新村与相唱來候所、天保十年御高打込、運上嶋村与唱候様被仰渡、番田新村・上安田村与申名目退轉仕候。右は村御印無之に付、先年新開御證文迄御座候事。

三月十七日。御扶持人十村以下の湯治を出願する手續を定む。

〔岡部舊記〕

御扶持人・十村并新田裁許等、改作方勢子相勤居候分役之者共、入湯等相願候節、最初改作所

ゟ爲致內願、指圖を請、御郡所ゟ表向相願候儀に取極、御算用場ゟ相達方、御郡所にて御辨御座候樣仕度。尤戾り候節も御達方同樣にいたし度。左候得ば改作所ゟは本人より爲相達可申事。

天保十亥三月　　改作所

諸郡御郡所

右寫之通申越候條、得其意、當役所ゟ願出候儀等、右紙面之通可相心得候、以上。

亥三月十七日　　不破加兵衛

惣役名にて宛所

三月廿一日。越中に百姓の逃亡する者多きを以て人を派して實情を檢せしむ。

〔本多政和覺書〕

三月九日

一、四半時過隼人を以被召候に付、御用之間へ罷出候處、先刻入御覽置候越中筋之者、妻子召連越後筋へ離參仕候趣、改方へ三度より斷之小紙被渡下、走り人に候はゞ御郡奉行可及屆、稼として罷越候儀に候はゞ加樣に大勢罷越候事は無之筈。いかゞ之趣に哉遂僉議候樣御意に

三度は飛脚

石野右近は御算用場奉行

安田新兵衛駒井丹之丞は改作方御用

奥附は奥附横目

付、應及御請候。右離參人之儀に付、御郡方去年より難澁之趣、二口伴作・富永半助心付書差出之内へも有之に付、右兩人紙面後刻可奉入御覽旨申上退。

〔本多政和覺書〕

三月廿一日

一、石野右近罷出居候に付、別席に而逢、昨日相渡候越中筋之樣子に付而、新兵衛・丹之丞、越中筋相廻り、下々之樣子親しく及見聞候樣被仰付候間、被申渡候樣等申渡。

一、右之節射水郡走り人高、不破加兵衛より相達候紙面、改作方より折橋善兵衛へ申渡差出候紙面出之。加兵衛之しらべは、去十一月調理後三月十日迄二百十五人、改作方之しらべは正月より百七十四人也。

一、八時前被召候旨、喜市郎申聞罷出候處、越中筋之樣子奥附に而御聞しらべ被仰付候處、如斯申上候旨に而、紙面被渡下、遂僉議候樣御意に付、應及御請、右紙面御算用場奉行等へ寫を以爲見申度旨申上候處、其通と御意。且新兵衛等は何日發足いたし候哉と御意に付、今朝右之趣石野右近に申渡置、一昨日御渡之紙面未新兵衛等拜見不相濟旨申聞候。發足之儀は相尋可申上哉之旨申上候處、明日に而も申上候樣御意、及御請退去之事。

三月廿二日。竹澤天神社前の地を蓮池御庭の園内に入る。

〔成瀨正敎日記〕

三月廿二日

一、左之通三十人頭ゟ申談、且御橫目前田ゟも爲承知申談置候事。

竹澤御鎭守前御馬場土居を境御藪共、蓮池御庭ゟ御圍込、御次御引揚に被仰付候事。

亥　三　月

三月廿四日。復元潤色により百姓を十村支配としたるも、諸向引合方は之を御郡奉行より爲すべきことを告ぐ。

〔御郡典〕

文政四年御郡方御仕法に付、十村裁許被指除、御郡奉行・改作奉行打込、御郡奉行改作方兼帶与申名目に而、百姓直支配被仰付候處、今般思召之趣有之、復元之趣を以、重而御潤色就被仰付候に付、御郡奉行・改作奉行振分、先規之通被仰付、御郡奉行能・越之分者引越勤に被仰付、百姓直支配被指止、如元十村支配被仰付候。乍併支配方に付諸向引合方之儀者、是迄之通御郡奉行より引合候筈に候。

一、右之通就被仰付候に、遠所御用之人々等、其役筋に寄取捌方以前之振を以可相改、品々勤向者猶更御算用場ゟ相達、指圖を請可申候。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

三月廿四日　本多播磨守

廣瀨順九郎殿

槻尾甚七郎殿

篠原文次郎殿

湯原平馬殿

長屋七郎右衞門殿

關澤六左衞門殿

三月廿六日。前田齊泰・齊廣夫人等濱遊を行ふ。

〔上賃屋日家榮帳〕

三月廿六日

御隱居樣・御殿樣・榮操院樣・基五郎樣御四人濱見御出。大野道御通り、御たやに御出、御船に而場所御出。其より塩橋下御出、御齋綱御見物。七つ時にあら町より辻本町御通り被遊候。目出度。

三月。郡方の火災に用ふる水旗の制を定む。

〔御郡典〕

御郡方火事之節、十村共之内、水旗之上に出し幷柄を塗候而用ひ候躰相聞候に付、文化九年御算用場より、右出し等爲指止候樣嚴重可申渡旨申來候に付、其節夫々申渡置候通に候。畢竟人數引纒致指引候節は、目當無之而者難相成儀に候得共、旗制無之故、中には心得違も可有之哉に候間、今度別紙繪圖面を以制度書相渡候條、以來右之通急度相心得可申候、以上。

亥　三　月　　　　槻　尾　甚　七　郎

羽咋・鹿嶋兩郡十村中

追而村方水旗之儀も、別紙制度書之通相心得候樣、夫々可申渡候、以上。

木綿水旗長七尺幅四幅色紅紫之外勝手次第之事。

但、組々に而合印し幷染色取極可書出事。

右長・幅等取極候に付、村々之水旗之儀者、是以後長五尺に三幅たるべき事。

但、村々之分右より小さき分者、當分之處不指支、右より大之分は早速切すべ可申事。

〔成瀨正敦日記〕

四月八日

四月八日。學政を修補す。

一、今般御學政御修補に付、人持以下平士並以上之人々嫡子・嫡孫、當年十五歲より二十三歲迄之人々等、生徒に被仰付候旨等覺書、幷當時勤仕之御步並以上之人々等、生徒に被仰付候旨等覺書、幷當時勤仕之御步並以上之人々、武藝得方与覺候儀書出可申旨等覺書、都合兩通、定番頭江相渡候間、御近習頭中へも可申談旨、如例添紙面に、御主付內膳殿より御廻狀到來。

〔學校方雜纂〕

明倫堂御規則

一、御家中人持以下平士並以上嫡子・嫡孫之人々、十五歲より廿三歲迄九ヶ年間、不洩生徒被仰付候。尤曾孫・玄孫可爲同事事。

附、父之代番相勤候者も可爲同事候。將又家藝有之人々之嫡子・嫡孫は、生徒被仰付間敷候。但、御儒者之嫡子・嫡孫は可爲格別候。新番小頭・三十人頭・坊主頭之嫡子・嫡孫も、生徒不被仰付筈に候。且又御鷹匠小頭以下之せがれ等は、向後生徒被仰付間敷候事。

一、生徒年限中、若親跡目相續被仰付候共、人持之外は無御構廿三歲迄其儘生徒被仰付置候事。

一、廿四歲以上之嫡子・嫡孫も生徒相望候はゞ、願次第一年切可被仰付候事。

一、仙石帶刀等並之人々、且又御馬廻等平士並在勤之人々役懸は除之、其餘相望候者は願次第、右嫡子・嫡孫年限等之通生徒可被仰付候事。

一、生徒滿限之上留學相願候はゞ、一年切可被聞屆候。其上にも尙又留學仕度人々は、年々相願可申事。

但、依願被仰付候嫡子・嫡孫暨在勤之人々留學之儀も、本文之通たる可き事。

一、生徒列之儀、一席之內に而三等に分ち、人持嫡子・嫡孫一列、頭分嫡子・嫡孫一列、平士嫡子・嫡孫一列に相立、一列之內各齡順を以列居可仕候。在勤之生徒は引離れ罷在、其內に而之等級は右に準じ、仙石帶刀等並一列、平士一列に相立、一列之內は可爲齡順事。

一、平士並以上之嫡子・嫡孫、於明倫堂素讀修行之人々卒業候はゞ、十五歲に相成不申候得共生徒可被仰付事。

但、自分に素讀修行之人々、十五歲以前卒業候はゞ、願次第試業之上生徒可被仰付事。

一、十五歲に相成候はゞ、素讀卒業無之共生徒可被仰付候間、尙又素讀をもいたさせ可申候事。

一、初學之輩教授等講解を以爲相學可申事。

一、生徒指引之儀、一席宛其席へ罷出候訓導より相勤候事。

一、生徒勤學中春秋兩度宛試業可被仰付事。
但、一席切會讀相濟候授讀之書篇を辨書致させ可申候。尤主付之教授・助教に而撰、甲乙に依而轉席可申談事。
一、生徒勤學中或は滿限之上も、抜群之者入舍可被仰付事。
一、遠處在住之人々嫡子等之儀は、追而可申渡事。
一、平士並以下之二・三男等、暨夫より以下御步並迄之子弟俊異之者は、別段に御取用可有候事。

右生徒

一、句讀師之儀、是迄讀師相勤來候通會讀可仕候事。
但、一會一書たるべき事。
一、人持之內當年十五歲以上廿九歲迄之人々、役懸り之外每月會讀被仰付候。今般生徒に相洩候同組嫡子・嫡孫廿四歲より廿九歲迄之人々、幷二三男等十五歲より廿九歲迄之者、右席に可致出座候。來年より十五歲に相成候人々、且追々生徒御免之者も出座致さすべき事。
但、右人々三十九歲に相成候迄會讀被仰付候。且又此度三十歲以上に而も、是迄會讀に罷出候人々は可致出座候。是迄不罷出候とも、相望候者は不拘年齡斷之上可致出座候事。

一、御大小將會讀是迄之通たるべき事。

一、是迄四・九夕諸組會讀之儀、只今之通り被立置候條、御家中之人々幷生徒之外、無息人暨陪臣・町醫師等も罷出可申事。

但、人持組・御大小將組暨人持之子弟は、此處へは罷出申間敷候。且又席數之儀、出座人員數見計相立可申候。此席之儀尤教授・助教主付相勤可申候へ共、時宜に寄訓導・訓蒙よりも助合會頭相勤可申事。

一、會讀之儀都而鬮取を以辨解可仕候。列之儀句讀師幷人持會讀席は、勤仕之人々一列、子弟之人々一列、各齡順を以相立可申候。御大小將會讀も向後齡順たるべく候。諸組會讀は列之儀不及沙汰事。

右會讀

一、毎月講書組當りに而聽衆罷出候儀、只今迄之通たるべき事。

一、毎月三度兵書講釋可仰付候。出座方之儀は追而可申渡事。

右講書

一、人持以下平士並以上、役懸り之外、來る寅年十八歳より廿九歳迄之人々明倫堂試業被仰付、其後右人々三十九歳に及候迄、三ヶ年に一度宛試業可被仰付候。且又卯年以後年々十八

歳に相成候者、是又試業可被仰付候事。

但、役懸り之人々、幷本文より年丈け候人々も、相望候者は願次第試業可被仰付候事。

一、今般生徒に相洩候内、廿四歳より廿六歳迄之嫡子・嫡孫、幷此後生徒御免之人々も、來る寅年より以後三十九歳に相成候迄、三ヶ年に一度宛試業可被仰付事。

但、今度御仕法に付生徒御免被成候人々之内、平士並以上之嫡子・嫡孫は廿六歳より年丈け候者も、本文之通試業可被仰付事。

一、家藝有之人々等は試業不被仰付筈に候。

但、相望候者は家藝等之様子次第可被仰付候事。

一、人持以下平士以上之二・三男等、且又平士並以上之内遠所在住之人々幷二・三男等、曁夫より以下御歩並迄勤仕之人々試業之儀は、追而可申渡事。

右試業

一、素讀出座之儀、是迄之通たるべく候。依而此以後新に出座相願候者は、願之趣督學江相達、督學承屆入學いたさせ可申候。

但、素讀は向後十四歳迄に限り可申候。若滿限之上未熟之者は、十七歳迄素讀いたさせ、其上は卒業無之とも出座指留可申事。

附、是迄素讀仕來居候人々之儀は、右年輩以上之者も、來子年迄は其儘爲致稽古、丑年以後都而本文之通りたるべく候。且又平士並以上之嫡子・嫡孫十五歳に及候へば、素讀卒業無之共、生徒被仰付儀等は、生徒之ヶ條中に有之通之事。

右素讀

一、易學之儀、是迄之振を以稽古等被仰付。

右易學

一、勤學之人々心懸次第、詩文をも相學せ可申事。

右詩文

右之通可被仰付旨被仰付候條、夫々其心得可有之候。將又國學・律學・禮法・算術等稽古をも追々可被仰付候。是等之儀は追而可申渡候、以上。

己亥四月

〔學校雜纂〕

教授勤方

一、學生御教導方を掌り、會讀を主付可相勤事。

附、學校御文庫を預り助教申談、御書物出入之儀取捌可申事。

一、生徒初見式幷平士並以上惣試業、曁主付候席之生徒試業を掌り可相勤事。

一、諸組之講釋は不及相勤事。

一、助教以下教官之人々、幷學生之勤惰を相考、時々督學へ相達可申事。

一、文武督學故障等之節、立代り其職事相勤可申事。

助教勤方

一、教授を助け、會讀を主付、時宜に隨ひ惣試業等を可相勤事。

附、學校御藏書之儀、教授申談取捌可申事。

一、諸組之講釋、幷主附候席之生徒試案を掌り可相勤事。

一、教授・訓導申談、學生之勤惰を相考、時々督學江相達可申事。

訓導勤方

一、教授・助教に一人宛指添、會讀之席へ罷出、教授・助教故障等之節、立代り會頭相勤可申事。

一、生徒指引相勤可申事。

一、學生之勤惰を相考、時々教授・助教可及示談事。

訓蒙勤方

一、素讀生を教示いたし、句讀師之指引を可相勤事。

一、諸組之會讀・教授・助教等指支候節は、立代り會頭相勤可申事。

句讀師勤方

一、素讀生に句讀を授け可申候。尤其身勤學、會讀等に罷出可申事。

書寫方勤方

右書寫御用幷校正方、暨御藏書出納方之儀も兼帯相勤可申事。

御書物出納方御用勤方

右御藏書出納方幷書寫御用校正方へも加り、相勤可申事。

右之通可相勤旨被仰出候條、可被申渡候、以上。

己亥四月八日

〔學校雜纂〕

經武館御規則

一、是迄經武館稽古被仰付置候諸藝を相立、門弟稽古見屆候樣被仰付。右定日一日一稽古宛、晝夜半日稽古可相成程之人高、其師範人手前に而相考召連罷出、稽古爲致、其日全相濟不申候はゞ、重而其稽古之見屆、日々指出可申事。

但、御歩並以上之人々子弟等、三十九歳以下之者共何と歟申立、諸藝見届日に一藝にも不罷出者有之候はゞ、其子細御穿鑿可有之候事。
一、右定日には、學校惣奉行並年寄中等之内致出座、御近習御横目も御指出、稽古全見届候樣可被仰付候。且又不依何時、御出御覽可被成候事。
一、諸師範人藝術之儀も、右御出之節御覽可被成候事。
一、御家中勤仕之人々、御歩並以上三十九歳以下之者、武藝之内少に而も得方と覺候品、兼而頭・支配人手前に而承しらべ、學校御横目迄書出可申候。前段定日に見届候樣可被仰付事。但、四十歳以上之人々者、樣子次第見届被仰付儀等も可有之候條、是又右同樣書出可申事。
一、御家中之人々之中、是迄於經武館稽古不被仰付師範人之門弟は、右見届日之内へ割合指加可申候。尤其師範人も罷出可申事。
一、右之外月々稽古、是迄之振を以て割合可被仰付候事。
一、於明倫堂毎月三度兵書講釋可被仰付候。出座方之儀追而可申渡候事。
右之通被仰付候旨被仰出候條、其心得可有之事。

己亥四月

四月十日。前田齊泰、奥村榮實の職を辭せんとする意を卻く。

〔官私隨筆〕

四月三日

私儀、天保七年以來年寄中席御用之品示談仕候樣被仰付、日々出席も仕、其上學校御用をも被仰付、誠以難有仕合奉存候。然處其以來御家中等氣受も不宜、色々惡評をも仕躰承申候。萬事不調法に而不行屆故と恐入奉存候。依而は何と歟御斷も可申上儀に御座候へども、中には又存外成儀も相聞ゑ候付、左樣之品は其內疑之はれ申儀も可有御座哉。尤實に不行屆品等は、急度心得をも仕度奉存、被仰付置候御用之儀故先其儘相勤來候處、近頃別而取沙汰不宜樣に承申候。加樣御座候而は、御政事之品被仰出之趣等をも、私故惡敷申なし候儀も可有御座、左候而は御爲甚不可然事、重々奉恐入儀に御座候。依之乍迷惑、何卒右御用共御免被成下候樣奉願度、就而は公儀御用幷人持組頭共に御斷申上度奉存候。依而先及御內談申候。御申談次第、表向相願申に而可有御座候、以上。

亥四月三日　　　　奥村丹後守

前田土佐守樣

〔官私隨筆〕

四月十日
一、今日以要人被召、御用之間へ罷出候處、先日御用番迄內存之趣申上、被聞召、尤にも被思召候。御前にも被聞召候儀も有之候へ共、取留たる儀に而も無之、□□御斷申上候御時節に而も無之候間、無泥可相勤旨御意に付、段々御懇之御意之趣奉畏、雖有仕合奉存旨等及御請、且又何等心得に可相成儀等も被聞召候はゞ、被仰出候樣仕度旨申上候處、さして左樣之儀にては無之旨御意也。

四月十八日。明倫堂の生徒を入學生と稱すべきことを定む。

〔官私隨筆〕
四月十八日
一、今朝御居間書院へ御出之節、丹後守・山城守・播磨守・八郎右衞門罷出順番に付罷出、御用番美作守伺之品相濟上、此度御學政御修補に付、同席共嫡子等入學之儀二男以下人持會讀席へ罷出候儀願之紙面持參上之。且又教官之人々ゟ被仰出之趣等可申渡覺書下書之內、督學より心付之趣申聞候朱書之札三ヶ所有之、其儀も申上、下書帳入御覽。將又生徒之儀學生と唱候樣被仰付可然哉と申上候へども、學生と申は廣く稱し可申儀に候間、生徒之分は入學生と唱可然と猶又督學へ申入候處、別存無之旨申聞候條、猶又奉伺旨申上候。右覺書之儀幷入

學生之儀、伺之通相心得候樣御意也。

四月十八日。前田齊泰、異風の士の町打を石川郡打木濱に觀る。

〔成瀨正敦日記〕

四月十八日

一、今日九ッ時之御供揃に而、九ッ時前宮腰口より御鷹野被遊、打木濱へ被爲入、御異風中炮術濱稽古御覽被遊、御戻御道筋御鷹野被遊、千日町口より暮六ッ時頃御戻被遊候事。御拳弟鷺一ッ御座候事。

四月十九日

一、昨日打木濱において御異風中町打等御覽、豐嶋流十八人計五町之町打一放、一町之人形一放宛御覽被遊候。且康九郎等弟子中之内手傳として罷出居候人々も、御好に而町打御覽被遊、右相濟、中嶋流八人計百目筒・五十目筒町打御覽被遊、且是亦今日手傳に罷出居候人々町打も、御好に而御覽被遊候事。

〔上貫屋日家榮帳〕

四月十八日

御殿樣晝九つ時に宮腰御出、わたし場御出、御船にて向之濱に而鐵炮稽古被遊、七つ時に事

光寺より御てん江御上り被遊候。目出度。

四月。料理商賣の者、同業者增加せしを以てその取締に關し出願す。

〔料理方定書〕

一、私共儀前々より料理商賣仕罷在申、右商賣方之儀は寬政年中御改御座候間、御仕法之定數を十六軒に被仰付、此外密に料理商賣仕候者有之候得ば、嚴重被仰付方御縮方も相立、暨私共儀は爲看板役一人より銀二枚宛、都合三十二枚每歲上納仕來申候。然所文政三年御郡御支配御引請之節、大樋町等に料理商賣仕候者三人有之、則私共仲間御指加御座候得共、前段之御役銀も御取立無御座、右三十二枚を割符仕上納仕候所、三人之內一人商賣株讓り仕度旨願出候に付、私共より潰し株に奉願上候處、御朱書を以、以來三人之者共商賣相仕廻候節、一人へ銀三百目宛指出候樣被仰渡、尤三百目相渡、向後潰株に被仰渡。其後兩茶屋町茶屋商賣御止之節、三人料理商賣相願御聞届御座候得共、別株に而大樋町等之振合に被仰付候。就夫今般川上芝居茶屋商賣越忠安右衞門等より、料理商賣方私共同樣に被仰付被下候樣相願候處、御聞届御座候段被仰渡、奉畏候。然處去々秋御仕法後、都而御家中御吉事御祝等も御省略に相成、暨諸方賴母子等も一圓無御座、無商賣同樣に相成、心配至極に罷在申候。且去戌春諸株御指解仰付候處、私共儀は全殘り株に被仰付候儀を難有奉存候而罷在候に付、外商賣

奉願上候儀も不仕、手馴候事故料理商賣而已相勤罷在候處、不景氣にて無商賣同樣、渡世方にも相成不申、難儀仕候得共、時節柄も見合、爾々商賣にも可相成奉存候而罷在候所、右越忠安右衞門等九人者共私共同樣に商賣仕候而は、前段申上候通彌増渡世に相成不申候。何れも難儀仕迷惑至極仕候得共、御聞濟之上彼是奉願上候儀も奉恐入候。將又讓替儀は、其時々御詮議之上可被仰付段被仰渡、奉得其意候。就夫讓替儀茂、何卒大樋町与同樣之御振合に被仰付被下候樣、去冬奉願候處、何等之被仰渡も無御座、御時節柄之儀恐多奉存指扣居申候得共、右申上通御當節私共手前不如意至極に罷在、當時潰爲代銀子指出申族に而は無御座候得共、數十軒に相成候而は難儀仕候間、御時節柄を不顧又候奉願上候儀恐多奉存候得共、何卒格別之御慈悲を以御聞届被爲遊、願之通被仰付被下候樣達而奉願上候。此段宜敷御願可被下候、以上。

亥四月

つばや甚右衞門
野々市や庄吉
越中や小兵衞
大野や吉三郎
御供田や吉七

越中屋　久右衛門
尾山や　與兵衛
能登や　理　助
越中や　太兵衛
鶴來や　茂右衛門
卯辰や　太右衛門
紙　や　源　助
磯　や　彌兵衛
小松や　長太郎
本吉や　九郎右衛門
越中や　吉右衛門

料理肝煎　重次郎殿
同　　　直五郎殿

右願紙面之趣に而、別紙御書渡之覺書左之通。

料理肝煎江

去々年芝居座指止、右圍內茶屋共九軒料理商賣申渡置候所、今度古株拾六軒料理屋共より願之筋有之、遂詮議、右九軒之分先例大樋町料理商賣人へ申渡候通、一軒分銀三百目宛之致潰株、其身一代切に而讓替は相成不申筈に候條、此段可申談候。

右之趣可被申渡候事。

亥　六　月

但、天保十年之事。

一、年中一軒分銀二枚宛十六軒より七月・十二月兩度に上納、外に白山や、兩茶屋町三軒、芝居座九軒共、惣割符に仕候事。

五月十六日。竹澤御屋敷庭方用の戸室石切出の件を議す。

〔御城方御親翰御加筆物寫〕

己亥五月十六日

一、坂井小左衞門別席に而申聞候者、竹澤御屋敷御庭方御用に付、御普請奉行江戸室石切出方之儀、御次より申談候處、當年休山被仰付置候付、山披候儀御城方に御達可申旨申聞候。右御用は眞龍院樣・榮操院樣御願に而、石の塔被仰付候樣に与之事に候。御不審も可有御座候に付、不急度相達置候樣被仰出候段申聞る。

石塔に就いては本年七月四日の條參照

五月十八日。前田齊泰能を演ず。

〔官私隨筆〕

五月十八日

一、今日御能被遊候付、望次第拜見被仰付候旨、御用番迄昨日被仰出演述に付、卽席御禮申述退出いたし候處、せがれ助十郎方へも紙面到來、望次第拜見被仰付候旨等申來、返書に御禮申遣。今日五半時頃罷出、助十郎は一足先へ出候。常服也。

一、四時前歟御能初る。

一、御能相濟何も列座、權太郎を以御禮申上候。助十郎等は御用番へ御禮申述。各暮合退出。

助十郎は奥村榮親

五月二十日。前田齊泰、蓮池御庭に於いて射手の技を觀る。

〔成瀨正敦日記〕

五月二十日

一八ッ半時之御供揃に而、七ッ時刻蓮池御庭𛀁御出、同所御馬場において御射手中次第的四人充五番御覽遊被、七ッ半時前相濟、夫より竹澤御庭等御廻り、暮六ッ時過御戻被遊候事。

五月。學校に於ける教育の方針を示し、且つ大祿の者の子弟の出席を督

促す。

〔學校方雜纂〕

寬政中學校御創建以後、段々御仕法等被仰付、人材御成育之道も粗相立候樣に候得共、未全思召通りに至り不申候。依之今般御學政御修補被仰付候間、向後教官之人々彌相心得、何も心力を盡し、和順に申談、文武偏廢なく、都而實學に趣き候樣丁寧に可致教導候。此由何も可被申聞旨被仰出。

五月

御學政御修補に付而被仰出候趣、申渡候通に候。學校之儀本來胄子之教育方を主と致し候躰に候處、御國に而近來之習俗不宜、生徒等相願候者、先は輕き組柄之者に而、身柄之人々は却而學校江致入學候儀を愧ぢ候樣成姿も相見え、第一學問と世事とを別儀之樣に存誤り、或文學・武學を兩端と思違候族も有之躰、甚御趣意に違候事に候。依之今度御仕法被仰付、身柄之人々嫡子・嫡孫を御仕立を專に被仰付、依而は教官之人々品位を御進め、名稱等をも御改被成候。然共都而御法制は如何樣にも相立候事に候へ共、法は末に而、人材之成立は專ら師長之教導方に可有之儀に候。如何程之書籍之上を講究いたさせても、躬行踐履之實を責不申候ては、都而口辯之資といたし候處抔にも權移り、隨而文武を兩端と心得候樣之弊風も生じ可申

儀。左候而は其詮も無之事に候。今般前顯之人々入學之御仕法被仰付、且勤仕之人々試業も被仰付、學徒も多成候得ば彌深く心を用ひ、右等之流弊無之樣約束を相立、學風を維持いたし候樣に相心得、武事之講究も彌怠慢無之樣相勤可申候。人材選擧之上に至り候而も、心術行儀を先といたし、次には才學藝能に及び、虛文を以御取立之儀無之樣、重々可有詮議候。尤督責方においては、向後御賞罰之極めを被立置、勸懲之道も可被行候へ共、先は教官之人々涵育薰陶之功を以、人材成立自他之處ゑ爲至候を主意と心得申筈に候。右に付而は何茂和順に不仕而は、御教導方一致成不申、御風化に指障り可申候。若自己之意見を致固執、他之善を取用ひ候儀難成族も有之、又は膽力乏しき人々抔、諸事退避いたし、所見を不申顯類も有之候而は、御趣意通り行屆申間敷候間、此儀も深く相心得、互に無包藏申合、心を虛にして衆之善を取用ひ可申候。是等之趣尤兼而覺悟可有之候へども、今度被仰出候に付而は、猶又申達候間、委曲可被得其意候事。

教官之內無息之人々、向後學問進達に付御引上之儀は格別に候へ共、其他年功を以被召出候儀先づは有之間敷候。最右役御斷申上候儀勝手次第之旨、不急度惣御奉行被仰聞候事。

亥　五　月

武學校師範人ゑ被仰出候寫

今般學校文武共、稽古方御修補被仰付候。御家中之人々武藝出情方に付而は、學校御草創以來度々被仰出、且諸師範人江も、指南方心得等之儀に付、被仰出之趣時々申渡置、一統承知之通に付、此度譯而不被仰出候。今般於明倫堂は、身柄之人々嫡子・嫡孫生徒をも被仰付、於學校勤學いたす事に候得共、武藝之儀は其品數多之事、其上流々有之故、於經武館右生徒に準じ候稽古被仰付候儀等は相成不申、師範人宅々之稽古專ら主となり候儀に候間、猶又諸師範人彌急度相心得、御家人・陪臣によらず、藝術之上之儀は勿論、惣而廉恥を養ひ義氣を引立、御化之御助と相成候候樣心懸、無油斷可致指引候。此段可申渡旨被仰出候事。

己亥五月

五月。一昨年以來の凶荒に居住者を失ひたる家屋あるを以て、十村等に命じ取締の方法を講ぜしむ。

〔郡方御觸〕

諸郡村々之內、去々年以來死絶等明家有之、中には親共相果、幼少之子供等殘り、一類共へ便り居、或は近村奉公、又は他所江罷越居、當時明家に相成、不用之分有之躰相聞得、右樣村々明家有之候而者、縮方も難相立儀、村々役人共においても不行屆儀に候條、裁許々々手前に而、早速綿密遂詮議、跡式相續も不得致分は、急速取毀させ可申候。且又當時奉公等致

居、無程自分之家に居住致候分者、一類等留守居之者入候而、嚴重取締方可申付候。猶追而取仕抹方之樣子可申聞候、以上。

亥　五　月

加越能御郡奉行

改　作　奉　行

諸郡御扶持人・十村中

五月。諸郡に役人と稱し徘徊する者あるを以て之が取締を十村に命ず。

〔御觸留〕

諸郡方江役人与相名乘、紛敷者相廻候樣子に候。右樣致廻村候者有之候はゞ、共村々役人共等名前可承置候。若名前難相名乘旨申者有之候者、假令御役人に相違無之共不苦に付、紛敷相聞え候者無泥可及案內候。以來右之趣、村々役人共急度相心得候樣夫々可申渡候、以上。

亥　五　月

廣　瀨　順　九　郎

內　藤　十　兵　衞

加州三郡十村中

六月二日。前田齊泰、參覲の期を延ぶべきことを告ぐ。

〔成瀨正敦日記〕

六月二日

一、左之通今日御用番播磨守江被仰出、善右衞門へ相達。

當月十三日御發駕可被遊旨被仰出置候處、是迄著氣之節者、折々御眩暈之御氣味被爲在候處、頃日俄に著氣甚敷、度々御眩暈御難儀被成、大著之節卅長途御旅行難被成に付、御發駕暫御延引、御保養被成候段、御用番御老中江聞番參上御屆仕候樣、明後四日江戸表聞番江以早飛脚被出候筈に候。此段可相達旨被仰出候。

六　月

六月三日。軍書流行の件に就いて議す。

〔本多政和覺書〕

六月三日

一、當時軍書流行、組頭之內にも多承候人も有之躰に付、何と歟被仰渡之趣有之候樣仕度旨數馬前月內膳へ申聞候由に付、猶更了簡相尋、軍書は謠聲之品とも違、增長さへ不仕候へば可宜哉之趣申入候處、其處者同意之趣に申聞。全躰金龍院樣御時分前田淸八・岸忠兵衞軍書承候儀に付、御叱之儀有之。何となく是迄不相成事に心得罷在候。不指開趣に候はゞ、何と歟組頭等へ被仰聞有之方可然旨等申聞候に付、御先代之御樣子、猶同役坂田往來承被申聞候

樣等申入置候事。

七月二日。前田齊泰、再び參覲の期を延ぶべきことを告ぐ。

〔成瀨正敎日記〕

七月二日

一、御發駕今暫御延引之儀、今日左之通御用番美作守ゟ被仰出。

御眩暈御難儀被成候付、御發駕暫御延引之儀御用番御老中ゟ御屆置之所、今以爾々不被爲在、頃日殘暑も甚敷、近々御發途之所無御覺束思召候付、今暫御保養被成度旨、重而御用番之御老中ゟ御屆方之儀、當四日聞番ゟ被仰出候條、此段可相達旨被仰出候。

七　月

〔成瀨正敎日記〕

七月四日

一、今日聞番へ申遣候御屆書下物左之通り。

拙者儀先達而及御屆候通、持病之眩暈致難儀、今以不宜、當時之樣子に而は近々發途無覺束御座候付、今暫遂保養出府致度候間、御聞置可被下候。尤無油斷致療養、少に而も宜敷候者、早速出立之心得に御座候。此段重而御屆申達候、以上。

七月三日　　御名

七月四日。蓮池御庭内の蠑螺山に三重石塔を置く。

〔成瀬正敦日記〕

七月四日

一、今日九ッ時過之御供揃に而、蓮池御縮内江可被遊御出旨被仰出、御近習頭江申談候事。

但、竹澤御庭之さゞい山御好に而築足し被仰付、御堀も廣がり、右いたゞきに三重之塔被仰付候分、先日より取懸罷在、今日第一番之笠石するゑ候に付、竹澤御二階より御見物之爲、御廣式向より御出之御樣子也。

七月四日。學政修補に付き文武稽古の次第を定む。

〔學校方雜纂〕

今般御學校御修補被仰付候に付、文武稽古方之儀別册之通相心得、來月二日より夫々稽古相始候樣被仰出候。依之稽古相始候當日は、年頭稽古始之通上下着用罷出候筈に候事。

一、素讀之儀は同四日より相始候。服之儀は前條同樣に候事。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不洩樣可被申渡候、以上。

七月四日　　奧村内膳

今般御學政御修補に付、生徒之儀入學生与唱候樣被仰出候事。

一、今度入學被仰付候人々、暨是以後被仰付候人々茂、年限中若親跡目相續被仰付候共、人持之外は無御構、廿三歲暮迄其儘可被仰付置候事。

一、仙石帶刀等並之人々、且又御馬廻等平士並在勤之內役懸り等は除之、其餘相望候者は願次第、嫡子・嫡孫年限等之通入學可被仰付旨、先達而申渡候通に候。右之人々廿四歲以上に而も、相望候得ば一年切入學可被仰付筈に候事。

一、在勤并嫡子・嫡孫廿四歲以上入學相願候儀、此度書出に後れ候人々、追々願出候儀勝手次第之事。

一、入學生初見之節、束修之式等有之候間、督學承合可申事。

一、入學滿限之上留學相願候はゞ、一年切可被聞召屆候條、年々願繼申儀可爲勝手次第事。

一、依願入學被仰付候嫡子・嫡孫、暨在勤之人々留學之儀も、前條之通たるべき事。

一、入學生列之儀、一席之內に而三等にわかち、人持嫡子・嫡孫一列、頭分嫡子・嫡孫一列、平士嫡子・嫡孫一列に相立、一列之內は各齡順を以列居可仕候。在勤之入學生は引離罷在、其內に而之等級は右に準、仙石帶刀等並一列、平士一列に相立、一列之內は齡順たるべき事。

但し、年寄中嫡子・嫡孫も入學被仰付罷出候に付、人持嫡子・嫡孫之上に一列齡順を以列居

いたし候筈之事。

一、平士並以上之嫡子・嫡孫、於明倫堂素讀修行之人々卒業候はゞ、十五歳に相成不申候共入學可被仰付事。

但、自分に素讀修行之人々、十五歳以前卒業候はゞ、順次第試業之上入學可被仰付事。

一、平士並以上之二・三男等、暨夫より以下御歩並迄之子弟俊異之者は、別段に御取用可有之事。

一、今般被仰付候句讀師之儀、向後先は無息人より可被仰付候。勤仕之人々より被仰付候而も、役懸り之振に而は無之筈に候。都而句讀師は勤學之ため被仰付儀に候條、人々勝手次第御斷申上候茂不苦事。

一、人持之內當年十五歳以上廿九歳迄之人々、役懸り之外毎月素讀被仰付候。今般入學相渡候同組嫡子・嫡孫廿四歳より廿九歳迄之人々幷二・三男等、十五歳より廿九歳迄之者右席江可致出座候。來年より十五歳に相成候人持幷二・三男等、且又追々入學御免之者茂可致出座事。

但、右人々三十九歳に相成候迄會讀被仰付候。且又此度三十歳以上に而茂、是迄會讀に罷出候人々は可致出座候。是迄不罷出候共、相望候者は不拘年齡、督學江斷之上可致出座候。

將又年寄中二・三男等右席江可致出座旨被仰出候。出方之儀は人持二・三男等可爲同樣事。

一、人持役懸り之人々茂、會讀に罷出候儀勝手次第たるべき事。
一、御大小將會讀是迄之通たるべき事。
一、是迄四・九夕諸組會讀之儀、只今迄之通被立置候條、御家中之人々幷入學生之外、無息人曁陪臣・町醫師等茂罷出可申事。
但、出方之儀は學校承合可申候。且人持組・御大小將組曁人持之子弟は、此所へは罷出申間鋪候事。
一、會讀之節列之儀、人持會讀席は勤仕之人々一列、子弟之人々一列、各齡順を以列相立可申候。年寄中二・三男等は人持子弟之內に指加、齡順を以列相立可申候。御大小將會讀も、向後齡順たるべく候。諸組會讀は列之儀不及沙汰候事。
但、年寄中嫡子・嫡孫入學年齡打過ぎ候人々、人持會讀席に致出座候に付、列之儀は人持之次引離、人持子弟之上に一列、齡順を以列居いたし候筈之事。
一、每月講書、組當りに而聽衆罷出候儀、是迄之振に被仰付候事。
一、人持以下平士並以上役懸り之外、來る寅年十八歲より廿九歲迄之人々、於明倫堂經義等試業被仰付、其後右人々三十九歲に及候迄、三ヶ年に一度宛試業可被仰付候。且又卯年以後年々十八歲に相成候者、是又試業被仰付、其後三十九歲に及候迄、右之通三ヶ年に一度宛試

業可被仰付候。依之當亥年十五歲より廿六歲迄之人々、頭・支配人より督學迄當月中に可書出候。頭分以上之人々は、督學江直に相達可申候。來る卯年以後、年々十八歲に相成候者、其前年十月切書出可申事。

但、年齡より未熟之人々茂有之候ば、其段督學迄相達可申候。且役懸り之人々、幷本文より年丈け候人々も、相望候者は願次第試業可被仰付候條、來る丑年中迄に督學迄相達可申候。夫以後も試業前年相達可申事。

一、今般入學生に相洩候內、當年廿四歲より廿六歲迄之嫡子・嫡孫、幷此後入學御免之人々も、來寅年より以後、三ヶ年一度宛三十九歲に及候迄試業可被仰付候。今般入學生に相洩候嫡子・嫡孫書出方之儀、前條之通當月中に可書出事。

但し、本文より年丈け候人々茂、相望候者は願次第試業可被仰付候。且又今度御仕法に付、生徒御免被成候人々之內、平士並以上之嫡子・嫡孫は、當年廿六歲より年丈候者も、本文之通試業可被仰付候。督學江達方之儀、都而本文之通たるべき事。

一、家藝有之人々等は、試業不被仰付候。但し、相望候者は家藝等之樣子次第可被仰付候條、頭・支配人より督學迄相達可申事。

一、試業心得方等之儀は、學校承合可申事。

一、人持以下平士並以上之二・三男等、且又平士並以上之内遠所在住之人々幷子弟等、曁夫より以下御歩並迄勤仕之人々試業之儀は追而可申渡事。

一、素讀出座之儀、是迄之通たるべく候。猶更出座方之儀、學校承合可申候。但向後十四歳迄に限り可申候。若滿限之上茂未熟之者は十七歳迄素讀いたさせ、其上は卒業無之とも出座指留可申事。

附、是迄素讀仕來居候人々之儀は、右年輩以上之者茂、來子年迄は其儘稽古いたさせ、丑年以後都而本文之通たるべき事。

一、易學之儀、是迄之振を以稽古可被仰付事。

一、禮法・算術之儀、是迄は其師之門弟罷出致稽古候得共、今般門弟之稽古方當分被指止、素讀生幷入學之人々相望次第稽古可被仰付候。尤幼儀等一通り相學候儀は、入門不致とも不指支候條、可有其心得事。

一、國學・律學等稽古をも追々可被仰付候。是等之儀は追而可申渡候事。

一、是迄於經武館稽古被仰付置候諸藝、別に定日を相立、惣奉行等出座いたし、門弟稽古見屆候樣被仰付候。尤不依何時御出御覽可被成事。

但、諸藝門弟之内、御歩並以上之人々之子弟等、三十九歳以下之者は、何れ之稽古ニ成と

幼儀は容儀なるべし

も必罷出可申候。若一藝に茂不罷出者有之候はゞ、其子細御穿鑿可有之事。

一、御家中勤仕之人々、御歩並以上三十九歲以下之者、武藝之內少しに而茂得方与覺候品等、今度書出之儀申談置候分、追々別段定日に見屆候樣可被仰付事。

但、四十歲以上之人々は、樣子次第見分被仰付儀等も可有之候事。

一、是迄於經武館稽古不被仰付師範人之門弟之內、御歩並以上子弟共、右見屆日之內江割合指出候樣被仰付候。尤其師範人茂罷出可申事。

一、右之外月々稽古、是迄之振を以割合せ可被仰付事。

一、文武稽古割別紙兩冊之通候事。

以上

明倫堂稽古割

每月稽古割

二日。五半時より講書、人持・頭分子弟共。○夕八時より講書、御大小將六組・同御用番支配子弟共、並御奥小將・御表小將・御側小將之子弟。但御用に而指支候人々者、七日朝・夕之內不時に可罷出事。

三　日。夕九半時より句讀師會讀。○同、醫學。○同、算學。

四　日。夕九半時より句讀師會讀。○同、諸組會讀。

六　日。夕九半時より人持子弟共會讀。

七　日。朝五半時より講書、御馬廻六組子弟共。但御用に而指支候人々は、同日夕可罷出事。○夕八時より講書、御馬廻六組・同御用番支配子弟共。但御用に而指支候人々は、同日朝ゟ可罷出事。

八　日。夕九半時より句讀師會讀。○同、禮法。

九　日。夕半時より句讀師會讀。○同、諸組會讀。

十　日。夕九半時より易學。

十一日。夕九半時より御大小將會讀。

十二日。朝五半時より講書、定番御馬廻八組・組外四組・同御用番支配子弟共。但御用に而指支候人々者、同日夕ゟ不時に可罷出事。○夕九半時より講書、寺社奉行支配平士・御射手・御異風・町同心・火矢御用・御厩方・新番組御歩小頭・三十人頭・御儒者・御醫者・御茶堂頭・坊主頭・諸小頭・同並・新番組御歩子弟共。但御用に而指支候人々者同日朝ゟ不時に可罷出事。

十三日。夕九半時より句讀師會讀。○同、醫學。○同、算學。

十四日。夕九半時より句讀師會讀。○同、諸組會讀。

十六日。夕九半時より人持子弟共會讀。
十七日。朝五半時より講書、與力・御大工頭子弟共。但御用に而指支候人々は、二十二日朝不時に可罷出事。○夕八時より講書、人持子弟共。
十八日。夕九半時より句讀師會讀。○同、禮法。
十九日。夕九半時より句讀師會讀。○同、諸組會讀。
廿　日。夕九半時より易學。
廿一日。夕九半時より御大小將會讀。
廿二日。朝五半時より講書、御鷹匠・六組御步・定番御步・同並・御步並・御鷹役・御算用者・同並子弟共。但御用に而指支候人々者、二十七日朝不時に可罷出事。○夕八時より講書、頭分子弟共。
廿三日。夕九半時より句讀師會讀。○同、醫學。○同、算學。
廿四日。夕九半時より句讀師會讀。○同、諸組會讀。
廿六日。夕九半時より人持子弟共會讀。
廿七日。朝五半時より講書、御料理人・同並・御細工者・同並・割場奉行支配御步並・御馬奉行支配御步並・御手廻組御小人頭・同並・町下代・同並・御大工・同並・穴生・御壁塗・御普請會所

下裁許・町奉行支配・御弓方等、御細工人子弟共。○夕九半時より講書、足輕・坊主・小者子弟共・町在之者。

廿八日。夕九半時より句讀師會讀。○同、禮法。

廿九日。夕九半時より句讀師會讀。○同、諸組會讀。

晦日。夕九半時より易學。

一、每朝五時より素讀。但佳節朔望二七除之。內三々辰上刻より午刻迄溫習。

一、每日朝自五半、夕自九半時、入學生會讀。但佳節朔望除之。

一、御近習之面々者、每月二十七日夕之外講日出座勝手次第之事。

一、講日組當り、其頭・支配人不時に罷出候儀勝手次第之事。

一、厄介人學校へ出座不指支人々者、每月二十二日朝講席不時出座之事。

一、小松御馬廻・魚津御馬廻、每月十二日朝講席出座之事。

一、遠所在住之與力、每月十七日朝組當り講席出座之事。

一、遠所在住之下裁許・同町下代・小代官、每月二十七日朝講席出座之事。

一、御茶堂小頭・坊主小頭・檢校・御用相勤候町醫師・御手役者、二十七日朝講席不時出座之事。但檢校御手役者之外子弟、二十七日夕へ可罷出事。

一、陪臣之分並諸社神主、二十七日朝講席江不時可罷出事。

以上

經武館稽古割

隔月稽古割

但朝者五半時より、夕は九半時より、終日稽古者六半時より七時迄。

二　日。朝鎗術、筒井官兵衞。○夕柔術、太田鍋次郎。

五　日。朝弓術、吉田權平。

六　日。朝居合、武藤杢兵衞。○夕鎗術、嶋澤儀左衞門。

八　日。朝劍術、南保虎之助・南保茂三郎。○夕居合、中嶋連平。

九　日。朝弓術、吉田孝之丞。○夕劍術、闕堂忠左衞門。

十　日。朝劍術、矢野久左衞門。○夕馬術、岸山孫作。

十二日。朝劍術、高本庄兵衞。○夕鎌玉術、高柳淸馬。

十四日。朝居合、高畠守人。○夕馬術、明石磯五郎・櫻井甚太夫。

十七日。朝居合、神尾主殿・中村太次馬。○夕劍術、馬淵新藏。

十九日。朝居合、林森左衞門。○夕馬術、近藤幸左衞門。

廿日。朝組打、萩原勘太夫。○夕居合、白江久五郎。
廿一日。朝劍術、山森武太夫。○夕馬術、絹川久左衛門・保田幸藏・片山久右衛門。
廿二日。朝劍術、平井治右衛門。○夕柔術、松本是太夫。
廿五日。朝居合、澤田貢。○夕劍術、關左近。
廿七日。夕馬術、星野市郎太夫・小池伴太夫。
廿九日。朝柔術、池上勘兵衛。○夕劍術、山崎雅五郎。
晦　日。終日稽古願次第。
二　日。朝劍術、神保半藏。○夕馬術、田中久藏・金子政之丞・坂井平六。
五　日。朝弓術、吉田左門。○夕居合、永井宇門。
七　日。朝體術、石黑左太夫。
八　日。朝居合、河合清左衛門。○夕馬術、高桑五郎兵衛。
九　日。朝居合、生沼作左衛門。夕劍術、笠間義左衛門。
十一日。夕馬術、齋藤十之助・永嶋源藏・永嶋市之丞・齋藤榮左衛門。
十二日。朝組討、越山一丞・石丸彌太郎。○夕劍術、木村喜左衛門。
十六日。朝鎗術、加藤增之丞。○夕劍術、山森武太夫。

十七日。朝鎗術、半井瀨太夫。○夕馬術、淺川一平・淺川七之丞・保田松之丞。
廿　日。朝劍術、八嶋龍助。○夕柔術、水野幸左衛門。
廿一日。朝居合・劍術、太田鍋次郎。夕劍術、木村喜右衛門。
廿二日。朝劍術、松本是太夫。○夕居合、筒井官兵衛。
廿五日。朝居合、馬淵新藏。○夕馬術、保田庄兵衛・飯嶋久作。
廿七日。朝鎗術、澤田和平。
廿八日。朝鎗術、土田兵太夫。○夕馬術、佐野千三郎。
廿九日。朝軍螺、小嶋紋右衛門。○夕組打、渡邊誠太夫。

是月は大盡なり

七月廿三日。前田齊泰、石川郡粟ケ崎に行歩を行ふ。

〔上賃屋日家榮帳〕

七月廿三日御ぎよぶ。御殿樣御たやゐ御出。其より御馬に而じん笠御めし被遊、馬にて番田口之横迄御出、其より味噌屋丁ゐ御出。塩橋之下よりあら町御通り、中山ゐ御休被遊候。目出度。

七月晦日。前令を奉じて速に田畠の蔭樹を伐採すべきことを命ず。

〔司農典〕

諸郡村々田畠蔭に相成候畔木等、伐除可申旨、先達而以來申渡置候處、中に者能伐除出來致し候向も有之、又者未だ蔭打木少ヶ所も間々多、別而身元之者抔は伐除方不行届哉に相聞候。當秋者早速全く伐除可申候。若彼是及違背に候向者、其委細遂詮議可申聞候。尤追付廻村も可致、其節目障りに相成候向々江者、急度可申渡趣も有之候之間、何れ手後れ不申樣伐除可爲致候。此段村々末々江嚴重可申渡候、以上。

七月晦日

河合清左衞門

坂田良之助

諸郡御扶持人・十村・新田裁許中

縮方高主附・山廻り中

七月。前田慶寧の教養に關し亂舞の稽古を後にすべきことを上申す。

〔控帳〕

犬千代丸樣御性質勝而御怜悧に被爲在、先以難有儀に奉存候。唯此上者偏に御成立方に被爲在候御事与奉存候。殊に乍恐若殿樣御成立方者、畢竟御家中人氣風俗を初、御領國萬民身命之懸り申處、御家御繁昌之根本、御武運御長久之處茂、皆約る處者悉く當時之御成立方に被爲在候御事与奉存候。御成立方者全く御仕向申上方に御座候儀、御仕向申上方者先入主与成

と申候而、何事に不寄初發御覺込被遊候事者、兎角に思召之主与被爲成候ものに而、其上御幼年より御習染被遊候事は、御天性御持前之振に被爲成候もの、誠に御大事之分れ途此儀に御座候儀与奉存候。前條之御性質を以、追々御成長被遊候に隨ひ、御學事等に御先入被遊候得者、御記臆は御宜、物事御器用に茂被爲在候事故、御稽古方御手間取なく御進可被遊候。左候得者日々に御面白味も可被爲附候。御面白味被爲附候得者、自然与御勵茂可被爲出來候。御勵被爲出來候得者、御合點茂被爲入、御十五・六歲に被爲至候迄に者、指定候道理之大躰者段々与御分り可被遊候道理。大躰之所御分り被遊候に隨ひ、上樣之御學問、物事之本末先後仕候處を能々奉申上、御孝事者申迄茂無御座、下々之事を御聞被遊候而者、思召被爲傷候程之道理を、乍不及何茂精誠を盡し奉輔導、御學問全く思召之主与被爲成候上者、御亂舞被遊候茂殊に御慰而已ならず、御發散御運動御養生之一つに茂被爲成、御前御慰に茂被爲成候得者、御孝養之一つにも被爲成候て御宜、何事を被遊候茂皆目出度御事与相成、下々茂難有可奉存候。偏に唯被遊候所之御先後而已に而、同じ御品ながら茂殊之外御違被爲出來候御事与奉存候。當時之御年頃合、未御學問に御志茂不被爲立內、若御舞・御能等追々御初り被遊而者、前條之通り御器用に被爲在、其上御慰事故尚更御手間取なく御進可被遊、御面白味茂他に及びなき御事共に而、一度び御先入被遊候者、殊に內外自他暢情歡樂之品に御座候得者、

同役八人は前田慶寧御抱守なるべし

彼是こも〴〵思召に被爲染、主与被爲成候處殊更に深く可被爲入哉与奉存候。惣而氣に染申と歟、心に好き申と歟、一つ主与成申處御座候得者、其向之事には何角に付思慮もおよび易く、其餘之事は手に取候其時迄に而、淺はかに濟行候儀者、貴賤高下之差別もなく、人之常情に御座候。左候得者乍恐御片寄不被爲在候樣、御學問も御稽古者被遊候而茂、只御添事之樣に相成、御面白味も不被爲附、品に寄御厭被遊候樣にも可被爲成譯。吳々茂只御稽古方御次第之所迄に而、初之程者假初之御事之樣に被爲在候而も、いつしか至極御大事之違ひに相成申儀与奉存候。先達而御舞少々御習被遊候御樣子迄に而、此後御稽古之御樣子、曁御前思召之程茂不奉伺儀。前廉奉願候茂甚以奉恐入候得共、若々此末追々御亂舞御稽古等御初り被遊候儀にも御座候はゞ、今暫之所御見合に相成申候樣仕度奉願候。御樣子奉伺候上御達申候而者、事に後れ申儀、尙以奉恐入候譯。何分にも御爲御宜樣に与奉存込、此段奉願候。猶更御引請御座候而、可然樣被達御聽可被下候、以上。

亥七月　　　　同役八人連名　判

原五郞左衞門樣

篠嶋權之助樣

七月。石川・河北二郡に浮塵子發生す。

〔累年雜記〕

天保十己亥年七月盆中より再發いたし候糠虫の貌、蚊の子に似たる虫なり。日中は稻の根へ下り、朝夕は穂花へ登り、籾の中をすひからし、其より段々募り候故、御上様より松門・大鼓を持追散し候様被仰渡候而、當家には七人宛手わけいたし、一人松明五本宛、十日計も晝夜はらひ申候得共更にうせず、亦候一倍相増候而、百歩・二百歩宛虫ばまれて、皆々稻白枯に相成候時節故、御斷申候所、御奉行名越彦右衛門殿・勢子役木の目谷重右衛門等御見分之上に、虫を拂ひ取申様被仰付。則村中海老すきだも・股引等を持參仕、ばいにてはらひ集め掬ひ取たる虫、當家へ一人一升・二升宛持來る所帳面に書記し、都合十石に相成り、此段を御申上候所、三昧に燒亡し候様に被仰付候故、新左衛門・町の九兵衛兩人、晝夜三ヶ日程に燒申候。八月十日頃より肝煎・組合頭二十人、小百姓等手分にて皆白かれを、役人共一手合、小百姓一手合帳面に書記し、追而十村見届之上、四歩米と算用いたす事に被仰付候。同十七八日比御受御用有之候而、隣村八田・忠縄・二日市・南森下・梅田・觀法寺・才田村御受村、其より大場・北森下・今町・利屋町・岸川・八幡御見立村、當村にも三百石者御見立に相成、則笠舞嘉兵衛被罷越候。且一枚之田に、但百歩ならば五十歩かれ、五十歩は不枯、つけぎ札を立記置申候所、右嘉兵衛見分之後、手代源右衛門方より御貸米出申候。前後なれども、右之通り。

先日以來稻虫付候に付、木之實油相用ひ候得者、右虫付凌申由に而、大聖寺表より木の實油
先百荷御買揚、野々市村油吟味人三郎兵衞方に御指預。就夫御組々入用高御書記、急速私方
迄。御指出可被成候。右用ひ方之儀は、油一升に酒三合入交、鍋に而あたゝめ、百歩に付三
合圖りに蒔可申段、譯而駒井樣等より各樣方ゟ急飛脚を以可申進旨御談に御座候。且又直段
之儀は、一升に付五匁五分圖りを以、現銀に御取立上納被成候樣被仰渡候間、爲御承知如斯
御座候、已上。

八月二日　　　　　　　　　　　　白山村　太兵衞

石川・河北御仲間中樣

八月四日。前田齊泰能を演ず。

〔官私隨筆〕

八月四日

一、今日御能被遊候付、望次第拜見可仕旨。

一、右に付今日御能拜見、御禮等如例。

八月五日。前田齊泰、堂形馬場に臨み馬上の士の射術を觀る。

〔官私隨筆〕

御疏りは御通りなるべし

八月四日

明日於堂形御馬場、御射手に馬上弓被仰付、其上に而御前御馬被爲召、各乘馬も御覽可被遊候間、馬爲牽候樣に被仰出由御用番演述。

八月五日

一、八つ打御供廻り之樣子承り、各松坂通り金谷御門より出、堂形御馬場へ參る。

一、堂形に將監殿幷成瀨主稅初被在合挨拶いたし、御馬場之横芝草之所に御幕を引廻し、敷物を敷有之。其所に刀を置、彼是いたし居候内はや御出に付、御疏り之所に何も蹲踞、但列之通には成がたく、不列に罷在。

一、御馬見所へ被爲入候上、敷物之上へ上り候樣にと善右衞門會釋に付、何も上り居り候事。

一、追付馬上弓初り、兩人充四遍畢る。矢は九本、馬場之中程に的一つ懸、夫を馬一遍に一本充射候故、往來十八遍也。三本充前中後と射候也。

一、右之後御幕之内敷物之所に而休息、火入も有之故たばこ飲候事。

一、其以後御前被爲召、其節何も最前之所へ出、敷物より下り居候處、上り候樣にと御意之由故上り居、御下り被遊候節又敷物より出居候也。

一、其後何も乘候樣にと之御事に付、丹後守・山城守・播磨守・美作守右御幕之内敷物之所に

而肩衣等を取、懷中之鼻紙袋は印章等すべて秘し候品は除け置候故、其儘其所に置、御馬場之隅より馬出し候所へ參り、乘候而出、都合九遍計り乘、夫より地道にして目通隅之方に而下り、御禮仕徒跣に而入候處、其所へ草履持來候故はき候也。

一、右濟、最初之所に而肩衣等着用、又拜見所へ出る。內匠・又三郞・內膳・靫負是又一所に乘馬あり。

一、其後又御前被爲召、畢而御馬見所へ罷出居候處、美作守馬二之鞍等御馬役へ被仰付、御馬見所に而見物、畢而御禮申上。

一、追付御戾りに付、又御疏り之所へ罷出。但最初は御厩之方を上にいたし、此時は御厩之方を下にいたし蹲踞。

一、御戾り後善右衞門へ段々之御禮御馬場に而申述候。

但、御馬場に而申上可然旨也。

〔成瀨正敎日記〕

八月五日

一、八ッ時過より堂形御馬場へ被爲入、御射手中馬上弓四組兩人充御覽被遊、御乘馬も被遊、年寄中江も八人共被罷出、乘馬も被致。乘馬被仰付、貳之鞍等御馬役江も被仰付、作州殿持馬鹿毛、播磨守持馬栃栗毛、又三郞持馬鹿毛。暮合

前相濟、御戻被遊候事。

八月七日。石川・河北及び能登口郡に浮塵子の驅除を命ず。

〔司農典〕

石川・河北兩郡村々之内、厚薄は有之候得共立毛虫附候處、右勢子方百姓共等閑至極に相聞候。依之拙者共野々市村・大場村江爲勢子与致出役候條、今日より日數五日之間、外稼方等都而餘業指止、村々百姓老若男女幼少之者迄も、不殘朝六つ時より夜九つ時至迄罷出、虫取絶し可申候。且稻株之手入方、草修理いたし候通相心得可致手入候。斯申渡候上、自然不勢之村方損毛申立候而も、一圓不取揚候條、其心得可有之候。

右之趣急々夫々可申渡候、以上。

八月七日

安田新兵衛

駒井丹之丞

石川・河北兩御郡御扶持人・十村・新田裁許中

石川・河北兩御郡江別紙寫之通申渡、今日より五日間、嚴重申渡虫不殘爲取絶、且稻株手入方も嚴重申渡候條、其心得に而其御郡村々之内虫附有之候はゞ、急速夫々申渡可致勢子候。自然勢子方不行屆、損毛申立候而も不取揚候條、其心得可有之候、以上。

八月七日

河合清左衛門

坂田良之助

口郡御扶持人・十村・新田裁許中

稲虫取除方之儀に付、別紙之通根役所より就到來に、相達之候條、得其意、右主附有之村々、此廻狀到着之日より日數五日を限、老若幼少者迄も不殘罷出、綿密爲取拂可申候。尤勢子方与して其許中始罷出可申、人少之儀に候條、子息二・三男迄も指出可致勢子、拙者共も相廻致見分候之條、可有其心得候。此廻狀刻附飛脚を以急速相廻可申候、以上。

亥八月八日

崎田達之助

稲葉助五郎

口郡御扶持人・十村・新田裁許中

虫取樣之業左之通

一、一枚之田、乃至千歩ありて、內百歩と歟くさりつき居候時者、右百歩をこもにて屛風を立たる如くになし、其くさり候稲を焼立申事。

一、一人々々之所作者、布之袋を組、子共之蟬を取申樣にして、短き柄を附袋を持、一口々々之間を、たもの下の方をもち、片手にわら或は麻木の松明を持、晝夜共あるけば、晝は煙

り夜は火にて弱り落候所を、袋の中へ入申候。
一、根本株毎のむさ〳〵としたるものを取除させ可申候。序に虫もつぶれ申候事。

亥　八　月

右亥八月八日於金丸御出張所に、崎田様等より被仰渡候事。

八月八日。諸郡十村等の一昨年來改作方に出精せるを賞す。

〔成瀬正敦日記〕

八月八日

一、諸郡御扶持人初十村共、去々年以來改作方多端之御用入情相勤候間、御發駕前御噂之趣に而も有之候様にと、御算奉等內存之旨相達候間、猶更於御次、御算用場奉行等直に遂僉議相伺候様、御用番內膳殿被申聞候付、則委曲申上、御算奉幷安田新兵衛へも遂僉議、何れにも精勤いたし候趣、御聽に達し居候儀を下々承知仕候はゞ、格別存込入情可仕与奉存候間、宜御詮議御座候様仕度旨等申聞に付、委曲申上相伺、左之通被仰出候付、今日御算用場奉行呼立、左之書取相渡す。

御算奉は御算用場奉行

諸郡共去々年以來、於改作方彼是御用多端之處、御扶持人初十村共等何茂出情相勤候様子、委曲に被爲聞召候。猶更無油斷相心得候様可申渡旨被仰出候。

右之趣改作奉行ゟ可被申渡候事。

亥　八　月

八月十一日。前田齊泰、參覲の爲に金澤を發す。

〔成瀬正敎日記〕

八月九日

一、明後十一日御發駕に付、御殿揃刻限六ッ半時之旨、御横目所披見物有之旨、御近習頭より演述有之候事。

〔御家老方等〕

八月十日

一、當御留守中、若御隣國騷敷儀有之時、御直封之御箱御渡置被遊候間、臨其節開封取捌候樣、以御親翰年寄中迄被仰出有之候。每有之樣子に候得共拜戴に不被出、當年は被出候事。

〔御家老方等〕

八月十一日

一、五時前より半時頃迄に追々出席、四半時頃丹州一切、播州等一切、御家老一切被爲召、

御意有之。萬之助應じ及御請被申候事。

一、右相濟、追付御出、御發駕四つ七分五厘之由。

一、九時過退出、直に二ノ御丸御廣式方々樣恐悅申上、万之助・大學・拙者三人同道也。乘松甚助罷出候。夫より金谷御殿罷出、金子五郎太夫を以恐悅申上、追而可申上旨申聞也。

一、御發駕相濟、直に各御用番江恐悅申述候事。

〔溫敬公記史料〕

以去年献金助西城建築。延緩參覲期。

八月十一日駕發金澤。二十六日于到江戶。扈從老臣横山山城守。

八月廿二日。幕令に依り難船の荷物を取揚げたるものゝ受取るべき割合を示す。

〔郡方御觸〕

御城米、幷武家荷物、其外商荷物共、海上において難破船におよび候節、荷物陸揚いたし候者、分一請取方之儀、以來左之通可被心相得候。

一、浮荷物・沈荷物与浦高札に有之候者、船中之荷物に者無之、難船之節海中江散亂いたし、海上に浮き又は海底に沈候荷物之事に有之、海上に浮有之荷物取揚候之者は二十分一、海底

に沈候荷物取揚候者は十分一請取可申事。

一、船中に有之荷物之儀者、沈船にも可至程之水船、幷沈船に而も淺き場處之分者、陸揚いたし候荷物三十分一請取、至而深海之沈船より陸揚いたし候分は、十分一請取、全々浮船より陸揚いたし候分は分一請申間敷事。

右之通り相心得、分一請取方之儀は、寛政七卯年御觸之通り、其品相當之代金に而請取可申、尤指向難決儀も有之候者、荷物者不殘荷主へ相渡、分一請取方之儀、其時に可被聞合候。

亥七月

御城米、幷武家荷物、其外商荷物共、海上に而難船いたし候節、荷物陸揚いたし候者、分一請取方之儀、是迄區々之場所も有之候哉に付、以來別紙之通り可相心得候。右は太田備後守殿ゟ申上候上、明樂飛驒守申達。

御城米、幷武家荷物、其外荷物共難船之節、分一取請方之儀に付、從公儀相渡り候御書付兩通、年寄中被相渡候に付、寫相達之候條、可被得其意候、以上。

己亥八月二十二日　　御算用場

渡邊新藏殿

前田彌五作殿

八月廿六日。前田齊泰江戸に着す。

〔成瀬正敦日記〕

八月二十六日

一、今曉六ッ時之御供揃に而浦和驛御發駕、晝九ッ半時頃益御機嫌克御着府被遊、追分口御門より、中之口御門より、奥之口御式臺より御上り、夫々御作法書之通御居間江被爲入、御熨斗御祝相濟、主稅・善右衛門、益御機嫌克御着被遊奉恐悅候旨申上、御意有之、御請申上退候事。

八月廿八日。徳川家慶使を遣はして前田齊泰の參覲を勞ふ。

〔成瀬正敦日記〕

八月二十八日

一、今日上使彌与申小紙、御城江指出置候御付人受取來候旨。且平井善朴等より聞番迄、今日上使太田備後守殿被仰付候旨以紙面申越。右兩品從聞番指出、入御覽候事。

一、八ッ半かゝにて御城下り之御附人御案内申上り候付、御表へ御出、御大廣間迄御出御待被遊、三町目御附人に而御式臺江御出、御門前へ御見懸に而御門下迄御出、御誘引被遊、夫々御作法書之通御都合能相濟、八ッ五分被爲入候事。御先立都而善右衛門。

八月廿八日。將軍遣太田備後守。來勞。

八月。明年開山泉滴和尙の二百回忌法會を營まんとするを以て、天德院に相對勸化を許したることを告ぐ。

〔御郡典〕

天德院開山泉滴和尙之儀は、房州長安寺より御請待、微妙院樣同寺御建立、其刻五百僧に而、御歷代樣御供養、御領國萬民快樂之御祈禱等被仰付、右法式被相勤候處、來子年右開山和尙二百回忌相當り候に付、同院方丈數年之心願に而何卒右御例に復し、三百僧百日之結制、古格之通諸法式被致執行、御歷代樣御供養、萬民快樂之御祈禱等被相勤度、兼而役者共ゟも被申付置、追々支度有之候間、何卒格別之趣を以、右法式被仰付候樣仕度旨等、段々願之趣有之。猶亦方丈心願之儀に付、入用方之趣等、拙者共添書を以御用番年寄中ゟ相達、右願方通りには御聞屆難被成候はゞ、御家中始御領國町・在相對勸化被仰付候樣仕度。左候得ば方丈爲名代与、役者共等之內一統ゟ巡廻仕度之旨、役者共より段々相願、無據歎願に付、是亦委曲添書を以、御用番年寄中ゟ相達置候之處、今度別紙寫之通、御用番前田美作守殿覺書を以被申聞、其段夫々申談候。然處先以結構被仰渡難有、併勸化方之儀は、御家中始町・在ゟも拙

者共より入相立不申而は、勸化僧指向候共眞僞も難計取留無之、且紛敷者他より立入候而は、

御締方も難相立、甚心配之譯柄に候間、一統不急度觸達有之樣、役者共より重而相願、其段

も御用番年寄中ゟ相達置候。依之に追付御支配所ゟ、方丈爲名代勸化僧被指向候筈に候條、

此段爲御承知申達置候。尤於先々に都而心得違無之樣、曁勸め方心得等之儀嚴重申渡置、猶

更爲締方与拙者共印章之書物相渡、右を以所方役人ゟ引合、方丈心願之趣意委曲申達、一統

不相洩通達方賴入、施物取集方之儀も可及示談に筈に候條、品能御取計、夫々御申渡置候樣

致度候、以上。

亥八月　　　　篠原織部

内藤十兵衞樣御同役

天德院開山泉滴和尙、來年三百回忌相當り候に付、三百僧百日之結制諸法式執行仕、御歷代

樣御供養、萬民快樂之御祈禱等相勤度有之候旨、御時節之儀に候得共、何分格別之趣を以、

右法式被仰付候樣仕度旨方丈紙面、且右に付銀子二十五貫目御寄附有之樣奉願、乍去右願方

御聞屆難被成筋に候はゞ、是迄例も無之候得共、御家中幷御領國之内相對勸化願之趣等、委

曲役者書付、各添紙面を以被指出候。兼而之志願無據相聞候に付、段々遂詮議候得共、何分

當時之御時節に付、願之通難被仰付候。併段々無據趣に付、寄々勸化之儀無急度各切に可被

承届候。御上よりは白銀五十枚被遣之候。尤三百僧百日結制被勤候儀、可爲勝手次第候。是等之趣意取結可被申達候事。

亥　八　月

九月朔日。前田齊泰登營して參覲の禮を行ふ。

〔溫敬公記史料〕

九月朔。登營親謝之。横山山城守・前田圖書謁將軍。

〔成瀨正敦日記〕

九月朔日

一、九ッ半時前、今日御先例通何歟も御首尾能被爲濟候旨、御城より申來候旨、聞番申上。則御住居御用人幷原等之內呼立、申上候事。

〔續德川實紀〕

九月朔日、月次の拜賀例のごとし。松平加賀守はじめ、參覲のもの三人。

御住居は前田齊泰夫人

九月十二日。當年の酒造高を三の一に止めしむ。

〔文化より弘化まで日記〕

天保十年八月當年甚上作之處餘り暖風之天氣打續、雲霞虫夥敷立、稻多損。又こんか虫とも

云。

當秋洒造方、先記こぬか虫にて御指留之處、九月十二日三の一造り被仰渡。

九月十五日。大聖寺侯前田利平襲封の後初めて前田齊泰を訪ふ。

〔成瀬正敦日記〕

九月十四日

一、明日大藏少輔樣改而御對顏被仰上候付、其節御刀被進候付、今日御家老方執筆呼立、爲承知申達置候事。

九月十五日

一、九ッ時過大藏少輔樣御口上組頭承り、御近習頭を以申上る。御居間書院江御通し可申旨被仰出、組頭御誘引仕、御通之上、御居間書院上之口より御出（御先立善右衞門）、御對顏、御持參之御太刀組頭（前田清八）披露、一と先被爲入（御間續に、暫御見合）、御たばこ盆等引上候上、重而御料理之御挨拶被遊、直に御着座、御本膳等御相伴衆（齋藤長八郎殿）共追々出之、御引菜御敷居際迄御番頭（山森）上之、御受取、大藏少輔樣江御引被進、御相伴へは一と先御入被遊、重而御案内申上御出（御先立主税）、御給事人御盃事被遊、御刀被進（齋藤殿御持參）、相濟、又被爲入、重而御菓子等相濟候旨申上り、御出（御先立主税）御挨拶被遊、直に御送り、御居間書院御緣側二枚折外に而御挨拶被遊、夫より直に其邊に御取持

衆齋藤長八郎殿・加藤又兵衛殿御越に付、御挨拶被遊、坊衆戸倉善佐へも御會釋被遊、被爲入候事。

九月十六日。前田齊泰の子利義を大聖寺侯前田利平の假養子たらしむべきことを定む。

〔成瀬正敦日記〕

九月十六日

一、大藏少輔様不作に付御在所ゟ不時之御暇近々御願被成候。夫に付假御養子之儀、此方様御末子様之内御願被成度、誰様与申儀は不被仰上候間、相公様思召次第被仰出候様被成度旨、此間御家老代御用人御殿ゟ罷出、山城守ゟ申述候而奉伺候旨被申上、御僉議之上甚五郎殿御許容被進候旨被仰出、其段今日山城守ゟ申述、且未御虚弱に付御出生御届公邊へ相済不申候付、今度御届之儀聞番へ御次より被仰出候旨も申述候事。

九月二十日。前田齊泰其の子利義の生育を幕府に屆出づ。

〔成瀬正敦日記〕

九月二十日

一、此間聞番へ申談置候趣に付、奥御右筆衆示合、左之通御屆御紙面下もの出候付入御覽候事。

前田碁五郎　亥七歲

右天保四年於國許妾腹に致出生候處、虛弱に付御屆不仕候得共、此節丈夫罷成候間御屆申達候。且先達而喬松丸致出生候節、三男之御屆申達候に付、碁五郎事喬松丸より年増には候得共、四男に相立申候。此段被御聞置可被下候、以上。

九　月　　御　　名

〔見聞袋群斗記〕

九月、碁五郎殿公邊ぇ御丈夫之御屆、御四男に御立之事に御達有之なり。

九月廿三日。富山侯前田利保本郷邸に來り、江戶城西丸造營の爲助資を得たることを謝す。

〔成瀨正敦日記〕

九月廿三日

一、出雲守樣西丸表向御普請御手傳一萬五千兩被蒙仰候內、八千兩御助成御願之所、御願之通此間御許容被進候付、右爲御禮今日御出、山城守殿を以右御禮被仰置候得共、猶又善右衞

門被爲召、右御禮厚被仰上、且昨日大藏少輔樣方に而段々御懇之御儀、其上結構品被成御拜受候御禮等も、善右衛門へ被仰置候事。

九月廿四日。諸郡の乞食は一村限りにて之を介抱すべきことを令す。

〔司農典〕

諸郡共乞食取扱之儀、一村切に而介抱いたし、他村江出し申間敷、尤他村之者入れ申間敷候。

右救方者、先達而御救被仰渡候粥之法にいたし、勿論一・二錢宛指出得申者は取立、老幼又は病人等者無錢に而相渡、人調理幷札渡方等都而先達而之通相心得可申、右之通に而者、村々大小、或は人數之多少、村柄之善惡に寄、一村切に而取扱難出來向も可有之候間、乃至入用之三の一其村に而爲出、三の二者一と組切に惣割符にいたし可指出候。

右之趣早速夫々可被申渡候、以上。

九月廿四日　　　　御算用場

改作御奉行中

九月廿七日。大聖寺侯前田利平、明日江戸を發し歸邑するを以て本鄕邸を訪ふ。

歸邑の願出は封內不作なるを以てなり

九月廿六日

一、今度御願に而御歸邑之事故、初而之御入部之御廉には相成申間敷与申事に而、御用所に而表向御使者・御進物等は、初而御入部之しらべに而無之故、御進物も無之、當時御間柄餘り御疎遠之譯故遂僉議、左之通今日相伺置候事。

一、御肴一折　　大藏少輔樣

御目錄

右近々御歸邑に付、御發駕御當朝、爲御悅壽正院樣御傳を以被進之、御同所樣・貞春院樣・峻光院樣江は、年寄女中奉文を以御悅被仰進に而可有御座哉。

九月廿七日

一、大藏少輔樣明日御歸邑に付、爲御暇乞八ッ時前御出に付、於御居間書院御對顏被遊、御熨斗出之、無程御退出之事。

但初而御歸邑之節、御暇乞被爲入候得ば、御料理被進候へ共、此度は御樣子も違候故、常御歸邑之通御熨斗迄被進候事に、御客方より伺有之候。且右に付何れも、御出之上上下に改候事。

碑は田中三郎右衞門の建つる所

九月。能美郡の十村田中三郎太衞門虫塚を建つ。

〔能美郡埴田虫塚〕

虫　塚

あゝいかなる故にや、當年七月上旬までは順氣むるゐ、草生よく早稲稲に出、一統悦び晝夜賑ひ候内、同月中旬のころより俗にこぬか虫俄に生じ、わせおひ〳〵かれかゝり、中稲・晩稲次第につよく、稲多枯何れも難儀。右虫布もめん袋を以てとり集候分、此所に二十三俵許埋おく。此末虫生る時は、艸修理の頃はやく木の實油を用ゆれば愁うすかるべし。余は除蝗錄に委し。虫の愁を恐れ、後年の記錄に建之畢。

天保十年九月

〔能美郡岩淵虫塚〕

虫　塚

當年七月中頃より、俄に稲株よりこぬか虫多く生じ、悉稲を枯らし、一統なんぎに及び、布木綿ふくろを以てとり集め候虫、此所に十六俵埋おく。若此虫末に生る時は、草修理の頃早く木實油を田面にまき、拂ひ落してとれば虫愁うすかるべし。余は除蝗錄に委し。虫愁をおそれ、後年の記錄に建之畢。

十月二日。前田齊泰の女方姫金澤に生まる。

〔官私隨筆〕

十月二日

一、今日越後屋敷御勝手方式日出席中、坂井小左衞門罷出、御姫樣御出生之儀演述。

〔成瀨正敦日記〕

十月十日

一、當月二日不時立町飛脚早飛脚歩に而到來、御産婦方二日午之上刻安産、御女子樣御出生、益御達者に被爲在候旨等、坂井より夫々言上、右御用に而之不時立也。

到來は江戸へなり

十月五日。大聖寺侯前田利平の加賀侯に對する口上の格式を改むべきことを承認す。

〔成瀨正敦日記〕

十月五日

大藏少輔樣御口上振、以前は御機嫌克、或難有御仕合等之御口上柄に候所、享和二年金龍院

無數とは數量の少きなり

様より段々被仰進之趣御座候而、以來御安泰或は忝御仕合与申御口上振に相成居候。當時重き御續柄之儀、享和以前之御口上振に御改被成度旨、阿方御用人より此方御用人迄御伺に付、御用人より申上相しらべ候所、享和之被仰進等當席に見當不申、何れ是は御伺にも不及儀、大藏少輔様思召次第に而可御宜品に付、其儀申上、思召次第被遊可御宜旨、御用人より及御挨拶様申談仕候事。

但、追而御改に御治定之旨申來候旨、御用人より申上る。

十月六日。菜種油缺乏するを以て魚油・臭水油・木之實油を混用すべきことを命ず。

〔雜事日記〕

御領國近年打續凶作、食用乏敷候に付、當年御郡地麥作等多植付、菜種作高格別無數、其上出來方不宜候に付、御城下用油來春迄取續難計候間、先達而以來段々遂僉議、御領境等より菜種油買入爲賣續候に付、無據價茂高直に相成、且魚油幷臭水油・木之實油入交候而取用候様致詮議候間、食用之外成限家來末々迄入念可被申渡候。

右之趣年寄中江茂相達置候條、被得其意、同役中傳達、組・支配之人々江可被申渡候、以上。

十月六日　　　　御算用場

本文は江戸にての記錄なり

十月十一日。前田齊泰の女方姫の七夜の祝儀を行ふ。

〔成瀨正敦日記〕

十月廿一日

一、夕景、當十四日出早飛脚に申渡、坂井氏より、當十一日御出生様、方姫様与土肥權六郎より指上候旨等、夫々言上有之。

十月十二日。大聖寺侯前田利平歸邑の途金澤に宿す。

〔文化より弘化まで日記〕

十月十二日、大藏少輔様當年のこんか虫に御領分不納に付、御暇御願、御國ゐ御戻り、今晩金澤御泊。

十月二十日。前田齊泰の女方姫逝去す。

〔官私隨筆〕

十月廿日

一、方姫様御產婦之方、御出生以前より餘程浮腫有之に付、臨産之節之儀も如何可有之哉と、御醫師中泥み居候由之處、御誕生以來存之外無御差障御肥立之由。然處御誕生之頃は、

餘程御水氣も有之候哉、御通も多く有之候へば、殊之外御瘦被成、小さき御子様之由。其上此間中御衂血御發し御止不被成、彼是御案じ申上べき御様子之由。依而一昨十八日越後やしき退出より、直に各御廣式江罷出、相伺御機嫌候。然處今曉七半時過、御用番より以紙面、方姫様御様子段々御指重、被及御大切候段、只今御廣式頭より申越候。依之追付御廣式へ御出御機嫌御伺可被成と之趣、十月十九日日附に而申來。依て六つ過少々明く成候故提灯なしに出。御廣式へ罷出、小堀牛右衛門に逢候而御様子相尋候處、夜前より漸々御衰弱被成、今少以前に御卒去之由申聞也。

十月廿日

〔御家老方等〕

一、今曉七半時過御用番より、方姫様御容子次第御指重、被及御大切候間、御廣式江罷出御機嫌相伺候様、以紙面申來。追付御廣式江罷出、丹羽權佐を以相伺候處、少し以前御卒去被成候に付、御用番江御届申上候旨。且御用番被仰聞候。先刻各様江御紙面被遣候節、方々様江御伺相洩候間、御出御座候はゞ可申上旨被仰聞候由申聞に付、方々様江も相伺候。然所御卒去之儀も奉承知に付、方々様江其に付而之御機嫌も相伺候處、何之御指障も不被爲在旨申聞也。右に付金谷御殿江も直に罷出、眞龍院様以内藤勘兵衛御機嫌相伺候所、未御眼覺前に

付追而可申上、何之御指障も不被爲旨申聞、退去之事。

〔成瀨正敦日記〕

十月廿六日

一、方姫樣御容子、十四日申上候後御鼻血被爲在、未だ御止り兼、十七日頃より召上り方も御少く、御疲勞も被爲增、御危篤之御樣子之旨衆醫申上候旨等、十八日不時立早飛脚を以坂井より言上。

十月廿八日

一、今朝四ッ時頃、當廿日立足輕早飛脚歩に而到來、坂井氏より、方姫樣御儀御療養御叶不被成、今廿日卯上刻御卒去被遊候段、御廣式頭より申上候旨言上有之候事。

十一月三日

一、方姫樣御法號左之通、天德院より被指上候旨、坂井より言上。

照了院殿華貞智方禪童女

本文は江戸にての記錄なり

十月廿四日。前田齊泰の妹厚姫等、竹澤御庭に建設する石塔風鐸の資を贈る。

〔成瀨正敦日記〕

十月廿四日

一、竹澤御庭に寶塔被仰付候に付、右に釣し候風鐸被仰付、數二十四出來。右代は和田倉御前樣・壽正院樣より御內々被上候筈に候間、代料高申上候樣御意に付、右代三百六十二匁に付、其段申上置候所、今日御渡に付金澤表へ坂井氏迄送り遣す。

和田倉樣より金三兩与一匁（此表相庭之圖り。）

池之端樣より二兩一分二朱与百文（金澤之相庭与相見えし。）

十月廿九日。小兒科の藩醫として高島正頴召抱の件を議す。

〔成瀨正敦日記〕

十月廿九日

一、御醫師に當時小兒科御人少に相成、其上基五郎殿等御匕加藤邦安儀、癇症相煩急に出勤仕得申間敷、甚御手薄御用支にも可相成哉。依而本多大學手醫師高島正穎儀、小兒科宜御用立可申者之旨、兼而江間雀々翁・森快安も申聞居候付、右正穎儀只今之所に而被召出、直に御子樣方御匕被仰付候はゞ可御宜心付之趣、坂井より內狀を以此間申來居候付、其儀可御宜与兩人も奉存候故、則相伺候所、可被召出付而は山城守ゟ及示談候樣被仰出候付、則致別席及御示談候所、存寄も無之候間、金澤表へ申遣、替存寄も無之候はば被召出候旨被仰出候段、

可申遣与奉存候旨被申聞候付、其段申上置候事。

十一月廿二日。加賀三郡に虫害あるを以て貸米を行ふ。

前田萬之助は勝手方主附の家老

〔御家老方等諸事留〕

十一月廿二日

一、御勝手方に而、小川友之助より、萬之助申付之由に而、當年虫付之御貸米指急旨に付、出席切御示談に而、御貸米聞屆申候由申來紙面寫。指越米高左之通。

一、五萬六千四十八石七斗一升四合

内

一萬九千百六十七石八斗七升　能美郡

一萬八千九十三石五斗九合　石川郡

一萬八千八百八十七石三斗三升五合　河北郡

返上方、作體見計返上之事。

十一月。能登口郡の山方支配に關して議す。

本年二月十八日の條參照

〔三州治農錄〕

能州山方支配之儀、文政四年御仕法以後、私共取捌に被仰渡置候處、當春如先規能州山奉行

被仰付、輪嶋等江引越被仰渡、私儀右御用無之旨被仰渡候。然處羽咋・鹿嶋兩御郡山方御用、右輪島迄罷越相達候而は、遠路海陸を隔て舟便りも甚惡敷、品に寄指懸り之御用抔は指支に至り可申哉も難計、於下方も格別雜費も相懸り、いか計迷惑之筋可有之候。御郡之内に而も、押水組等は輪島等へ道程二十里餘も隔り居候儀。是迄之處は御林山幷御林藪損竹木伐除方、暨下苅枝下し等願相達候へば、時々所口山廻足輕へ見分方等申渡、夫々取捌來候へ共、前段之通海陸を隔候而は、時々之達方は甚煩敷儀。於以後は組々において、或は五ヶ村・十ヶ村与歟引都べ、相達申樣之儀にも可相成哉。左候而は右損木等御林山等に永く立置、自然不縮之儀可致出來も難計。且御林山等若出火等、臨時之指圖可請節抔も、飛脚往返之日數相懸候而は、御縮方相弛み申儀も可有之与存候。依而是迄之通被仰付置候歟、又は御塩奉行齋藤丈五郎江兼帯被仰渡候歟、兩樣之內被仰付候者、格別御用辨に相成、御縮方も可相立与存候。右等之趣に付、先達而より十村共段々申聞之趣も有之、今度十村共連名願紙面私迄指出、所口山廻足輕手前も詮議仕候處、是又十村同樣申聞、無據趣に相聞申候。乍併右之通被仰付候上之儀、何与歟御様子可有之も難計、先引取御內談申候。尙御詮議被下候樣仕度候、以上。

亥十一月　　　　　　　　槻尾甚七郎

御算用場

槻尾甚七郎は御郡奉行

十二月朔日。前田齊泰登營して從三位に陞叙せらるゝの命を受く。

〔成瀨正敎日記〕

十一月晦日

一、七ッ時過御老中方御連名之御奉書到來、明日御用之儀候間、明朔日五時可有登城旨、水野殿・太田殿・脇坂殿御連名也。右御近習頭中より、御覽濟之旨に而被指出候付、御祐筆江申談御請出來、校合成瀨岩田入御覽、御請文御大小將福島秀春江相渡候事。

十二月朔日

一、今朝六ッ時之御供揃に而、六ッ六分御提灯引けに而御出、御服紗・布御上下半。

一、七ッ時過御歸殿被遊、御居間へ御着座、御熨斗配膳上之、相濟、兩人御前へ罷出候所、當日之御意有之、御請申上、且今日之恐悅申上、續而御近習頭も罷出、恐悅申上候事。

一、追付御表江御出、出雲守樣於御定席御對顏。夫より御居間書院江御着座、山城守・圖書被爲召、左之通御意。

昨日依奉書致登城候所、於御座間御懇之上意、從三位被叙、無存懸難有仕合、先此段金澤年寄共等江申遣。御請恐悅申上る。此段頭分以上江も可被申聞与御意。

右相濟被爲入。

〔近敦日記〕

十二月朔日

一、四つ九歩過荒木津太夫御城より罷歸、左之通以聞番被仰出候旨申聞候段、山森より申聞。

於御座間御懇之被爲蒙上意、從三位御昇進被仰出候事。

〔續德川實紀〕

十二月朔日、松平加賀守齊泰從三位に升る。

十二月五日。銀仲預手形の古札を引替ふべき期限を延ぶ。

〔觸　留〕

當時通用之銀仲預手形百目札幷小割札共、當年中寄々引替所ゟ指出、新札与引替可申旨、先達而一統申渡置候通に候。然處今以引替殘有之躰。最早當年餘日茂無之候間、來年六月中迄に追々引替可申候。尤右限月迄者、是迄之通新・古打込可致通用候事。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申候、以上。

十二月五日　　本多播磨守

十二月六日。德川家慶使を遣はして前田齊泰の西丸造營の功を助けたる

を賞す。

〔成瀨正敦日記〕

十二月六日

一、昨夕御當番御目付一色主水殿より、今日上使堀大和守殿御勤之旨、御小人目付罷出御案內申上候事。

一、西丸御座所向大奥向御普請御手傳被爲蒙仰候所、御普請御出來に付、今日以上使御懇之上意之上、御指之御腰物幷樽肴御拜領之。御歡姬君樣より橫田小一郞殿御使に而被仰進、御取次主税、御留守中に付御戾之上可申上旨申述置、御歸殿之上申上、御相答之旨御住居御用人呼立申談候事。

〔見聞袋群斗記〕

十二月六日、上使若年寄堀大和守殿を以て、去年西御丸御普請御手傳之事を賞せられ、御差之裝刀了戒代金五十枚、御脇差備前國眞長代金三十枚、一種一荷を賜ふ。西丸御座所大奥向御普請御手傳仰付らる處、早速に御普請出來、御機嫌に思召に依て、御差之御腰物幷に御樽肴被下る由なり。

〔續德川實紀〕

十二月六日、黒木書院へ兩御所出給ひて、西城營造によりて云々。松平加賀守には、おなじ事によりて、使して了戒の御刀・備前眞長の御さしぞへ、一種一荷をおくらせらる。

十二月十一日。物價高貴なるを以て諸士に貸銀を行ふ。

〔本多政和覺書〕

十二月十一日

一、御貸銀被仰付候趣、文政七年御仕法御貸付銀被仰付候節之振を以、寺社奉行を初諸頭等へ對談之間に而、左之覺書等渡、各列座無之。丹州初へは添紙面に而達之、御家老中も一通達之、若年寄中演述候樣申談、睡鷗江は添紙面に而遣之、余方江は作州より來る。

〔雜事日記〕

御家中知行之內、去々年來半高等御借上被成置候處、當年半納之頃米價近年比候得者下直有之、其後俄に踊貴、諸色も准じ、何茂可爲難澁に付、先頃以來御扱方種々御詮議有之候へ共、何茂承知之通、從來御難澁之上、近年凶作、加之御手傳を初種々御物入、其上當年茂多之御損毛等、無御據儀茂指添、被成方茂無之、思召通に不被爲行屆候得共、重々御詮議之上別紙割合之通御貸渡銀被仰付候。

御貸渡方割合

一、自分知五十石より七十石迄、都而百石二百五十目宛圖り。
一、同五十石以下知行高不拘、都而五十石當り。
一、同七十一石より九十九石迄、知行高不拘都而七十石當り。
一、同百石より百三十石迄、都而百石に付百八十目宛。
一、同百三十一石より百六十九石迄、知行高不拘都而百三十石當り。
一、同百七十石より百九十石迄、都而百石百五十目宛。
一、同二百石より二百九十石迄、知行高不拘都而百九十石當り。
一、同三百石より七百五十石迄、都而百石に百目宛。
一、同七百五十石より八百四十九石迄、知行高不拘都而七百五十石當り。
一、同八百五十石より千九百石迄、都而百石に九十目宛。
一、同千九百石より二千九十石迄、知行高不拘都而千九百石當り。
一、同二千二百石より二千五百石迄、都而百石に八十目宛。
一、同二千五百石より二千九百九十石迄、知行高不拘都而二千五百石當り。
一、同三千石以上、都而百石に七十目宛。
一、御切米・御扶持方者、知行圖り割合を以御貸渡之事。

一、足輕江者一人三十五匁宛御渡被下切之事。
一、坊主・小者江者不被下候事。
但、坊主等之內御借上米指上候者江は三十五匁被下候事。
一、舊宅之人々御貸渡無之事。
一、隱居之人々江茂、御割合之御貸渡之事。
一、御知行御取揚御扶持方被下候者、幷御咎被仰付置候人々江者御貸渡無之事。
一、他國居住人々江茂、一統割合之通御貸渡之事。
一、三の一被下置候人々は御貸渡無之事。
一、御手役者幷他國御合力・扶持等被下置候人々は、御貸渡無之事。
一、手替足輕並被下。
一、銀子請取方等之儀、御算用場直に可申談筈之事。

亥十二月十四日

十二月十三日。笠舞の非人小屋積雪に依りて倒壞す。

〔本多政和覺書〕

十二月十四日

一、町奉行兩人別席に而申聞候者、川上御救小屋之内昨晝潰申候。雪除之儀先日以來入念申渡置、正に九日にも爲下申候。昨日之處格別雪も溜り不申樣に見え候得共、此間之雨に而重みかゝり、右之通潰候哉と被存申候。家も隨分丈夫成家に而、容易に潰申樣之家に而は無之、しかし右家中之方古き處も有之故、其處へは隨分不罷越樣申付置候。右中之方潰れ、夫より兩方共潰れ候樣子御座候。別紙三人之者共は、餘程之怪我に而少与六ヶ敷樣子御座候。其外は少々怪我人も御座候へ共、格別之儀に而は無之樣子御座候。先以御救小屋右樣之儀有之、誠迷惑至極御座候。懸り定番御歩等も一向無油斷心得居候得共、不斗右之次第。是も甚迷惑がり居申候旨等申聞、別紙遶紙面出之。

十二月十五日。前田齊泰登營して位階陞叙を謝す。

〔成瀨正敦日記〕

十二月十四日

一、明日位階之御禮被仰上候付、御殿一統服紗小袖・布上下着用之筈之旨、御横目所披見物有之旨等、御近習頭より廻狀あり。

十二月十五日

一、六ッ時過御提灯引にて御出御登城、御服御熨斗目・御長袴之由。御下り、御老中方御廻勤、直に廣德寺御參詣被遊、

八ッ半かま御歸殿之事。

〔見聞袋群斗記〕

十二月十五日御登城、御黒書院に於て御位階之御禮仰上られ、上意を蒙り給ふ。作御太刀黄金二枚・縐紗十卷・裸脊馬一疋進上せらる。大御所様・右大將様江作御太刀黄金二枚・裸脊馬一疋宛、大御臺様・御臺様江白銀十枚宛進上し給ふなり。

〔徳川實紀〕

十二月十五日、月次の賀例のごとし。松平加賀守は位階を謝して、馬・黄金・卷物をたてまつり、見えたてまつる。

十二月廿三日。金澤に於いて前田齊泰の從三位に昇叙せられたることを告ぐ。

〔觸　留〕

相公様御儀當月朔日御登城被成候様、前日御老中方御連名之依御奉書、御登城被成候處、於御座之間御懇之上意之上、從三位御昇進被仰出、難有御仕合に被思召候由、拙者共迄以御使者被仰下候。

右之趣何茂江可申聞旨御意候事。

御横目江

今日御弘之爲御祝詞、今明日中年寄中等宅江罷出可申儀に候得共、雪途之儀に候間、當年中御日柄除之相勤可申候。幼少・病氣等に而今日登城無之人々は、向寄より傳達、爲御祝詞御用番宅江以使者申越候樣可被申談候事。

十二月廿三日

十二月廿八日。前田齊泰、江戸城西丸に登り新營の建築を觀る。

〔見聞袋群斗記〕

十二月廿八日、歲暮に西丸江御登城之處、御座敷向御拜見、其上にて御菓子御頂戴なり。大廊下御同席之方々及び溜詰之御面々ばかり之由なり。

十二月廿八日。前田齊泰、飛鳥井家へ立烏帽子紫懸緒相傳の誓文を發送す。

〔成瀨正敦日記〕

十二月十四日

一、來元日御登城、御立烏帽子に御改被遊度旨に付、京都へ出來方先日奧納戶へ申談、大森

三郎兵衛方迄申遣、一頭は紫懸緒其表に而出來之樣申遣置候所、當九日子の刻出立、三日半便に而大森より當席充所之書狀、昨十三日五ッ時過會所より相屆候。右紫懸緒之事、飛鳥井家御直に御懸被成候間、御賴込に可相成哉之旨等也。今日夫々御詮議之上、飛鳥井家江御賴込等取計之樣、大森へ書狀今夕三日半便に遣候樣、會所へ申遣、田邊九兵衛へ之紙面も遣候事。

十二月廿八日

一、來年頭より御立烏帽子被爲召候付、先日より京都詰人幷大森三郎兵衛へ申遣、御立烏帽子二頭被仰付、右紫打紐御懸緒飛鳥井前大納言殿江御賴、叡慮御伺之上御許容、御相傳被遣候。右に付御誓文御入用に付、御案文來り、御祐筆石黑棨之助へ主付調筆被仰付、御判申下し、御內用之事故當席に而坪內吉郎右衛門に爲留、夫々御認等出來、京都詰人迄今夕出立、六日限早飛脚に而指遣候付、會所奉行へ御書同樣之御品に取扱候樣申渡す。

天保十一年

正月朔日。前田齊泰、江戶城に登り年頭の賀を行ふ。

〔成瀨正敎日記〕

正月朔日

一、上々樣益御機嫌克御超歲被遊候事。

一、朝六ツ時之御供揃に而、御時計懸流五ツ半にて御登城、九ツ二分御歸殿、御表式臺より御入被遊候事。

正月十四日。本鄕邸廣式に於いて福引を行ふ。

〔成瀨正敦日記〕

正月十四日

一、今日御廣式御福引に付、九ツ半時揃之旨、昨日大島忠太夫申聞之所、八ツ半頃歟廻り候樣同人申聞に付、兩人共服紗・半上下に相改相廻る。御三之間上に御簾立に而、其前へ罷出、御三之間（こちらより二疊目に而）御禮仕、御敷居之内に御鬮臺出居候付、其際迄立て參り、つまみいたゞき、御禮いたししりぞく。重而番附呼候付罷出、御品物頂戴いたし退候事。（最初之出之通り也。）退候而、いづれも相濟候上、（七ツ過也）於御奧（御肴はなます也。）御酒被下、相濟御禮申上、（老女不出、若年歟表使かへ申述る。）御口へ出候上、大嶋を以御禮申上引取候事。

正月廿六日。道中にて諸士の携行する鑓數等は文政十一年以前の舊に復せしむ。

正月二十七日

一、左之通山城守殿被仰渡候旨に而、御供之人々ゟ二十六日之日附に而、御道中奉行より廻狀有之候付、高田氏より借用寫置候事。

御道中奉行ゟ

御省略中當分御供人鑓數等減少之儀、文政十一年申渡置候。其内具足櫃之儀者、天保七年申渡候趣茂有之候。然處武器者格別之儀に而、思召茂被爲在候付、爲御持之御武器近年御減少之分、最前之通被仰付候條、御家中之人々茂、成丈雜用者相省、鑓數等文政十一年以前之通爲持候而可然儀与被思召候間、以後右之趣に可相心得候。併當御歸國之節者、去年鑓數等減少いたし罷越居候付、不勝手之筋も有之候はゞ、尤減少之儘御供仕候儀は可爲勝手次第候。

右之趣可申渡旨被仰出候條、被得其意、夫々可被申談候事。

庚子正月

付札、組頭ゟ

御省略中當分御道中御供人等、武器減少之儀申渡置候趣有之候所、武器之儀は格別之儀に而、思召も被爲在候に付、今般別紙寫之通、御道中奉行へ申渡候條、交代人等も右に准相心得可

申候。

右之趣被得其意、夫々可被申談候事。

庚子正月

正月。前田齊泰、使者を京都に派し位階昇進を謝せしむ。

〔溫敬公記史料〕

正月。遣今枝易直于京師。謝去年進階恩。獻物。

正月。百歲以上の老齡者に物を賜ふ。

〔溫敬公記史料〕

正月。是月賜百歲者物。

二月二日。前田慶寧の本鄉邸内に於ける居館造營に着手すべきことを命ず。

〔成瀨正敦日記〕

二月朔日

一、御座所御繪圖、此間中御附方原氏・山崎氏へ及示談、大躰御治定に付、其段相伺、今日山

城守殿等へ入御披見候所、少々好も有之候得共、大躰可御宜、外替存寄も無御座旨被申聞候付、右御繪圖御治定之事に相成候事。

二月二日

一、前段之趣に付左之通覺書にて申上、御作事奉行堀轟馬呼立申談、西田清平棟取候而御圖方致候樣、別段申渡置候旨も以口達申談候事。

今般犬千代丸樣御座所御普請就被仰付候、御繪圖僉議之上入御覽候所、共通被仰付候間、早速取懸可被申候。

一、先達而大綱御入用は被申聞候得共、御繪圖相極候上は、見圖り方出來可申候條、御時節柄之儀得与詮議有之、中勘何程と取極、一時に相渡候儀は御かね手繰方も可有之候間、月割を以請取候儀に取極、早速可被書出候。

一、御普請木品之儀は、兼而申談候之通、成丈麁品を相用、買上之儀も猶更遂僉議、御不益無之樣可被申渡候。

一、御普請出來方之儀、御指急に候得ば、大躰八月中御成就之旨に候へども、猶更御大工中を初、何茂無油斷相心得、可成丈早出來候樣可被相心得候。

右之趣一統江被申渡、聊無油斷致出情、御不益之筋無之樣夫々可被申渡候事。

二月五日。前田慶寧と水戸侯德川齊昭の女との婚約に關する報金澤に達す。

天保十二年二月五日の條參照

〔御家老方〕

二月五日

一、犬千代丸樣御緣女樣は、水戸樣より御貰被遊度、御直に兼而御約束被遊、尙更此度どなた被進候哉御極被遊度旨、御直に水戸樣ゟ被仰入候處、當年御四歲に御成被成候御姬樣被進度思召候。尙御國ゟ當年御戾り之上得と御覽被成、被仰進度旨、且男女等御人御附不被成、來秋にも此方樣ゟ御引請、御家風に御養育被遊候樣被成度等之儀、江戸表より申來儀有之。

二月十三日。幕府前田齊泰の東海道を經て就封するの請を許す。

姬君は前田齊泰夫人

〔成瀨正敦日記〕

二月八日

一、左之通今日姬君樣・犬千代丸樣・喬松丸殿ゟ申上候樣、夫々御附々呼立申談。

但姬君樣へ申上り之內、如何成文面も有之候得共、御住居御用人ゟ相渡候事故、申上は口

達に而申上候樣、主馬へ申談候事。

和田倉御前樣・壽正院樣江申上は、右覺書添紙面に而御附頭迄遣候事。

相公樣當春御歸國御暇、御例之通被仰出候得者、無程御發駕可被遊所、下海道越後山之下、去冬以來風波强損所多、其上土石崩懸り甚危敷場所も有之、修理加へ候而も落石等之儀難計、御人數多之御通行は難被爲成旨申上候處、可也御旅行被爲成候者、下通り御通行可被遊旨被仰出候得共、御道中方においては何分御通行被爲成間敷、上海道御通行御座候樣年寄中等より申上、不得止事其通与被仰出候。右之御詮議有之に付、御發駕御日限未被仰出候。下通り御通行御差支之趣、榊原殿江も御懸合之上、公邊江可被仰達与被思召候、先此段申上置候樣被仰出候事。

二　月

二月十一日

一、下海道御人數多之御通行は御指支に付、當御歸國東海道通御通行被成度旨御届書、今日聞番を以御指出之事。

二月十四日

一、東海道御通行之儀御届書、土井殿御指出置之所、昨夕聞番へ呼立、御勝手次第可爲候与、

是月は大盡なり

道中奉行可被談候与御付札に而相渡候事。

二月晦日。道中に於いて御横目以下の携行すべき鑓數に就いて告ぐ。

〔毎日帳書拔〕

二月晦日

一、今般御供人等鑓數之儀、文政十一年以前之通爲持可申旨被仰出候通候。御横目以下鑓數之儀は、尤文政七年被仰出候通一本爲持候筈に候條、夫々可申談旨御横目へ申渡候事。

二月晦日。富山・大聖寺藩より下屎を移入するものに米穀を以て價を支拂ふこと勿らしむ。

〔司農典〕

御郡村々之內、富山・大聖寺等他領より、前々より下屎取來候者有之躰に相聞候。屎代たりとも、他領江米指遣候儀は不相成儀に候。銀・錢を以屎買候儀は格別、向後心得違無之様、御領境村々江急度可被申渡置候、以上。

二月晦日　　御算用場

御郡奉行中

右之通申來候に付、寫相越之候條、得其意、夫々不相洩樣可申渡置者也。

三月二日　　御郡奉行

口郡御領境有之村々役人

二月。手跡を指南する者に讀書・算術等をも教授すべきことを諭す。

〔諸事留帳〕

御學政御修補に付、四民共御教導之儀は孝悌を先といたし候より外無之、凡人は先入主と成候而、幼少之折覺込候儀は其習生涯透り申物ゆゑ、第一蒙養を重んずる事に候。依而是迄手跡指南いたし候人々、猶更以來は右手跡執行之間に、小學・四書等之內曁算術等銘々嗜有之品は、門弟年頃等に隨ひ致指南、且前段孝悌之大意或者六諭衍義大意抔之有增をも咄候而、會得いたさせ可申候。是等之儀容易に行屆申に而も有之間敷候得共、孰も心懸漸々以其所〻至り候樣有之度事に候。此段申談置候事。

子二月

二月。苗代に筵圍を施すべきこと等を命ず。

〔司農典〕

種籾之儀、加州向等去作虫付に而、籾性不宜向々は、其心得いたし、手厚增蒔入致置、不致

苗不足樣可相心得候。

一、苗代之儀者大切之品に付、手入方油斷も有之間敷候得共、右苗代田惣廻りに、筵等を以圍をいたし、風留等致候儀、第一宜樣に候條、一統ゑ得与申渡、右田圍致儀無違失可爲相心得候。此段役人共厚相心得、下々ゑも得与申諭、不相洩樣可爲致候。尤拙者共於廻村先に見屆、若等閑之族於有之者、夫々可及察當候。

右之趣不相洩樣急度可致勢子候、以上。

子　二　月　　　　　　　改　作　奉　行

諸郡御扶持人・十村中等

二月。兩本願寺別院再建の爲寄進する材木運搬により橋梁を破損するなかるべきを告ぐ。

〔御郡典〕

卷目、御算場奉行ゑ

兩末寺再建に付、御郡方等より寄進之材木等、車に而引通り、所々橋坂等相損候に付、釣荷にいたし相通り、尤危き橋は相通不申樣、天保九年四月御郡奉行申渡置候通に候處、此節多分地車を以引通候由に候。尤損候節は、東末寺分は自分に加修理旨に候得共、追々大木を引

通り候而は行術等相弛み不輕事、懸直し候所ゟ至り候旨、御作事奉行申聞候條、以來心得違無之樣嚴重可申渡旨、所々御郡奉行等へ被申談候事。

子　二　月

三月二日。前田慶寧、弓初及び乘馬初の儀を行ふ。

〔見聞袋群斗記〕

三月二日、犬千代丸樣御弓初・御乘馬初御規式有之。

〔犬千代樣御用留〕

三月二日

今二日犬千代丸樣御弓初幷御乘馬初、曁御具足御召初御規式、夫々御首尾能被爲濟、先以恐悅御同意に御座候。則御作法附寫二緘爲御承知進之候、以上。

三　月　二　日　　山城守等兩人

庄　兵　衞　樣

犬千代丸樣御弓初幷御馬御召初曁御具足御召初に付御作法。

一、相公樣より犬千代丸樣ゟ御弓矢等被進候御使若年寄之事。

但御進物は御徒相副、先達而御廣式ゟ相廻し、御廣式御鎖御番御徒罷出受取候筈之事。

一、御馬被進候御使も若年寄相勤、篠井喜太夫幷高桑五郎兵衛御馬に指添罷出、御廣式式臺において善太夫御繮指上、御頂戴可被遊候事。

一、御居間書院宜段、山城守等より犬千代丸様𛀁可申上候事。

一、相公様𛀁も宜時分山城守等より可申上候事。

一、御弓初御規式御始に付、吉田權平儀御弓矢持御居間書院三之間に罷在、宜時分指上可申候。御替弓者松原彌一右衞門持候而、右三之間に扣可罷在候事。

但權平儀御韘も持之罷在、御弓矢指上候以前、宜時分御韘指上可申事。

付札

御前御弓初之節は、御替弓等原佐左衞門持之扣罷在、吉田權平御韘迄持之差上候へ共、今般者本文之通、御韘も權平より指上可申候。

一、犬千代丸様御熨斗目・御半上下被爲召御出、御居間書院横御裝束之御間に御溜被遊、成瀬主稅等內被爲召、御弓矢等被進御禮幷御馬被進候御禮可被仰上候事。

一、追付御規式に付相公様御居間書院𛀁御出、御着座被遊、犬千代丸様御出、御弓矢等前段之通權平より指上、御卷藁前𛀁御向、御肩被爲拔候節權平御側𛀁進出、御袖等奉直、御射初被遊、相濟御弓矢・御韘權平𛀁御渡被遊、同人退出、犬千代丸様御居間書院𛀁御着座之事。

一、權平江、御居間書院三之間に而、御弓初御用相勤候付拜領物被仰付候段、若年寄申渡、御目錄可相渡事。

權平平士に付御目六は御用人より相渡可申筈に候へ共、左候而は御間狹く差支候付、僉議之上本文之通若年寄より相渡候也。

一、御兩殿樣御居間書院江御着座被爲在候處江、御のし三方御表小將持出指上、權平儀山城守誘引に而罷出、今日御弓初御用被仰付、拜領物も被仰付、難有仕合奉存候旨申上候處、同二之間江犬千代丸樣御進被遊、御手自御熨斗被下之、相公樣より首尾能与御意有之、山城守御取合申上、退出之事。

一、右相濟、御居間書院に而相公樣、犬千代丸樣御相伴に而御雜煮等上之、御盃事被遊候事。

一、右相濟、御兩殿樣被爲入候事。

一、御居間書院御規式中、山城守・圖書上之間に伺公之事。

一、松原彌一右衞門江、手傳御用相勤候に付拜領物被仰付候段、若年寄方席において申渡、御目六御用人可相勤候事。

一、御馬場宜敷段、山城守より犬千代丸樣江申上候はゞ、御馬場江御出、御馬見處江被爲入。追付相公樣江も申上、御馬見處江可被爲入候事。

一、山城守・圖書御馬場ゟ罷出可申事。

一、御馬役高桑五郎兵衛・篠井善太夫同道に而罷出、御馬被爲召候樣申上候はゞ、犬千代丸樣御馬見處より御出可被爲召候事。

一、篠井善太夫幷高桑五郎兵衛罷出、御馬被爲召候節、御繮五郎兵衛指上可申事。

一、右相濟、犬千代丸樣、重而御馬見處ゟ被爲入、御前ゟ御出被遊、相公樣御手自御熨斗被進、御頂戴之事。

一、篠井善太夫幷高桑五郎兵衛・有田昌平ゟ、御乘馬初御用相勤候付拜領物被仰付候段、若年寄方席において申渡、御目六御用人可相渡候事。

但、御中間小頭以下ゟ被下物之儀、御用人可申渡候事。

一、御具足者干鯛一箱御添、於御次山崎勘左衛門ゟ御渡被進候事。

一、犬千代丸樣より段々之御禮、成瀨主稅等內を以可被仰上候事。

一、山城守・圖書ゟ、於席御兩殿樣御兼合に而御吸物・御酒被下之、かよひ坊主之事。

一、御近習頭分以上幷御用人、且又犬千代丸樣御附頭分以上ゟ、御次において御吸物・御酒可被下候事。

一、吉田權平・松原彌一右衛門ゟ、長るろり之間御屛風圍に而、御吸物・御酒可被下候事。

一、篠井善太夫并御馬役等、右同處御屛風圍に御吸物・御酒可被下之候事。

但、右御祝都而御兩殿樣御兼合に而被下候事。

三　月

三月十三日。前田齊泰就封の暇を受く。

〔溫敬公記史料〕

三月十三日。將軍遣土井大炊頭賜休暇。前將軍及世子遣牧野備前守來。老夫人遣水野佐渡守來。贈物。

三月十五日。前田齊泰登營して就封の辭見す。

〔溫敬公記史料〕

三月十五日。登城謝之。橫山山城守・前田圖書謁將軍。

〔續德川實紀〕

三月十五日、松平加賀守・松平三河守・南部信濃守はじめ、就封のいとまたまはるもの五人。加賀守・三河守は御鷹・馬を下さる。

三月廿一日。前田齊泰夫人江戶城西丸に登る。

〔見聞袋群斗記〕
三月廿一日、溶姫君様御登城之節、犬千代丸様・喬松丸殿御二方御同伴、西丸大御所様御座所大奥ゟ御登城なり。犬千代丸様三度目、喬松丸殿には初てなり。
〔温敬公記史料〕
三月廿一日。夫人氏省前將軍于西城。

三月廿一日。幕府、江戸城西丸普請御用に當れる前田齊泰の家臣に物を賜ふ。

〔御年表〕
同十一年三月廿一日、西丸御普請御手傳御用相勤候御家來、御城へ御呼出拜領物被仰付左之通。

在金澤 奥村丹後守
白銀百枚・御時服拾宛
但、在金澤之人には名代に而拜戴也。
横山山城守
白銀百枚・御時服六宛
前田圖書
在金澤 前田萬之助

同　中川八郎右衛門

白銀五拾枚・御時服五宛

同　石野右近
同　遠藤數馬
同　前田主馬

白銀五拾枚・御時服四宛

不破紋左衛門
本保平太夫
在金澤　林武左衛門
同　山崎守衛
同　渡邊新藏

白銀三拾枚・御時服三宛

同　吉川昌九郎
同　西村與三男
同　鈴木清之丞
同　堀學之丞
同　小川友之助
永井廉之助

在金澤　服部信藏
在大坂　和田七之助

三月廿二日。前田齊泰歸國に付江戶出發の期を定む。

〔成瀨正敦日記〕

三月廿二日

一、今日左之通方々樣江以御附々呼立申上談る。

當春御歸國、來月十八日御發駕、東海道通り御通行、五月六日金澤御着可被成旨被仰出候。此段可被申上候事。

三月廿二日。越中に於ける百姓の逃亡者の件を議す。

（天保十年三月廿一日の條參照）

〔本多政和覺書〕

三月廿二日

一、出席前二口件作罷越、逢度旨に付逢候處、先達而以來申聞候走り人之儀又々申聞。當時所々に人を出し走り人指押候樣子。右に付窮民彌致方無之、越中川上に餓死仕候者も有之體。何分本江付走り人無之樣御仕法有之度、右に付而は先達而以來申聞候作人高被仰付候より外有之間敷旨等、段々申聞。且御郡方十村手代に高給銀とらせ候と之風聞有之。是等甚不

宜、下々難儀之筋に候段等申聞。將又四十萬村百何十軒程之處、七十軒餘賣家有之趣等をも申聞。

右賣家直段付出之事。

一、御横目後藤瀨兵衞別席に而申聞候は、御領國中走り人多有之樣子風聞有之に付、御鳥見へ申渡爲承候處、越中之分は別紙之通御座候。去々年暮より去年江懸候而は千人許も有之、夫とは少き旨。右に付而作方差支候儀は無之體。全體風聞程には無之旨等段々申聞、別紙小紙出之候事。

越中三御郡走人

新川郡	八十八人	
射水郡	九十八人	内二人女
礪波郡	二百十九人	内三人女

〆四百五人

三月。越中產五ヶ中折の專賣問屋を廢し平賣を許す。

〔御郡典〕

五ヶ山出來之中折紙、去暮城端之外賣捌方指留置候得共、此節詮議之趣有之、平賣指解候條、

望人代銀引替に而、福光幷當町において相渡候條、此段夫々可被申渡候。且直段之儀は、來月より代銀百目に付一匁宛月々增直段相懸り候。買受候者賣捌方も右に准じ、一割口錢之外高利不取請樣、此段可被申渡候、以上。

三　月　　　　　　　　　　　　御算用場

槻尾甚七郎殿

四月六日。前田齊泰、江戶城に登る際その玄關前に挾箱一個を伴ふことを許さる。

天保十二年七月廿七日の條參照

〔成瀨正敦日記〕

四月七日

一、御玄關前へ御挾箱一爲御持之儀、御先例も有之に付、先達而より御願置之趣も有之候所、昨夕水野越前守殿聞番御呼立、御書取を以御達有之候事。

一、右に付御禮勤、今朝御伺之通、井伊殿・御老中方御直勤之旨御指圖之段、聞番より申上候。右に付八ッ時之御供揃に而御出之儀被仰出、御近習頭ゟ申談。

〔温敬公記史料〕

四月七日。有旨許携挾箱一隻於大廳事前。復享保以前例也。

四月九日。加賀藩の醫藤井方亭の次男三郎、暦編制の爲幕府に徵さる。

〔近敎日記〕

四月九日

一、昨日御用番水野越前守殿江聞番御呼立、左之通御書取御達之事。

御名江

御名 醫師方亭次男

藤井三郎

右當分暦作御用出役相勤候樣可被申付候。尤天文方澁川助左衞門可被承合候。

四月十八日。前田齊泰江戸を發して歸封の途に就く。

〔東海道御歸國御用留〕

十七御泊附

江戸 高輪御小休 三里 品川御中休 一里廿五町計 大森御小休 一里十一町計 川崎御小休 二里十八町 神奈川御泊 〆八里十八町

神奈川一里九町 程ケ谷御小休 二里九町 戸塚御中休 一里三十町 藤澤御泊 〆五里十二町

藤澤二里四町計 南郷御小休 二里四町計 大磯御中休 二里計 梅澤御小休 二里計 小田原御泊 〆八里八町

小田原二里　湯本御小休二里八町　箱根御中休一里二十町　山中御小休二里十六町　三嶋御泊　〆八里八町

三嶋一里十八町　沼津御小休一里十八町　原御小休一里十八町　柏原御小休一里廿四町　吉原御中休一里十八町　岩淵村御小休二里廿六町

由比御泊　〆十里十四町

由比二里十六町　興津御小休一里三町　江尻御小休二里廿七町　府中御中休二里十八町　宇都谷御小休一里　岡部御泊　〆九里廿八町

岡部二里廿三町　三軒家御小休一里十五町　嶋田御小休一里　金谷御中休一里廿九町　日坂御小休二里十一町　掛川御泊　〆九里六町

掛川二里十六町　袋井御小休一里十八町　見付御中休二里四町　池田宿御小休二里十四町　濱松御泊　〆八里十六町

濱松二里三十町　舞坂御小休五十町　あら井御中休一里廿六町　白須賀御小休一里十六町　二タ川御小休一里十八町　吉田御泊　〆八里三十二町

吉田一里十八町　稲村御小休一里二十町　赤坂御小休二里九町　藤川御中休一里十八町　岡崎御小休二里　大濱御小休一里三十町　池鯉鮒御泊　〆十里廿三町

池鯉鮒二里三十町　鳴海御泊　〆二里三十町

鳴海一里十八町　宮御小休一里十八町　名古屋御小休一里十八町　清洲御中休一里十八町　稲葉御小休二里十八町　起御泊　〆十一

里十二町

起二里十八町 洲俣御小休二里四町 大垣御中休二里十八町 垂井御小休一里十八町 關ヶ原御小休二里 柏原御泊 〆十里廿二町

柏原一里十八町 醒ヶ井御小休二里 摺針峠御小休二里餘 米原御中休二里十八町 長濱御小休一里廿七町 速水村御小休一里廿七町 木本御泊 〆十一里十八町餘

木本二里十八町 柳ヶ瀬御小休二里計 椿市峠御小休一里計 中河内御中休一里十八町 栃木峠御小休一里十八町 板取御小休二里 今庄御泊 〆十里十八町

今庄二里 鯖波御小休三里 府中御泊 〆五里

府中三里 淺水御小休二里 福井御中休二里 森田御小休一里十八町 長崎御小休二里十八町 金津御泊 〆十一里

金津一里十八町 細呂木御小休二里 大聖寺御中休二里 動橋御小休二里 今江御小休一里 小松御泊 〆八里十八町

小松一里 寺井御小休二里十八町 福留御小休一里十八町 松任御中休一里八町 野々市御小休一里 金澤 〆七里八町

已上

御行列相建候ヶ所

品川 川崎 神奈川 程ヶ谷 戸塚 藤澤

平塚 大磯 小田原 箱根 三嶋 沼津

原　吉原　蒲原　由比　興津　江尻
府中　丸子　岡部　藤枝　嶋田　金谷
日坂　掛川　袋井　見付　濱松　舞坂
荒井　白須賀　二タ川　吉田　御油　赤坂
藤川　岡崎　池鯉鮒　鳴海　宮　名古屋
清洲　稲葉　萩原　起　洲俣　大垣
垂井　關ヶ原　今須　柏原　醒ヶ井　番場
鳥居本　米原　長濱　木本　柳ヶ瀬　板取
今庄　府中　鯖江　福井　舟橋　金津
大聖寺　小松　松任

御行列相建不申所々

椿市　中河内　湯尾　鯖波　脇本　今宿
水落　淺水　長崎　細呂木　立花　動橋
月津　寺井　水嶋　粟生　柏野　野々市

右宿々幷此外宿に而も、御泊・御中休に相成候得ば御行列立可申筈に候事。

一、箱根　荒井　柳ヶ瀬　大聖寺

右四ヶ所御關所御行列相建申候。箱根并荒井・大聖寺御關所騎馬御供之面々笠取、騎馬之儘御供仕可申候。非番之面々笠取、下り立罷通り可申候。尤御行列前御供之面々并末々まで、笠取罷通可申事。

一、御發駕之節於御途中、日光御門跡并御三家樣御出合被遊候はゞ、御先々より段々笠取蹲踞可仕候。騎馬之面々下り立蹲踞仕、自分之鑓伏させ可申候。尤御先より段々御跡江通達可仕候。横通りより御向被成候はゞ、其所押披き蹲踞仕、早速御前後へ通達可仕候。

一、御一門樣方江御出合之節は、御先より笠取、騎馬之面々下り立不及蹲踞、行成に罷通可申候。

一、御前後罷越候人々も、右之御方々樣江は蹲踞可仕候事。

子　三　月

御行列奉行

御　横　目

〔御家老方等〕

四月十八日

一、相公樣江今日御發駕に付御機嫌相窺候處、追付御意有之事。御近習頭を以申上る。

一、御住居ゟ罷出、御發駕之恐悦久留孫太夫を以申上る。
一、喬松丸殿ゟ御廣式ゟ罷出、永原貢を以申上候事。
一、退出より直に御居宅ゟ罷出、永原五郎左衛門を以申上る。
一、筑前守様・喬松丸殿御下屋敷迄御見送御出被遊候事。
一、各御居間書院ゟ被爲召候節、御居間書院四之間御通に而出雲守様御附使者御通懸之事。
一、眞龍院様御附使者永原貢、各被爲召候前に御居間書院に而御直答有之事。

〔見聞袋群斗記〕

四月十八日、江戸表御發駕。今度下街道越後山之下指支、東海道御通行、同五月六日金澤御着城。

〔溫敬公記史料〕

四月十八日、駕發江戸。經東海道。五月六日到于金澤。扈從老臣横山山城守・前田圖書。

四月廿二日。奥村丹後守、非人小屋の名義に關する意見を前田美作守に與ふ。

〔袖裏見聞錄〕

非人小屋作法向等、何か混雜に成居候付而、御僉議之上、當二月御馬廻頭之內篠島權之助儀、

右小屋御用主付被仰付、彼是僉議有之内、非人小屋と申名目當り不申樣に候間、唱替候樣可被仰付哉之旨等、御用番へ相達候由。然處右名目之儀、寛政之頃にも僉議有之、其儘に成居候儀、故河内守筆記に有之趣、兼而作州（孝本）迄榮實はなしいたし候儀有之所、當月作州御用番に付右之委曲等に付、左之通調、四月廿二日達之。

寛政六年河内守尙寛筆記之内、非人小屋之名義不當、貧人小屋之誤りにもや抔と、去年郡奉行・御算用場奉行より段々存寄之趣申出候。愚考非人小屋之名甚古し。松雲院樣之御明英なる、名不當して其儘に可被成置儀にて無之。因而思得たり。易水地比卦六三比之匪人と。匪は非也。此爻之義鰥寡孤獨に當らん。非人小屋之名是なるべしと思ひ、同席中一二之同志に語るに、皆點頭せり。故に御前へも申上候也。（甲亥三月二十二日書之。）

故河内守記置候趣右之通に御座候。然處貝原氏之和爾雅に、今俗稱乞人曰貧人。稱非人者非也と有之。前文郡奉行等は是等之說により候儀にも候哉、近年富田氏之三州志にも、非人之非は貧之誤歟と疑之趣を筆書有之候。（又一說には、非は悲にて、悲田人之中畧なるべきかと申事も有之候。）貝原抔之說も有之候へば浮たる事にてはある間敷樣にも被存候故、猶又相考候處、佩文韻府にも非人之字は出候へども、其引書は莊子田子方之篇の、孔子見老聃。老聃新沐。（或作浴）方將被髮而乾。慹然似非人と申事を引有之候。是はたゞ形容之人に似ざるを申たるものにて、乞食躰のものの事には當り不申

歟。但莊子諸義抔には、非人猶木偶人と有之、訓點も非人と音にてよませ有之候。此趣に候へば、乞食と常人とは形容之かはり候所を以非人と申とも可申候哉。乍去是は畢竟牽强に屬し可申候歟。其外伊藤氏之名物六帖等をしらべ候へども、非人之稱見當り不申候。然者唐山にて乞食を非人と申義無之段、大方治定たるべく候。然處合類節用集に、非人正曰人非人。出內典と有之候。內典とは佛經を申候。佛經之非人と申は、餓鬼・畜生等之類を申候哉。然者乞食を餓鬼と見て此稱有之候哉。日本にて通用之詞共は、佛家より出候もの共多く有之候間、此說之方可然樣にも相聞え申候。殊に今之世御國のみならず江戶表等にても此稱有之躰。且又和漢三才圖會にも、攝州天王寺庄之悲田院。洛外悲田寺。以爲乞食在塀。其魁首爲長吏。郭外者爲非人と有之。是も定而相違ある間敷、殊更松雲院樣等も其儘に被成置候事に候へば、猶此上非人之稱彌不當由慥成證據相しれ不申內は、前文水地比之卦之事抔は難捨樣に御座候。前文書抜候に付、右之趣附記仕候事。

右之通に候處、猶一つの鄙見有之候。皮多・藤內等之類、平人と合火不仕もの共の儀、俗傳に天子へ弓を引候ものゝ子孫之由申候。此段故可有之事に候。續日本後紀等に、橘速勢之事を非人速勢と有之。是は謀反之罪に依て本姓を除かれ、非人之姓を賜ふと有之候。速勢は子に至りて免されて本姓を賜ひ候へども、速勢の外にもか樣之類多く有之候へば、右天子に弓

を引候ものと申義は、必是等に本きたる事と被存候。但其内皮多等は常々汚穢之事に預り候もの故、日本之風に而其穢を忌避候而、火をも同敷せざる事と被存、是等は本之意味少違可申様にも被存候。扨右はすべて彼筋違と申もの共之事にて、乞食とは別之ものに候所、中古より筋違と乞食と混じ來り候躰に而、荻生氏之政談にも、乞食・非人といふものは、元來種姓に替りなく、平人より成ものなり。然るに火を一つにせず、團左衛門の手下にする事は、元來癩病人より起るなり。癩病人を世の習はしにて、三寶に捨られたるものとて、京都にて是を悲田院に指置、火を一つにせざりしより起れり。當代又乞食の役として、刑罰人・倒者・川流等の者を取扱はせ、平人と火を一つにせぬものといふより、別境界に隔り、乞食の仲作にはいか成事あるも平人よりは全くしらぬ也と有之候。文畧して擧之。乞食をかたゐと申候處、癩病人をもかたゐと申候。是は乞食をかたゐといふよりうつれる也と、本居氏申置候。是も考合せになるべき事に候。御國にても此二品相混じ、乞食に死人之類を取扱はせ、又は非人頭と唱ふるもの皮多等之裁許をもする樣に成來り候哉。此類之名目等、町奉行抔へ御尋有之候はゞわかり可申候。合火之定等混居候品も有之躰に候間、か樣之序に一と御僉議有之たき事か。是等之譯にて、非人といふことも筋違之もの共之名目之所、紛れ候て乞食をも非人と唱へ來り、御救小屋之名目にさへ成來り候譯に候や。先代樣にも萬事御吟味有之御事には候へども、御用多に而御手之屆かせられざるに付て、思召は有之ながら其儘に被成置候品も多き御樣子に候へば、是等も其事たるべき哉。又は詞は不當ながら、當世なべて之稱

號故、先其儘に被成置候哉。其段も難奉計。前に記候貝原抔之說も有之、又乞食を餓鬼と見候事にいたし候へば、不仁なる事。又此段之意之ごとく筋違之ものゝ稱に致候ても、乞食には當申さゞる事。又前文之如く比之卦之辭により候事にいたし候ても、爻之辭之意義全く當り兼候樣にも被存、全躰非人之二字不好候文字故、やゝもいたし候へば御役人之不審も起り候事に候間、右等之意味を以猶又博識之ものに爲御考、彌不當之儀に候はゞ、非人之名目御省有之候ても苦かる間敷筋之樣にも被存候。此度は辟見のみ故二段に記置候事。

子　四　月

五月六日。前田齊泰金澤城に着す。

〔官私隨筆〕

五月六日

一、江戶表前月十八日御發駕、東海道通御通行、今六日夜前は小松御泊御着之筈に付、四時前登城。組一統揃は五半時之由。

一、野々市御發駕之附人來り候上、靜に橋爪へ罷出居候處、八時御着城。如例御意等替儀無之。

一、御着之上、追付松之間二之間に而以杉浦庫太御祝詞申上之。且又先頃喬松丸殿西丸大奥

へ御登城、御目見等御首尾能被仰上候御祝詞申上之。

〔御家老方諸留帳〕

五月六日

一、諸役人五半時揃各定刻より出席。

一、御着城八時、追付御居間書院被爲召、丹州一切、播州等一切、萬之助・八郎右衛門・外記一切。睡鷗は病氣に而登城無之。右相濟、姫君様御使者御返答相濟、御歸國御禮之御使伊藤主馬爲被召、御意有之。伺公萬之助・拙者・將監・外記也。

一、御着城之恐悦、幷喬松丸様西丸大奥江御登城之恐悦、一列に而被申上、追付御意有之。

一、御用番座江出、如例各恐悦申演候事。

一、山城守・圖書御供に而歸着之事。執筆狩谷利平・坊主辻宗晴御供に而歸る。

一、退出八半時過、直に二ノ御丸御廣式幷金谷御殿江、萬之助同道に而罷出、今日益御機嫌能御着城之恐悦申上。二ノ丸兼松左助、金谷金子勘兵衛也。追付御大慶思召候と之御意有之。

〔成瀬正敦日記〕

五月十五日

一、夜前九ッ半時頃、當六日出足輕中飛脚歩ゟ傳封到來之旨に而、坂井氏より之狀一封割場より迄越。右は同日益御機嫌克御着城被遊候旨、折紙に而申來候事。

本文は江戶にての記錄なり

五月十六日。前田齊泰、奧村丹後守に勝手方御用を命ず。

本文奧村丹後守榮實の事に係る

〔宮私隨筆〕

五月十四日

一、以權太郞被召候付、御用之間へ罷出候處、氣候之儀等御意有之。御請申上候處、御勝手方之儀御算用場奉行と御勝手方御役人と全く同意には無之躰。夫に付いづれ可然と之儀御前にも御辨へ兼被遊候へども、御勝手方之人々申上候趣穩にて可宜樣に被思召候。然處又三郞等は御算用場奉行と同意之躰に付、御趣意通を以相勤候處如何可有之哉と被思召候。夫に付此間丹後守より御用番迄內々申入置候趣も被聞召候へども、老巧之儀にも有之、御算用場奉行等心服方も可宜候間、御勝手方御用可被仰付と被思召候。依而先御內意被仰聞候由段々御懇之御意共有之に付、先以段々御懇至極、過分之御意共身分に取誠以難有仕合奉存候。先達而加樣之御內意有之時分も、內存之趣共申上、委曲被知召候上之御儀に御座候處、又々か樣に申上候段奉恐入候へども、元來被知召候通不調法之上、御勝手方御用之儀抔は別而不案內至極、何存じ辨へ候筋も無御座候。其上先達而申上候通、御政事向之儀何歟も私棟取相勤候

又三郞は長連弘

樣に世間にも存候哉、御役人等申渡候筋不出來成儀共、皆私所爲之樣に申成、不心服之躰に御座候間、此上又御勝手方御用抔被仰付候而は、彌不心服にも可相成哉。左候へば大切之儀、奉恐入候間、何卒今一遍御思慮も被爲在候樣仕度旨申上候處、申上候趣は尤至極に被思召候へども、世間に色々申候段は當時とても同樣之儀、却而御勝手方御用等をも相勤候へば、其實顯れ候而可宜候間、御請申上候樣にと之趣段々御意有之に付、此上猶御斷申上候段は奉恐入儀。乍去御爲不宜と奉存候に、不都束に御請申上候段も又恐入候間、不苦被爲思召候はゞ、退候上とくと相考、明日にも御請可奉申上旨申上候處、其儀は如何樣ともと御意に付、難有仕合奉存旨申上、猶又御咄之品も有之、御請申上退去。

〔官私隨筆〕

五月十五日

一、出仕濟、城州へ別席にて逢候而、昨日御意之趣に付罷歸再往相考候へども、御請申上候儀は幾重にも心に落付不申候間、御用捨奉願趣、左之三條を以申述之。尤御直に可申上筋にも可有之候へども、ヶ條中恐入候儀等も有之故、城州迄申入候間、宜御申上候樣にと之趣申入候。

一、第一御財用之儀不案內、其上近來氣薄に相成候事。

一、一統彌不心服に成可申哉之事。

附、昨日御意之事。

一、御人選之道此末心當無之事。

右之内二ヶ條目は昨日申上候趣に付、御勝手方御用等をも相勤候はゞ、却而其實顯れ候而可宜旨過分之御意も御座候へども、萬事不行屆之儀に候へば、左樣には參り申間敷、甚不安心之旨。又三ヶ條目は、御財用之本は御人選に可有之、御人選之儀は思召等又は御用番方に有之儀には候へども、役先之諸役人人選之儀は心得可罷在處、御役人等を不存候故、此末之選擧出來不申趣也。

扨右之通のみ申上候而は、餘り手筒に可有之哉。夫に付而右等之趣をも御承知被爲在候而、押而相勤候樣にと之御趣意に御座候はゞ、其上强而御斷も申上兼候儀に御座候。もし左樣之御樣子に候はゞ、猶又申上度儀共有之旨申達、左之五條之趣申入候。

一、學校方御用之事。

一、御融通方心得可仕に付而は御省略向之事。

一、此儘之御仕向に而參り候共、品により御沿革之差別は可有御座事。

一、下を先にし御上を後に可仕心得之事。

一、御算用場奉行御勝手方之人々一致仕間敷、いづれか御取替之事。

右初ヶ條は、前段之覺書に有之通、近年氣薄に相成、御用多之時分抔失念等之品も有之、此上又御勝手方御用をも被仰付候而は、彌以繁多に相成、迚も相勤得申間敷候間、學校方御用は御免被成下候仕度趣也。

二ヶ條目は、昨日御意之通に候へば、御融通之方をも相心得可申、然ども御省略は尤成丈可被仰付儀歟と被奉存に付、其御樣子伺置度趣。

三ヶ條目は、御改革抔与申儀は不容易儀故、先是迄之御姿に被仰付置思召之御樣子に候へども、其內御沿革之品は可有御座、此段も思召相伺度旨。

四ヶ條目、御上は次にいたし下を先にいたし度。依而は三年五年に而御勝手御取直之所へ至候儀は有之間敷、此段も其心得相伺置度事。

五ヶ條目は、昨夕渡邊新藏自分に相招、御算奉并御勝手方同役之樣子等內々相尋候處、此ゝゝに而相和し候儀は中々六かしかるべき樣に被考。依而は兩役之內、いづれか御指かへ等可被爲在哉。愚意に而は、當時幸御馬廻頭欠も有之候間、幸主馬儀右代りに被仰付候而如何可有之哉。其外御勝手方之內にても、林武左衞門御免被仰付候而、餘人御僉議有之被指加候樣にも可有御座哉。是等尤御僉議次第之儀ながら、愚意之通申上候。此末御僉議無之而は、當

幸主馬は誤記なるべし

年牛知御返し等之僉議も精誠之所へは參り申間敷趣。

右等之趣城州へ申入候處、即播州等へも示談有之候へ共、事長之儀にも候間御前へ罷出申上可然旨。依而城州御前へ被罷出、大意可被申上旨に而、御前を被願被申上候由。依而善右衛門を以御透へ罷出申度旨申上候處、追付以牽次郎被召候付罷出、初三條之趣等申上、何卒御用捨被成下候樣申上候處、右等之所は御覺悟に而被仰付候間、御請可申上旨御意に付、此上又々申上候趣は恐入候間、左候はゞ猶又申上度趣御座候段申上、後之五ケ條之趣共段々申上候處一々尤に被思召候、都而其心組に而御請可申上旨御意に付、段々之御意之趣共難有仕合奉恐入候。此上申上候段は難仕奉存候間、左候はゞ御請可奉申上候。御請は申上候へども、中々參り申間敷候間、此段は兼而左樣に被爲思召候樣奉願旨申上候處、先以御請申上御喜悅之旨御意に付、應じ及御請、猶又御はなし等有之、御請申上退去。

〔宮私隨筆〕

五月十六日

一、後刻御前へ被召候御樣子之旨御用番演述。

一、四半時過寄居候樣にと之儀に付、御居間書院御廊下へ參候處、最初に自分被召由御用番被申聞。

一、追付御出、丹後守罷出御禮仕、御敷居之內二疊目迄進出候處、近うと御意、三尺進出候處、御手前儀勝手方用事申付候、申談可被相勤旨御意。奉畏候、先以重き御用被仰付難有仕合奉存候。行届不申候へども何分にも申談可相勤旨申上、退去。

五月廿四日。前田齊泰學校に臨む。

〔官私隨筆〕

五月廿四日

一、御歸城後今日初而學校へ御出、御供揃九半時に付、九時過各追々上下に改被參。自分は御勝手方御用有之、一足跡より參る。

但、去年御修補後初而御出也。學校今日一統上下着用。

一、八時前歟御出、御上段へ被爲入。

一、伺公等宜旨御横目より播磨守へ相達、播磨守より申上。

一、自分初御出之上一先いつも之講釋之節之伺公所に暫罷在、右申上り候上御廣間之內へ進み、繪圖之所に伺公。

一、追付御襖明、御上段を御降り、御廣間之內御氈を敷置候所へ御着座。御見臺御近習之內より上之。

一、講師督學渡邊兵太夫大學三綱領講之。助教以下教官之人々幷入學生一統聽聞。

一、講釋相濟、兵太夫御禮仕候上、御上段へ御上り被遊。其時兵太夫座を立、御正面繪圖之所に而御禮、脇指不取播磨守も大方一度に座を立、御取合之座ゟ被出、大儀与御意。兵太夫筋違候而御請申述、蒙御意難有仕合奉存旨播磨守御取合申上。其時御襖立、其以後兩人共退座。

一、經武館稽古不指支旨申上り候後、右御出之御道筋之所へ如例伺公に出。

但、今日吉田權平方不時的相願、稽古有之御覽也。

一、稽古人等凡て常服也。御役人幷御供人は其儘上下。

一、射場之伺公等替る儀無之。

一、稽古人十八人充二切御覽。其後御戻り、御迯り如最前。

一、右御戻り八つ半也。

五月廿七日。前田齊泰初めて翁の能を演ず。

［官私隨筆］

五月廿六日

一、明日御能被遊候付、拜見被仰付旨被仰出由、御用番演述御禮申述。

但、去年鶫翁御傳授被遊、於江戸御披有之に付、眞龍院樣へも被入御覽度。夫に付而は御

時節柄に付、此間御用番迄御内々御尋之趣有之、其上に而御治定也。

五月廿七日

一、今朝六時頃上下に而登城。

一、御能六つ過初る。

一、翁・高砂幷花筐被遊。

一、三番濟御中入あり。

一、御中入之内に御膳奉行永原亥之助罷出、御吸物御下被下由演述。何も列座拜聽。

一、安宅濟、右御吸物鯛・御酒・御取肴松之間二之間に而頂戴。畢而以山口新左衛門御禮申上候。

一、暮頃御能相濟候付、何も一列以牽次郎、御能拜見其上御吸物等頂戴之御禮申上之。丹後守・山城守居殘り、せがれ共御能拜見、其上御吸物等頂戴被仰付、難有仕合奉存旨申述候。

一、暮六時前退出。

五月。虫害の再生を慮り豫め驅除の方法を示す。

〔司農典〕

立毛虫附可申哉与、防方豫而手配致置可申旨、兼々申渡置候通に候。猶亦今般虫除之法遂穿鑿、荒増相記別紙相渡候條、其許中は不及申に、先般取極候虫除勢子人、且一村々々江配當

いたし小前夫々ゑは、村役人幷勢子人より得与申教、暫時も不致油斷心得申樣、急速夫々申渡可致配當候、以上。

五　月　　　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中等

稻虫をさる法

うんか虫こぬか虫ともいふ。者五月半頃より夏土用過迄に生ず。其頃は暑薄く或は夕立して蒸し、或は打曇りたる氣色續きし折生ずるものなり。其節稻株を振ひ見れば、白き粉の如きもの一株に四つ・五つ程落る。是うんか虫也。此虫土用過より盆前迄にぬけ替りて羽を生ず。羽を生じてはたやすく去盡し難し。故に早々油を用ひて取絶すべし。其時先田一反に鯨油三合程入るべし。氣候不順之年は虫五・六篇も生ずるものなれども、油三度も用れば、油氣失ぬ故に虫自ら絶るなり。

油の入樣は、前日田の草をさら〳〵と取、田草あれば其功なし。三・五日前に取たりとも又改て一篇可取。古水を落し、水下を留、畦一はいに水をたゝへ、晴天之日中に入べし。雨ふり又は曇りたる氣色は、水ひえ候て油ひろがらず、功薄し。晝四つ時より八つ半時迄之内、日勢強く田水湯之樣に成たる時をよしとす。先づ左に油壺を持、右に蜆貝抔の小さき匕を以、一坪に一匕宛入て廻る。鶏の羽なれば一尺一滴宛落してよし。跡より竹杭歟藁の曲たる物を持て、油を散して稻の中へ入る樣にして行也。又跡より細き竹を持て、風上の方より稻を左右へ押倒し〳〵て、穗先へ逃上る虫を洗ひ落すべし。又跡より柄の長き藁箒にて稻の葉に水を懸て落殘りたる虫を洗ひ落す樣にすべし。終りて一

時程過て水を落し、又新しき水を入る也。（水を落せば、虫水下の田へ流れ入とも、死虫故障りなし。却て油氣により、半分は其田の虫を去、半分は屎と成也。又水を不落、乾く迄其儘置もよし。虫の爲又屎と成なり。）三・四日過て未だ殘りあらば、又如斯すべし。二三度すればうんか虫の類は大概除くもの也。（一枚の田の中に虫多き所は、別に度々油を入て厚く世話すべし。又油を不入田より虫移る事有。境目四・五株に毎日油を入可防。）

穗を孕みては、人多く田の中へ入込をよしとする故、譬ば、此田に油五合入たらば宜からむと思はゞ、水口へ先一合程入て、追々水をし懸、水一ぱいに滿る頃油も隅迄行渡る樣にすべし。

穗を孕みても虫多き時は、先水をたゝへ、竹の筒に小さき穴を明け栓をさし油を入、田の中へ入て栓を拔、程能油を入て先へ行、跡より藁箒にて油を散す。又其跡より數十人立並び、右に椀を持、左に輕く稻株を持て、株の中へ油の入樣に椀にて水を懸て行べし。又數十人、右に二尺程の竹を持て、左に輕く株を持て、破竹にて痛まぬ樣にたゝきて、虫を水中に落す。扨て其明日見て殘りあらば、古水を替て又前の如くすべし。四・五度もせざれば難去盡。虫多ければ一反に二・三升を四・五度に入、少なければ三度に一升も可入。

又鯨油七合を鍋にて焚、能涌たる時おろして少しいきりをぬき、酢を三合入能く交ぜ、前の如く竹の筒に入て田にそゝぐべし。跡より三・四尺の葉箍を持て、稻を三・四籌宛拂、水仕替べし。尤天氣快晴の日中にすべし。無左而は功少し。

旱りして水氣なく、田の干割たる時は、一反に油一升の割にて水に交ぜ、手桶に入れ左に持、右に小さき藁箒を持、夫にしたたして稲株に打込〳〵行べし。稲乃亂れたる時は、先へ一人手桶を持て稲をわけ行べし。跡より其桶に箒をひたして如右すべし。尙又一兩日見合て、又如斯致してよし。

虫生じたると見ば早く鯨油を用ひて可取絶。後れては油も餘計に度々用ひざれば難退。其上油を入る事遲ければ、穗の出むとする頃入れたる油屎となりて、稲若桊する也。其天氣寒ければすくみて穗十分に出兼、實入悪敷成也。又出穗に至りて油を用ひては、人多入込稲をもみ花を落すに至る。兎角虫の小さく稲の本孕みせさるに可取絶。

虫羽を生じては容易く水の中へ不落、夜々田毎畦毎に篝火を燒立べし。

油は鯨油を最上とす。其外河豚油・胡猾油・鱒の油もよく、菜種油も倍して用ゆれはよし。綿種油の打おろしとて、絞りたる儘黑色成油もよし。

虫は天災なれども猶人力を以可防。假令虫の喰ば迚、此多き稲株を何と可成迚、荒起より草取迄之世話を無にして捨置は、實に無勿躰事也。いかにも勤めて如前法厚く世話すれば、夫程之驗し有事他に競べて可知。又捨置時は不實のみならず、餘の田の障りと成事なれば、相互に可助合事也。右除蝗錄等により虫を可去荒增を書記渡候間、尙亦國郡所に應じ工夫いた

し、兎角實入迄之間少も無油斷心懸、厚可致世話者也。

天保十一年庚子五月　改作奉行

六月五日。非人小屋に收容せらるゝ出牢者を別郭に置くことを定む。

〔毎日帳書抜〕

六月五日

一、非人小屋御救人之内、公事場等に而入牢、日數相立出牢申渡、又候非人小屋へ引渡候得者、重而於非人小屋罪之輕重見計、縮所入又は徘徊差留、追而差宥候振合に候得共、不縮之趣も有之候間、以後は都而出牢等之者は、小屋一郭別圍に仕、公事場等より引渡候上右小屋へ入置、相應之爲致産業、其内心底も改候者は、見計小屋出、或は並之御救人に可申渡旨等、篠島權之助紙面出候付、僉議之通相心得候樣可申渡旨窺、伺之通被仰出。

六月十八日。前田慶寧の本鄕邸内に於ける居館上棟式を行ふ。

〔成瀨正敦日記〕

六月十八日

一、今日御規式揃刻限六半時、布上下・染かたびら着用之筈に付、同刻頃より御次へ罷出居、御規式初り前に、御普請所へ御庭口より相廻り候事。

一、御飾之鯉今朝御臺所より出候付、遂見分候事。

一、五ッ時過より御規式相初り、四ッ時過御都合能相濟、詰合之所へ祭主持參、御土器に而御神酒頂戴、給仕飾役いたし、自分より初、土器は人々也。御作事奉行より御大工頭・御歩横目には、又別飾にて頂戴之事。右相濟、蒔餅も見物。夫より御飾之所など皆々拜見いたし引取候事。

天保十年八月一條參照

六月廿二日。天德院開山泉滴和尚の二百回忌法會大海供養を營む。

〔上貫屋日家榮帳〕

六月廿二日。天德院法事、御出家様五・六百人餘り、今町下にかりやたち、お經すむなり、そなへ物手船に積入、船共燒捨候。濱中者茶やばかり。參詣之人々何十萬やら數不知。

六月廿五日。前田齊泰學校に臨む。

〔溫敬公記史料〕

六月廿五日臨學校。

六月廿六日。前田齊泰、祖先の法會を一朝執行に復すべきことを告ぐ。

〔御親翰帳之内拔書〕

當七月とは前田齊廣の十七回忌法會をいふ

六月廿六日

今度格別に位階蒙仰候儀、誠以難有儀には候へ共、不徳之此方何之功も無之して、先例より早く昇進被仰付候儀、深く恐入次第に候。是全く先祖代々之餘徳と存事に候。夫而已ならず、今太平之世に生、疊之上に座して三州を領し、子孫國家之繁榮なるも、單に國祖已來之武功代々之御仁徳により申事に候。然に右等に心もなく、此方身分結構被仰付候共、是は時勢と存じ、其所に安じ候時者、全く先祖代々之高恩をも令忘却候と申ものに候。されば先祖代々之祭祀は、於子孫は甚重き儀に候處、省略によつて二朝之法事も一朝と相成候儀は、不相當に存候。節儉省略と申も、加樣之儀手厚いたさん爲申付候儀歟と存候。已に年頭之作法者重き儀に候處、餘り輕候とて頭分獨禮可申付哉之僉議も有之候得共、半知中之儀に付是迄の通と申出候樣之儀も有之候。右年始作法よりも祭祀之方は重く、是よりして先きに改可申儀歟と存候。偖一朝之法事は裏方にも有之儀。代々之法事を裏方之法事と同樣に相成候も、餘り階級無之事と存候。其上外並之樣子も承り候に、歷代之法事は皆々手厚相聞、一朝抔と申儀あまり不承候。夫に當家代々之法事一朝と申儀、外聞も如何に候。往古は重く被仰付候儀。如何にも手重に申付度儀に候へ共、是は又時勢も違ひ可申、近例二朝之法事執行被仰付候例に申付度事に候。尤當七月迄之儀に而は無之、自今歷代之法事に限り候而者、右之通申付度

存寄に候。猶各了簡承り度候。裏方等法事・茶湯抔之儀は是迄之通り、其時節に應じ省略可有之儀は尤に候。又當時不一通勝手逼迫に候處、今般半知も返し遣候に付、彌此末遂節儉不申而は不相成儀に候處、右法事も如元相成候而は、萬端省略之障と相成、諸人心得も何となく相緩み可申儀に候へ共、右法事之儀は格別に存じ申出候儀に候へば、此方身分等之儀は、如何にも遂節儉可申覺悟に候。此段も先申聞置候間、此上儉約可申付筋、心付有之候はゞ僉議候而追々可被申聞候事。

六　月

六月廿二日。大小將原田又六郎知行を召放さる。

〔年代記〕

天保十年御大小將原田又六郎不埒有之、六月十八日出奔、連歸一類へ御預、於公事場御尋之上御知行被召放。

天保十一年原田又六郎於公事場御糺之上、六月廿二日不破彥三江御預け、御知行被召上、屋敷家御取上、財は被下、伊崎彥右衞門弟榮之助へ、原田故又右衞門爲名跡五百石之內三百石被下。

六月廿六日。高辻以長の臣長尾采女來りて助成を求む。

〔官私隨筆〕

六月廿六日

一、高辻殿御家來長尾采女作州方へ罷越、御助成金御賴之趣申聞候由、昨日作州被申聞、書取一册今日遠藤へ相渡僉議候樣申渡候。

六月廿九日

一、高辻殿ゟ之御振替方之儀、今日作州より伺、伺之通被仰出候由。

六月三十日

一、高辻殿御無心一件、伺之通被仰出候由作州演述。

六月廿八日。祠堂銀返還の方法を改む。

〔每日帳書拔〕

六月廿八日

一、祠堂銀之儀、是迄貸附有之分、去年迄之利足銀は御償御渡、當年より七朱に相改、元銀は來丑年より三十ヶ年賦、當七月より新に貸附之分は、前々之通二十ヶ年賦一歩之利足取立候樣、寺社奉行へ申渡候旨等一統申渡。

六月。諸士より借知の比率を改め又諸士の借財返辨の方法を定む。

〔御觸留〕

御勝手連々御難澁至極之處、近年凶作打續、其上品々無御據御物入相嵩、彌增御指支に付、天保八年より去年迄三ヶ年之間、御家中知行之內半知御借上、二百石以下之人々等、幷役料知之內も割合を以御借上被仰付、御用辨に相成、御喜悅被思召候。右之通相續過分に御借用之上故、當年之儀は本知全く可被返下思召に付、其よし被仰出、重々御詮議在之候得共、去年虫付難等不時成御物入共多、一入御指支にて思召通には難相成候。乍併先當年之處、天保元年以來之御借上高之通り、役料等之儀は同五年被仰出候通り、夫々別紙割合書之通御借上被成候。御家中之人々も難澁之事に候得者、可爲迷惑候得共、無據被仰出儀に候間、右之趣共相心得、御奉公等取續可申候。

一、御家中之人々上納銀等之儀、別紙之通り被仰出候。

右之通り可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配不相洩候樣可被申渡候、以上。

六　月　　　前　田　內　匠

諸方御土藏江幾口も致上納候分、今般打込、知行百石に付三十日充上納可仕候事。

但し、本文銀高より以下之分は、可爲是迄之通り候事。

一、會所銀之儀は御定之通り可致上納候事。

一、酉年七月以後、役向に付依願御貸渡之金銀返上方、追て申渡と在之分、知行百石に付二十目充之圖りを以、當子の年より御算用場へ上納可仕候事。

但し、緣組・養子入用、幷諸組支配用銀、且右に准じ御取扱方御貸渡、當七月一時返上申渡置有之分、尤其通りたるべき事。

一、半知中於江戶表別段依願拜借金罷在、一時返上申渡置在之分、當子の年より七ヶ年賦を以、諸方御土藏𛀁上納可仕候事。

但し、此外江戶會所御調達金之內借用返濟方、半知中元利御取替に相成居候分等、本文七ヶ年之口𛀁、元金幷當六月迄之利足金共打込、以後無利足返上可仕候事。

一、御普請會所等諸役所付之銀子、御家中之人々へ貸付在之分、不殘打込、知行百石に付二拾目充の圖りを以、當子の年より御算用場へ上納可仕候事。

一、聖堂銀・御次銀・祠堂銀返上方之儀は、重て可申渡候事。

一、去暮御家中一統𛀁御貸付銀之分は不及返上事。

一、御家中等去酉年六月より以前之借財は、當子年より五十ヶ年賦を以可及返濟候事。

一、去酉年正月より六月迄の買掛相淀置之分、當子年より十ヶ年賦を以相渡可申事。

一、百石に付草高　八石三斗二升五合　百石以下之分
一、同　八石七斗七升三合　百一石より百五十石迄
一、同　十石二斗三升四合　百六十石より二百石迄
一、同　十一石七斗　二百石より二百五十石迄
一、同　十三石一斗六升　二百六十石より二百九十石迄
一、同　十四石六斗二升　三百石より九百九十九石迄
一、同　十六石八斗七升　自分知千石より二千九百九十九石迄
一、同　十八石　自分知三千石より以上
但し年寄中・御家老中は百石に付二十五石宛
一、御歩並以上御切米御扶持方之人々、御知行に圖り前段之割合を以御借上之事。
一、隱居料も一統割合之通り御借上の事。
一、遠慮等被仰付置候人々ゟも、一統割合之通り御借上の事。
一、他國居住の人々も、一統割合の通御借上の事。
一、三の一被下置候人々は、御借上不被仰付、本知被下候上、一統割合之通り御借上被仰付候事。

一、亂心躰にて御知行被召放、御扶持方被下置候分、御借米不被仰付候事。

一、足輕・坊主・小者は御借米無之事。

御役料御借上之割合

料知高百石に付	七十石宛	自分知	千石以上
同	五十石宛	同	八百石以上
同	三十五石宛	同	六百五十石以上
同	二十五石宛	同	四百五十石以上
同	十五石宛	同	二百十石以上
同	七石宛	同	二百石以下之人々

一、頭分幷平士・坊主頭迄も、都而役料知之分者右割合を以御借上之事。

一、御射手・御異風料等も右割合を以御借上之事。

一、頭分手替足輕・小者、幷御郡奉行等被下足輕、都而五人之分は二人減少、三人以下は一人宛御減少被仰付、自然手替等揃不申而難相成時者、臨時御渡可有之事。

一、役料知御借上之分、都而是迄之通切手を以可指上事。以上。

〔觸留〕

今般御家中一統御借知被仰付候。依而百石に不滿知行之人々者不殘町藏入、其餘者都而御藏三ノ一・町藏三ノ二爲納候條、人々より百姓幷藏宿ゟ申渡候樣可被相心得候。村附・入所附等草案帳之通人別に爲指出、組切に被取集、各印形之紙面を以、來月十日迄に當場御借知方役所ゟ可指出候。

但、上高割合等之儀者、一統被仰渡人々承知之通に付、譯而不申達候。

一、舊宅之人々者、跡目被仰付候上一統之通御借知被仰付候。

一、御步並以上御切米・御扶持方被下候人々者、割合を以當暮渡りより可指出候。

右之趣被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。且又同役中傳達有之、落着より可被相返候。

右之外相洩候儀御借知方役所承り合候樣、是又可被申渡候、以上。

六月十二日　　　　御算用場

七月二日。天保八年以前町・在に貸渡したる米銀の返濟方を令す。

〔司農典〕

卷目、御算用場奉行ゟ

前々より去る酉年六月迄之內御貸渡之米銀、都而年賦返上相極居候分者、改而當子年より五十ケ年賦返上之事。

一、申年去作に付、酉年江懸、困窮之者爲御取扱与御貸渡之米銀は、被下切之事。
一、去申年暮より酉年九月迄之内、定式之外別段現銀幷延拂米代之分、被下切之事。
右町・在江御貸渡置之米・銀上納方、右之通被仰付候條、被得其意、夫々可被申渡候事。

庚子六月

去酉年以前町・在江御貸渡之米・銀上納方之儀に付、別紙御勝手方年寄中被相渡候に付、寫相越之候條、被得其意、夫々可被申渡候、以上。

七月二日　　御算用場

改作御奉行中

追而産物銀等諸役所附貸渡銀之分は、本文外に而、返上方追而可申渡候條、爲心得申達候、以上。

前々より去る酉年六月迄之内、御貸渡之米・銀上納方等之儀に付、別紙兩通御算用場より申談に付、寫相達之候條、得其意、取立方幷被下切に可相成口々、早速取調理可書出候。其上に而借用人手前申渡方可及指圖に候、以上。

子七月二日　　崎田達之助
　　　　　　　坂田良之助

追而本文書出方、改作所手合之分に候條、左様可相心得、先々無遅滞廻達、落着より可相返候、以上。

〔御郡典〕

巻目、御算用場奉行江

御家中之人々、去る酉年六月より以前之借財、當子年より五十ヶ年賦を以返濟、且酉年正月より六月迄之買懸り相淀置候分、當子年より十ヶ年賦を以相渡可申旨、今般御家中一統江申渡候條、銀主等其心得いたし候樣、遠所町方御郡方江可被申渡候事。

子七月

七月十二日。昨今兩日前田齊廣の十七回忌法會を天德院に執行す。

〔見聞袋群斗記〕

七月十一日・十二日御法會を天德院に行ひ、金龍院様十七年忌辰の爲にす。兩日とも御參詣ある。同日御赦等前々之通なり。

〔官私隨筆〕

七月十一日

一、金龍院樣御十七回御法事今明日御執行。自分は今日詰に付、提灯なしに長上下に而天德院へ罷越。

但、此度御格別之被仰出有之、兩日之御法事に成。頭分以上長上下着用、今日之詰自分幷播磨守・又三郎・八郎右衞門・式部也。

一、大藏少輔樣御代香之御使者、御家老野口岩佑相詰居候事。

一、例は御參詣前は禮之間之方に相詰候へども、此度は大結制中にて、僧數大勢にて狹く候付、はじめより御出之節之詰所八尺間緣頰中敷居之下に各列座、但御出以前は、御法事奉行は階之方に被在候。

一、甘露施食初り之所と濟際と、其後御參詣不指支由之趣と、三度言上有之由。

一、大音帶刀前之附人に而各伺公所へ罷出。

一、追付御參詣、午刻之御法事御聽聞也。

但、佛遺教經を遶行に而讀誦あり。

一、御法事濟御燒香被遊、追付御下向也。其時迄直に伺公所に着座。

一、右濟一遍引取候處、眞龍院樣御代香今日も有之由に付、禮之間之方伺公所へ罷出、追付濟。

自分は奥村丹後守榮實

〔官私隨筆〕

七月十二日

一、今日御法事に候へども、自分詰に而無之に付二御丸へ出席。御殿にて上下着用、九半時過天德院へ罷越、播磨守・又三郎相談拜禮仕。

七月十二日。前田齊廣の十七回忌法會を江戸下谷廣德寺に行ふ。

〔成瀨正敦日記〕

七月十日

一、當十二日金龍院樣御十七回御忌御茶湯、廣德寺においても有之候付、今日より三日遠慮、且十二日御茶湯濟、十三日朝之内拜禮可罷出旨。服半上下。服違候歟之事。但御寺詰人は、御横目所より先頃觸付有之候。右に付御普請所三日相止、如毎小屋細工爲致候旨。此間御作事奉行、右之通御普請は相止候へ共、御次御普請方役所へ四ッ過より罷出る。

七月二十日。鳳至郡中居鑄造の禁裏獻上燈籠に御用の絵符を用ひて通過すべきことを告ぐ。

〔御郡典〕

當八朔禁裏御所江獻上御燈爐鑄造之儀、鳳至郡中居鑄造師江申付、右燈爐持登候節、御用之御會符爲致隨身候旨、鑄師支配頭より申來候段、田邊九兵衛より及御達候旨に而、別紙兩通御用番年寄中被相渡候に付、寫相達之候條、被得其意、夫々可被申渡候、以上。

七月廿日　御算用場

槻尾甚七郎殿

禁裏御用鑄物師支配頭眞繼能登守より、使者を以手紙之通申越候に付御達申上候。文化三年にも別紙之趣に賴越候段、使之者申聞候に付、其節留帳相調理候處、右同樣に申越御座候。仍而右之趣今日出不時之中飛脚步江以傳附を御達申上候、以上。

子七月四日　田邊九兵衛

横山山城守樣等七人

以手紙致啓達候。然ば拙者支配諸國鑄物師共儀は、兼而御承知御座候通、朝恩之御由緒を以、每年秋八朔禁裏御所江御燈爐獻上御禮相勤候事に御座候。依之當八朔獻上御燈爐鑄造之儀、能州鳳至郡中居鑄物師中江申付、右燈爐持登候節は、御用之御會符爲致隨身候間、御承知置御座候樣致度、此段御國許其筋御役人中江、可然御通達之儀御賴申入候。右之趣可得御意如此に御座候、以上。

七月二日

眞繼能登守

田邊九兵衛樣

七月廿三日。前田齊泰學校に臨む

〔溫敬公記史料〕

七月二十三日。臨學校。

七月廿四日。石川・河北二郡に於いて蔭樹たる松の伐採の手續を定む。

〔河合錄〕

田地等日蔭松伐除之事

一、田畑日蔭に成候得者、出來劣りに成候故、惣じ而畦畔等に多く立木繁儀は不宜事也。隨而松木之儀は御縮も有之品に付、右松木蔭を打候所は、伐除之儀村方より願書付、改作所へ出之也。其上に而御郡所与引合伐除に成候事、其手續復元以後、以來之儀取極候趣左之通。

但、加州方之儀に而左之取極、石川・河北之分也。（天保十一年七月廿四日示談指定の趣也。）

一、石川・河北兩御郡村々、日蔭松目廻り三尺以上之分、（御林外之松也。）改作所へ伐除願出候得者、右書付共儘に而（奥書等も不致。）御郡所へ遣し、見分方申渡有之樣申達、（山廻見分いたす。）見分之上、日蔭に相成儀、且目廻り等相違無之旨に候へば、改而其書付に改作奉行奥書して、（右之通に候條夫々御伐渡之樣いたし度与調、御郡所宛也）

御郡所へ遣す。御郡所・御作事所に、右木御用之有無詮議方場違、夫々取捌濟候而伐渡有之也。

但、三尺以下之分は、御作事所御用有無相尋に不及振に付、三尺以下之松蔭伐願出候へば、是亦其書付御郡所へ遣、見分方申渡有之、見分之上相違無之趣申來候得者、其書付に改作所より、木數之所へ場印を請候而、御郡所へ遣し候へば、伐渡方有之也。

一、御林格之場所蔭伐願出候得ば、左之通奥書して御郡所へ遣す也。

右石川郡高尾村領字蔭休場松生木都合五十二本、外枝卸共、田畑日蔭に相成候に付伐除方願出、繼立指進候條、御伐渡被成候様致度候、以上。

改作奉行兩人

一、松木等如此蔭打候儀を嫌申儀に而、惣じ而畦畔等に多く生木有之、蔭打候儀は甚不好儀に候。天保九年諸郡へ申渡、委く蔭を打雜木伐除させ候事。

但、往還松は蔭打候共、蔭伐願筋に而無之候事。

川筋は出水急切之節抔、そだ等に生木悉用をなす故、畦畔等之立木少々蔭打候とも、爲伐申儀に而は無之候事。

七月廿七日。前田齊泰、老臣を召し拜領の諸品を觀覽せしむ。

〔官私隨筆〕

七月廿七日

一、八時過歟被爲召、奥之御居間也。御意等有之。御拜領之御置物御臺物三つ、御花生一つ拜見。且蘭品之寫之由、廻し候へば樂之横笛或は箏之樣なる音の發し候もの拜見被仰付。

七月。村方の萬雜徵收方法を定む。

〔河合錄〕

村方萬雜之事

一、一村江付候諸入用銀は、高懸り・家懸り等を以取立、夫々に遣之也。都而年暮夫々算用を遂る。其節肝煎等宅において、組合頭曁百姓等立會割符いたす譯也。尤萬雜帳一村々々役人手前に有之、夫々書記有之事。

一、右萬雜方兎角不正等も有之品、且は費成趣共も有之、前々區々に成來り候に付、天保之度何分嚴格に有之度、曁不時費無之、いかにも相減申樣、右之度等遂詮議則取極、以來之趣帳冊に認、先礪波郡より差出候に付、夫々詮議之上、諸郡とも以後如此可相心得旨申渡置、右取極之趣左之通り也。

村萬雜取立方、高懸・家懸等振分取極之外奉伺申帳

村萬雜取立方

一、高懸り之品。

一、家懸り・面懸り之品。

但、家懸りは一軒に付何程宛与して為差出、面懸り者上面・中面・下面三段或は五・六段にも相立、割符方仕候品に御座候處、大躰此兩品村々に而二様には不仕儀に付、兩品一集に書上申候。且町立ヶ所に而は分限相定、分限に割符仕候ヶ所も御座候。

一、人々より出候品。

一、人々より出候品、并兩品高懸りに而餘荷仕候品。

一、高・面兩方へ歩分を以取立候品。

右五品に振分候品々、巨細左に書上申候。

一、夫　　銀　　一、跡々御貸米返上　　一、諸郡打銀

一、用水打銀　　一、御郡萬雜　　一、組萬雜

但、其品により家懸り割符仕候品々も有之候へ共、村方に而者一躰高懸りより組萬雜として取立申候。人當り之儀は、其人により取立來り候故、是迄之通に為取立可申候。

一、村切用水・堤普請入用銀并人足料。

一、用水江代米幷格銀料米。
一、定檢地御手合御普請方引足銀。
一、水下銀。
一、川筋自普請雜用幷人足料。
一、御知行出百姓分持參出府雜用泊賃幷日雇賃等。
一、御給人ゟ早稻初穗米餘荷持參人足料。
一、御給人等夫銀上に付出府雜用泊賃幷日雇賃等。
一、御皆濟請取人日用雜用。
一、御給人之內二重俵之分餘荷。
一、御藏御米餘荷幷上卷繩皮代。
一、御借知御米上卷賃。
一、御米馬下餘荷。
一、御附越米駄賃餘荷。
一、御老中樣等御引米に付人馬割符餘荷。
一、籾納餘荷。

一、川下御米上乗賃。

一、御參勤御歸國御通行人馬餘荷等。

一、御改作御奉行所宿餘荷。

一、御扶持人春廻宿餘荷。

一、同斷二百十日廻宿餘荷。

一、組裁許廻村宿入用。

一、用水見分宿餘荷。

一、用水江番米水番米。

一、石砂入等之ヶ所起返餘荷。

一、出水に付領國筵すた等代幷人足料。

一、他村加勢人足餘荷。

但、此分は定式に而無御座、非常之節之事に御座候。

一、往還道造幷村方道造入用幷掃除人足料。

一、高附に相成候山役銀。

一、川除御普請所當米。

一、江肝煎給米。
一、御藏所之內、家守御藏升廻等之砌、御役人宿餘荷。
但、此分藏下村々高方より餘荷仕申候。
一、城端等馬下しヶ所津澤・鴨嶋に而假下敷米。
但、藏下高懸り。
一、備荒倉地子米幷番賃。
一、作損御貸米御藏向御印出違斗返入用。
一、夫食御貸米右同斷請取取寄人足料。
一、御藏下敷米。
一、新田裁許新開廻り之節宿餘荷。
但、此分新開高懸り。
一、福光斗藏地面年貢藏下高懸り。
一、福野御藏馬下賃銀餘荷藏下高懸る。
一、領之中檢使方入用。
家懸り面懸り之品々

一、乞食等宿米幷物貰とらせ錢。
一、傳馬役銀。
宿方家面懸り
一、浪人虛無僧幷乞食宿入用、幷右に付人足料。
一、火難逢候者取仕抹。
一、所々出火之節諸人足。
人々より出候品々
一、不埒之參會御詮議入用、幷人足料。
一、賊いたし候者入用、幷人足料。
一、喧嘩口論懸合一件入用、幷人足料。附り見屆方入用。
一、井波瑞泉寺・城端善德寺・古國府勝興寺佛供米。
人々より出候品幷萬雜家懸り之品高懸りより餘荷仕候品々
一、散小物成川役銀。
但、御印役之分鮎川・鮭川・鱒川・鰔川役銀、殺生仕候者有之候へば御役銀上納仕候へども、

殺生仕候者不罷在候時は、御印役に付高方より上納仕申候。

一、同斷鍛冶役・紺屋役・室屋役。

但、御印役之分右商賣仕候者罷在候はゞ、商賣人より指出候へども、右商賣仕候者罷在不申候へば、御印役に付高方より上納仕申候。

一、諸鳥殺生御役銀。

但、請負人罷在候殺生仕候者罷在候へば、殺生人より上納仕候へども、多分請負人より一村切に下請仕、殺生人爲立込不申、村方は高方より出候事に仕。元來諸鳥作物食荒候に付、鳥殺生御免被仰付候に付、領之廣狹によつて役銀割符仕置候處、鳥殺生に不拘御役銀取立申候。

一、困窮人屋敷年貢米高。

一、火難・水難手傳人足料。

但、面懸り候へども格別手に合不申村方は高方より餘荷仕申候。

一、家內變死之者見屆方雜用、幷人足料。

但、此雜用之儀は其人より指出候。

一、驛方手傳人足。

一、宿諸萬雜。
一、水附家幷火事家等御貸米返上。
但、借用人により指出可申候へ共、難澁人に而出道無之分、高方より指出餘荷仕候事。
一、村方難澁人死人有之節燒手間。
一、御郡御奉行所御郡廻御宿入用。
一、魚津與力中廻宿入用。
一、同斷同心中宿入用。
一、加州改方宿入用。
一、矢篦竹御奉行所宿入用。
一、御作事方宿入用。
一、困窮人救方。

高面兩方へ歩分を以爲取立候品々

一、肝煎扶持米。
但、高に三の二、家面に三の一。

一、村走り給米。

但、此分高三の二、家・面三の一割符、頭振は一人二升宛爲出、右給米之內引、殘而右之通割符可仕候。

一、廻り藤內給米。

一、御用紙面持屆餘荷。

但、組方高・面半々より取立可申候。

一、村迯り者入用。

一、春秋兩度氏神祭禮御祈禱幷宿入用。

〆

右村萬雜之儀、是迄取立方區々に相成居、就而は申分出來仕候族も有之、其時々組裁許等において詮議仕候而も、根元不一樣事故、一旦取極等仕候而も、爾与以後之取極には相成兼候儀も御座候に付、今般私共相談仕、高懸り・家懸り・面懸り等之品、右之通以來振分仕候はゞ可然奉存候。右振分書上候外、不時成儀等ケ條に洩候品も可有御座候へ共、前文之通准じ相定可申与奉存候。就夫家・面懸り之品々、米錢餘計に相成候而は、輕き者及難澁候事故、村に寄先年より面米相極置、いかゞ躰雜用嵩に相成候とも、乃至上面五升・中面三升・下面一升・

半面・四半面抔与而米取極、其外は一圓而役不差出、其餘都而高割に仕來り候村方も有之。ケ樣之村方において、前段書上候通り一時に相改、自然難澁彌增之儀に御座候而は不相成儀も、村柄に寄候而は可有御座候へども、多くは無御座儀に候間、左樣之所は猶又詮議仕候儀も可有御座、先は此末左樣之振分を以夫々爲相改、隨分萬雜方省略仕候樣爲仕申度奉存候。猶更御詮議之趣、被仰渡被下候樣仕度奉存候。此段奉伺候、以上。

天保十一年七月

得能覺兵衞
荒木平助
石崎市右衞門
長田金右衞門
安藤次左衞門

御改作御奉行所

本文萬雜定書草案之通に而可然存候條、諸郡へも此通に准じ可相心得旨、可及演述候事。

改作奉行

七月。醫者を開業するものに試驗を施行すべきことを令す。

〔雜事日記〕

向後新醫者相願候者、醫術之樣子於學校御醫者中試候筈に候。依而御家中御歩並之人々子弟等、醫者願指出候者有之候節者、其頭・支配人より直に督學江相達、聞屆之上願書付御用番江指出可申候。陪臣等之分茂主人々々より督學江相達、聞屆候者承屆可申候。

庚子七月　村井報負

〔郡方御觸〕

付札、明倫堂督學江

向後新たに醫者相願候者、都而町醫者同樣試被仰付候旨被仰出候之條被得其意、遠所町方・御郡等共支配人江、各より右之趣可被申談候事。

七月

別紙寫之通、學校惣御奉行播磨守殿被仰渡候之條、御承知有之、右試之儀者、明倫堂において醫學指引之御醫者中、業術之程試申筈に候間、御支配之內醫者相願候者有之候はゞ、其段拙者共迄被申越候得者、其節試業方可申談候。右之趣御承知有之、御支配御申談可有之事。

七月　大田小又助
渡邊兵太夫

前田彌五作殿

八月二日。前田齊泰、犀川に御歩の水泳を觀る。

〔温敬公記史料〕

八月二日。如犀川。觀歩兵習浮沒。

〔見聞袋群斗記〕

八月二日、犀川上江御出、御歩の水練稽古御覽ある。

八月三日。金澤城外堂形米廩の番所燒失す。

〔御城方御親翰御加筆物寫〕

庚子八月三日

今日八時頃、堂形中番所出火仕候付、播磨守・美作守見分仕候處、三間に二間計御貸小屋、不殘燒失仕候。尤外御藏等御別條無御座候。依而見廻り方等猶更嚴重に相心得候樣申渡候旨、早川淺之丞を以前田牽次郎江申含、申上置候事。

〔御家老方諸留帳〕

八月三日

一、御細工所邊奥番所と申所出火之樣子、退出之途中に而承候に付、圖書と同道、篠原織部邊より立歸り出席。右足輕番所迄燒失打こわし及鎭火。丹州・又三郎・內膳は學校江被出、御用番美作守・內匠・靫負立歸出席に付、出席切御近習頭中村五兵衛を以御機嫌相伺候處、早速

及鎮火御悦思召候段追付御意有之、八半過退去。

[宮私随筆]

八月三日

一、今日學校見届日に付、自分暨内膳殿・又三郎殿・式部殿四人罷出居候處、八時前堂形御厨内番人居小屋出火、全く焼失。されども風筋宜敷、稽古共儘爲致置候處、追付鎮り候也。

八月十三日。前田慶寧の本郷邸内に於ける居館の名稱に就いて議す。

[犬千代様御用留寫]

八月十三日

一、善右衛門於列席申聞候は、犬千代丸様御座所唱方之儀、先年教千代様御座所之時には、志村五郎左衛門より河内守江相達、同人より伺之上被仰出候付、今般も主税等より山城守等江相達伺有之候而も可然哉に候へ共、左なく共御前より被仰出候へば可宜儀与被思召候付、今般は御前より可被仰出与被思召候。就夫前々御別殿之唱方、梅之御殿抔は御殿之唱有之候へ共、御嫡子様方御座所に御殿与唱候御例無之、北御居宅抔与御居宅之唱に相成居候へ共、此度は御本宅續之儀にも候間、何御殿与申唱方に相成候而可宜哉。しかし御守殿抔も、當時御事輕に而御住居与唱候儀、其御釣合も有之儀に候間、御殿与被唱候儀宜ケ間敷哉。御殿・

御居宅兩樣之處如何相成可宜哉。猶更相考可申上旨御意之段申聞候に付、猶各江も申合候上御請可申上旨申述置候事。

八月十四日。困窮により乞食するものゝ取扱に就いて令す。

〔郡方御觸〕

非人小屋御救人之儀者、鰥寡孤獨老幼癈疾之者に而、可見繼親類等も無之者之外者御救相願申間敷筈之處、近年猥に相成、中に者壯健之者も御救人不少、勿論夫々於其支配々々隨分穿鑿方も可有之候得共、去々年も被仰渡候通、御救方之儀は其手々々において仕方も有之、右癈疾者等之外者、一切非人小屋入無之筈之處、今以非人小屋入多有之、何れにも一昨年被仰渡之趣綿密に相成、先々において厚世話いたし、癈疾者等の外は先御救相願不申心得に而、引取方も猶更得与詮議有之度儀と奉存候。且又先達而より之倒込之者、諸郡等江引取方之儀、去年以來毎度申達候得共、今以容易に引取不申。元來倒込候者は、誠に危急之場御救御座候儀に而、出生所等遂詮議、追々先々江爲引取候儀者、是迄非人小屋格に而御座候得共、右之次第に而迄り入に同樣に相成、爾々引取不申、非人小屋格も相立不申候間、是等も以後申達次第早速引取候樣仕度奉存候。右等之趣去々年御算用場江被申渡、夫々申觸御座候得共、何分行屆不申候間、猶更御詮議之上、改而諸郡諸町江被仰渡御座候樣仕度奉存候、以上。

子　八　月　　　　　　　篠島權之助

本多播磨守樣

付札、御算用場奉行江

諸郡諸町困窮人之內、產業取失ひ他支配所江離散、乞食いたし居候者、早々支配所引取扱可申旨等、去々年九月申置候處、今以非人小屋入多有之、磐倒込之者共引取方之儀、每度申達候得共引取不申旨等、篠島權之助別紙之通申聞、先以御趣意にも相違いたし候條、別紙之趣得与被遂詮議候樣、遠所町奉行・御郡奉行江可被申渡候、以上。

八　月

諸郡諸町困窮人之內、產業取失ひ、他支配所江離散、乞食いたし居候者取扱方之儀、去々年御用番年寄中被仰聞、其節申談置候通りに候。然處今以非人小屋入多、磐倒込之者共引取方之儀、篠島權之助より申達候向有之候得共、引取不申旨等同人紙面指出、先以御趣意にも相違いたし候段等、別紙相添、御用番年寄中被相渡候に付、寫兩通相達候條、被得其意、去々年申談候通取扱方之儀等、嚴重可被相心得候、以上。

八月十四日　　　　　　　御　算　用　場

渡　邊　新　藏殿

前年の釋菜は二月上丁なり

罷出は奥村丹後守榮實

八月十五日。明倫堂に於いて釋菜の禮を行ふ。

〔官私隨筆〕

八月十五日

一、今朝五時前上下に而明倫堂へ罷出。

但、今日御飾御規式之儀、先達而より段々僉議有之、今月丁日は十日・二十日・晦日に候へども、公儀に而丁日は御避之樣成御樣子に付、今年之所先今日に成。

一、五つ餘程過、列居宜旨に付、溜に而手を洗ひ罷出、着座所に罷在。

但、督學初扇子は持參無之由故、扇子は溜に指置候也。

一、着座之上、訓導兩人御上段之横より木主を取出し安置し、供物之臺を直し、濟候而下り候節、障子之音高く立るを合圖に、監祀簾者に會釋し、簾者五人出で御簾を揚。其時衆皆手をおろす。其時祭酒出で御香を焼、下つて拜禮。夫より奠物ども訓導・訓蒙持參、助教中西多四郎御上段下にて受取、これを奠す。其次助教津田權平御三方に爵を載持參、祭酒之前に置。祭酒座側之德利を取、酒を爵に注ぐ。權平御三方を取、御上段に上り香案之旁に座す。祭主續て上り、香案の後ろに座し、御三方共に受取眞中に奠す。其間に權平香案之所に而御香を

大村友右衛門・加藤圖書は共に督學

繼退く。夫より祭酒下而拜禮、復座之上、監祀敷居之外へ出。自分着座之向に座し默禮あり。受て監祀復座之上に座を立、拜禮所に而拜禮、復座。夫より監祀拜禮、其次教授・助教以下句讀師迄追々一人充拜禮。夫より入學生二人充拜禮。其次書寫方・御書物方拜禮。夫より監祀大村友右衛門等江會釋。友右衛門並加藤圖書一人充拜禮。次に御横目兩人充、木村十郎左衛門並與力・御算用者拜禮、尤兩人充也。畢而監祀祭酒江會釋、祭酒重而燒香拜禮あり。次に監祀簾者に會釋簾者簾をおろし、夫より訓導木主を納め、助教奠物を徹し候體。其時祭酒自分へ挨拶有之故、總樣へも挨拶して退座。

八月十九日。前田慶寧の本郷邸に建造する居館を東御居宅と唱ふべきことを告ぐ。

〔犬千代樣御用留寫〕

八月十九日

一、今日左之通被仰出候旨に而、高田善右衛門御附方席江龍出出之。

犬千代丸樣御座所御普請御成就之上、東御居宅与相唱候樣夫々可被申渡旨被仰出候。

八　月

〔若年寄方主付中等留〕

九月廿九日

一、犬千代丸樣御居宅御成就に付、東之御居宅と相唱候樣被仰出候旨、御表方より被申聞候事。

八月廿二日。前田齊泰、本多播磨守及び奧村丹後守二人に二ノ丸及び金谷兩御廣式御用を命ず。

〔官私隨筆〕

八月十六日

一、御用番被爲召、其次丹後守被召候由に付、播磨守退出後罷出候處、年寄中之內御廣式御用被仰付候儀に付而、先達而僉議之趣有之、丹後守よりも申上候儀有之。當時御儉約之御時節にも候間、彌可被仰付と被思召候。山城守等へ申聞、存寄之通可申上旨御意に付、及御請候處、御儉約專ら之御時節に候間、御勝手方棟取候而相勤候人々之內へ可被仰付と被思召候由御意に付、其儀も可申聞旨等申上、退去。

〔官私隨筆〕

八月十七日

一、御用番罷出、其次丹後守罷出申度旨御用番より被申上候處、追付播磨守被爲召、相濟丹

後守罷出、昨日御意被爲在候年寄共之内へ御廣式御用被仰付候儀、山城守等へ申聞、昨日出席不仕人々へは御用番より以廻狀申聞候處、何も存寄無御座段申聞候。此由私より申上候樣仕度旨御用番申聞候由申上之。次に御勝手方棟取相勤候人々之内に可被仰付思召之趣も、山城守等へ申聞候處、是又別存無御座旨申聞候。夫に付遮而奉申上候段恐入候へ共、萬一私式へ被仰付候樣之思召にも被爲在候はゞ、兼而被知召候通、私儀當御用番等も相勤不申候へ共、とかく御政事向萬事私棟取相勤候樣に申ならし、おのづから權勢づき候樣に相成奉恐入候。尤自分には厭申わけも無御座候へ共、此上又御廣式御用等も被仰付候樣御座候而は、彌御政事之權一人に歸候樣に相見え、御爲宜かる間敷哉と奉存候。是等之儀御用番等へ可申入哉とも奉存候へども、申達兼候故乍恐御内々奉申上候。猶とくと御思量被爲在候樣仕度奉存旨申上候。

一、右之通申上置候處、其後城州別席に而被申聞候は、只今御前へ被爲召、右之趣御意有之。丹後守は年行之儀故、丹後守へ可被仰付思召に候。申上候趣も尤に被思召候へ共、御取用被爲在候へば權は歸し可申筈に候。左樣之所に聊無泥相勤可申候。被仰渡候上御斷申上候而は如何に付、此旨御内々被仰聞候間、山城守より申談候樣御意之旨演述に付、先以過分之御儀共奉恐入候。いづれ御爲第一之儀に候間、各御僉議如何有之哉、私に而は一人に權之歸し候

樣成は不可然御事歟と奉存旨申述候處、其儀昨日より申合、いづれ丹後守にとゞまり可申、其所においで何れも別存無之候由等被申に付、左樣之御僉議にも候哉、愚意之趣は御內々申上候通に候へども、此上は被仰付次第可奉心得候間、宜御申上候樣仕度旨申述候。

〔官私隨筆〕

八月十八日

一、城州へ別席に而、昨日御談之趣に付、此上は被仰付次第可奉畏旨申上候通に御座候。右は自分之心得方を申上候。猶又相考候處、いづれ御爲には宜かる間敷候哉。何卒餘人へ被仰付候歟、但又當時各御年若に而如何と之御僉議にも御座候はゞ、元來右御廣式御用之儀、以前は有之候へども近來久しく無之儀に候間、是非不被仰付而不叶と申に而も有之間敷候哉。左樣之御樣子にも候はゞ、先暫是迄之通主付なしに被仰付置候而は如何可有之候哉。此儀聊心付候故御はなし申置候間、無理とも御聞受無之候はゞ御示談も可被下哉之旨申入候處、一人承り候而も如何に候間、播州へもはなし候樣にと被申候付、播州へも別席にて申入候。

八月十九日

一、城州別席に而被申候は、前段之趣各相談之上被申上候處、當時眞龍院樣も此表に被爲入

候御儀に候故、いづれ被仰付度被思召候。一人に而も宜儀と被思召儀へ共、申上候趣も有之候間、其趣に付而兩人可被仰付。依而播磨守と兩人へ可被仰付と被思召候由御意之由に而、播州へ之申入方示談有之、愚意之通申入候。且又存寄之趣御はなし申候處、段々思召之趣難有仕合奉存候。御序に宜御申上候樣仕度旨申入候。

〔官私隨筆〕

八月廿一日

一、丹後守・播磨守儀、上坂左次馬を以被爲召候付、罷出候處、兩人儀二御丸金谷御廣式御用可被仰付候。近日表向可被仰渡候へども、右御用は久々中絶いたし居候儀故、先御内意被仰聞候由御意に付、御意之趣奉畏、先以重き御用可被仰付旨御内意之趣、難有仕合奉存候。右に付而は内意之趣も申上置候處、山城守迄段々御意之趣奉承知、難有仕合奉存候。此上何廉申上候儀は奉恐入候間、申談相勤可申旨申上候。播磨守儀も年若、未熟之儀に御座候へども、被仰付候御儀に御座候間、御請申上候由等申上、退去。同席中へ普爲聽申入候。

〔官私隨筆〕

八月廿二日

一、被爲召候人々寄せ置、其段御用番より被申上候上、御居間書院御廊下へ參り居候處、追

付御出、御近習頭迄伺公相圖有之。丹後守・播磨守兩人一集、誘引なし眞中を兩人之間にして丹後守御右へ付罷出、御禮仕御敷居之内へ入、横疊二疊目迄罷出候處、近うと御意、又三尺進み出候處、各儀兩廣式用申付候。申談可被相勤と御意に付、奉畏候、重き御用被仰付、難有仕合奉存旨申上、播磨守も重き御用被仰付難有旨被申上。退去。

［官私隨筆］

八月廿二日

一、九時前丹後守・播磨守被召候由、上坂左次馬申聞、御用之間へ罷出候處、先刻兩御廣式御用之儀被仰渡候。何廉御用多に相成、大儀に被思召候。眞龍院樣・榮操院樣次第に被及御老年候間、萬事心付相勤可申旨御意に付、奉畏候。私共重き御用被仰付、其上御懇之御意之趣難有仕合奉存候。御先例も年古き儀無覺束、萬端行屆申間敷と恐入候旨等申上候。播磨守も御請等申上。畢而勤方之儀先例相知不申候。從御前可被仰出候哉、僉議仕可奉伺候哉、幸被爲召候御序故奉窺旨申上候處、御前にはきとしたる御留も無御座候。下には少々留も有之由に候間、取しらべ可奉伺旨御意に付、奉畏候。私共手前にも詳なる儀は曾而相知不申と奉存候へども、猶又取しらべ可奉伺旨申上、退去。

八月廿六日。前田齊泰學校に臨む。

〔溫敬公記史料〕

八月二十六日。臨學校。

九月朔日。前田齊泰夫人江戸城に登る。

〔溫敬公記史料〕

九月朔。夫人氏覲將軍。

九月六日。藩侯の御側廻を改め、御居間小頭等を廢したる理由を告く。

〔諸事要用雜記〕

九月六日

一、今般御側廻り之人々御仕法被仰付に付、奥御取次之儀は右御趣意も會得有之候得共、支配頭には得与會得も無之儀に付、左之通伺候上御近習頭へ申談事。

今般思召被爲在、御居間小頭等御指止被成候所、御手元を始格別之御儉約被仰出候折柄に付、自然茂御儉約之筋に而被仰付候儀与御心得有之間敷共難計、萬一茂左樣之御心得に而は甚御趣意に違ひ申儀に候。兼々思召被爲在、御側廻御改可被遊旨御僉議御座候得共、餘程御樣子茂變り申儀故、彼是与御猶豫被爲在候所、不遠内犬千代丸樣御表御住居に被爲成に付、御仕向方茂有之儀、旁今般思召通被仰付候條、右之趣爲御心得御談申候。就而は御近習勤仕之人

々、何茂油斷有之間敷候得共、猶更向後之心得方宜可有御申談候事。

九月六日。前田齊廣夫人、齊泰の生母榮操院と共に卯辰山に行歩を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

九月五日

一、榮操院樣明六日五半時御供揃に而向山御行歩、眞龍院樣御縮內へ被爲入候旨御案內有之。

一、明日眞龍院樣御行歩に付、御重詰被進御品物伺申談、榮操院樣へも被進候付、御奥示合之上に而、御干菓子被進候筈に付、是又御品付申談る。

同六日

一、今日眞龍院樣向山邊御行歩に付、御伺御機嫌、奉札を以御重菓子被進、榮操院樣江も同樣奉札を以御干菓子被進、高田氏より奉札入御覽被指遣事。

九月十五日。前田齊泰、金澤の郊外千日町口に放鷹を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

九月十五日

一、今日九時之御供揃に而、千日町町端より御鷹野、泉油屋小路より御上り之儀に昨日被仰

出、御供當席より高田氏被罷出候事。

一、右御出九時前、御戻り七半時過之事。

一、御獲柄鷺一つ有之候由之事。

九月十七日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事要用雜記〕

九月十七日

一、今日兩學校御出、朝之分も繰下げ候儀被仰出候處、明倫堂・經武館度々之御出に相成付如何可有御座哉、猶當席了簡も承り度、其上に而御次第書も可差出旨被申聞付、示談之上相伺候處、入學生會讀は御聽聞被遊間敷、今日當り之講書、夫より經武館江御出之儀に被仰出之段執筆呼立申達す。

一、八時前御出、明倫堂江被爲入、組當り講書岡田喜陸相勤、御聽聞被遊、夫より經武館江被爲入、半井佐太夫方出情人兩人鎗術御覽、相濟御襖建、重而常稽古不指支段申上り、無程御覽、四五組も御覽之上御襖建、夫より保田松之丞・淺川一平方出情人御覽被遊、夫より常稽古御覽、四組御覽之上是切りに而、跡は師範人兩人に内膳殿持馬幷大音帶刀持馬被仰付御覽被遊、相濟七半時前御戻り被遊候事。

九月廿二日。前田齊泰石川郡宮腰に行歩を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

九月廿二日

一、六半時過御出、宮腰口より御鷹野、所々御放鷹被遊、四時過同所中山主計方に而御小休。右御休前に鷺壹御獲柄有之。板淵御大鷹追川佐太夫捉上る。右御小休中、御召馬を初かもう り渡鳥渡、夫より御供廻りに而惣御供被召連被爲入、右渡し御渡被遊、御上り之上暫御跡御見廻、無程御馬上被遊。夫より御早乘。御相乘候次第、御先肴次郎・監物・織人・御番頭權太郎・御帶刀久兵衞・津太夫・三郎左衞門・善右衞門、右之通騎馬御供に而、專光寺濱うつぎ通り被爲入、八田村より田畦道より松任へ被爲入。八田村迄二里計も有之、八田より松任迄一里計も有之。八田よりは甚道惡敷、御早乘は勿論、御馬上御無理に候へ共、御口付も續不申、騎馬之面々迄に而致方なく、小橋等甚危き所等も有之。御先乘之大村下馬、自分馬は百姓に渡、御口を持、御下馬被遊候ケ所も有之。其内御中間も續き、八田より御鷹も御供之筈に而、其内御大鷹參り、鷺居申候に付御下馬御放鷹被遊。夫より御歩行に而、御供之騎馬口付も追々參り候付、爲牽、松任入口より又御馬上、同所町端迄御早乘被遊、騎馬御供例之通相勤。御戻り同所御休所ゟ被爲入、餘程御休被遊、同所に而於御前御酒等頂戴。畢而八時過御供廻り、

惣御供は町端迄御先へ遣、鳥次第御放鷹之図りに而被爲入、野町町端より御戻り、七半時過

御歸殿被遊候事。

〔上貨屋日家榮帳〕

九月廿二日御殿樣御出、中山に御休被遊、夫より御船にて向之濱御渡被遊候。目出度。

〔諸事要用雜記〕

九月廿四日。前田齊廣夫人、河北郡藥師村附近に行歩を行ふ。

九月廿四日

一、眞龍院樣藥師村邊御行歩御出被遊候。

一、眞龍院樣夜五時過御歸殿被遊候段、內藤勘兵衛より案內紙面參り候事。

九月廿五日。念佛行者義賢金澤に來る。

〔大鋸文書〕

今年天保とゝせ一とせかのへ子のとし、念佛の行者義賢と稱し奉る大德、春の末つかたより鳥がなく吾妻を立出たまひ、こゞしき三越路なるしらね・たち山へ籠り給はんとて、まづ途すがらなるには善光寺・或は戸隱山に籠り念佛したまひ、さて文月のこゝの日といふ日より彼名に高きたち山へ籠り、念佛供養のため大願を起し、凡四十八日といふ計も籠り給はん御

志にて、此大山の淨土山といふへのぼらせ給ひ、念佛し籠り給ふに、三七日といふにはや其願成就ならせたまひて、富山の巷へをりさせたまひ、此大城の下にて日課念佛の供養授け給ふ。夫より魚津大泉寺において日課供養念佛、又放生津曼陀羅寺において同御供養。かくて金澤表より御門中方爲惣代、まづ淨安寺・誓願寺・壽經寺等の和尙達爲御招待放生津へ御出有て、九月廿五日午の刻計に此大城の御もとへ着せ給ふ。前日より津幡・竹橋邊でまも講中など御迎に出たり。其日は曉天より御迎之貴賤群をなせり。以前德本行者之はた幟などをもたて、驛々宿々よりさゝげしはた幟のるゐを先へ立つらね、鉦鼓之音遠近にひゞき、大樋町端茶店に御腰かけさせ給ひ、御十念ありければ、我先と押合けり。こゝを御立出、近々善の綱つぎたし〳〵稱名の聲しばしも絕る事なし。行者之御出立には、先紀州公より手向られたる彌陀尊像之寶堂、又次に行者行中つかせ給ふ錫杖をつき、又次に大香爐を荷はせ香をくゆらせ、行者其かみ德本行者の安置し給ふ彌陀尊一寸八分之尊像幷佛舍利、則此行者讓請給也。此尊像を錦の袋に入、片時も放し給ず、たゞかちはだしにて步行給ふ粧誠に矢をいるが如し。急ぎ光覺寺といふ御寺ゟ御立入給ひ、此御寺に待まうくる人々群集す。直樣本尊前へ拜禮有つて、十念授給うて直樣たち出給ふ。夫より寺町極樂寺へ着せ給ふ。

扨亦十月朔日より如來寺へ御移り、如來寺方丈幷御隱居玄關前まで御出迎、御十念授け給ひ、

御隱居へ仰には、此の世をのぞみ給ふまじ、念佛往生を待たまふべし。命終も遠かるまじと仰有けり。難有とも殊勝とも言盡しがたし。此御隱居は當年七十五の齡を得給なり。老病にて步行不叶。于時行者御立出給ひて三日めと言に大往生を遂げ給ふ。其辭世に曰。

長滯留をいたしました今日こそは御暇申とめてくれるな

一筋に道を往けり冬の月

扨如來寺においても前に言ふ如く、日課參詣入替り〳〵、貴賤群集彌增けり。中には御大身方にも日課授り給ふも有。前田何某樣御母堂は日課授り、終日參詣し給ふ。

扨かみな月六日、彼如來寺を御たち、御本尊前にて御名殘の御十念御授、方丈の御頭へ彼の寶堂にましますす御佛をさゝげ、一蓮たく生の御名殘を供養回向したまへば、參詣の人々貴賤袖をしぼりあへり。實ありがたき事ともなりけり。夫より御門前松原町御通にて、御代參の女郎方三人裝束にて床几に毛氈を敷座したまひ、今やおそしと待給ふ。やがて行者御弟子隨伴之面々もろとも、前に如言日課念佛戒行之御文常のごとく御授け、日課五千遍御受之由也。其御勸解には朝日の恵といふかな書の御文あり。其趣をさとされけり。こゝをたち出給ひ、やがて御見送りの人々貴賤群集する事御迎のときに彌增ける。六日松任御泊り、七日・八日小松、九日・十日大聖寺。

九月廿七日。前田齊泰の生母榮操院河北郡藥師村に行歩を行ふ。

〔官私隨筆〕

九月廿六日

一、榮操院様明廿七日六半時之御供揃にて、藥師村等へ御行歩被仰出候由。

九月廿七日

一、五時過榮操院様御機嫌能只今御戻之旨、山森九兵衛より紙面來る。

〔諸事要用雜記〕

九月廿七日

一、榮操院様今日御行歩に付左之通奉札指遣返書御近習頭より入御覽。

以手紙致啓達候今日榮操院様藥師村邊御行歩御出被成候處天氣茂宜緩々可被爲入与思召候猶更御見廻被仰進候條此段宜敷御申上候様可相達旨被仰出候、以上。

九月廿七日　　大野織人

村田豐之助殿

十月五日。前田齊泰、富山侯前田利保が西丸普請助役の功を賞せられたるを謝する爲幕府に書を送る。

〔成瀬正敦日記〕

十月五日

一、西丸御普請御用、出雲守樣御勤に付、前月廿二日御登城御懇之上意被爲蒙、御時服御拜領に付御禮御書、三御所樣附御老中方・井伊殿都合四通御出來、御日附今月七日に而御指出、今日御用人江御渡之事。

出雲守は富山侯前田利保

十月七日。五ケ山の鹽硝を買上ぐる爲町藏の借上を命ず。

〔御家老方等諸事留帳〕

十月八日

一、當年より五箇山一山之鹽硝不殘御買上に相成候に付、町藏兩所借上之儀、矢野所左衛門より相達、承屆候段昨日申渡。

十月八日。前田齊泰の子利義・利行水痘に罹る。

〔官私隨筆〕

十月八日

一、今夕角尾孫兵衛より以紙面、基五郎殿・豐之丞殿夜前より御熱有之處、御水痘御治定、御順症之旨申越。依之播州方へ以紙面及示談候上、七半時過罷出、加藤新之丞に逢候而御樣

子承候處、御兩方樣共御順症、恭五郎殿は別而御輕く、御平生之通に而、今日御囃子有之、御見物所へも被成御出候。豊之丞殿は先日より之御熱は段々御醒之處、夜前又々少々御熱有之處、今日御發し物見え、御兩方樣共御醫者追々伺、晝後御水痘御治定之由也。依而御機嫌相伺候處、御順症に而御悦被思召候。御機嫌伺罷出御大慶之由仰之趣演述。及御請、播州も追付被罷出。

一、御醫者大庭探元・高嶋正頴呼候而相尋候處、右同樣之趣申聞、何も奉案事儀無之旨申聞。御藥は荊防敗毒散加葛根被召上候由。

十月十三日。二條齊信の使者金澤城に登り金子調達を求む。

〔成瀨正敦日記〕

十月十三日

一、二條樣御使者隱岐播磨守四ッ時過登城、表向時候御見廻之御口上、御奏者番御取次、御近習頭を以申上候付、御答御家老を以被仰上候付、御近習頭を以御家老江被仰出候由。

一、御內用之御口上御取次は、御家老將監罷出承り、袖扣幷左府樣より御直書も被進候付受取、當席を以被上候付入御覽、御先振相しらべ（文政元年也）御書御受取被遊候。御答は追而可被仰上旨、當座之御答被申述候樣、將監へ被仰出候付、主稅將監へ申達。

一、右御內用御願筋御口上書は、御用番內匠へ御渡、遂僉議被申上候樣被仰出之趣、主稅御席へ致持參相達之。

十月廿二日

一、二條樣御使者へ御內用御答之趣詮議を遂、昨日御用番より被申上候付、今日右御答書下物に而、織人を以八郎右衛門へ御渡、（但將監見合中に付、右御答御使八郎右衛門被勤候旨に付右之通也。）明日旅宿へ罷越被申述候筈。御返翰は明日御渡之旨も織人申述置候事。

右御內用御答之趣は、二千五百兩御賴候へ共、色々之仰立に而、今・來年に米千俵御振替可被進旨也。

十月廿七日

一、二條樣御使者隱岐播磨守へ御內用之御答、此間相濟候所、今一篇御家老中に逢度旨申聞に付、一昨朝八郎右衛門旅宿へ罷越候所、いづれ二千俵無御座而は御指支之旨等申聞、今一返御僉議之樣强而相願候旨等、一昨日主稅を以八郎右衛門より被申上。右之委曲御用番へ可相達奉存候旨も申上り、昨日御用番より右之趣書取（主稅御取次）を以被申上、御留守中に付今朝申上る。

一、右に付昨日小左衛門を以被申上候は、御使番由比勘兵衛申聞候は、播磨守儀此度八郎右

衛門殿迄申述候御答さへ有之候得ば、歸京仕度躰之旨宿之者申居候由。此儀渕兵衛より継次へも右織人を以申上り居候事等を以相考候所、此度之儀いづれ最初之僉議之通千俵御振替被進候はゞ、大躰納得可仕躰に相考候へ共、重而申聞之趣故、無味に御僉議無之儀も相成間敷、少し之違に候へ共、今・來年に千俵与申所、當暮一時に千俵被進、年賦も來々年より二十ヶ年賦を以御返濟与申所、二十五ヶ年とか相成候事に候はゞ、大躰納得可仕哉与奉存候得共、指付御家老に而申談候而も、又彼是有之候事も如何に候間、先內分町奉行を以爲申入見候ば可宜哉、何れも遂僉議候旨申上候付、伺之通与被仰出候事。

十月晦日

一、二條樣御使者江町奉行引合候所、千俵之內七百俵當暮大津御藏米を以被進、殘三百俵は來春大坂に而被進、其外に當暮御返納有之五十兩、去々年歟江戸表に而御振替金二百兩、當暮迄御返濟之分。來々年より二十ヶ年賦御返濟之事相成候はゞ納得可仕旨、御使者申居候段町奉行申聞候旨、此間御用番より申上り、右之趣に昨日御家老前田圖書を以被仰入、御使者御請申聞候由。

［御家老方諸事留帳］

十月廿五日

二條樣御使者隱岐播磨守、將監宅又は八郎右衛門宅江罷越、此間御內用之御答之趣に付、今

一篇逢候而申聞度儀有之旨、昨日山比勘兵衛を以申聞候處、將監儀は當病、八郎右衛門宅は指支之趣有之に付其段申遣、旅宿江今朝能越候處、播磨守申聞候は、今度御内用御賴之趣段々各樣御心配被下、格別之御逼迫中結構に御贈進被成遣、於私茂難有儀奉存候。早速京都江申上候。于時一昨日私御使者相勤退出後、尙更御書取得与拜見仕思慮仕候處、今・來年に千俵御贈進に而は、中々御手筈相違仕候。依而今千俵御增被進候儀は相成間敷哉。是非當暮之處千兩無御座而は相成不申候。段々結構に御答被仰進上、私と仕重而ヶ樣に願候儀奉恐入候儀に御座候得共、兼而被仰付置候儀故不顧恐御難題相願申上。御當地之樣子承候處、米價次第に下落仕樣子、此体に而は京都向も尤同樣之譯御座候間、彌當暮之處御差閊に相成候間、何れに茂當暮千俵、都合二千俵御贈進之御僉議奉願候。御繰廻方御六ヶ敷儀も御座候はゞ、當年五百俵、來春之處に而千五百俵に而も宜、左候へば先を目當に何とか御手筈も出來可申哉と奉存候旨申聞候に付、於此方樣も御逼迫中ながら無味御斷も被成兼、格別に僉議被仰付、漸に千俵御贈進被成遣候譯。京都向御無心ヶ間敷儀御斷被成置候儀、外々樣之差障にも相成候間、迚此上之僉議は六ヶ敷旨等段々申入、詮議を致候ても餘程日間も懸り可申間、先江引取可申、跡より何とか否申進べく旨申入候得共、今一篇之否承知不仕而は、態与被仰付儀ゆゑ難能歸旨申聞候に付、左候はゞ夫々相達、及僉議否可申達候。中々被申聞通には相成不申

旨申入置候事。

十月十五日。前田齊泰の子利義、利行の水痘瘉え酒湯を浴す。

〔官私隨筆〕

十月十五日

一、二御丸退出、直九時過播磨守一所に御廣式へ罷出、基五郎殿・豐之丞殿御酒湯御祝詞、以丹羽權佐・村田定之助申上候。御肴一折充、目錄右兩人へ相渡候處、追付仰之趣演述。其上に而御吸物・御酒・取肴被下之、畢而以權佐御禮申上候。

十月十八日。幕令により速に文政小判及び壹歩判等の引替を了すべきことを告ぐ。

〔觸留〕

文政小判・壹歩判等引替方之儀に付、水野越前守殿より御勘定所に被仰渡候御書取寫壹通、相越之候條、被得其意、右金子所持之者は早々引替可申候。若其向より引替方手寄惡敷儀も有之候はゞ、所持之金高等書記、共頭・支配人より御算用場へ相達、受指圖可申事。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候。

御書取寫

文政小判・壹歩判引替方之儀、近頃諸向引替差出方捗取不申、右者頓而通用停止可被仰出儀に候間、御領分在・町金銀取引いたし候ものは勿論、其外所持之ものは早々最寄引替所へ差出可引替旨、尤其所に而重立候もの厚世話いたし、右金並古文字金・眞字草字貳歩判とも、此上引替差出方捗取候様可被申渡候。

十月十八日。前田齊泰、金澤大豆田口に放鷹を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

十月十七日

一、明日六半時不遲之御供揃に而、大豆田口町端より御鷹野、千日町町端より御上り、野間御道程二里半計之旨申上る。右之通被仰出候事。

十月十八日

一、例刻出席之筈候處、今日御供に付六時出宅御殿へ出、御供廻に而御先江出、大豆田口に而御待合申。夫より御供、所々御放鷹被遊、八時御歸殿被遊候。雁餘程居候得共、兎角都合惡敷御獲柄無之、晝より少しぶき、早々御道に而御戻り被遊候事。

十月廿一日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事要用雜記〕

十月廿一日

一、八時前學校江御出、經武館江被爲入、山森武太夫方劒術稽古御覽被遊、其內會讀不指支段申上、夫より明倫堂江被爲入、御襖明候上相始、御大小將三席、入學生二席相勤候上、堂之中程江御出被遊、御先立成瀨相勤。其內馬術不差支段申上、夫より重而經武館江被爲入、保田幸藏方馬術御覽被遊、奧村主稅持馬幷貸馬之內栗毛、幸藏幷庄兵衞江被仰付御覽、直に御戾り被遊候事。

一、七半時御戾り之事。

十月廿三日。前田齊泰、陸原大次郎に瀧之間に書を講ぜしむ。

〔諸事要用雜記〕

十月廿三日

一、今日瀧之間講書御聽聞之由、御近習頭より被申聞、無程御出之旨付、御前後御先立自分相勤、五半時過御出、四時過御入之事。

十月廿七日。前田齊泰、金澤郊外七ツ屋口に放鷹を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

十月廿六日

一、明日御鷹野御出被仰出、高田より御近習頭へ申談る。

明廿七日九時之御供揃に而、七つ屋口町端より御鷹野、無量寺村に而御小休、宮腰口より御戻り可被遊旨被仰出。

十月廿七日

一、九時前御出被遊、七つ屋口より所々御放鷹被遊候事。

御拳　　小鷺一　　雁一

御分鷹に而　　雁　一

筒に而　　菱喰一　　鵜一　　小原彌五右衞門

十一月二日。前田齊泰、その子利義と共に放鷹を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

十一月朔日

一、明日九時之御供揃に而、御鷹野御出可被遊旨被仰出、高田氏より夫々御鷹方へも談有之、

御道書等御近習頭へ指出候事。

一、明日甚五郎殿御同道可被遊旨被仰出、御廣式頭呼立其段申談、重而右頭罷出御禮之段申聞、拙者共退出後に付奥御取次を以申上候事。

一、明日御道書上り、大豆田口より宮腰中山主計方御小休、夫より廣岡口御上り之筈に候事。

同二日

一、九時頃御出、大豆田口より御鷹野被遊、暮頃御歸殿被遊候事。

一、右御供高田被罷出。

一、甚五郎殿御先へ被爲入、野間之內御同道、御道遲に付被仰進、御駕籠に被爲召候由。

御拳に而　　小鷺一　かもめ一

御分鷹に而　　小鷺二

雉子突　　雉子一

一、右之通御獲柄有之候事。

〔官私隨筆〕

十一月二日

一、甚五郎殿今日四半時御供揃、相公樣御同道御鷹野御出之由、御廣式頭以紙面斷。

〔上買屋日家榮帳〕

十一月朔日御殿樣御出、本龍寺之前より寺町御出。其より、小間物屋之横より中山江御出。其より辻御通り被遊。目出度。

朔日とあるは二日の誤なるべく、本龍寺は宮腰なり

十一月八日。御廣式御用本多播磨守・奧村丹後守二人、前田齊廣夫人に財政困難の狀を告ぐ。

〔宮私隨筆〕

十一月六日

一、金子五郎太夫罷出候付、御勝手御難澁之御樣子共眞龍院樣へ申上候樣にと之御儀に付、近日御透次第被爲召候樣仕度、御日限相極り次第しらせ有之樣にと申入之。

一、右之節眞龍院樣等へ御圖帳入御覽候節、左之通小紙に調入御覽可然哉と申合候間、御序に可被入御覽哉之旨申入之。

一、御米入方　三十二萬千二百十五石計
　同御拂方　三十四萬八千百六十六石計
　右指引して　二萬六千九百五十一石計　御不足

一、御銀入方　　一萬千三百八十五貫目計

但作難御手當米二萬五千石御銀に圖り入

同御拂方　　一萬三千二百四十五貫目計

但御米渡り之内代銀を以相渡候分共

右指引して　千八百六十貫目計　御不足

米に直し三萬七千二百石計に成

前段御米御不足　二萬六千九百五十一石計共に都合御不足高

六萬四千百五十一石計

草高に仕候へば十六萬三百七十石餘に相成申候事。

〔官私随筆〕

十一月八日

一、八時過退出、直に播磨守と兩人金谷へ罷出、以飯尾吉太夫御機嫌相伺、此間申上置候儀に付罷出候旨申上候。

一、無程御居間被召、兩人罷出、御圖り帳幷書取入御覽、御難澁之御樣子等段々申上。畢而復座仕候上、老女中二・三人へ猶又御圖之樣子相咄し、追付退去。但段々御懇之仰あり。

十一月九日。御廣式御用等、前田齊泰の生母榮操院に財政困難の狀を告ぐ。

〔官私隨筆〕

十一月九日

一、八時過退出直に御廣式へ罷出御機嫌相伺、此間申上置候儀に付罷出候旨、以角尾孫太夫榮操院樣へ申上候處、追付御奥へ通り候樣にと之事に而罷越。

一、追付被召、榮操院樣御居間へ罷出、昨日眞龍院樣へ申上候通申上之、帳面幷覺書共御留也。畢而七時退座、御目通被仰付御懇之仰之御禮以老女申上之。御廣式へ罷出候上重而御禮は不申上候。

十一月十六日。前田齊泰學校に臨む。

〔官私隨筆〕

十一月十六日

一、今日學校へ御出に付自分は八時退出より罷出。

十一月廿二日。町方教導の件に關して議す。

〔官私隨筆〕

十一月廿二日

一、水原清五郎罷出、町方御教導方之儀町儒者に被仰付、二日讀之類も其方に而教示仕可然樣に先日寄合之節申候へ共、町方に而二日讀之儀は前々より之仕來に而、本町は毎月二日、地子町は家之賣替有之節々爲讀聞候事に相成居候間、是は其儘相立置、御教導方は別に相成可然旨。且又町儒者宜分も無之躰に候。當時明倫堂に而町・在講釋日も相立居候事に候間、夫を御押弘め有之、先町會所に而教示被仰付候樣に有之候而も可宜、其上は塾を被仰付可然哉と重而心付候旨。

十一月廿四日。光格天皇崩御の報京都より金澤に達す。

〔成瀨正敦日記〕

十一月廿四日

一、京都詰人より、當廿日出町飛脚不時立早飛脚に而、當十九日酉刻仙洞樣崩御之旨、平田内匠御沙汰書到來。

右に付遠慮之儀御尋に付、年寄中席承合候所、文化十年閏十一月三日か、仙洞樣崩御之旨同十日に京都詰人より申上、江戸表より御書付は同十九日到來に付、十九日より五日遠慮之儀

觸出に相成居候旨に付、其段申上置候事。

十二月四日。光格天皇崩御の報江戶より金澤に達す。

〔御郡典〕

仙洞御所前月十九日崩御之由、江戶表より申來候。依之普請・鳴物等、今四日より八日迄日數五日遠慮之筈に候。右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

十二月四日　　本多播磨守

石野右近殿

十二月十二日。京都の御用商人大森三郎兵衞に金子貸與を許す。

〔成瀨正敦日記〕

十二月十二日

一、大森三郎兵衞今般出府願之趣は、連年勝手難澁指迫り、御用も勤兼、最早家失之場へ至り候間、銀子百貫目拜借之儀、表向會所奉行・町奉行へ願出、於表方御僉議有之、御次へも願書指出し、表方へ相送り置。然る所御僉議之上、格別之趣を以五百兩御貸渡御聞屆之所、右迄に而迚も歸京も仕兼候旨等、重而重々相願候故、打返格別之御僉議に而、御用代之內繰上御貸渡之趣に而、來年より七貫目充十ヶ年御貸渡、十一ヶ年目より御用代銀之內を以返上

之事に御聞届有之候。右之通格別之御取扱も有之所、願通に而無之に付、何分當暮之所指支候間、於御次御取扱之儀相願候へ共、當夏相願候節、御用代繰上十七貫目御貸渡、來年より御用代之内を以五ヶ年賦に返上之事申談置、且先日出府之上相願、當暮浦野向利足金百兩も繰上相渡、且御納戸御用代銀之内も繰上、七貫目於京都相渡候事も聞届置。右之通重々取扱置候上之事故、一圓難取揚旨再三爲申上候得共、いづれにも少々成共御振替無之而は、不龍歸程に重々歎願いたし候付、僉議之内當暮五貫目於京都御貸渡、來年表向に而相渡七貫目之内を以返上之儀、堅き取極に而承届遣候。右に付三郎兵衛儀は、明後十四日此表發足龍歸候由。

十二月十五日。前田齊泰、光格天皇崩御し給ひしを以て使者を發遣す。

〔成瀬正敦日記〕

十二月十四日

一、仙洞崩御に付、禁裏御機嫌御伺、京都江之御使御歩頭半田左門江御渡之御書出來。御目付十五日、御所司代牧野備前守殿・禁裏附御連名都合兩通。外に僉議之趣有之、大宮御所江御機嫌御伺、仙洞附に而御書に而御伺之儀に候へば、右御附衆江も御書一通、右御書込に付備前守殿へ之分も一通出來。但此兩通は彼地に而僉議之上御入用之分也。右都合四通出來、

明日御用番へ御渡之筈。

〔溫敬公記史料〕

十一月十九日上皇崩。遣半田景員京師献賻。

十二月廿二日。前田齊泰能を演ず。

〔宮私隨筆〕

十二月廿一日

一、明日御能被遊候付、望次第拜見被仰付旨、御用番迄被仰出演述あり。御禮申述。但服は常服五半揃之由。

十二月廿二日

一、右に付五半頃登城。

一、四時過御能初る。

常陸帶 御	大佛供養	万十郎	定家 權之進
船辨慶 御	猩々	基五郎殿	

十二月。石川郡栗ヶ崎村藤右衛門及び向栗ヶ崎村德兵衛を御扶持人十村列とし御金御用を命ず。

〔御家雜等の抄〕

天保十一年十一月

一、粟ヶ崎村藤右衛門、向粟ヶ崎村德兵衛儀、格別之者に付、親々病死後間も無之候得共、親共同様御扶持方等被下、御かね御用被仰付、苗字爲相名乘候樣可申渡哉之旨伺之通被仰出。

〔御家雜等の抄〕

天保十一年十二月

一、粟ヶ崎村藤右衛門、向粟ヶ崎村德兵衛、御扶持方等被下、苗字爲名乘候樣申渡候處、去年御郡方御仕法復元之節、惣年寄より年寄並之者迄は名字爲名乘、平十村之分は苗字御指省被仰渡候處、藤右衛門等苗字相名乘候樣就被仰渡、平十村も名字相名乘候儀相願候得共、去年段々被仰渡候趣も御座候故相願兼候間、藤右衛門等御扶持人十村列に被仰付候樣願に付、其通被仰付候儀伺之通被仰出。

天保十二年

正月朔日。前田齊泰金澤城に於いて年頭の賀を受く。

〔御家老方諸事留帳〕

正月元日

一、五時登城、近例之通於御小書院御禮申上、年頭御作法に而近例之通也。四半時此御禮相初候也。

一、御熨斗頂戴、例之通二ノ間也。御禮列座、御臺所奉行土屋武右衛門を以申上、直に鶴之御吸物頂戴、御吸物一篇、御酒、御取肴卷鯣、近例之通也。御吸物之御禮御膳奉行永原傳七郎を以申上。

〔若年寄方御用留〕

正月元日

一、四つ時過列居可仕旨御用番より演述に付、瀧ノ御間江罷越御目錄持參、御太刀御進物裁許與力より指越、追付御禮相初候而相濟、御家老は瀧ノ御間御障子を明、萩之間伺公所へ被出、若年寄御先立、幷御襖役は瀧ノ間に罷在、御横目相圖次第御襖役は大廣間江被出、夫より御先立、御小書院三ノ間へ罷出御相圖申上、御先立朔望之通御入替儀無之。

一、御膳奉行御奥書院御緣側へ罷出、御意可申述旨申聞。則罷出候處、鶴庖丁御下可被下旨御意申述候に付、難有仕合奉存旨申述、指續御臺所奉行御熨斗可被下旨御意可申述旨に付、

奥書院御縁側象御杉戸邊へ罷出候處、御臺所奉行御意申述候に付、退き席に而頂戴、重而罷出、御例之通御熨斗頂戴、難有仕合奉存候旨申述。一番座御禮人列居宜段申上候旨演述に付、御先立外記殿御居間書院へ被相廻、將監殿・自分御襖間へ罷出候。右相濟、鶴御吸物於席被下候御禮、御膳奉行呼立申述候。最初之通象御杉戸之邊へ罷出候事。但、御熨斗頂戴之儀、二番座前に調置候得共、二番座相濟被下候事。

一、二番座御入之節、御居間書院三ノ間において、御作法書之通御近習之人々御禮被爲請候に付、如毎御先達落處よりは少し進、御居間書院二ノ間御式居之際に控、御着座之上退、御居間書院二枚たて之外、御見通に不相成所に暫控罷在、舟之御間御禮人相濟候を見計被引取候事。

正月二日。謡初の儀を行ふ。

〔官私隨筆〕

正月二日

一、五時過登城、御作法付之通相濟、歸宅は四半時過也。

一、御謡初に付八つ打候而登城。

一、七つ頃御規式初り、暮合よりは餘程前に濟。尤途中提灯なしに歸宅。

一、今日御大廣間御座之御間（御下段也）之御後ロ之方、矢天井之間之内を屏風に而圍、其五郎殿御見物あり。

正月十七日。前田齊泰、その子慶寧に本郷邸の御廣敷より東御居宅に移るべきことを命ず。

〔成瀬正敦日記〕

正月十六日

一、左之趣相伺、明日日柄も宜に付被仰出候筈之事。

犬千代丸樣御表御住居被成候樣被仰進方之儀。文政三年四月六日御前御表御住居被仰進候節、伊藤內膳御廣式江罷出、改田主馬を以申上、追付內膳被爲召御直答被仰出候。今般は江戶表江申上候儀に御座候間、原五郎左衞門呼立、左之通申上候樣申述、御請之儀も竹田市三郎を以被仰出、五郎左衞門江申來候上、五郎左衞門より申聞、其段申上候方に而可有御座候哉。

犬千代丸樣御儀、是迄御廣式に被成御莕候得共、今度東御居宅御普請出來に付、御住居被成候樣に与思召候。此段可申上旨被仰出候。

正　月

閏正月十八日

一、犬千代丸樣東御居宅御住居被成候樣、先達被仰進、原五郎左衞門へ申談置候所、竹田市三郎ゟ申遣候。右御請御禮之御使、今日左之通五郎左衞門相勤、主稅へ取次、則申上、御相答申述候事。

相公樣ゟ

犬千代丸樣御儀、是迄御廣式に御暮被成候得共、今度東御居宅御普請出來に付、御住居被成候樣に与思召候段被仰進之趣、難有畏思召候。右御禮被仰上候。

閏正月十八日　　御使　原五郎左衞門

正月十九日。百歲の老齡者に物を賜ふ。

〔溫敬公記史料〕

正月十九日。賜年百歲者物。

正月廿三日。前田齊泰の子利義の武藝稽古場を定む。

〔官私隨筆〕

正月廿三日

一、以庫太被召候付罷出候。其御序に基五郎殿武藝御稽古御はじめ可被成に付、御稽古所

之儀舊冬榮操院樣仰之趣有之、猶又思召伺候處、御樂屋之內を御取込之儀僉議可仕旨御意也。

正月廿四日。前田齊泰如來寺に詣で、歸殿の際十村等の拜禮を受く。

〔官私隨筆〕

正月廿四日

一、當十二日御寺御參詣無之に付、十村等御禮不被仰付候處、今日如來寺へ御參詣、右御禮被仰付。自分はわざ〳〵出候には不及候へども、御勝手方等御用に而罷出候付、昨日示談之上服紗小袖・上下に而四時前罷出。但四時之御供揃之處、夫以前御出に而途中御出合に可相成に付、河北御門へ廻り罷出。

一、四半時過頃御歸殿、御禮相濟。

正月廿七日。前田齊泰夫人江戶城に登る。

〔溫敬公記史料〕

正月廿七日。夫人氏覲將軍。

閏正月七日。前田齊泰の生母榮操院の治療を大庭探元の外加藤邦安に命

ず。

〔官私隨筆〕

閏正月六日

一、榮操院樣前月廿二日頃より御風氣に付、小靑龍湯指上候處、御痰喘强御難儀に付、其後竹筎溫膽湯指上。御外邪は爲指御樣子に而も無之候へども、從來御衰弱之御氣味有之故、其所を恐れ候由御醫者申上候由、昨日土肥權六郎播磨守へ申聞候由。今日播磨守より演述。

一、右之後村田定之助罷出、今日御七大庭探元診之上、先御同樣に被爲在候へども、、とかく右御衰弱之所を恐れ候由。乍去只今御醫者御僉議抔之儀を申上候程之御事とも不奉存由申聞。

閏正月七日

一、以庫太被召候付、播磨守と兩人罷出、榮操院樣御樣子に付思召之趣相伺候處、御意共有之。今日加藤邦安御匕扣被仰付、診被仰付筈之由御意也。且猶又御醫者にも直に承り、主稅等へも示合候樣御意。森快安江戸詰に付可被召寄哉之旨等も申上之。

閏正月十五日。表小將等に帶佩の練習を努むべきことを命ず。

〔成瀬正敦日記〕

閏正月十五日

一、表小將たいはい稽古方不進勝に相成候付、僉議之趣申上、左之通被仰出、夫々申談候事。

荒木津太夫

和田源左衛門

庄田牛之助

右人々たいはい稽古方之儀、以後尚更格別出情候樣可申渡旨被仰出候。只今迄之姿にては一通り稽古に成行候而、畢竟右三人指引方も出來候程に執行有之樣、心得方之儀も可有御申渡候事。

閏正月

御番頭杉浦ゟ相渡す。

閏正月十八日。前田齊泰能を演ず。

〔官私隨筆〕

閏正月十八日

一、今日御能有之、山城守等拜見を被願候由に付、自分も同事相願、少々風氣に付山姥濟退

出仕度旨申上候處、勝手次第拜見之儀被仰出候由、御用番演述。御能御番組左之通。

白　髭　御　七騎落　二人靜　山　姥　御

放下僧　御　谷　行　祝言右近　御

閏正月。御扶持人等、村萬雜の賦課方法に關して協議し御算用場の承認を受く。

〔杉木氏御用方雜錄〕

近年村々萬雜等諸費次第增長仕居候に付、以來精誠に相成候樣詮議可仕儀に付、ヶ條大綱左之通。

一、村々用水幷道橋普請入用材木等買入方之儀、前廉長百姓等立會取調理、其時々通帳等を以調理付置、重而割符之刻紛敷儀無之樣入念談置可申事。

一、春秋夫銀幷打銀等、百姓中割符取立物之儀、是迄指合等中には煩敷儀も有之躰。以來は早春より壹ヶ年分通帳に仕立置、組裁許等何時引揚致披見候而も、能相分り候樣爲調置可申事。

一、肝煎等是迄御用に罷出候砌、或は年暮皆濟算用之刻、所々飯代中には酒等雜費書出候樣之向も有之躰。甚だ不埒之儀に付、以來右樣飯代等自分拂に爲致可申候。併御用指合に而、

代り組合頭之内相勤、宿料有之候はゞ、成限詮議爲致可申候。

一、御郡所・御改作所其外加州改方・魚津御役所等、御召人有之刻は、役人宿料迄村方より爲償候与歟、村々出來之儀も可有之候間、得与村役人方致詮議、難決品有之候はゞ組裁許ゟ相達、請指圖候樣可申談事。

一、肝煎扶持米増方之儀、諸郡御扶持人示談之趣相達申上、尤先振を以三ヶ一面割に爲致可申儀に候へども、是迄村に寄、居百姓迄之面に上中下三段に割候樣之分も有之、中には面平均に割、小前名高之者共及難儀候村方も有之躰。以來懸作面打込三ヶ一に當る內、頭振一軒に二升宛取立、此分引去、殘米之內乃至持高一石以下は二升何合与歟、五石以下は三升与歟、其餘五石以上之者面平均割に爲致可申与歟、釣合程能樣示談之上取極可申事。

但、百姓數纔に而三ヶ一面割出來兼候樣之分は、組裁許中手前において得与しらべ付詮議之趣、一郡切御扶持人示談之上取極可申事。

一、村々用水江筋取合候普請之刻、井肝煎を初燒飯料与名付、二升宛与歟相見料取請居候樣之分も有之躰。右等不相當儀に付、以來は相見料爲指止可申事。

但、御普請用水にも寄、六ヶ敷所柄有之候はゞ、井下等役人示談之上、何与歟取究可申儀に候間、組裁許手前に而しらべ、御扶持人も相談可有之候。

一、川筋等、定検地御手合等御請有之村々、右同様之事。

一、村に寄領内普請ヶ所割合、組合頭之内主附を立、人足遣之名目に而、乃至一人に付五斗、或は一石宛与歟相立、肝煎人足遣も不致候様之村方も有之。是等不相當儀に付、以來は爲指止可申候。併大村等肝煎一人に而手も廻兼候様之村方は、精誠詮議仕、人足米相極、右様之分は肝煎扶持米之内何程加入爲致候与歟、組裁許方に而得与加詮議、其上廻口江相談可有之候事。

一、村に寄領内普請ヶ所入用米、所々に而取極、百姓持高に應相勤居候村方も有之。中には入用米何十石与歟以前より取究、株持にいたし居候村方も有之躰。甚だ不埒至極之儀に付、以來は惣高割を以爲相勤可申事。

一、懸作多之村方抔は、一村に人足米先年より何十石与歟取極、年々取請來り候村方も有之。是等甚だ不正之至に付、以來相改候様急度詮議可仕事。

一、御藏入御收納米幷諸返上等餘荷、區々相成居申候。今般納方嚴重相改候上は、繩皮等餘荷御藏所遠近を見計、百姓幷小前者共迷惑無之様、村役人長立候百姓得与及示談取極可申事。

一、走給米、村に寄不同有之、往還筋あるひは御用村迯狀等烈敷ヶ所は、大躰指定居り候へ

ども、其餘近來無謂、增方に相成候分も有之躰に候間、以來相增候儀不相成。併增方不致而難成村方は、肝煎・組合頭等示談之上、隣村多少之振も取しらべ、村役人より組裁許江申達、請指圖可申事。

一、村々算用帳調方、區々相成居候に付、案文之通、以來諸郡一樣に相成候樣可仕候事。

一、村々米錢萬雜割符帳、去年算用帳に相添指出候上は、村々萬雜定書与引競、猶更村役人手前定書に無ヶ條は、組裁許致詮議、明白にいたし可申。併不行屆儀有之候とも、算用帳に申分無之上は、何分以來之所急度相改候樣取極可申事。

一、御作事所御普請方有之節、棟梁等に而も仕手方に罷越申分は、御用宿に仕間敷、相對自分拂に爲致可申事。

村々高懸・家懸・面懸諸萬雜定書

一、肝煎扶持米何程之內三之二高方、三之一面當り。

一、走給米同斷。

一、用水番料何程。

一、宮番料同斷。

一、御普請番同斷。

一、乞食等宿餘荷。
一、用水江筋等他村より請地定江代等何程。
一、諸役人宿雜費之儀は、兼而取極之通卦に書記置可申事。
一、諸役所ゟ御呼出出人身當ゟ雜費は、其人々より爲出可申、指添役人宿料迄高而より餘荷方記可申事。
一、村方諸普請人足之儀は、一日一人二升与歟。
一、藤內給米何程。
但、相定候外若無據萬雜ゟ打申臨時之品出來之時分は、組裁許ゟ相達請指圖打可申。其外村々より定式取極居候ヶ所は、右に準爲書加置、以來違亂不致樣可申渡与奉存候事。
右諸郡相談之品々、以來違失不仕樣相心得可申、指當候品迄覺書仕御內分奉窺申候。

丑閏正月

石黑源丞
北村與十郎
廣瀨又八郎
田邊次郎吉
瀨尾吉郎兵衛

朽木兵左衛門
林孫右衛門
伊藤源次
西田藤右衛門
三輪宇八郎
當摩太間
北村惣助
狩野恒方
伊藤八郎
得能覺兵衛
荒木平助
石崎市右衛門
長田金右衛門
安藤次左衛門
折橋善兵衛

寺林瀬一郎
齋藤庄五郎
金山十次郎
寶田宗兵衛
杉木彌助
金山伊右衛門
伊藤次郎左衛門
結城七郎右衛門

御算用場

御改作御奉行所

右見届置候、以上。

二月六日。前將軍德川家齊薨去の報金澤に達す。

〔成瀬正敦日記〕

二月六日

一、暫有之當席四人御居間江被爲召候付、居臺・鋏持罷出候所、宿繼御奉書御認之儘御渡に

付、如例上認等夫々取拂、配符等入御覽、御奉書御拜戴被遊。御上下御着用 御奉書御日附前月晦日、大御所樣御不例被爲在候所、御養生不被成御叶、晦日辰之下刻薨御之旨、御老中方脇坂殿之外 御連名之御奉書也。外御別紙に、半切御連名御無判也 公方樣・右大將樣御愁傷被爲在候へ共、御指障も不被爲在候旨也。

〔御郡典〕

大御所樣御不例之處、御養生不被爲叶、前月晦日薨御に付、前々之通普請・鳴物等遠慮之筈に候條、早速夫々可被申渡候。且亦追而申渡候迄之內、浦方獵業指止候樣、先例之通可被申渡候、以上。

丑二月六日　　前田內匠

有賀寬兵衛殿

〔諸事要用雜記〕

二月六日

一、今日九つ三步御奉書到來、奧御取次を以上り候。

御奉書左之通。

一筆致啓達候。大御所樣御不例被成御座候處、御養生不被爲叶、今辰下刻被遊薨御、絕言語

御事候。右之趣爲可申達如此候、恐々謹言。

閏正月晦日

土井大炊頭利從　判

太田備後守資始　判

水野越前守忠邦　判

松平加賀守殿

別紙

公方様・右大將樣御愁傷之御事候得共、御機嫌被爲替御儀無之候間、可御心易候、以上。

閏正月晦日

土井大炊頭

太田備後守

水野越前守

松平加賀守殿

〔温敬公記史料〕

閏正月晦。前將軍家薨。老中奉書報之。二月六日。達于金澤。遣小將頭栂杉松弔之。

〔温敬公記史料〕

二月六日。前田齊泰學校に臨む。

二月六日。臨學校。

二月九日。前將軍德川家齊薨じたるを以て普請・鳴物等を遠慮すべき日數を定む。

〔御郡典〕

覺

一、御當地幷遠所川除・川掘等御普請方御作事方之儀、當六日より同十二日迄七日過候はゞ初め可申事。

附り、石・大材木等を釣、虹梁上、地形石搗等、大勢懸り目立申樣之儀は、御法事相濟候迄可有遠慮候。其外御城御普請方、幷所々御旅屋修覆輕き儀、右日限之通人少に懸り候而初め申樣可申渡候事。

一、當六日より七日過候はゞ、浦方獵業仕候樣可被申渡候。其外諸殺生獵業之者は尤可爲同事事。

一、鐵炮幷鳴物之儀、御法事相濟候迄は遠慮可仕事。

一、鷹扣候儀幷自分諸殺生は、五十日より內は無用可仕事。

一、魚鳥之儀、當六日より七日過候はゞ商賣可爲仕事。

以上

二月

先達而相觸候遠慮日數等之儀、別紙之通に候條、被得其意、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

二月九日　　前田內匠

津田　昇殿

槻尾甚七郎殿

神保舍人殿

〔御郡典〕

大御所樣薨御に付、押立候普請・鳴物等遠慮之儀、先達而相觸候通に候處、普請は當月廿日より御免之段、江戸表より申來候。仍而普請之儀は不及遠慮候條、被得其意、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

二月廿三日　　前田內匠

槻尾甚七郎殿

〔御郡典〕

大御所様薨御に付、鳴物等遠慮之儀、先達而相觸候通に候處、今般於東叡山御法事、前月廿二日より初、今月八日御結願之由に候間、鳴物等明九日より不及遠慮候。尤諸殺生は當月廿日迄遠慮之筈に候條、被得其意、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

三月八日　長又三郎

槻尾甚七郎殿

二月十日。昨年の令により御供道中をなす者の携ふる武器の數を復舊するも、會所銀の貸與を増額せざることを議す。

〔每日帳書拔〕

二月十日

一、格外御省略に付、文政十一年御歸國之節より、御供道中等武器御減少之儀被仰渡、其後天保六年より御供人等へ御貸渡之會所銀も、夫々御減少之儀被仰渡候。然處去年御歸國之節より、武器は格別之儀に付文政十一年以前之通爲持候樣被仰出候。依之道中入用も相增申儀に候間、會所銀も天保六年以前之通御貸渡御座候樣、御道中奉行より相達候付、僉議之上紙面之趣難承屆段申渡、しかし勝手難澁に而鑓等相減度人々は、御供道中を初常旅行之人々も、勝手次第之處可申渡哉与相窺候處、常旅行之人々之儀は伺之通、御供道中之儀は去年格別に

文政十一年以前之通と被仰出置候儀に候間、御供之節は相減不申趣を以宜僉議有之様仰出候付、常交代等に而罷越候者に而も、御歸國に供に加り候者も有之儀故、是もやはり去年被仰出候通に仕置可然と分而不申渡候。會所銀増之儀は難承届段申渡候様、御道中方へ申達候旨申上候事。

本文は前田齊泰の事に係る

二月十一日。前田齊廣夫人の父鷹司政熙薨去の報金澤に達す。

〔成瀨正敦日記〕

二月十一日

一、八ッ時過京都詰人より、當八日不時立早飛脚日𠎀歩に而到來、鷹司准后様七日申下刻薨去之旨、爲御知有之旨言上。

二月十二日

一、眞龍院様江御朦中爲御伺、御近習頭御使を以て、御重詰一組今日被上候事。

二月十二日

一、准后様薨去に付、今十三日九時過、頭分以上登城伺御機嫌可申、幼少・病氣等之人々は、御用番宅江使者可指出、且普請は十一日より十五日まで五日遠慮、其他は此間觸付之通り普請方等相心得、鳴物等も遠慮之筈に候得共、遠慮中之趣に、譯而日數等不申渡旨、夜前御用

番内匠殿より御廻文有之候事。

〔御郡典〕

鷹司入道准后様、去七日薨去之段申來候。依之頭分以上之面々爲伺御機嫌、明十三日九つ時過可有登城候。幼少・病氣之人々は御用番宅迄以使者可被申越候。

一、右に付、普請は昨十一日より當十五日迄五日遠慮之筈に候。其以後御城御普請方等之儀は、此間申渡候通可被相心得候。且鳴物等も遠慮之筈に候得共、此節之儀故譯而不申渡候條、此段組・支配不相洩様可被申渡候。

右之趣可被得其意候、以上。

二月十二日　　前田内匠

槻尾甚七郎殿

二月十四日。光格天皇の御諡號治定したりとの報金澤に達す。

天保十二年なり

〔成瀬正敦日記〕

二月十四日

一、京都當五日立町飛脚到來。平田内匠より指出候御沙汰書到來、去月二十七日御諡號御治定。

二月十五日。前田齊泰、鷹司家に金子を贈るべきことを命ず。

〔成瀨正敎日記〕

二月十五日

一、鷹司樣ゟ例年春御內々被進候金子二百五十兩、今度之御樣子に付、兼而御勝手御難澁御指支之儀は御察被遊候間、此節右二百五十兩被進候樣被成度、且以來も二百兩（五十兩は御減宛に而宜候旨。）被進候樣被成度、御指止に相成候而は、却而此末御難澁筋等御賴有之而は、却而御心配被遊候間、何分宜取計之樣當席へ申聞候樣、眞龍院樣被仰出候旨、此間飯尾吉太夫小左衞門へ申聞に付、猶更申合、後々之二百兩之儀は、先當分与申事に而可御宜哉之旨申上候所、至極尤之儀、左樣御座候而一段可御宜旨に付、其段委曲申上候。兩條共御許容被成進候旨被仰出、其段田邊左兵衞を以坂井申上候所、早速御許容被進御悅被成候旨、重而左兵衞罷出申聞候。且右只今被進候二百五十兩之分は、金子五郞太夫上京之節被進度旨に付、京都渡り之事に遂僉議、今日京都詰人ゟ入申遣置候事。

〔官私隨筆〕

二月十六日

一、小左衛門罷越、鷹司樣へ御助力金之儀、眞龍院樣より御願之趣御許容被進候由等演述。

二月十九日。御勝手方御用を奥村丹後守一人に命ず。

〔官私隨筆〕

二月十九日

一、城州別席に而演述候は、先刻御前へ被爲召、御勝手方御用之儀丹後守一人主付被仰付候間、山城守より可申談旨御意之由演述に付、奉畏候。此間も申上候通、一人に而は中々行屆申間敷、恐入候へども、被仰出之上は何分にも相勤可申、乍然其內奉願儀も可有御座候間、宜御申上候樣致度旨申述之。

天保十一年五月十六日の條參照

二月廿一日。幕府、前田齊泰にその外祖父鷹司政熙の薨去を弔す。

〔諸事要用雜記〕

一、今度鷹司准后樣薨去に付、御朦中御尋御奉書、去廿一日聞番被呼立、御用番より御渡。右大將樣より之御分も一集に御箱入御渡に付、不時立早飛脚を以、萬之助等より御差上御座候由。御用番內匠殿より被差上候事。

前田萬之助は家老にて在江戶
前田內匠は年寄

御奉書左之通

鷹司准后殿薨去之段、達高聞候處、可爲愁傷と被思召候。此由可相達旨、依上意如此候、恐

々謹言。

二月廿一日

土井大炊頭利從　判

太田備後守資始　判

水野越前守忠邦　判

松平加賀守殿

鷹司准后殿薨去之段及言上候處、可爲愁傷と被思召候。此由可相達旨、依御諚如此候、恐々謹言。

二月廿一日

堀田備中守正篤　判

松平加賀守殿

二月廿六日。森快安、前田齊泰の生母榮操院の病を診す。

〔官私隨筆〕

二月廿六日

一、森快安江戶より昨夕罷歸り、榮操院樣御樣子昨今相伺候由に付而、幸今夕御廣式に居候樣子に付呼出、播磨守相同じ相尋候處、餘程御六ケ敷御事之由等段々申聞也。御藥は先只今之御藥に而可御宜旨。

本年四月廿一日の條參照

二月廿七日。文政金銀引替方の手續を告ぐ。

〔觸留〕

古金銀並文政金銀引替方等之儀に付、去年以來從公儀相渡候御書附等、其節々一統相觸置候通に候。依之猶又今般遂僉議候條、右古金銀並文政金銀所持之者は、當三月朔日より金澤町兩銀座方へ、目錄相添可指出、其節當座爲代通用手形相渡置、夫より日數八十日過候者相渡置候銀手形と、新金銀引替可相渡候事。

但、金壹兩六拾四匁閤を以銀手形可相渡置候。且江戸表へ往返之駄賃等之儀者、彼地に而御手當御渡有之内を以相辨、過金者引替人江可相渡事。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

二月廿七日　　前田內匠

三月朔日。前田齊泰の生母榮操院を診する爲京師より醫師を招かしむ。

〔官私隨筆〕

二月廿七日

一、榮操院樣御樣子に付京都抔より醫者被召候儀、幷御發駕御延引御願之儀に付、善右衞門

兩人は本多播磨守及び奧村丹後守

播磨守迄申聞之趣あり。重而兩人善右衛門に逢、存寄之趣申入。

〔官私隨筆〕

二月廿八日

一、京都へ可被仰遣醫師之儀、福井近江守・高科安藝守・大田――、是等は天脈之診等有之に付、餘國へは難罷出躰に候。其餘三角典藥少允・山本安房介・森田周一、是等可宜旨御醫者申上候由、善右衛門申聞候也。

　右三角又は山本又は森田被召候儀、三月朔日御用番へ被仰出被申遣。

三月四日。前田齊泰の生母榮操院の病むを以て參覲の期を延ぶることを幕府に屆出しむ。

〔官私隨筆〕

二月廿九日

一、榮操院様夜前より又々御下り有之、御醫者伺候處、先御替被成候儀も無之候へども、如此度々御下り有之候而は不宜御儀故、今日より錢氏白朮散に御轉方指上候旨。

一、右御様子に付、御用部屋より示談之上、御發駕御延引之儀思召之程相伺候處、此御様子之處御發駕は難被遊被思召候旨御意之由。且又京都より醫者被爲召候儀も相伺候處、右兩條

共示談之趣可申上旨御意之由、小左衛門申聞也。仍而何も示談可仕哉と之趣、播州より以小左衛門被相伺候處、示談仕候樣御意之由故、出席切示談之上、御發駕御延引御願之儀別存無御座、醫者之儀も被爲召候方可然と申合候由、兩人一所に小左衛門迄御請申入候。

〔成瀨正敦日記〕

三月四日

一、榮操院樣御滯に付、御發駕御延引之御屆書下物、今便早飛脚歩を以、不破紋左衛門等江被仰出之趣申遣。尤右御屆方之儀荒井殿等へ及御內談之上、水野越前守殿へ罷越、御挨拶次第御用番へ御屆に相成候樣。且右は御願立に而無之而は不相成譯に候へば、御承知之御日間無之候間、先御當病之事に取計、御屆仕候樣被仰出候旨等も申遣候事。

三月六日。絹・紬の入質禁止の令を解かんことを議す。

〔官私隨筆〕

三月六日

一、町奉行兩人罷出、質商賣近年絹・紬受候儀御指留に候へども、御解之儀願出居候。此儀追而可相達候へども先物語いたし候。いづれ御指解無之而は却而宜かる間敷旨申聞候也。

但、當時布・木綿之卷添抔と號し候而、大方質屋每に受居候躰。迚々檢斷も不仕事故、今

更軒別に改候儀も難仕、當時は絹・紬相成不申候故、輕きもの抔後用之絹・紬を致着用、布木綿を質に置候もの抔も有之躰之由等申聞也。

三月六日。老牛馬を他國に賣出すことを禁ず。

〔郡方御觸〕

老牛馬他國江賣出候儀不相成段、先年被仰渡も在之に付、毎度申渡置、既に文政三年も一統申渡置候所、近年博勞共猥に他國江賣出候躰粗相聞江、右樣猥に賣出候而者、御締方相立不申、其上夥牛馬致減少候者、御用皮上納方も指閊申儀に候條、右樣之儀無之樣、博勞共者不及申、一統不相洩樣、夫々嚴重可申渡候、以上。

丑三月六日　吉田藤馬

加州三郡十村中

松任町方地方役人中

尙以早々相廻、從落着可相返候、以上。

三月十四日。他國御使人たる者に貸與する金高を改定す。

〔毎日帳書拔〕

三月十四日

一、左之覺書御勝手方より被出之。

定番頭江

他國御使人へ御貸渡金高、天保四年相改申渡置候通に候處、今般僉議之趣有之、左之通御貸渡被仰付候。

人　持

三千石以上	四百兩
二千石以上	三百兩
千石以上	二百兩
組頭知行高無構	百　兩
物頭知行高無構	七十兩
諸番頭知行高無構	六十兩
平士八百石以上	六十兩
同八百石以下	五十兩

右之通被仰付候條、是迄不時願方も有之候得共、如此御引直之上は萬事格別遂省略、何分不時拜借不仕樣相心得可相勤候。此外文政三年申渡通相心得可申候。

右之趣被得其意、夫々可被申談候事。

辛丑三月

三月十四日。石川郡本吉に鰯の大漁あり。

〔官私隨筆〕

四月十七日

一、奥村梶之助罷出候付、支配所之樣子承之。春來不獵之處、先月十四日之頃三四十年來無之程鰯取上候由。一艘之舟に網十七束計積候儀に候處、鰯多くさし、五・六束ならではのせ得不申。夫故餘は沖におろし置、三度程に漸引寄候舟二・三艘も有之由。一網に歟二萬程さし候處、七萬に及候旨。

奥村梶之助は本吉奉行

三月十八日。小松御馬廻に使用せしむる賃馬の件を議す。

〔官私隨筆〕

三月十八日

一、岡田勝左衞門呼出、小松賃馬之儀僉議之趣尋候處、御馬廻中小身に而御符抔之儀出來不申、是迄四百目御渡之分に而年々馬を求させ候へども、拂底にて彼是遲々に相成、漸相求候ても宜敷馬とては無之、初心之人々揚渡しさへ成兼候族故、一兩度位は乘候へども其後乘不

申樣に成候故、彌貸馬持難立樣に相成、すべて無實成事に相成候故、夫よりは隔年にいたし候へば、稽古は間遠に成候へども、八百目にも及候事故、其内六百目を以馬を爲持、二百目計は町奉行へ預置、少々充に而も利足を取立、小身之人々馬札之代に相渡候樣にも仕候はゞ可然と先達相達候所、申渡之趣に付重而此度之通致僉議候譯に而、此間細川久左衞門及示談候處、六百目計も有之候はゞ、大方馬も可有之樣に申候。右等之譯故いまだ仕法書等は不仕出申聞候に付、右兩樣之僉議各手前に而はいづれ可宜被存候哉と尋候處、稽古數は當分試し候樣之ものに候へども、隔年にいたし、右之通少々に而も餘分を預置候方可宜哉と存候儀之旨申聞也。

三月十九日。京醫山本安房介、前田齊泰の生母榮操院の病を診す。

〔官私隨筆〕

三月十三日

一、山本安房介近日下向之筈に付、御廣式へ出方之儀、先年竹中文輔召下り候節、當御前診被仰付、御廣式へも罷出候處、御鈴通り罷越候。依而先日御意も有之、其趣に心得居候處、先年狄野左馬允被召候節は、御廣式へ直に罷出候由に候。左候へば其通に而も可宜哉とも存候へども、餘りに見苦敷如何可有之哉。されども又此度御廣式御用に而被召候處、御表へ罷

出候段も如何歟、且御鈴口通り候儀も他國者ながら如何にも被存、此所存寄承度旨大野申聞候也。然處今日播州不參に付、以服部信藏及示談候上、兩例有之儀候はゞ、同歟は御廣式へ直に罷出候樣有之可然、されども御鈴口より通り候儀も强而存寄は無之旨申入候。

〔宮私隨筆〕

三月十九日

一、京都官醫山本安房介被召、昨日到着、今日罷出、榮操院樣御樣子相診、相公樣も御逢被遊候。最初御用番瀧之間に而逢被申、其後御鈴口通御奥へ被召、御表へ罷出、矢天井之間へ着座之上、御醫者森快安・江間篁齋罷出、其上自分罷出及挨拶退候事。

三月廿日

一、坂井罷越、安房介へ暫たりとも御療養御賴被成度旨御願之趣、榮操院樣より被仰進、相公樣にも其思召に付、安房介へ申入候樣被仰付、則申談候處御請申上候由。依而今日より御賴之旨申聞也。

三月十九日。御勝手方の難澁を救濟すべき諸士の意見は直に御次に上申することを得しむ。

〔若年寄方御用寫〕

大藏少輔は大聖寺侯前田利平

三月十九日

御勝手方御難澁に付、人々重而心付之趣、若御勝手方へ難相達儀は、御次へ直に可申上、諸役等其外他役等之儀不關品に而も、御省略に相成品、御格をも相改り候儀も不苦候間、人々存付可相達旨、御勝手方より書取被相越候事。

三月二十日。徳川家慶、前將軍の遺物を前田齊泰等に贈る。

〔溫敬公記史料〕

三月廿日。將軍遣若年寄堀大和守。賜前將軍遺物小刀信國價金三拾枚於公。備前國光忠價金拾五枚於犬千代丸君、備前國宗光價金拾五枚於喬松丸君、又遣老中土井大炊頭賜夫人料紙硯箱。

三月廿三日。大聖寺侯前田利平參覲の途金澤城に登る。

〔成瀬正敦日記〕

三月廿日

一、大藏少輔樣當廿二日御在所御發途、廿三日金澤御止宿、御對顏御願に付、此間御用番より被相伺、御許容被進候。右に付御登城之節、御近習頭主付被仰付候振に付、書出申談候所、有澤澤右衛門・山森權太郎之由に付、其段相伺、右主付被仰付候旨、右兩人江今日申談候事。

一、三月廿三日

一、八ッ時前大藏少輔樣御登城、御口上御家老承之、申上り、追付御對顏可被遊旨被仰遣、御居間書院江御通被成候上、御出御對顏、御料理之御挨拶有之御入、暫御出口御屏風際に御待被爲入、追々御料理二汁五菜上之、御引菓御持參被進、一と先被爲入、重而御出御盃事被遊、又被爲入、御料理相濟申上、重而御出御挨拶被遊、無程御退出に付、如例農人之御杉戸迄御送被遊、被爲入候事。御料理之節御相伴美作守之由。

〔官私隨筆〕

三月廿三日

一、九半時過頃大藏少輔樣御旅宿御出之付人來り候付、何も御玄關へ罷出。但今日のしめ・上下也。御家督後去々年御領分虫付に而、御暇御願御在所へ被爲入、今年御出府、御先例御入部に而初而御登城とは替り候付、あなた御服之儀町奉行より承合候處、御長上下之由故一統のしめ也。且又御式臺邊へ參り居候內、尾坂下之付人來り、橋爪御門下座之聲に而御式臺階を下り候也。

一、追付御出、芙蓉之間へ御溜り、御口上被仰述等濟、丹後守一切、美作守・內匠・內膳・靱負一切、御家老一切、若年寄一切罷出。

一、追付御居間書院へ御通り、御料理出、御相伴美作守也。御前御出、御盃事あり。

一、御居間書院へ御通り之上八つ打。

一、後御菓子之頃各瀧之間伺公所へ參る。

是は芙蓉之間へ重而暫御溜り、高田善右衛門・内藤勘兵衛罷出候由故一先如此。

一、勘兵衛罷出候節各は御玄關へ參る。追付御退出。

三月廿七日。京醫山本安房介金澤を發して歸洛す。

〔官私隨筆〕

三月廿七日

一、山本安房介今朝此表發足之筈也。

三月。在江戸の諸士に不時拜借を容易に許さゞるべきを告ぐ。

〔雜事日記〕

定番頭江

江戸表役向等入用多、難澁之人々不時拜借相願候之儀、近年次第に致增長、當時不一形御指支之節に候處、右之通不時御貸渡打重り、彼是仕迯り之圖致相違候。其上返上方は御申渡次第可相心得旨申聞相願、返上之節に至り年賦上納等之儀再三强而願出候族茂有之、不實之次第に候。今般會所銀御貸渡茂、以前之通に候儀候間、以後何分不時拜借不申様可相心得候。右に付已來指定御貸渡金等之外、請人無據儀に而不時拜借相願候共、江戸表切に而者不承

届、此表往返之上申渡候筈に候。依而一通り之願に而、彼地指懸り拝借之儀者出來不申候條、其心得可有之事。

御勝手方

辛丑三月　奥村丹後守

組裁許は十村なり

四分は衍か

三月。諸郡村々組合頭出張の際支給すべき料米の額等を定む。

〔郡方御觸〕

諸郡村々組合頭共之儀者、其村長百姓之内より相勤候役前故、無給銀に而相勤可申所、いつとなく諸御用に罷出候砌、村方より一日米二升宛相渡候村茂有之、小村等不相渡所有之、或者年中料米何程与相極候ヶ所も有之由に而、自然与村方雑費相懸り、且又宿立・町立幷に湊ヶ所者、右に准じ雑費相増居候躰に候。依之定式奉行出役幷に組裁許・新田裁許・山廻等村廻之外、肝煎外御用に罷出指合申時分、御藏方幷に用水方御用等に組合頭罷出候砌、一日二升宛料米可相渡候。前段宿立等之ヶ所料米員數之儀者、追而遂詮議可申聞、其上に而取極可申渡候。

一、組裁許幷新田裁許・山廻り、村廻り之砌、以來上下二人に而晝飯代三百文、泊り五百文与相極有之、内宿料二分四分幷米代相拂候分引去り、殘村餘荷可致、手代共賄之儀も、晝百文、

泊り二百文之內、宿料二分幷米代主人より相渡、右同樣取極候。且又山方等無之組々裁許廻村之儀者、成限り其日每歸宅可致事。

右之趣得其意、村々江も一統不相洩樣、夫々可申渡候、以上。

丑　三　月　　　　三州御郡奉行

諸郡十村中・新田裁許中・山廻中

尙以早々先々相廻し、從落着可相返候、以上。

四月四日。寶圓寺の山門再建を命ず。

〔官私隨筆〕

四月四日

一、寶圓寺山門御再建之儀申渡之下物、以林武左衞門上之候處、追付被返下、伺之通被仰出。

四月五日。三味線彈の婦人を招きて遊興したる諸士に譴責を命ず。

〔成瀨正敎日記〕

四月五日

一、目明之三味線彈之女呼寄及遊興候人々、御聽に立居候分、於御次頭々を以御叱被仰出、夫々頭々呼立今日申談候。奧書院於御緣側、當席兩人充罷出申談。委曲は御內用之儀故、態与相記不申候事。

〔官私隨筆〕

四月六日

一、御意被成候は、今度御家中藝者抔呼候儀に付被仰出候趣有之候處、年寄共之内にも右に似寄候儀有之様に沙汰被聞召候。先達而山城守等へ心得方申聞候事も有之候間、其振に丹後守より可申聞旨御意に付、應じ及御請。

四月十一日。年寄中等の今年の借知はその出願を待つべきこととす。

〔官私隨筆〕

四月十一日

一、年寄中等御借知高之儀、去年は願にて年寄中・御家老中は百石に付二十石充御借上に相成候。今年之儀右之通にも示談可仕筈に候へども、深く難澁之人々も有之躰。御家老中抔は別而難儀之様子に付而、同席共等へいまだ示談は不仕、先彼方より願出次第之心得に罷在、御算用場奉行へは内々了簡承候處、是も願次第可致哉と申居候。此儀此間中可申上處洩置、今日に相成申候。御序に被申上、被仰出も候はゞ可有御申聞旨主税へ申入。申上候所思召も不被爲在御様子之旨卽日演述。

四月十一日。前田齊泰、金澤を發して參覲の途に就く。

〔成瀨正敎日記〕

左之通は記載なし

四月十一日

一、今日御發駕に付、御殿揃刻限四ッ時過之由に候得共、當席は例刻より罷出候。尤上下着用罷出候事。

一、八ッ時前御供人相揃候旨、御横目より申上り、御供相廻候樣被仰出。

一、八ッ時過御旅裝束被召替、御居間書院へ御出、御先立主税 眞龍院樣御附使者林武左衛門被爲召、御直答被仰上相濟、左之通三切に被爲召御意有之。

右相濟被爲入、御居間に御着被爲召候付、主税・善右衛門罷出、益御機嫌克御發駕被遊奉存恐悦候旨申上候所、無事に与御意に付、蒙御意難有仕合奉存候旨御請申上退候。續而大村肴次郎・中村五兵衛・山森權太郎・古屋喜市郎被爲召、御意有之、相濟、河村晩鷗被爲召御意有之、相濟、御奥へ被爲入候事。

一、右御附使者御返答之節、御居間書院二之間御敷居より二疊目へ御進被遊候故、御先立も相進可申所、主税心得違、每歲之如く上之御間に落し候。以來心得之爲記置候事。

一、無程御供宜旨申上り、八ッ半鐘に而御出、御居間書院迄御先立善右衛門、夫より式部、蔦之間御緣側之內眞龍院樣・姬君樣御附使者罷出居候所、御近習頭に而奏者御供也。御中座被遊、夫より鷲之御杉戸邊、將監罷出居候所に而御中座、御意有之、御式臺階下御左右へ、年寄中・御家老中・

若年寄中罷出居候所に而御中座御意有之、夫より御馬上出人へ御意、如毎御作法書之通に而、益御機嫌克御發駕被遊候。

〔諸事要用雜記〕

四月十一日

一、八半時前益御機嫌能御馬に而御發駕、御城中御作法夫々毎々之通。小降に付御供人雨具に而も無之、次第に强降、大橋邊より御駕籠に被爲召候。

一、森下御小休に而罷出奉伺御機嫌候筈に而罷出。暫休息之內御發駕被遊候付不奉伺御機嫌、津幡に而其段申上奉伺候事。

一、七半時過津幡御着被遊候事。

四月十二日

一、今朝六半時津幡驛御發駕被遊、倶利伽羅御小休被遊、今石動御中休、福岡御小休、九半時過高岡驛御着被遊候事。

一、高岡御着之上追付瑞龍寺御參詣被遊、八半時御戻被遊候事。

四月十三日

一、七半時過高岡御發駕被遊、所々御休被遊、夕□半時過魚津御着被遊候事。

一、魚津に而、引網は當時御殺生扣中に付不被仰付候儀に被仰出置候得共、獵師共下し置候網有之旨に付、則御覽被遊候。

四月十四日

一、夜明發足御本陣へ出る。無程御發駕、所々被仰出通り御休被遊、八時前泊驛御着被遊候事。

四月十五日

一、六半時御供揃に而、しら〳〵過泊驛御發駕被遊、所々御小休等被遊、難所々々無御滯御越被遊、八時過糸魚川御泊ゟ御着之事。

一、親不知少々快晴に比し候へば波高也。駒返今年御普請格別に出來也。

四月十六日

一、今曉七半時過糸魚川驛御發駕被遊、所々御休被遊、有馬川に而雨具被召る。夕七半時前高田驛御着被遊候事。

四月十七日

一、今朝七半時御供揃に而、同刻過高田御發駕被遊、所々御休被遊、七時前柏原へ御着被遊候事。

四月十八日

一、今朝七半時之御供揃に而、同刻過柏原驛御發駕被遊、所々御休被遊、夕七時前矢代御着被遊候事。

一、今日兩川追々減水、何茂御滯なく御通行被遊候事。

一、筑摩川舟渡場相損に付、餘程上に而越候。

四月十九日

一、今朝七半時御供揃に而、同刻過矢代御發駕被遊、所々御休被遊、七時前小諸驛御着被遊候事。

一、上田御中休より御馬被爲召、滋野より御駕籠之事。

四月廿日

一、今朝六半時小諸驛御發駕被遊、所々御休被遊、夕七時前坂本御着被遊候事。

一、今日輕井澤沓懸之間より降出、雨具に成御道甚之泥道に而各難儀也。

四月廿一日

一、今朝夜明御發駕被遊、所々御小休等被遊、落合新町より雨天に成、七半時過本庄驛御着被遊候事。

四月廿二日

一、今朝夜明早々本庄驛御發駕被遊、所々御小休被遊、七時前鴻巣驛御泊ゟ御着被遊候事。

四月廿三日

一、今朝五時過御供揃、鴻巣驛御發駕被遊、所々御休被遊、八時過浦和御泊に御着被遊候事。

四月廿四日

一、今朝六時御供揃に付七時浦和發足、戸田渡場より□飛坂寄に而夜明る。板橋に而支度五半時過江戸へ致到着候事。

〔溫敬公記史料〕

四月十一日。駕發金澤。廿四日。到于江戸。青山將監扈從。

四月十一日。銀子預手形の一部を小割札と引替ふることを決す。

〔官私隨筆〕

四月十一日

一、去亥年相達候通用手形百目札之内三百八十貫目相減、小割札相增、都合五千貫目に成居候へ共、去暮も小割拂底に而指支候付、今五百貫目百目札之內小割札に切替候由、御算用場奉行・引替奉行・町奉行覺書出之。

四月十五日。当年の借知高は昨年の通りたるべきを告ぐ。

〔毎日帳書抜〕

四月十五日

一、当年御借知高去年之通被仰付候旨等、頭分以上御用番又は筆頭之面々、出仕後一人充松之間二之間において年寄中等列座御用番申渡之。

〔觸　留〕

御勝手向御難澁之上、近年不作等打續、去年茂一入御指支に候得共、御家中之人々も難澁之事故、御借知高一作御引直等之儀去夏申渡候通に候。右に就而は、御不足高色々御無理成御用達等を以御辨之處、追々無御據不時御入用も打重り、過分之御不足高に而、御家中增御借知を以不被仰付而は難相成御図り方に候處、御家中之人々も殊之外難澁之躰に付、御運方之儀指當候處幾重共御手繰を以相辨候樣に被仰付、御借知之儀は今年茂去年之通御借上可被仰付旨被仰出候。乍去御図り方右之通に而御辨用甚無覺束、誠御急迫至極之御時節に候條、此段一統相心得、萬端遂節儉取續可申候。

右之趣被得其意、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

四　月　　　　　　　　　　　　　　　村　井　靫　負

今般御借知之儀、別紙に申渡候通に候。近年過分之御借知被仰付候得共、いまだ御不足高御理合等も全出來不申內、去年御借知被成御改候付ては、御上御勝手御運方彌增御指支、過分之御不足相立、誠に被成方も無之御次第に候得共、御家中之人々も甚指支候躰に付、今年も又々格別之思召を以、去年之通被仰付候儀に候。箇樣之御時節に候處、人々心得方相弛み候而者如何に付、此段分而申談候條、一統質素に相萃、御奉公取續御難題之儀等相願不申樣、嚴重相心得可申候事。

四月十六日。強烈の雷鳴あり。

〔官私隨筆〕

四月十六日

一、今夕强き雷鳴有之に付八半頃歟出宅、先二御丸御廣式へ罷出、横地治兵衛に逢候而御機嫌相伺候處、追付以同人御懇之仰有之旨演述、及御請。但御子樣方は其節御宮へ御遊に御出、夫より神護寺へ御出之處、同寺に被成御座候內强き分有之、暫御見合追付御歸、何之御替も不被成御座候由。

四月十八日。東本願寺新門跡遷化の報金澤に達す。

〔御郡典〕

東本願寺新門跡遷化之段申來候。依之普請は今日一日、諸殺生・鳴物等は明後廿日迄三日遠慮之筈に候。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配相洩樣可被申渡候、以上。

四月十八日　　　村井靭負

石野右近殿

四月十九日。武田秀平をして製せしめたるぞんがらすを江戸邸に送る。

〔成瀨正敦日記〕

四月十九日

一、武田秀平被仰付置候ぞんがらす出來指出候付、今便指上候事。

四月廿一日。文政金銀等引替手續に關する前令を改む。

〔觸留〕

古金銀並文政金銀所持之者は、金澤町西銀座方江目錄相添可指出、其節當座爲代通用手形相渡置、夫より日數八十日過候者、相渡置候銀手形と新金銀引替可相渡段、先達而一統申渡置候處、重而詮議之趣有之、右當座爲代通用之手形相渡儀指止、銀座役人請取手形に御算用場等加印之分相渡置、前段之通八十日過新金銀と引替可相渡候事。

本年二月廿七日の條參照

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

四月廿一日　　　村井叛負

四月廿四日。前田齊泰江戶に着す。

〔諸事要用雜記〕

四月廿四日

一、今朝六時御供揃に而、嚴に而夜明候由。四半時過益々御機嫌能御馬に而御着被遊、追々御付人に而奧之口御式臺へ罷出。中之口內江頭分罷出候處に而御意、山城守・萬之助罷出候處に御馬被爲留御意被遊、犬千代丸樣・喬松丸殿階上江御出被爲入、御入被御見懸階下江御下り被遊御挨拶。夫より自分御先立相勤、席之前通御居間書院四之間・三之間、同所に姬君樣御附使者横田小一郞殿被罷出。其節、只今到着、大儀と被仰述、御稽古所通り御居間江被爲入候事。

〔成瀨正敦日記〕

五月二日

一、前月廿四日出足足輕早飛脚へ傳封坂井氏等より之狀一封、割場奉行より今朝迄越候。

右は同日益御機嫌克御着被遊候旨折紙狀也。高田氏へ披見として相送る。

四月廿六日。德川家慶使者を遣はして前田齊泰の參覲を勞せしむ。

〔諸事要用雜記〕

四月廿六日

一、今日上使御沙汰に付四時前出席、相揃候上被爲召候事。

一、九半時過爲上使御老中堀田備中守殿御出、御城下御付人に而御出向、大書院二之間に御見合、昌平橋御付人に而御廣間御緣頰へ御出、三丁目に而御式臺へ御出、無程堀田殿御出に付御門外迄御出向、御誘引に而御大書院ゟ御通上意。

松平加賀守

參府之段達上聞、大儀被思召上使被成下候。追而御目見可被仰付候。

御拜聽。夫より御小書院ゟ御出、御誘引御料理出、御盃事も有之。夫々御例之通被爲濟、御都合能相濟、八つ一分御退出被成候事。

四月廿八日。前田齊泰登營して參覲の禮を行ふ。

〔成瀨正敎日記〕

五月七日

一、前月廿六日上使以堀田備中守殿如御例御拜領物有之、翌廿七日御老中方御連名御奉書に

よつて、翌廿八日御登城被遊、御參勤之御禮被仰上、御家來兩人御目見被仰付候旨等、折紙に而申來る。

〔諸事要用雜記〕

四月廿八日

一、今朝懸流五ッ九分御登城被遊、於御座間御參府之御禮御首尾被仰上、御手自御熨斗鮑御頂戴、御懇之被爲蒙上意、畢而御禮御謁に而被仰上、御下り井伊掃部頭殿御老中方御勤被遊、九ッ九分御歸殿被遊候事。

〔溫敬公記史料〕

四月廿八日。登城謝之。前田萬之助・青山將監亦謁將軍。

四月。御廣式女中の服裝は佳節以外紬・木綿に限るべきことを令す。

〔故紙雜鈔〕

天保九年御廣式着服之儀に付、本藩ゟ被仰出候左之通。

御廣式女中着服之儀、今般被爲在思召候間、以後佳節等禮服之外、都而紬・木綿之類着用可致候。此段可申渡旨被仰出候條、夫々致會得、被仰出候趣無違失樣可被申談候事。

四　月

右之通被仰出、尤夏向之儀も右に準じ、禮服之外者成限り麁服致着用可申候事。
右之通りに候得共、只今指懸り相改候而者指支候趣有之、人々迷惑仕候族も有之儀に付、紬・八丈抔は當分御免被成候。追々今般被仰出候通り相改候様被仰出候。且拜領物、縮緬之外は着用可仕旨被仰出、申談候事。

四月。一季奉公人の故なく退き又は給銀を貪ることを禁ず。

〔雜事日記〕

御家中等に召仕候一季居男女奉公人、當春季取持人共より所々江懸渡候處、奉公人捕底至極に相成、主人々々用缺に相成候様子候。右様捕底に相成候故に茂候哉、奉公人共給銀を貪り、不埒之躰茂相聞江候。元來一季居奉公人共、無故引込申儀御停止之旨、先年被仰出置候之條、公事場より申付置候取持人共に而、奉公人之數等嚴重相しらべさせ、無故引込候者は咎方可申付候。其外給銀を貪り候者有之においては、是又急度申付候條、男女奉公人共作法方嚴重致指引候様、今般改而取持人共江爲申渡候旨、主人々々其心得有之、家來末々迄茂心得方可申渡候事。

丑　五　月

四月。石川・河北二郡山々の落葉搔は定日の外之を爲さゞるべきことを

稟申す。

〔雜事日記〕

石川・河北兩郡於山々、足輕・小者および侍中之家來、並金澤等之者松之落葉かき取儀、毎月朔日・五日・十一日・十五日・廿一日・廿五日、右六ヶ日之儀者指支不申事に相成居、右之外入込不申定に候處、近年甚猥に相成、右定日外勝手次第人多に入込、村々及迷惑、其上御締方に指障り候族茂有之躰に御座候間、以來定日之外は堅入込不申樣、尤定日落葉かき參り候共、御締方急度相心得候樣、御家中初一統嚴重御觸渡御座候樣仕度候、以上。

丑四月　　林　源太郎

御算用場　　吉田藤馬

五月朔日。新堂形の清水にて染物を爲し又は療用に供する件に關して議す。

〔官私隨筆〕

五月朔日

一、頃日內膳横堂形際に而布・木綿抔染候躰之處、色々に申ふらし、人多に集り候躰。夫に

内膳は奥村氏

付左之通覺書調、今日御用番へ達之。

近頃金澤等所々汚泥之內に而、綿布之類を染候儀はやり出、其水を以肢躰を洗候へば、病氣も平癒いたし候抔と申ふらし、人多に相集り候躰ども有之候。右染物之儀は、輕きもの共便利に成、惡敷も無之儀に候所、夫に付而何篇色々申ふらし人多に相集り候儀は如何敷、夫のみならず其餘にも頃日何歟色々怪敷儀をも申ふらし候躰、畢竟不宜儀と被存候。近年京都に而躍流行之聞え有之候。もし左樣之所へ至り候而は、奉行之制止も行屆申間敷、微なる內早く防ぎ可然。乍去人々悅居候筋之儀に候間、一往組頭存寄をも御尋、町奉行へも被仰聞、御內評之上町方・御郡方支配人へ被仰渡、粗被加制止可然歟と心付候付、御はなし申候事。

〔本多政和覺書〕

五月朔日

一、先頃より泥之內に而染物いたし候儀流行いたし、內膳屋敷向堂形御閫入角水溜にも染物いたし候處、此頃は右之水に而手足等を洗候得ば、諸病を治し候と申ならし、大勢群集いたし候。其外御門前町邊日之中坊主出石を打候抔、且竹澤御屋敷之內穴明き候抔と色々怪敷儀申觸候。只今之處何も差障候儀は無之候へ共、近年京都をどり之樣に成たらば制方も六ケ敷者に付、只今之內何とか歟鎮め方も有之間敷哉。組頭町奉行抔了簡承候而も可然哉、猶更僉議

有之可然旨、丹州心付之趣今朝被申聞、井口良左衞門・多賀建物外御用に而越後屋敷江罷出居候に付、別席に而逢、右之趣申聞、三頭江演述いたし、了簡も有之候ば承度旨申入置候事。

五月三日

一、新堂形御閭外淸水之儀、今日町奉行坂井忠左衞門罷出候也。・改方茨木主殿呼出、了簡も有之候者承度旨申入候處、忠左衞門は同役申合候上可申聞旨申聞、主殿は右水を諸病をも治、輕き者便利之品に付、隨分只今之樣に人々手足等を爲洗候儀に仕度。併這儘仕置候而は、夏に成候へば彼所に而淨瑠璃・チョンガリ等仕樣に相成、人々も群集いたし申分も出來候樣之處江至候而は、不得止事右水汲候儀も被禁候樣之處江可至儀に付、賽錢抔も何方之寺受納仕候樣と歟被仰渡、其餘無賴之僧俗立入怪談躰之儀申觸候儀抔被禁、淨瑠璃等之類をも相禁、實に病用等而已之事に成候はゞ可然哉之旨等、段々申聞候事。

〔御家老方等〕

五月五日

一、三月廿日頃より金氣之水に而染物大流行、前月中頃より內膳殿馬場御藏土塀下より涌水有之、靈水に而諸病に宜旨に而大に騷も有之、殊之外信仰に而諸人群集をなし候。同頃より

越中又宮ノ腰御船小屋邊淸水有之、同樣流行之由。右御城下之邊餘り群集も致し候得共、申分と云ふ事なく候間、先此儘になし置候而宜かるべく、各申合候事。

五月七日。先に水戸侯德川齊昭その女を前田慶寧に嫁せしむるを約したるも變改の狀あるを以て議す。

〔諸事要用雜記〕

五月七日

一、犬千代樣御緣組、豫而水戸樣御姫樣之內庸姫樣被進候儀御內約御治定に而、今年あなた御出府之上、御國より御同道、無程被進、此程御奥御養育之儀に御直約相整居候。然處當時御願に而水戸樣御國ぇ被爲入、兼而之御模樣にも參り兼候に付、聞番參上、蓮阿彌迄如何之御模樣に御座候哉、御手前樣迄相伺候樣被申付候由、書取を以申達可然哉に不破相伺、委曲坂井氏より相伺被申談候由之事。

天保十一年二月五日、本年八月廿五日の條參照

五月七日。小松城の濠埋沒したる件に就き議す。

〔官私隨筆〕

五月七日

一、前田外記罷出、小松御城御塀之儀、前田監物等より相達候筈に候、追々埋り所も通り不申程に成居候躰候間、何卒宜僉議有之樣仕度、此儀相達候樣にと申越候由に付、此間御用番へ達し有之、いづれ御勝手方へ僉議可有之候條、其節可遂僉議旨申入之。

五月十五日。金澤に於いて前田齊泰着府後の狀を披露す。

〔官私隨筆〕

五月十五日

一、今日御機嫌能御着府、上使御禮等之御弘有之に付、退出直に金谷へ罷出、以金子五郎太夫御祝詞申上、直に二御丸御廣式へ罷出、以山森九兵衞申上之。

五月廿四日。江間篁齋等、醫學集會の指引を命ぜらる。

〔成瀬正敦日記〕

五月廿四日

一、別紙之通先便江戸表より申來候付、今日兩人呼立申談候事。

江間篁齋
小川玄澤

右醫學集會指引被仰付候條、兩人宅においても致御用會、去六月被仰出候御趣意篤与奉心

和田倉様は會津侯松平容敬夫人

池之端様は前大聖寺侯前田利極夫人

得、聊無遺失相勤可申候。大庭探元等江も指引被仰付置候條可申談候。

右之通可申渡旨被仰出候。

五　月

五月廿六日。前田齊泰、その夫人等を招請す。

〔諸事要用雜記〕

五月廿五日

一、明日彌御招請に付、姫君様江彌御出被成候様御使者御近習を以被仰進、御使書相伺渡す。

同廿六日

一、今日御招請に付、揃刻限五時に付同刻過出席、相揃候上被爲召。

一、四時過和田倉様御入之旨追々御付人來り、昌平橋御付人に而御廣式江相廻り、被爲入候に而敷付内より右之方御白洲へ罷出蹲踞、御用達より姓名申上る。自分出る。

一、無程池之端様御供廻り之旨に而坂井氏被罷出。

一、御二方様とも御入之上、御廣式江罷越、御附頭々を以相伺御機嫌。

但、申上候處御喜悦之旨御附頭席前へ罷越申聞、御禮申上候。

大藏少輔は大聖寺侯前田利平

一、四半時過御締夫々出來に付、引渡候樣被仰出、當席之人々立會、奥取次御招請方之主付同じ、年寄女中〻引渡候事。

但、右之序被進候御品、御用之御間〻飾置、前に御小屛風立置、其儘に而委曲申入引渡候事。

一、今日御囃子有之、彌五郎御樂屋詰御願罷出居候付、俄に彌五郎へ二番、御前一番被遊候。新之丞も相願御樂屋詰罷出候。是又被仰付相勤候事。

一、御囃子等夜六時過相濟候事。

一、右相濟、御小漬等指上、夫々相濟候事。

一、和田倉御前樣等夜八時御戻り被遊候。其節御出之節之通御白洲〻罷出る。

一、大藏少輔樣今日御定日に付御出之上、御囃御拜見御願可有之由御意之處、何等も御願無之、其段申上候處、只今御對顏は不被遊、今日御囃子被遊候間御見物被成候樣被仰進候處、御禮被仰上、御召替に而御見物所〻被爲入候事。

一、右に付御料理幷御小漬御定席に而指上、且御見物所に而御くわし・御硯蓋指上候儀相伺、被仰出、其段御客方頭〻申談候。尤爲心得御臺所奉行へも申談候。

一、御見物所〻御出、御對顏有之候事。

一、方々様御戻り之上、御居間江御出に付今日之恐悦申上る。御招請方御恐悦奥取次を以申上候由也。

右相濟、八時過引取候事。

六月二日。前田慶寧本鄕邸內東居宅に移る。

〔諸事要用雜記〕

五月廿七日

一、左之通申談る。

御膳奉行江

來月二日犬千代丸様東御居宅江御移徙に付、御當日御附山城守初御歩並迄、姫君様御兼合に而、御酒・御吸物・御取肴被下、御附女中一統江も同様被下候條、御用先可被申談候。但山城守は於席頂戴、竹田市三郎等初御附頭已下御臺所に而被下、御側小將・御近習之人々御居間方迄は於御膳所頂戴之筈に候。女中向之分は御廣式江可被相廻候。

右之通可被相心得候事。

五　　月

御近習頭江

來月二日犬千代丸樣東御居宅へ御移徙に付、山城守ゟ御吸物・御酒・取肴、娍君樣御飯台に而於席被下候間、右之趣幷御酒之內御意之趣、各より可被申述候事。

五　月

〔諸事要用雜記〕

六月二日

一、今日犬千代丸樣御引移之時分、爲御見立當席より罷出候筈。其段申上、御引移御供廻り之時分、織人數付內より右之方二枚目へ罷出候處、御先立より姓名相唱候事。

一、犬千代丸樣四半時頃、益御機嫌能御本宅御式臺より御駕籠に而、御居宅へ御引移被遊候事。且其節喬松丸殿、御式臺階上迄御見迯り被遊候事。

〔御家老方等〕

六月十五日

一、當二日犬千代丸樣東御居宅ゟ御引移首尾好被爲濟候。四日出之御使有之旨、月番より紙面來。書後也。追付兩御廣式ゟ爲恐悅罷出、金谷內藤勘兵衞二之丸丹羽權佐也。江戶表ゟは今日之日附に而十九日出御祝詞差出仕筈之旨。

六月十二日。前田齊泰の子利鬯金澤に生まる。

〔官私隨筆〕

六月十二日

一、九時餘程過只今御出產御男子樣御誕生、御丈夫に被成御座候由案內紙面、加藤・橫地より來る。

一、右に付上下に改、九半前頃御廣式江罷出、橫地に逢候而御樣子相尋候處、午上刻御平產、御丈夫に被成御座、御產婦も達者之由也。

〔成瀨正敦日記〕

六月十二日

一、九ッ時過加藤新之丞御次へ罷出、午の上刻御男子樣御出生被遊、早速加藤邦安相伺候所、御丈夫に被爲在候旨申聞候段相達候事。

六月十八日。前田齊泰の子利鬯の七夜の祝儀を行ふ。

六月十八日

一、御出生樣御名土肥權六郎より指上候樣被仰付置、御名文字陸原大次郎江考被仰付、御發駕前御治定被成置候付、御祐筆江申談爲調置、權六郎今朝罷出候付相渡遣候。暫有之、御名指上候旨御廣式頭より申聞候付、左之通越後邸へ主稅罷出、御用番美作守殿へ於御座相達

之。今般御出生之御男子樣、御名桃之助殿与被稱、殿付に唱可申候。右之趣何茂江可被申聞候。此段可相達旨被仰出置候。

六　　月

〔官私隨筆〕

六月十八日

一、今度御出生之御男子樣、今日御七夜に付御祝有之。御名も桃之助殿と御定り被成候付、各兩御廣式へ被罷出、江戸表へは相公樣へ迄御祝詞被申上。依之自分等兩人は、今日八時後罷出候樣にと、昨日定之助演述に付、自分は越後やしきに而八つ承り供申付罷出、播州も一先歸宅、八つ途中に而承候程に可罷出心得之由之處、未被罷出候付、先加藤新之丞迄御祝詞申述、播州と一集に被申上候樣にと申入置。

自分は奥村丹後守

一、右之通之處、八半餘程過に成候へども、いまだ不被罷出候付而、御廣式より尋に參り候處、俄に腹合惡敷不罷出由也。此儀知れ候以前七つ鐘承之。

一、追付御奥へ通り候樣にと之儀に付罷通る。

一、御吸物・御酒・御取肴、其外御さしみ・にしめ・數・くるみ・きす且又鮑煮付頂戴之。頂戴中、桃之助殿

御居間へ罷出候樣にと之事に付罷出、初而御目見仕る。御色合もよく、御丈夫に被爲見候也。

六月十八日。從來布及び木綿以外の入質を禁じたる令を解除す。

〔郡方御觸〕

卷目、御算用場奉行ゟ

質物之儀、布・木綿之外者質に置候儀仕間敷旨、天保八年申渡候趣有之候得共、是以後紬類

曁道具類に而も質置候儀不苦候間、以前之通可相心得旨、一統申渡候條、質屋共にも猶又前

々より之質格不致相違樣、嚴重可相心得候。

右之趣被得其意、夫々可申渡旨、所々町奉行幷御郡奉行等ゟ可被申談候事。

六　月

別紙寫之通御算用場より申來候に付、相越之候條、得其意、町・在役人どもゟ夫々不相洩可

申渡候。右に付僉議之趣有之、追而申渡儀有之候條、此段も夫々可申渡置候。先々早速相廻、

落着より可相返候、以上。

丑六月十八日　　　　林　源太郎

　　　　　　　　　　吉　田　藤　馬

能美・石川・河北三御郡十村中

六月十九日。前田齊泰その子利鬯を家臣前田圖書の養子とすべきことを告ぐ。

〔成瀨正敦日記〕

六月廿六日

一、今度御男子樣御誕生之旨御承知被成、兼而御内慮被爲在候付、前田圖書江爲養子可被遣旨、別紙寫之通十九日山城守江被仰出候。右之趣眞龍院樣江被仰上候條、御口上書一通入御覽指進申候間、御日柄宜時分御使御申談可被成候。榮操院樣江は以奉札被仰進候付、別封一緘進申候間、右御使同日村田宅之助へ御指遣可被成候。右に付今日出町飛脚早飛脚歩申渡候旨申來る。

〔成瀨正敦日記〕

七月廿七日

一、當月十九日出拔出早飛脚、三日逗留、今日着左之趣共申來る。

桃之助殿事、當十一月中前田圖書方江爲御引移可被成旨、御内意之趣等山城守迄被仰出候間、右御用御廣式向しらべ方等、御事輕之御趣意を以、猶吏御用番被示合、僉議有之候樣可相達之旨被仰出候段、丹後守・播磨守江可申聞旨被仰出候條、此段御申達可被成候。前段之趣

各江も可申聞旨被仰出候之條被得其意、いかにも事輕被仰付候筈候之間、年寄女中江も右御主意奉心得候樣申渡、御持込品、且御附可被成女中等之儀も、精誠事輕遂僉議、相伺候樣被仰出候段、御廣式頭江も御申談、夫々御僉議可被成候。年寄中江仰出候趣、爲御承知別紙寫二通差進申候。大凡之處は御僉議之趣直々可被仰出筈に候得共、的例も無御座、延享之度留帳も此表には不全、御引當之品も無御座に付、詮議方被仰出之儀に御座候間、御用番且丹後守等江も御示合被成候而、夫々御しらべ被成、御僉議之趣御申越可被成候。此段相伺申進候。依之今日出町飛脚早飛脚歩申渡候、以上。

七月十九日　　　　大　野

成瀨・高田樣

桃之助殿事、當十一月中前田圖書方江爲御引移可被成御內意候。右は的例も無之儀、取しらべ方等手數にも可相成候得共、御時節柄之儀に候間、如何にも事輕く、御附人等共外御持込之品等も、可成丈御省略之心得を以御引移不指支樣、丹後守・播磨守江も示合遂僉議可被相伺候。尤女中向等之儀は成瀨主稅等於手前、前文之趣を以しらべ方被仰付候間、被存其趣、金澤年寄中江右趣可被申遣旨被仰出候。

七月十九日

山城守へ

桃之助殿事、當十一月中前田圖書方に爲御引移可被成候。居住所等心得も有之間敷候得共、諸事至而手輕可被仰付思召に候間、居住向等都而修理等にも不及、在來之儘に而萬端事輕相心得可申候。尤日限之儀は追而可被仰出候。先此段御内意之趣圖書に可被申渡旨、金澤表年寄中に可被申遣段被仰出候。

七月

山城守へ

六月二十日。大聖寺侯前田利平の家老山崎權丞金澤に來りてその借用したる米銀返濟の件を交渉す。

〔官私隨筆〕

六月廿日

一、山崎權丞より以手紙、大藏少輔樣御勝手方御用に付、御用人東野千助同道只今此表へ到着之由等申越、宅に罷越候樣申遣候處、七半頃罷越、左之二ヶ條之趣申聞。

一、先年御振替之三千兩、利足打込三千七百八十八兩二分一朱餘之處、當暮より無利足十ヶ年賦之儀當二月御願之處、半利七ヶ年賦御許容候へども、當七月より無利足十ヶ年賦御願被

成候旨。

一、去々年虫付之節、御用米御不足に付二千五百石御振替米、當秋仝御返上可被成處、御支に付五百石御返上被成、殘二千石當年御淀被成度旨。

但、右五百石代金を以御返上被成度旨。

六月廿二日。無高所の百姓が取高をなすには入百姓の名目を以てすべきことを告ぐ。

〔舊記等〕

無高所之者取高、御仕法以來不相成事に相心得候御郡々も有之に付、當春御奉行所に相伺置候儀も有之處、此度出府之上相伺之處、無高處之者取高不相成与申被仰渡は無之、元來享和之度被仰渡置候通り、入百姓之名目を以爲致取高候事に被仰渡候。併入百姓之名目之所に而も、居村百姓取返高相願候節は懸作之類に候間、何時に而も爲致切高可申旨。此儀は先達而被仰渡置候通之旨、今日安田樣より被仰渡候間、左樣御承知可被成候。此狀先々御廻達、落着より御返可被成候、以上。

丑六月廿二日　　得能覺兵衛

仲間宛所

六月廿三日。藤井方亭、前田齊泰の生母榮操院の病を診す。

〔官私隨筆〕

六月廿二日

一、藤井方亭儀只今到着に付、明廿三日五半時過榮操院樣診被仰付由、幕前定之助より申來。

〔官私隨筆〕

六月廿三日

一、藤井方亭診被仰付候に付、播州も被出、診濟候上承之。只今之所御邪氣等も無之、いまだ御快と申所へも不被爲至、醫者之方に而何と可仕樣も無之、只惡敷方へ不被爲至樣に相守り、あなたより御復し候所を相待候より外有之間敷。依而キナと桂枝二味を漬し、御用有之可然旨也。初診之儀故いづれ猶又診可然旨申談す。

六月廿六日。幕府、前田齊泰の江戸城門内にて挾箱を伴ふの方式を改むべきことを命ず。

〔成瀬正敦日記〕

天保十一年四月六日の條參照

七月廿七日

一、御登城之節御挾箱片々御玄關前へ爲御持之儀、先御詰被仰出、左之通御屆に相成居、當御參府之上、右御挾箱中之御門外迄爲御持之、御先箱直に御先へ爲御持來之所、左之御書取前月廿七・八日頃御目付衆より御達有之、段々御僉議之上、左之覺書之通、已後之心得方も有之儀に付、聞番へ山城守殿被仰渡候旨等申來る。

今般思召を以挾箱片々御玄關前迄爲持候樣被仰出候。依之是迄中之御門外迄爲持候先箱片々其儘御玄關前迄持通り之心得に罷在候。此段御屆申上置候、以上。

御　名　内

四　　月　　　　　　　　　　不　破　紋左衞門

六月二日大澤主馬殿御付札

書面之趣承置候

前月廿七・八日頃御目付衆御達之書取

口達之覺

一、御玄關前迄持入候挾箱一つ、以來中御門外迄は是迄之通、先箱に而被相越、同所よりは御三家方にも跡ゟ爲御持之儀に付、右御振合に准じ、跡より引續持入候樣可被致旨、大炊頭

殿被仰渡候事。

六　月

初鹿野美濃守

池　田　修　理

不　破　紋左衛門

本　保　平　太　夫

聞番へ被仰出覺書左之通

御登城之節御挾箱片々御玄關迄爲御持之儀、去年四月被仰渡候に付、是迄中御門外迄爲御持之御先箱片々、其儘御玄關迄爲御持之儀、御目付衆江御届方、各より被相伺、其通り被仰出、則御届有之處、御聞置之由御挨拶有之に付、當御參府以來右之通爲御持之處、中御門よりは御三家樣にも跡江爲御持之儀に付、右御振合に准じ、御跡より引續爲御持之儀、前月被仰渡候。右之趣に候得ば、先以去年之御届方御三家樣にも准じ不申、御不都合之爲御持方に御届被成候譯に相當り、御心外之御儀。參府後度々御先江爲御持も有之處、此節相違之儀は、外見にも預り如何に思召候。此方樣には前々より之御家風も有之處、前段之次第御不都合成儀。假令御前より被仰出候共、各儀は御三家樣方御振合等も存知之儀に候得ば、心得も可有之處、其儀無之、御規模之樣にも被心得候哉、思召与は致相違候條、以後之儀入念可被相心得候。

此段可申渡旨被仰出候事。

七　月

七月五日。百歳の老齢者に物を賜ふ。

〔溫敬公記史料〕

七月五日。賜年百歳者物。

七月六日。御郡方より葉藍を他國に販賣すべからざることを告げしむ。

〔官私隨筆〕

七月六日

一、有賀寛兵衞呼出、葉藍拂底に付御郡方より他國へ賣出し指留之儀、紺屋共願之趣紙面等渡之、可有僉議旨申談候。

七月十七日。前田齊泰、慶寧の東御居宅に臨み囃子を見る。

〔諸事要用雜記〕

七月十七日

一、明日於御居宅御囃子被仰付候付、見物方之儀此間高田より示談に而、則伺くれ候樣申聞

候に付、伺之通申談候。

七月十八日

一、四時過御上下被爲召、東御居宅ゟ被爲入、夜六時過御歸殿被遊候事。

但、御都合方都而此間中示合、伺之通夫々相濟候事。

一、御囃子被仰付、見物被仰付、八時過相廻り、御到來之御肴・御吸物に被仰付、拜見罷出候人々頂戴、御禮御膳方御抱守申述。

七月二十日。前田齊泰、會津侯松平容敬の新錢座の邸に臨む。

〔諸事要用雜記〕

七月十九日

明廿日五半時之御供揃に而、肥後守樣新錢座御中屋敷ゟ、緩々御出可遊旨被仰出候。和田倉御前樣にも御出付、御締內ゟ被爲入候事。

七月十九日

一、明日新錢座に而揚火も有之事。御近習之人々御召連被遊候而も宜段被仰進候間、望次第可被召連旨被仰出、奥御取次・御近習之人々配膳役ゟ被申談候樣、山崎小右衛門へ申談る。

七月廿日

一、五半時過御出、新銭座御屋敷へ被爲入、夜四つ八分御歸殿被遊候事。
但、彼於御奥、御役人被仰述候御口上之儀、御意に付則御手扣認上候事。
一、犬千代丸様にも指續御出被成候事。
一、今日被召連候人々左之通。
加藤三郎左衛門　金谷多門　和田源左衛門　栂源五左衛門
沖野長藏　堀斧三郎　原文平　清水貞右衛門
三田村新平　山室仝左衛門
一、拙者儀今日新銭座御奥に而御目見、且夕御膳御餕被下、御吸物・御酒等は加藤等一集に被下候。見物は御引續之御物見に而見物いたし候事。
一、御庭御兩殿様御供人と一集に拜見被仰付、尤御供頭・御表小將・御抱守・御次番・三十人頭・御大小將等は無之候事。
一、小原を以段々之御禮申上、御戻り前退出、天神下に而四ッ聞歸る。翌日御前ゟ罷出候上御禮申上る。

七月廿一日。百姓等の遊藝を習ふことを禁ず。

〔御郡典〕

御郡方之者共常々心得方之儀、前度より嚴重申渡置候處、頃年心得違之者多、就中宿所等身元相應之者、或者輕き商人等之内にも、淨瑠璃・三味線等之遊藝を好、中には他支配より右指南之者抔を呼寄置、稽古等いたし候者も有之、右等之風俗末々小前之者迄も押移り、本意を失ひ、農業剛仕事を厭候族有之躰相聞、耕作麁略之基。右樣奢侈之風俗に流候故、農業出精之時節も不顧、村々祭禮等に事寄、若き者共手踊りをも致興行、見物人等及群集に候樣之儀も粗相聞。其上近年٭將棊等流行いたし、身元之百姓曁小前之者迄も、家業を忘れ、農業之手後れも不存付族。且賭之諸勝負者御停止之品に付嚴重申渡置候處、心得違之者不少、甚以御縮方に指障り、不得止事重き咎方等申付候場に至り候而者、耕作稼之手支に相成、不容易儀に候。右樣之風俗別而近年增長、奢侈之姿に成行、加之村々嫁聟取迎候節抔、若き者多寄集り、石礫等を打、或者無謂大勢立入、酒抔押乞いたし、猥藉之族も有之躰、沙汰之限に候。惣而右樣之所業者、村方衰微之根元に候處、役人共等常々申諭方不行屆、御縮方等閑之躰相聞候。且亦其方中においては、御郡方之者共都而目當に致候儀に候得ば、身分之儀者勿論、末々迄も實躰に相心得、農業等相勵候樣、常々無油斷可相諭之處、右等風聞に預り候儀者、示し方等閑にも相聞え、於拙者共にも心配不少、尤春秋廻村之節、末々迄心得方之儀ケ條書を以入念申渡候處、其所詮も無之儀に候條、向後右等之族無之、御締方弛み不申樣嚴

重可申渡候。斯申渡候上、自然心得違之者於有之には、夫々相糺、品に寄急度可申付候。尤村役人共、且其許中においても、猶更心得も可有之儀に候間、前條之趣得其意、入念可申渡候。依而以來之爲心得方与、村役人共より請書取立候條、奥書を以急速可相達候、以上。

辛丑七月廿一日巳刻　大嶋五郎右衞門

神保舍人　不在合

羽喰・鹿嶋兩御郡御扶持人・十村中

八月四日。郡方の者に役儀を命ずる際知音により周旋を求むる等のことを戒む。

〔御郡典〕

御郡方之者共役儀申付、或は取引等有之節、手筋を求め申込等致候者不少候。右樣有之候而は、假令人撰を以可申付候者有之候共、詮議方之手障に相成候條、右等之儀以來心得違無之樣、急度可申渡候、以上。

丑八月四日　諸郡御奉行

諸郡十村中

八月十五日。明倫堂に釋菜の禮を行ふ。

〔官私隨筆〕

八月十五日

一、當春丁祭御延引に付、今日有之、五時前上下着用明倫堂ゟ罷出、播州も追付被罷出。

一、五つ餘程過初る。御作法去年八月十五日之通也。少々遣候事。

八月廿一日。前田齊廣夫人野田山の廟所に參詣す。

〔官私隨筆〕

八月廿日

一、眞龍院樣當廿一日天氣次第五時之御供揃、略御行列に而桃雲寺へ御立寄、野田御廟所へ御參詣、夫より山通り大乘寺へ御立寄可被遊旨被仰出候由。

八月廿二日

一、今朝出前金谷へ罷出、昨日遠方へ御參詣に付、相窺御機嫌候趣、內藤勘兵衛へ申入、御樣子相尋候處、益御機嫌能、昨日五時過とやらん之御出に而、桃雲寺へ被爲入候處、寺へ御入之御時分より雨降出し候へども、野田へも御參詣、御廟々々不殘御參詣、金龍院樣御廟之前之山通り御乘物に而、大乘寺へ御參詣。兼而天氣次第夫より山へ御廻り御歩行も有之筈之所、天氣悪敷七時過とやらん御歸殿之由。

八月廿一日。蓄米を行ふを以て藩の米廩を増置せんとす。

〔官私隨筆〕

七月廿四日

一、石野右近罷出、所々御藏詰り候付、松任・水橋・小松に新御藏相建候儀に付、先達而紙面指出、右入用は糞物代上納之内に而可辨由之處、右は上納とかく滯候躰に付、其儀专置候處、其内諸郡より願出候付、是迄御藏所有之所々へ増藏被仰付事に可仕と、改作奉行より紙面調替指出候由に而、添紙面とも出之、先達而之儀と取替度旨也。先達而之分も持參、兩樣共先受取置。

一、前段に記候糀納幷増御物成別除米年々相増、御藏々積入差支候付、増御藏出來之儀共所々左之通。

一、長三十五間幅四間　新堂形圍內増御藏

御入用は先達而屎物御仕入用貸渡置候御かね之內を以、今來年に追々出來申付度旨也。

一、長十間幅四間　能美郡寺井中出藏圍內

一、長十間幅四間　同郡今江

一、長十間幅四間　礪波郡津澤

一、長二十五間幅四間　上新川水橋
一、長十五間幅四間　羽咋郡塵濱
一、長十間幅四間　同郡川尻
一、長十間幅四間　鹿島郡野崎
一、長七間幅四間　鳳至郡中居
一、長七間幅四間　同郡輪島
一、長七間幅四間　同郡時國
一、長七間幅四間　珠洲郡蛸島
〆十二ヶ所　此分當秋中新出來之儀願聞候由。
一、長十間幅四間　鹿島郡大町
一、長五間幅四間　同郡金丸
一、長十間幅四間　同郡田鶴濱
一、長十間幅四間　同郡熊木
一、長五間幅四間　羽咋郡富木
一、長七間幅四間　珠洲郡飯田

一、長七間幅四間　　同郡松波
一、長七間幅四間　　同郡宇出津
一、長七間幅四間　　同郡道下
〆十ヶ所　　此分來寅年新出來之儀願聞候由。

〔御家老方等諸事留帳〕

八月廿二日

一、元祿之比御米藏所々に有之分三百三十計、當時二百四十一有之。此度七萬石計御蓄米有之、指支候に付二十二出來之圖り也。

八月廿五日。前田慶寧と水戸侯徳川齊昭の女との婚約に關して聞番より齊泰に報告す。

〔諸事要用雜記〕

八月廿五日

一、水戸樣ゟ御緣組御內約之庸姬樣御引移、當年此表ゟ被爲入上、無程被進、御養育之儀に御直約有之候處、あなた御在國相延、其後何等之儀も不申來に付、御比合如何有之哉相伺候樣聞番ゟ被仰出、則書取を以先日聞番、山方迄御使相勤候處、早速水府表ゟ可相達旨に候處、

本年五月七日の條參照

山方運阿彌亦山形に作る

寅之助は虎之助

其後五・六箇年も御在國之儀被蒙仰、右御答も何等も不申來に付、此間外御用にて山方江參り候に付、不破紋左衞門心得に而相尋候處、於蓮阿彌未御答も無之に付懸念に罷在、幸頃日初め手懸罷在候御側御用人藤田寅之助と申人出府相尋候處、彼是御用繁に而御答も出來不申、其上五・六箇年御在國も被蒙仰に付而も、指當御答も有之間敷、山方心得に而は只今に而者來年は此方樣御歸國、來々年にも及可申哉に申聞候付、此方に而者御引移御比合次第、御願書等も御進達可有之御振之旨も申入候處、尤あなたにも御同樣に候間、何れ先づ御頃合相極、其上取しらべ候筈と山方申聞候旨、紋左衞門咄有之に付、其段御序申上置候事。

九月朔日。東御居宅成就せしを以て關係者に賞賜す。

〔諸事要用雜記〕

九月朔日

一、御住居御普請御成就に付、左之通拜領物被仰付伺之上申談、御禮申聞申上る。

白銀二枚・生絹二疋	御住居御用人最初より相勤候	津田判太夫
白銀二枚	同　當五月より相勤候	村源五左衞門
生絹二疋	御作事御用初め御繪圖等手先	戸田清太夫
白銀一枚	江戸御作事奉行	中藤左衞門

小判一兩・染物二反　御大工　松波源七郎
三百疋・染物二反　御壁方　堀内三郎左衛門

九月十三日。東本願寺末寺再建の手斧初を行ふ。

〔上賃屋日家榮帳〕
丑九月十三日御末寺御手斧初、朝六つ時に御初り、かざり物多く御座候。誠にくんじゆ之參詣。跡に御能御座候。

九月十九日。前田齊泰能を催し、大聖寺侯前田利平之に臨む。

〔諸事要用雜記〕
九月十九日
一、今日御能に付、大藏少輔樣御出御願被成候筈之旨、夜前奥御取次を以仰出に付、御料理等之儀先達而之振に相心得候儀、夫々被申談候樣返書に申遣、御客方へ申談有之筈之事。
一、今日四時過大藏少輔樣御出被成、御口上被仰上候上、拙者共被爲召、則罷出候處、今日御能御拜見之儀御願被仰上、則申上候處御許容、御見物所ゟ御通り之儀被仰進、於御定席御料理出、於御見物所御菓子・御吸物・御硯蓋出候事。
但、御見物所に而御硯蓋、先達而之節御臺所奉行心得に而申付、其段申聞候。此度も先日

之通と申談候付、右之通出候得共、重而右樣之節は御菓子・御吸物迄に而可然哉之事。

一、今日御能六時前相濟、詰合拜見被仰付、御客も有之付一人は濟候迄居候。

本文は幕令なり

九月二十日。今後献上の鮮鯛に代ふるに金子を以てすべき幕令を受く。

〔諸事要用雜記〕

九月廿五日

一、左之通御傳達、當廿日に到來致候事。

大目付江

此度嚴敷御儉約被仰出候上は、公儀而已に而も無之、諸大名とても萬端入用少、各安心いたし相勤候樣有之度候。勤向とは乍申、御武事に付候儀は、たとへ存外散財有之候とも、元來銘々覺悟之儀に付、別段可達品も無之候得共、平常之勤向幷献上物等無益之費用は、成丈相省候樣に有之度候。献上物之儀に付而は、享保・寛政之度々追々手輕之方に被仰出候得共、古今同種之價も時勢によつては高下有之事に候得ば、仕來候献上物之内にも、江戸表に而調進候品を在產に引替、又は在產之品も江戸表之調達に替候方勝手之向も候はゞ、聊無斟酌可被相伺候。御用向無御差支分は申立候通にも可相成候。且又年中定式臨時御祝儀事に付鮮鯛献上之節、暑中或は連日風雨等之砌、品物調兼心配、其上不相當之入用有之趣に相聞、且は

炎暑之時分杯は猶更厚心配可有之候得共、指上候以後時刻も移り候儀に付、御用に相立兼候儀も有之。旁諸家無益之費に候間、御樽代・肴代等之准例を以、向後鮮鯛献上之節拾萬石以上は金貳千疋、五萬石以上は同千疋、五萬石以下は同五百疋、代金を以相納候様可被致候。

右之趣可相觸候。

九　月

九月廿二日。能美郡に降雹あり。

〔官私隨筆〕

九月廿八日

一、安田新兵衛罷出、廿二日能美郡雹之降候様子共申聞有之。着用いたし居候笠を破り、人々頭に疵付候由。すゞめ・あとり等多く打れ候而落、中には十餘羽も拾上候ものも有之由也。籾も悉く落候躰。御高に而九千五百餘石計之由。御取箇之所にては二千石餘之御取不足にも可相成哉与被存候由等申聞也。

十月四日。石川郡宮腰錢屋五兵衛の下役をして領内の船數調査の爲出張せしむべきことを告ぐ。

櫂役調理役銭屋五兵衛下役

吉久村　喜　六

木吉町　又　次

茂　助

右同人手代

右加越能三州船數爲調理方、銭屋五兵衛可致出役處、當病に付右喜六等當月十日頃より發足、加州大野浦始、能州筋・越中筋、夫より加州筋相廻候條、船數・名前等調理置、廻先江不相洩指出候様、諸浦等肝煎共江可被申渡候。尤臨時相尋候品も可有之、此外天保五年相觸候通、夫々不指支様心得方、是亦可被申渡候。尤廻村中自分止宿之筈に候條、此段も可被申渡候、以上。

十月四日　　御算用場

神保舍人殿

大嶋五郎右衛門殿

津田昇殿

十月十六日。分限高一萬石に對し籾百石の割合を以て圍穀を行ふべき幕令を受く。

〔諸事要用雜記〕

十月十六日

當十四日御傳達之寫越前守殿御渡。

近年凶作打續候處、兩三年以來作方茂多分宜に付、凶年非常之備自然与等閑に可相成哉に候。於御料所茂圍籾被仰付候間、私領之分も分限高一萬石に付籾百石之割合を以、當丑年より巳年迄五ヶ年之間、面々領邑に圍置候樣被仰出候。一統節儉相用、共領邑に有用之備等有之候得ば、天下之御備に相當、御安心之儀に思召候。寛政度厚御趣意を以被仰出候圍穀之分、不得止用途に遣拂、詰戻未相濟向は、可成丈當丑年詰戻、來寅年より前書割合之通年々圍增候樣可被致候。委曲之儀は御勘定奉行ゟ可被承候。

十　月

本文は幕令なり

十月十六日。收納米の品質を精良ならしむべきことを令す。

〔司農典〕

代官は収納吟味の代官にて十村等をいふ

三州御収納米納方之儀に付、別紙之通御算用場より申談に付、相越之候條、可得其意候。先以急度察當之趣者、於代官々々に申譯も無之筋に候。去年抔之年柄、大坂御廻米彼地に而受取方等指支候向有之、既に俵拵も甚麁抹与申儀抔者、全く代官々々等閑之心得方に相聞候。大切之御収納米に候得者、無申迄於百姓精誠を盡し、上米指出可申儀に候條、此段村々江入念可申渡候。先以代官も天保八年如元被仰付、無間ヶ様之察當に預り候儀、於拙者共も申渡方不行届哉に御聞江、心外之至に候。以來之儀無違失相心得可申候。一郡切代官々々請書可指出候、以上。

丑十月　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中
新田裁許・山廻り中等

三州御収納米等納方之儀、其年豊凶に随ひ、精誠を盡し上米を以可相納儀者申迄も無之處、近年不熟之年柄相續候仕癖押移り居候哉、去年抔は上之作柄に不似合悪米多、當年大坂御廻米に相成候而も、彼地に而受取方指支、船手之者共及迷惑に候ヶ所も有之。是等は納方に寄申儀与相聞候に付、穿而可及詮議に筈に候得共、今度之儀者令用捨候。且亦俵拵も甚麁抹に相成、古菰を用ひ候分も多有之、大切之御収納米を麁略至極之致方不屆之儀、畢竟納人共心

得方不宜故にも相聞え、沙汰之限に候條、以後諸代官納方急度相心得可申候。勿論如此申渡候迚、不實之撰方致、百姓爲及迷惑に候樣之仕方有之間敷、何分實意を以、手前々々精誠之上米指出候樣に可取計、當年抔實入者宜敷候得共、干方不宜分も可有之候。是等者人力を盡し候得者、品柄宜敷可相成儀に候條、納方之節も其心得可有之候。萬一不埓之百姓有之、申諭方をも不聞入者有之候はゞ、其段役人於廻先に可申出候。

一、町藏納方之儀も同樣之儀に而、次第に內實も減少致し、既に同ヶ所に而惡敷藏宿之分者、並より直段相劣り候儀顯然に候條、品に寄藏宿取揚候儀も可有之候。

一、八月より越藏敷相廻り候に付、七月下旬に相向候切手有之候得者、兎角申立、米渡方相廻し、月越に致候樣之仕方も有之躰相聞得候條、以後者給人米たりとも、七月相向候切手之分、藏宿手前之指支に而、米渡方八月に相成候分、越藏敷相懸り申間敷候事。

但、船手等米請人之手前指支に而月越之分者、尤越藏敷取可申事。

一、藏拂に至り候而者、鼠喰等之損俵多有之候得共、拂方之節色々与押隱し相渡、船手等米請人甚及迷惑に候躰に候條、御藏・町藏共右樣之儀無之樣可相改候。

右之趣被得其意、三州代官㕝急度可被申渡候。且御米仕立方等之儀は、百姓手前に有之儀。元來御收納之儀者不輕品に候故、大切に相心得候儀者、申迄も無之候得共、中に者心得違之

者も有之躰粗相聞え、不埒之至に候。尤各手前油断も無之儀者顯然に候得共、尚更裁許々々手前において、一統誠實に相心得、厚致世話候樣得与可被申渡候、以上。

十月十六日　　　　　　　　　　御算用場

改作御奉行中

十月十八日。石川郡宮腰錢屋五兵衛の子喜太郎に扶持を給せんことを議す。

〔官私隨筆〕

十月十八日

一、湯原平馬罷出、錢屋五兵衛せがれ喜太郎御扶持之儀先達而願置候。喜太郎人品も宜候間何卒相願候由。其儀難成候はゞ、五兵衛も御算用場向御用入情に勤候由候間、五兵衛へに而も奉願旨也。五兵衛は當時役儀無之、喜太郎は勘定方相勤候由。

十月十八日。鷲羽・鵯羽等を拾ひたる者は御郡所等へ差出すべきことを令す。

〔御郡典〕

鷲羽等拾取候者有之候はゞ、御弓奉行江相達候樣、先年被仰渡も有之處、近年一圓不指出、御用支に相成候之旨等、別紙之通石川與右衛門等より申越候に付、相渡候條可得其意。右鷲羽等取扱候者、御郡方に有之、中には心得違之者他國等江相洩候儀も無之哉。是等は不埒之至に候。依而前々申渡置候通、少に而も拾取候はゞ、早速及斷候樣可申渡、尤以後之縮方嚴重可申渡候、以上。

十月十八日　　　　大嶋五郎右衛門

羽咋・鹿嶋兩御郡十村中

御弓土藏御用之鷲羽・鴇羽等、先年より御郡所江縮方被仰渡、是迄新川郡より拾ひ羽少々宛指出候得共、御領國外よりは指出不申候に付、文政五年改而縮方等之儀被仰渡候樣、御家老衆方江御達申候得共、年々鷲羽等拂底に而、一圓指出不申、御用支に相成候に付、天保二年十月又候縮方等之儀委曲御達申、其御役所等へ夫々縮方被仰渡候樣御達申候間、御承知之儀与存候。且同年鳥屋與兵衛・村屋金平兩人江矢之羽買入方御用申付置候得共、金平儀は病身に而難相勤及斷候に付、與兵衛是迄御用相勤候得共、近年全く不得指出、御用支に相成候而は、不行屆躰にも相聞江候に付、與兵衛今般矢羽買入方御用指省申候。仍而御領國之內鷲羽等致取扱候者、ヶ所々々に縮方御申渡御座候而、肉附拾ひ羽たりとも、都而其ヶ所より役所

外にほかにて、御領國內の他所の意なるべし

ゟ直に指出候歟、又は其御役所ゟ御取立御指出御座候而も宜敷御座候。近年拂底に相成候儀も、中には心得違之者も有之、他國ゟ相洩候躰に相聞ゟ候間、嚴重縮方等御申渡被成候樣致度御座候、以上。

辛丑十月

石川與右衞門
木村九郎
大久保六平
八嶋貞右衞門
由比作左衞門

能州御郡奉行中樣

十一月二日。前田齊泰の子利鬯の色直の祝儀を行ふ。

〔官私隨筆〕

十一月二日

一、今日桃之助殿御色直之處、圖書今日初而承知有之、いかゞいたし可申哉と之事に而、御用番より相談有之。獻上物に而も可有之樣にも被存候へども、今日に成可仕樣も無之と之事也。然處一統には、今日御當人樣迄御祝詞申上り、服も服紗に候。御廣式向・御次向は頭分

以上のしめ故、圖書は服はのしめに而可有之哉。左候へば御のし頂戴有之候而宜敷歟之段申入候處、其趣可然候條、御廣式示合候樣にと之儀に付、横地治兵衞・加藤新之丞內申遣候處、新之丞罷出候付、彼方之手續相尋候處、御引移迄はいづれ替る御取扱も無之筈故、わけて頂戴物等も無之、御のしは先達而より出候事に成居、今日も被下候筈之由也。左候へば此方に而申合候と不計打合候段、其趣御用番へも申入、御用番より圖書へ被申聞、各より一足跡に退出あり。自分は又其跡に罷越也。

一、右御祝に付、播州と自分は八時過に可罷出、頂戴物も有之由內々此間頭より執筆迄申聞有之に付而、のしめ・上下に而八半時過罷出。

但、播州は今日疝邪に而斷也。

一、以治兵衞御祝申上、方々候へも申上候。

但、方々樣へ申上候儀、先刻新之丞越後やしきへ罷出候節、新之丞仲間中上方承候處、眞龍院樣初方々樣へも申上候由也。其儀先刻播州より聞合に付、成瀨主稅等之樣子以紙面爲承合候處、是も方々樣へも申上候由主稅より返事有之。依而本文之通也。

一、只今御祝御規式中に候間、暫相待候樣にと頭中追々申聞あり、七時過歟に御奥へ通る。

一、御吸物・御酒・御取肴、其外御―― もの等頂戴。且又寒く候付被仰付候由に而、しつぽ

く頂戴。又從眞龍院樣被進候由に而、御菓子・御にしめ頂戴。
一、榮操院樣より吉尾を以御懇之仰あり。
一、頂戴中基五郎殿・豐之丞殿御出。
一、頂戴濟、今日從方々樣桃之助殿へ被進候品々拜見仕候樣仰之由に而、御對面所御緣頰に
飾有之を拜見、同所において段々之御禮菊井迄申述、御廣式へ出候上、以定之助猶又御禮申
上、直に金谷へ罷出、以金子五郎太夫御祝詞申上候處、以同人御懇之仰あり。六時過歸宅。

十一月九日。昨今兩日前田治脩の三十三回忌法會を寶圓寺に執行す。

〔官私隨筆〕
十一月九日
一、昨日・今日太梁院樣三十三回御忌御法事御取越御執行之所、自分は今日詰日に付、六時過
提灯なしに裏門より出。但長上下着用。
一、今日御法事如例上堂也。昨日は兩御寺・勝興寺諷經有之躰。今日は諷經もなし。

兩御寺は天德院及び如來寺なるべし

一、御法事五前頃初り、濟候は八時前にも可有之歟。御名代之御燒香內匠殿被相勤。夫より
御代香都合十人、直に御施物之御作法如例候。
〔溫敬公記史料〕

十一月八日・九日。修太梁公三十三年忌於寶圓寺。

〔温敬公記史料〕

十一月九日赦。

十一月十六日。御側衆等出會の際に於ける酒食に付き申合せをなす。

〔雜　記〕

親類又は仲間出會之節

一、祝儀に而出會之節は

吸物　一　肴　一　取肴　一

料理は平生之通に可仕候。平常出會料理

一汁三菜

此内一菜は魚類にて茂、平生より心を付候儀勝手次第に候。外に

香物　吸物　一　肴　一・二種

料理數は堅右より過不申候樣に相心得、其内可成程は輕仕候樣に可仕候。且又後段無之、濃茶出候儀勿論無之筈事候。

但、有合時分、菓子一色などは時により出可申候。

一、麵類出候節は料理相止可申、所望之爲計、有合香物一出し可申候。
一、親類等茂右之段兼而申聞置、先様に而茂急度右之通相心得、先様へ參候節萬一右定を背申儀有之候はゞ、料理給候儀茂不仕様に相心得可申候。
右御側衆より被仰聞候趣に付、仲間申合候、以上。
丑十一月十六日

十一月廿四日。前田齊泰の子利鬯、家臣前田圖書の養子としてその邸に移る。

〔成瀨正敦日記〕
十一月廿四日
一、今日御引移、御供揃五ッ時に付、五ッ半頃より熨斗目上下に而致出席候事。
一、今日御引移之上、圖書夫婦へ御上使被下候物有之。右御意書曁御品物御目錄等も於御次御用意、御用人ゟ引渡候様表方示合也。尤御使之儀は御用番より被仰出之筈之事。御使人は由比勘兵衞之由。右に付御用人鈴木凊左衞門呼立、右御意書等夫々相渡候事。
一、四ッ半時頃御供廻り之旨御廣式頭より爲知有之に付、兩人共御廣式ゟ相廻り、御出之節御式臺階上方々様御附使者之次へ罷出、御見立申候。相濟、御奥へ相廻り候様にと申事に而、

相廻り候所、於御奥御赤飯・御吸物・御酒・御取肴頂戴被仰付。

〔官私隨筆〕

十一月廿四日

一、七半時頃加藤新之丞より以紙面、桃之助殿御廣式御出、御途中御都合能、益御機嫌能罷
書方へ九半時前御入被成候由案内あり。

十一月廿五日。前田齊泰登營して能を觀る。

十一月廿五日

一、今朝七半時之御供揃に而、鐘之六つ打そろ〳〵御供廻り、大方御城迄御提灯之由。御本
丸御登城被遊、御能御見物被遊、夫々前々之通り之御次第に而、御料理等も御頂戴、夜六半
時前御歸殿被遊候事。

〔諸事要用雜記〕

一、今日御城之御樣子、左之通書取を以山城守へ被仰出、恐悅被申上。
今日御登城被遊候所、御能御見物、上覽之御間出御、御能始り、公方樣・右大將樣御同座に
而御目見、御懇之被爲蒙上意、御見物之內御老中を以上意有之。御中入御料理御頂戴中茂、
御老中を以上意有之。御能相濟、最前之通御目見被仰上、惣而御三家樣御同樣之御會釋に而、

御格別之儀思召候事。

〔見聞袋群斗記〕

十一月廿五日

大將軍御三家と同じく公〻、御能拜見御饗膳被下。御格別之御取扱なり。

十二月朔日。前田慶寧、通稱を又左衞門諱を利住と稱す。

〔諸事要用雜記〕

十二月朔日

一、四時前犬千代丸樣御上り、御口上被仰上候上、織人御溜へ罷出、今日御名御改被進候付、於御居間書院被進候段申上、退出其段申上。追付御居間書院〻御出、御床前に御着座、御名書御小蓋居に而小左衞門持出、御前へ指上、御次に扣犬千代丸樣御出被成候樣織人申上、直に御先立仕、上之間御敷居之外一疊目〻御出、是へと御意、御近へ被爲入候處に而御名書被進、御成長に付御先例之通御改名被進候段御意。御同所樣御名書御披御頂戴、御小蓋共小左衞門〻御渡、直に御緣頰之方に御着座。此時新御廊下之方より御熨斗三方御表小將持出、御前〻指上、御手熨斗御取上之處に而、犬千代丸樣御側〻御進み、御熨斗御頂戴御復座。御三方引之候上、御敷居之外に御出、段々難有思召旨被仰上御退去。如元御溜〻御先立御立戻り、

御禮被仰上、夫より御居間へも御通被遊候事。
一、右相濟、御名書箱に入、於席市三郎等ゟ相渡。
又左衞門様ゟ
一、御硯箱　一箱
御文畫　一箱
御　肴
御目六

〔成瀨正敦日記〕

十二月十五日
一、如例出仕、御近習頭相伺中御座へ罷出候所、御用番美作守殿左之通御演述に付、一と先退き、重而御座へ罷出、恐悦申上候事。
犬千代丸様御名、當朔日又左衞門様与御改被遊候。此段何茂ゟ申聞候様被仰出候。且又御實名利住様与奉稱候。
右之趣同役中傳達、組・支配之人々ゟも相達候様可被申談候事。
但、今日登城無之面々ゟは、向寄より相達可申候。

十二月三日。先に降雹により損耗を生じたる能美郡諸村に償米を與ふることを決定す。

〔官私隨筆〕

十二月三日

一、能美郡德橋組一針村等都合五十六ヶ村、當九月廿二日大霰に而晩稻等打こぼし、不容易損毛に付、御償米等願書付承屆、今日裏書印章仕る。御米高如左。

一、千二百八十四石五斗三升　能美郡德橋組一針村等廿ヶ村、輕海組下麥口村等九ヶ村、粟津組三日市村等八ヶ村、板津組梯村等八ヶ村御償米高

一、百五十石　粟津組小寺村等十一ヶ村御取扱米高

但、厚難所に准村

〆千四百三十四石五斗三升

十二月六日。鹿島郡大津村の入海を開發する爲土砂を白濱村に取るべき

ことを許す。

〔郡方御觸〕

鹿嶋熊木組大津村領入海水淺之場所、凡七萬歩餘御仕立開に申付候處、右ヶ所開發方土取場所指支、隣村白濱村等御林山立替之儀願出、右替り地野毛山に付、松苗植付方出來候得者、指支之筋無之旨に而、御林立替之儀願之通承屆候得者、松木之內御作事所御用立候分相渡、其餘入札拂に申渡、枝葉・末木等開發人江相渡、麁朶等に爲用候はゞ可然旨等、委曲紙面繪圖面等相添被出之、承屆候條、右紙面之通可被相心得候。尤御林山立替之儀、能州山奉行江茂申渡候條、可被得其意候事。

丑十二月

十二月六日　　御算用場

改作御奉行中

右寫之通、御用番年寄中被申聞候條、被得其意、夫々可被申渡候、以上。

十二月十五日。前田齊泰の生母榮操院の病癒え床拂を行ふ。

〔官私隨筆〕

十二月十五日

一、村田定之助罷出、榮操院様御調子御宜由に而、御食附等出之。今日は御内々御床揃之御祝有之候へども、今日は御取込に付、十八日夕八時過より播磨守申談罷出候樣にと思召候。此由可申聞旨仰之旨。且其節御逢も被成候御樣子之旨演述。

一、退出直ニ御丸御廣式へ參上、以定之助榮操院樣へ御床拂之御歡申上、方々樣へも申上之、十八日罷出候樣仰之御禮も申上之。

十二月十六日。天保通寶錢の流通を圓滑にすべきことを告ぐ。

〔御郡典〕

百文判之儀、於江戸表新錢百文之極之品に付、於御當地も共通可取扱之處、いまだ手馴不申に付、通用方相泥候躰も有之樣子。畢竟入錢少き故と相聞え候。當時錢相場も高貴之儀に候處、右取寄方も辨利之品に付、當年より來年中追々多取寄、御拂錢可申付候條、聊無泥、小錢入交一統取扱可申候。此段夫々御申渡可有之候、以上。

十二月十六日　　御算用場

水原清五郎殿

坂井忠左衛門殿

〔三州治農錄〕

一、百文錢一つを以、新錢百文之代通用方之儀、天保六年後公儀相渡候御書附之趣、一統相觸置候通に候處、今以取扱不申躰相聞、如何之事に候條、以來無泥可致通用候。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

天保十二辛丑年十二月二十八日　本多播磨守

十二月廿七日。高直の菓子・料理等を禁ずる幕府の令を傳ふ。

本文は幕令なり

〔觸留拔萃〕

一、不益に手間懸り候高直之菓子類・料理等、向後無用に候。是迄拵來候共相止可申事。

一、能裝束甚結構成も相見候間、向後手輕之品相用可申事。

一、はま弓・菖蒲甲・刀・はご板之類、金銀かな物幷箔用申間敷事。

一、雛幷もてあそび人形之類、八寸以上可爲無用候。右以下之分は、麁末之金入どんす類は裝束不苦候事。

一、雛道具梨子地者勿論、蒔繪候とも、役所之外無用之事。

一、高直之植もの賣買停止せしめ候事。

一、きせる其外もてあそび之品々、金銀遣候儀者勿論、彫物・象眼之類幷蒔繪等結構に致間敷事。

一、女之衣類大造之織物無用に可致候。縫金絲等入候而も、小袖表一つに付代銀三百目、模様小袖表一つに付代銀百五拾目を限り、夫より高直之品賣買致間敷候。尤帷子も右に准可申事。

一、町人共一統に華美之儀無之樣致し、自今町人男女ともに分限不相應結構之品着用致し、又は髮のかざり等迄も大造成品相用候もの候はゞ、組之者見懸り次第、右居所名前等相糺し、町役人指添させ、直に奉行所へ召連れ吟味いたし候間、左樣に可相心得候之事。

一、くし・かうがい・髮さしの類、金は勿論不相成、鼈甲茂細工入組高直之品相止樣、代銀百目を限り、かうがい・かみさし右に准じ、下直に仕込可申事。

但、髷結に縮緬之立切をこしらへ、又は女子用候はきもの鼻緒等、高直之品賣買致間敷事。

右之趣、享保・寬政之度幷其後も相觸候趣茂有之所、累年世上華美に相成、銘々身分をも不辨立派を競ひ、且又外見を不目立樣に而も、內實高金なる品々猥に賣買いたし候もの共も有之由に候。たとへもてあそびの品に無之候とても、度々觸示置候儀を當座之事之樣に相心得候より、畢竟等閑に成行、法度を背候段不屆之至に候。併是迄之儀は格別之御宥免を以、先御咎之不被及御沙汰候之條、難有奉存、今般厚き御主意を以、風俗改り候樣被仰出候儀に付、不輕相心得可申候。尤是迄仕込置候品も可有之候に付、來寅年より急度停止たるべく候條、

觸面之趣相背候もの有之においては、役人相廻し遂穿鑿、無用捨嚴敷咎可申付候。尤紛敷改方いたし候もの、或は途中に而往來之ものを捕改候儀等、決而無之事に候。若右躰之者有之候はゞ、其者を留置、早々可訴出候。自今奢侈高價の品、武家方に候ともあつらへ候もの有之候はゞ、奉行所へ相伺可任指圖候。

右之通町々ゑ相觸候條、被得其意、惣而花美高價之品誂申間敷、此度之御注意彌厚相心得、諸事奢ヶ間數儀無之樣可被致候。

右之趣可被相觸候。

十　月

不益に手間懸り候高直之菓子・料理等、向後無用之旨等從公儀之御書付寫、奥村丹後守等より相觸候通に候。儉約之儀は於御當家茂前々より之御定、其後時々被仰出、近年金龍院樣御代以來嚴重被仰出、別而去戌年御親翰段々被仰出候趣も有之所、兎角華奢之風俗相改り兼候躰相聞え候。今度從公儀被仰渡候趣も有之事、猶來春御歸城之上被仰出品も可有之候條、何茂儉約之儀嚴重相愼、今度被仰渡之趣、曁於御當家是迄被仰出來候條々、無違失急度相守可申候。此段可申渡旨被仰出候。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

十二月。御郡方算用聞役の勤方を告ぐ。

〔上田舊記〕

御郡方算用聞役江申渡三ヶ條

算用聞役就申付候、肝煎裁許を離候條、身當之儀都而拙者共江直に相達、諸事肝煎之上に付可申候。但身分持高幷に家に付候品者、肝煎之裁許に預り可申事。

村中諸納所之外、惣而懸り物米錢、肝煎より割符方之人別手前算用合之儀委曲承屆、其筋不達樣令裁許、其内難心得品者拙者共江可申斷事。平生書付紙面等、惣而役人連判之節不及加判に、但品に寄可致加判候。且又村中諸事之儀者、勿論是迄之通肝煎取捌候得共、其内肝煎組合頭了簡難決儀者、宜及示談候上、難辨儀は拙者共江可相達事。

村々之儀に付、可然存寄之品有之節者、不何寄肝煎江致助言、一村中末々之者迄、隨分無滯爲致渡世候樣心懸可申事。

臨時御用向拙者共より直に申付候品可有之候條、不依何事役所江罷出、勤方直に可承候事。

右之通可相心得、取洩候品有之候はゞ追而可申渡候、以上。

丑十二月　御郡奉行

今濱村　惣　助
貝田村　喜左衛門

天保十三年

正月朔日。前田齊泰、江戸城に登り新正を賀す。

〔諸事要用雜記〕

正月朔日

一、今朝御目覺之上御例之通御祝方有之、御提灯に而御供廻り、御提灯引之頃御出、御直垂被爲召、兩御丸御登城被遊候事。

正月十六日。前田慶寧、齊泰に伴はれて閣老を訪ふ。

〔諸事要用雜記〕

正月十六日

一、今朝初而御同道に而御廻勤に付、又左衛門様三つ鐘前比御殿江御出、御居間江御通り無程御前御出、又左衛門様には中之口より御出被遊、御行列御建込に而堀田殿御勤被遊、初而御逢、御都合能被爲濟、五つ七分五厘過御歸殿被遊候事。

〔見聞袋群斗記〕

正月十六日初て御老中方江大千代丸様爲御逢御出。公同道なり。

正月廿三日。前田齊泰夫人江戸城に登る。

〔諸事要用雜記〕

正月廿三日

一、姫君様今日御本丸御登城被遊候事。

正月晦日。徳川家齊の一周忌法會を神護寺に執行す。

是月は大盡なり

〔大鋸文書〕

文恭院様御一周忌御法事、當月晦日於神護寺御執行有之候事。

一、御法事中御作事御普請方、其外三御丸御射手・御異風稽古幷諸組弓・鐵炮稽古之儀茂相止不申候事。

但、神護寺江程近き所々稽古場有之候はゞ指扣可申事。

一、御家中普請・鳴物等不及遠慮候。能囃子押立候振舞等之儀は御法事中自分に遠慮可然事。

但、能囃子之儀も役者抔稽古仕候分は不苦候。乍然神護寺近所に罷在候者は遠慮可仕候事。

右之通被得其意一統可被申談候、以上。

正月十六日　　長　又三郎

御横目中

〔官私隨筆〕

正月廿九日

一、明日文恭院樣御一周忌御法事に付、今日神護寺惣見分有之。

正月晦日

一、今朝朝詰に付六半時前出宅、神護寺へ罷越。

一、御法事五時始り、二座目之間に四つ承之。其頃晝詰之人々追々被罷出、二座目濟交代、四半頃退出歸宅。

正月。羽咋郡上田村に住する舞々三郎太夫の身分に關して議す。

〔杉木氏御用方雜錄〕

羽咋郡押水組上田村に往古より舞々三郎太夫罷在、同村領高之内一石七斗五升拜領、御印も所持罷在于今居住罷在、御城下に而者舞々三太夫与相名乘、常々も罷越、鷺舞・蟹舞抔致し、吉事等之節も祝取に罷越候に付、非人乞食類与相心得居申候。右押水組上田村に居候舞々三

郎太夫儀、今度高方御仕法に付、致取高度旨願出候に付、難相成段申渡候所、重而裁許十村庄助へ願出候は、是迄村方に而耕作而已相稼來り、當時家内も人多に而、右屋敷高而已に而は渡世之いとなみ一圓無之、十五石計不致手作而は外手段無之、畢竟御先代樣より舞々三郎太夫与申御宛之御印頂戴仕居申故、取高等一圓不相成譯に候得者、右御印奉指上度旨申聞御印持參、此段達而奉願旨申聞候。依而先年其御役所へ藤内頭より書出候物、穢多等由來書手扣相しらべ候之處、右三太夫事も書記在之、以前は金澤町内に而は生洲之小路に居、武家等へ參り舞を舞、手之内勸進仕候由。當時子孫何方へ參り候哉不相知旨。石川郡藤江村百姓中之内、同姓之ものも居申由。三太夫儀は藤内頭支配に而は無之故、其實否難相知与書記在之候。且又河北郡森村にも一人罷在、是迄平人与緣組茂いたし候由に御座候。右は各樣に而は平人同樣之御取扱に候哉承度存候。右三郎太夫所持罷在候御印、前々所持罷在候由緒書寫取、入御披見候事。

寅　正　月　　　　　　　　　　　改　作　所

諸郡御奉行中樣

於能州羽咋郡押水庄上田村居屋敷三百五十步之所、任天正年中先判之旨宛行畢。諸役等無相違令免除者也。仍如件。

承應二年三月廿二日　　御　印

舞々三郎太夫

以上

我等十七歳に成り申時、其方に領地之内を以百石之所、役無之可令扶持候。依而後日之約狀如件。

元和四年卯月十八日　　大　徳　判

舞々長三郎へ

乍恐就御尋、羽喰郡上田村舞々三郎太夫居屋敷被下候由緒

一、私先祖三宅三郎太夫与申者、末森三宅備後守殿家來に而御座候得共浪人仕、其後奥村助右衛門殿に少扶持に而罷在申候。然處佐々内藏助殿御取合之刻致籠城申候に付、高徳院様相立御聞申候哉、御印被爲成下候所、其以後御印御改之刻横山山城守殿迄指上申候得者、津田和泉殿・郡平八殿・馬場忠兵衛殿・豊島八兵衛殿御書替被下所持仕候所、承應二年に長九郎左衛門殿御取次を以右書替被召上、則微妙院様御印御成替被爲下所持仕候。

右之通相違無御座候、以上。

貞享三年八月　　羽喰郡上田村　舞々三郎太夫

正月。百歳の老齢者に物を賜ふ。

〔溫敬公記史料〕

正月。賜年百歳者物。

二月十四日。薪材の價格を公定す。

御城下を初入用之薪、前々相對を以取極、直段少々宛高下茂有之候處、近年山方之者風儀悪敷相成躰も有之、次第に高直にいたし候に付、遂詮議候所、以前に違山々伐荒候儀、且諸雑費多相掛り候躰。乍去此儘に而は高直而已ならず、第一手支におよび候故、不得止事直上聞届候處ゟも押移、際限無之儀に付、當年之處は先一作別紙直段より高直に賣不申様、村々ゟ申渡候條、御家中之人々を初其心得可有之候。

右之趣被得其意、組・支配之人々ゟも申渡、同役中傳達、落着より可被返候、以上。

二月十四日　　御算用場

藤田八郎兵衞殿

脇田彌三左衞門殿

覺

一、錢百文に付　目形六貫目　牧木

但、小割に而取寄候分は、村方相對を以少々高直之儀聞屆可申事。

一、同斷　　目形七貫目　　杪

右之通、當二月より可相改、且兩様共當時右より下直に致來候分は、尤可爲是迄之通旨も申渡置候事。

二月十五日。前田慶寧初めて德川家慶に謁す。

〔見聞袋群斗記〕

二月十二日、初而御目見被仰付候又左衞門様登城之節、下乘所相進候儀、幷挾箱片々御玄關前迄爲持候儀は、父加賀守下乘所幷挾箱入之儀茂唯今迄之通に相心得、嫡子又左衞門同様に相心得、御玄關前迄長柄傘爲持候儀、晴天之節は無用に可仕旨被仰渡候。

〔成瀨正敦日記〕

二月廿四日

一、又左衞門様御儀、御登城被成候様、十四日御奉書到來に付、則十五日御同道に而御登城被遊候所、於御白書院又左衞門様初而御目見、御首尾能被仰上、御懇之上意被爲蒙、相公様にも右御禮被仰上、御懇之上意被爲蒙候旨等申來。

〔諸事要用雜記〕

二月十四日

一、八時頃左之通御奉書御到來之事。

同氏又左衛門事御目見被仰付候間、明十五日五時同道可有登城候。且又其方儀茂御禮可被申上候、以上。

二月十四日　　眞田信濃守

堀田備中守

土井大炊頭

水野越前守

松平加賀守殿

同　十五日

一、又左衛門樣六時過御出、御長袴御くゝり之儘、御口上被仰上候上御居間江御通、御のし三方配膳役上之、御供廻前御溜江被爲入候。

一、しら〳〵前御供廻り、六半時前御時計は六つ七八分の御出也。御出、又左衛門樣に者中之口より御出、御同道に而兩御丸へ御登城被遊候事。御前御服御熨斗目御半上下又左衛門樣御長袴之事。

一、今朝御目見等首尾能被仰上、四時過之由夫より黑鷲御杉戸際に而、御兩殿樣御一集に御老中江

和田倉は會津侯邸

御半は半上下

謁、相濟、公方樣今日西丸御成に付、御締解御見合に而西丸江御上り、御前に者莵之御杉戸際、又左衞門樣には大廣間に而御奏者番御謁に相成、直に西下三軒御勤、夫より和田倉御立寄、御膳等相濟、重而御老中・若年寄御勤被遊、八つ八分位御歸殿被遊候事。

但、又左衞門樣和田倉に而御半に御召替之事。

〔續德川實紀〕

二月十五日、月次の賀例のごとし。松平加賀守嫡子又左衞門馬たてまつりて初見したてまつる。加賀守にも謝して見えたてまつる。

二月十八日。明倫堂に釋菜の禮を行ふ。

〔官私隨筆〕

二月十八日

一、今日中丁に付聖前御飾之御規式有之。如例五つ前のしめ・上下に而學校へ出座。

一、五つ餘程過初り、四つ餘程前濟。都而去年之通也。

二月廿二日。前田慶寧江戸城に登り、正四位下左近衞權少將に任じ、偏諱を賜ひ、筑前守と稱す。

〔諸事要用雜記〕

二月廿二日

一、今日御登城、又左衞門樣御元服に付、六時過出席、御出前被爲召候事。

一、三つ鐘に而御供廻り、五つに御城江と之御都合にて御登城被遊、西丸江も御登城。夫より被仰出候通、御老中・若年寄衆、御同道に而御廻勤被遊、且諏訪部殿御立寄、御燒飯被遊、九つ九歩御歸殿被遊候事。

一、四半時前御元服御首尾能御例通り被爲濟候段、御表小將早乘御使罷歸申聞候。

〔成瀨正敦日記〕

三月朔日

一、去廿一日御老中方御連名之依御奉書、翌廿二日御登城被成候處、又左衞門樣於御黑書院御目見被仰上、御元服被蒙仰、御一字御拜領、被任叙正四位下少將、御名筑前守樣与御改、御懇之被蒙上意、御盃・御肴御頂戴、御腰物御拜領、相公樣に茂御登城御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意候付、眞龍院樣江御普爲聽當席以御使被仰上、榮操院樣江は御近習頭御使を以て被仰進候條、御日柄宜時分御使相勤可申旨等。甚五郎殿御初江は奉札を以被仰進候旨に而、御口上兩通、奉札一封到來候事。

一、筑前守様御實名別紙之通方々様ゟ可申上旨申來。

上包筑前守様御實名

慶寧公

筑前守様御一字御拜領、御實名右之通被稱候事。

〔續德川實紀〕

二月廿二日、黒木書院へ兩御所出たまひ、松平又左衛門見えたてまつり、首服をくはへられ、御一字を下され、正四位下少將に叙任し、筑前守慶寧と改め、豐後守實行の刀・馬・金・卷物をたてまつり、謝したてまつる。御盃下され、筑前國盛重の御刀そへて下さる。父加賀守は、子の首服を謝して、おなじく物たてまつり謁見す。

〔恭敏公記史料〕

二月廿二日、同溫敬公登城。於將軍座前加首服。受偏諱。任正四位下少將。賜刀（筑前國盛重 代金二十兩）杯酒。改稱筑前守。名慶寧。有懇旨。公献飾刀一口・黄金五枚・卷物十・馬一匹。刀銘豐後國實行（代金十五枚）。是時溫敬公献裝刀一口・白銀二十枚・綿三十把。又爲謝加冠之命。溫敬公献卷物十・干鯛一箱。公献白銀二十枚・干鯛一箱。以使者也。

先是正月林大學頭選名取書經。一人有慶。兆民賴之。其寧其永。

和田倉は會津侯松平容敬夫人、池之端は大聖寺侯前田利平夫人

備後守は大聖寺侯前田利平、大和守は七日市侯前田利豁

是月は大盡なり

二月廿六日。前田齊泰、會津侯松平容敬夫人等を招請す。

〔諸事要用雜記〕

二月廿六日

一、方々樣今日御招請に付、六時前出席、相揃被爲召。服のし・麻。

一、和田倉・池之端より御出、御戻り之節例之通御白洲ゟ罷出。

一、今日御招請、年頭幷今度御目見等被爲濟候御祝儀に付、毎も之年頭而已之御招請に而は相濟不申、御能も被仰付候。御饗應方も御三献に而御盃、夕二汁五菜御小漬也。

一、今日備後守樣被仰進則被爲入、船辨慶被成候。御前樣・壽正院樣六時過被爲入候事。

但、前田大和守殿豫而御願に付今日被仰遣、御出被成候。坊主も五七人拜見之事。

一、御用人衆等子息方拜見被相願、則被罷出候。御先例も有之に付、御菓子一臺御在合に被遣候儀伺、被仰出、久留殿へ相渡候事に御用人へ申談る。

一、御能相濟、御小漬被進、相濟、御締可引渡旨に而、夫々主付等同じ御締引受候。夜四時過和田倉樣等夫々御立に付、例之通御白洲へ罷出、同半時過致退出候事。

二月晦日。前田慶寧の叙任口宣受領の爲使者を江戸より發せしむ。

〔諸事要用雜記〕

一、御奉書左之通幷御姓名も寫置。
松平筑前守事、正四位下少將被仰付候。口宣等之儀相調候樣、議奏衆迄可被申入候、恐々謹言。

天保十三寅二月廿二日

眞田信濃守幸貫
堀田備中守正篤
土井大炊頭利從
水野越前守忠邦

牧野備前守殿

御姓名書

折掛包上書 正四位下左近衛權少將　松平筑前守菅原慶寧

姓名書　檀紙折紙

〔諸事要用雜記〕

二月廿九日

一、廿六日口宣御奉書相渡候付、京都江之御使大嶋三郎左衛門、明晦日發足に付、左之通今日山城守江御渡之事。

口宣御奉書　　木地箱入　御直封
御姓名書　　一包

三月四日。金澤に於いて前田慶寧の元服を披露す。

〔官私隨筆〕
三月四日
一、筑前守樣御元服之御弘有之に付、のしめ・上下に而五時過登城。

三月十一日。大聖寺侯前田利平の用人來り、その十萬石待遇を舊に復して減ぜんことを希望すとの意を告ぐ。

〔官私隨筆〕
三月十一日
一、今朝小隼人罷越候節、大聖寺近代御高直り之儀、備後守樣殊之外御心配之躰に而、每度仰も有之候。先達而出府之節、自分方へ罷越候て可申達と存居候へども、當病に而逢不申候故不申達候。何卒御本家樣之御威光を以、本成に被成度思召に候間、宜考候樣仕度旨、何とやらん御內意之樣に申聞也。宜程に答置。

大聖寺用人　笠間小隼人

三月十三日。前田齊泰就封の暇を受く。

〔諸事要用雜記〕

三月十三日

一、御本丸幷西丸より御小人目付を以、上使土井殿、西は間部殿御出候旨申來。

一、八つ一分御城下御付人に而、御兩殿樣共御出向被遊、筑前守樣には御前より外にて少し御後〻へ被爲入、御大書院ゟ御通り、上意御拜聽、御拜領物御頂戴。夫より御小書院ゟ御通り、御相伴に而御料理・御盃事有之、御持參もの御作法之通之內、今度は御濃茶筑前守樣御持參被遊、夫々相濟、御請前筑前守樣御先ゟ御式臺へ御出、御廣間折廻り之邊へ御先立被遊候時分、御先ゟ御門外ゟ御出御送り被遊、御前も御送り、夫々御作法通り御都合能相濟候。

一、右御料理中、西丸上使御城下り等追々參り候に付、聞番より出役を以御見合之儀申上、本鄉三丁目邊に御見合之由。土井殿御退出之上、御廣間御緣頰に御扣之內、三丁目御付人參り、御出向等夫々御作法之通り相濟、御退被成候事。

三月十四日。今明兩日前田慶寧叙任せられしを以て金澤に盃正月を行ふ。

〔上賃屋日家榮帳〕

二月若御殿樣御元服、御墨付・御腰物御拜領。盃正月に三月十四日・五日休に御座候。誠に諸

人悦入奉存候。目出度。

三月十五日。前田齊泰登營して就封の辭見す。

〔成瀨正敦日記〕

三月廿五日

一、左之通御口上書到來、御目柄宜時分可相勤旨。

眞龍院様江

去十三日以上使土井大炊頭殿御國許江之御暇被仰出、白銀・御卷物御拜領。從右大將様茂上使間部下總守殿を以、御拜領物被成。從一位様御使井關縫殿頭殿を以御拜受物被成。同十四日御老中方御連名之依御奉書、翌十五日御登城、於御座間御暇之御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、御手自御熨斗蚫御頂戴、御鷹・御馬御拜領。且山城守・將監御目見、拜領物も被仰付、重疊難有御仕合思召候。右御吹聽被仰上候段、御口上宜申述候。

三　月　　　　御使　成瀨主稅等內

〔續德川實紀〕

三月十五日、松平加賀守御鷹・馬下され、就封のいとま賜ふ。

三月十八日。前田齊泰江戶を發して就封の途に上る。

三月十八日

一、今朝五時不遲之御揃に御供揃に而、拙者共相揃罷出、御前江出恐悦申上る。四半時益御機嫌能御發駕被遊、六時過上尾御着被遊候事。

一、四時過御上下に而筑前守樣御同道御表江御出、備後守樣於御居間書院御對顏被遊、夫より御小書院溜幷御勝手座敷御客衆・御用人衆久留殿等御逢被遊候事。

但、眞龍院樣御使者御直答。山城守等被爲召候儀も此時に候得共、此度は御旅裝束之上被爲召候。初めより此御都合少不行屆、ケ樣に成候事。

一、筑前守樣御發駕前御出、於御居間御對顏、御のし三方指上候。且御表御出、相濟直に御退出、夫より御下屋敷へ被爲入候。

一、喬松丸殿にも御下屋敷へ被爲入候。且御のし三方御一集に御小將上る。

一、御下屋敷に而、雨も降候付御庭へ御出も不被遊候。御發駕之節鏡板迄御二方樣とも御送り被遊候。敷付敷無之故板之間也。

但、御先例者御見立者表御式臺敷付迄被爲入候筈。此度は右之通也。

一、明曉七時之御供揃に而當驛御發駕、鴻巣・吹上・かこ原・深谷御小休可被遊旨仰出候段廻

狀有之。

三月十九日

一、今曉七時過御發駕被遊、昨日被仰出候通所々御小休等被遊、七時本庄御着被遊候事。

一、明曉七時之御供揃に而左之通御小休。

落合新町　　板鼻 御晝　　八本木　　松井田

三月廿日

一、今朝七時御供揃に而、同刻過本庄驛御發駕被遊、所々御小休等被遊、夕七時過坂本御着被遊候事。

一、今日板鼻御中休より八本木迄御馬上被遊候事。

三月廿一日

一、今朝五時御供揃に而、夜明無程板本驛御發駕被遊、所々御小休等被遊、八つ七分小諸御着被遊候事。

一、今日碓氷峠難所御滯なく御越被遊候事。

三月廿二日

一、今朝六半時不遲之御供揃、御旅館前に而御提灯引け、小諸御發駕被遊、所々御小休等有

之、七時過矢代御泊ゟ御着被遊候事。

一、今日之處兩川共御差支無之候得共、夕景より之降に付犀川御指支之有無、今晩御歩横目・御横目足輕指遣、明朝御供揃刻限迄に注進有之筈与申上候事。

三月廿三日

一、今朝六半時過矢代驛御發駕、兩川御差支も無之に付被爲入、千曲川御渡船被遊候上、夜前犀川見分之御横目足輕戻り御差支無之旨。然處無程犀川々方御役人より紙面御道中奉行より申上、追々增水之由申來。南原村ゟ被爲入候處、益々增水之御注進に而、御旅館取次幷御使番中見分之趣も申上、只今之處御差支之由。併先丹波島迄可被爲入旨に而、則同驛へ被爲入候處、定水に三尺餘も相增、川方御役人も御本陣ゟ參り、段々御道中奉行懸合之處、何分今日之處御差支之由申聞。尚又今一篇可致僉議旨に而、則御引戻りも可被遊哉之御僉議區々之處、此躰に而者千曲川もいかゞ可有之と御旅館取次見分被遣候。然處重而犀川々方御役人罷越、少し引水に向候間、此上は追々減水可致、何分烈風に而減水致兼候由。明朝之處は此躰に而者必御差支有之間敷、矢代ゟ御引戻り之儀も恐入候間、當宿に御見合之方可然哉。米・味噌迄之儀は聊御差支無之、夜具御差支候由に付、前々御泊も無之ヶ所之事。依而宿札は不打、渡支度所何方々々と相極候事に成、彌當所に御見合之事に詮議治定之內、千曲川見分之

加須屋罷歸り、追々增水、追付舟揚之由言上有之候。依而當所に御見合より外詮議方無之、御見合之儀に被仰出候事。

一、右之趣御道中奉行より相觸、何茂支度所へ引取候。米・味噌迄等之儀も觸有之候。宿料は御本陣拂、旅籠代並之通に取極有之候。拙者宿ゟ坂井氏・有澤氏・杉浦氏四人打込候宿之事。

三月廿四日

一、今朝犀川々明に付、御供揃呼立、五半時過丹波嶋御發駕被遊、善光寺御晝等夫々御休被遊、七時過柏原驛御着御泊被遊候事。

三月廿五日

一、今朝六半時頃柏原御發駕被遊、宿端に而御提灯引け、所々御小休等被遊、七時過高田ゟ御着被遊候事。

三月廿六日

一、今朝六半時御供揃に而、同刻過御提灯引け、高田御發駕被遊、所々御小休等被遊、八半鎌能生驛御着被遊候事。

三月廿七日

一、今曉七時御供揃に而、同刻過能生驛御發駕被遊、所々御小休等被遊、七時泊驛御着被遊候事。

一、南風は一向波に障り無之、不覺靜成山之下に候。姫川は夜前より之暖氣に而少水高く候へ共、尤御滯なく、無類之御都合に候事。

三月廿八日

一、今朝六時御供揃に而、同刻過泊驛御發駕被遊、所々御小休等被遊、八つ鎌下魚津御泊に御着被遊候事。

一、浦山御立、御歩行に而十二貫野道へ被爲入、新開所御巡覽被遊、布施川此方邑へ（田井新村也）御出、矢張御歩行、魚津寄に而御馬に而被爲入候事。

一、於魚津引網被仰付、見物被仰付候事。

三月廿九日

一、今曉七時過魚津御發駕被遊、滑川に而御小休、御發駕之上御提灯引け、所々御休被遊、川場に而御□居候。八時過高岡御着被遊候事。

一、御着之上追付之御供揃に而、瑞龍寺御參詣被遊、七時過御戻り被遊候事。

四月朔日

一、今曉八時前高岡御發駕被遊、今石動に而御提灯引け、所々御休、八時御着城被遊候事。

〔成瀬正敦日記〕

三月廿六日

一、本庄驛より傳封御用狀

相公樣益御機嫌能、今日十八日也五時不遲之御供揃に而、四半時過江戶表御發駕、御下屋敷江御立寄、筑前守樣・喬松丸殿御先江同所江被爲入被成御座、則御對顏、御庭江も御出、追付御立、今晚六時過上尾御宿江御着被遊、恐悅之至御同然奉存候旨、江戶表より之中飛脚步足輕、當所より早飛脚申渡候旨等申來る。

三月。家中の士にして前田慶寧の名に觸るゝものを改めしむ。

〔留書〕

筑前守樣御名乘御一字御頂戴。慶寧(ヨシヤス)樣与奉稱候。御家中之人々、實名同字有之候はゞ相改可申候。文字は違ひ而茂唱同事に候はゞ唱替可申事。

壬寅三月

三月。定火消の職務執行に關する心得方を定む。

〔御定火消心得方留帳〕

寳幢寺村とあるは明らかならず

三月

一、町續在鄕火事之節防ぎ可申ヶ所左之通。

寳幢寺村　非人小屋　七つ屋　堀川　廣岡村　長田村　野田村　土屋村　田井村　小立野新村　上下笠舞村　泉村　地黃煎村　石坂村　中村　增泉村　大豆田村　上下安江村　淺野村　大衆免村　談議所村　卯辰村

右手懸け申候事。

一、非人小屋出火之節、裁許与力より申聞次第罷越防ぎ可申筈に候事。

一、割場　一、御作事　一、かべ小屋　一、御普請會所　一、御算用場

一、町會所　一、御厩　一、木藏　一、公事場　一、下御臺所

右請取火消無之、早速人數入防ぎ可申候事。

一、兩末寺棚之內出火之節、末寺之役人に斷纏入可申事。

但、門前に而も末寺之家有之候間、其心得可有之候事。

一、宮腰出火之節火も見え申程に候はゞ、當番之面々金澤町端ゟ罷越見合可申候。大火に而町奉行より案內有之候者、罷越防ぎ可申事。

但、非番之人々案內有之次第、火之見所拔き、當番同事に可相心得候。當番人罷越候旨案

内有之事。

一、野田桃雲寺邊出火之節は、當番人罷越防ぎ可申候。非番之人々當番同事に可相勤候。罷歸り候上案內有之事。

右者兩所共罷歸り候上、御用番に可及案內候事。

一、御臺所町　一、御手木町

右兩所共通拔不相成候。若廓之內火事之節は纒入防ぎ可申事。

但、木戶之內江入れ不申候得者共通りに候事。

一、大組　一、中組　右同斷。

一、武士屋敷　一、下屋敷　右同斷。

一、消家等名前隨分入念承合可申候。纒附足輕馳廻り承り可申事。

一、梯子江御橫目中上げ可申事。

但、御橫目合紋水玉に半月。御徒橫目合紋鳥井襟水玉、且足輕橫目彼是指圖申懸け候而も聞上げ申間敷、併其時之樣子次第に候。

一、梯子者別而大事に付、隨分奉行幷裁許之者心を付け可申候。當時御仲間多く被仰談有之故、御仲間家來与名乘候者下々迄も無構梯子江上げ可申事。

一、侍屋敷出火之節、燒居候而も斷無之候はゞ手懸け不申筈に候。且少し之儀は、火事に而無之由申聞候者、其分に而人數引取可申事。

但、侍屋敷塀等江梯子指し懸見分無用之事。

一、既に火におはれ候時、自然侍屋敷を越し申扱難成節は、役人等江及斷、聞屆之上越し可申事。

一、侍に而茂町家に居住之方見分、梯子懸け申儀不苦候。

一、火之見所より鳴子引申候而見分に上り、見屆指圖に可任候。尤見分人揚り候內裝束可致候事。

一、兩末寺兩隣江見分梯子掛揚申儀、堅く無用之定に候。

但、兩末寺は木戶入口小路より末之小路迄、東末寺は表具屋小路より末之橋迄、梯子懸け申儀堅く無用。是は諸役人下々迄得与心得可申事。是非寺內江入り不申而不叶時は、末寺之役人等江申斷、指圖次第入り可申事。

一、御臺所町常々者往來成候得ども、火事之節は行ぬけ不相成候。是者御道具等有之故歟、下之心得違に而無理に行拔候得ば主人越度候事。

一、御城內江入申儀有之節は、高提灯通し申儀堅く無用。自分立込申儀有之候はゞ、馬脇朱

紋之提灯、平生柄をぬき提げ申様に拵置用立可申候。尤其節は何役人に不限、主人に指添入可申候事。

一、町人者随分引上げ可申候。其上宜き消留在之時者、其町江褒美心付之事。

但、役人心得居可申候事。

一、惣體於火事場取捌、頭立候役人心得居可申事。

一、火消申家江随分纒奉行上り、纒持等江顔合せ可申事。

一、火之見所江障申木爲切候節、役人より附屆可申候。重き方々江は、主人より直紙而遣し申儀有之事。

一、纒附足輕等者、纒奉行支配いたし候所も有之候。是は大概頭役纒奉行相勤候得者、彼是身分之儀申渡候。尤相願候之所も勝手方役人類役迄可相願候。纒持抔よりは奉行まで願之筋有之候。其時は程能取捌可申候事。

一、新出來之纒式臺に掛け候。右道具随分大事に可致候之樣足輕纒持等に申渡、依而少宛酒代被下候段申入相渡候事。

但、御修覆にても同事。

一、消留めに相成、最早氣遣敷無之下火に相成候儀、纒附足輕曁纒持等に承合、纒引可申儀

に候。且御小將横目之內彼場に有合ざれば、其方江參り奉行逢候而、最早消留候間纒引候段可相達候。右之趣達捨に而引可申候。御横目中不被有合候者、尋出し達に者及不申候。能下火に相成候者引可申事。

一、前段に相記候侍屋敷出火之節、少々之事に而相濟候得者、其主人歟又家來歟罷出、火事に而無之由、纒入申間敷与申時、奉行罷出右主人歟家來に達、再三相尋、決而火事に而無之段申聞候へ者、引取申格に候。其節雜兵不辨無理に押込、門等打破り申儀も在之候へば、主人越度相成候間、何役人成共隨分可致承知候。小身方も侍同事に候。火事に而無之段申斷、右主人罷出候者、格之通引可申候。侍之申儀疑申間敷候。其上大事に相手に相成手に合不申時は、また〳〵其時之事に候。

一、出火与見受人數出し、外より人數出候上火事与申儀は先は無之事。御仲間被仰談与申儀は、先達而纒持幷纒附足輕參り、阿方申談之上、其後纒奉行罷越如何与申時、申談之足輕等答候へば、其通に可相心得候事。

一、組屋敷幷下屋敷抔は木戶打申候間、右之內少々燃候樣子見受候共、あなたより指圖無之內手懸け申間敷候事。

但、御臺所町出火之節、火消人數入候儀不相成趣に付、左樣有之候而は指支之儀有之、御

同役被仰談、出火之節は町屋同事に致度段、戌七月朔日出御城代前田修理殿・本多右門殿等より、御用番長九郎左衛門殿へ御達被成候所、同十五日御用番より前田修理殿へ、先達而被申聞候趣、則柴山杢兵衛江手前致僉議候之處、左候はゞ町家同事に人數入込防ぎ可申、併外火事之節は往來不相成趣被仰渡有之候。且又組屋敷も同樣也。

一、町奉行・御使番・御横目梯子江上り候儀、何茂御用に候間、其節念を入名承り上げ可申事。

一、燒居申家より五軒こなた家こわし候而も不苦、六軒目こわし候へば越度に相成候事。

一、纒奉行參り樣心得之事。

一、消留め家等、主人出馬に候はゞ、火事之有無樣子可相達候。跡より御横目罷出候得者、主人江馬上に而相尋候。主人答申落し有之候ば、其時纒奉行進み出、御横目中江委細可申述候之事。

一、中見之節揚候町名・家名可承候事。

一、家老押之事。

一、家老鑓・若黨・草履取召連可申候。自分紋附脇指丸子、鳶口に指し可申事。

一、火之見所開候節、纒奉行より纒持江心添之事。

一、火事之節當番・非番罷出候之事。
一、御藏所は十一屋・土淸水、是へは可罷越候事。
一、火事に而無之段申聞候共、能相改、立具等・柱も燃え上り候へば火事に候。下切に相濟候へば、下は猥になり居候而も火事に無之候事。
一、火事之節御城中に鳶口持參指支不申候。大火之節は高提灯も指支不申事。
一、消口は家燒候所半分に而消留め候を云也。
一、消留は家燒候をもみつぶし候を云也。
一、防留は隣家に付懸り候を防を云也。
一、消口は柱等建具之形殘り候を云也。
一、消留は隣迄燒來り候所を消留。
一、防留は小路等有之或は飛火多來り候所防留と云也。
右三ヶ條は、文化十二年四月十二日御同役被仰談、御達方之ヶ條也。
一、旅籠屋七軒有之候。若七軒之屋根に上り候樣成儀有之節者、內に入り、宮樣家等之旅人有之哉之旨相尋、無之段申聞候者上り可申事。
但、相尋候者、若宮樣方等御會符有之候得者、邪魔に候之間相尋可申事。

一、場所に而纏損じ候節、御横目江申達、早速取に遣し、纏取替可申事。

但、損じ候纏者、引上候節行列之跡より爲持候事。

一、御城近火事之節、御曲輪之内番小屋に而も火之粉燃付候節、御門番へ致付届火を防可申。其刻御城代或は御年寄衆・御目附衆江案内申達、指圖有之候者名前、無指圖候者無遠慮火を防ぎ可申事。

一、火事場より歸り候節、御横目等火事之様子被尋候はゞ、何町に而鎮候段可申達候。且虚說等之節は、火之見所より見請罷出候所、何町に而中見爲致、在火之様子に付纏引上候段答候事。

一、火事場より歸り候節、行列之内御横目・御使番馬上に而通可申段被申聞候者、交名承り、御用之方に候間聲を懸、行列爲切可申事。

一、野田桃雲寺邊火事之節、當番之人々御越、其段途中より足輕使に而非番之御筆頭江申遣候得ば、火之見所御當番同事、尤御筆頭より夫々御案內次第、右櫓見張り申事前後案內之事。

一、宮腰同事に候へ共、非番之御方町端に而被詰候事も有之、兎角町奉行請而之事也。

一、火事場に而纏をれ候歟燒候はゞ、纏付之內一人代り取に遣候事。

一、火事之節纏持不在合候者持參之事。
一、右損候纏行列押足輕之上爲持候事。
一、侍屋敷火事之節、外長屋ゟ者無構梯子を懸け申候。併門開き候へば、外より梯子懸け候而も不苦候事。
一、當番之節近邊御鷹野等御出之節、先達而其近邊町家より案內いたし候樣申渡置、案內次第櫓戶をしめ下り候事。
但、火消方御定帳には、戶は其儘明置可申旨也。
一、小立野筋出火に而纏等指出候節、若御寺御參詣に而御出合申候者、暫蹲踞いたし罷越、併脇道有之候者其向寄より可參候事。
但、右之節警固足輕指留申候。脇道も無之候者、能所に而蹲踞いたし候間、罷通り候由申達候。戾り之節は可致踞蹲、御通り後引上可申事。

四月朔日。前田齊泰金澤城に着す。

〔成瀨正敎日記〕
三月廿九日
一、明日高岡より御着城に付、表向御殿揃刻限四つ半時揃之由。

一、明朔日高岡より御着城之筈に候間、御着之御樣子承合、登城御機嫌可相伺候。幼少・病氣等之人々は、御用番御宅へ使者を以可申上旨、且朔日月並相止候旨、御用番將之佐殿より御廻文到來之事。

四月朔日

一、今日高岡より御着城に付、表向御殿揃刻限四ッ半時に候得共、御次內は人々心得に而五ッ時過より追々罷出候。今日より奥之口往來いたし候事。

一、津幡御附人九ッ半時頃來る。夫より九ッ半餘程過八ッ前森下御附人案內有之、何れも御式臺へ相廻る。御子樣方も御出、御先立御廣式頭等追付大樋御附人も來る。八ッ時益御機嫌御着城被遊候。敷附御左へ善右衞門・肴次郎、御右江配膳役改田久米之助・御近習頭山森罷出、階下御右へ御城代美作守、御左へ御家老・若年寄罷出、御子樣方は最初御式臺御疊之處に御着座、御先拂御見懸階下御右へ御出、御後ロに頭・御抱守一人扣罷在。御刀持は階上出入之後へ扣罷在、御通之節刀御ふせ候事。御先立若年寄式部。夫より御作法書之通被爲入、御居間書院より御先立主稅、御玄關前御見受相廻る被爲入、御居間御上段に御着座、御熨斗配膳役上之。相濟、主稅・善右衞門罷出、益御機嫌克御着城被遊、恐悅奉存候旨申上候所、何れも無事と御意に、御意を蒙り難有仕合奉存候旨御請申上。夫より御近習頭幷隱居二切に罷出る。

四月三日。奧村丹後守御勝手方御用の職を辭せんと請ふ。次いでその意を果さず。

〔官私隨筆〕

三月廿九日

一、今日左之紙面御用番へ可達と相調致持參、先內膳殿へ及示談候處、各へも物語有之由にて、今暫見合候樣仕度由被申候旨に付、今日は不達之。

朱書

此紙面月附を四月にいたし、三日に內膳殿へ逢、何卒達度、內膳殿へ可相渡哉と申入候處、御用番より此紙面差出候樣にと昨日分にも申談は無之候哉、昨日其示談之由被申聞。何等之談も無之旨申入、內膳殿より被達候樣仕度旨申入之、相達す。

私儀去々年御勝手方御用被仰付、前廉內存之趣をも申上候へども、段々被仰出に付及御請、其後月々之主付も一人に而相勤候樣被仰付候付、其砌今一・兩人も主付之者被仰付候樣仕度旨申上候へども、御聞屆無御座、相勤來申候。然處右時々申上候通、元來御財用向之儀は不案內至極に罷在、其上御算用場奉行之內も、打はまり相勤候樣には不被存人々も有之、且場內御役人全く和熟仕候樣にも不相見、其以來之御不足高御埋合之僉議も爾々出來不申、増而

此末之御手繰等、根元へ付候品を僉議候所へは參り不申候。先達而以來不及ながら愚意申談候趣も御座候へども、其詮も無御座、御勝手向之御樣子は段々之御物入共打重り、御不足高も過分に相成り、益御逼迫に付而は、御役人彌和熟出情不仕候而は難叶儀と奉存候所、右樣之族に而御趣意通之所へは參りがたく、且又惣躰御省略之筋も何となく忽せに相成候樣に有之、彼是申談方不行屆故と迷惑至極奉存候。去々年以來聊御國益之筋も出來不申、御費用は過分に相成、此儘に而は御勝手御成立之詮も一圓相見え不申、次第に御行詰りに相成可申段大切至極奉恐入儀に御座候處、此上何と存辨候儀も無御座候間、月々主付之儀餘人へ被仰付、私儀は御勝手方御用御免被仰付被下候樣奉願度奉存候。依而先及御內談申候。猶口上にて御達申候通候間、宜御相談可被下候、以上。

四月三日　　　　　　　　　　奧村丹後守

村井紉負樣

〔官私隨筆〕

四月廿六日

一、御勝手方御用之儀に付、先達而內談紙面指出置候處、則御用番被指上置候由。然處今日御用番被爲召、無泥相勤候樣可申談旨御意之由播州演述に付、被仰出候趣奉畏、先以御用に

も相立不申候處、加樣に被仰出難有仕合奉存候。乍去何相辨候儀も無御座、當惑仕候間、猶又相考御自分樣迄申上候儀も可有御座、先宜樣御申上可被下旨申演之。

四月四日。前田齊泰、石川郡北安田にて捕獲せる白雁を觀る。

〔官私隨筆〕

二月廿四日

一、成瀨主稅參出、石川郡北安田村に而此頃白鴈をとらへ候由に候。御用番より若年寄へ御用も有之間敷哉之段申達有之旨。もし御用無之候はゞ御子樣方御覽も被成間敷哉之旨、御用番申聞に候。御廣式頭へ被逢候序有之由候間、序に被承間敷哉と尋候處、可承由口上。

二月廿五日

一、白雁之儀御子樣方御覽被成度旨に付、御表御用無之候はゞ、御鳥部屋へ渡り候樣にと御用番へ申入候由、主稅口上。

〔成瀨正敦日記〕

四月四日

一、先達而御留守中河北郡捕之白き雁、御鷹部屋へ留置候樣若年寄方へ被仰出置候分、今日御覽可被遊旨被仰出、若年寄方へ爲承知申達、今日直に御鷹匠小頭江申談、取揚奥取次へ引

河北郡とするは誤なるべし

渡入御覽。御留に相成候旨に付、御鷹匠取次へ申談、若年寄方へ爲御承知申達置候事。

四月十三日。幕府、前田齊泰夫人の獻上品を簡易にしその費を省くべきことを告ぐ。

〔成瀨正敦日記〕

四月廿六日

一、左之書取、此間津田判太夫より申上る。

御守殿御住居向表方御入用多、可爲御難澁趣御心痛被思召候付、今度格別に御守殿を初御儉約被仰出候。就而は是迄兩御丸へ御上げ之御品等、於先樣萬端被敬御品等、御入念御吟味御指上等に相成候得共、畢竟右等之御廉々に而御入用も相嵩申儀に可有御座候。依之以後之處、是迄之御仕來、聢先樣御家格等に御拘り御欠き難被成御儀たり共、於先樣右樣之儀都而御貪着無之、御上げ品等に而も、誠に御麁抹成御取調理に相成候樣に与之御趣意に候間、此御住居表方御入用圖り、去年四月より當三月迄之分取調理減を付、御用人衆より水野越前守殿御手元迄可被相達旨、今度御取締御懸り石河美濃守殿等、當十三日於御城被仰談候旨、久留孫太夫殿御中聞候事。

四　月

四月十四日。前田齊泰就封の後初めて學校に臨む。

〔成瀬正敦日記〕

四月十二日

一、御歸國後明倫堂初而御出之節は、御上下に而御出、督學へ大學三綱領之講釋被仰付御聽聞、御上段より御出被遊候。其節教官之人々幷入學生聽聞被仰付候事に相成居候旨。依廻狀等、餘程數多事相成儀に候間、二・三日前被仰出御座候樣仕度旨、此間大田又助申聞之趣も有之に付、其段申上置候事。

四月十四日

一、今日九ッ半時之御供揃に而、御上下被爲召、八ッ時前學校より御案內申上、追付御出、明倫堂御上段へ直に御上り。但御上段御右之方横迄若年寄式部御先立、夫より主稅御先立仕、御上段へは裏より御上り。無程講書宜旨申上り、御襖明之、廣間無目敷居之外に御氈敷有之所へ御着。其間織人御先立、御見臺表小將上之。無程講書相初、教授廣瀨順九郎大學三綱領講之。相濟、御見臺引立、御上段へ御上り、御先立主稅、（但下へ御出中に何れも無目敷居之内に罷在る。）講師順九郎御正面へ罷出御禮、大儀与御意、御取合內膳殿被申上、御襖建之。無程經武館不時的御覽宜旨申上り、御先立大野、裏之方へ式部相向、夫より射場迄御先立。吉田權平方不時的四座宛三

返御覽。但一篇三度宛也。五度宛之筈之所御好に而三度に相成。相濟、直に御戾り被遊候。八ツ半過也。

四月廿二日。前田齊泰・利義・利行共に能を演ず。

〔官私隨筆〕

四月廿二日

一、今日御能に付上下着用五時登城。

一、御能五時過始る。

一、今日御能之內、竹生嶋御シテ甚五郞殿御ツレ豐之丞殿、八嶋・藤戶・須磨源氏相公樣被遊。又道成寺あり、波吉甚次郞へ被仰付。

一、御到來之御肴御下被下候由、御膳奉行演述之旨御用番被申談。

一、是界御能之間に右御吸物・御酒・取肴するめ被下候。畢而以御膳奉行御禮申上候。

一、御能六時過濟、松之間二之間に而各一列以牽次郞御禮申上。且又豐之丞殿御能初而拜見之御禮も申上、丹後守・山城守は居殘り、せがれ共御能拜見且頂戴物被仰付候御禮同人へ申述候。

四月廿四日。前田齊泰の生母榮操院病癒え床拂を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

四月十八日

一、左之通窺被仰出候事。

榮操院樣昨年春以來御滯之處、御快被爲在候に付、當廿四日御床被爲拂候段、無急度御用番年寄中ゟ相達可申候。

一、於御奥御祝方可有御座候。

一、御廣式向御步並以上布上下着用之事。

一、御廣式男女一統御吸物・御酒可被下事。

但、足輕以下ゟ者御酒・するめ可被下事。

四月廿四日

一、今日榮操院樣御床拂に付、夕景罷出候樣申來、七時過出御同所樣へ御目見。其節献上物披露有之、御床拂御祝付御目六被下。畢而御側罷出、御廣蓋居之御品被下候。御禮申上、老女を以て申述、御三之間ゟ引、御膳祝等致頂戴。相濟御側へ被爲召、眞龍院樣御初も被爲入、御目見、御酒等致頂戴。夜九時引御禮御附頭幷老女へも申述、致退出候事。

四月廿七日。前田齊泰能を演ず。

〔官私隨筆〕

四月廿六日

一、明日御能被遊候付丹後守・播磨守拜見被仰付候。其外之面々は望次第拜見被仰付由、以甚兵衞被仰出候由、御用番演述。

四月廿七日

一、今朝五時過罷出。

西王母　御　簾　權作　楊貴妃　御

百　萬　甚次郎　草　薙　甚五郎殿　安　宅　御

枕慈童　甚次郎　祝言養老　六兵衞

四月廿七日。物價方役所を廢止することを告ぐ。

〔官私隨筆〕

四月十七日

一、物價高貴等に付可被仰出趣御下物兩通拜見被仰付、一兩日中及御請可申旨申上候。

一、右に付物價方御差止之儀、取仕切僉議仕樣可申談旨御意。

〔郡方御觸〕

天保八年以來物價方役所被建置候得共、今般被指止候。是迄右役所に而取捌候產物方御用之

儀者、御勝手方役所江打込相勤候樣被仰付候段、御用番年寄中被申聞候條可被被得其意候、以上。

四月廿七日　　御算用場

林源多郎殿

吉田藤馬殿

服部貞右衛門殿

右寫之通申來候條、得其意、夫々可申渡候。先々早速相廻、落着より可相返候、以上。

四月廿七日　　服部貞右衛門

加州三郡十村中

五月六日。前田齊泰、石川郡弓取川筋に放鷹す。

〔諸事要用雜記〕

五月六日

一、九時過御出、七つ屋口町端より被爲入、弓取川筋鷭御鷹野被遊。此間村新左衛門方等に而御小休被遊、夫より同村領御放鷹被遊、暮前御歸殿被遊候事。

御獲柄左之通

鷂十六　内九つ御拳

鶫一つ打留

五月十一日。成瀨主稅、御次向及び兩御廣式御儉約主付を命ぜらる。

〔諸事要用雜記〕

五月十一日

一、左之通今日御用番美作守殿被仰渡候旨演述有之候事。

但、高田善右衞門江も右御用被仰付、出勤候上申渡候筈之旨被仰聞候由事。

成瀨主稅

御勝手向御難澁彌增に付、今一篇格別之御儉約可被仰付候。當時公邊萬事御改革、質素儉約茂嚴敷御僉議方之御樣子。將又姬君樣方、御守殿御住居とも諸事御嵩高に付、今度御改正可有之、御取締掛り之御人々茂被仰付候。右に付而茂御省略方格別之御僉議方も可有之候。依而御次向曁兩御廣式御儉約方主付、御手前被仰付候。此段可申渡旨被仰出候事。

〔成瀨正敎日記〕

五月九日

五月十一日。大聖寺侯前田利平歸邑の途金澤城に登る。

一、備後守樣前月廿六日江戶表御發途、川支に而御逗留有之、今日此表へ御着之由。右に付御見廻（御進物有之、明後十一日御登城被成候樣被仰進。）御近習頭御使を以被仰進に付、荒木津太夫相勤筈。

五月十一日

一、五ツ半時過、夫々御都合宜旨に付、御登城御指支無御座旨、杉浦等より以紙面御旅館迄御案内申上候事。

一、四ツ時備後守樣御登城、御家老本多大學を以御口上被仰上、御近習頭より申上、御通被成候之樣被仰出、御家老大學申上、御居間書院へ御通之旨申上る。（但御通前、當席被召候旨御奏者番申聞、大野罷出候所、今日之御手續等御尋に付夫々申上る。）追付御出。（御先立坂井）御對顏、御持參之御太刀御奏者番前田內藏助披露。（長袴）引之、御熨斗・御多葉粉・御茶出之。終而御料理之御挨拶被仰入、御屏風之此方迄御入、御多葉粉盆引之、御料理上之、御引菜御持參。相濟、一と先被爲入、御盃事宜旨申上り、追付御出、（御先立坂井）御盃備後守樣へ出候所に而御出、御盃事有之。被進候御刀、御家老今枝內記上之。備後守樣御受取、三之間御緣側へ御退、御帶し被成、二疊目位へ御出御禮被仰上。右御緣側へ御退、御指替、右御刀表小將へ御渡。右御盃事相濟、一と先被爲入、御料理相濟候旨申上り、御奧御宜旨に付、御奧へ御通被成候樣被仰進候付、主税下之口より罷出、御三之間に而御禮仕、御敷居際迄相進、御奧ゟ御通被成候樣申上、直に中座仕、上之口之際迄相進、直に御先立仕候。御三

之間へ小左衞門無刀に而罷出、夫より御先立替合、上之御鈴之手前御前御出迎之所迄御先立仕、夫より御誘引に而御奥へ御入之事。但御刀は御三之間迄表小將、夫より配膳役持之、御先立落候所に而、奥取次受取若年寄へ相渡候事。

一、九ッ半頃追付御退出之御様子之旨、御奥より申出候付、御表夫々相向候上、何れも夫々御鈴等へ相向罷在候所、追付御前御誘引に而御出、如例小左衞門御先立、御三之間より織人御先立仕、御居間書院上之口より御着座之間へ入、御着座之上、中座仕下之口へ引取。御居間書院御着座之上、御前御出御先立小左衞門御挨拶被遊、御退出に付直に如例農人之御杉戸邊迄御送被遊、被爲入候事。

一、芙蓉之間へ御着座之上、年寄中御人拂に而被爲召、被仰入候儀有之候由。夫より御退出、雁木坂邊より御立戻、芙蓉之間へ御着座、御家老へ御口上被仰上候付申上り、御對顏は不被遊候旨に而御返答被仰出、九ッ半過相濟御退出之由。

五月十四日。金澤鍛冶町より火を失す。

〔毎日帳書拔〕

五月十四日

一、鍛冶町与荒町之間横小路之内より出火之躰。及大火に付、奉書火消申渡候事。

〔御留守江戸詰中御用諸事留〕

六月八日
一、前月十四日御國に而鍛冶町・象眼町燒失家數、町奉行より達候由。
六十五軒
内一軒　火元　　十一軒　支配違
外に二軒　毀家　　一軒　半毀　　一つ土藏

五月十五日。宮芝居を許可すべきことを議す。
〔官私隨筆〕
五月十五日
一、宮芝居之儀、一向堅く止め候も又人氣之爲如何候間、春秋兩度祭之節迄聞屆有之可然、たとひ三日が十日に成候とも、常住不斷に成不申樣与示談之旨也。
但、三絃は相止め可然、芝居は躍と違三絃は無之ものゝ樣に承候旨也。近來は專有之候へども以前は無之樣に承候旨。

五月十九日。前田齊泰、その子慶寧以下の費用を節減すべきことを告ぐ。
〔諸事要用雜記〕

五月十九日

一、例刻出席、相揃候上被爲召。

諸事御省略之儀毎度被仰出置、諸向共有油斷間敷候得共、打續御物入多、御勝手向御難澁彌増に付、今一篇御儉約可被仰付、當時公邊萬事御改革、質素儉約之儀茂嚴敷御僉議方之御樣子。將又姫君樣方・御守殿御住居共諸事御嵩高に付、今度御改正可有御座御取締御懸りも被仰付候旨。右に付而茂筑前守樣御入用方も、是迄之仕來に不拘格別相減候樣可遂僉議、いまだ御幼年之儀にも候得者、萬事御質素被爲在候儀、御成立之ためにも宜被思召候間、萬端御事輕相成、御儉約之筋相立候樣、無油斷可遂僉議旨仰出候事。

五月

右市三郎等に被仰出候事。

諸事御省略之儀　　可遂詮議旨、竹田市三郎等に被仰出候。就而は喬松丸殿御事は、猶又諸事御手輕御質素之儀に相心得、前文之御趣意奉伺其意、御儉約向精誠及僉議、成丈御入用相減候樣可申談旨被仰出候。

五月

右永原貢等に被仰出、於此表森七郎左衞門に相渡。

諸事御省略之儀　　　　　　　御取締懸りも被仰付候旨。就而者筑前守様御附方、幷御本宅向等之儀者、猶以御儉約可有御座候故、追々被仰出候品も可有之候。御奥口とも聊無油斷相心得、御省略之筋相立候様可遂僉議段、向々江被仰出候間、和田倉池之端御奥向之儀も諸事御手輕、成丈御入用相減候様、年寄女中等江も篤与申談可致僉議旨被仰出候條、被得其意、夫々可被申談候事。

五月廿一日。前田齊廣夫人、自今家族相互の贈答を廢すべきことを告ぐ。

〔成瀬正敦日記〕

五月廿一日

一、左之通飯尾吉太夫を以、眞龍院様より被仰進。

御勝手向御難澁彌増候付、今一返格別之御儉約被仰付候段被爲聞。依之御進物之儀一切御斷被成度候。就而は此方様よりも被進物御指止被成度思召候。今般公邊向萬事御改革、質素儉約之儀嚴敷御詮議方之御様子も御聞被成候間、姫君様御初江戸表方々様江も、御双方御進物御斷被成度思召候間、御住居向江は御引取被仰進に而可有御座哉、此段宜取計被申上候様可相達旨被仰付候事。

御住居は前田齊泰夫人の居所

一、左之通被仰出、御廣式頭村田定之助呼立相達す。尤方々樣へ被仰進候旨申述。
今一返御儉約被仰付に付而は、御內輪向御進物之儀、乍御心外御互に當分御差止可被成候。
年頭其外臨時御祝儀之節御進物之儀も、御事輕之儀可被仰付候條、此段可申上旨被仰出候。

五月廿一日。前田齊泰夫人江戶城西丸に登る。

〔江戶詰御用諸事留〕

五月廿一日

一、六半之廻り來に付直に御住居へすぐに罷出、埋御門より入、裏御門より中口ゟ上り溜へ參候。席坊主一人出居、先立致し、五時過御色めき之段御附御用人澤田等相達、追付中ノ口より出、表御式臺御塀二枚開より御玄關前繪圖之所ゟ出候。暫有て御出、御輿先に御供致し、御往來每之御道御丸ノ內御縮りに而御指支に付、五町許御廻に而西丸ゟ御上り之事。
一、西丸ゟ御入之上、御上り之御式臺より上り、溜二階に有之參り候事。
但、聞番方使役案內等致候事。
一、追付御住居御用人村源五右衞門罷越、右大將樣より縐紗三卷。御簾中樣より紗綾二卷、木具据に而持參、拜領被仰付候段、御留守衆御渡之筈に候得共、御用多に付私ょり御演述仕候樣御申聞之由に相達候事。

一、右相濟、追付塗御木具据御干菓子、姫君樣御膳下と申事、御膳御汁等三品許りに而出。右之前に豆飯黃白色分御盃に盛、御口取等付出る。暫有て朱椀之御賄二汁七菜許、麁末之御料理出る。右之後暫有て、姫君樣本御膳之御下、蒔繪之御椀之分一汁五菜許之分出る。晝後御吸物向に海老等二品付候分、御筒・御盃添出る。又御生菓子類御盆に盛上出る。夕景七時過位に御湯漬と云歟、をしきに朱の御椀一つ伏、御猪口之内に何か入候分出る。

一、拜領物之御目六、澤田主馬より相達候に付、聞番江相渡、同人より明日相返候樣申入置。

一、夜中五時餘程過御色めき之由也。追付御玄關前江出る。歸御九時前也。御住居に而中ノ口より上り、席坊主先立溜りへ參り、御用人逢、御登城之恐悅等申上度旨申入候所、御用人衆江相達候處、只今御奧入に付暫待可申旨。追付何時に而も宜旨に付、御用人衆江被誘引、今日御登城之恐悅、且御機嫌も相伺、於西丸拜領物御料理等頂戴之御禮も申上候處、申上ぐべき旨被申聞。其席次之御間に而御小ぶた据に御目六相添、白銀二枚從姫君樣拜領被仰付旨被申述、其座に而御禮申上退去。右御品物は御住居之坊主入口に居り、溜江持參候事。

一、御附御用人澤田主馬溜江相招、姫君樣御歸殿後之御機嫌相伺候處、益御機嫌能被成御座候旨申聞候事。

五月廿二日。前田齊泰金谷御廣式に臨む。

〔官私随筆〕

五月廿二日

一、九半時頃金谷へ相公様被爲入候由也。

一、播磨守今日も斷に而金谷へ難罷出由故、飯尾吉太夫罷出候節申入候。

一、八時過金谷へ罷出、以林武左衛門御機嫌相伺、今日被召候御禮も申上候。

一、追付奥へ參る。

一、無程御居間へ被召、相公様も被爲御座、御菓子頂戴、葛餅也。向は香物・結のし。

一、喬松丸様御書拜見。

一、無程御庭へ御出、丹後やしきへも御出、御供仕罷越。

御鎮守稲荷堂も拜見、御戸帳開拜見被仰付。左右七面観音等之由。

一、右より御小間へ御入、圍茶式被遊、御相伴仕る。

主人　長谷川學方　　錄事　御右筆某歟

御上客は眞龍院様、其次相公様、其次丹後守、其次老女花山等也。

御茶四品　清風　名月　閑雲　野鶴無試

一、右以後御對面所へ被爲入、御酒等被召上、頂戴。
一、濱御殿へ日野殿御出之節之御歌等調候品拜見被仰付。
一、六時頃相濟、退座、御奥に而老女へ御禮申上、御次へ參り以金子五郎太夫御禮申上候。

五月廿四日。前田齊泰の子利義・利行初めて劍術を學ぶ。

〔官私隨筆〕

五月廿五日

一、村田定之助登城、昨廿四日基五郎殿・豐之丞殿御劍術初、以來每月三八（御馬は二七也）御定日に相成候由斷。

五月廿八日。衣食住に關し侍以下の心得を諭す。

〔官私隨筆〕

五月廿九日

一、昨廿八日今度風俗之儀に付被仰出之趣御用番より一統へ被申渡自分へも觸狀被相渡。文政三年之振と申事故、今日組之筆頭津田乙三郎呼寄寫渡之、相組中傳達候樣申談候。

〔御觸留〕

覺

一、衣服之儀、前々被仰出候通、絹・紬・木綿勝手次第着用可仕候。袴・羽織等も準じ候而麁品を用、御徒並以下猶以其心得可仕候。勿論絹・紬より宜敷品は堅く無用之事。

一、女向衣類の儀、是迄度々被仰出候所、追々相緩、近來別て美麗の段、父・夫等不覺悟の儀に候。絹・紬より宜敷品堅く着用爲致間敷候。禮服の儀格別に候へ共、是以後應分限に、成丈麁品相用可申事。

附り、花美成染色、手こもりたる模様等、一切可爲無用候。幷銀笄の類、且又たいまいを以拵候高料の櫛等、彌以可爲無用候。

一、饗應の菜數、雖爲歴々之面々、押立候振舞は一汁三菜、吸物一つ・肴一色、尤魚鳥等輕き品用可申候。勿論濃茶後段は出申間敷候。其餘は一汁二菜、或は御用に付寄合候節又は稽古抔に而參會之節は湯漬飯出し、或は燒飯持參尤之事。

一、家作之儀彌增輕く可相心得候。新宅等頭・支配人其様子委曲承屆、品に寄其宅へ罷越可遂見分事。

附、表向麁相に致し、內證に而は色々物數寄等仕族、不心得之事に候條、內外なく輕く可仕候。將又輕き人々之內には、近來別て不相應之家作在之躰、不埒成儀候條、追々爲相改可申事。

一、一通之音信贈答可爲無用候。祝儀物等取遣り不仕候而不叶節は、輕き干肴之類相用可申事。

但し、身近き親類緣者は、樹木或は殺生之品抔は格別之事。

一、當時押立候婚禮等無之候得共、內證にて無用之費等多き躰に候條、彌事輕可仕事。

附、挊料或普請料抔と名付、銀子取遣し候儀、且養子致候節持參銀抔之儀も今以在之躰。此儀は前々被仰出在之處、心得違之儀候條、彌以右樣之族在之間敷事。

一、群集の邊其外爲遊興寺社方・町屋等を借り罷越候儀儀、堅く無用の旨前々被仰出在之處、忍て罷越候者も在之躰、不埒の事に候條、彌堅く相守可申事。

一、惣て殺生に付而近年別て無用の費多躰に候條、不心得之儀に候。急度相改可申候。將又前々御法度に相背候仕形在之間敷事。

一、町人の儀分限を取失、甚奢侈在之、衣食等別て結構に相聞ゐ候に付、心得方の儀前々被仰出候通に候。然處文政三年に、町家の儀は武士とは品違候間、惡敷風俗にて無之候へば、着服の儀御定の外は如何樣共應分限可爲勝手次第之旨被仰出候に付、其以來は前々よりの御定を相守り候にも不及樣に心得違の者も在之躰に候。右は其節侍中衣食等の儀格別嚴重被仰出候に付、町人之儀をも分て被仰出候御事に而、御定を御改抔の儀は無之候所、心得違成事

に候。向後御定の趣彌相心得、分限を守、奢侈榮耀の儀無之樣改て嚴重可申渡事。

一、百姓の儀是又分限を取失、衣食等不相應之躰、婚禮・葬式等の節抔以の外僣上の族も相聞え候之條、奉行・支配人申談、改て嚴重可申渡事、以上。

天保十三年寅年五月

〔坂井留記〕

御家中之人々儉約之儀、前々より毎度被仰出之處、兎角心得違之人々も有之躰に候。惣じて前々より御定等有之品も、何となく令違失、人氣次第輕薄相成、衣食住を初又々漸花美に押移候段、等閑故之事に候。當時不融通に而何茂難澁之所、ヶ樣に成行候而者困窮彌增・御國躰に茂拘り不容易次第に候。以後急度遂儉約可申候。依之前々之趣大綱別紙之通被仰出候條、此旨相守、萬端是に准じ可致儉約候。尤舊臘申渡置候從公儀被仰渡候趣、嚴重相心得可申候。此段可申渡旨被仰出事。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

寅　五　月　　　　前　田　美　作　守

五月廿九日。前田齊泰數日前より脚氣を患ふ。

〔成瀬正敦日記〕

五月二十九日

一、御前兩三日前より少々御足部御肉張之御氣味被爲在、先日より除濕湯被召上候所、今日より葛根加蒼朮湯指上候旨等、探元申聞候事。實は越脾湯加朮苓に候得共、御指合に付先如此相唱指上候筈之事。

〔官私隨筆〕

六月朔日

一、相公様此頃少々御不例之御様子に付、成瀨主税に御様子承候處、爲指御儀に而も無之候故、御表杯へも御出被成候。元來御時氣中りに而、最初除濕湯立之御藥召上り候處、頃日御肉腫と申程には不被成御座候へども、少々御むくみ茂被成御座候付、御發汗被爲在可然旨に而、葛根湯類差上之、召上り方等曾而御替不被爲在旨口上。

五月。御步並以上の子弟にして十四歳に達したる者等の學校へ屆出を怠るべからざることを告ぐ。

〔留　書〕

一、御步並以上子弟十四歳に相成候人々、毎歳十月中屆之儀、以來有無共屆。

一、人持・頭分・平士より御步並、都而定役・轉役・退役之儀屆。

但、相續・組替等之節、武藝得方之儀屆。且其節是迄屆有之候得共、改而年附屆。

一、御歩並以上、他國詰幷遠所ゟ罷越候節、歸着共屆。子弟致同道候はゞ其段も屆。
但、御供に而發足・歸着右同斷。
一、御咎幷御免之節屆。
一、相續或は組替幷御加增等被下候屆。
一、養子願・嫡子願之節屆。
一、有祿・無息共、都而改名幷病死之節屆。
但、厄介人之分茂右同樣屆。
一、陪臣暇遣候節屆。
右、屆方區々相成、洩等多御座候に付、今度改而右箇條書之通、私共役所ゟ頭分以上は直に相屆、平士以下御歩並以上は都而頭・支配人より相屆、且陪臣之分は相續等之箇條以下之儀主人々々より相屆、將又足輕之儀は都而師範人より相屆候儀に被仰渡御座樣仕度奉存候、以上。

寅五月　　學校御横目

五月。商人の高利を貪ることを戒む。

〔郡方御觸〕

近年御領國諸物直段次第高價に相成、就中去年以來追々引揚候躰。元來御領國者古來より米價下直に候處、近年甚高直に相成、隨而諸品も都而高貴之所、其後米價者漸引下候得共、諸物者今以高貴に而費之儀不少、一統及難儀候躰。町方幷御郡方支配之人々者、百姓・町人潤候儀を心懸候樣之儀も可有之候得共、御領國出來之品、曁他國より來品共直段引揚賣出、高利を取候儀を潤与相心得候而者相違之事に候。且又諸品他國ゟ遣候得者高利を得候故、御制禁之品等をも密に差遣候儀も有之躰に而、御領內拂底に相成、自高直に相成品も可有之。是等之處急度可遂吟味處、油斷いたし居候に而者無之哉。將又近年菜種抔も相應之出來に有之躰。然所拂底之旨に而油直段も引揚候族。紙幷炭薪迄も拂底之趣申觸し、御家中初指支に相成候旨。是等も直揚いたし候爲之巧も可有之哉。惣而町家共身分を忘、己之產業を怠ながら得高利候事而已心懸候風俗致增長候躰、不屆至極沙汰之限りに候。右樣之族者急度可被及御沙汰候。得与遂吟味委曲可達御聽候。元來自己之產業情に入相働、相應之利潤を以可致渡世筈之處、己之產業者怠り、諸物之高利を取候儀を渡世与相心得、時々色々工夫いたし、世上指支抔茂不顧族者、誠以人道におゐて有之間敷筋に候。魚類抔も品に寄、近年御當地ゟ指出方以前与者甚薄き樣子。夫ゆゑ自直段も高直に相成候樣子に候。漁獵者さして替りたる儀も無之躰に候得共、畢竟當町之者共風俗不宜故、御郡方においても夫を厭ひ、他所ゟ賣遣候類も有

之哉。於海上他國之者江賣渡候族も相聞候。御當地に而者、御用之分さへ調兼候樣之儀も有之旨。是等奉行人不沙汰故如斯之場江至り候哉。是等之儀に付而は、松雲院樣御代中段々委曲被仰出置候趣も有之處、年古き儀に而いつとなく致忘失候躰に候。今度物價方被指止儀にも候間、所々奉行人尙又急度相心得、綿密に遂詮議、諸品下直に相成候樣厚可致穿鑿。先年より段々被仰出候趣有之處、奉行人不行屆故歟、下役之者抔依怙賄賂之筋を以、詮議方柔弱之趣茂有之、支配之者共仕度儘之樣に茂相聞江候。自今萬端正路に相心得候樣、急度可致支配候。且又所々奉行、其支配迄之儀与不存、互に申談、不指支樣可心懸候。若此上差支之品も有之候はゞ、急度御詮議可被仰付候事。

五　月

右御用之御間江御用番被爲召、御書取御渡。

六月五日。金谷御廣敷の經費を減ずべきことを告ぐ。

〔諸事要用雜記〕

六月五日

一、御儉約方に付左之通伺被仰出、金谷頭へ申談る。

金谷御廣式向御入用多分之儀に候所、御口向曁御膳所御買上物直段甚高價に而、外々とは格

別御入用相嵩候躰に候。今般格別御儉約被仰出候儀、於各手前幾重に茂嚴重被遂僉議、下々之者迄も心得方不宜者は勿論、今度御省略之筋不會得之者有之候者、無泥被指省、割場幷御臺所より人撰之上被請取、指替可被申候。此度之儀は彼是御趣意も有之、格別被仰出有之候條、いづれにも聊無油斷嚴重穿鑿可有之候。此段達御聽申談候事。

六　月

六月十二日。前田齊泰の病氣平癒祈禱を白山宮及び金澤觀音院に命ぜしむ。

〔成瀬正敦日記〕

六月十二日

一、御快然御祈禱之儀相伺、左之通寺社奉行呼立申談。

御祈禱料

一、白銀五枚宛　　白山・觀音院

右相公樣御不例に付、御快然之御祈禱被仰付候條、早速執行、御札・守差上候樣可有御申渡候事。

六月十二日。足輕・坊主・小者の生活に關して諭す。

右申渡は五月廿八日のものをいふ

〔毎日帳書抜〕

六月十二日

一、右申渡候に付、諸組足輕・坊主・小者近來次第に分限を取失、衣食住を初身分不相應之儀共相聞、別而妻子を初衣類等、先年与違絹類致着用候者共有之躰沙汰之限に付、向後急度相心得可申旨等申渡。

足輕小頭・坊主共之儀、紬は御免に候得共、御外邊御用之節は格別、御内輪に而者成限着用致間敷、刀・脇刺拵金銀相用候儀有之間敷、燒付たりとも金銀に似寄候品は相改可申分も申渡。

〔郡方御觸〕

今般御家中之人々儉約之儀、被仰出之趣有之、一統申渡候。就夫諸組足輕・坊主・小者莽方之儀、前々申渡置候趣有之處、近來次第に分限を取失ひ、衣食住を始身分不相應之儀共相聞え、別而妻子を初衣類等、先年与違絹類着用いたし候者共有之躰、沙汰之限りに候。向後萬端急度相心得、前々申渡置候趣相守、衣類之儀者妻子等に至迄、木綿・布之外堅着用致間敷候。家居之儀も新た之分者、奉行人承届相應に致させ可申候。在來候不相應之家居者、追々取毀等いたし相改可申候。且足輕小頭幷坊主共之儀、紬者御免に候得共、御外邊御用之節者格別、

御內輪に而者成丈着用致間敷候。將又刀・脇刺拵に金銀相用候儀有之間敷候所、中に者心得違之者有之躰に候條、燒付たり共金銀に似寄候品者相改可申候。

右之趣夫々不相洩樣急度可被申渡候事。

寅　六　月

六月廿一日。前田齊泰の病氣平癒を能登一ノ宮及び倶利伽羅に祈願せしむ。

〔諸事要用雜記〕

六月廿一日

一、先達而白山・觀音院等において御祈禱被仰付、猶又一ノ宮・倶利伽羅等江も御祈禱被仰付、寺社奉行へ申達す。

六月廿五日。前田齊泰、京醫小林豐後守を召して病を診せしむ。

〔官私隨筆〕

六月廿一日

一、成瀨主税等罷越、昨夕又御惡心之御氣味被爲在、夜前御寢成兼被成、御心下も少御痞、脛廻り等御水氣少々御減じ候樣に被奉存、御內攻之御氣味と恐入候旨探元等申聞、今朝より沈香豁胸湯指上候由等演述。依之京都より小林豐後守殿追付下向之筈故、途中迄以飛脚早速

被罷越候樣可申達旨、御用番より町奉行へ被申渡。且只今に而は蘭醫之申上候ジキターリス御用可然哉僉議候樣申談す。

〔官私隨筆〕

六月廿五日

一、小林豐後守夜前夜半過到着、今朝登城之筈に付五半頃出席。

一、豐後守四時過頃歟上下に而登城之由。無程御奥書院横御廊下屏風圍に而、大庭探元・長谷川學方罷出御樣子申述候節、屏風之外に而山城守相同じ潛に承之。高田善右衛門一人罷出有之也。

一、診濟又右之所へ退座之筈之所、是又此方より申入、御居間書院二之間に着座有之。其所へ成瀨等四人幷探元・學方・江間篁齋罷出承之。其後。へ丹後守・山城守・播磨守・內匠・大學罷出承之。

一、右之後瀧之間にて御料理出、相伴橫井自伯之由。畢而重而通り再診相濟、御居間書院前段同斷。

一、主方は家方之由七味降氣湯、御兼用外臺甘草乾姜湯。且又御便秘之方に付見合候而蟫蛸茱湯差上可申由。

一、小左衞門より示談有之、同席等何も無別存に付、伺之上豐後守へ御療養御賴に成。

一、又瀧之間へ退座之上、丹後守等五人罷出及挨拶。

六月廿六日。諸士の明倫堂に出席を督促す。

〔觸　留〕

各樣文武稽古之儀、御修補以後被仰渡、其砌者相應に出座も有之候處、近頃は追々致減少候躰。尤御父子等之內心掛宜、無懈怠御出座之御人々茂候得共、御懈怠之御人々茂有之由粗承候。別而間遠成御番方之御面々茂有之候之處、右等之族御座候而は、於私共申譯無之次第に候。此上等閑に心得被成、重而何と歟御察當有之候而は、不容易儀に付、先達而志村平之丞殿江御呼立之節茂、譯而被仰談御承知之通に候間、以來無御油斷御出座可被成、猶私共よりも譯而申談候樣入念被仰聞候。講書之儀廿二日若御指支之御人々は、廿七日朝御出座可被成候事。

六　　月

別紙之通大田小又助殿被相達候條、此段承知被成、先々早速御廻、落着より御返可被成候、以上。

六月廿六日　　　　　　　　　小島佐次兵衛

是月は小盡なり

小木孝吉様

六月晦日。前田慶寧、森快安を遣はして齊泰の病を診せしむ。

〔諸事要用雜記〕

六月廿九日

一、當月十四日――付、從筑前守樣森快安被遣、今晚五時頃到着、直に奉診、今晚之處も何等了簡不申上候。

〔官私隨筆〕

七月朔日

一、從筑前守樣森快安被遣候。昨夕到着相診、今日も罷出診候由故、呼候而尋候處、御虛腫に而急に御通利は被爲在間敷、其內に御疲れ出不申樣仕度旨等申聞也。

六月。本年に限り諸士よりの借知を廢することを告ぐ。

〔留　書〕

御勝手連々御難澁至極に付而は、御家中知行之內近年打續過分之御借上茂被仰付候處、御家中之人々茂一統益難澁之躰に聞召、御氣之毒に被思召候。然處品々無御據御物入打續、御運方必至与御指支に付、其以來茂年々知行之內御借上被成候。今躰御不足高過分之儀に付、此

末御運方等何分に茂御手段無之旨、御勝手方より申上候に付、乍御心外先當分之處去年之通御借知可被仰付候。御家中之人々茂可爲迷惑候得共、精誠相心得御奉公取續可申候。
一、是以後當分御借上方之儀、前文之通り候得共、當時一統別而難澁之様子被聞召候に付、格別之思召を以、御當用を茂打欠、御詮議被仰付、當年一作之處御借知全御用捨被成候。
右之通可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配不相洩様可被申渡候、以上。

六　月　　前田内匠

〔留　書〕

今般御家中一統御借知一作御用捨に付、給人收納米不殘町藏入に候條、藏宿幷百姓江、人々より直に申渡候様可被相心得候。
一、御切米御扶持方被下候人々は、當暮渡り來春渡りを以御用捨之事。
一、來年より御借知村附帳、是迄之分相用候。若箇所替等致度人々は、來年四月中當場承合村附帳指出可申候。尤右兩様共、村方幷藏宿江も、承知方給人より可申遣儀に候。
一、去暮以後跡目相續等之人々は、村附帳來年四月中可指出候。

六　月

六月。金澤の町年寄より町人の風俗に關する心得を諭す。

別紙は五月廿八日の令町人之儀分限を取失ひ云々の條に同じ

〔郡方御觸〕

衣食住之儀に付金澤町中江被仰渡之寫

儉約等之儀、前々より每度被仰出候所、兎角心得違之人々も有之、惣而前々より御定等有之品も、何与なく令違失、人氣次第に輕薄に相成、衣食住を初又々漸花美に押移候段、ケ樣成行候而者困窮彌增、御國躰にも拘り、不容易次第に付、以後急度遂儉約可申旨、今般一統被仰渡、町方之儀も別紙之通被仰渡候。且舊臘申渡置候從公儀被仰渡候趣、嚴重相心得可申旨、御用番美作守殿被仰渡候事。

右之趣被得其意、町中江不相洩樣可被申渡候、以上。

六月

水原淸五郎

坂井忠左衞門

吉田丹次郎殿

〔金澤町中法度書等〕

今般被仰出之趣に付、猶又心得方之儀申渡候。元來町人共之儀は、御國恩を存付、賣人は其商買、職人は其家職を專らにし、分限不取失之樣渡世方大切に可致處、近年次第に僭上奢侈に押移、衣食住等結構相成、不心得至極に候。衣服之儀男女共、時之流行高料の品をも相用、

別而女向衣裳榮耀増長いたし、無益に手間懸り候花美なる染模様・縫模様など之品を相用、剰内證に而者婚禮之砌等、武家禮服に相用候品を致着用候儀も相聞、是等は僭上至極、甚以心得違之事に候。自今婚禮等押立候祝儀之時分たり共、紋付之外堅く着用致間敷候。於御定は絹・紬着用いたし候儀苦しからず候へ共、夫々貧福之分限に應じ、貧者は布・木綿類のみ致着用可然候。勿論下人下女たるもの布・木綿類に而事足候。是等も其主人々々より可申諭候。食類近來大に奢に相成、品々手を盡したる料理、或は遠來之美味、又は時あらざる珍しき品など相用、榮耀至極之事に候。振舞等前々之御定も有之處、心得違之事に候。以來御定之趣堅く可相守候。家作之儀も品々花麗榮耀之事ども相聞候。是又御定等之儀心得違無之様、急度可相心得候。其外祝事は不及申、葬禮・佛事等至而輕く可致候。音信・贈答、身近親類等押立候祝事にて不指遣ば不叶分者、干肴之類一種可致贈答、其外可爲無用候。諸商物尤花美高料之品取扱申間敷、前々より申渡置候商停止之品、彌嚴重可相守候。畢竟奢侈致増長候故、産業を怠り高利を貪り、或は種々姦曲なる取組などいたし、不埒之至りに候。向後急度心得方相改、萬端正路に可相心得候。惣而今度被仰出之御趣意を奉會得、是迄之心得違を改、前々被仰出御法度之品々を相守り、質素儉約にして古風にかへり候得者、其身安穩子孫繁榮之基たるべく、然らば人々手前々々の爲にて、誠に難有御仁惠に候條、是等之趣能々致勘辨、互

に申合、家内暨同居借家末々迄、家主等より念頃に申諭し、常々不忘樣するゑ永く行屆候儀肝要之事に候。右之趣に付、今般分而年寄衆より被仰渡之事共有之候間、夫々嚴重相心得可申候。爵樣申渡候上、萬一心得違いたし、相背候者相聞においては、用捨の沙汰なく嚴重可申付事。

右者今般被仰渡之趣に付、尙又心得方之儀御奉行所御口達に而被仰渡候を承候拙者共より、口達を以夫々申渡候。右等之趣若承違も可有之哉と、猶更荒增書認各迄相達之置候。別而役人たる者御趣意得と致會得罷在、取締方無由斷可申談旨、御奉行所分而被仰渡之趣も有之候間、於各は聊無違失急度被相心得、いかにも榮耀奢侈之風俗改り、質素節儉を專らとして、永久忘失無之樣可被相心得候、以上。

寅　六　月

龜　田　市次郎
香林坊　兵　助
原野屋　半　助

本町地子町肝煎衆中

七月七日。前田齊泰夫人の費用を減ずべきことを告ぐ。

〔御留守江戶詰御用諸事留〕

七月七日

一、御住居附御用人・同御用達に左之通申渡候筈。

御住居向御入用方格別相嵩、一躰之思召とは相違に付、今度御留守居松平内匠守殿等右御取締懸り被仰付、御省略之御詮議有之候。御内輪向之儀先達而より度々御人減等も有之候得共、今般之御趣意も有之儀に候間、猶更格別に可相減品も可有之候條、諸役人何茂誠實を以遂詮議、御省略之筋相立候様綿密可被相心得候事。

寅　七　月

七月八日。前田齊泰夫人使を遣はして山王社の祈禱札を上らしむ。

〔成瀬正敦日記〕

七月八日

一、前月廿五日出當朔日ゟ相延候早飛脚、逗留今日着、姫君様より御書被進。

一、姫君様より以奉札、澤田等山王社において御祈禱被仰付候旨に而、御札・守二臺御肴一折被進。御札等指上、御肴は御用之節可指上旨申上置候事。

七月廿八日。履物の制限を定む。

〔片岡孫作藏文書〕

天保十三年寅七月廿八日組合頭虎屋彌兵衛殿方へ呼立申渡す。

はき物商賣人心得方

一、男女雪駄是迄の通、併高價成分不相成事。

一、草履下駄の緒、革・布・木綿不苦、絹・紬・糸眞田、都而絹るゐ不相成事。

一、女草履表黑白交織の分不苦事。

一、こよりにて仕立候表、幷櫻欄表不指支、併模樣等織込高價の分不相成事。

一、塗足駄・塗下駄等、たとへ麁抹の塗たりとも、都而色替り候分不相成事。

右之通被仰渡候條、小間物商賣・八百屋物商賣・足駄商賣人等迄嚴重可申渡、尤御受取立指出候事。

右今般被仰渡、奉得其意、爲其御請上之申候、以上。

壬寅七月廿八日　　南町小間物商賣　野々市屋

忠右衛門

町御奉行所

是月は大盡なり

七月晦日。郡方に嫁娶及び葬儀を簡易にすべきこと令す。

〔郡方御觸〕

近年御郡方之者共茂、次第に分限を取失ひ、衣食住を初、嫁娶幷取葬等之節、以之外奢侈僣上之族有之躰相聞ニ、沙汰之限に候。今般都而被仰渡之趣も有之候間、前々より之御定通彌相守、少も榮耀之儀無之樣嚴重可申渡置、猶委曲之儀者追而可申渡候事。

寅七月晦日

右之通得其意、一統不相洩樣申渡、請書可差出候、以上。

津田少左衛門

林　源多郎

吉田藤馬

石川・河北郡十村中・新田裁許中・

同列中・山廻中・同列中

取葬はとりおきなるべし

七月。寺家・社家の風俗に關して諭す。

〔御觸留書〕

今般御家中初風俗方等之儀に付、一統心得方之儀被仰出之趣、先達而委曲申觸置候通に候。然所寺社家風俗方等之儀、跡々より被仰出之趣、是迄每度申渡置候得ども、次第時俗に流惰弱に押移、境涯不似合之族茂有之躰粗相聞え候。今般被仰出之儀は、公邊御趣意之筋も有之、

住職云々本の儘

僧侶に不限、諸國格別御僉議御含之品も有之候付、拙者ども僉議之上、猶又一統心得違無之嚴重申談候條、然上は前々被仰出置候御ヶ條、曁拙者共先役より申渡候條々、違失無之嚴密に可被相心得。依之今般大綱ヶ條書を以申談候趣、急度相改、以來萬端如法に可被相心得候事。

一、寺庵之內親類たり共寺中に女指置間敷旨等、每度申渡置候所、近年猥りに相成、中には洗濯雇人抔与名目を付、晝夜留置候族每度聞前等有之所、右等之分を頭寺手前において、住職隱居願抔、取扱も慈愛与相心得罷在躰に候得共、前段之族惰弱不如法不縮至極之譯柄、以來組合等迄も相互に遂吟味、無泥頭寺ゟ及屆可申。其儀無之、脇より聞前有之候上者、組合法眷迄も無用捨嚴重可申付、尤旦家たりとも寺役法用之外、夜中俗家ゟ立入候儀は勿論、猥り之參會堅指止可申事。

但、宗旨により說法等之節參詣之男女を留置、酒宴を設け、時刻を移し、猥之振舞有之躰聞前之趣有之候。元來寺庵之儀は如何にも清淨第一に可致之所、右等之族却而戲場・遊所に似寄、甚歎ヶ敷次第。參詣之輩迄も相應に辨當等之支度無之而は參詣いたし兼候樣にも押移、甚惡敷風俗不心得之至に候。兼々旦家等之敎導も可致境涯に候所、右族參詣人迄も押移、沙汰之限りに候。以來右習俗嚴重相改、向後寺中に人集、酒宴ヶ間敷儀堅可爲無用事。

一、後住之儀は、法類法脈等筋目之者、或は血脈を後住に相立可申儀、宗旨々々之掟も在之候所、中には不筋之後住を引、加之金銀之取組を以誓約遺書致置、死去に至り彼是申分出來、御縮方難相立族も有之。元來後住方之儀は、品重き儀に候所、住持心得は不及申、組合寺暨頭寺においても心得違之儀に候條、以來入念遂吟味可申事。

一、檀家之內死亡人有之葬式等之節、施主之志次第に可取計儀勿論候所、施主等を貪り、或は難題を申懸、彼是葬方爲及遲々、末々迷惑之筋有之趣、甚不心得之至候條、兼而申渡置候通、已來急度相心得可申事。

一、於寺社家夜中人集之儀御停止に候所、今以等閑に相心得候者も有之、中には神祭之節夜中迄も請參詣を候族も有之趣。右等は前々申渡置候御縮方茂有之候所、甚心得違候條、已來急度指止可申事。

但、於俗家致法談、聽衆を集候儀も、是又御停止候所、中には講抔与申立、猥りに寄合候者茂有之趣。右之族無之樣急度相心得可申事。

一、他國寶物弘通、幷他國僧を招き爲致法談候等儀、御停止に候所、不心得之者も有之に付、近年改而申渡置候所、中には今以猥りに相成候向も有之。暨御國寺庵之寶物に仕成、致弘通候族も有之趣に相聞候。右等は先以御縮方相洩、心得違に候條、向後急度相心得可申事。

一、町・在之者共子弟等、縁組・養子等に指遣候節、旦那寺彼是申立候儀不相成趣、先年より申渡置候所、今以心得違之寺庵も在之躰候。惣而養子等之一件は、其支配人僉議之上聞届有之儀に候得ば、旦那寺より彼是申立候譯柄有之間敷所、離旦狀難指出抔与謂、支之儀を事々申立候族も有之躰。元來離旦狀抔与申儀は一圓無之儀に候條、已後嚴重相心得可申事。

一、頭寺役僧等役權張、彼是不筋之取計有之躰。是等は第一人氣に拘り、配下成立不爲之儀に候條、已來右之族有之においては、其役僧は勿論、頭寺も嚴重可及沙汰候事。

一、法衣・官服は格別、平生着類は絹・紬・木綿・布勝手次第着用。勿論絹・紬より宜品は堅無用之事。

一、寺社家家內女向之衣類、近年別而花麗之段、父・夫等不覺悟之儀に候。絹・紬より宜品堅着用爲致間敷候。禮服之儀は格別に候得共、是以應分限成丈麁品相用可申、右等之趣家來末々之者江も夫々入念嚴重可申付事。

但、花麗なる染色、手こもりたる模樣等、一切無用たるべく候。幷銀笄之類、且又たいまいを以拵候高料之櫛笄等、彌以可爲無用事。

一、饗應之菜數幷音信贈答之儀、今度御家中江被仰出候御ヶ條、先達而相觸置候通候條、寺社家においても右に準じ可有其心得候事。

右之條々堅相守可申候。元來寺社家之儀は、旦家等施物を以相續可致儀に候得ば、別而心得も可有之筈之所、近年奢侈榮耀惡敷風俗に押移、入院等又は法會・神祭其外婚禮抔之節、花美成儀を設け、無檀同樣之寺社家に至迄、萬事手重く不致而は不叶樣に相心得、或は居間廻り露地抔致物數寄、失費を懸、却而堂舍之修理も等閑にいたし、門徒等ゑ難題を申懸候族は、境涯不相應心得違之至に候條、以來嚴重相改、前々被仰出等之儀常〻無違失、萬端質朴相心得、末々者迄も心得違無之樣厚く敎導可有之事。

寅七月

今般被仰出之儀に付、別紙之通心得方等申渡候條、被得其意、配下寺庵等ゑも嚴重被申渡、先々被相廻、落着より可被相返候、以上。

寅七月

品川左門
織田左近
篠原織部

八月朔日。前田慶寧登營して八朔の祝儀を行ふ。

〔見聞袋群斗記〕

八月朔日、筑前守樣初而八朔御登城なり。

〔官私隨筆〕

八月八日

一、筑前守樣八朔御登城之儀、御願之通被仰出候付、當朔日御登城、御首尾能御目見被仰上候段江戶より申來。各上下に改、以荒木津大夫御祝詞申上候處、以杉浦庫太御喜悅之旨被仰出。

八月十日。西本願寺末寺再建の爲にする勸進に應ずべからざることを告ぐ。

〔御郡典〕

西末寺再建与申立、御郡方江使僧相廻し、仕法取立銀相企、致勸進候躰に付、指留方今般御用番年寄衆より寺社奉行中江被仰渡候之間、尙更諸郡江嚴重申渡置候樣、御算用場より申談有之候條、若右躰之儀申立相廻り候者有之候はゞ、一圓指加り候儀不相成候事。

右之趣得其意、一統不相洩樣嚴重可申渡候、以上。

寅八月十日

加越能
御郡奉行
改作奉行

欽定四經は藩末に至りて刻成る

豐州は京醫小林豐後守

八月十七日。明倫堂に於いて欽定四經等を飜刻せんことを議す。

〔近敦日記〕

八月十七日

一、十萬石以上諸家藏板出來可宜旨、今度從公儀御觸渡之趣に付、學校方に重々御詮議有之、欽定四經・文獻通考正續、右兩部先被仰付可宜旨に御治定。公儀御儒者林家衆之内御問合有之筈之事。

八月二十日。前田齊泰の脚氣稍快癒す。

〔成瀨正敦日記〕

八月廿日

一、豐州診四つ半時過、追々御順快被爲在候旨被申聞、今日より八味腎氣丸料に御轉方指上候事に相成候。且明日より御飯目二十目相增、御都合百目陣倉米五十目常米五十目指上候而宜旨申聞之由、探元申聞る。

八月廿四日。豐作なるを以て特に收納米の調製を嚴にせしむ。

〔司農典〕

當年御領國三州共、格別之順氣に而作躰宜、米性も宜可有之年柄に付、米撰方等之儀に付、諸代官幷藏宿共江も、今般御算用場より別紙之通申談有之、一統承知之通尙更嚴重相心得、米性等格別に致吟味可相納。且右之通申渡有之候而も、百姓共於手前に、御收納米仕立方等麁抹に致候而者、流弊立直り候期も無之候間、いかにも御扶持人等より念頃に申諭、御米仕立方等厚心懸、代官等手前せり立而已に而行屆不申旨、是亦別紙之通同場より申談に付、兩通共寫相越之候條、夫々得其意、格別に申諭、精誠遂穿鑿可相納。勿論以來共年之豐凶に應じ、いかにも實に付、精誠爲盡可申候、以上。

寅八月廿四日　　安田新兵衛

　　　　　　　　稻葉助五郎

諸郡御扶持人・十村中・新田裁許・山廻中

八月廿五日。京醫小林豐後守金澤を發して歸洛す。

〔官私隨筆〕

八月廿四日

一、小林豐後守今日は夕方登城之由。最早明日歸京に付何も逢可申と存候處、刻限遲く候付、

各示談之上御用番迄居殘り被申候筈に成。

〔諸事要用雜記〕

八月廿二日

一、小林豐後守母氣滯に付今晩飛脚到來。仍而廿五日に發足致度由、町奉行迄申聞有之由之事。

〔江戸諸用金澤用向〕

六月廿五日

一、上樣御大病に付、昨夜九時頃京都御醫師小林豐後守殿幷弟子兩人被召連到着、段々御快被成候に付、八月十五日三十人扶持被下之、外拜領物折々有之由に而、同廿五日被罷歸候事。

八月廿八日。前田齊泰京都の樂人を招きて舞樂を演ぜしむ。

〔成瀬正敦日記〕

八月廿六日

一、京都樂人井波瑞泉寺へ罷下り候由。戻り之節金澤止宿之樣子相知次第申上候樣、町奉行へ申談置候所、今晩津幡泊明晩金澤泊之旨、町奉行より今日申聞に付、其段申上り候所、音

樂合奏御聽可被遊候旨被仰出候付、文化度之振に而夫々申談候樣取しらべ、町奉行へ先心得申談、且年寄中へ一應及御示談候所、尤存寄無之旨被申聞候付、夫々用意方申談置候事。大野奉。

〔官私隨筆〕

八月廿八日

一、今度京都より樂人下り、金澤通行に付、今日被召樂被仰付、各見物候儀御用番へ被仰出拜見。樂人晝前登城、御間拜見相願、其上に而御料理被下、八時餘程過頃始り、七つ過相濟。御禮列座以杉浦庫太申上候。

〔成瀨正敦日記〕

八月廿八日

一、樂人四ッ時登城之儀に申談置、同刻頃歟致登城候由。御表に而御料理被下、御歩給仕也。町奉行も登城指引有之筈。夕景麵類被下、御間拜見も相願仕候由。

一、音樂左之通梅之御間御三之間に而被仰付。御居間書院二之間溜に相成、裝束方七人も夫迄罷出。尤奧御横目指引御次内御坊主給仕也。鏡之御間之方より出す。何れも狩衣相用、舞も陵王迄裝束也。八ッ時過相始り、七ッ時過相濟。

盤渉調

音取　笙　従四位上 辻　大隅守　狛　近敦

白柱　同　従四位下 辻　豐前守　狛　則是

青海波

千秋樂　篳篥　正五位下 窪右近將監　狛　近俊

笛　従五位上 奥右近將監　狛　好學

鞨鼓　従四位上 奥　丹波守　狛　好古

太鼓　窪　長門守　狛　近習

振鉾（是従舞樂也）　則是

萬歳樂　好學 近俊

陵王　則是　此陵王之前龍と申、辻家傳之舞をいたし候事。

退出　長慶子

笙　近敦　則是　鞨鼓　好古

篳篥　近習　近俊　太鼓　近習

笛　好古　好學

御乞に而高麗曲也合奏

延喜樂

納蘇利

一、右三管はいづれも持參。鞨鼓・太鼓は御渡之儀相願・表御納戸御預之分御貸渡に相成候。

右樂人は都て南都方之由。

八月。從來文字金銀と記したるを改めて保字金銀とすべきを告ぐ。

〔郡方御觸〕

定番頭江

通用之金銀、是迄文金・文銀与調來候得共、當十月より以後保金・保銀与相唱、上納切手を初都而右之通相調可申候。

右之通一統可被申談候事。

八月

右寫之通、御用番美作守殿より定番頭江被仰渡、右頭より演述有之候に付、相越之候條、得其意、夫々不相洩樣可申談候、以上。

寅十月二日　津田少左衛門

八月。聟養子相續後死したる際未婚の幼婦に關する處置に就いて告ぐ。

〔留　書〕

定番頭ゟ

御家中之人々之內娘ゟ聟養子相願、右養子跡目相續之上死去いたし、娘幼少に而未婚儀不相整候得ば、乍女家之血脈相立申度趣を以、緣女を末期に養妹に仕、其者ゟ聟養子之儀、緣女十歲以下は願次第可被聞召屆候。養父在命に而娘ゟ聟養子いたし、養子死去、娘幼少に而未婚儀不相整分茂、右娘ゟ重而聟養子之儀、是又娘十歲以下は養子引移候上死去に而茂、願次第可被聞召置候。家之娘之外、他より養女いたし聟養子之分抔は、都而御聞屆無之候。今般御詮議之上、向後右之通候條、此段內證申聞候事。

寅　八　月

八月。石川郡中宮より薪木呂を川流とする件に就いて告ぐ。

〔郡方御觸〕

此度石川郡中宮より薪木呂爲伐出、手取川富樫用水より川流、野々市驛致流着候に付、右川筋村々不縮之儀無之樣、嚴重可申渡候。且若出水等に而、手取川筋等ゟ木呂流れ出、川懸り

等に相成候分、幷流失之上海邊江打上候者、共領付村に而拾ひ揚爲致仕抹、其段裁許等へ及斷候樣可申渡候。右木呂拾ひ取及斷候上者、骨折料之儀猶更詮議之上可相渡候。右之通り申渡候上、萬一木呂拾ひ揚かくし置候樣之儀於有之者、後日に聞江候共急度可申付候條、是等之趣入念申渡、不締之族無之樣嚴重可申談候、以上。

寅八月

山崎守衞
安田新兵衞
渡邊新藏
上月四郎左衞門

能美・石川兩郡古川筋
並海邊裁許有之
御扶持人・十村中

九月十二日。八丈島の宇喜多孫助等に金穀を贈與する爲その目錄を製す。

〔江戶詰中御用諸事留〕

九月十二日

一、八丈嶋宇喜多中納言殿子孫宇喜多孫助・浮田忠平・同半平・同次郎吉・同小平次・同半六・同半七七軒江、隔年に被遣候御米・金子等、此節便船被遣候付、目六壹通・紙面貳通、判形に御用所より指出、圖書連名致判形候事。

九月。江戸に於ける藩邸の面積に關して屆出づ。

〔袖裏見聞錄〕

天保十三年九月公儀より御尋に付、左之通御書出に成。

覺

一、上屋敷　本郷　十萬三千八百二十二坪

一、御住居圍込拜借地　同　千四十九坪餘

一、下屋敷　平尾　二十一萬七千九百三十五坪餘

一、抱屋敷無年貢地　駒込　二萬六百六十坪

道程日本橋より一里十二町餘

右抱屋敷、正保五年三月屋敷御改、本多淸兵衞樣・柳原隼之助樣より被仰渡、駒込抱屋敷御帳に相載申段、阿部豐後守樣被仰渡、拜領屋敷同事之趣に而、是以後御改にも不及旨、御兩人被仰渡、則豐後守樣江も右之御屆申達置候。九代先加賀守右屋鋪に致在住候。

深川海邊新田幷黑江町　關保右衞門殿支配

一、抱屋敷年貢地　二千六百六十八坪

道程日本橋より十七町半

右寶永四年十二月、深川御改方倉橋三左衛門樣・松山安兵衛樣家作永々御免之儀相願候處、右御兩人被仰渡。尤相模守樣ゟ御屆申達置、圍等出來候。

土屋相模守樣ゟ被仰渡、一圓に御帳に載、拜領屋鋪同事に永々まで圍家作御免被成候段、

一、町屋敷表間口京間五間裏行二拾間二尺　百一坪五合三勺八寸

右者上屋敷地續に付圍込致所持候。

右之外居屋敷、中屋敷・下屋敷・抱屋敷・抱地・町屋鋪並屋敷、加賀守者は不及申、厄介之者幷家來男女等まで不致所持候、以上。

天保十三年九月　　前田圖書

中川八郎右衛門

大岡靱負樣

中嶋彦右衛門樣

松井十左衛門樣

九月。婦人の服飾に對する取締方を令す。

〔郡方御觸〕

女共着類等

一、綾・綸子・紗綾・縮緬類小袖・肌着等。
一、絹・紬・布・木綿たり共、花美成染模様幷縫模様。
一、夏向者絹・縮類其外花美榮耀之品。
一、天鵞絨幷金入錦之類、其外高料之織物帶。
一、天鵞絨幷織物類曁縫有之半襟。
一、銀笄燒付共、幷高料之櫛笄等。
但、縮緬髮くゝり紐
一、はきもの塗木履、幷天鵞絨緒・糸眞田或者絹類を以上品に仕立候分。
一、幼少者も綾・綸子を初都而前條之通。
但、縮緬類等着類、七歲迄之女子抔辨利之ため相用、榮耀ヶ間敷儀無之品、在來之分者當分御用捨之事。
一、右之外輕きもの等、身分不相應之品相用候者、幷時々流行等に而異風之拵之者。
右之品々相用候者見懸候者、輕き者は役所江召連、家來等召連候身柄之家內等者名前承り申聞候樣、手先足輕共江可被申渡候。於途中品物取揚候樣之儀者、一切無之筈に候得共、猶又右樣之族無之樣可被申渡候事。

九月。御郡奉行より百姓の衣食住に關して令す。

〔上田舊記〕

近年百姓分等分限を取失ひ、衣食住を初、惣躰奢侈榮耀に押移、身分不相應之族有之躰相聞候。御郡方之者風俗方之儀、是迄每度被仰出之趣、其時々嚴重申渡、猶又拙者共每歲御郡廻り之節も、衣食住等都而御定之趣無違失、嚴重相守候樣入念申渡候所、等閑に相心得右等之族不屆至極沙汰之限に候。今度衣食住等之儀に付被仰出之趣有之に付、別紙に大綱之所ヶ條書を以申渡候。於其元中而者、前々御定之趣急度心得も可有之儀に而、油斷は有間敷候得ども、萬一心得違之族有之候而者、第一下々取治方にも指障、御縮方難相立儀候條、能々相心得、村々男女下人に至迄、一統不相洩樣綿密に可申渡候。若此末心得違之族有之候者、手先役人共見咎、及斷候樣申渡置候條、可得其意候之事。

寅九月　　　　　　　　　　御郡奉行

覺

一、百姓共衣類等之儀、男女共木綿・布之外一切御停止に候事。

一、子供振袖に似寄候着物類、堅不相成候事。

一、男女共染色紫・紅に不可染、此外諸色かたなしに染可致着用儀、御定之通彌以嚴重相守、是迄心得違之族急度相改可申事。

一、鼈甲或者くゝり紐等を以髪飾り之儀、青傘幷ぬり下駄等之類堅無用たるべく候事。

一、神事或者葬式・年忌法事、亦者婚禮等諸事之祝儀等、分限に不似合致結構候儀、堅不相成候事。

但、是迄も心得違之者有之躰、甚だ不埒之事に候。祝儀物等所在合之品、身近親類迄輕く相贈可申候。葬式之節揚輿に似寄候儀も有之躰。且又近年村々若き者共報恩講、或者妻子等志抔与唱、指定候佛事之外村中寄集り、坊主相招候躰。右樣之儀以後堅不相成候條、嚴重可申渡候事。

一、御郡方紺屋共、百姓之着類等木綿・布染色紫・紅之外、諸色かたなしに染可申候。形付候分、向後一切染申間敷候事。

一、太物商賣之者、向後木綿・布之外商賣致間敷候事。

一、家作者二間梁ひさし六尺に過べからず。併高多持候百姓、土之間廣いたし候儀不苦。往還筋致旅人宿候者は格別に候事。

一、なげし作・杉戸附書院、くし形彫物一切無用。床縁・さんかまち等塗候儀、幷から紙張

付、堅御停止之事。

但、右兩條前々御定之趣時々申渡候得共、中に者分限を取失ひ、榮耀之家作も有之躰沙汰之限に候。ヶ樣之向は速に相改可申候。御旅館・上使宿等相勤候者は、門構・式臺形之家建は格別に候。其餘は長屋造りに似寄納屋等、長百姓に而も急度相改可申事。

一、百姓食物は常々雜穀を用、米猥に用ひ間敷御定之處、當時は下人抔に而も雜穀を麁食抔与心得違致し候者も有之躰、不埒之事に候。向後急度相改可申候。下人等心服取計候儀者、其主人々々心得方有之儀に候條、聊驕ヶ間敷儀無之樣爲相心得可申事。

一、近年茶之湯に似寄候參會を好、榮耀之道具抔取扱候者も有之躰。且又里中村々之内瞽女等爲便置、三味線に携、或は尺八を吹候族も有之躰。右等は甚だ心得違、不埒之至り沙汰之限に候。以來急度相改、心得違無之樣可申渡事。

一、藤内共之儀、平人与附合候儀不相成は勿論に候處、療治方心懸居申者、町醫者同樣に心得、身分不相應之着類等相用候族も有之躰相聞ゑ候。先以身分を令忘却、甚心得違之儀沙汰之限に候。向後急度相心得、家建之儀も不致自由樣、嚴重可申渡候事。

一、御郡之者金澤等江罷出、榮耀之品々むざと金錢を費候儀無之樣、常々爲心得可申候。且都而村々之内江、他所商人爲立入申間敷候事。

一、町方宿立之外、里方等村々之内に、髮結致渡世候もの有之躰に候。是等者一圓不相成儀に候條、向後急度爲心得可申候事。

右之外前々御定之趣嚴重相守候樣、得与可申渡候。假令御停止之品々年古持傳罷在候共、此末堅相用ひ申間敷候。右之内難辨品も有之候はゞ、其時々拙者共ゟ可尋出、若其儀無之、裁許之等閑に而違背之族等有之、外より相顯においては、其者は不及申、裁許之者越度申渡候條、此旨能々可相心得候。就而は御扶持人を初分役之人々者、別而役儀も有之、御郡方に而目當にも可相成儀に候條、衣類等之儀紬御免に候得共、表立候節は格別、平生之儀は木綿・布專相用可申候。尤家內之妻・娘等、父・夫に準じ、帶等に至迄都而御定に觸れ不申樣、急度可相心得候。其外御扶持人を初、金澤出府中參會堅無用候。仲間寄合之節も酒食等取扱申間敷、其他音信等不相成儀は不及申、旅宿暮方を初、聊費ケ間敷儀一圓無之樣、急度可相心得候事。

寅　九　月

九月。郡方に於いて花火を打揚ぐることを禁ず。

〔郡方御觸〕

近頃於御郡方花火焚候儀に付、別紙之通御用番年寄中被申聞候に付、寫相達候條、右支配不

相洩樣夫々可被申渡候。且又先達而御郡方等に而締方申付置候木筒等者、破却いたし候樣是又御用番年寄中被申聞候條、各手前ゟ取揚破却可被申付候、以上。

九月廿四日　　　　御算用場

林源多郎殿

吉田藤馬殿

津田少左衞門殿

卷目、御算用場奉行ゟ

近頃御郡方花火焚候儀致增長、中に者木筒等所持之者共茂有之に付、夫々取揚置候。花火之儀者御制禁之品に候所、右族不屆之儀に候條、向後堅く可爲無用候。此段末々嚴重申渡候樣、所々御郡奉行・遠所町奉行等ゟ茂可被申談候事。

寅九月

十月八日。前田齊廣夫人、齊泰を訪ふ。

〔諸事要用雜記〕

十月八日

一、今日眞龍院樣御入被遊候御慰に、御能大社・景清・亂被仰付候。詰合見物被仰付、當席七

去十一月の申渡といふものは未だ發見せず

半時過迄相詰候事。

十月十八日。銀仲發行の銀子預手形を新札と引替ふべき期限を延ぶ。

〔留　書〕

當時通用之銀仲預り手形、百目札・小割札共、當十一月中迄に寄々引替所江差出、新札与引替可申旨、去十一月一統申渡置候通に候。然處未引替殘多有之躰に候條、來卯年十月中迄に引替可申候。尤右限月迄は是迄之通、新古打込可致通用候事。

十月十八日　　奥村內膳

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

十月二十日。疱瘡流行するを以て家族に患者を有する年寄中等の遠慮缺勤すべきことを命ず。

〔官私隨筆〕

十月廿一日

一、頃日疱瘡流行に付、家內へ入候はゞ遠慮方如何と、御家老方より御用番へ聞合有之、しらべ有之處、御子樣方御目通迄控候事に相成居。御廣式頭へも播州より歟被尋候處、同樣に

中居候處、御次に而は遠慮引いたし候事に相成居候由に而、不都合に付尋候所、御次申聞方無相違、御廣式頭は間違之由。左候へば御席向之儀如何と僉議有之、各も品により御近邊に準じ候事有之故其趣を以伺之處、致遠慮引候事に被仰出候由、昨日御用番内膳演述。

十月廿八日。收納米受取の任に當る下代等の黜し米を利するを停め、下敷米を與ふべきことを令す。

〔司農典〕

御侍代官并明知・御借知下代、是迄こぼし米等不正之收方有之に付、今度御改作御詮議之上、御別紙御覺書之通右御代官々々江御談有之。以來收米一石に付下敷米与申趣に而七合宛相渡、其餘目拂米等は都而斗人勝手に仕抹いたし、少もこぼし米等無之筈に候得共、若此上にも心得違之下代有之候はゞ、其委細無泥御達可申上旨、今日御改作所より被仰談候間、此段御承知、早速御裁許村々江御申渡可被成候。尤右七合宛裁許江取立相渡、聊紛敷族無之様、譯而御談に御座候。前條之趣私より各樣江申達候樣御談に付、御別紙相添廻達仕候間、早々相廻、落着より御返可被成候、以上。

寅十月廿八日　　　　廣瀨太郎左衛門

能美・能越御扶持人中樣・十村中樣

口達之覺

御收納米納方に付、各樣下代共出役相納候節、兎角是迄目拂米与申名目に而こぼし米致候之由。右に付是迄御算用場聞前等有之分、指除等に申付候者度々有之候。右不埒成習俗有之に付、御米撰方も自ら等閑に相成、實に付不申。依而役所切之取扱に候得共、下敷代与申名目に而、一石に七合宛十村於手前に爲相渡、右目拂米等都而其儘斗人江相渡、少しも下代手懸申儀不相成。若心得違之者有之候得者。役所より夫々相達指除可申。右樣格別之取扱いたし遣申上者、御米撰方幷俵拵之儀、嚴重相心得可申、倂年之豐凶其實に付、正直に相心得候樣御申渡有之度事。

寅十月

御侍幷與力明知・御借知御代官分下代中、是迄目拂米与申名目に而、不正之納方有之に付、今度御詮議之上、下敷代与申名目に而、一石に七合宛十村於手前取立相渡、右目拂米等都而其斗人江相渡し、少も下代手懸申儀不相成段被仰渡、奉得其意申候。右七合之分、組裁許宅江斗人より取立候而者、往返面倒之筋に御座候間、右於御藏所に斗下惣代肝煎指出、斗人より爲取立、下代中江相渡、組裁許名宛之請取書取立申度奉存候に付、此段奉窺候。

御改作所御附札、本文之通可相心得事。

一、目拂米之儀下代中手懸不申樣被仰渡候に付、斗場目拂米之儀者、斗人一人々々ゟ相渡可申候得共、俵仕立場所之分者、大勢入込俵拵仕候事故、目拂米人々ゟ相渡候儀も出來不申、且者先年より御代官目拂米之儀者、入札御拂に被仰付、年々上納仕申儀に御座候間、此分者如何相心得可申哉奉窺申候間、御指圖被成下候樣奉願上候、以上。

寅十一月

石黑源之丞
廣瀨太郞左衞門
林　孫右衞門
三輪宇八郞
狩野恒方
得能覺兵衞
笠間七右衞門
寶田宗兵衞
伊東次郞左衞門

御改作御奉行所

御改作所御附札。目拂米入札拂に申付、可爲致上納候之間、是迄之通相心得可申候事。

十月。祠堂銀の返濟を遲延することなかるべきを告ぐ。

〔留　書〕

祠堂銀致借用罷在候人々之內、兎角返納遲滯之人々多有之、祠堂銀之格合致相違候旨、寺社奉行申聞、等閑之至に候條、急度可致返納候。尙更以後麁略無之樣、組・支配之人々ゟ寄々可被申談候事。

十　　月

十月。能美郡湊村を町並の取扱たらしめんことを請願す。

〔湊村町立願書〕

今般衣食住之儀に付、一統被仰出之趣、尙又支配人より書取を以て綿密に申渡旨御談に付、私支配之內本吉之儀は、夫々示渡置申候。就而者湊の儀は、表向は村名相唱來候得共、近來所方も追々成立、船商賣仕候者之內、相應身元之者出來、專ら町同樣之姿に相成り、當村二百八九十軒と成、二百軒餘船持船稼、其外質屋等種々商人多く、耕作に携る百姓分は漸く七八十軒に過不申。依之さながら町立之樣に成行、村立之風儀は薄く相見ゟ申候。左候得ば名實齟齬仕り、今後村方御定之振を以て申來候へ共、一旦之儀は決而質素にも可相成候へ共、跡々守遂候儀は難計、兎角今度之御主旨通り永續爲仕申度候間、何卒本吉同樣百姓と町人差

天保十四年二月十日の條參照

別相立申度候。既に先達而御高方御仕法之砌、彼是相混じ罷在候に付、先役之者より夫々御達申候通り、湊船持共之內、外御郡より買入置候高有之候得共、町人持高不殘御取揚に付、早々取揚御郡方に引渡申由。右樣之節は全く町人の取扱に被成居申候。且又百姓分は耕作迄仕り、商賣爲指止之所、同所之儀は百姓分にも商賣仕居り候者混じ居、何廉取捌方に付ても紛敷、其外村方川除御普請等に付ても、御高割に仕り、難澁小前之鍬持共江は配當過分相掛り、船持等身元之者は無高頭振同樣に御座候趣、分不同に相成申候に付、百姓分成立兼申候。依而此折百姓与町人与部分仕り、右樣混雜無之樣仕り度、何卒御郡方之內放生津同樣、町役人名目相立、百姓の分は地方百姓与相唱申候はゞ、取捌方等に付紛敷儀無之、今度之御主意も夫々分限通り爲相守申示候はゞ、種々取締方行屆可申哉と奉存候。右等之儀心付申に付、御斷申候間、夫々御詮議之上、御用番御年寄衆江も被仰達被下候樣仕り度候、以上。

寅十月　　　奧村梶之助

御算用場

奧村梶之助は本吉奉行

十一月二日。江戶に於いて琉球人見物の件に就いて告ぐ。

〔御留守江戶詰中御用諸事留〕

十一月二日

小森源左衛門江

琉球人見物之儀、望之者は勝手次第見物に罷越可申候。尤作法能目立不申様相心得可申候。歸國之節者遠方之儀にも候間、夜中より罷越候儀も勝手次第に候。且又諸組等より一時に人多に罷出候而者、御近火等之御手當甚指支候間、諸組等曁諸役所之人々、御近火等之御手當不指支様致手配、繰々に罷出候様可申渡候。

右之趣御手前より順達可有之候事。

十一月

〔御留守江戸詰中御用諸事留〕

十一月五日

一、御横目より琉球見物之儀申渡候に付、一統御門方之儀觸出候覺書相達候。左之通。

覺

一、琉球人見物に罷出候人々、御作事方御門明ケ六時より勝手次第罷出、夜に入罷歸候而も不及證文候事。

一、見物人名書、前日九時過之内御横目所江御指出可被成候。且又御組・御支配之分も、御聞屆之上、是又御指出可被成候。

一、又者之分、主人承屆、別紙案文印章之切手致持參、御門江制場方より役人指出置候間相渡、罷歸候節も相斷入可申事。

但、夜に入罷歸候而も不及證文候。且又右切手に而、常々小札不及持參候事。

一、琉球人來着之節は曉七時より罷出、歸國之節は曉八時より罷出候儀、勝手次第に候事。

十一月四日。前田齊泰の子利鬯頃日疱瘡を患ふ。

桃之助は後の利鬯にして當時前田圖書養子なり

〔官私隨筆〕

十一月四日

一、桃之助事頃日疱瘡之處、彌々無之に付、此間中萬之助日々見廻、自分は一昨日見廻、將之佐は昨日見廻、內匠は御用番に付不被罷越。昨晚より森快安へ療治相賴、藥方參耆麻茸湯、兼用に建中湯服用候。是は昨日各示談之上也。夫迄は高嶋正頴療治也。然處右等之趣いまだ不被申上に付而、示談之上右四人相同じ小左衛門へ逢、右之次第申入、先快安に賴置候示談に候へども、又思召も可被爲在哉、得御內意候而も可候はゞ可被相伺旨申入候處、療養方之儀は相伺に不及、誰に成共療法相談次第可申談候。樣子之儀は時々御醫者に被聞召候間、療養之儀は思召も不被爲在候間、不及相伺旨御意之由、丹後守迄演述に付三人衆へ申入候。

十一月五日。水野越前守より領內に產する塩硝賣渡の交渉ありたるを拒

絶す。

〔毎日帳書拔〕

十一月五日

一、水野越前守殿御役人より、塩硝御拂に而も御座候者相求度旨聞番迄申越候付、段々僉議之上、畢竟水野殿御役人頼之趣、公邊爲御手當御買入等之御しらべ等之儀に而も有之間敷、共程も難計儀候間、寶暦之度大坂詰人より御答申候樣之趣に爲申答候者可然哉と遂僉議伺、窺之通被仰出。

寶暦之度大坂詰人より御答方は、御領分に而は越中之內於一ヶ所出來、御家中足輕共年中鐵炮稽古之藥に調合仕候程ならでは出來不仕候。年により不出來之節は不足も仕候得共、賣藥相求之儀も、外之品とは違役人共も遠慮に奉存、何卒御領分之內に而出來仕候樣嚴重被仰付置候旨等也。

十一月七日。前田齊泰の病輕快に赴くを以て醫師の當直を廢す。

〔成瀨正敦日記〕

十一月七日

一、追々御順快被爲在候付、御醫者御番被仰付置候にも及間敷与遂僉議相伺、御用番へも御咄申置候事」今

日より篁齋等御番相勤候に不及旨、探元へ申談。但診方は是迄之通之事。

十一月十二日。金澤横傳馬町に火災あり。

〔毎日帳書拔〕

十一月十二日

一、横傳馬町出火六十五軒燒失。

十一月十八日。德川家慶、前田慶寧に放鷹によりて獲たる雁を贈る。

〔官私隨筆〕

十一月廿六日

一、當十八日筑前守樣へ以上使御鷹之雁御拜領之段申來候付上下に改各列座、以古屋甚兵衞御祝詞申上候處、以荒木津太夫御喜悅之趣被仰出。

十一月廿九日。學校校正方西坂余所之助その著垂統別史を藩侯に呈す。

〔成瀨正敦日記〕

十一月二十九日

一、渡邊兵太夫此間御次へ罷出申聞候は、先達而學校助教加人相勤居、當時は學校校正御用

相勤居候御細工人西坂茂太郎弟余所之助儀、數年心懸罷在、高德院樣御成績を文章につゞり、垂統別史与題號いたし著述之品有之候。外々より承り借覽相願候面々有之候得共、御上へ上不申內は先は爲見不申心得に候所、此頃に而は淸書も致出來、不苦事に候はゞ指上度旨等、余所之助より兵太夫等致內談、右下本も見請候所、能出來之樣に見請候間、如何可有之哉之旨申聞に付、同席申合指上候而可宜旨、此間挨拶におよび置候所、今日左之通兵太夫持參指出候付入御覽、御留置被相成候事。

垂統別史幷同考據共に八冊

但別史七冊考據一冊一箱

十一月。頭・支配人にその配下の武藝勤惰の狀を調査せしむ。

〔留　書〕

近年學校御仕法御修補以後、御家中之人々武藝出情又は懈怠之樣子、夫々於學校年々しらべも被仰付故、經武館暨師範人宅に而、稽古之多寡出座數之樣子は粗相分り候得共、在勤之人々抔勤向繁多、或は他國詰等に而無據數年懈怠に相成候人々も可有之、又は師家幷經武館ゟ出座は不致候共、自宅に而不斷心懸致稽古候者茂可有之候處、左樣之儀は學校切之しらべに而は難相分り候に付、前段於學校しらべ之內、格別不情に相聞候人々之儀は、是以後臨時共

頭・支配人江督學より名指を以相尋候趣茂可有之候條、支配々々においても兼而相しらべ置可申候。將又格別出情之人々等之儀、依時宜其樣子相尋儀可有之候條、無油斷取しらべ置可申候事。

十一月

十一月。手取川川流しの薪材拂下の件を告ぐ。

〔留書〕

近年薪拂底一統手支之躰に付、當春以來中宮奥山に而木呂伐出させ、此節追々川流出來、野々市村幷犀川下古保川迄流着に付、右兩村にて御拂に相成候條、御家中之人々屆之分は、代銀割木之分は壹匁に付目形拾貫目、丸木之分は壹棚に付代銀參拾目宛之図り、木呂高は長さ貳尺貳寸之木に而、高さ六尺に横六尺壹棚に候條、其心得を以請取可申候。一時には渡り方指支候に付、少々宛幾切にも可相渡候條、入用之時に當場承合、右役所江代銀差出指紙を請、夫を以宅々最寄次第、右兩村之内木呂場迄相向候得ば、持屆方主付之者相立置候に付、追々可申屆筈に候。

但、持屆之駄賃錢、宅々遠近により高下有之候に付、本文主付之者江夫々取極申渡置候間、右極高之儀も當場承合置、人馬迄切手通、持屆之時々直に可被相渡候。

一、右兩村共、家來等指遣取寄候儀も、尤不苦候事。

一、右渡り方日限之儀は　來年二月中迄に全配當之筈に候。

一、右薪配當高之儀、大抵知行高に應割合茂有之候條、請取方不指急樣可被相心得候。

十　一　月

十一月。沖船頭・水手等は船持の便を計り成るべく自國に於いて稼業すべきことを告ぐ。

〔御郡典〕

御領國中船水主共、近年多分他國へ罷越相稼候故、船持共雇方指支致迷惑候躰相聞え候に付、他國稼可指留哉に候得共、左候而は船水主等及迷惑可申与、其沙汰には不及候。併専他國相稼候而は、御廻米御用等指支之場にも可至候間、沖船頭・水主等成限自國相稼可申樣、一統可被申渡候。尤前段之通、他國稼指留候儀に而は無之候間、何分致心服、御廻米御用等指支不申樣心得方之儀も可被申渡置候、以上。

十　一　月　　　　御　算　用　場

十一月。能登屋佐助、町奉行に潰し箔製造の許可を請ふ。

〔箔打方諸事舊記〕

乍恐申上候

一、私儀金箔等打立申、製法手馴罷在申候。然處金箔之儀は、乍恐公儀御定茂御座候事故、無謂打立申儀者不相成譯に奉存罷在申候。就夫於御當地打立申儀相叶候者、乍恐御國御益にも相成可申与、數年種々手を盡心配仕罷在候內、私一類に塩崎勝兵衛与申者、江戶金座後藤三右衛門之手代仕罷在候に付、前段之趣兼而存念之儀に付、當八月奉願上、江戶表右勝兵衛方ぇ罷越、何与歟工夫を以、於御當地金箔打立渡世可仕手段も無之哉与內談仕候處、後藤三右衛門方に金箔主附有之、東三十三國者柏原吉右衛門与申者、箔縮方役相勤罷在候旨申聞候に付、右勝兵衛等ぇ手引を以、彼人ぇ引合遂內談申候處、尾州・仙臺・會津・富山、右四ヶ國に例有之候間、江戶御屋舖御留守居樣より御願立も御座候者、可被爲有御聞屆哉。右四ヶ國之內尾州樣之御振合に相成候者、乍恐彌御國御益にも相成、其上公儀御縮方に茂可相成候に付、於御國從公儀御入立之金箔賣捌人相立候者、加越能・富山・大聖寺等に金箔等取扱申者共之取縮方にも相成可申、猶更私手前に而願附之趣相考可申与內意申聞罷在申候。然所依右當九月勝兵衛より、別紙內狀を以申越候に付、乍憚奉願上候。何卒金箔打立方尾州樣之御振合通被爲仰付候者、乍恐御上御用箔者於御當地打立方仕、御用相勤申度奉存候。前條申上候通、箔御取縮方茂御座候に付、賣箔之儀は江戶表より取寄、賣捌方私ぇ被爲仰付可被下候樣奉願上

候。右に付元來金箔与申は、至而秘傳御座候而、取扱方により切れ金抔多出來、暫寢金に相成候分者金性替、兎角損多に相成、費相懸り申品に御座候故、右等之箔御當地に而潰し箔に仕、打直製法仕候得者、如元宜敷箔に相成、毛厘も麁末に相成不申儀御座候間、何卒願之通被爲仰付被下候者、右潰箔製法之儀者、私同職之者共与申合、何茂一統渡世にも相成可申儀御座候。尤御聞屆之上者重而仕法書可奉指上候。此段御慈悲を以被爲聞召上、格別之御詮議之上願之通被仰付被爲下候者、難有忝可奉存候、以上。

卯辰西養寺前

天保十三年十一月　　　能登屋　左　助

町御奉行所

十二月二日。幕府、前田齊泰に來年三月を以て參覲すべきことを命ず。

〔成瀨正敎日記〕

十二月十三日

一、當月二日御參勤御時節御伺之御奉書御連名、於水野越前守相渡る。但土井殿御所勞に而御連名なし。

右今日御用番より寫被指上。但來年三月中御參府可被遊旨也。

〔成瀨正敎日記〕

十二月廿四日

一、來三月御參勤は迚も被爲間敷。依而來秋九月頃御參府之御都合に相成候へば可御宜、依而は御願方之御都合荒井甚之丞殿先御內々御示談および候樣、聞番へ可申遣旨被仰出候付、今便夫々申遣。

十二月十五日。幕令に基づき祠堂銀・町會所貸附銀の利子を低下すべきことを告ぐ。

〔每日帳書拔〕

十二月十五日

一、今般從公儀利下げ之儀被仰渡候付、祠堂銀利足來正月より九朱に取立候樣申渡候旨等、御勝手方より演述之事。

〔留　書〕

今度從公儀金銀貸借利足利下之儀被仰渡候に付、寺社所祠堂銀利足之儀、詮議之上、當十二月迄之分は是迄之通取立、來正月より九朱之利足に引直取立候樣、寺社奉行江申渡候條、右銀子借用之人々、其心得に而返納可有之候。將又右返納方に付而は、是迄每度相觸置、猶又

當十月も一統申渡候通、遲滯無之可致返納候。

右之趣一統可被申談候事。

十　二　月

〔官私隨筆〕

十二月十五日

一、水原清五郎相招、町會所貸附銀利足下げ之儀僉議之通可被相心得旨申入候。

十二月十六日。越中五ヶ山製塩硝の一部を他國に販賣することを許すに決す。

〔毎日帳書抜〕

十二月十六日

一、五ヶ山中煮塩硝、平均直段を以不殘御買上被仰付、當町大橋屋庄助買留人申渡、悉皆取捌候處、煮屋共迷惑之筋等多、自ら塩硝制方不行屆處へ至り候旨に而、在來之通御指解之儀申聞候付、今度右仕法御差止、御縮方嚴重相立、上煮塩硝御藏へ相納候上、中煮之分在來之通他國津出爲致可申与遂僉議候由、御家老方より示談に付存寄無之段及演述候事。

十二月廿三日。横目博勞を廢し、在博勞の株立を止むることを決す。

兩通は略す

［若年寄方御用留］

十二月廿三日

御領國近年駒出生薄、其上洩馬も有之躰に而、宜馬出來不仕候付、駒撰方之儀段々詮議仕候處、元來駒出生當歳より在博勞幷横目博勞致下買罷在、悉皆彼者共馬賣捌之儀を棟取、駒主共存寄通に賣捌爲致不申故、駒主自ら迷惑之筋も有之、彌駒價高貴に相成、宜駒は御馬役廻村前密々他國へ賣捌、彼是不正之族も有之候趣相聞え候付、猶更詮議仕候處、諸郡博勞役之儀は明暦二年御免許之段被仰出之品に候處、文政元年於學校方馬市御仕法に付、博勞株役立に被仰付、其内横目馬喰に申渡有之候處、右之通駒方御縮にも相成不申、都而取組等いたし不宜候。然處近年馬市も相止居候付、横目博勞幷在博勞株之儀被指止候樣、學校方へ示談仕置候所、横目博勞幷株之儀被指止指支之儀も無之候。右之通博勞株も相止候時は、馬市等之儀今度伺之上、都而若年寄方へ引送可申旨被仰出候段、別紙兩通之通演述仕候。依之横目博勞幷在博勞株之儀、當分馬市も被仰付間敷、右之通駒方詮議に何歟指障之儀も御座候間、今般夫々被指止候段可申渡与奉存候。且又通行札料之儀は先是迄之通取立可申候。駒方御仕法に付詮議之趣も御座候間、追而可奉伺与奉存候事。

十二月廿二日

右昨日伺置、今日伺通と被仰出。

〔御郡典〕

馬市之儀、是迄於學校方取捌有之候得共、以來於若年寄方取捌候樣就被仰出候に、詮議之趣有之、在博勞株役立之儀被指止、横目博勞も被指除候。且他國出牛馬通行札料之儀は、是迄之通取立候筈に候條、被得其意、亦御領國駒方御縮等之儀、御馬奉行被示合可被申聞候事。

寅十二月

十二月廿六日。金澤に於いて流質の期限を改めて十ケ月とすることを告ぐ。

〔郡方御觸〕

今般利下之儀に付、當町質屋共願之趣有之、以來流限月十ケ月に被承届、其餘是迄之通相心得可申。且是迄取受置候分者、尤限月可爲約定之通旨町奉行ゟ申渡候間、御郡幷遠所町方にも同樣可相心得段、當場より可申渡旨、御勝手方年寄中被申聞候條、被得其意、夫々可被申渡候、以上。

十二月廿六日　　御算用場

林源太郎殿

従來は十五ケ月を以て流質としたることと天保十四年二月の條に見ゆ

吉田藤馬殿

津田少左衞門殿

十二月廿九日。新番御歩の娘又は姉妹を御次女中に任用し得べきことを定む。

〔諸事要用雜記〕

十二月廿九日

一、新番組之娘・姉妹御次女中に召抱候儀差支候旨御廣式へ申聞。右は文化之頃身分輕き者御中﨟に上り候事有之、其節之御僉議に付、御次女中は御中﨟に立身いたし候に付、已後身柄之者上り候事に被仰出候由。然處右被仰出當席にも不見當、御廣式にも無之候得共、已前は御次女中御用之節は御歩並暨陪臣も上り候處、文政五年御用番ゟ書出御達申候節、平士已上と有之。其後御歩並之者望候節當席へ相達候へば、侍列已上相撰候樣藤田平兵衞申談候儀も有之。依而新番之儀は侍列と不被申に而は無之候へ共、平士以上之內へは加り申間敷と之詮議に而、近頃新番之娘相望候節も、身柄養女にいたし不申而は不相成事に申談候由。且新番頭に而は御歩組とも品違之儀、假親に而上候事は難心得由に而、段々申聞候趣も有之候。段々是迄之詮議振等相しらべ候處、前文之通慥に新番不相成と申事も無之、當時役女中相勤

候內にも新番之娘有之。併是は文政已前被召抱候者之由に候。依而今度段々僉議之上相伺候處、新番之儀は一通り御步並等とは品も違候事に候間、已後新番之娘等相望候者有之候はゞ可被召抱候間、其趣に相心得、向後御用之節御用番〻相達候而も平士曁新番とか相達可然。無左とも於御廣式新番組不差支事に相成居候得ば、夫にて宜旨今日野村七兵衛へ申談候事。

但、新番頭より申聞之趣も有之に付、已後不差支趣矢野所左衛門へ申談候。

十二月。前田齊泰の病全癒せざるを以て明年頭の賀を受けざることを告ぐ。

〔留書〕

相公樣御不例追々御快方に被成御座候得共、未御保養中被爲在候。依之來年頭、御家中等一統御禮被爲請間敷旨被仰出候條、可被得其意候。且又一統年頭御祝儀献上之御太刀等目錄・靑銅目錄共、當年中に取立、元日不殘指上候筈に候條、正月朔日之日附に而、自分幷組・支配之人々、且江戶表等曁遠所に罷在候人々目錄、當月廿一日より廿五日迄之內御奏者番〻相達可申候。御太刀馬代等は、右日限之內御進物所迄直に差上可申候。

但、在江戶等之人々目錄等は、代判人より取計可申候。

一、御家中子共御禮茂不被爲請候間、尤献上物に不及候。

一、元日は頭分以上登城刻限等、前々御留守年之節之通可相心得候。尤人日・十五日・二月朔日茂、平月之通出仕可有之候。

右之趣夫々可被申談候事。

十二月

十二月。博奕類似の勝負を禁止することを告ぐ。

〔留書〕

かけの諸勝負は御制禁に候處、心得違之者も有之、且正月は勝手向等にて小兒抔之遊事与名付、博奕に似寄候慰事不苦儀之様に存候族茂有之躰相聞え候に付、寛政元年委細被仰渡置候通、かけもの仕勝負を以慰与致候儀は、御停止之事に候條、猶更無違失可申渡旨被仰出候事。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩様可被申渡候、以上。

十二月　　　長　將之佐

十二月。新に石川郡地黄煎村・十一屋村の名を設く。

〔一村建村々調理帳〕

天保十三年十二月　　　石川郡米丸組　地黄煎村

右地黃煎村之儀、新に一村建に而者無之、以前泉野新百姓与相唱申候所、天保十三年十二月地黃煎村与相唱度旨御願申上候所、唱替御聞届之事。

米丸組 十一屋村

右十一屋村之儀、新に一村建に而は無之、以前泉野十一屋与相唱申候。天保十三年十二月十一屋村与相唱度旨御願申上候所、唱替御聞届之事。

天保十四年

正月朔日。前田齊泰保養中なるを以て年頭の賀を受けず。

〔官私隨筆〕

正月元日

一、當春は御保養中に而、御家中御禮不被爲受候付、朔望之通登城。

〔成瀬正敦日記〕

正月朔日

一、上々樣益御機嫌克被爲遊御超歲事。

一、年頭御禮御保養中に付不被爲請候付、元日頭分以上五ッ時過登城、年頭御祝詞申上候筈

之旨等、舊臘御用番より被相觸置候付、何茂五ッ時過より致出席候事。

正月朔日。前田齊泰本鄕邸に於いて初めて頭役以上の年賀を受く。

〔恭敏公記史料〕

元日公臨本邸。初受藩臣頭役以上及左右諸士正賀。

正月二日。前田慶寧江戶城に登り初めて年頭祝賀の禮を行ふ。

〔江戶詰中御用諸事〕

正月二日

一、筑前守樣初而年頭御登城に付、六半頃に御見立に出、六時過御出被遊候。中ノ口より御出に付、階上壇の上戶際左の方に、八朔之御登城之時同樣圖書と兩人御見立に出。出雲守樣御同道に而、六時過此方ゟ被爲入、指續中ノ口より御出に付、御見立之所に而御挨拶申上候事。

但、御戾り之節は八朔之通拙者御待請には不出事。

一、今日御裝束御直垂に而御登城之事。

一、今日四時揃に而御禮人有之、昨殘之分也。御戾り之上被爲請。

一、御下城より御直に御廻勤有之。

〔成瀨正敎日記〕

正月十日

一、當月二日筑前守樣御登城、御着座被仰出、年頭御禮御首尾能相濟候旨等、同日不時立町飛脚、早飛脚御歩を以原五郎左衛門等より言上、聞番より言上も傳封到來。

一、御着座之儀、黑鷲之御杉戶際において、眞田信濃守殿御演達之由。其上に而於大廣間御禮被仰上、都而御先例之通御盃御頂戴、御時服御拜領、都而御都合能被爲濟、直に西丸へ御登城御謁、御着座之御禮も御奏者番へ被謁被爲濟、御着座之御禮御老中方御廻勤被遊候由。

正月十九日。鏡餅直しの祝儀を行ふ。

〔宮私隨筆〕

正月十九日

一、御鏡餅頂戴被仰付由御用番演述。於松之間二之間頂戴之上、渡邊新藏迄御禮申入候。

正月廿三日。錢屋五兵衛の新造船一艘を買上げて藩の御手船とす。

〔宮私隨筆〕

正月廿三日

一、御手船錢屋五兵衛新に爲合候分一艘御買上に申談、五兵衛へ御預舟に申渡候由覺書持參。

傳封は傳付

是月は大盡なり

正月晦日。德川家齊の第三回忌法會を神護寺に執行す。

〔留書〕

文恭院様御三回忌御法事、當月晦日於神護寺御執行有之候事。

一、御法事中御作事御普請方、其外三御丸御射手・御異風稽古、幷諸組弓・鐵炮稽古之儀茂、不及指止候事。

但、神護寺ゟ程近き所に稽古場有之候はゞ、指扣可申事。

一、御家中普請・鳴物は不及遠慮候。能囃子・押立候振舞等之儀は、御法事中自分に遠慮可然候事。

但、能囃子之儀茂、役者抔稽古仕候分は不苦候。乍併神護寺近所に罷在候者は、遠慮可仕候事。

右之趣被得其意、一統可被申談候、以上。

正月十九日　前田内匠

御横目中

二月四日。一向宗寺庵が寺格昇進の際に於ける勸化の件に關し通牒す。

〔御郡典〕

一向宗寺庵官位昇進之儀に付、別紙寺社奉行品川左門よりの內狀、私より各樣ゟ及御演述候樣ゟ及御演述候樣申越候に付、寫一通指進之申候。御承知被成、於門徒之者共にも、以後不致心得違樣、得与申談候樣、裁許之人々ゟ被仰談候樣に与存候。先々御廻、落着より御返可被成候、以上。

卯二月四日　　　服部貞右衛門

大島五郎右衛門樣

次第寒冷相增申候處、彌無御障珍重存候。然ば鳳至郡鈴屋村長光寺勸化方之儀に付、先達而御內意御申聞之趣に付、不取敢各方申付置候處、同寺組合寺より門徒共手前承調理候處、今般昇進相望候に付、押勸ゟ等致候之儀は無之由、門徒共より書付指出候旨に而、右書付相添及歎願に候に付、拙者共詮議之趣申達候處、委曲御返書之趣致承知候。御申越之通、前々より寺庵昇進等願出候節詮議之上、猶亦爲念門徒共迷惑難題之筋も無之哉之旨、各ゟ申達、御指支無之段御申越之上、上京等之儀承屆、頭寺等より本山へ之添翰相渡、上京官位いたし候振合に而、今以其通に候。然處近來は兎角昇進方甚猥に相成、代々官職無之寺柄も互に昇進願多有之、中には外法用等申立上京願出、於彼地金銀を以本山ゟ直に願込、本山より拜官之名目に而致昇進來、御國方ゟ追而右之趣及屆候向々も有之、是等は對御國法に、尤等閑不埒之

心得方に付、右拜官取揚之儀共時々本山江申達、本人嚴重咎方申付候。乍去代々官位有之寺柄等に而、無據子細有之、筋合相立候昇進方之儀は、本山よりも前方共段拙者共迄申越、本人よりも伺出候得ば、猶又遂穿鑿、品に寄拜官方承屆候振合に而、都而願官拜官共定法有之儀に候。然處寺庵幷檀中之者迄も心得違に而、近來右樣昇進願方數多烈敷相成、縮方難相立甚混雜之儀に付、拙者共詮議之趣本山江も及引合置候。依之近來は昇進願出候共、先右書付は寺社所に指留置、尤各等江も不申達、詮議中右昇進方一切不承屆候。右之通に付、以後之儀も右本山向示合之趣譯付之上、筋合通願出承屆候詮議に候得ば、其節前格之通各江及御引合に、御指支無之旨御返書次第可承屆候。夫迄は當分前條之通願官無之候條、左樣御承知置候樣致度、今度も長光寺宥方等之儀申達候後、同寺始外寺庵之內にも、昇進方之儀に付押勸化等いたし、過分之銀高受候之由、外向より聞前之趣有之、不屆至極に付、夫々呼出置候間、出府次第相糺、嚴重可申付与存候。將又長光寺組合寺書付之內、存外至極に存候儀調出候得共、右は先達而宇出津表江御出役之節、御取調理も有之儀、其上本人致心得違、今更後悔之躰、御手先留書緣類之者迄申遣候內狀も有之旨に而、爲證據御指越。右等之譯柄に候處、組合寺申分不都合之至に付、以來心得方嚴重可申渡旨等御申越、是亦致承知候。右之族に候得ば、甚不埒之儀に候得ば、尚亦詮議之上、以來之儀嚴重可申付与存候。乍去右一件に付、組

合方より門徒共手前相尋候處、則答書之趣意も有之候に付、右書付相添及歎願、先達而御披見之通に候。左候得ば、村々門徒共に而も、不都合之答方与存候。元來寺庵之儀は無祿之者に付、門徒等之懇志を以寺務相續方等之儀に候得共、近頃之世柄に而自ら懇志方薄く、一切施入無之、別而困窮に落入、中には相續方必至与指逼り候向も有之躰に付、成限取扱置候得共、無是非前段之爲躰にも押移り可申哉与甚心配仕。若右等相成候儀は、前々嚴重御申渡置候に付、急度相心得、自然門徒等下々之者心得違之者も有之候共、可致教諭境界之處、自分取失、前段之族沙汰之限に候。往々師檀之間柄を以、懇志之儀は格別、弁進等に付押勸化等不相成儀は兼而承知可罷在處、材木迄も爲賣代与、假令寺庵より心得違に而賴入候共、御收納方指支之場に可至程之儀は、是亦甚心得違与存候間、寺庵而已嚴重申付候而は人氣に障り、若亦此上にも心得違に而不心服之族有之候而は、締方難相立筋に候條、何分以來は實意を以師檀遂和融、檀家之者共も身分相應成限懇志相遂、右押勸化等之儀は堅相斷、其段各江も相達候樣有之度。左候得ば、双方之締方相立可申。右等之趣御勘考、品能御申諭有之候樣致度候。然上は、拙者共も、支配之寺社家一統江心得方嚴重可申渡与存候。御承知之上は、御同役江も向々より御通達置候樣致度、右御再報旁內狀を以如此に御座候、以上。

十月廿四日　　品川左門

二月四日。諸郡各村の肝煎交代に際し同苗の速かに之が處置を爲すべきことを告ぐ。

〔河合錄〕

諸郡村々之内肝煎立替等之節、近年同苗納得方急に相揃不申、彼是及遲々、不得止事組合頭等之内江、當分肝煎代り申談候向も有之。中には近村等江兼帶申渡候儀も有之故、取捌區々之儀等出來。中には不容易申分も起り、一村衰微之基に候。根元同苗は人々得手を申募、肝煎急に相立不申故に候。依之寛政四年別紙寫之通申渡、文政二年にも猶又無違失相心得候樣嚴重申渡置候處、近年又々相戾り候躰、不埒之至に候條、別紙之趣改而村々人別嚴重申渡、受書取立可指出候、以上。

二月四日　　　　　　　　　　　　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

二月六日。前田齊泰來る三月の參覲を延期すべきことを告ぐ。

〔成瀨正敦日記〕

二月六日

一、左之通今日御供之將之佐へ被仰出、主税相達之。

當三月中御參府可被成處、去夏御氣腫御滯以後、未御全快不被爲在、御保養中に而、迚も長途之御旅行難被成、依之暫御發駕御延引可被遊御内定に候。先此段可相達旨被仰出候。

二　月

二月六日。江戸に於ける領内の產物問屋に出荷する手續を告ぐ。

〔御郡典〕

御領國出來之諸產物、江戸升屋七左衛門店において賣捌候筈に付、指遣度者は當町一丸甚六ゟ引合候樣、文政十一年申渡置候處、右甚六儀先達而致病死、當甚六ゟ申渡候間、指遣度者は是迄之通可相心得候。尤諸產物甚六一手に致候譯に而は無之、餘手合ゟ遣度者は勝手次第に候條、右之趣夫々可被申渡候、以上。

二月六日　　　　御算用場

二月六日。領内船舶の櫂数調理役を錢屋五兵衛に命ず。

〔御郡典〕

御領國中渡海船を始、獵船・川舟等都而櫂數出來退轉等、綿密相調理候樣、櫂數調理役錢屋

五兵衞ゟ改而申渡候。依而渡海船之分、當辰年より以後、毎歲三月中限委曲帳面に相認、加州・能州之分右五兵衞迄可指出、越中之分は右下役吉久新屋喜六迄、無間違指出候樣可被申渡候。獵船・川舟等之分は右同樣、毎歲五月迄に指出候樣、是亦可被申渡。右等帳面取揃之上、五兵衞・下役共三州共爲致出役候筈に候條、此段も可被申渡置候、以上。

二月六日　　御算用場

高澤平十郎殿

大嶋五郎右衞門殿

二月十日。能美郡湊村を町並の取扱とすることを命ず。

天保十三年十月の條參照

〔湊村町立願書〕

今般衣食住等之儀に付、湊村之儀、本吉同樣取扱、百姓之分は地方百姓与爲唱、統而取捌方等紛敷儀無之、往々取締方行屆可申哉之旨、去寅十月委曲紙面被指出、詮議之上御用番年寄中ゟ相達申候處、御自分存寄通り承屆候段被申聞候條被得其意、夫々可被申渡候、以上。

癸卯二月十日　　御算用場

奥村梶之助殿

二月十一日。金澤城河北御門の屋根を葺替ふるを以て通行を禁ず。

〔留書〕

河北御門屋根葺替に付、當十一日より往來指留候。火事之節は往來不指支候。尤御普請所之儀に候間、往來不込合候之樣可相心得候。此段夫々可被申談候事。

二月

二月十二日。前田齊泰夫人江戸城に登る。

〔溫敬公記史料〕

二月十二日。夫人氏覲將軍。

二月十四日。明倫堂に釋菜の禮を行ふ。

〔官私隨筆〕

二月十四日

一、今日中丁に付、五時前明倫堂へ出席、尤のしめ・上下也。主付內膳殿被出居、將之佐殿は跡より被出。但出席遲く成候儀主付より昨日御用番へ被申入候筈。

一、五半時過列居宜、各罷越、御作法如例相濟。替る儀無之。

二月十四日。前田齊泰の子利義及び利行の病疱瘡と治定す。

〔宮私隨筆〕

二月十三日

一、杉本彌右衛門罷出、基五郎殿・豐之丞殿昨朝より御熱氣有之、一通り之御風氣よりは御熱强く被成御座候。昨朝高嶋正顯等相伺、外に御替りも無御座旨申聞候。夜前も御穩に而よく御休被成、今朝も正顯相診御同樣之旨申聞、御疱瘡に而も可有之哉之旨申聞候。昨夕森快安・大庭探元も相診、今朝長谷川學方・江間篁齋いづれも同樣申聞候。御藥は荊防敗毒散加葛根指上候由。御通も無御替、基五郎殿は今朝至而少々御大便御通有之、豐之丞殿は御大便は御通無之旨。

〔諸事要用雜記〕

二月十四日

一、基五郎殿・豐之丞殿御熱氣被爲在候處、昨日より御見點被爲在、豐之丞殿には昨夕より御見點之旨。隨分御順症に可被爲在、何れ御痘御治定は明日被成候由之事。

〔宮私隨筆〕

二月十五日

一、基五郎殿・豐之丞殿當十二日より御發熱、御疱瘡御治定。御順症之旨前田瀨太夫申聞、紙

面も出之。

二月十七日。百歳の老齢者に物を賜ふ。

〔温敬公記史料〕

二月十七日。賜年百歳者物。

二月十八日。彗星顯る。

〔官私隨筆〕

二月十八日

一、今夜六時過西南之間白氣あり。良夜に而外に雲なく、宅居間先より見候處、門内馬場之松之内より東へさして、虹よりは少太く、直にして屋根之勾配に當て見れば二間計もあるべし。家來庄田長九郎播州家中より歸り、大乘寺坂を上り候節見受候處、色紅に見ゑたる由之處、自分見候節は白く見ゑ候也。急に消せず、六半頃いまだ見ゆと云。形は始終不易躰也。今年は年始之頃暖氣にて雪至少く、正月中に草履用る事成候程也。正月中にさし網鰯來る。鯨に追れたるとも云。折々雪あり。又此月初より雪ふり、頃日殊之外寒し。夜前も雷一二聲あり、昨日日之内も一二聲承之。少不順成天氣なり。人君御警戒あるべき時歟と思はるゝ故爰に記す。昨夕日之入も赤かりしと云。

翌日出席之上承候處、人々被見候由。遠藤數馬は彗星と申考之由也。

〔日用雜記〕

二月十九日

一、彗星の光芒見ゆ。天倉邊より參の南而北皆の七迄、其長さ六十度計、世人妖星とてかまびすし。

〔宮私隨筆〕

二月廿六日

一、彗星之儀、十八日記置候通候處、其翌晩十九日にも見ゐ候へども、前日程明かには無之候。其後も晴候節は見ゐ、次第に薄く成候。夜前も見候へば良夜に而よく見ゐ候。されども餘程薄く有之候。京都・江戸抔は餘程早く見え候由取沙汰なり。天氣は其後もとかく降勝にて、好晴と申程之事無之、今日抔風立寒く候。今年は花もおくれ居、廿三日春分に而寒かるべき時節には候へども、少暖氣に成候方相應歟と被存候也。湯氣に誘はれ、地氣を被引上候故歟と、天學者は申候由也。

〔成瀨正敦日記〕

二月廿七日

一、酉より申へ懸、暮六ッ時より五ッ時頃迄見え候虹之様成日氣之儀。於江戸表は當月七日頃見え候与申沙汰之所、其後曇勝に而見定不出來。當十七日・十八日は晴夜に付見定候所、幅四・五尺計、長さ二・三百間計に白く相見、富士山右之方、駿河の山の高六尺計より相立候与、御櫓に而御見え候旨等。且十一日晝頃牛込邊に當り、黑烟之様に而幅一尺四・五寸之氣相立候旨も御櫓より見え候旨。十日にも紅葉山邊よりも氣立候与申取沙汰も有之候得共、不取留儀之旨等、江戸表御横目今村清左衞門より當席迄以内狀言上有之。

二月廿四日。百姓の子弟を町奉公に出すべからざることを令す。

〔司農典〕

諸郡村々近年作人不足致し、下人召置候處、男女共高給を貪、雜食を嫌、百姓二・三男者農事を怠り、近鄕町立ヶ所江多分奉公に罷出、且近來米價下直に相成渡世致易に付、自分致し稼候者も不少躰。旁以彌增奉公人拂底に相成、畢竟村々手餘り高出來之所江至り候而者、不容易儀に候。根元人々柔弱怠惰に流候故に而、甚心得違に候條、向後町奉公相望候与も一圓不指出様、於村々に急度取縮方致候様嚴重可申渡候。元來其許中においても油斷之故に候條、向後急度可相心得候。其上にも作人不足之向有之候はゞ、當時他支配町家に奉公に罷出居候者村方江為引返、聊も不手支様嚴重可申渡候、以上。

卯二月廿四日　　　　　　　　　　御郡奉行
諸郡御扶持人・十村中　　　　　改作奉行

二月廿七日。前田慶寧と婚姻の內約したる水戶侯德川齊昭の女、疱瘡を以て逝去したるの報本鄕邸に達す。

〔諸事要用雜記〕

二月廿七日

一、筑前守樣御緣女、兼而御內約之水戶樣御息女庸姬樣御疱に而御卒去之旨、山方運阿彌罷越、御口上聞番御取次之旨、富永左膳等より申來、重使御殘念思召候段、御口上取繕御使等勤樣申遣候樣被仰出事。

二月。家內に疱瘡・痲疹等の患者を有するもの丶城中勤仕に就いて告く。

〔留　書〕

基五郞殿・豐之丞殿、御疱瘡等不被爲濟候に付、御家中之人々家內疱瘡・痲疹・水痘病人有之候はゝ、三番湯懸り候迄は、御目通𛀁罷出之儀相扣候樣被仰出申談置候得共、是以後相扣候に不及旨被仰出候條、此段一統可被申談候事。

二月。家中の士の養子出願の件に就いて告ぐ。

〔國事雜抄〕

御家中之人々養子願之儀筋目を深御穿鑿に付ては、五十歳以上にても見合申儀有之、養子延引之内病氣指詰、末期之養子願候ても越度には成申間敷事に候旨等、松雲院様御代被仰出之趣有之候處、近來者五十歳に及び候へば、指急養子相願、中には同姓等之せがれ等筋目之者有之候ても、幼少に候へば斷之紙面取受、筋目も無之者相願候儀多く有之候。以後は同姓等之せがれ等之内、幼少にても筋目之者有之候とか、又は何とか可相見合子細有之分は、五十歳以上に相成候ても養子願相見合候覺悟に罷在、如何にも筋目を違失不致儀可爲肝要候事。

但、向後幼少にて無據及斷候分は、其者之歳付、斷紙面に調加させ相達可申事。

一、養子之儀は、其家之血筋を重に御穿鑿被爲在、同姓或は父方之續之者養子被仰付、母方之儀は深く御穿鑿無之、寛文十一年之御定にも、他家へ養子に相越、實子持不申者之儀は、養父方之内を以願可申と有之、養方にても母方は籠り不申譯に候處、近來一類附帳に調候分は、父方・母方の差別なく、都て不相願節は斷紙面取受候振合に相成居候へども、向後は母方之續之者之儀は、御定に無之儀に付、父方同様には心得申間敷候。しかし父方に筋目之者無

之上は、他人相願候よりは可然候。右之趣に付、望不申とて分而紙面取受候にも不及候。養子に罷越候者は、實方之親類縁者も可爲同樣事。

右之趣一統爲心得申聞候條、夫々可被申談候事。

卯　二　月

二月。當分馬市を廢することを告ぐ。

〔御郡典〕

御馬奉行・御郡奉行江

馬市等之儀詮議之趣有之、當分被指止候條、被得其意、夫々可被申渡事。

卯　二　月

二月。流質の限月等に關する郡方の取扱を規定す。

天保十三年十二月廿六日の條參照

〔御郡典〕

金銀貸借利下ヶ之儀に付、金澤町質屋より願之趣有之、以來流質限月十ヶ月に御聞屆、其餘是迄之通に相心得可申、尤是迄取請置候分者、限月可爲約定通旨、右町御奉行所江被仰渡候に付、御郡幷遠所町方江も同樣可相心得旨、重而被仰渡奉得其意候。

一、利下ヶ之儀、去十二月御觸渡御座候に付、取質仕候分、同十二月朔日より一割之利足に

前に一割とあるは十ヶ月の利率にして去る十二月受質のものは一ヶ月一歩の利率を以て十五ヶ月流質とするものなるべし。

爲取請可申候。

一、流質限月之儀、當正月朔日より之取質は、限月十ヶ月に爲仕可申候。

一、去十二月朔日より同晦日迄之取質者、利足一歩に而、約定之通流限月十五ヶ月に爲相心得可申候。

一、先達而質屋江御渡置之質定書、取立返上可仕候間、御調替御渡可被下候。

右私共詮議之趣、小紙を以御窺申上候間、猶更御指圖被仰渡可被下候。以上。

癸卯二月

三輪宇八郎

當摩太間

高島庄助

北村惣助

御郡御奉行所

御付札

本文令披見候。利下ケ日限暨限月之儀、書面之通爲相心得可申候。流限月之儀、去十二月不申渡に付、同月朔日より同晦日迄之取質は、利足一歩に引直し、限月之儀は拾五ヶ月に爲相心得可申候。尤定書調替可相渡候條、取立可指出候事。

二月。越中礪波郡菅作村々の肝煎等、その菅を金澤笠市に賣出す手續を稟議す。

大島五郎右衛門

〔郡方御觸〕

菅田之儀向後相增不申樣、天保十年六月被仰渡、猶更步數取調理被成置候。就夫作り菅之儀者、賣先き賢買入高も大躰取極り候品に候得者、人々餘計作り增、惣而菅田多に相成候而者、前々被仰渡にも致相違候儀に付、此度御詮議之上、作菅外に賣渡候人々者、天保十年取極置候步數之內、當年五步相減可申、自身遣菅迄に而外賣不致人々は、天保十年取極より餘計步數作り不申事に御取極め之趣等被仰渡、猶更右に付而者、右菅田御收納縮方等之趣被仰渡候故、以後之處仕法相改申度奉存候に付、左に申上候。

私共村々菅作仕候人々、例年六月頃菅出來之上、人々賣急仕、自然与代錢遣込候故、御皆濟詰に至り菅作人手前詮議仕候而も、御年貢米出道無之者も御座候而、兎角御收納取仕抹行屆兼候間、以來御收納縮方之爲、作り菅賣拂方一村切役人手前に而取仕抹仕、賣拂候事に仕度奉存候。

一、一村菅高村役人手前に而相調理、帳面に記置、堀川町商人等江直々村役人より賣渡可申、

尤直段之儀者作人与商人引合之上爲取極、直段右帳面に記置、代銀之儀尤役人方江取請、夫々作人江可相渡事。

一、菅荷印之儀者村毎に取極置、兼而今石動問屋等江相渡置可申事。

一、右印者村役人手前に而、駄數見屆候上印附可申事。

一、村役人手前に而印附致不申、幷村役人記帳に無之分、作人切に而印附いたし密に賣出候菅荷者、途中に而見付次第右荷取揚、三歩者見付人江相渡、殘り者共節御詮議方御窺可申上事。

一、遣菅村々之内萬一賣出し、見咎め候分有之候得者、前段同樣之事。

右私共村々菅出來之分、是迄金澤堀川町商人与いつ頃より歟荷廻人立置、作人より右荷廻し人直に引合賣渡候所、上菅・下菅入交、作人手前之印付替、不而已中勘銀乃至百目請取來り候分を、半銀与歟菅作人方江遣候樣之取計抔も有之、必至与菅作人難儀仕候に付、前段申上候通村役人一手に賣捌等仕、荷廻人之手を經不申事に仕候得者、御收納取仕抹方等行屆可申与奉存候に付、一統示談之上奉願候間、此段御聞屆被下候樣奉願上候、以上。

天保十四年正月

菅作村々惣代糸岡組寄嶋村當分肝煎代り　彥　助

同断　宮嶋組小矢部村肝煎　佐次右衞門
同断　同組上向田村肝煎　小左衞門
同断　五位組下向田村肝煎　長右衞門
同断　同組高畠村肝煎　久右衞門
長田金右衞門殿
埴生村佐次兵衞殿
埴生村佐十郎殿

右糸岡組等菅作村に、菅田歩數之儀先達而增方不仕事に取極、右御年貢米取縮方等申渡置候得共、菅賣急ぎ等仕、自然与代錢遣込、御年貢明米仕候者も有之、何廉行屆兼候趣等御座候に付、當年菅田減方等申渡、猶更御年貢縮方等之儀申渡候所、以後仕法之儀書付指出候に付、猶更詮議仕候所相違無御座候。縮方相立可申与存候間、願之通御聞屆被成下候而、金澤町奉行江も被仰遣置被下候樣奉願候。依而奥書仕御達申上候、以上。

長田金右衞門
埴生村佐次兵衞
埴生村佐十郎

得能覺兵衞
荒木平助
石崎市右衞門
安藤次左衞門

御改作御奉行所

付札に
本文之趣承屆、堀川町笠屋共江申渡之儀町奉行江申遣候。且村役人共一手に而〆賣等いたし、直段引揚候樣之族有之においては、可及斷旨も申渡置候條、聊不正之筋無之樣可被申渡候。
以上。

二月　　御算用場

改作御奉行中

三月朔日。前田齊泰の子利義の疱瘡癒え酒湯を浴す。

〔官私隨筆〕

三月朔日

一、甚五郎殿等御酒湯に付各列座以井上井之助恐悦申上候。但平日に候へば常服之儘例之

由。

〔諸事要用雜記〕

三月朔日

一、今日御子樣方御酒湯被爲曳候伺御機嫌、御廣式へ罷出候儀昨日切り之事。

基五郞殿

一、綿　　　五把

干　鯛　一箱代包のし

御樽代　三百疋

包熨斗

御目錄

御疱瘡逐日御順快御肥立被成御酒湯も被爲濟珍重之儀御安堵思召候。依御祝被成御目錄之通被進之候段御口上宜申述候。

三　月　朔　日　　　　　　御使　御近習頭

豐之丞殿　右御同樣。

三月朔日。前田齊泰その子利順の生活を質素にすべきことを命ず。

〔諸事要用雜記〕

三月朔日

一、喬松丸殿御質素御募方等之儀に付、明日森七郎左衛門發足に付、是へ左之通書取を以委曲被仰出候事。

御儉約方之儀者跡々每度被仰出置、昨年茂今一篇格別御省略向遂僉議候樣被仰出之通候。然處御住居向御省略之儀、追々公儀より被仰出、當時御格別御取締茂有之御樣子、將又筑前守樣御用向茂、竹田市三郎等始御省略方主付茂被仰付、是又格別御僉議も被仰付筈候。左候得者喬松丸殿御事者、猶以萬端御事柢、何歟も御省略可被爲、成丈御質素可有御座儀勿論に候處、いまだ御幼稚之御事故、此段は各初年寄女中等篤与奉心得、聊筑前守樣御振合等に競合申儀等者無之筈候。御成立御手輕之儀に心得可申旨等、兼而茂被仰出置候へ共、前條之通御住居向嚴重之御取締も有之御時節に茂候故、姬君樣ゟ被爲對候而茂、格別御質素に無之而者不相成儀候條、此處各篤与相心得、尙更右之趣年寄女中ゟも入念可申談旨被仰出候事。

卯　三　月

三月朔日。金城靈澤の碑文作製を津田鳳卿等に命ず。

〔渡邊兵太夫手記〕

三月朔日出仕、金城靈澤叙津田亮之助ゟ被仰付、右之銘自分ゟ被仰付候段、金谷多門を以被仰渡。

自分は渡邊栗

三月九日。前田齊泰、參覲延期のことを幕府に屆出づ。

〔成瀨正敦日記〕

二月十八日

一、御發駕御延引御屆方之儀、荒井殿へ聞番御内談仕候所、御先例通御心得被成候樣にと御挨拶に付、寬政四年之御振を以、初度御屆三月初、二度目御屆四月初与、兩度之御屆書去暮相達置候御容躰書を以相綴り、御草甚之丞殿へ及御内談候旨に而兩通指越。且三度目は五月初御使札御指出之儀、御先例通与奉存候旨等、甚之丞殿被仰聞候旨。右に付御例書も指越、三度目御使札には秋頃御參府被成度旨御書中に而、則御奉書相渡候儀等も寬政之振申越、夫々申上置候事。高田奉

〔成瀨正敦日記〕

三月十六日

一、御參府御延引御屆書、當九日水野殿内玄關ゟ聞番參上、入御内覽候上、同日御用番堀田備中守殿へ持參、御屆書御受取之旨、且何頃御發途に候哉之旨、此間御尋之趣御座候事。右

御延引御屆之旨水野殿表へ相廻、聞番名前書面指出置候旨等、聞番より言上、右に付早飛脚歩に相成候事。

三月十一日。大聖寺藩の江戸千駄木に於ける下屋敷長屋類燒す。

〔成瀬正敦日記〕

三月廿五日

一、當月十一日江戸表千駄木出火、同所備後守樣御下屋敷下御長屋之內少々御類燒、外御別條無御座候旨。右に付御見廻方遂僉議、表向御勤事御用人より相伺候得共、當時御續柄之儀故、猶又當席以奉札御在所へ御見廻被仰進候事に相伺、且江戸表に而も御奧通壽正院樣江奉文を以被仰進、峻光院樣へ御見廻御傳（峻光院樣千駄木御居住也。）に而、御干菓子一箱御肴一籠被進候儀相伺、江戸表御用人江申遣候事。

備後守は大聖寺侯前田利平

三月十六日。本鄕邸に於いて德川家慶の日光參詣中火之元等に用心すべきことを告ぐ。

〔江戸詰中御用諸事〕

三月十六日

一、御横目今村清左衛門江左之趣前々之振を以申渡、書取相渡。

御横目江

來月十三日公方様日光御參詣、同廿一日還御に付、御成中御家中家來末々迄急度相愼罷在、小屋々々火之元之儀晝夜嚴重に可申付候。別而御上屋敷前通御之儀に候間、諸事其心得可有之候。尤晝夜共御横目足輕等相廻、火之元等猥がましき儀も候はゞ相改可申事。

一、御成御前日より御留守中還御迄、御平日御成格之通惣御屋鋪御門留之筈に候條、前々之通御横目所より相觸可申、右之通一統可被相觸候事。

三　月

三月十八日。諸士の武藝に秀でたる者を賞す。

〔諸事要用雜記〕

三月十九日

一、昨日左之通夫々被仰付候事。

御加増

一、五十石　河内山判左衛門

先知都合二百石

判左衛門儀、數十年武藝心懸厚、及老年候迄無懈怠致出情、藝術も達者に而、格別執心之由
被聞召候に付、如此御加增被仰付、組外ゟ被差加候。
只今迄被下置候役料知者被差除候。

御加增

一、五十石　山口佐五右衛門

先知都合百五十石

御書立右同斷

新　知　中村彥左衛門厄介人

一、八十石　中村太次馬

太次馬儀、於經武館居合師範被仰付置候處、久々心懸師範方等宜、及老年候得共無懈怠相勤
候由被聞召候付、養父八兵衛儀先年不屆至極之趣有之、重御仕置被仰出候者に候得共、格別
之趣を以新知被下之、本組與力ゟ召出。

右之通今十八日申渡候處、何茂結構被仰付難有仕合奉存候旨申聞候、以上。

三月十八日　奥村內膳

神尾伊兵衛弟

濤十郎

濤十郎儀、馬術數年入情達者之由被聞召候に付、新番組御步に被召出、御充行御格之通被下之、以來猶更相勵可申候。

當分組當御番等は不及相勤、御射手ゐ加り可相勤候。

三嶋七郎左衞門弟

半兵衞

半兵衞儀、武藝格別心懸宜、達者之由被聞召候に付、新番組御步に被召出、御充行御格之通被下之。

右之通今日呼出、頭々誘引、御横目指引仕申渡候處、結構被仰付難有仕合奉存候旨申聞、重而服相改罷出、御禮之段申聞候、以上。

三月十八日

本多大學

前田萬之助

今枝內記

篠原監物

武藝稽古多年無油斷出情之趣被聞召、厚心懸神妙之儀被思召候、此段可申聞旨御意に候。

一、生絹二疋　　河島平左衛門

御目録

一、白銀二枚充　　永井宇門

篠井善太夫

御目録　　久能秀二郎

野村半兵衛

寺西源左衛門

木村九郎

御射手　　姉崎九内

一、小判一兩　　新番組御歩　　桐山治右衛門

御目録

右人々武藝多年無油斷出情、厚心懸候旨被聞召候付、如斯被下之。右之通今日申渡候處、難有仕合奉存候旨申聞候、以上。

三月十八日　　長將之佐

佐々木兵庫家來　　小竹十左衛門

右十左衛門儀、拜領物被仰付候段被仰出候處、主家舊宅に付追而可申渡与存候、以上。

三月十八日　長　將之佐

一、左之人々學校等に而被仰渡候分。

一、白銀二枚　井口孝左衛門弟　井口覺左衛門

御目錄

一、小判一兩充　與　力　秋山平祐

御目錄　前田九郎太夫

村井重左衛門

一、金三百疋充　御算用者　松島源次郎

覺　書　松島直助

御料理人　天野權九郎

御細工人　岡　清左衛門

右人々武藝多年無油斷、厚心懸候旨被申聞候付、如斯被下之。

一、金三百疋充　長將之佐家來　乙崎六左衛門

御目錄　高田絢藏

河野義三郎
不破彦三家來　水越五郎左衞門
伊藤彌左衞門
長谷川五左衞門

右同斷。

一、金三百疋充　不破彦三家來　小野木佐左衞門
御目錄

右佐左衞門儀、武藝稽古多年無懈怠入情、格別厚心懸候旨相聞、奇特之事に候。仍之被下之。
右之通夫々御賞美有之事。

〔温敬公記史料〕

三月十九日賞秀武技者數十人。增俸或賜物有差。

十九日とするは非なるべし

三月廿七日。前田齊泰、石川郡宮腰に於いて捕獲したるクイザメを覽る。

〔諸事要用雜記〕

三月廿七日

一、宮腰浦に而捕揚候大魚、昨日町奉行より上る。今日御返、右はウキヽの樣成ものに而、

左に而はなくクイザメと云もの之由。

一名雪魚　長さ六尺計　幅三尺餘

三月廿七日。百姓の女子にして恣に尼僧となることを禁ず。

〔郡方御觸〕

近年百姓娘等之内農業をいとひ、無謂致剃髮尼僧に相成、寺庵江入込僧徒与交り、みだりの所行在之躰粗相聞、沙汰之限に候。日用如何程困窮に陷り候とも、人並之者は相應に稼を以女之道相守候こそ、人たるもの丶本意に候。併生質不具与歟、又者無據故障有之尼僧に相成候節者、夫々願出聞届之上に而爲致剃髮候振合に候。然處右振合之趣令忘却候哉、又者村役人等等閑故右樣猥に相成候儀者、惰弱之至に候。此度急度夫々可遂穿鑿筈に候得共、先是迄之儀者令用捨候條、猶以來者振合之通急度爲相心得、於其許中も得与入念に可申諭候。若其上に而もひそかに致剃髮候もの於在之者、本人者勿論親類たりとも、急度咎可申付候。右之趣得其意、夫々可申渡候、以上。

三月廿七日　　服部貞右衛門

鳳至・珠洲兩御郡組々十村中

三月。武藝稽古に執心する者の交名を定期に屆出づべきことを命ず。

〔留　書〕

武藝稽古、經武館竪師家宅に稽古共出座數、各弁子弟等之面々共、毎歳二月・八月兩度に、拙者共方ゟ觸口切可被書出候。

一、在勤之面々は、拾五歳以上三拾九歳迄可被書出候。其餘は書出に不及候得共、四拾歳以上に而も出座有之候はゞ可被書出候。無息之面々之儀は拾五歳以上年齢に無限、四拾歳以上にても都而可被書出候。

一、役懸之面々は書出候に不及候。併出座有之候はゞ可被書出候。尤子弟等之儀は、前條之趣可被書出候。

一、煩等に而出座絶而無之候者、何月より何月迄煩等に而出座無之与申儀、其趣可被書出候。

一、家藝有之面々は書出に不及候。右各弁子弟等之面々共武藝稽古出數之儀、兼而承置度候間、薄墨紙類に而も横二つ折帳面にしたゝめ、分り安き様專一に被相心得、可被書出候事。

卯　三　月

追而、當春之所は、當正月より今月迄之稽古出座數被相しらべ、來月中可御書出候事。

右廻狀筆頭より廻候事。

四月朔日。前田齊廣夫人野田山の廟所に參詣す。

〔官私隨筆〕

四月朔日

一、昨日眞龍院樣桃雲寺御立寄之上、野田御廟へ御參詣、夫より峯通り大乘寺へ被爲入候付、御歸殿後之御機嫌伺に退出直に參上、以林武左衞門相伺候處、益御機嫌之旨等以同人被仰出。

四月六日。江戸に於いて德川家慶の日光參詣中辻番所警固のことを定む。

〔江戸詰御用諸事〕

四月六日

一、日光御參詣に付辻番所晝夜侍分相詰候事に被仰渡。先年は此方樣には相詰不申に付、其儀相通候樣申含候得共、御三家樣も御同樣今度は侍分御指圖に而御差出候由に付、無是非御指出之事に致し、御小將頭江執筆より內々相尋見させ候得共、御大小將之內は火事御手當に而一人も浮人無之由に付、與力十二人・御算用者等之內十二人・御歩二人、御上屋敷・御中屋敷に而辻番八ヶ所有之、晝夜に付三人圖りにして廿四人先々頭江申渡候筈。

一、御横目今村清左衞門心付に而、別席に而、今度之御參詣には辻番處江侍分御指出之樣に承候。何分以前は無御座御樣子之事、前振被押通候儀は不相成哉と心付申聞候得共、段々先

達而より拙者にも不指出事に申込候得共、御三家樣すら御差出之事に相成候上は、御縮方之儀於此方樣御麁略被成候樣に相當り候而は、是又被對公邊如何に付、無是非右之通御指出之事に申合候段等申入置候事。

四月八日。前田齊泰再び參覲を延期すべきことを幕府に屆出づ。

〔成瀨正敎日記〕

四月十七日

一、御發駕今暫御延引被成候旨、二度目御屆書、當八日水野殿御內覽に入、御挨拶之上御用番眞田殿へ御屆書聞番持參、御屆濟候旨聞番より言上。

〔諸事要用雜記〕

四月十八日

御用番江

一、先達而被仰聞候通、御保養中に付御發駕御延引之御屆書御差出候處、今以御全快不被爲在候に付、今暫被遂御保養御參府被成度段、重而御屆書當月八日御用番江被差出候。此段可相達旨被仰出候。

四月十八日

四月十日。郡方に於いて他國より入込みたる流浪者を止宿せしむること
を禁ず。

〔御郡典〕

御領國ゑ流浪者多入込居、御郡方に止宿致し、晝は町方等へ出、或は蛇遣ひ又手づゝま等種々
姿を替、町中等徘徊致し候者、折々放火躰之儀も有之樣子に付、村々火の番人増方等之儀、
去年嚴重申渡置候處、中には心得違之族粗相聞ゑ、前段宿等致候者も有之躰、甚不埒至極に
候。向後右等之族於有之は、其者は不及申、其村役人も急度可申付候之條、得其意、夫々入
念可申渡置候、以上。

卯四月十日　　　　　　　　　　大嶋五郎右衞門

羽咋・鹿嶋兩御郡十村中

四月十三日。東本願寺末寺再建に就き立柱式を行ふ。

〔上賃屋日家榮帳〕

四月十三日、御末寺御柱立御儀しき目出度申候。

四月廿四日。大聖寺侯前田利平參覲の途金澤城に登る。

四月廿一日

一、備後守樣明後廿三日御在所御發駕、廿四日金澤御止宿被成候付、御登城之儀被仰進、御對顏可被遊哉之旨、如例御作法書等御用番被相伺候所、御取次大野御保養中に付御對顏不被遊候。依御登城御斷被成候旨可申遣旨被仰出候事。

四月廿四日

一、表向御登城被成度旨御願之奉札、御用番內匠より被入御覽、被仰出次第及返書可申旨伺有之候に付、此間も被仰進候通、御對顏は被成がたく候へ共、御登城之儀は御指支も無御座候間、其儀御勝手に可被遊旨被仰出候に付、其段返書可申上之由。右之通に付俄に御登城之御用意夫々被申談、八ッ時少し前御指支無御座候に付、如例主付中村等より御案內可申上候事。

一、八ッ時少過御登城、御口上之趣御家老萬之佐承り、御近習頭を以申上り候付、御保養中に付御對顏は不被成候得共、御懸合被進候間、御居間書院へ御通被成候樣被仰付候旨可申上旨、萬之佐へ被仰出、其段申上、御奏者番御先立仕、御居間書院へ御通、美作守御相伴に而二十五菜之御料理出、最初之御酒出候節、以當席左之通被仰進候付、主稅罷出御次之間に而御禮仕、御敷居之內二

疊目計迄立入、夫より少々すり上、備後守様御座へ一疊計下へ罷出申上る。尤帶刀之儘罷出る。申上候處、難有思召候、宜与御意に、其段申上置候。

但、罷出候上、宰相様より被仰進ますと申上候所、御座御改被成候事。

麁抹之儀に思召候得共、ゆるりと被召上候様思召候。此段可申上旨被仰付候。

右相濟、夫々御料理仝相濟候上、御家老萬之佐罷出御返答申述、相濟、御奏者番御先立仕、芙蓉之間御退被成候事。

〔宮私隨筆〕

四月廿四日

一、備後守様昨日御在所御發途、今日此表へ御着。御登城は此方より御斷之處、御伺御機嫌被成度由に而御登城、御料理も出、作州御相伴相濟。但最初於芙蓉之間、丹後守一切、播磨守初一切、（山城守は不參。）御家老中等一切罷出、丹後守罷出候處、一通り仰有之、其上に而脇へ御引立、於建様御縁組に付先達御願方御許容之御挨拶有之。其上に而御高直り一件之儀猶又宜敷遂僉議候様にと仰あり。應じ及御請。播磨守等へも同様之御様子也。七時前退出。

於建様は大聖寺侯前田利之の女

四月廿七日。前田齊廣夫人石川郡宮ノ腰等に行歩を行ふ。

〔上賃屋日家榮帳〕

四月廿七日眞龍院様御出被遊、中山に而御休。其より新町御通り濱に御出。荒町御上り、出

町御通り、其より大野江御出、粟ヶ崎御たや中飯。其より金澤堀川より御歸り。目出度。

〔官私隨筆〕

四月廿八日

一、昨日眞龍院樣御行歩に付、御歸殿後之御機嫌伺に出席前罷出、以木村三左衞門相伺候處、御懇之仰あり。益御機嫌克被成御座旨申聞也。

但、宮腰に而濱へも御出、錢屋五兵新造之船御覽被成、粟ヶ崎迄御歩行、御旅屋へ被爲入候內段々風强く相成候由。夫故兼而は御旅屋之後松原に御陣取いたし御出之御圖り之處、其儀叶不申、御旅屋より直に御戾り之由。七ッ屋口より御戾之由也。

四月。明倫堂の會讀に人持組の士の缺席屆出方心得を定む。

〔觸留〕

人持會讀欠席斷方心得之覺

一、會讀斷之紙面宛所、督學と相調可被指出候事。

一、父兄等其家之吉事。

一、父兄江戶等發足・歸着送り迎。

一、自分轉役等吉事。

一、自分冠婚。
一、武藝稽古別業。
一、武藝濱稽古年中一度之分者欠席可承届候事。
一、父母・祖父母・妻看病。
一、いとこ以上聟聟・舅病氣大切之節。
一、子・兄弟・姉妹・をぢ・をば・をひ・めひ・いとこ。
右可致看病者無之候者、欠席可承届候之條、其様子紙面に調可被指出候事。
一、先祖歴代並於家忌掛り之分年回。
一、家内死去人葬送之節。

以上

四月　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　督學

五月二日。前田齊泰更に參覲の延期を請ふ。

〔渡邊兵太夫手記〕

當五日出仕之砌御用番御演述之趣。

相公様未御全快不被成候處、次第に濕暑之時節にも相向、當時之御様子に而は、長途暑中御

旅行被成兼候に付、今暫被遂御保養、八・九月迄之內御發途被成度候。尤御快氣次第早速御出府被成度旨、當二日御使札を以公邊江御願被成候。此段爲承知申聞候事。

〔成瀨正敦日記〕

五月廿三日

一、御參勤九月頃迄御延引御願之御書案、荒井殿へ御內談之儀等聞番へ申遣置候。則御內談之御使相勤候所、當二日之御日附に而、御指出之儀等可御宜旨被仰聞候旨。且右御使人齋藤與兵衞儀、當十三日着に付、同日朝越前守殿へ御內覽之上、同日夕右御使人同道、御用番越前守殿へ御連署御指出に相成候旨。且御城下廻御行步之儀に付申遣置候趣も、荒井殿へ御內談申置候所、御用番へ御家來名前之御伺書、此頃被指出可然旨に付被申聞候由等、聞番より申上。

五月七日。京醫小林豐後守、前田齊泰の病を診す。

〔官私隨筆〕

五月七日

一、小林豐後守儀舊年之御禮幷御機嫌伺旁々下向、昨夕到着、今日登城診之上、御居間書院御緣頰に而御樣子申述、相濟候由に付、丹後守・美作守・將之佐・內膳罷出及挨拶。御家老中も

被出箬之處、刻限移り御料理出候付、其上之事に被致候由。作州は跡に自分に逢被申候旨也。
森快安へも御様子承之。

五月十日。前田齊泰能登にて捕獲したる海豹を見る。

〔成瀨正敦日記〕

五月十一日

一、能州浦に而取上候水豹生き居候分、昨日町會所より指出入御覽、今日迄御留にて御返。
金谷御殿へも入御覽候様御意に付、町同心江申談、頭へも申遣候事。

五月十二日。百姓の住宅に關する制限を令す。

〔御郡典〕

先達而被仰出を以申渡置候在方衣食住之制度、猶更無油斷急度相心得可申候。四民其職を不取失、農家者農家之分を守、古來之質朴に立戻り候得者、人々奢侈榮耀等之費も無之、自ら難澁薄く、成立に相成可申儀者上下幸甚に候得共、深く舊來之流俗に隊、次第に難澁深く相成候儀者、誠に歎ヶ敷儀。此所を厚思召被爲寄、此度御仕法被仰付候儀者、誠に以難有儀に候條、右御趣意不取失様、其方中能令會得、夫々末々江可申諭候。就中別而家作、前々御定有之儀者一統承知之通に候得共、猶更覺書相渡之候。此度之御趣意に相叶候得者、人々不朽

之可爲安堵候事。
右之趣得其意、一統不相洩樣可申渡候、以上。
卯五月十二日
御郡奉行
改作奉行
能州四郡十村・新田裁許中・山廻り中・
山廻列中・無役御扶持人中

覺

一、門構等立派に飾申間鋪候事。
一、馬場に似寄候場所之事。
一、長押作並書院床等尤無用、戸障子等並物相用可申事。
一、疊多分無緣可相用、無據分迄麁品に而緣り附可申事。
一、圍廻り之儀無據分者土塀、或者竹木之內を以垣等いたし、縮方已に相心得、飾ヶ間鋪儀少も致間鋪候事。
一、庭之儀無用之木石等取拂、植物等者農家要用之品而已差置可申事。
一、家作之儀、茶事閑様之儀榮耀ヶ間鋪類早速取拂、御用方等入用之外手廣過候分も尤取毀

ち、且臺所向に相當り候勝手者、土間にいたし可申事。
一、やね之儀成限藁・萱之類相用、萱替之時分田畠養之用を可具事。
右荒増相記之候。惣而建具・家具・屛風等に至迄右に准じ、麁品相用可申候。高多く致作配候者之儀者、內場等廣く無之而者、米拵等にも差支可申儀に候條、無味に家作取狹め申儀に而者無之、前段農家に不相當榮耀ヶ間鋪作事者、早速取毀可申、且御旅舘暨上使宿等之儀者別段申渡候事。

五　　月

〔御郡典〕

今般家作之儀被仰渡候趣に付、御尋之儀左に申上候。
一、長押と申者、鴨居之上横に打渡有之木をなげしと唱、又かもゐしばりとも申候。
此ヶ條下げ札
なげし爲取拂、尤鴨居しばり与申名目も御座候由に候得共、紛敷儀に候間、何れ鴨居之上に横木打渡有之分は、不殘爲取拂可申与奉存候。
但、町家前通り、小屋根・高窓上下幷土臺下になげし樣之横木有之者、其儘爲致置可申与奉存候。

この付札に

窓上下幷土臺下に有之横木、長押に紛敷に付不殘爲取拂候旨、重而町奉行申聞候事。

一、杉戸与申者、さんかまち廣く仕、杉之柾板抔を以張渡し、中程に廣帶さんを入候戸を杉戸与申、又帶戸与も申候。

付札に

杉戸・帶戸之分者爲取拂可申候。

一、書院与申者間之名に而、通例之書院を附書院与申候。

付札に

附書院爲取拂可申候。

一、入側与申者、座敷与緣与之間に廊下樣之物を拵、天井も張、長押も打、疊も敷、間之内同樣に仕立候所を入側与申候。右入側を當所にては緣側と申候。

付札

入側爲取拂可申候。但、間狹に付疊緣之分は、其儘に爲仕置可申与奉存候。

一、櫛形与申者、書院中敷居之下障子之内に、櫛形之塗緣を入れ申候。其緣をくし形与申候。

其外鴨居之上壁抔すかし、緣も無之分は油煙拔と申候。

付札に
櫛形爲取拂可申候。油煙拔之分は其儘爲仕置可申候。
一、さん・かまち与申者、障子板戸・杉戸抔之竪ふちをかまち与申候。上下中共入れ有之木をさん与申候。
付札に
さん・かまち塗候分は爲取拂可申候。
右御尋に付申上候、以上。
卯六月　大工肝煎

五月十三日。老中水野越前守、前田齊泰夫人の費用合力を節減すべきことを告ぐ。

〔成瀨正敦日記〕
五月廿三日
一、當十三日水野越前守殿、聞番御呼立御渡之御書附左之通、御使書共御用番より被上候事。
卷目之上御名江
溶姫君樣御住居御入用御省略方之儀、先達而被仰出候趣を以追々取調之上、向後共方より差

出候入用附屬充行を除、金三千七百兩御合力、米・金共定式御入用高都合金六千七百兩・五百俵を以御取賄相成候樣。尤其方より差出候入用減方之儀は、家來𛀁打合可取計旨御附御用人𛀁相達候間、被得其意、委細申談候樣可被致候。

一、御住居御用人へ、御用人衆被仰聞候寫左之通。

溶姬君樣御用人𛀁

姬君樣方御守殿御住居御入用御省略御取締之儀、兼而被仰出候趣を以、石河美濃守・守山主水正・石原駿助より、諸事御省略筋各𛀁追々打合取調理候。依之向後御各方入用附屬宛行を除、金三千七百兩御合力、米・金共定式御入用高都合六千七百兩・五百俵を以御取賄相成候樣可被致候。尤御各方入用減方之儀は、家來𛀁打合可被取計候。

右之通相心得、此上可成丈猶御入用相減候之樣、厚勘辨いたし、往々迄も不相馳樣心懸、臨時御入用之儀は先達而申立候通、別段不申立樣可被取計候。尤此段御名𛀁も相達候。

右之通堀田攝津守殿御書付を以被仰渡候。

五月十三日　　久留孫太夫

石川三太夫

御名は松平加賀守

五月廿四日

一、去十三日水野越前守殿へ聞番被召呼、御住居御入用之儀、向後御附属御充行を除、金三千七百兩御合力米・金是は公儀より御合力之事。とも、定式御入用高都合金六千七百兩・五百俵を以御取賄相成候樣にと被仰渡、其段江戸より申來、御用番方に而今日披見。

但、先達而帳面之高左之通。

金八千三百四十六兩一分・銀一兩二分六厘八毛　御膳部を初御附女中御充行諸渡物等御入用

内金三千六百九十五兩一分・銀九匁七分二毛御入用　御内輪より御附女中并御附御用人初御侍衆迄年中御賄方

四千六百五十兩三分・銀六匁五分六厘六毛減

減方無之分

金四千三百三十二兩・銀三匁三分六厘

金三百九十六兩・銀八匁

五月十三日。御算用場奉行石野右近以下の辭意を却下す。

〔官私隨筆〕

五月十三日

一、昨日被仰出之趣に付、御算用場奉行四人へ連名充所に而申談儀有之候條、明日四時過可有登城旨紙面、昨日遣置候處、今日遠藤數馬は風邪に而登城無之、殘三人登城に付、三人一集呼立、被仰出候趣申談、覺書相渡候處、御用にも相立不申候處、結構被仰出難有仕合奉存旨申聞也。數馬方へは各より可被申談旨申入候。御請差出可申哉と之儀に付、其儀には不及候。乍去遠藤御請之趣は可被申聞旨申入候。

石野右近
有賀寬兵衞
遠藤數馬
坂田往來

各當時御勝手向御省略等之儀、見留之品等も無之被奉恐入候付、內存之趣覺書被出候。委曲相達御內聽候處、無據儀と被思召候。乍去指當り奉行御指替之思召も不被爲在候間、幾重にも申談相勤可申候。御儉約幷御運方等之儀は、猶又精誠僉議之上、存寄之通無泥申上候樣可申渡旨被仰出候事。

五月十三日。京醫小林豐後守に能を觀覽せしむ。

〔官私隨筆〕

五月十三日
一、今日御能被仰付候付、望次第拜見被仰付旨御用番演述。卽座御禮申述候。
一、九半時過御能初り、七半前濟御禮、以杉浦庫太申上候。

張良 六兵衛　小袖曾我 權進　船辨慶 宮門
歌仙 方藏
射狸 八三郎

右御能は小林豐後守へ拜見被仰付候也。豐後守ワキ正面に而拜見、頭之方に別に仕切有之躰也。

是月は大盡なり

五月十七日。京醫小林豐後守歸洛す。

〔宮私隨筆〕

五月十六日
一、小林豐後守登城書過なり、逢候而も宜由に付、丹後守・美作守罷出及挨拶。但明日發足歸京之旨也。京都より持參之由に而、所持之靑玉如意幷曲玉數あり此頃御覽候由に而見せ被申、見物す。

五月晦日。米の俵裝を改善する爲御藏所に見本を備付くべきことを命ず。

〔司農典〕

御收納米俵拵方之儀に付、於御改作所に御入念被仰談之趣有之、昨日諸郡寄合之上、別紙覺書廣瀨氏演述之上被相渡、寫廻達仕候。就而者去年礪波・射水兩郡俵拵等大に宜、大坂表に格別御直段も立直り申程之事に付、昨日右兩郡江者御賞美御紙面出申候。加州・能州者今以近來不熟年之習俗に而、俵・繩以之外不宜、別而中に者古俵等相用候向も有之、於大坂表に御外聞にも拘り申族に付、此度之儀者一通り觸渡等に而は行屆間敷。仍而此節より一郡切人々格別に存込、勿論俵拵吟味方共爲棟取、肝煎与歟算用聞列与歟之人々爲主附候而成共、先づ一組切見本俵・繩拵村々江申渡、御藏所々々にも見本俵指出置、格別に相改候樣、組裁許人々厚世話いたし、尤諸代官・分役中及納手代江も嚴重申談、當御收納米より格段仕癖相改候樣、幾重にも重念示合可申旨、安田新兵衞樣より諸郡へ被仰談に御座候間、左樣御承知、尙更別紙覺書之通見本俵等御指出方、夫々御手當可被成候。餘者重而御互寄合之上、御相談仕度奉存候、以上。

卯六月五日　　　　金澤表より　高島庄助

口郡組々裁許宛

御藏入御收納米繩・俵等之儀に付御改作所御談之覺書

一、御收納米俵拵等之儀に付、度々被仰渡有之所、御郡々御藏ヶ所にも寄、繩・皮甚麁略之拵

方、別而礪波郡拵仕立甚不宜に付、追而譯而被仰渡も有之所、何れも格別に遂詮議、繩・皮等致吟味候所、當時に而者至極宜相成、大坂爲御登米被仰付候處、一統其取沙汰も宜候故、御直段にも響申程之儀に候。左候得者御郡々御米撰方を始、俵拵等精誠を盡候においては、何分出來方宜相成儀に候間、以來其御郡御扶持人を始、裁許々々何れも心を用、格別に存込、俵拵方等相改候樣譯而被仰談候。

一、繩之儀格別太きを好候儀に而無之、いかにも藁を能打、堅くなひ立、大躰程能所有之物に候間、是等之處何れも申談、一樣に相成候樣罷成度被仰聞候。

一、俵之儀中に者至而惡敷古菰を相用、上皮者幅狹に而搔合せも相調兼、尤長も寸不足に而、口蓋之所も不行屆故、見形惡敷相成、惣躰之俵拵不出來に相見え申儀に候間、菰編立方も手厚にいたし、尤藁吟味いたし候得者、何も宜敷相成申儀に候間、是等之所無手拔爲相仕立候樣被仰談候。

一、俵菰目形四百四十目、繩目形一俵仕立候縱横入用之分丈に而目形三百目、成限堅くなひ立不同無之樣いたし、繩・皮共目形相記、見本役所溜迄御指出之上、御改作所ゟ上可申事。右之通御談に候得共、猶更御談之外御心附之上者、いかにも出來方宜相成候樣、加役之者相立、格別之詮議有之候樣御心得可然存候事。

卯五月晦日

五月。馬匹の他國出通行札料に關して通牒す。

〔御郡典〕

巻目之上、林源多郎・吉田藤馬江

他國出通行札料之儀、是迄牡馬は二百銅に候之處、今度相改、以來三百銅に申渡、牝馬之儀は是迄之通三百銅取立、且當年より四歳迄耳札附之間、駒賣買之節一疋に付賣主より銀一匁、買主より一匁合而二匁取立、耳札等も爲捺度旨等被申聞、詮議之通申渡置候得共、重而詮議之趣有之、右通行札料牡馬之分も、是迄之通二百銅爲取立、駒賣買之節一匁宛取立候儀も御指止に候間、被得其意、諸町奉行等へ各より可被申談候事。

卯　五　月

六月四日。本鄕邸御廣式の經費を節減する爲老女二人にその主任を命ず。

〔成瀬正敎日記〕

六月四日

一、江戸表御本宅御廣式御省略方之儀に付、老女之內兩人計主付被仰付候はゞ行屆可申哉之旨等、大嶋忠太夫等心付之趣申上候付、其段相伺、左之兩人被仰付候付、今便左之覺書江戸

表森七郎左衞門等へ遣申談樣申遣候事。

佐山

岩尾

御勝手御逼迫に付、諸事御省略之儀每度被仰出置、諸向共由斷無之候得共、今一篇御儉約被仰付候付而は、御內輪向御進物も御差略之儀昨年仰出、追々申談有之通に而、聊由斷有之間敷候へ共、御奥向御用多端之儀故、右御用佐山等主付被仰付候條、尙更萬事綿密に心得、御儉約之筋相立候樣心付可申候。今度御住居御儉約之儀に付、段々公邊より被仰出、御定金等も相極り候事に候得ば、御住居においても何廉御詮議方も可有之哉に候之間、御住居向之儀も老女衆等より示談も有之候はゞ、宜示合可申候。將又御子樣方にも諸事御質素に被爲在、萬端御事輕に而、御儉約之筋相立候樣、右之通可申談旨被仰出候事。

六月

六月六日。前田齊泰の病未だ全く癒えざるを以て、年寄等に特に政務を怠らざるべきことを諭す。

〔御親翰拜寫〕

天保十四年卯六月九日出に、同月六日御親翰被渡下、承りに而御用番播州より到來拜寫致し

察討は察當

置候事。
我等不存寄大病相滯、去夏以來其方中可爲心痛、療養僉議方も行届、追々快方を得大慶之事に候。滯中政事向指圖方別而不行届、何廉其方中骨折之事与存候。于今養生而已相暮、萬事指圖方不行届候に付、公邊萬端御改正に而、去年以來段々被仰渡之趣共有之、就中惰民歸農之儀、幷他國稼之者取締方之儀、何茂油斷有之間敷候得共、若此後取締方不行届儀有之、自然御察討抔有之而は、等閑に相當無申譯候條、郡奉行・改作奉行江入念遂僉議候樣可被申渡、今度町・在家作之儀抔も被仰渡候。是等は豫而其方中心付之品に候處、此方指圖方手後に相成、意外之事に可被存候。此後萬端無油斷指圖におよび可申筈に候得共、大病後別而不得行届、自然与手後に相成べく候條、我等全本復までは其方中猶更無油斷被相心得、諸事僉議方延々に相ならず樣有之度事に候。將又參府も追々延引相願、致迷惑候得共、脚部之痺未全不宜、步行茂不自由、容易には本復にも至り兼可申躰致心配候。吳々我等保養中は、別而其方中諸事無手後樣可被相心得候。是等之儀は譯而不申入共、尤油斷無之事に候へ共、何となく政事向心掛に存候に付、此段申入候條、宜被申合候樣致度候、以上。

六月六日

年寄中

右御親翰丹後守・御家老役江も拜戴申談所、奉畏候旨等同樣申聞候。播磨守殿等六人より被上候由下物も來候。是分略致し不留置候事。

六月十八日。諸士の頭分等に特に儉約の實行を令す。

〔早川氏藏文書〕

御家中儉約之儀に付、去年被仰出之趣、就中頭分以上は勿論、支配等有之面々者、其下に相立候人々目當にいたし候儀に付、急度相改不申而者、畢竟組中等指引方も行屆兼申儀候條、右被仰出之趣、且是迄段々被仰出置候風俗方之儀も、向後尙以嚴重相心得、組・支配無油斷可致指引旨被仰出候。猶又大要別紙之趣相心得、後々相弛不申樣情に入可致指引事。

右之趣被得其意、諸頭中等組・支配有之人々江も、各より可被申談候事。

卯　六　月

儉約之儀に付去年被仰出之趣は、先前々より被仰出之趣を以、大要之御ヶ條而已被仰出候御事に候。元來一統難澁を被思召、何も暮易き樣に被仰付度御趣意に而、雖有儀候條、士中心得方御趣意通無違失相心得可申候。

一、當時平生暮方、人々奢侈と申程之儀も有之間敷候得共、時勢に隨ひ人情浮華に者流易儀に付、急度心得無之而者、難澁之內心ならず不都合之事共も出來可申儀。左候而者勤仕向に

も指支、且武器之嗜をも相欠、子弟文武之稽古も勵せがたく相成候段、無本意次第に候。御上御難澁に付、近年打續過分之御借上等も有之、別而難澁之折柄、暮方等不都合有之候而者、末々取續も出來申間敷段勿論に候條、此處能々相心得可申事。

一、婚禮幷養子引移之節、衣服諸道具用意等過分に費用相掛、數年之取目を一時に費し候儀、一統之風俗に成來り、殊之外身躰之障に相成事に候。向後諸道具は勿論、衣類幷身廻り之品たり共、要用之外者堅持參仕間敷候。是等は引請候方に急度心得可有之儀に候事。

一、御家中妻女等禮服之儀、地黒幷小ぢらし之外は相用申間敷候。間着も縮緬より宜品は可為無用候事。

但、御歩並之者は地黒無用、小ぢらし迄相用可申事。

一、先祖年回等之節茶湯之儀、如何にも厚執行致し度可存儀は尤に候得ども、彼是人多に宅に相招、料理等指出候儀抔者不入費に候條、成丈輕く取扱候而可然事。

一、吉凶之時分夜食与名付、一類等より料理を送り候得共、一類を初出入之者迄も申遣振廻候儀抔も有之躰、双方不益成事に候條、以後指止可申事。

一、惣而殺生に付而無用之費多躰不心得之儀に付、急度相改可申旨等、去年申渡置候通に候。其時節にも至り候へ者、萬事を抛殺生に而已心を盡し、且殺生道具抔も榮耀之致方有之、失

樂舞は亂舞

脚多躰心得違之儀に候。殺生之儀は身堅之ために候得者、増長不致樣相心得可申事。

一、參會之儀に付度々被仰出、且前々より菜數之御定も有之處、兎角等閑に成易、近年別而飲食器用を競ひ合候樣之風俗、不可然事に候。急度相改可申事。

一、茶會・樂舞・家作・庭作り之物數寄、雜費不少向も有之躰、此等急度心得も可有之事。

一、役當り武器之心得、尤油斷有之間敷事。

一、文武之心掛宜敷人々、又は被仰出を等閑に打過候族等之儀、尤無泥頭・支配人可及言上事。

右等之趣急度相心得、萬端右に准じ、質素儉約之心得可爲肝要儀、組・支配無油斷指引可有之候事。

六　月

一、右之御書立天保十四年六月十八日小頭所に而談有之、御請致判形候事。

六月廿三日。羽咋郡塵濱村に三兒を生みたる者あるを以て扶持米給與の件を議す。

〔成瀨正敦日記〕

六月廿三日

塵濱村は羽咋郡なり

一、能州鹿嶋郡塵濱村頭振八九郎妻に男子出生いたし、福之助、綠之助、春之助与相名付、母子共達者に罷在候旨等、御郡奉行より相達し、近例之通一人ニ一人扶持充可被下哉之旨、御用番より伺有之。

〔每日帳書抜〕

七月四日

一、右三子之内兩人病死之由頭書付差越候處、前段御扶持之儀申渡与途中行違に相成候由。前々三子出生候段及達、いまだ御扶持被下候段申渡以前兩人致病死候へば、殘一人へは御扶持不被下振に候得共、今度は一旦御扶持被下候段被仰渡之上は、前振とも違可申哉之旨等御算用場奉行紙面出、支配人へ申渡候上之儀にも候間、殘候一人へ十五歳迄御扶持被下に而可有御座与窺、窺之通被仰出。

六月。前田齊泰、領內海岸の防備を更に嚴にし、鹿島郡所口に人持組の在住を置く等のことを議せしむ。

〔御親翰留〕

六月

士二十人云々本の儘脱文あるべし

一、海邊等御手當方今一篇御手厚之儀、今般從公儀被仰渡、就夫御內用方も段々御詮議之上、先年松雲院樣被定置候趣等夫々申上候。所口在在之儀は、當御代初にも一往御詮議有之候處、其節年寄中御請之趣に而、先御猶豫被成置候。右委曲は、御內用方に御留も有之候。今度段々被仰渡候付而は、何れ御三代樣御取調理も有之處、當時豫而御書出置候分迄に而は御手薄之儀、其上急事を告、臨時右御書出置之御人數出張迄は、何れ其所に兼而御備置之御人數に而相防可申處、御手廣之海邊御備も不至に付、今度夫々御內存之趣に可被仰付、且近年越中筋御郡奉行引越も相止候得共、是等も先年之御內存に相觸候付、是又先規之通引越に可被仰付旨等、左之通御親翰御用番被召爲御渡被遊候事。

公儀より被仰渡候趣に付、海邊手當方之儀段々爲取調理候之處、能州之儀は第一之海國、其上奧郡に而は城下迄道程も餘程有之候處、手配甚手薄に候間、所口に魚津在住之振に而人持組之者並士・與力共指置可然候。右箇所に爲郡代人持組之者指置候儀は、松雲院殿御調理にも有之候條、旁此度取極可然樣存候。常之勤向之儀は魚津在住同樣申付可然、尤永續之事に候條、入念被遂僉議可被申聞候。猶更此外各心付之儀可被申聞候。

一、所口に指置候人持組之者、七・八千石之身代に候得ば、士爲相詰不申共、與力五人計爲詰候へば、士二十人之爲相調理置候而も宜候へ共、永續之事に候へば、身代も難取極、依而

士十人計指置不申而は相成間敷存候事。

一、郡奉行之儀、最前之通り小杉に兩人、岩瀨に兩人爲引越置可申、杉木に兩人相增候儀尤不苦候。能州郡奉行之儀は、前々通り口郡一体に而兩人に可申付、是は以前より引越に而無之候得共、以後輪島へ兩人共爲引越置可申、宇出津には山奉行兩人爲引越置可申、名目は郡奉行と相調置候。猶夫々可被遂僉議候事。

一、本吉之儀は、臨時加州郡奉行指加可申事。

一、宮腰町奉行之儀は、前々より船手頭之取調理故、物頭と爲調置候事。

一、郡奉行江附置候足輕之儀は、郡附足輕・同手替幷山廻足輕指加、其上不足之分は尤割場附足輕指加可申事。

一、遠見番所金剛崎・輪嶋・福浦此三箇所に爲建可然、猶可被遂僉議事。

一、三州船着之箇所並淺深、且城下まで之里數取しらべ、跡より爲書加可申事。

〔御親翰留〕

朱書。令披見候。別紙に申出候。

公儀より被仰渡候趣に付、海邊御手當之儀、段々御取調理被仰付候處、能州之儀は第一之海國之上、奧郡に而は御城下迄道程も餘程有之候處、御手配甚御手薄に候間、所口に魚津在住

朱書は前田齊泰の批なり

之振に而人持組之者、並與力共被差置可然候。右箇所に爲郡代人持組之者被差置儀は、松雲院樣御取調理にも有之候條、旁此度御取極可然樣思召候。常之勤向之儀は、魚津在住同樣被仰付可然、尤永續之事に候條、入念遂詮議可申上旨等。其外御郡奉行引越等之儀に付、先達而段々被成下御親翰何も奉拜戴、被仰出之趣奉畏候。右所口に人持組之者被差置候儀、文政八年御僉議之趣有之、其節私共僉議之趣申上候儀等、委曲別紙留帳之通御座候。然處御手當等之儀、是迄よりは一段御手厚御心得、御人數增等之儀、去年從公儀段々被仰渡之趣も御座候間、此度所口に魚津之振を以、人持組之者被差置候儀被仰出候通被仰付可然と申合候。依而人撰之儀僉議仕候處、左之者被仰付可然哉。

奧野主馬佐

一、御郡奉行等之儀、先頃奉窺候通、御算用場奉行ゟ詮議仕候處、夫々別紙之通申聞候間、御郡奉行最前之通小杉に兩人、岩瀨に兩人引越之儀に被仰出之通被仰付に而可有御座候。能州之儀は御算用場奉行僉議之趣も尤に相聞え申候間、四郡一躰に而御郡奉行兩人に被仰付、輪嶋に罷在候山奉行共儘に被成置、御郡奉行者右箇所に出役所相建、每年海路通船有之時節中、一人充代り合相詰候事に被仰付、山奉行共兩人に被成置、且正院村に罷在候奉行一人宇出津引越に被仰付、御郡奉行廻村等之節折々見廻り候事に被仰渡置に而可有御座哉。永續之

事故、御奉行兩人に而は輪島に交代詰切申儀相辨申間敷旨、御算用場奉行下札之趣に御座候間、成丈代り合相詰候事に可被仰渡置候哉。

一、遠見番所之儀、被仰出之通金剛崎等三箇所に被建置に而可有御座候。併福浦之分は御算用場奉行申聞候趣に御座候間、千ノ浦に被建置に而も可有之御座候哉。

一、所口在住之儀、五箇年計に而交代被仰付候方可然哉に候得共、然時は魚津等も同様に不被仰付而は相成間敷哉之旨等、文政八年詮議之趣別紙之通に御座候間、年限不極引越被仰付、魚津在住も引越に被仰付、今石動之儀は是迄之通被成置に而可有御座候哉。

一、所口在住被仰付候は、魚津之振を以、奥郡盜賊改方御用被仰付、同所町奉行奥郡盜賊改方兼帶之儀は御指省被成に而可有御座候。是迄右改方手先小代官等罷在相勤候得共、引分り候時は兼帶に而は差支可申哉之旨、文政八年詮議之趣に御座候間、魚津之通、所口附與力定役五人被仰付、足輕之儀は是迄所口附足輕十人に而盜賊改方御用相勤罷在候得共、公儀ゟ御書出足輕三十六人と相成候儀に御座候間、三十六人可被差置候哉。

一、所口に被差置候士之儀、被仰出候通拾人計被指置可然奉存候。附屬之御用も有御座間敷候間、河原山等口留御用之振を以、三品御番人之內、繰々每年海路通船有之時節中相詰候儀に被仰付可然哉。

一、御郡奉行へ被附置候足輕之儀は、御郡附足輕等被差加、其上不足之分は尤割場附足輕差加可申旨奉畏候。夫々御治定之上は先々へ申渡、足輕手配方爲書出詮議可仕と奉存候。

右之通僉議仕奉窺候。私共外に心付申儀も無御座候。尙更被仰出次第奉心得候。別紙兩品入御覽申候、以上。

六月五日　本多播磨守等十一人

本文は前田齊泰が前諭を删潤し以て再議に附したるなり

別紙

異國船手當方之儀、段々相考へ候處、永續之事に候得ば、其手配方嚴重申付置、多分は臨時出張足輕等も、臨時懸渡候事に不申付而は、常之費不少儀と重而存付候。

一、所口郡代之儀は、能州改方爲相勤候へば、常之勤向も有之事に候得共、同所附士之儀は、根元魚津之格に而在住之取調理に候處、先は爲相詰候事に申出候へ共、魚津馬廻と違、詰中支配も六箇敷、且常之勤方は一圓無之、如何にも縮方嚴重相立置不申而は、萬事之憂も可有之、此所甚如何敷、就而は追而在住申付候迄、先づ欠成に而臨時可及指圖候間、其取調理に而可然候。

一、魚津並所口郡代、當時引越に不申付共、先づ見廻り之趣に而、毎年海路通船中四・五十日充爲相詰可然。

本文は年寄が前文藩侯の諭示により再議の趣を具申したるなり

一、輪嶋之義、書出方は別冊之通に而、山奉行一人爲引越置、海路通船中、能州郡奉行兩人に而代合爲相詰可然候。

但、若自然異國船渡來等之儀候得ば、郡奉行之內一人は、宇出津江出張之筈に申渡置可然候。

一、宇出津之儀も書出方別冊之通に而、山奉行一人爲引越置、臨時郡奉行一人出張、足輕も其節懸渡候事に申渡置可然候。

一、本吉之儀も宇出津同樣之事。

一、所口郡代之儀は、事新た之儀に候間、附屬與力・同心之儀、先づ指當り常之用向且縮方辨候程、成丈け人少に爲引越、不足之分臨時懸渡候事に申渡置可然候。

一、所々郡奉行江附屬之足輕、一箇所に先十三・四人充有之候へば宜、其餘不足之分臨時懸渡候事に申渡置可然候。

右之趣被遂詮議、存寄も候はゞ可被申聞候。內僉議治定之上は、園方之儀前々之通、成瀨主稅等より聞番へ可爲申談候事。

又別紙

異國船御手當方之儀、段々御考被遊候處、津田權平被仰付可然被思召候旨御意之趣、何も申

談僉議仕候處、被仰出候通知行高之儀にも御座候事、權平被仰付可然奉存候處、萬石以上之人々、定火消之外役懸り被仰付儀見當不申、人品相應に候得ば直に御家老・若年寄被仰付候旨等、天明三年申上候趣別紙寫之通に御座候故、一往奉申上候。併以思召權平被仰付候儀は、私共存寄無御座、被仰出次第可奉心得候。

朱書。所口郡代は草創の事、存寄有之候間、權平可申附候條可被申渡候。

朱書は前田齊泰の手批なり

六月。町人に武藝を教授するを禁ず。

〔雜事日記〕

町人共從來共產業を守武術稽古不致筈に候處、當時世上武備盛に被行候に隨ひ、町人共之內稽古致し候者茂有之、師範者茂中には其望に任せ町人共江教授致し、免許目錄など差遣候向茂有之趣相聞、如何之事に候。向後武術師範之者、町人共江其道を教授致し候儀一切可爲無用候。

右之趣向々江可被達候。

六　月

七月六日。郡奉行、十村以下の家作にして法に觸るゝものを撤すべきことを命ず。

振は觸の誤にして牴觸の義

〔留　記〕

衣食住等之儀に付、先達而從公儀嚴重被仰渡之御書付寫を以、其時々申渡置候通に候。然る內家作之儀、於御郡方に御定に相振候家建造作も有之體。亦中には外見左のみ見立不申共、造作榮耀飾ヶ間敷向も有之樣子。就而は今般格別御改政之御時節、段々被仰渡之趣相觸、追々相改候樣申渡置候得共、今度猶更被仰出之趣も有之候條、先は其元中速に相改、御定に相振れ候品々、早速取拂可申。尤追々申渡品も可有之、且亦村々一統ニも、嚴重可申渡候得共、農隙見合之御趣意も御座候儀。尤拙者共手前に而詮議之趣も有之、其元中へ先日取拂方申渡候。然上は自然等閑之族有之に於ては、役筋も有之段々目當にも相成候儀、別而不及用捨之沙汰に候條、能々心得可有之候。若亦取拂方辨兼候品有之候はゞ、申聞次第可及指圖に候。右等之趣夫々得其意請書早速可指出候、以上。

卯七月六日　　　　郡奉行　大島五郎左衞門

口郡十村・新田裁許・山廻中

七月八日。幕府、加賀藩に預所としたる能登の地に本年より三ヶ年の期限を附することを告ぐ。

〔都鄙の嵐〕

一、左之通水野越前守殿御宅へ聞番御呼立、御書付御渡被成候由。七月八日

松平加賀守

能登國御預所高壹萬四千石餘、無年限に而御預被置候處、今度改而當卯年より來々巳年迄、三箇年期を以是迄之通り被成御預候。

〔近敦日記〕

七月十八日

一、當月□日御用番ゟ聞番御呼立に付、左膳罷出候處、能登國御預地壹萬四千石餘、是迄無年期に而御預被置候得共、當卯年より來巳年迄三箇年、是迄之通御預地に被成置候旨、御書付御渡之旨に而、早飛脚に而到來、公儀御用播磨守殿より昨日被入御覽。是によつて何と歟御願立之儀被遂詮議候樣、今日以織人、播磨守へ先被仰出置候事。

〔成瀬正敦日記〕

七月二十日

一、御預所三ヶ年期御預に被仰渡候付、被仰出之趣に付、年寄中僉議之趣等江戶表へ申遣候返書、目先只今之所は御承知之御屆有之、其節追而御願筋も可有御座哉之旨等、先聞番名前

甚之丞は荒井氏

に而御届置可然旨等、播州殿より被申上、右下物も入御覽、今便被申遣候由。

〔成瀨正敎日記〕

八月八日

一、能州御預所三ヶ年期御預に相成候付、追々御願之筋も可有之候間、先其段聞番名前之御届書指出置候樣被仰出之趣等、先便年寄中より申來り、聞番へ御家老中より申談候へ共、其砌荒井殿承り合置候趣も有之。右御懸りは田中休藏殿に付、御同人方へ及御內談見候所、今般御改は諸家樣御一同之儀、被仰出候而も其御詮有御座まじく、しかし御家格にも障り候品は、被仰立候は御僉議も可有御座哉に候へ共、夫程之御品にも無御座候間、被仰立候而は却而御宜かるまじく奉存候旨被仰聞候付、其段庄兵衞殿等へ相達、御届方は先相見合置候間、爲承知申越候旨、左膳等より御紙面申越候事。

〔成瀨正敎日記〕

八月十七日

一、御預所今般御年季御預に被仰出候付、御願立方之儀左膳、甚之丞殿ゟ龍越候序に御內談之趣有之、いづれ只今之所に而彼是被仰立候而は、却而御宜かるまじく、來年に至り候而諸家樣御願振等も御見合、又御願方も可有之哉。いづれ只今之所御取締方第一に御心得之方

可宜旨、極内々被仰聞候旨等、左膳より庄兵衞殿等へ相達候旨に而、御用番より申上る。

［江戸詰中御用諸事］

八月八日

御預所之儀聞番方留に有之。

慶長五庚子年關ヶ原御陣前、土方勘兵衞雄久二代目利長いとこに而、關東より御使に毎度往來有之候に付、爲合力越中國新川郡之内に而壹萬石遣す。勘兵衞後に河内守に任ず。關東に奉公、慶長十三年能登國に而壹萬石替地遣、土方氏代々領主之所、土方伊賀守子息無之によつて、弟林助之進を養子に被相願、いまだ被仰出無之内、其從弟内匠を養子とせんと被致候を、助之進承傳被及公訴候付、助之進は藤堂佐渡守殿へ御預、兄土方刑部は松平遠江守殿へ御預、刑部子内匠は八丈嶋江流刑、伊賀守は榊原虎之助殿江御預、家來四人殺害被仰付、右領分壹萬石御公料と相成る。貞享元年九月四日之事也。御代官日野小左衞門殿御支配處に候處、享保七年六月廿八日九代先加賀守代中、御預地に被仰付候段、水野和泉守樣被仰渡候。

一、慶長十九年三代目利常御判物頂戴之節、加賀・越中・能登三箇國一圓被下。

一、同年四代目光高頂戴之御判物も同樣之事。

一、寛永十一年高辻帳書上候節は、能登國總高之内壹萬石相除書上候哉、右壹萬石は御判物

先加賀守は前田綱紀

同年とあるは誤なり

之外に相成居候得共、又正保年中書上候節は、土方領も結込二十二萬五千六石一斗五升と書上、寛文年中書上候節は土方領引去、二十一萬千四百三十二石八斗四升と書上候。

七月十日。家中奉公人等の酒店その他に於いて强請し又は騷擾するものあるを戒む。

〔每日帳書拔〕

七月十日

一、御家中家來末々之者等、酒店或は商家へ立入、品物等ねだり取、中には酒狂之躰に而及口論、商家に難題を仕懸候儀等多有之躰に付、主人々々より急度可申付旨等、今般一統申渡候通候。小松在番中には、家來末々之者於同所町方も、右同樣之族有之躰候條、是又急度可申付旨、小松御城番へ申渡候事。

〔留書〕

御家中家來末々幷浪人等下々之者、酒店或商家江立入、品物等ねだり取、中には酒狂之躰に而及口論、商家之難儀を仕懸候儀等多有之由に候。近年一統申渡候趣茂有之、又候猥りに相成不法之儀に候條、右躰不埒之族無之樣、家來末々之者江主人々々より急度可申渡候。其上にも不法之者有之候得ば、町奉行等手先足輕差向爲召捕候上、品に寄嚴重可被仰付候事。

右之趣一統可被申談候事。

卯　七　月

七月十九日。旱天なるを以て雨乞を行はしむることを議す。

〔官私隨筆〕

七月十九日

一、頃日照續候付、雨乞之儀上より申渡可然哉と申入置。

七月廿二日。前田齊廣夫人の疾病瘧と治定す。

〔官私隨筆〕

七月廿三日

一、播州より之紙面大略。

今日も――に付、眞龍院樣御容子之儀今朝内藤勘兵衞罷出申聞候は、昨暮より少々御熱氣御發、今曉迄餘程御熱勢被爲在候。學方相診、夜前に而三度御發之儀、御瘧に被爲在候旨申聞候由。今朝探元・學方相診、今朝は御熱も御醒被遊、御心持等も御宜御樣子に申聞候由御座候。今日より御前よりも毎日御近習頭を以御伺之筈に被仰出候由。頭も今朝何も御機嫌伺に罷出候由に付、私共にも罷出候而も可然哉と勘兵衞へ内談仕候處、平日にも罷出候事に候間、

本多播磨守
奥村丹後守
共に御廣式御用

隨分可宜、節々罷出候には及間敷旨等申聞候付、退出より金谷御殿へ罷出、以田邊左兵衛相伺御機嫌、快安詰合候付、猶御樣子相尋候處、御清瘧に而、只今之所隨分御宜旨申聞候。召上り方少く被爲在候へども、御平日すら少く、御風氣にも被爲在候へば御減食被遊候事、格別御勞れ被爲出候樣之儀に而は有之間敷旨申聞候。今朝御水目共御煮返し廿匁餘り、晝頃御握飯四匁三分之分二つ被召上候由。御藥は九味清脾湯御轉方仕候旨申聞候。尤探元・學方等も同意之旨申聞候。今日は朝夕快安・探元・學方相診、御發り日には學方・快安之内夜中も相詰候樣申談候旨、左兵衛申聞候。頭は兩人充御杉戸之建候迄相詰候由に申聞候。貴所樣今日御出無御座事、御紙面にて御伺も可有之哉と左兵衛へ相談仕候處、夫には及間敷哉と存候旨申聞候。先以清瘧に而恐悦御座候。——私伺に罷出候事、明日之御樣子に寄、隔日二日拔位に罷出候而可然哉と奉存候。猶御相談申上候間、思召被仰下候樣奉存候。

七月廿三日　本多播磨守

丹後守樣

七月。幕命により異國船の江戸近海に渡來したる際加賀藩より出張せしむる人數等を屆出づ。

〔成瀬正敦日記〕

七月十九日

一、異國船渡來之節打拂方等之御手配御書出之儀、去年御書付相渡り居、重々御内用方暨年寄中江も品に寄御僉議有之、大躰就御治定、御帳冊御繪圖暨御屆書下物に而、江戸表聞番へ申談、猶又宜取計御屆仕候様可申遣旨被仰出、今便夫々申遣候事。

〔公私日記〕

天保十三年九月大御目付衆より御觸達に付、同十四年土井大炊頭殿江御屆。

異國船向後江戸表近海江渡來候はゞ、臨時警固等可被仰付、其手當豫而可心得旨、先達而被仰渡候。右は若警固等被仰渡候得者、江戸表詰合之内を以見計人數可指出心得に御座候。鐵炮之儀、小筒は手當御座候得共、大炮之用意無御座候。此段御屆申達候、以上。

七　月　　　　松平加賀守

八月廿四日御勘定奉行衆より御城中之口へ御呼立、御尋之趣有之候に付左之通御屆。

異國船向後江戸表近海渡來候はゞ、臨時警衛等可被仰付、其手當豫而可心得旨、先達而被仰渡候に付、加賀守より土井大炊頭様へ御屆仕置候處、猶又軍器等之儀御尋之趣承知仕候。右者尤軍器等差支不申候。鐵炮之儀は大炮之用意不仕候得共、小筒用意仕、何等指支申儀無御座候。此段申上候、以上。

〔成瀨正敎日記〕

八月十二日

一、異國船渡來之節手當方々御屆書、此間前月聞番御懸黑井大炊頭殿持參御指出之所、江戸近海渡來之節之御屆方は御請取被成候。御手當方之御屆之內、船附場所海淺深間數等御書出無御座候間、巨細に御書加御指出可被成旨に而、御返被成候旨、昨便聞番より申越、御草等相返る。

七月。再び郡方に家作の制限に關して令す。

〔御郡典〕

覺

一、床緣之儀、都而塗緣之分爲相改可申候。塗緣に無之とも、宜品一切無用之事。

一、戸・障子幷唐紙類之さん・框、煤抔に而色附分は不苦、塗に似寄候分も爲相改可申候。

一、茶席同樣与申儀、床附或は物好之構方抔有之、都而茶席之構有之分、一切相改させ可申候。一と通り小間に爐を切、炬燵抔致候分は不苦候。

一、門・玄關樣之物取毀之儀、上使宿或は御旅館、暨御兩家樣御宿之分は、平生通用口にも無

之、御止宿等有之ため建置候儀に付不苦候。町並に罷在候町醫者、或は町家に罷在候侍等之儀は、追而可被申渡候。且亦町端抔に有之茶屋路次入口等に有之分、塀重門同様之分は不苦、其餘は爲相改可申事、以上。

卯七月

〔御郡典〕

家造作之内取拂方等之品々奉窺帳

口郡

一、御扶持人・十村等始、末々百姓家作等之内、長押・書院・欄間・櫛形・彫物、入側附幷床縁塗候分取拂可申事。

一、開戸之門曁長屋作・玄關・式臺構、幷茶席に似寄候閣は取拂可申事。

一、塗中帶戸は勿論、都而さん・かまち塗候戸之分取拂可申事。

一、天井之儀、合天井幷廻縁竿塗候分は取拂可申事。

一、障子之塗縁、幷金銀砂子等之唐紙、且麁書に而も繪唐紙は取除可申事。

一、金銀等目立申張付、幷違棚・袋棚等都而手籠り候普請は取拂可申事。

一、巡見上使宿幷下宿之儀、前々長押・書院・欄間等取拂不申候得共、今般之儀は如何相心得

させ可申哉、御指圖次第可申渡奉存候。

一、宿村御出張所勝手廻り幾右衛門等住居之分は、被仰渡之御趣意通取除可申候。其餘表廻り等御借上之ヶ所、如何爲相心得可申候哉奉窺候。

一、御扶持人・十村幷新田裁許・山廻役之家々、前書取拂可申分は、成限り早取懸り、取除方濟次第御達可申上。其内長押等取除候得者、家片がり候樣之分有之。ヶ樣之分は暫く日間取申儀も可有御座哉に奉存候。其外百姓中家之分、農業透々を以當十二月中限爲取除可申候。

右今般家作之內造作方、公儀被仰渡之趣を以、取拂方之儀被仰渡、奉得其意、私共寄合仕詮議之趣御窺申上候。夫々御指圖被成下候樣奉願上候、以上。

天保十四年七月

當摩太問
高嶋庄助
北村惣助
高田村平兵衛
堀松村平七郎
能登部下村瀨兵衛
內嶋村佐次右衛門

笠師村喜八郎
緩目村五兵衛

大嶋五郎右衛門殿

〔御郡典〕

杉戸之儀者不及申に、帯戸不相成趣御承知之通に御座候處、諸郡共在來之帯戸人々家々に有之、一時に取捌候而者甚迷惑之趣に付、請合人々より段々申上候處、さん・かまち黒塗申、杉之白木等に而杉戸作りは不及申に、帯戸たりとも形似寄候儀不相成譯に付、重々御詮議之上御算用場へも御達被成、在來之分拵直方繪圖を以御指圖有之、田邊氏等より廻達有之に付別紙指進候。夫々急々御廻達被成、在來之帯戸成限爲取除、無據分は別紙之通拵直し候上に而爲相用可申旨。勿論さん・かまち黒塗之分は急に削り落し、煤拭にいたし候樣御申談可被成。尤別紙之通帯取除、横さん四本入候得ば、帯之跡板不足致し可申、其所は別に板を入勝手に仕直し可申。併横まいらは不相成、さんを拔寄にいたし候儀は不苦候得共、横まいらに紛れ不申樣御申渡可被成。諸郡より色々願も御座候得共、前段之外被成方無之由に候間、左樣御承知可被成。猶御面談可得御意候得共、指當り御會得難被成品御座候はゞ御申越可被成。御窺可申上、組々へは各樣より被仰達可被下候、以上。

八月十日　　　　　　　　　　　金澤より　高嶋庄助

當摩太間様

北村惣助様

帶戸在來候分は此通拵直し、塗候分削り落し可申候。併右帶戸拵直し候分、板白木に不相成、煤に而濃色留いたし、目立不申様相心得可申。勿論以來帶戸新出來堅く致間敷旨被仰渡候。右之通御郡所より被仰渡、諸郡ゑ可申談置旨被仰渡候間、左様御承知、御廻達之上落着より御返可被成候、以上。

八月六日　　　　　　　　　　　田邊次郎吉

伊藤源次

諸郡御扶持人中様・十村中様

弘化元年十月廿二日參照

八月十六日。浪人の徘徊を禁ずる幕令を傳ふ。

〔御郡典〕

浪人躰之者在々致徘徊候儀に付、從公儀相渡候御書付寫等三通左之通年寄中被申聞候に付、相達之候條、被得其意、夫々不相洩様可被申渡候。且本文之趣板札に認、村々入口に建置候様可被申渡候、以上。

卯八月十六日　　　　　　　　　　　御算用場

大嶋五郎右衞門殿

浪人躰之者在々致徘徊候儀に付、從公儀相渡候御書付寫一結二通相越之候條、被得其意、所々御郡奉行等幷江州御領分江も可被申觸候。以上。

癸卯八月十三日　　　　　　本多播磨守

　　　　　　　　　　　　　横山山城守

遠藤數馬殿

幕令二通之を略す

八月十七日。幕府、能登の預所檢分の爲勘定所の吏を派遣すべきことを告ぐ。

〔近敦日記〕

八月十七日

一、能州御預所見分並代檢見等として、支配御勘定格龍之進等被遣候旨、御勘定所より被仰渡之旨等申來、御用番より申上る。

八月十九日。前田慶寧袖留の儀を行ふ。

〔恭敏公記史料〕

八月十九日。行改額髮綴衣縫之式。將軍遣物祝之。

八月廿二日。能登預所檢見の爲出張する幕吏の宿舍を急に改造すべきことを命ず。

〔御郡典〕

能州御預所檢見爲御用、近々公儀御役人飛州路より被罷越候由に候。左候得ば、道筋休泊之儀、前々御料巡見御役人之旅宿家作向之儀、急速共許中罷出遂見分、長押作等都而先頃以來御觸通に相違之品々有之候はゞ、急々爲取拂。門構之儀は塀重門不指支候得共、長屋門等之分有之候はゞ、是亦爲取拂可申。式臺形之分も有之はゞ是亦爲取直可申候。

一、當御領通行之節取扱方之儀は、追々遂詮議可申渡候條可得其意候、以上。

卯八月廿二日　大嶋五郎右衞門

口郡十村中

追而上使御宿之儀に付而は、先達而譯而被仰渡之趣も有之候得共、御料巡見御役人旅宿之儀は、品違候儀有之に付、本文之通申渡候條、可得其意候。且前段家作取拂次第可及屆に、其上手先役人指出可爲遂見分候、以上。

八月廿四日。本年豐作なるを以て租納の際監査を嚴にせしむ。

〔司農典〕

當年御領國三州は格別之順氣に而作躰宜敷、隨而米性も宜可有之年柄に付、ヶ樣之年柄諸代官收方入念無之而は、往々之指障に相成候條、代官々々於手前に厚心懸、米性相撰御藏納可有之候。近來漸々收方不宜故歟、翌年に至り痛米多出來、勿論中には御收納方行屆候樣子に而、痛米薄ヶ所も有之躰に候得共、惣躰次第百姓納方幷代官撰方等疎略に相成候樣子。就中近年作躰も不十分に付、米性も劣り候上、第一干方不宜故、翌年に至り格別痛米等出來、過分之御不益に相成候。假令米性宜候而も、干方等不行屆候而は、翌年に至り痛米等出來之譯に候間、干方等之儀別而入念遂詮議可相納候。此段下代共心得方急度可被申渡候。尤百姓等心得方之儀は、改作奉行江も申談置候、以上。

八月廿四日　　　　御算用場

諸代官中

八月廿九日。海岸防備の爲鹿島郡所口在住を津田修理に命ず。

〔近敎日記〕

八月廿九日

一、左之通山城守殿被仰渡候由。

津田修理は六月の條に掲げたる權平がこの際改名したるなり

津田修理

思召あらせられ、能州一國爲御縮方、所口在住被仰付、同國盜賊改方等加役に被仰付。

一、右は今度異國船若渡來之節、海邊御手當方之儀、去年以來公邊より段々被仰渡有之に付、今度御手配方公邊江御書出に相成候。右御僉議に而、今般所口在住新規に被仰付候御様子也。

右に付修理へ別段被仰渡に、海邊御手當之儀も被仰渡、しかし當分所口在住には不及、毎年海路通船中四・五十日宛相詰候様。且勤方之儀追而可被仰渡候得共、先魚津在住之振に相心得候様被仰渡候由。

一、魚津在住之儀も、前同様毎年四・五十日宛魚津役所へ相詰候様、今日篠原監物へ被仰渡候由。

一、海邊御手當方御僉議に付、所々御郡奉行も先規之通被仰付候。左之通御改之旨、今日御用番被仰渡候由。

加州御郡奉行　吉田藤馬

津田少左衛門

能州御郡奉行　高澤平十郎

礪波・射水御郡奉行

新川御郡奉行

大嶋五郎右衞門

篠原文四郎

前田彌五郎

眞田勘解由

平野知太夫

〔大鋸文書〕

津田修理ゟ

御手前儀思召被爲在、能州一國爲御縮方所口在住被仰付候。同國盜賊改方之儀茂、加役可被仰付候。於御前可被仰渡處、未御保養中被爲在候に付、拙者共より可申渡旨被仰出。前段申渡候趣、異國船渡來之節海邊御手當之儀、從公儀段々被仰渡之趣有之候處、能州之儀者專一之海國に付、今般人持在住被仰付候。與力・同心等も可被仰付置候。併當分所口引越に者不及、每歲海路通船中四・五十日宛可被相詰候。御內御用方心得之儀は、追而可被仰渡候事。

八月廿九日

八月。幕府、盲人にして市中に住し琴・三味線・針治・導引を業とする者

の座法を正すべきを告ぐ。

〔岡部舊記〕

大目付ゟ

都而百姓・町人之悴盲人に候はゞ、檢校仲間之弟子に成、夫々之渡世致修行、第一官位を心懸候筈之處、近來檢校之弟子に不相成、琴・三味線等針治・導引を渡世之種にいたし、或は仕官之身与相成、脇指などを帶候類之盲人多く相成候趣に相聞候。以來百姓・町人之悴盲人琴・三味線等針治・導引を渡世に致し、又は武家ゟ被抱候而も、市中に致住居候者は、勿論主人之屋敷內に罷在候共、右家藝を以他所をも相稼候ものは檢校之支配たるべき事。

一、武家・陪臣之悴之盲人に而も、市中に致住居、琴・三味線等針治・導引を以致渡世候分は、是又檢校之支配たるべき事。

但、武家出生之盲人他ゟ被抱、市中に罷在候共、稽古場を拵弟子集など致間敷。若弟子集致候はゞ、主人方相斷檢校之支配請べき事。

一、百姓・町人之悴之盲人に而も、琴・三味線等針治・導引を以渡世に不致、親之手前に罷在而已之者、幷武家ゟ被抱、主人之屋敷又は主人之在所ゟ引越、他所之稼不致分は、制外たるべき事。

本文は幕令なり

右之通安永五申年相觸候處、近年規則相崩、猥に帶刀抔致し候者有之、座中より相制候ても不取用由相聞。且又座中取締も追々相ゆるみ、座法不整之筋も有之に付、此度取締役之者申付、諸國末々迄嚴重に座法改正致し候筈に候間、其段急度相辨、心得違之儀無之樣可致候。右之趣不相洩樣可被相觸候。

八　月

右に御年寄樣御添書・御郡所御添紙而有之候得共、一通之御添書故略す。

八月。町方居住の者の家作に關して令す。

〔郡方御觸〕

付札、御算用場奉行ゟ

別紙寫之通町奉行ゟ申渡候條、被得其意、遠所町奉行幷御郡奉行等ゟも可被申談候事。

八　月

付札、町奉行ゟ

今度在・町共奢侈之家作改方之儀、先達而申渡置候通に候。右に付町方に居住罷在候侍等幷陪臣曁町醫者共、是迄有形之門・玄關者先其儘にいたし置、內作事向者都而外町並之通、夫々相改可申候。將又上使宿御旅館、御兩家樣御宿之分、內作事書院等是迄有形之分者其儘にい

たし置、尤自分住居向者外町並之通相改可申候。
右之通被得其意、早速軒別に見分者指遣、爲相改可申候事。

卯　八　月

九月二日。諸商人・職人の金銀箔を押したる看板を用ふることを禁ず。

〔御郡典〕

諸商人等金銀箔押候看板等之儀に付、別紙之通金澤町奉行より御用番年寄中江相達、當町方へ申渡候に付、寫相達之候條、各支配所右に准じ、夫々不相洩樣可被申渡候、以上。

九　月　二　日　　　　御　算　用　場

高　澤　平　十　郎殿

大嶋五郎右衛門殿

諸商人・諸職人共、金銀之箔押候看板等御停止之處、追々相弛み、結構仕立候看板も有之候之間、早速相改、木地之看板に墨に而相調可申候。かな物は鐵・銅不苦候。
右之通可被申渡候事。

卯　八　月

九月六日。能登金剛崎・輪島・福浦に遠見番所を置くを以て設計を命ず。

〔郡方御觸〕

能州金剛崎等三ヶ所において、遠見番所被仰付候旨、別紙寫之通申談に候條、得其意、尙更御扶持人及示談、地面步數幷番所建物遂詮議、繪圖面相添、早速可申聞候、以上。

卯九月十七日

大嶋五郎右衛門

高澤平十郎

當摩太間殿

稻舟村藤太殿

宗玄村忠左衛門殿

御扶持人十村中

海邊御手當方に付、能州金剛崎・輪嶋・福浦三ヶ所に遠見番所被仰付候間、可申渡旨御用番年寄中被申聞候條、出來方被遂詮議、繪圖面相添可被指出、尤步數取極被申聞次第、猶又遂詮議、ヶ所等可申遣候、以上。

九月六日

御算用場

高澤平十郎殿

大嶋五郎右衛門殿

九月十八日。御郡方より商用の爲他國に赴くものに人別出願せしむ。

〔御郡所年中行事〕

他國ゟ商用等に罷越候者共、向後人別願書可指出候。左候得者過書之外、右願書に裏書を以可相渡候條、致持參、他國において人別調理候儀も有之候者指出、歸國之節持歸り、着之上右裏書物可相返候。

右之趣得其意、不相洩樣申渡、先々相廻落着より可相返候、以上。

天保十四年卯九月十八日　　御郡奉行

能州四郡十村中

九月廿三日。前田齊泰參覲延引の屆書を幕府に呈す。

〔成瀬正敦日記〕

八月廿二日

一、當月御參勤御延引之御屆方之儀、當四日出に聞番へ申遣置候返書到來。荒井甚之丞殿へ罷越御內談仕候趣共申越、且御用人ゟも示合、十四日に水野越前守殿御宅へ聞番參上、御內談におよび置候間、御挨拶有之次第、十八日頃御月番ゟ聞番名前之御屆書指出、追而言上可仕旨等申越。

〔成瀬正敦日記〕

閏九月二日

一、御發駕御延引御屆、二度目御直名之御書付を以、前月廿三日御用番水野越前守殿御宅ゟ

聞番參上、御屆相濟候旨言上。

九月廿六日。御鷹場に關する規定の改められたることを告ぐ。

〔郡方御觸〕

御鷹場之儀、是迄紛敷儀も有之に付、今般別冊之通御改被成候旨被仰出候段、若年寄衆被仰

渡候に付、別紙都合三品相越之候條、得其意、村々一統ゟ不相洩可申渡。是迄御留場に相成

居候村々ゟ相渡り居候見合札、一村宛札を付取立、早速可指出候。尤村々帳面に仕立取揃可

指出候。且分役之面々ゟ者、其元中向寄より不相洩夫々可申談候。名之下令判形、先々早速

相廻、留村より可相返候、以上。

卯九月廿六日　　　　　　　　　　　吉田藤馬

能美・石川・河北三御郡十村中

御鷹場之儀、是迄紛敷儀も有之候に付、今般別紙之通御改被成候旨被仰出候。且三里四方小

鷹幷天網等都而御停止之品は、尤前々之通に候條、此段御家中一統申觸有之筈に候事。

癸卯九月

御鷹場御定

一、上口泉野者町端より伏見川を境、野田松山之根迄、大桑之河原。
一、上口往還道より伏見川を境、西者中村用水を限濱手。
一、犀川を限、大豆田村口より宮腰口・粟ケ崎筋淺野川を限。
一、下口往還道を境、宇氣村橋より外日角村領を限濱手。
一、越中三郡弁能州之内御預地村々。
右之ケ所年中諸殺生御制禁之事。
一、上口往還道より山手伏見川を限、西者中村用水を限、鶴來往來に不拘、山之岸たりとも鶴來迄。
右ケ所毎歳三月朔日より九月晦日迄御留場に候。十月朔日より翌年二月晦日迄、御家中鷹扯候儀等御赦免之事。
一、中村用水より上手取川を限、上口往還道左右とも。
但、是迄毎歳十月朔日より翌年三月晦日迄御留場に候得共、以來者年中御免場被仰付。
一、鶴來道伏見川より、山江入嶺より奥之方。

一、鶴來より末。

一、小立野者町外れより、末者倉谷・湯涌筋不殘。且犀川之方笠舞村等、淺野川之方田井村等共。但、笠舞村・三口新村・栗林跡・湧波新村・上野新村・土清水村者御留場に候所、以來御免場被仰付。

一、下口往還道を境、幷能州道筋宇氣村より秋濱村領を境、都而山手。

但、森下川より津端川迄往還道をさかひ山手、幷能州道龍ケ口川より宇氣村橋迄之間山手之內、森村・鉢伏村・鉢伏新村。夫より下山田村・上山田村・多田村・御門村・下矢田村より小熊村・大熊村・吉倉村・市谷村者、是迄御留場に候得共、以來御免場被仰付。

一、能美郡所々御林之外。

一、能州四郡共。但御預地村々之外。

右之ヶ所都而年中諸殺生不苦事。

今般御鷹場御改に付、御鷹場高札建替之儀、若年寄衆被仰渡候條、夫々御取調理、私共方迄御指出可被成候、以上。

九月廿六日　　薄井覺左衛門

吉田藤馬樣

津田少左衛門様

九月廿八日。銀仲預手形を新札と交換すべき期限を延ぶ。

〔留　書〕

當時通用之銀仲預り手形、百目札并小割札共、當月中迄に寄々引替所江堅新札与引替可申旨、去る十月一統申渡置候通りに候。然所未引替殘多有之躰に候條、來辰年十月中迄に引替可申候。尤右限月迄は、是迄之通り新古打込可致通用之事。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

九月廿八日　　前田内匠

閏九月四日。幕府、能登の預所檢分を中止するを以てその派遣の吏を召還すべきを告ぐ。

本文は水野越前守貶黜せられて幕府諸改革を中止せしによる

〔都鄙之嵐〕

閏九月四日

申　達

此度御領所御改革取調之儀、御指止に相成候趣、大炊頭殿被仰渡候間、爲御取調廻村罷在候

幕府の召還令は未だ出張役人に達せざりしなり

御勘定方・御目付方歸府之儀申遣候條、得其意、村々江も可被申渡候。

右之趣鳥居甲斐等・戸川播磨守・佐々木近江守・石原孫助申達之。

〔近教日記〕

閏九月十二日

一、御預所爲見分被相廻候公儀御役人、夫々見分相濟、明後日頃此表旅宿之筈之旨、中村岡三郎罷歸、今日御次江も申上り候事。

閏九月十七日。村御印燒失の場合に於いては御算用場奉行よりその寫を下附すべきことを定む。

〔毎日帳書拔〕

閏九月十七日

一、村御印燒失之節は、御印御成替迄寫いたし、御算用場奥書を以相渡置候。然處近年燒失之分は寫等相渡不申、此儀不相當儀に付、以來先規之通先寫を以相渡置可申と奉存旨、御算用場奉行紙面出、僉議之通相心得候樣可申渡哉之旨窺、窺之通被仰出。

閏九月十八日。家中の士御日柄に鳥構又は川殺生を爲すを禁ず。

〔毎日帳書拔〕

閏九月十八日

一、鳥屋幷川師共御日柄に殺生方之儀、先年より格別之趣を以差解置候處、近年御家中末々之者等之內、鳥屋共名前を借り、御日柄に殺生いたし候者も有之躰、不埒之至に候。鳥屋共之內心得違之者も有之哉に相聞候之間、以來御縮方之儀嚴重に可申渡旨等、若年寄方より町奉行へ申渡有之由、御家中一統へ爲心得可申渡旨演述之事。

〔留　書〕

鳥屋幷川師共、御日柄に殺生方之儀、先年より格別之趣を以差解置候處、近年御家中末々之者等之內、鳥屋共名前を借り、御日柄に殺生いたし候者も有之躰粗相聞え、不埒之至に候。元來鳥屋等江御縮旁、御日柄に殺生之儀差解置候處、鳥屋共之內心得違之者茂有之哉に相聞え候間、以來御縮方之儀嚴重に被申渡、此後若御日柄に鳥構・川殺生抔いたし居候者見請候はゞ、名前等承糺、無泥申聞候樣夫々可被申渡候。尤廻り方之者共江、今度改而申渡置候儀も有之候條、此段可被申渡候。

右之趣町奉行江申渡候條、御家中一統江爲心得御申渡可被成候。

卯十一月

閏九月。石川郡寺中大野湊神社神主より金澤城内東照宮奉仕の狀を具申す。

〔國事雜抄〕

其御國許東照宮別當職之儀者、天台宗之僧徒江御申付、日光御振合に准、御祭式御取行に相成候哉。若亦他宗又者神職江御申付、御祭禮御國風御取交之儀も有之候哉、右之趣致承知度候事。

水戸様御城附人見五左衛門より、別紙之通問合申來候間、御達申候。否被仰渡次第、申遣に而可有御座候、以上。

九月　　　　　　　　富永左膳

山崎庄兵衛様

中川八郎右衛門様

於御國東照宮御祭禮神職江被仰付置候濫觴、御尋之趣奉得其意候。

一、元和年中之頃にも候哉、年號等不詳候得共、私共舊記に御座候者、御先代様初而於御國、東照宮武州より御勸請御座候砌、寺中兩神主に勤行可仕旨被仰渡候由に而、則私共先代河崎權頭・河崎將監兩人神輿御迎に罷越候様被仰付、上州坂本迄罷越、則供奉仕、御遷宮御用相

富永左膳は在江戸聞番

勤、其以來今以每歳四月十七日、正・五・九月十七日御宮江罷出、御祈禱相勤申候。就中萬治二年上使御當地へ御越御在留中者、神職一人充每日替々神護寺江相詰申候由、是又舊記に御座候。

右御尋に付申上候、以上。

天保十四年閏九月　　寺中神主　河崎和泉守

寺社御奉行所　　河崎越後

閏九月。町人等家屋賣買納得の際酒食を饗するを得ざる禁令を嚴守せしむ。

〔御郡典〕

町人共近年次第に奢侈押移候に付、去寅年段々被仰渡之趣有之、其節人別に申諭置候處、未心得違之者有之哉、家賣買納得等之節酒飯等節を越、種々取はやし候者も有之躰に候。近く念頃に申諭置候處、間茂なく右之族は、畢竟心得方等閑之故と相聞候。且又納得之節抔、取扱方手輕に候得ば、何歟妨等申出候者も有之に付而、右之族におよび候儀も有之躰、不心得至極に候。一々相糺嚴重可申付筈に候得共、先令用捨置候。此後右之躰心得違之者相聞るに

おいては、吟味之上其座に携候者迄も嚴重咎可申付候條、此旨可相心得事。

卯閏九月

閏九月。料理業の者高價の飲食物を調ふべからざる等のことを令す。

〔御郡典〕

當町料理商賣之儀は、定之條目茂有之處、次第に猥に相成、奢侈之料理茂仕誂致遣候躰に候。去寅年段々仰渡之趣、其節入念申渡置候處、今以奢侈之料理等請負候者も有之哉に相聞え、沙汰之限りに候。夫々相糺嚴重可申付筈に候得共、先令用捨置候條、是以後急度相改、條目之趣を以、料理之品々幷直段等委く相記、誰に而も見安き所に張出置、其餘高料之料理一切いたす間敷候。其上にも奢侈之品々强而誂候者有之候はゞ、名前等承可及斷候。若張出に過候料理密にいたし遣においては、無用捨商賣取揚、嚴敷咎可申付候條、此旨可相心得候事。

卯閏九月

十月八日。諸浦に船頭・水手稼方の主附を置き、その取締に當らしむることを令す。

〔御郡典〕

大坂御廻米地船雇之分、欠米多に付、今年彼地に而得与相調理候所、大坂仲仕共手前に而入米之節、取扱方上船・地船之差別付候様之儀は無之、却而地船積之分は上方船与違、眼前俵成窕き居、內實減少之躰相顯居候に付、於大坂表に段々様子相調理候處、仲仕手前疑敷品も無之儀。地船之類抔も欠米多に相成候儀は、全く船手之者不締に相當り、恐入候段申聞候者有之候。元來於積所に升廻致し候時節に寄、相應之升目取極積渡候御米に候得ば、中には出目も可有之處、右様欠米に相成、船主江は御米性惡敷或は仲仕共不正も有之様申成候躰に而、船主共年々損分不少。依之に御廻米を相恐れ、増運賃相願、其外過分之除荷を打候得共、水主共不正之趣有之候而は際限も無之儀。先以不届至極之儀に候條、以來御廻米を始、船中締方之儀、船持共より船頭・水主江急度申付、自然其上にも過欠等出來候はゞ、無泥船主より及斷に、水主共手前詮議方相願可申候。御領國之者に候得ば、いかにも大切に相届可申筈之處、却而他國之者にも相劣り候致方、御上を不恐趣沙汰之限に候。別而近來次第心得惡敷相流候間、以來は不及猶豫、嚴重詮議方可申付候條、船稼致候者共江、此段急度可被申渡候。

一、近年諸運賃等高直に相成候儀は、船頭・水主共給銀等取方、以前に比候而は過分之増方に相成。尤此儀は御領國に不限に付、其上にも他國等より宜給銀等相渡候者承候得ば、勝手次第其方へ罷越、最前雇方取極置候詮も無之。第一人不足いたし、船之手前指支に相成、無

據又々增銀致候處ゟも相至り候躰、不埒千萬に候。都而他國稼に罷越候者は、夫々屆等縮方も有之處當時猥之躰。今般從公儀夫等嚴重被仰渡も有之儀、旁以以來船方他國稼に罷越候者も、各手前に而得与樣子相糺、可被承屆儀に候得共、容易には被聞屆間敷候。

但、一通り本文之通り之趣に而は、其縮方行屆間敷候條、浦方壹ヶ所切船頭・水主稼方主附之者被相立、年々船持共雇高、年內に右主附之者へ相斷置手當いたし、若人不足に候はゞ、他郡之內右樣過人有之分相雇候樣致可申候。其上にも過人之分は、翌年春に至り他國稼被承屆候儀も可有之候。

右之趣猶更詮議有之、嚴重可被申渡候、以上。

十月八日　　御算用場

高澤平十郎殿

大嶋五郎右衞門殿

十月廿四日。前田齊泰重ねて參覲延期屆を幕府に提出す。

〔成瀨正敦日記〕

十一月八日

一、御參勤御延引御屆之御使人高山喜市郞儀、前月廿三日江戶表到着、御屆之御使、廿四日

夕相勤、同日御奉書相渡候旨に而、寫等今日到來之旨に而、御用番より被入御覽候事。

〔成瀨正敦日記〕

十二月九日

一、左之通御用番等へ被仰出、今便江戸表方々樣ゟは以奉札被仰進、此表に罷在候御附々頭・御近習頭・御用人へも爲承知申談候事。

先達而被仰付候通り、當年中御參府難被成、來春雪薄相成候上御發途被成度旨、御使札を以御願之處、前月廿九日御奉書相渡、御願之通被仰出忝思召候。此段可相達旨被仰出候。

十二月

十一月十八日。幕令の趣旨により酒造株を改めて酒造稼と稱せしむべきことを告ぐ。

〔郡方御觸〕

諸國酒造之儀、是迄株与唱來候所、株与唱候儀相止、酒造稼与唱相改候之儀に付、今般公儀御勘定所において別紙寫兩通之通被仰渡、爲取締御領分酒造人共ゟ鑑札可相渡旨に而、御渡之旨寫御用番年寄中被申聞候。依之向後酒造方取締之儀、別紙之通候條被得其意、此段酒造人どもゟ嚴重可被申渡候、以上。

兩通の寫は略す

十一月廿四日。前田齊泰の子利鬯髪置の儀を行ふ。

〔見聞袋群斗記〕

十一月廿四日、桃之助殿髪置御祝有之なり。

十一月廿八日。金子と銀子との交換比例を改定す。

〔留書〕

先達而引替所被仰付候砌、金相場六十八匁之極に候處、其後上方相場下落に付六十四匁に相改置、御家中之人々他國行會所銀・出銀或は取寄金之分、願次第引替遣候得共、當時上方金相場高直に相成候に付、右に准當分六十五匁に而引替候筈に候。外五分雜用相懸候儀、暨引替金高割合之儀、尤是迄格合之通に候。

一、金上納之分、是迄金一兩六十四匁圖りに而、銀上納に相成居候得共、是又正月より當分六十五匁圖りを以可致上納事。

一、右之外當時引替方相止居候得共、以後無據金子入用之分は、如最前一統引替遣候筈に候。此分金相場幷引替相初候日限之儀は、引替所直に可承合候。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配相洩樣可被申渡候、以上。

十一月廿八日

十二月十九日。前田慶寧袖留の儀を行ふ。

〔大千代様御用留写〕

十二月十九日

筑前守様益御機嫌能被成御座候。今十九日御袖留等御祝被遊候付、相公様より以御使者今枝内記、御腰物・干鯛一箱被進之、御頂戴相済、御殿江御出、備後守様を始御客衆江御逢可被遊処、右大将様亀□筋江御成に而、御廻勤之御都合も有之に付、備後守様迄江御対顔、夫より御老中土井大炊頭殿・戸田山城守殿御勤、御住居江も被為入、七時前御戻被遊候。其外先達而相伺被仰越候通、万端御首尾能相済申候。拙者儀御目見被仰付、殊之外御似合被遊、益御健に奉見上候。

一、今日御祝に付、於御住居女使を以公方様・右大将様・一位様・御簾中様より鮮鯛一折充御拝領。右之外に四御所様より思召品も御拝領被遊候段、原五郎右衛門申聞候。委細之儀は同人等より可及言上候。

備後守は大聖寺侯前田利平

十二月。家中難渋の馬持以下の士に貸銀を許す。

〔觸留〕

當時世上不融通至極之所、御家中勝手難澁之人々調達出來不申、必至与行詰り居候に付、當暮御貸渡に而茂無之而は難相治次第にも可相至哉。依之乍御當節、何と歟御取扱有之樣各初相達候趣、無據儀に付段々遂詮議候得共、先達而之凶作且御手傳以來別而追々過分至極之御當借に相成居、當暮而已之御不足四千七百九十貫目計之分御手當方無之に付、種々心配之折柄に候。乍去各段々被申聞候通、小身等之人々之內勤仕にも指支、困窮に指迫居候處、御逼迫与て打捨被置候儀も有之間敷に付、重々遂詮議候之處、中には組一統之申立も有之候得共、前文之御勝手振に付、一通之難澁人江も行渡候樣之事に而は、銀高にも相成、迚も難遂詮議候間、極々難澁勤仕にも指支候程之人々、馬持以下之分迄、別紙知行割合之通御貸渡之儀可遂詮議候之條、名書・銀高・知行高可被書出候。將又去年は御借知も全御用捨之上、御難題相願候儀に付、借用之人々愼方嚴重申渡置候得共、當年之儀は此儀は不被仰渡候得共、御時節柄拜借相願、御難題を以取續候處を恐入、其實意相立候樣、頭々手前において拜借人身分心得之儀被申談、家內暮方等不都合之筋無之樣指引可有之候。右御貸渡銀返上方之儀、御知行は來七月、御切米等之人々は來三月、一時上納之筈に候條、其趣を以難澁之人々相撰可被書出候事。

十二月

一、四百目宛　　　　四百四十石以下
一、三百五十目宛　　三百石以下
一、二百五十目宛　　二百石以下
一、二百目宛　　　　百石以下
一、御切米之分右知行高に準じ御貸渡之事。
一、返上方御知行は來七月、御切米來三月一時返上之事。

十二月。前田齊泰保養中なるを以て來年年頭の賀を受けざることを告ぐ。

〔留　書〕

相公樣追々御快方に被成御座候得共、未御保養中被爲在候。依之來年頭御家中等一統御禮被爲請間敷旨被仰出候條、可被得其意候。且又一統年頭御祝儀献上之御太刀等目錄・靑銅目錄共、當年中取立、元日不殘指上候筈に候條、正月朔日之日附に而、自分幷組・支配之人々、且江戶表等竪遠所に罷在候人々目錄、當月廿一日より廿五日迄之內、御奏者番相達可申候。御太刀・馬代等、右日限之內御進物所ゟ直に可指出候。
　但、在江戶等之人々目錄等は、代判人より取計可申候。
一、御家中子共御禮茂不被爲請候間、尤献上物に不及候。

一、元日は頭分以上登城刻限等、前々御留守年之節之通可相心得候。尤人日・十五日・二月朔日も平月之通出仕可有之候。

右之趣夫々可被申談候事。

十二月

是歲。御塩吟味人の勤方を改定す。

〔河合錄〕

御塩吟味人勤方書

定

一、其方儀御領國塩方吟味人申渡候。浦方繁々相廻可申候。能州四郡之內、別而珠洲郡三組、口郡之內嶋之地等、夫々心懸相廻、御縮方嚴重可申付候事。

一、塩方之儀は、組主付之手を離、都而其方共ゟ取捌方申付候條、得其意、無油斷綿密に相心得可申候事。

一、定式塩手米等願方之儀、其方共ゟ願出候はゞ、添紙面を以御塩奉行へ可相達候。追塩手米等願候節、未進無之樣見計、精誠遂詮議爲願出可申候。且村々に限り、無據願方者格別、塩士村々一統ゟ響候願方は、猶又組々示合、不同無之樣爲願出可申候。

一、御米渡方は、御塩奉行より塩士村々役人共幷塩士惣代呼立、相渡候様申渡候間、其節其方共立會、右受書可取立等に候條、夫々遂奥書御塩奉行へ可相達候事。

一、御領國之内越中・能州問屋拂塩・小賣・四十物塩等入拂、在塩高問屋共手前夫々相糺、拂塩之多少其所に不相應候はゞ、役人共手前嚴重に可遂吟味候。且又外之浦において富木・輪島、於内浦蛸嶋・小木・所口、其外所々於半浦も、四十物方遣塩・洩塩取扱無之等に候條、入拂方等嚴重相糺、其方共節々相廻、不屆之様子有之候はゞ承屆、早速當場ゟ訴可申事。

附、素麪遣塩、於舳倉嶋海士遣塩、惣而御郡・町方共稼遣塩、夫々可遂吟味候。尤問屋等塩渡方拂目錄爲書出、見屆可申候。問屋手前年切拂、殘越塩有之儀も候間、是又其時節可相改置候。

一、御預所村々、近年御領同様之御取扱に相成、右村々出來塩都而御買上相成候間、御縮方等諸事、御領同様に嚴重可相心得候事。

一、御預所村々喰塩幷四十物塩共、代銀一俵に付四匁六分五厘宛に付、御領之者与四十物等取組申者も有之由相聞候。依而御預所四十物等問屋共手前、御領同様入拂等相しらべ、無心許儀候はゞ遂僉議、假令役人手前にても、無遠慮夫々遂吟味、早速訴可申候事。

一、御領國廻塩内味不宜儀者前々より申渡置候通候。其上色付或は土交等之塩も納置候故、

はさめは交番なり

所々廻塩之内、沸方に指支候塩も有之候。是等之儀は、専塩掛相見人共諸事等閑にいたし置候故に候間、共方共節々相廻、夫々厳重遂吟味、納方等不行届趣、又は無心元手段等及見聞候はゞ、急度相咎、勿論御塩奉行ゟ相達、当場ゟも急速可申聞候。且又塩士共焼立候儀、前々より申渡置候得共、等閑之仕形有之候哉、たき塩に相成候分も有之候。此儀も不焼足故に候間、得与申諭、入念候様可遂吟味候。若違背仕者候はゞ、早速当場へ訴可申事。

一、浦方肝煎・澗役人并組合頭洩塩等之御締方、前々より厳重申渡置候処、近年風俗悪敷様子相聞候。其方共相廻、假令悪敷風聞にても得与承合、村名・役人委細可申聞候。勿論浦々澗入舟、共外何船に而も疑敷趣有之候はゞ、所々澗改人等申談相改可申事。

一、塩士釜家之灰売出候付、右灰舟手ゟ指遣躰。其節無心許品有之候はゞ、所を極置為売出可申、尤夜に入船積為致申間敷候事。

一、塩士・一村之釜数・濱数改可申候。尤増減等相改可申事。

一、夏中出来塩中、一ヶ月はさめに員数書出可申事。

一、塩方仕入米等貸付之儀、第一之御縮方に候間、御仕入米高并一番塩手米・二番塩手米・追塩手米高、村々塩士人別に相しらべ置、稼方等勢子いたし、若稼方不相應に仕入米等借請候者も無之哉、夫々厳重相調、不届之儀も候はゞ急速訴可申事。

附、未遂指引等、幷過上塩代米等之儀不分明之儀も無之哉、夫々嚴重に相しらべ可申候。
一、其方共於廻先、村役人等御縮方之儀に付申談儀等候はゞ、旅宿迄呼集可申事。
附、所々より裁許十村迄紙面を以申遣候儀も候はゞ、其通可相心得候。若違背仕者候はゞ、其段當場江可申聞候。
一、越中東岩瀨之儀、飛州江差遣候他國出來之塩、或能州御預所出來塩等賣買いたし候躰。其上富山御領御境目之村々四方、西岩瀨へ他國塩積入候趣。右に付他國塩に類し紛敷取扱無之樣、且小賣塩・四十物直請取、不相應之儀有之候はゞ、猶更其方共得与相廻、不屆之筋有之においては、急度當場江訴可申事。
右之條々申談、精に入可相勤候。若塩士等之内親子・兄弟・緣者等有之候共、聊無依怙贔負、尤御用之筋他見他言不仕、平生人交之處急度相愼、相勤可申候。尤此外御縮方之儀に付、心附之儀有之候はゞ、無遠慮可申聞者也。

天保十四年　月　　　　御算用場

弘化元年

正月朔日。前田齊泰保養中なるを以て年頭の禮を受けず。

〔成瀨正敎日記〕

正月元日

一、上々樣益御機嫌克御超歲被遊候事。

一、御保養中に付、御家中年頭御禮不被爲請、元日頭分以上五ッ時過登城御祝詞可申上旨、舊臘御用番より觸渡有之候付、五時過より致出席候事。

正月四日。前田慶寧袖留せしを以て祝賀の爲能を催す。

〔御家老方等諸事留帳〕

正月四日

一、今日筑前守樣御袖留御祝御能被仰付、各見物被仰付候旨、主付まで月番演述有之。八時過御初り、御能三番・狂言一番有之。

（狂言一番の名を缺く）

難　波　　宮　門　　藤　榮　　權之進　　小鍛冶附祝言　　六右衞門

松　　楪

一、御到來御肴に而御吸物被仰付頂戴、松之間二之間也。御取肴卷鯣・御酒も被下、相濟御禮御膳奉行に申上。

一、御能見物之御禮、御近習頭荒木津太夫也。

一、御能六半時前相濟、追付退出之事。

正月十日。越中新川郡黑部山の銅鑛を採掘せしむべきを以て之が準備を郡奉行に命ず。

〔成瀨正敦日記〕

正月十日

一、新川郡黑部山入銅山之儀に付、舊臘以來武田秀平より段々申聞之趣有之、詮議之上穿出方同人𛀁被仰付候付、左之通今日御用番へ被仰出、御郡奉行へも爲承知申遣、秀平等山入不指支樣にと申遣置候事。

新川郡黑部山入字西鐘釣と申所、銅樋筋有之に付、當春雪消次第穿掘方に取懸候筈に候條、夫々不差支樣可申渡旨被仰出候。

正　月

正月十九日。城内に鏡餅直しの儀を行ふ。

〔御家老方等諸事留帳〕

正月十九日

一、熨斗目上下に而定刻出席、御鏡餅二之間に而、各近例之通紙に包御木具据に而頂戴。御禮御臺所奉行渡邊新藏を以申上候事。

但、若年寄は常之席に而頂戴、御禮も前に申上る。每之通也。

二月二日。越中に大風・暴濤あり。

二月二日。越中大風。海潮壞漂入膳等六邑家數百。

〔溫敬公記史料〕

二月四日。前田慶寧の月次及び五節句に登營すべき願書提出の件を令す。

〔成瀨正敦日記〕

二月四日

一、筑前守樣月次・五節句御願之儀、荒井殿へ及御內談候旨に而、御草案等三通聞番より指越。且御頃合之儀も三月十五日過御願書御指出、四月朔日初而月次御登城、五節句は五月端午より御登城之御圖りに而可御宜哉。且四月朔日は西丸へ御登城は無之日に候へ共、御初而之儀故、御先例之通西丸へも御登城被成度旨御伺に而可有之。御先例は御在府に付御當主樣より御伺に相成居候へ共、此度は御在國之儀故、月次等御登城御聞濟之上、筑前守樣より御伺に而可御宜哉之旨等、夫々伺越候付、其段相伺候所、夫々伺之通与被仰出候付、今便裏書

及返書。坂井奉。

一、筑前守様月次・五節句御登城之儀、三月十五日過御願出候筈之旨、御用人江為承知申談置候事。

二月四日。越中に再び大風・暴濤あり。

〔温敬公記史料〕

二月四日。越中復大風。海潮壊漂滑川及高月邑民家數十。

二月廿四日。前田齊泰病むを以て參覲延期の意あることを家中に告ぐ。

〔成瀬正敦日記〕

二月廿四日

一、左之通今日夫々被仰出候事。

相公様御順快に候得共、當春雪薄に成御參府被成度段、舊冬御願之通被仰出候所、未だ御全快不被成候に付、當八・九月頃迄御在國被遂御保養、少茂御快候はゞ早速御參府被成度旨、來月上旬御用番御老中江御願書付御差出之儀、江戸表聞番へ被仰出候間、此段可相達旨被仰出候。

二月。加賀大乘寺及び越中國泰寺に先住の遠忌を執行するを以て相對托鉢を許す。

〔御郡典〕

寺社奉行江

西田國泰寺

右國泰寺儀、開山國師遠忌相當り候處、難澁に而法會執行難調に付、御領國相對托鉢之儀願書付に、各添紙面を以被出候。願之趣無據相聞え候に付、格別之趣を以、御領國相對托鉢之儀承屆候。

大乘寺

右大乘寺儀、月舟和尚百五拾回忌に付、御領國相對托鉢之儀願書付に、各添紙面を以被出候。格別之趣を以、御領國相對托鉢之儀承屆候。

右之通夫々可被申渡候。尤御當地を始、三州町方迄相對托鉢之儀に候。國泰寺は當春中、大乘寺は當夏中可致托鉢。町立候ケ所たりとも、都而御郡奉行支配地は托鉢堅く不相成候。右百姓地之分、從御上國泰寺江銀七十枚、大乘寺江銀五十枚御取替御渡之筈に候。且亦御郡地之內に而も無高所之分は、御郡奉行江施物取立指出候筈に候條、此段國泰寺等江可被申談候

事。

三月十一日。幕府、前田齊泰の參覲延期の請を許す。

〔成瀬正敦日記〕

三月十七日

一、御參勤御延引御願書、當四日御用御賴大炊頭殿へ聞番持參、入御內覽、表向ゟ御指出被成候樣、御書取を以御挨拶之上、同九日御用番大炊頭殿へ聞番を以御指出之所、追而御挨拶可被及旨、役人を以被仰聞候旨等、聞番より九日出早飛脚に而昨日言上。

三月十八日

一、御參勤御延引御願書、當九日御用番大炊頭殿へ御指出置之所、同十一日大炊頭殿御宅へ聞番御呼立、可爲御願之通旨御付札に而御渡被成候旨に而、聞番より言上。右に付御禮事之儀、御用番へ伺書指出候儀等は、御用人ゟ相達致言上候旨も申越。

三月十一日。瀧之間講釋に學校助教加人を當つることを許す。

〔每日帳書拔〕

三月十一日

廿二日とするもの前書と異なり

一、瀧之間經書講釋御人少之間、當分助教加人之人々御差加、繰々講書被仰付候而も可然哉之旨伺々之通被仰出。

三月二十日。前田慶寧の月次及び五節句登營の請を許さる。

〔諸事要用雜記〕

三月廿八日

一、筑前守樣五節句・月次御登城御願書、當月六日之御日附に而、同十八日御先手三嶋下野守殿を以跡御用番阿部伊勢守殿へ御指出候處御受取、廿日御書付を以御願之通被仰渡候事。

〔恭敏公記史料〕

三月廿二日。請自今五節月次登城。見允。

〔御家老方等諸事留帳〕

四月八日

一、筑前守樣月並御登城之儀御願通被仰出、當朔日より御登城被遊候段、朔日立之三度到着、各上下に相改恐悅申上候事。

三月廿四日。諸公子石川郡宮腰に行歩を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

三月廿五日

一、御子樣方昨日粟ヶ崎・宮之腰江御行歩御出被遊候。天氣無類に而一段御慰に成候由之事。

三月廿六日。御射手後藤駒次郎の發明せる臺弓を藩侯の覽に供すべきことを議す。

〔御城方御親翰御加筆物寫〕

甲辰三月廿六日

一、御射手後藤駒太郎致工夫、臺弓与申物拵候に付、昨日爲指出致見分候處、珍敷品に付入御覽可申哉。御樣子に寄相願、堂形御馬場・學校御馬場之内に而射試、致見分度旨、成瀨主税江昨日相咄置候處、則申上候得者、先達而於學校御馬場致射試候節、學校方より伺有之、達御聽居候事故、御覽被遊旨被仰出候。組立之儀者、御射手裁許江直に可相尋旨、主税申聞候に付、追付御次江指上、宅右衛門を以主税江爲相渡、繪圖も爲相渡候事。

三月廿七日。前田齊泰夫人江戸城に登る。

〔溫敬公記史料〕

三月廿七日。夫人氏覲將軍。

〔諸事要用雜記〕

四月八日

一、姬君樣前月廿七日御本丸へ爲年始御登城被爲在候段申來。

四月朔日。前田慶寧初めて月次登營を行ふ。

〔加藤三郎左衞門御用部屋日記〕

四月朔日

一、今朝三つ鐘に而、直に御供廻、追付御出御登城被遊候。大廣間に御溜り、坊主衆江も御出、且松平修理大夫殿・細川越中守殿御同道御習禮被遊、畢而於御白書院御禮御首尾好被仰上、四時頃御下り、西丸へ御上り、於大廣間御奏者番へ御禮、御謁。夫より御白書院等御拜見被遊候。無程御下り、御老中方御勤、四半時過御戾。

〔恭敏公記史料〕

四月朔。自是日佳節及朔望廿八日。覲將軍及世子于兩城。

四月五日。昨今兩日前田光高の二百回忌を天德院に執行す。

〔成瀨正敦日記〕

三月廿五日

一、左之兩通御法事奉行播州殿より被入御覽。
陽廣院殿二百回御忌御法事法用差定。

四　日　卯　刻　轉讀般若
　　　　辰　刻　献粥諷經　殉死備粥
　　　　巳　刻　兩刹諷經　大乘妙經
　　　　午　刻　水陸勝會　拈香法語　献供諷經　殉死靈供
五　日　卯　刻　轉讀般若
　　　　辰　刻　献粥諷經　殉死備粥
　　　　巳　刻　薦拔上堂
　　　　午　刻　献供諷經　殉死靈供　立塔佛事　救濟大赦
　　　　　　　　大施行會
　　　以上　　　　　　　　　　　　　天　德　院

覺

一、五十二人　　知　識
一、二十七人　　長　老

一、七十一人　學　者

内上座見　祥雲力生　玄應力生　玄豊力生

下座見　祖順力生　善積力生

辰　三　月　天徳院役者

寺社御奉行所

四月四日

一、今日拜禮刻限、卯之上刻より辰の上刻迄与先達而觸付有之候付、長袴着用七ッ半時過出宅、天徳院へ罷出拜禮相濟、六ッ半頃罷歸候事。

四月五日

一、今日五ッ半時頃より御法事中、榮操院樣天徳院ゟ御參詣被遊候事。

〔溫敬公記史料〕

四月四日五日。修陽廣公二百年忌法會于天徳院。

〔溫敬公記史料〕

四月五日。修陽廣公二百回忌法會於天徳院。長將之佐代公献香。

〔恭敏公記史料〕

本文は前田慶寧の事に係る

四月五日。陽廣公二百回忌以前田圖書爲代香。

〔溫敬公記史料〕

四月五日赦。

〔御家老方等諸事留帳〕

四月四日

一、天德院江六半時揃、途中に而六半聞出候處宜候事。

一、今日詰美作守・雄次郎・万之助・八郎右衛門也。

一、明日詰將之佐・大膳・大學・式部。

一、今日御法事施餓鬼也。明日上堂也。

一、明日榮操院樣御參詣此間被仰出候事。

一、今日裏門より往來、戻り表門より歸候事。

一、明日退出より拜禮に出候事。

一、殉死之者兩人、一集に御法事有之事。

一、今日熨斗目・長袴之事。

但、御寺に而長袴に着替候事。且退出之節も半上下に改る也。

四月五日

一、今日御代香圖書被相勤、且御法事に付圖書筑前守樣御名代被相勤、重而御寺江罷出、拙者主附次順に付主附助相勤、退出八時之事。直に御城に而熨斗目・長袴に相改、拜禮に出候。万之助若年寄方助に付一集に參候。追付月番內膳も被出、三人拜禮仕候。榮操院樣御參詣、拜禮所御目通に相成候得共、表向いづれに被成御座候哉不存形に而中座等無之、常之通拜禮致候事。

四月十四日。表小將弓術御次稽古の射場を金谷文庫より三ノ丸に轉ぜんことを議す。

〔御親翰御加筆物寫〕

御表小將弓術御次稽古之節、天氣次第的稽古仕候處、近頃不時稽古も有之、御射場金谷文庫に御座候處、御縮被仰出候日抔有之、不時稽古間遠に相成、其上日陰薄夏向難儀仕候間、三之御丸射場に而的不時稽古仕度段申聞候旨等、有澤采女吉紙面大野織人指出、指支も無之候はゞ御射手裁許江申渡候樣申聞候。依而右裁許手前僉議仕候處、昔後は差支無之旨金子五郎太夫申聞候間、承屆可申与奉存候。別紙入御覽、此段奉達御聽候、以上。

甲辰四月十四日　　　　前田美作守

四月廿六日。犀川及び淺野川に於いて毎歳九月朔日より三月晦日まで漁撈を禁ず。

〔若年寄方御用留〕

三月廿三日

一、御郡奉行江左之覺書相渡候。

近來河北郡粟ヶ崎村筋獵師共、幷石川郡北間村之者共之由に而、淺野川々筋江立入、晝夜共川中に張網いたし、或は引網を以魚を取候躰相聞え、沙汰之限に候。依之右樣之儀見請候はゞ網等取揚及斷候樣、今度改方廻り之者共江申渡置候條、右村々之者共等心得違無之樣、急度可被申渡置候事。津田少左衞門へ相渡す。

〔御觸留〕

犀川・淺野川是迄殺生請負被仰付置候所、右兩川共請負年限去年迄に而相濟候に付、前々被仰渡候通、毎歳九月朔日より翌年三月晦日まで、金澤町端より下兩川共、諸殺生御停止中殺生いたし候者無之筈に候得共、自然心得違之族有之においては急度相咎、尤名前等承糺、早々可及斷。且兩川緣等村々之内中には、右御停止中御家中等之人々等より殺生道具預り置候者も有之躰相聞え候。甚紛敷、御縮方にも指障候に付、向後堅不相成、若此末右等之品預り

候においては、御鳥見等は不及申、都而役人共見付次第取揚候樣申渡置、尤領人急度咎可申付候條、得其意、右等之趣一統不相洩樣、夫々請書取立可指出候、以上。

辰四月廿六日

津田少左衛門

吉田藤馬

犀川・淺野川緣村々裁許有之十村中

四月。能登口郡に耕作奉公人缺乏するを以てその處置に就いて通牒す。

〔大鋸文書〕

口郡村々耕作之奉公人段々減少致し、持高多手作之百姓、曁御高より者人數少分之ヶ所作方手餘に相成、無詮方致押作候百姓茂有之躰。右等之儀者、近年御郡方之者勝手次第商人又者職人等に相成、町方奉公幷他國稼等猥に好候躰に付、自然与耕作人相減候樣子、不心得至極之事に而候。元來御郡方人別之者は、耕作に親、農業を本与仕、頭振等末々之者に而も、請作又者高持等に致奉公、古田者不及申、新開等山野端々迄作物行屆、養手入方等手後れ不致樣相勵可申儀に而、無高所或者家數・人數多御高少く、作方不行屆ヶ所は無據致餘業候儀格別に而、左樣之謂も無之作人次第相減、高嵩之者下男之手當も仝致兼候ヶ所有之躰。就中迄右奉公人澤山に而、口郡村々手支候儀者不及承候處、村々年々人數乍相增、却而當時奉公人

就中の次近年脫か

排底、耕作方指支に至候程之場所有之儀不容易、末々之者身過之本源を不存付、畢竟人別御縮方幷御改作御法則にも相振れ申儀に付、今般右奉公人取縮方兩御役所御詮議を請、左にヶ條書を以申渡候。

一、耕作男女奉公人翌年召遣候者、毎年七月朔日より取極可仕、夫以前に取極候儀一統難相成、萬一七月前申合奉公口相定候者有之候共、其相談取崩し、七月朔日後改而取極可申候。尤七月前密々に而も奉公取極候者有之、後に其儀破談におよび候共貪着に不及候事。

一、男女奉公口取極候者、其村々肝煎中ゟ奉公仕候者罷出、何村何左衛門方に一作奉公取極候間、組裁許ゟ届呉候樣申達、肝煎中に而者右申聞之者時々帳面に留置、裁許方へ一人一枚充之願紙面指出、裁許裏書を請、其奉公仕候者一人ゟ一枚充相渡、其裏書物奉公仕候者より被召仕候主人ゟ相渡可置事。

但、初而奉公に罷出候者は、先づ肝煎中方ゟ相願、村方に不指支候者、何方に而も耕作之奉公承屆可申事。

右肝煎中より裁許方ゟ願出候書付調方左之通。

覺

一、歲何拾何つ　　　　　　何村何兵衛娘

何　　誰

何村何兵衞二男

何　　誰

右何方何右衞門方に一作奉公相願申候、以上。

天保何年何月　　　　何村肝煎

誰　印

裁　許　殿

裁許印

表書承届候、以上。

一、給銀之儀、上男七貫五百文、中六貫文、下五貫文、上女四貫文、中三貫文、下二貫文、如斯一統不區々樣取極、右より餘計相渡召仕候儀難相成、尤人柄に寄、男女共右割合より者下料に召仕候儀不指支候。右給銀之外諸物与唱品々渡來候儀、其所先例之振を以、召仕候主人奉公之者相對相談之上取極可申候。給銀之外品々不渡來ケ所者、以來も可爲其通事。

一、給銀相渡候節、本人与親類之內相同じ、召仕候主人方ゟ罷出、古來之通請合證文相渡、給銀請取可申、此儀區々に無之樣一統證文取請可申、若證文指出方及異議候者、給銀渡方見

合可申事。

一、男女奉公人指支候ヶ所より、金澤等町方奉公豐他國稼に罷越居候者有之候者呼越、耕作奉公爲仕可申、萬一彼是及異議不罷戻候者、組裁許江及斷請詮議申、尤ヶ様之村方密々に而も、他國・他領・他支配男女奉公幷稼方に指出申間敷候事。

一、七月朔日後翌年之奉公口取極候者を、脇より給銀を相増召仕度旨申入、前約はづさせ候者は、奉公妨に相當り候間、其儀前約之方より斷次第裁許方に遂詮議、後約之者はづさせ可申。乍併六月晦日より前方に取極候分者、假令前約諾はづし候共及貪着間敷候事。

一、奉公人身勝手氣儘成致奉公、主人申付之儀も氣に不入事者聞流にいたし、我儘相働、或者主人を侮り過言抔申聞、野仕事等致麁抹、又者最初奉公致約諾、其手不相切内又外之所江致内約、最初之方より及斷裁許方遂詮議、無據不相望所に而も一作奉公不相勤候而者難相濟譯に相成被召仕候得共、農業に而も内仕事に而も麁略にいたし、主人手に餘暇を出候樣仕懸候者有之候者、村肝煎中急度加異見爲相改可申。夫に而も心得方不改候者は裁許江相達可申、致詮議其上にも不心得之者は、品に寄御郡所・御改作所之内江御達申上、受御差圖可申事。

一、男女奉公中出奔之身構いたし候者有之候者、見聞之通主人より内々肝煎中江申達、肝煎中より其奉公人之親類等江心得方申談、逃行不申様縮方入念相心得可申事。

朝配は宿下りの義

一、居村に奉公人指支候者、町方等他支配ゟ罷越居候奉公人呼返召仕可申。夫に而も不行届候者、他村ゟ出申奉公人引返召仕可申。且一郡に奉公人指支候節は、他郡へ出致奉公候者呼返召仕可申事。

一、奉公人致手餘在付兼申ヶ所者、是又可申聞、詮議之上奉公爲在付可申事。

一、男女奉公人朝配之儀、ヶ所に寄區々に相聞候得共、以來口郡一統正月出入五日、五月田植揚り出入五日、七月出入五日、十一月出入七日、年中廿二日相定、此外增日等一圓仕間敷候事。

一、奉公中萬一相煩候者、朝配之外日數五日致用捨、六日以上相立候而も不致快氣候者人代立可申。若致病死候者、其病死之時節に寄給銀等日割を以可相返。且致出奔候歟又者緣付候樣之節者、是又人代立、耕作不指支樣爲相心得可申。右之趣及相違候者、奉公人之居在所村役人中方に詮議譯立可申、彼是相滯候はゞ裁許方ゟ斷次第遂詮議可申事。

一、是迄致奉公候者奉公を指止め、自分家ゟ引込請作たり共致農業候者可爲其通候。萬一奉公を止め商人又者職人等に相成、且者他國ゟ稼に罷越候抔耕作に不携候者、暨女に而も奉公を止め自分宅ゟ入致手稼候樣之儀一圓難相成。右樣之者者男女に不相限、元之通奉公爲仕可申。女緣付候者は格別之事。

寶達村の者は黒鍬に從事したるをいふ

一、高持候者皆卸にいたし、其身者商人或者職人に相成、又者持高之內致手作候得共作方は下男等に打任せ、自身田畝ゑ不入致商賣等候者有之。其村方耕作行届候得者格別に候得共、萬一致手餘候得者餘業爲指止、持高自身致手作可申。若彼是申立及異議候者、御改作所ゑ御達申上、品に寄御縮高に可被仰付候事。

一、口郡之者寶達村之者に類し、諸普請等稼方を專に致し、外々ゑ罷出候者多有之躰。以來者寶達者之外一圓罷出申間敷、萬一寶達者之名を借罷出候者有之候はゞ、御咎可被仰付。無高所之者は品に寄裁許方に承屆、爲相稼可申候事。

一、作方手餘之村々、職人幷商人有之候はゞ、其商賣不殘爲指止、專ら爲致農業可申。萬一密々に而も餘業不指止、耕作二段に心得候者は、持高相調理、是又御改作所ゑ御達申上、品に寄御縮高之御詮議可被仰付。惣而一村之惣高者、百姓者不及申に、頭振迄互に心懸、手餘不致樣、作方を以渡世之第一にいたし候樣相勵可申事。

一、諸職人相增候而者、農業指支申候間、以來御郡方職人勝手次第不致樣嚴重可被申渡候。萬一職人に相成候而も、其組曁其所柄に應じ家數・人數有之、一圓作方手餘不致ヶ所者、裁許ゑ相願候上に而重々遂詮議、承り屆可申。耕作に指支候ヶ所は、假令願出候而も承屆申間敷。且不願出下々に而勝手に相稼候職人者爲指止、急度咎可申付候。右職人不指支ヶ所願方左之

通。

覺

何村何右衞門弟とか

何　兵　衞

又何村頭振

何右衞門とか

右大工・桶屋・紺屋・室屋・木挽・壁塗・鍛冶とか商賣相願、在所耕作方聊指支無御座候間、願之通被仰付可被下候、以上。

天保何年何月　何村肝煎

誰　印

裁許殿

表書承屆候、以上。

裁許印

右口郡之内近年耕作奉公人拂底に相成、作方指支、中に者手餘之ヶ所も有之旨相聞候。如斯成行候而者耕作方茂不容易儀に付、御伺申上候處、御郡御奉行所・御改作御奉行所御詮議之上、前件之通可申渡旨被仰渡候條、一統被得其意、末々迄不相洩樣得与可被申渡。萬一此末召仕候百姓方に而も、又者奉公人に而も、今般之條目に相振れ、外々ゟも指障候樣之儀有之

候者、其段組裁許迄斷出可被申、急度詮議之品可有之候條、是又可被得其意候、以上。

天保十五年四月

内島村　佐次右衛門
三輪　宇八郎
當摩　太間
高島　庄助
北村　惣助
高田村　平兵衛
堀松村　平七郎
能登部下村　瀨兵衛
地頭町村　吉左衛門
笠師村　喜八郎
鮻目村　五兵衛

邑知組三十九ヶ村肝煎・組合頭中

五月五日。前田慶寧初めて節句の登營を行ふ。

〔公私心覺〕

五月三日

一、明後日節句初而御登城御禮、如御先例御老中・若年寄中へ以御使者被仰達候旨、聞番名前之御屆書寫指出、入御覽候。明後日於御城御屆仕候由。

一、節句初而御禮被仰上候に付、於西丸御謁、御壹人立。當日御祝詞、且五節句初而御禮之御禮被仰述候筈。御先例、並坊主衆より書取越候分も入御覽候事。

一、端午爲御祝儀、明後五日公方樣より筑前守樣江、時服三・干鯛一箱御拜領之御沙汰之旨、中澤主稅助殿より申來候旨、聞番より右紙面差出。

五月五日

一、今日殿中詰揃者罷出候。相替儀無之、殿上之間に御溜り也。御禮は大廣間に而、八朔之御太刀無之迄に而、外御替り無之候。今日尾張樣御居殘りに付、大隅守殿等御白書院御禮之御方御退出、追付御下り被遊、西丸江御登城、此間記置候通當日御祝詞被仰述、畢而五節句初而御禮被仰上候御禮被仰述、御退出、四半時御歸殿。

御時服三　御紋付淺黄御帷子一段　御紋付黑綸子御單一段　白羽二重一疋

包熨斗　干鯛一箱　御目錄　御奉文

右御禮女使を以被仰上候事。

但、初而御拜領に候得共、表向御禮無之、女使に而御禮迄也。則御先例等を以、右之趣今日聞番より御屆書差出。

一、御時服に指添罷越候御下男頭以下持人迄、御菓子・御酒・御肴等被下候振に候得共、是迄相公樣ゟ御到來之節相願候而、代金總樣に而貳兩貳歩被下候由。今度も右之御振に而、代に而貳兩貳歩被下可然と御用達申聞、其通昨日相廻置候。依而御茶・御たばこ盆被下候迄也。

五月十日。大聖寺侯前田利平歸邑の途金澤城に登る。

〔成瀨正敎日記〕

五月八日

一、備後守樣御供之御近習頭土田權之助より、年寄中迄紙面にて、前月廿七日江戶表御發途、當五日靑海驛迄御着之所、親不知波高に付同驛に御止宿、同六日泊驛ゟ御着被成候間、金澤ゟ九日御着、十日御登城被成度思召之旨申來、右紙面入御覽候事。

〔御家老方等諸事留帳〕

五月九日

一、備後守樣親不知に御逗留有之、昨日御着、今日御登城之筈之處、今日御着に相成、明日御登城、諸役人揃六半時過、各五時揃之旨月番より演述有之。今日高岡より御着に而、御着

遲く相成可申由に付、明日退出より御機嫌伺に罷出候筈之事。

五月十日

一、今日備後守樣御登城に付、御殿揃刻限朝六ッ半、時服・布上下着用之旨。御横目所披見物有之に付、上下着用五ッ半頃致出席候事。

一、備後守樣昨夕暮前之由御着之上、如例御近習頭御使有澤采女吉を以、御着御歡、且明日御登城被成候樣、何も其節可被仰入旨被仰進候。右御使夜中に相成候由。

一、御登城御指支無之旨、四ッ時頃如例主付御近習頭より申上候所、四半時前御登城、芙蓉之間へ御溜、御茶・多葉粉盆出之。御口上御家老庄兵衞承り、御近習頭を以申上り、御居間書院御通之儀被仰進、程なく御通、御多葉粉盆・御茶出之。御居間御宜に付、織人下之口より罷出、御保養中に付御居間に而御對顏被進候間、御通被成候樣申上、直に上之口より御先立仕御通り。御三之間御衝立際へ主税罷出居、無刀に而御先立相替り、御居間御緣側に而落し、備後守樣御敷居內三疊目計へ御着座、上之口より御前御出、御上段下二疊目位へ御着座、御對顏被遊、御熨斗出之、御多葉粉盆・御茶出、暫御對話。無程御退出に付、其節は御弓之間御衝立際に主税罷在、御前御居間橫御緣側迄御送被遊候。御三之間より織人御先立仕、御居間書院に而落し、夫より御奏者番御先立仕、芙蓉之間へ御溜被成候。夫より御退出之事。

五月十日。前田慶寧江戸城本丸火災に罹るを以て閣老を訪ふ。

〔公私心覺〕

五月十日

一、今朝遠板打候所、殊之外大火に而御城相圖打候。半途見罷歸、御城内之御樣子之旨、山森より爲知有之。五つ時前本途見罷歸、平川御廣式御燒失之由申聞候段、重而爲知有之。當番御附頭よりも、山崎氏江申來候旨に付、五時前罷出候處、追付小幡氏も出席、示談之上火事御行列爲相揃候儀伺、被仰出、御附頭より申談、御小人南並八筋等、兩人罷出呼立候處、追々御人數相揃候。差く相揃候上、略御行列之分迄相殘り、其餘は退散申談、右略之分は御殿詰に被仰出候。今朝聞番先御伺御機嫌、御使者相勤候段拙者迄被申聞、其段申上候。聞番呼立候處、山森權太郎罷出候に付、御直勤之儀如何可被爲在と及詮議候處、天保九年西丸炎上之節、御並御聞合之、御月番江御直勤に御座候之間、今度も御直勤可被遊儀と奉心得候旨申聞候。いづれ朝之内は御途中混雜に可有之、昔頃壹人西丸迄被罷越、御並之御樣子も猶又被承合、且御途中之樣子も被申上候樣申談置候。

一、九時過岩田内藏助罷出、御月番牧野殿等御門前へ被罷越、御樣子爲聞合申候處、追々御勤も御座候御樣子。御途中只今に而は込合候程之儀無御座候間、追付御出被遊候而も可御宜

旨申聞候に付、其段申上奉伺候處、追付御出可被遊旨被仰出候に付、申談早速御行列相廻候。

一、略御行列に而御出馬、御先乘聞番山森權太郎、御番頭騎馬園田一兵衞、組頭加藤三郎左衞門、物頭御人數召連、總跡より指續岡田助右衞門、何も御居宅御門前に而馬上御供、南御門より御出、毎之御道筋通り也。右助右衞門は神田橋御門外に而殘る。其餘騎馬之面々無構騎馬、桔梗御門外下馬の手前に而下り立、御馬脇ゟ進む。牧野備前守殿並西丸御老中戶田山城守殿御勤、御門下敷石之上に而御下馬、御笠被爲取御渡、拙者御先立相勤如例。御門下に而御口上被仰述、畢而聞番より御口上之趣書取御取次へ相渡候。右御兩所御勤相濟、肥後守樣御門前に而致騎馬、御供相替候儀無之、御戾り被遊。尤南御門乘通し、御居宅御門前に而下り立、御馬脇へ進候事。路次惡敷、御馬脇も一統脚半相用候事。

但、御往來共降候へ共強降も無之候。御帽子は爲御持、御笠被爲召、御わらんぢ御用被遊候。外樣には御駕籠も有之、又御馬上に而御長柄傘爲御持に候へ共、此方樣には御傘爲御持無之、右御笠迄に候。如例御供人雨具無之、帽子も著用無之、拙者共にはかづき候事。

五月十二日。前田齊廣夫人寶圓寺及び天德院に參詣す。

〔御家老方等諸事留帳〕

五月十二日

一、眞龍院様五半時之御供揃に而、寳圓寺・天德院ゟ御參詣、御戻り夕景にも可相成御様子に付、今日御寺ゟ拜禮に出不申事。

五月十七日。江戸城本丸燒失の報金澤に達す。

〔成瀨正敦日記〕

五月十七日

一、當月十日曉七ッ時頃より、江戸平川御廣式より出火に而、御本丸御燒失之由、備後守様江戸御屋敷より之御注進足輕飛脚一人、同十一日曉天發足之旨に而、當十五日巳の下刻頃境表罷通、御關所に而申聞候旨、境奉行より之紙面、今曉七ッ時頃御用番より以御近習頭入御覽候旨、出席之上承る。

五月十八日

一、御本丸炎上に付御機嫌伺之御書、御老中方御連書、堀殿、大奥老女衆、戸田殿、一位様御機嫌御伺御老中方御連書、御簾中様御伺戸田殿、右御書都合六通、廿一日之御日付に而出來、今日御用人へ御渡、今日不時立へ傳附遣候旨。

〔御老方等諸事留帳〕

五月十八日

一、當十日曉天公邊御城大奥より出火、御本丸御燒失。同日出立之早飛脚昨晝到着、内記等より紙面來、御城迄に而丸之內江不出、四時頃歟及鎭火候御樣子也。筑前守樣九半時頃御老中江爲御機嫌御伺御出馬之由。

〔溫敬公記史料〕

五月十日江戶大城火。十七日報至。自明曆三年災至茲百八十八年。

五月廿一日。前田齊泰江戶城本丸燒失を報ぜる奉書に對し返簡を上る。

〔成瀨正敦日記〕

五月廿一日

一、御本丸炎上に付、宿繼御奉書相渡り可申哉之旨等、御類例等荒井殿へ十一日聞番罷越御咄申置候所、十二日に御用御賴御老中へ、聞番より御內慮相伺候はゞ可然旨御申聞に付、翌十三日朝大炊頭殿內玄關江聞番罷越御內慮伺、且御類例書指出置候所、同日夕御奉書御渡に而、大炊頭殿より御挨拶は無御座旨等、聞番より言上。

去十日曉御本丸炎上、公方樣・一位樣・精姬君樣西丸江御立退、御機嫌被爲替御儀無之候。西丸・二丸無御別條、右大將樣・御簾中樣御機嫌被爲替御儀無之候。右之趣爲可相達如此候、恐々謹言。

五月十三日

牧野備前守　判
阿部伊勢守　判
土井大炊頭　判

御　名　殿

當月十三日之御奉書、御宿繼今朝到來、致拜見候。去十日曉御本丸炎上之段承知仕、驚存候。公方様・一位様・精姫君様西丸江御立退、御機嫌被爲替御儀無御座、西丸・二丸無御別條、右大將様・御簾中様御機嫌被爲替御儀無御座旨被仰下、恐悅之至奉存候、恐惶謹言。

五月廿一日　　御名御字　御判

土井大炊頭様
阿部伊勢守様
牧野備前守様

右之通御請出來、如例夫々御認相濟、御用番へ御渡事。四ッ時過に相成候事。

五月。火事の際世子前田慶寧に馬上にて邂逅したるもの、作法を告ぐ。

〔御參勤御供之覺〕

弘化元年五月廿八日

一、左之通申渡之。

御横目江

若火事之節馬上に而罷出候人々、筑前守様江御出向申上候節、蹲踞に不及段被仰出候條、此段一統可被申談候事。

辰　五　月

六月十二日。昨今兩日寶圓寺に於いて前田吉德の百回忌法會を執行す。

〔雜事日記〕

護國院様百回御忌御法事、來月十一日・十二日於寶圓寺就御執行、御射手・御異風稽古幷諸組弓・鐵炮稽古之儀、御法事初前日より御法事中相止可申事。

一、鷹野其外諸殺生、且又鳴物之儀、十日より十二日迄三日可有遠慮候事。

但、指急候普請等之儀は不及遠慮候之事。

五月十八日　　前田美作守

來月護國院様百回御忌御法事於寶圓寺御執行之節、拜禮刻限等十二日未刻より申刻迄。右之通候條、刻限無相違様可被相心得候。且又下乘より內若黨一人可被召連候。尤家來不作法無之様嚴重可被申付候。

一、服染帷子・布上下可有着用候。

一、山門に而刀・扇子爲持置、御寺玄關上り口横疊二疊目に而可有拜禮候。將又老人・幼少之人々は、裏門往來勝手次第候事。

一、煩指合に而難被罷出人々は、來月九日迄に書附を以拙宅ゟ可有御案內候。

但、餘者前々之通。

五月廿二日

〔成瀨正敎日記〕

六月十一日

一、今明日護國院樣百回御忌御法事、於寶圓寺御執行に付、今日卯之上刻拜禮罷出候樣、先達而御觸出有之候付、六ツ時過長袴着用より拜禮罷出、六ツ半時過致歸宅候事。

〔溫敬公記史料〕

六月十二日。修護國公百回忌法會于寶圓寺。本多播磨守代公進香。

〔溫敬公記史料〕

六月十二日。大赦。

是月は大盡なり

六月晦日。昨今兩日天德院に於いて前田齊敬の五十回忌法會を執行す。

觀樹院樣五十回御忌御法事、來月廿九日・晦日於天德院御執行就被仰付候。頭分以上之面々勝手次第拜禮被仰付候條、廿九日罷出拜禮可仕事。

但、長袴可致着用候。

五　月　　　　　　奥村内膳

一、觀樹院樣御附相勤候平士等之人々、願次第拜禮被仰付候條、晦日罷出可申事。

來月廿九日、晦日觀樹院樣五十回御忌御法事之節、近例之通稽留番所江指止、足輕建警固被仰付候事。

五　月　　　　　　御横目

觀樹院樣五十回御忌御法事、當月晦日於天德院就御執行、御射手・御異風稽古幷諸組弓・鐵炮稽古之儀、御法事前日より御法事中相止可申事。

一、鷹野其外諸殺生、且又鳴物之儀、廿八日より晦日迄可有遠慮候事。

一、普請之儀廿八日より晦日迄指止可申事。

但、指急候普請は不及遠慮候事。

六月十五日　奥村内膳

〔成瀬正教日記〕

六月廿九日

一、觀樹院樣五十回御忌、今明日御法事於天德院御執行之所、御保養中に付御參詣不被遊候。明晦日御名代年寄中被仰付候旨被仰出、御近習頭へ申談、御香一炷相渡す。

〔御家老方等諸事留帳〕

六月廿九日

一、今朝六半時前出宅。

一、御法事三座施餓鬼有之也。

一、內膳御法事奉行之所、氣色中に而不被出、俄に播州ゟ被賴被相勤。將之佐氣色被觸、明日之所斷に付、人少に相成、式部明日相勤被申候事に相成由に而、万之助・拙者兩名に而承知に紙面來。

一、九半時過相濟退出。

六月晦日

一、例刻より出席、直に長袴に相改、万之助と一集に拜禮に出る。今日調子早に而各歸りに

逢。

一、今日は上堂也。

一、裏門より入、表門より歸る。

〔温敬公記史料〕

六月晦。赦。

六月。江戸城燒失に付き諸侯の獻資に關する雜說を藩に告ぐ。

〔控　帳〕

書通略。前月十日御本丸炎上、何共奉恐入儀、大變成事出來仕候。右に付御本丸御普請方御用、御老中土井大炊頭殿初、御懸り之御役人追々多被仰付候。同十七日より井伊掃部頭殿を初御大名方、追々右御普請に付御上納金被成度御內願有之、御內願之通り御上納金被仰付候。御上納金御願之方々金高等、別紙御沙汰書寫入御覽申候。右に付此方樣此度御かね御指上方如何可相成哉与、御屋敷內人々御爲を奉存より、面々之了簡色々与申つぶやき罷在申候。右つぶやき罷在候趣は、薩摩殿等も多分一萬石に付二千兩計之割合、過分之金高に御座候。然所御願に而御上納与申時は、何れ御家中曁御國民之深く傷みにも成不申譯御座候故之儀与申さねば成り不申、多分御半知にも當り候過分之金高御願に而御上納、夫程皆々御勝手御宜共

不被存、都而合點之參り不申ものに御座候。中には右之御並合に候得者、此方樣に茂二十萬兩又は十六・七萬兩も御願御指上無御座而は成間敷哉抔与申雜說も御座候得共、當時御急迫之御勝手振、御家中之困窮等を不顧、外々之合點之參不申並合に連而、御家中之成立御國民之御撫育方も構なく樣之事を、假りにも申成候儀は不相當儀に御座候。其上御願に而御上納与申時者、下々一統不心服之儀。若又御手傳被仰付、譬ひ右之割合より茂餘計之金高に成候而も、被仰付候儀に候へ者、一ヶ年御家中半知に成候ものは、二ヶ年半知に成候而も一統不心服之儀は無御座儀。左候へば何れ外々之並合に被爲連而、御指上之儀は無御座筈之御事歟与つぶやき申候。

一、前條雜說之樣に、御大名皆々右之割合に而御指上有之事に仕見申時者、大凡之見圖左之通り之譯与つぶやき申候。

一、千九百萬石計　萬石以上之御大名御知行大凡圖〆高

但、一萬石に付二千兩之割合与仕候得者、右御知行高に當り候金高左之通り。

一、三百八十萬兩計

御本丸御建物坪數は相知れ不申事に候得共、一萬坪計とも申候。是も慥ならす事故、大凡一萬五千坪計与假圖仕、御普請御入用金もならし一坪に付百兩圖与假圖候へば、一萬

五千坪に而百五十萬兩与相成申候。左候得者殘り二百三十萬兩之御餘り金に相成申候。ヶ樣之金高を御取集、日本中困窮彌增之儀者、當時公邊之御仕向、諸大名にも傷み無御座候に与之御趣意に者、可有御座御事共被存不申候。既に公邊より被仰付候萬石以下之御觸渡には、五百俵以上は百俵に付金二兩、五百俵以下は百俵に付金一兩二步と御座候。公儀御直勤之分すら右之通りに御座候へば、御難澁之御中より御家中半知にも可成程之金高を御指上抔与申儀者、雜說たりとも不相當儀与つぶやき申候。乍去內外上下之不都合を深思慮も不仕、外聞之立派を競ひ、十六・七萬兩以上之御上納与申成候者は人多に、御家中之成立御國民之御撫育方は公邊江御奉公之御第一与申處江目を付、御實用之筋を申候而、並合之御上納金には不及儀与申者は人少に而、氣之毒成もの与奉存候。

若萬々一外々御並合之樣成御不都合之御上納に相成候時者、此御大家に一人も人なしと申樣成譯、誠に口惜敷次第与、雜說に對してこれをひらくため押切而つぶやき申候。右者此許之雜說咄合与申もの、御國に而者頃日折角御僉議も可有御座候哉与奉存候。御家中江も懸り申程之時者、右御僉議に御預りも可有御座哉。其節は衆人之申所も御考合之一つにも成可申哉与奉存、御咄申上候。先便申上度奉存調懸申候得共、何分得透不申、今便申上候事に仕候處、此間公邊之御模樣少与替り候事承り、何に仕結構さうに被存申候。右被仰出之寫も入御覽申

候。此御様子に而は前條長々敷御咄申上候にも及不申与奉存候得共、謂懸置申候故其儘に申上候。前月廿四日奥御右筆に而御普請方御用も被仰付候田中休藏殿御役御免に相成、其翌日より与歟土井大炊頭殿御登城無御座、胸痛御難儀与歟申事に而御引籠之由。土井殿御引に付、早速御普請御用阿部伊勢守殿ゟ被仰付候由、何角御模様替り可申様に相見え申候。

六月。十村等、能登口郡の百姓が奉公を廢して日雇となるを禁止せられんことを稟請す。

〔御郡典〕

口郡村々耕作等之日用賃、近年猥に高料取請候様相成候に付、末々日雇取いたし候得者、割合宜敷与申成、奉公指止日雇取に相成申者不少。近く迄植付前・稲刈時節等手張候刻に而も、男は一日米三升、又者錢百五十文之日雇賃に而、女は同草等取申時節に而も、四・五十文限之賃に候處、天保十二年之頃より俄に賃錢高くいたし、男者一日二百四・五十文、女は八・九十文も取申候。俄に奉公人彌増相減申儀に御座候間、男女日雇以前之通相心得、奉公を指止日雇取に相成候儀御指留被下候様仕度、今度口郡耕作奉公人取縮方も申渡候得共、右之趣相洩候に付御窺申上候、以上。

辰　六　月　　　　　　　三　輪　宇　八　郎

當摩太間
高嶋庄助
北村惣助
高田村平兵衛

御郡御奉行所
御改作御奉行所

右小紙御付札
本文之通承届置候事。

御郡奉行
改作奉行

七月八日。銀手形缺乏するを以て金銀の交換比率を公定し、之が混用を許す。

〔觸留〕

頃日引替所へ集り手形無數に付、金子指出候者へ銀手形と引替遣候儀難出來、銀支に相成、米買人等指支候體に候。依之右集り手形有之候迄、當分御家中拂米代を初、町方諸指引等、

無數は稀少の義

金壹兩に付七十目之極相場を以、金銀入交通用いたし、尤上納方之儀も同様相心得可申候。且兩替商賣人金子賣買之節は、極直段之外定之口錢爲請取可申候。

右之趣被得其意、早速同役中傳達、組・支配不相洩様可被申渡候、以上。

七月八日　長将之佐

七月九日。前田齊泰更に參覲を延期すべきことを告ぐ。

〔成瀬正敦日記〕

七月九日

一、御前御様子今以御出來御不出來も被爲在、著中別而御難儀に付、此御様子に而は迚も九月中長途之御旅行難被爲成旨、御醫師中も申上候付、當秋御參府御延被成度思召候旨被仰出候。右に付御屆方之儀、先荒井殿へ及御内談、御願書等相調入御内見、委曲申上候様被仰出候旨、今日聞番へ申遣。坂井。

七月十日。旱天減水するを以て家中の屋敷に用水を引入るゝことを禁ず。

〔觸留〕

頃日照續、川々及減水、村々用水指支候。然處御家中居屋敷內江惡水通之口を付、水取入候向も有之候間、御郡奉行より村役人相廻及案內、右口爲指留候條、尙又前段之趣に付、侍屋

敷幷町江も川水を汲、打水堅不仕樣致度、尤奉行より役人相廻爲相咎可申候間、此段一統申渡候樣仕度旨、御算用場奉行申聞承屆候條、可有其心得候事。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

七月十日　長將之佐

七月十三日。末期養子たる者の養母に對する服忌に就いて定む。

〔雜事日記〕

定番頭江

末期養子之者、養父死去後其妻致死去候而茂、跡目相續之上養母方親類服忌受不申事に心得候頭・支配人茂有之樣子に候得共、養父死去以後其妻死去之分者、養母之服忌殘り日數有無に不拘、都而養母方親類服忌受可申儀に候。

但、安永九年一統相觸覺書に、末期養子之者養父之妻先達而致死去候得者、右妻方之親類服忌無之与有之。右先達而死去与申者、末期御禮申上候以前之儀に候。假令右御禮申上候同日其妻死去之分茂、本文之通に候。

一、養父致再婚、若其妻茂死去之後、末期養子に相成候得者、初妻を母与相調可申旨右安永之節之覺書に有之。右後妻茂末期御禮申上候同日以後死去候得者、後妻を養母与相立、親類

服忌前條之通請可申候。

一、他國道中等に而致死去、末期御禮不申上分者、死去之日を以期与相定可申候。

一、五十歳以上に而養子相願候分茂、養子願書指上候以後其妻致死去、追而願之通被仰出候得者、養母方親類服忌受候儀、是亦前條之通に候。

右之趣夫々可被申談候事。

辰七月　長將之佐

別紙御用番將之佐殿御渡、夫々可申談旨被仰聞、卽御渡之覺書寫一通差進候條、御承知被成、御同役・御同席御傳達、御組・御支配御申談、且又御組等之內裁許有之面々は、其支配江茂不相洩相達候之樣御申談可被成候。御廻達落着より御返可被成候、以上。

七月十三日　九里步

七月。諸郡船舶に極印を施すものは舊に依つて其郡の御扶持人を以てせんことを答申す。

〔司農典〕

諸郡渡海船幷獵船・川舟共極印打入方、前々より其郡々御扶持人手合に而打合儀に候處、諸郡區々相成候旨御聞及に付、以來船裁許手合において極印打入候而者如何可有之哉、猶更詮議

退は退轉の義

佐渡守は前田齊敬

仕御達可申上旨被仰渡、奉得其意候。右者前々より御扶持人手合に而打入申譯に而、年々散小物成調理方退・出來之詮議方にも響申儀に候間、前々之通諸郡共御扶持人手合に而、極印打入申儀に被仰付置候樣仕度奉存候。尤今度御詮議之趣も御座候間、以來諸船退・出來綿密相調理、出來之分毎年不相洩極印打入可申与奉存候。右私共詮議之趣覺書を以御達申上候、以上。

辰七月　諸郡

渡海船等極印打入方之儀、御改作所より御尋之趣有之、當七月各樣御詰合御相談之上、覺書御達申上置、御承知之通に御座候得共、其節廻狀仕不申候間、爲念別紙相廻申候。御承知之上落着より御返可被成候、以上。

辰七月　諸郡

八月二日。徳川家慶、前田慶寧に放鷹によりて獲たる雲雀を贈る。

〔筑前守樣御用留寫〕

今日以上使御鷹之雲雀御拜領被遊候旨、別紙に申進候通に御座候。右に付拙者儀、筑前守樣江恐悅申上候。寬政六年佐渡守樣御鷹之雲雀初而御拜領之節、御鷹之鳥御拜領は二度目に候へ共、雲雀初而与申處に而、其表河內守等よりも恐悅被申上候。今般も雲雀御拜領は御初而

に候間、其表よりも御附之方に而筑前守様え恐悦御申上被成候様に与存候、以上。

八月三日　　遠江守

圖書等兩人様

八月廿一日。天の網にて雲雀を捕へ及び雲雀の賣買を禁ずる前令を守るべきを告ぐ。

〔小木貞正献本〕

てんの網に而雲雀取候儀、前々より御停止に候旨等、享保十四年・文政十年にも一統申渡置候通に候處、近年右殺生いたし候者も有之躰。中には巣揚抔致候者も有之躰に相聞え、沙汰之限に候。向後右躰之者見請次第召捕候様、今般改而廻り役人共へ申渡候。

一、雲雀子并雲雀商賣仕候儀、越中筋は勿論、加州・能州共御停止に候。依而右之品他國より爲商賣致持參候者有之候はゞ、其手先より御鷹方取次え相斷、指圖之通商賣可仕旨、享保十四年・文政十年御郡方・町方へ申渡置候處、近年猥に取扱候躰相聞、不埒之至に候。以來右躰之族無之、先達而申渡置候通り、心得違無之様、今般改而御郡方并鳥屋共方へ申渡、見咎方之儀も改而申渡候。

右之通可申渡旨被仰出候條、御家中之面々等、家來末々迄心得違無之様、一統可有御申觸候

毎日帳書拔によるに本令は十六日發布なり

事。

辰　八　月

別紙若年寄中帳面寫相越候條、被得其意同役中――以上。

八月二十一日　　前　田　近　江　守

志村平之丞殿

八月廿三日。前田齊泰、その子豐之丞と共に石川郡粟崎を經て宮腰に行歩を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

八月廿三日

一、今日御行歩御出被召連候付、五半時過羽織・馬乘袴に而出席伺御機嫌、四半時前御供廻りに而、三人共粟ヶ崎道より御先江參り、無程御駕籠に而大野道より御旅屋へ被爲入。其節三人共同所御門內江奉出向。暫有之、豐之丞殿被爲入、御一集に御旅屋へ被爲入候。御膳被爲召上、豐之丞殿へも被進、夫より御同所樣爲御持之御品被上、御前にも被仰付候御品も被召上、且被進、御膳何も御頂戴被仰付候。金谷より被進候御側廻りへ被下之品も、於御前頂戴被仰付。八半時過同所御立、御歩行に而五郎島邊より大野町之內迄御歩行被遊、夫より砂原

に付御駕籠に被爲召、宮腰中山主計方へ御小休、豊之丞殿も被爲入、無程御駕籠に而夜六半時前御歸殿被遊候事。

〔溫敬公記史料〕

八月二十三日。公病後始命駕。自宮腰至粟崎。

本文は自粟崎至宮腰を誤れるなり

〔每日帳書拔〕

八月廿四日

一、相公樣御滯後、久々に而昨日御行步御出に付、主稅等へ示合之上、各出席切御機嫌相伺可然与遂示談、以織人御機嫌相窺候事。

八月廿四日。能登口郡の十村等、收納米取扱方に關し規定す。

〔司農典〕

納米繩皮等之儀に付取極之覺

一、繩・皮之儀、御米納前御藏所江、其組棟取肝煎兩人、功者成手代二人指出、去年御渡之見本繩・皮通り、少も手薄無之樣出來爲致、村每御米に應じ持出、重々吟味之上受取、繩・皮御藏番江指預置、御代官指向候節入用程受取可申事。

一、每月納米高、乃至五十石程宛相納可申儀に候處、撰方不穿鑿に付、石數餘計相納候御代

通はかよひ

官有之候而者、綿密に相納候御代官却而村方より申立候儀可有之候間、右撰方不區々樣相互致吟味、一樣に相納可申事。

一、繩・皮俵拵等之儀者、右之通遂穿鑿候得共、米性等仕立方不宜、是迄癖付有之村方に者、其組裁許江申遣し候得者、早速夫々可致吟味事。

一、割足に相渡候御米納、是迄煩敷儀も有之候間、以來惣預御米納、割足相濟候迄相見合可然候得共、左候而者皆濟手後に相成申に付、十一月中相見合可申事。

一、御代官被下口米、村方江賣渡儀も候はゞ、賣手形相渡可申、右手形村役人江取立、裁許江相達候得者、肩印致し可申候。右肩印無之御米村方に置請置、後日故障出來候得者、買受候村方より爲致辨米可申事。

一、納米通村々江御代官より相渡置、毎日計り米相記、右通之表を以、御藏番立會、積並等相調可申事。

一、被下口米賣渡之手形相渡し、居成に御收納米通ひに載候分者、正米積並に相立可申、尤御藏番立會相調理可申事。

一、納米銀納之御代官江賴合候儀、前々御定之通一圓不相成候事。

一、現銀御拂米等御印御渡之分、御書替申請、追而積替迄組裁許より見除、指紙御代官へ相

渡候分者、入米に相立、通ひに載可申事。

附り、追而御米積替遂勘定候上者、右指紙取返し可申、尤見合印章、裁許より御代官中へ一枚宛相渡置可申事。

一、年暮皆濟之上者、御藏戶前鍵御扶持人方へ預り置、追而升廻御封印下に相成候迄者、御扶持人時々致出役、御拂米指引仕、戶前封付切可致旨、近年被仰渡候得共、御扶持人迄に而者駈廻方行届兼候に付、組裁許罷出、御米入拂遂勘定、戶前封切付可致、尤御鍵之儀者、藏本裁許方ゟ預置可申事。

一、皆濟相濟候上、組裁許御藏所ゟ罷出、遂勘定可申、尤御扶持人手代相廻し可申儀も可有之事。

一、正月出府前、是まで之通御郡御扶持人罷出、御藏納米致見分候間、是迄之通相心得可申事。

一、每歲正月二十日まで之內、御藏所へ其藏組合不殘打寄、人々納米高等惣決算致可申、尤其御藏元より日限取極、寄合之廻狀致し候はゞ、無名代罷出可申。右勘定相濟候上者、其組裁許より御扶持人ゟ相屆候得者、爲引合方与御郡手代九平相廻し、尙更綿密相調理させ可申事。

右ヶ條之内、村方致承知置可申儀者、組裁許より村役人一統ゟ入念可申渡置事。

辰八月二十四日

三輪	宇八郎
當摩	太間
高島	庄助
北村	惣助
高田村	平兵衛
堀松村	平七郎
能登部下村	瀬兵衛
內島村	佐次右衛門
地頭町村	吉左衛門
笠師村	喜八郎
鮫目村	五兵衛

金丸寄合所

八月。盲人の琴・三味線・針治・導引を業とするものは檢校の支配に屬すべきことを令す。

〔御郡典〕

定番頭江

俗盲人共、琴・三味線等針治・導引を以致渡世候分は、可爲檢校之支配旨等に付、從公儀相渡候御書付之趣、去年九月横山遠江守等より一統江申渡置候通に候。然る處今以座方江入候者無之由。加樣に押移り候而は、座法不整之筋も有之に付、俗盲調理役之者共相廻、嚴重爲相調理候筈に候條、右御書付之趣尙更心得違無之樣、夫々可被申談候事。

辰　八　月

九月六日。江戶城災に罹るを以て家中・町・在より献金の割合を定む。

〔諸事要用雜記〕

九月六日

一、今日一役一人充御用番へ御呼立候由之事。

右は今般御本丸炎上に付、御上金之儀御內慮御伺、八萬兩御上げ被成度旨御屆被成候付、御家中並町・在御借上銀被仰付候段被仰渡候割合、左之通り之事。

御家中百石に付六十目之割、三ヶ年に御借上、一ヶ年二十目、當十月中上納、來年・來々年は七月中。町家一軒付一ヶ年十二匁充三ヶ年上納、御郡方一軒に付六匁充三ヶ年上納。

小前の者はの次脱字あるべし

一、町・在之分は、小前之者は、身元之者乃至五軒・十軒何軒分も持候樣之僉議之事。

一、右組々ゟ申談方は、天保五年六月御借上銀之格に、廻狀に而申談候等事。

〔郡方御觸〕

御家來中ゟ被仰渡之寫

先般江戶御本丸炎上に付、金八萬兩御指上被成度段被仰立候。然處一統承知之通、當時別而御逼迫至極之御勝手振に而、何分御手當も無之候得共、御公役之儀不被得止事被指上候。依之乍御心外、御家中知行割を以別紙之通、當年より三ヶ年御借上銀被仰付候。尤町・在ゟも御借上銀被仰付候得共、御不足に付、此分者地・他所々御借入被仰渡候。其外御平常御入用、是迄段々御手詰之上に候得共、唯今より猶又格別之御省略等を以、幾重にも御辨合出來之樣被仰出候條、右之趣致會得御用立可申候。

九　月

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候事。

覺

一、自分知百石に付一ヶ年二十目宛、當辰年より午年迄三ヶ年御借上之事。

一、御切米御扶持方之分、知行に直、右割合通御借上之事。

三の一被下は當主幼年中前祿の三分の一を與へらるゝもの

一、隱居料之分茂一統之割合通御借上之事。

一、遠慮等被仰付置候人々も、前段割合を以御借上之事。

一、三の一被下置候人々も、一統之割合を以御借上之事。

一、亂心等に而御知行被召放、御扶持被下置候分、御借上不被仰付候事。

一、足輕之分、御切米十俵に付一ヶ年一匁の割合を以御借上之事。

但、手替足輕・小者幷被下足輕之分も、右割合を以御借上之事。

一、坊主曁小者御給金銀被下置候者、石六十目圖に而御切米に取圖、十俵に付一匁之割合を以御借上之事。

一、御手役者之分御給銀被下置候者は、石に付六十目圖に而御切米に直、十俵に付二匁之割合を以御借上之事。

一、右御借上銀當年分十月中、來年・來々年七月中、御算用場江上納可被成候事。

但、頭以上者直に可指出候。平士以下頭・支配手前江取集可指出、御切米等之分者三ヶ年共十一月上納之事。

辰　九　月

右之通夫々可申談旨御用番播磨守殿被仰聞候事。

本文は金澤町に對するもの

九月六日

〔郡方御觸〕

町奉行江

先般江戸御本丸炎上に付、金八萬兩御指上被成度段被仰立候。然處一統承知之通、當時別而御逼迫至極之御勝手振に而、何分御手當も無之候得共、御公役之儀不被得止事被指上候。依之乍御心外、町方軒割を以別紙之通、當年より三ヶ年御借上銀被仰付候。尤御家中幷御郡方江も御借上銀被仰付候得共、御不足に付此分者地・他所々御借入被仰渡、其外御平生御入用、是迄段々御手詰之上之儀候得共、唯今より猶又格別之御省略等を以、幾重にも御辨合出來之様被仰出候條、右之趣致會得御用立可申候事。

九月

〔郡方御觸〕

巻目之上、加州御郡奉行江

先般江戸御本丸炎上に付、金八萬兩御指上被成度段被仰立候。然處一統承知之通、當時別而御逼迫至極之御勝手振に而、何分御手當も無之候得共、御公役之儀不被得止事被指上候。依之乍御心外、御郡方軒割を以、別紙之通當年より三ヶ年御借上銀被仰付候。尤御家中幷町方

本文に町地とあるは郡中町立の所をさす。

江も御借上銀被仰付候得共、御不足に付、此分者地・他所々御借入被仰渡、其外御平生御入用是迄段々御手詰之上之儀に候得共、只今より猶又格別に御省略等を以、幾重にも御辨合出來之様被仰出候條、右之趣致會得御用立可申候事。

九　月

巻目之上、加州御郡奉行江

今度御借上銀之儀に付、別紙申渡候通に候。此度之儀者是迄之御用銀与違、軒別に割符之儀に付、改作奉行江も示合可有割符候事。

九　月

覺

一、町地一軒當り一ヶ年分十二匁。

但、町役人も同様取立可申候。且身元高下有之事に付、支配人手前に而遂詮議、或五人出・十人出与歟取極、小手前之者江者、乃至十人又者五人に而一軒當り爲指出、随分不相痛様割合せ、一ヶ所當り惣軒數高當り、取揃可指出候事。

一、御郡方一軒當り一ヶ年分六匁。

但、分役之者茂同様取立可申候。且町立等之分、町並十二匁に取立可申候。小村之分者、

五ヶ村組合等を以高下割合せ、身元見計、一軒に乃至十軒・二十軒分可爲指出、又者一軒當りを五人・十人に而爲指出、隨分不相痛樣割合せ、惣軒數當り取揃可申候。

右之趣當辰年より來る午年迄、三ヶ年中御借上被仰付候。依而當年分十一月中、來年分八月中、御算用場江上納可有之候事。

辰　九　月

右加州御手合、能州・礪波・射水・新川、別々に御書立を以被仰渡候事。

〔每日帳書拔〕

九月六日

一、御本丸炎上に付金八萬兩差上之儀被仰上候。然處御難澁に付、乍御心外御家中知行割を以三ヶ年御借上、町共へも御借銀被仰付候段等申渡。

頭分以上御用番又は筆頭呼出申渡。

九月十日。前田齊泰、江戶城本丸燒失せしを以て造營の資を上つらんことを請ふ。

〔成瀨正敦日記〕

九月朔日

貸上は借上

一、御本丸炎上に付、御上金被成度旨御願書御指出之筈に付、員數も御書込御指出之樣、越前守殿御挨拶有之候付、員數之所江戸表より伺に相成候付、御用番より御勝手方申談、御算用場奉行御僉議有之、御上金高八萬兩、當十二月半高、來五月半高御皆納之事に相成可御宜哉之旨等、御用番より此間被相伺、伺之通与被仰出候。御勝手方よりも右御金高出方之僉議御家中百石に付二十目宛當年より三ヶ年御貸上、町家一軒に付十二匁宛三ヶ年、御郡方百姓家一軒に付六匁宛三ヶ年御借り上。右高一ヶ年合六萬兩。其他は御調達に而、御辨之圖り之旨に而伺有之、一往被仰出之趣有之、重而御算用場奉行僉議之趣も申上り、其通与伺被仰出候事。

一、右に付今日出早飛脚歩に而申參候筈之事。

〔成瀬正敦日記〕

九月二十日

一、御上金御願書御指出方之儀、先達而申參候分、當七日相屆、聞番へ申談、荒井殿へ及御內談候上、御願書同十日越前守殿へ入御內覧候所、御了簡無之候間、御懸り阿部殿へ御指出被成候樣御挨拶に付、同日阿部殿へ聞番持參、御請取相成候旨。右御上金今・來年に被上度旨は、聞番名前之書取に調、阿部殿內玄關へ致持參候旨等、遠江守殿紙面等昨日到來、今日

御用番より被入御覽候事。

九月十一日。幕府、前田齊泰の參覲延期の請を許す。

〔成瀨正敦日記〕

九月十九日

一、當十二日不時立早飛脚歩に而到來。

一、御參勤來二・三月頃迄御延引被成度旨御願書、當八日以聞番御用番阿部伊勢守殿へ御指出置之所、當十一日伊勢守殿御宅へ聞番御呼立、御願之通たるべき旨御付札に而被仰渡候。右に付御禮事之儀、翌十二日伺指出、御使書等御用人ゟ相達上之候旨等、山森權太郞等より言上。

九月十五日。前田齊廣夫人眞龍院、本多播磨守の別亭に臨む。

〔諸事要用雜記〕

九月十四日

一、眞龍院様今日播磨守亭へ被爲入候筈之處、天氣合に付御延引之事。

九月十五日

一、眞龍院様今日播磨守亭へ被爲入候。餘程晴間有之、先々御一段也。

一、右に付被上候御干菓子、奉札を以指遣、御側廻りゟ之御重詰も相廻候事。

九月十六日

一、昨日播磨守亭へ眞龍院様被爲入、夜五つ八分御戻り之由也。

一、左之通夜前播磨守登城御禮、御近習頭を以被申上候由之事。

眞龍院様今日私別亭へ御出被遊、御目見被仰付、其上拜領物頂戴もの等被仰付、御懇之御儀難有仕合奉存候。且又母・子供御目見被仰付、其上拜領物被仰付、幷舎弟伊織に茂御目見被仰付、其上拜領物茂被仰付、難有仕合奉存候旨御禮申聞。將又家來男女ゟ御赤飯等頂戴被仰付、難有仕合奉存候旨御禮申聞候事。

〔御用番方毎日書立書拔〕

九月十二日

一、當十四日播磨守庭之内ゟ眞龍院様御入に付、播磨守儀宅に罷在申度、御用も無御座候はゞ欠座仕、出席中御用番助美作守ゟ申談度旨被申聞候に付、其段同人より以成瀨主稅申上候處、翌日以同人御聞届被遊候旨被仰出候に付申談候事。

九月十五日

一、播磨守儀夜五半時頃金谷御殿ゟ罷出、眞龍院様御戻後之御機嫌伺、幷今日庭之内別亭ゟ

御入被遊、緩々被成御座、且播磨守儀御前江被召、御酒等頂戴被仰付、拜領物も被仰付、段々御懇之蒙御意、母・せがれ等も御目見被仰付、拜領物・頂戴物も被仰付、段々御懇之趣共難有仕合奉存旨御禮之趣、頭を以申上候處、御意有之。夫より二御丸江罷出、相公樣江前田牽次郎を以申上候處、翌日以井上井之助、昨日眞龍院樣別亭江御入被遊、御慰に相成候御樣子に而、御大慶被思召候旨御意有之候事。

〔大鋸文書〕

甲辰秋九月十五日播磨守樣御庭菊園爲御覽眞龍院樣、御成之節御饗應御菓子・御煮染まで之由。

九月廿三日。銀仲預手形を新札と引替ふべき期限に就いて告ぐ。

〔雜事日記〕

當時通用之銀仲預り手形百目札幷小割札共、當十月中迄に寄々引替所江指出新札与引替可申旨、去る十月一統申渡置候通に候。然處引替殘多有之躰候條、來巳十月中迄に引替可申候。尤右限月迄は、是迄之內新古打込可致通用候事。

右之趣被得其意、同役中傳達、組支配不相洩樣可被申談候、以上。

九月廿三日　　本多播磨守

九月廿四日。石川郡白山村領の銅山を休山とすべきことを命ず。

〔成瀨正敦日記〕

九月二十四日

一、石川郡白山村領銅山取立方、武田秀平別立主付相勤居候所、追々鋪にも出來いたし候へ共、秀平致病死候付僉議之趣相伺、金山方御用木村彌十郎へ主付被仰付候間、致見分等跡仕抹方いたし、先休山に可被仰付候間、主付相勤候樣今日被仰出之趣、彌十郎直に申談。坂井本

九月廿四日。小鷹及び天之網を禁ずる三里以內の村附を公示せんことを議す。

〔若年寄方御用留〕

九月廿四日

左之通月番へ別席に而相達。

三里四方小鷹幷天の網等都而御停止之處、是迄三里內村附紛敷儀も有之候。且去年御鷹場も御改に付、尙又遂詮議、三里內御停止之村々御家中一統觸出候はゞ可然与遂示談候。然處御家中之人々、百姓相對を以所々請地之趣に而圍垣等拵、右圍之內に而網張候儀不苦樣に相心

得候人々も有之由、甚以心得違に付、文政十三年・天保三年にも御家中一統申渡有之通に候得共、近年追々請地相增、猥成躰に付、右村附一統觸出候而も、請地取拂不申而は詮議行屆不申。依之御算用場において、請地之詮議如何相成居候哉と、右奉行江も相尋候處、請地之儀は前々より御停止候得共、相止不申候。且先達丹後守殿より御尋之儀有之、委曲詮議之趣御傳達申置候得共、未何等之御指圖も無之旨申聞候。右村附觸出之詮議も有之候間、請地取拂之儀御取仕切御詮議有之樣致度候事。

九月。給人の百姓より夫銀を繰上げ借受くることを禁ず。

〔司農典〕

諸給人与百姓相對之引合は不相成趣、前々御定に候處、近頃給人より無據趣を以、春秋夫銀繰上之名目にて借受候人々も有之躰、心得違に付、今般御家中一統江嚴重に被仰渡之趣有之候。於百姓方に、給人いかゞ躰無據賴入候与も致納得間敷筈之處、給人任申聞に、夫銀繰上相辨之遣し候儀は、百姓共不埒之至心得違に候。自今萬一右樣之儀申聞候共、一圓致承引間敷候。若心得違之者有之、於相顯には嚴重咎可申付候條、得其意、此段一統江急度申渡、請書取立可指出候、以上。

辰 九 月　　　　改作奉行

九月。領内の富豪に對し調達銀を命ず。

〔郡方御觸〕

今般御調達銀御返濟方議定

一、元銀五ヶ年賦利足八朱之事。

一、當辰年より毎歳十月、吉久川下米切手相渡、同月中津附平均直段を以、御返濟に相立可申事。

一、右御米積出方者、出船同様渡に而、出船方諸入用者御渡可被成事。

一、萬一海上有之時者分算之事。

一、此御調達相勤候迄、已後端浦賣可申談米高割合之儀は、今度之出銀高多少に應割符之事。

但、端浦賣不望人に者、外望之方江讓替候儀も不指支候事。

右之通無相違、全可有御返濟候事。

辰　九　月

覺

一、三　百　貫　目　　　木谷藤右衞門

海上の次脫字あるべし

一、二百五十貫目　嶋崎徳兵衛

一、二百貫目　宮腰　錢屋五兵衛

內五十貫目　同　喜太郎分

一、百五十貫目　放生津　綿屋彥九郎

一、百五十貫目　伏木　能登屋三右衛門

一、百五十貫　金澤　木屋孫太郎

一、百五十貫目　粟崎　木屋次助

一、百貫目　金澤　田中屋彌兵衛

一、百貫目　所口　越中屋久左衛門

一、百貫目　安部屋　小坂屋半左衛門

一、五十貫目　金澤　櫻屋理兵衛

一、六十貫目　同　中神茂兵衛

一、百貫目　大野　丸屋傳四郎

一、五十貫目　同　丸屋傳右衛門

一、百貫目　湊　熊田屋八郎兵衛

一、七十貫目　本吉　加登屋九兵衛
一、五十貫目　同　尾山屋勘兵衛
一、五十貫目　湊　魚屋八郎兵衛
一、五十貫目　同　橋本屋寛次郎
一、五十貫目　湊　熊田屋吉左衛門
一、百五十貫目　本吉　紺屋三郎兵衛
一、七十貫目　滑川　小泉屋太三郎
一、百五十貫目　黒嶋　濱岡屋彌三兵衛
〆二千六百四十貫目
外二萬兩　三國與兵衛

〆二千六百五十貫か

九月。大小將横目等、前田慶寧の入國の時期に就いて議す。

〔控帳〕

筑前守様御年頃に茂被爲至候に付、御國入之所何茂一同奉待罷在候處、今度相公様御内慮之趣被仰出之儀茂御座候御様子に而、來年御國入被遊候与、又者今一篇御指延相成候与、兩様之處御成立方において存付之儀も無之哉、各様爲御心得御聞被成度旨被仰聞之儀に付、私共

此表は江戸

筆而より奉念罷在候趣、則左に御内達申候。今年御十五歳に茂被爲成候所、御性質御怜悧に被准、惣而御成長之程御早方に奉伺、去年既に御聲替茂被遊、段々御天然与御大人樣之御模樣茂被爲出來、御品に寄御ひねくへ歟、御姿茂被爲備候。夫に應じ御藝術にも、去秋已來一際御進被遊候御品茂被爲在候樣に奉伺、ケ樣之所は誠に難有儀に奉存候。右之御樣子に被爲在候得者、今一兩年之所全御大人樣与茂御成被遊、思召茂可被爲附、御大事之境目与奉存候。此所に而御大國を可被爲保御氣象茂御立、隨而夫々御相應之御會得方も被爲出來不申而は相成不申御時節与奉存候。然處此表に御誕生之御事故、只此御屋形而已に御成長被遊、第一思召入之御地盤与茂可被爲成御大國之躰者、未少茂御覽不被遊。依之御國之樣子を彼是御聞被遊候而茂、未直樣御覽被遊候樣之御會得に者難被爲成御樣子に奉恐察候。御讀書御稽古方茂御大事之儀に御座候處、是亦品に寄御身之上に親敷御引取御考合被遊候事者、いかに肝要之御事に而も少茂御直覽不被爲在候事は、御會得方も難被爲出來御儀与乍恐奉存候。右之譯に御座候へ者、御國入者可被爲成丈御早方御爲宜奉存候。然處若今一篇被爲延候而は、御大人樣之御境何れ与歟思召之可被爲立御大事之御時節、先入主与成と申候得者、御爲御終身迄懸り申處とも奉存候。左候得者何卒來年之事に御內定之程を奉念候。若又色々御六ケ敷樣之事御座候共、右御終身に懸申大切之御爲に者難替御事に而可有御座哉与奉存候。且又此表而已

に被爲在候而者、御國御鷹野之様に御岩乘茂不被爲出來、御身分御相應御年頃之所に而御身固め茂不被爲成、ヶ様之所も御事缺与相成、來年之處御指延し、重而相公様御在府之節与成候而は、最早御十八歳与も被爲成、其頃に被爲至候而は、無程御婚禮茂不被爲在候而は成申間敷、御稟賦之御様子を以御筋骨之御固り茂不被爲在内御婚禮被遊候得者、御精神等茂おのづから被爲費候儀、是亦無御座而叶不申御事。御成人之道御次第において被爲缺候處御座候時者、乍恐御齡にあづかり申所、御一生之上に懸り、御取返も成不申御儀、甚以御爲御大切之御分れ目此所に御座候御事与乍恐奉存候。唯偏に今一兩年之所、呉々も御大事之御場合与奉存候。若御國入之儀兩端之御模様も御座候はゞ、何卒來年之御事に被爲成候様仕度奉願罷在候事に御座候、以上。

九　月

小　幡　主　膳様

加藤三郎左衛門様

筑前守様御儀者、御當地に御成長被遊候御事故、都而四時之物候より土地之風儀を初、日成御暮被遊方御食品に至候迄、能御當地に御居馴被遊、御國之儀は何角も御馴不被遊候御事故、御國ゟ者何与なく他所ゟ被爲入候様之御模様被爲在候儀は、自然之御譯与奉存候。其上御當

意味徹底せざるが如し

當秋は明年秋

所者御慰事等萬事御自由に被爲在、御國は左樣之所も何角御不自由に可被爲入。就而者只今より折角御國江被爲入、御馴不被遊候而者、何与なく御主客之御模樣御引替不被遊。此所御引替不被遊候而者、おのづから御心之被爲留前後江被爲思召繼候所茂此表に被爲在、却而御國者御勉強被遊、其時切に被爲入候之樣之御模樣に被爲成候譯。御平常思召入之被爲在候所より、自然与其餘萬事に付思召を被爲用候所も、皆此所より御達風之被爲出來候御儀。御爲甚御大事之懸り申所与奉存候。惣而御國之人氣・風俗之樣子より、御掟等之品々に至候迄、只今より御平生に段々与樣子御承知被遊置不申候而は、畢竟御親政之御時節俄に御練熟可被遊樣茂無御座候儀。當秋に限申儀に而は無御座候得共、當時御成人之御境目、何方江成とも御進可被遊御大事之御頃合与奉存候。且當秋より來春迄半年之儀に者御座候得共、此度御國江不被爲入候事に若相成候而は、來々年迄前後四年之御居延に茂相成申儀に御座候。且又今般御婚禮之上は、此御表之御樣子猶更御賑敷可被爲成、此所においても御在國御間遠に被爲在候而は、前條御主客之御模樣彌增に可被爲在御儀。御爲甚御大事之御場合、御用途御入增抔に者難被爲替御儀。何分に茂當秋御國江被爲入候事に御僉議御座候樣仕度儀に奉存候事。

［控　帳］

追々御成長被遊候內、此頃者分而茂御樣子御違ひ被遊、御大事之御時節に候。就而者御側廻

り之者茂、猶以心得方大切之儀与存候。夫に付是迄何茂申合來候趣等、心得之爲取集、別紙に相調申候。差附書面に調候而者、品に寄憚り申儀も有之候故、態与世上古今となくおしなべての事に申述、御仕向申上方見込之所を御内談におよび申候。尚更御衆議之所も承り、猶又心得にも致度存候事。

左右之者心得之事

凡世子のよく成立給ふべきことは、先づ左右の者のよく心得居て、假初にもよからぬ事を見せ聞せ奉らざる樣に愼べし。惣而人は善惡の友によると承り候得者、世子の友とし給ふ所は左右の者のみ。それが中にもおとな役の者にては、其やさしきこゝろばへのあり給ふべき所は、むかへてなり共誘ひ奉り、おしひろめてすゝみ給ふ樣に執成べし。夫に付ても臣たる者の心得可申事共を、古人の申置しことあり。人臣に三つの罪あり。一つには非を導くといひ、二つには失に阿るといひ、三つには寵に尸のごとくすといふ。よからぬことを見せ聞せ奉り、其心に思ひそめ給はぬ事を思ひ付せ申を導くといひ、よからぬ事に承順奉るを阿るといひ、よからぬことを見て告申事もいたさず、其所に居ながらたゞに人形の如くなるを尸のごとくすといふ。導く臣は罪尤重く、阿る臣は夫に次ぎ、尸のごとき臣は又其次なりとぞ。扨又忠を進るに三つの術あり。一つには防ぐといひ、二つには救ふといひ、三つには戒むと

本文は大小將橫目の記述にして弘化元年の事に係る今こゝに附載す

いふ。其未然に先立油斷なく仕向置申を防といひ、其思立たまふ所にて思ひとまらせ申樣になすを救といひ、其事をなし給ふ上にて諫止め申を戒といふ。防を上とし、救を次とし、戒を又其次となすといへり。是誠に側近く仕へ申者の心得の肝要となすべき事也。前の三ヶ條を以自己を省み可申、後の三ヶ條を以輔導の勤を相勵み力を盡し申べき事也。

先づ仕向可申ものゝ四つある事

世子のよく成立たまふべきには、先づ仕向可申ものゝ分て肝要なるもの四つあり。一つには尊貴の方は御親子の居所も隔り、物事初より備りて、夫々の附人の手に育ち給ふこと故、御兩親の恩愛を直に受たまふこと少し。これによつて親愛の情おのづから疎く、長じ給ふに隨ひ作法のみ多くなりて、思ひ慕ひ給ふこと薄し。左右の者分而此所を心得居て、事毎に恩愛のある所を念頃に知せ申、親愛の眞情を誘ひおこし申べく、殊に孝は百行の本にして風化の根元なるべし。二つには物事の不自由不足を身に覺え給はず、下々のうゐ艱難の事を知り給はず、飢寒の苦みを見給はず、其愛憲し給ふ所も亦私の偏より出で、未眞の仁愛不便の心を動し給ふに至らず。左右の者常に爰に心を用ひ、農業の艱難窮民の情態を初、下々の憐むべき所を述て聞せ申、其憐愍の情を引出し、仁惠の心を動し奉ること、畢竟仁政を祈る所の根芽なり。三つには尊貴の方者、附人の手に育ち給ひ、常に習慣し給ふ所十に八九は皆臣下の

尊崇を請給ふのみ。故に畏敬の心薄く、高滿の氣を養ひ給ふ也。是禮讓の實意出來給ひがたき所也。左右の者ひたすら天道陰譴の畏べきを知せ申、畏敬の心を取立、且臣民あるを以實に君たることを得給ふゆゑんを聞せ申、臣民をかろんじあなどり給はず、大臣暨老人抔者分而重んじ給ひ、みづから其たらざる所を知り給うて、身を謙り給ふ樣に仕向可申也。是尊きを以亢り給はず、後年上下相交りて治道の出る源なるべし。四つには世の振り、人の並を知り給はざる事多し。しかのみならず人のまのあたり譏り笑ひを請給はず、これに依て恥べきを耻給はざることありて、心を制給ふにも力なきことあり。左右の者殊に心を付て、人の耻にくむ所を知らしめ、耻の心を取立奉り、みづから制し給うて事に堪へ給ふことを仕向申べく、是事の宜所を辨へ給ふのみならず、身に勉强し給ふ所の基なるべし。

諫路の事

諫を納れ給ふことは、幼年の頃より諫路の通ひを付置申候事肝要なり。諫路の通ひとは、常に直言を聞馴給ひ、臣下も常に直言を申上つけ居申ことなり。木繩に從ふ時は正く、君諫に從ふ時は聖となる譯。古より明君と稱し申方は、果して能諫を納られ、暗君は必諫を距まる例し多ければ、常の物語にも聞せ奉り置、又君明なれば臣直しと申候而、古より明君の下には必忠直の臣多く、暗君の下には必佞諛の臣あるものなれば、是等の所も常の物語に能聞せ

奉り、諫を納れ給ふにいさみを付置、拒み給ふことは面にも耻ぢ給ふ樣に申成置事也。是はいかにも成人し給はぬ前廉に、能々仕向置申事なるべし。

十月六日。前田齊泰、金澤の郊外大樋口に行歩を行ふ。

〔御家老方等諸事留帳〕

十月五日

一、明日九時之御供揃に而、大樋口ゟ御鷹野之御振に而御行歩に御出之由被仰出、早歸之筈。

十月六日

一、九時に御出被遊、追付退出。

〔諸事要用雜記〕

十月六日

一、今日九時之御供揃に而御行歩御出被遊、御居間先より御駕籠に而被爲入。御裝束御羽織・御馬乘袴。暮頃御歸殿被遊候事。

十月十日。前田慶寧の字及び號を選定す。

〔渡邊兵太夫手記〕

十月十日

御次へ罷出、兼而被仰付候筑前守様御字等相撰候分左之通四通、折紙に相調一包にいたし、木具に載、坂井小左衛門を以上之。

御字

伯　永

御號

書經。一人有慶。兆民賴之。其寧其永。

蘭　皐

御堂號

離騷經。步余馬於蘭皐兮。馳椒丘且焉止息。

先春堂

御齋號

盧洪景梅屛贊。儲萬斛香先天下春。

暗香齋

林和靖詩。疎影横斜水淸淺。暗香浮動月黃昏。

十月十三日。水戶領の百姓本鄕邸に至り德川齊昭の謹愼解除に斡旋を乞

ふの願書を提出す。

〔故紙雜鈔〕

一、十月水戸領百姓より本郷此方樣御屋敷江奉訴候書付。

乍恐以書付奉願上候。

一、水戸中納言樣駒込御屋敷江御隱居御愼被仰出候に付、水戸領下々迄一同當惑仕、相愼罷在候得共、唯今以御宥免之御沙汰無御座に付、此度爲總代私共御愁訴奉申上候。中納言樣御相續以來十六箇年に及び、御丹精被遊、百姓共之儀厚被思召、是迄之致來不宜事共何角御改革被下置、別而飢饉御救、當地御改正之御仕法御行屆に相成、其外莫大之御仁政相蒙り罷在候處、此度之御儀に而一同仰天愁歎仕候。御次第は何故と申事、卑賤之私共者相分り不申候得共、二百年來御代々樣御恩澤を蒙り候上、猶又中納言樣御在世中御撫育被下置候儀に御座候へ者、當五月以來小人共追々騷ぎ立、日々水戸表御役方江願出候者多く、永く御愼被遊候内萬一御不例等も被爲在候はゞ、後悔仕候而も無詮儀と奉存、御愁訴申上度旨趣に而御當地へ密々罷登り候而、讃岐守樣御初御連枝樣方江御縋り申上、又者尾州樣・紀州樣へも同樣願上候者も數人有之。小石川より色々に被盡手候而、嚴重指押引戾等被致候者追々御座候得共、猶又相止不申、夫々己と忍出候而御國中不穩、於御役方も甚被相困候哉、私共江精々押立被

申付候得ども、小人共は却而指押候者を不忠之樣に申なし、中々得心仕不申候に付、私共共間に相立甚難儀仕候。小人共さへ靜罷在候得者、私共之儀只々相愼恐入罷在候筈に候得共、私共先立不申而者猶更大勢御府內に罷出、如何成騷敷儀茂出來仕、不調法に相成、御德澤を奉蒙候御領主樣御家御不爲之筋茂出來仕候茂安心不仕、不得止事右之者共に相代り、御隱居樣御愼御宥免之處奉御愁訴候。御當家樣之御儀は御大國、殊に私共之御領主樣へは格別之御譯柄も被爲在候御儀も奉承知候間、何卒愚昧之小人共心外御憐察被下置、御愼御免之御沙汰茂御座候樣相成候はゞ、一同安心仕、御政道御改正被成下候如く堅相守候而、此上安穩に相成可申儀、御領分一同難有仕合奉存候。此段宜御聞屆被下置候樣重々奉願上候、以上。

天保十五年辰十月　　水戶御領

飯留村　金右衛門

小場村　幸之助

增井村　儀右衛門

岩根村　彌七郎

野口平村　善藏

上小瀨村　喜兵衛

乍恐御愁訴奉願上候

一、御先代水戸中納言樣御事、既に凶荒之砌茂御仁政厚被爲在候處、當年五月駒込江御隱居被仰付、御愼深御起居不安被爲入候と承り、百姓共一統相歎居候次第者、長々御愼に而御歩行不被遊候而は、重き御持病之障に相成、萬々一之御儀も有之候而者、百姓一同相歎候茂無詮事に候間、水戸樣御領百姓共江戸表當御屋敷樣江御愁訴申上度罷登り候處、村役人中より追々被指留、乍殘念殘りも無之歸國仕候。私共兩人野宿等仕相殘り居、乍恐御愁訴奉申上候。何卒御尊慮を以、中納言樣御愼速に被爲明候樣御取次御願上被下置候はゞ、私共兩人は不及申上、百姓共一同如何樣之御法に被仰付候共、難有仕合奉存候。少人數に而御請に不相成候而者、又々大勢に而御愁訴奉願上候茂恐入候間、厚御仁恵之御儀を以、何卒御請被遊下置候はゞ、百姓一同難有仕合奉存候、以上。

天保十五年十月　　常州新治郡高倉村百姓　吏　助

同　村　百　姓　市郎右衞門

加賀守樣御內　御役人中樣

〔近教日記〕

十一月四日

一、水戸様御領内之百姓六人、當十三日御作事御門迄罷出、願之趣有之旨に付、聞番使役指出爲引合候處、中納言樣御愼御解之儀に付歎願書指出候得共、品重儀に付難取次旨申諭候へ共、猶明日可罷出旨申聞候付、願書預り置候處、其後罷越不申。同二十日にも同御領之者兩人、御作事御門迄願書持參、使役應答いたし願書預置、翌日罷越候付願書は相返置候。右之趣遠江守等へも聞番より及内達、右最初之願書本紙等は讃岐守樣御留守居迄内々相廻置候旨等、岩田等より富永等迄以内狀申越、右兩通之願書寫も指越候旨に而、聞番より入御覽候事。

十月十四日。鳳至郡皆月村彌三兵衛異國に漂流して歸着せしを以てその口書を徵す。

〔皆月村彌三兵衛異國へ漂着の次第口書〕

能州鳳至郡皆月村百姓三左衛門弟

彌　三　兵　衛

當辰廿六才

私儀、去子年正月石川郡宮腰浦平木屋長次郎船水主に被雇、奥州松前へ罷越、同年十月於同所石川郡大野丸屋傳六船水主に乘替、江戸廻海上にて逢難風、異國へ漂流仕、去卯十二月四

當は十月なり

讃岐守は酒井

子年は天保十一年
卯は天保十四年

日唐船にて長崎表へ被送渡候に付、今度御呼返被下、今日御召出、難船等の趣且於彼地取扱等の様子委曲申上候樣被仰渡候趣奉畏、左に申上候。

一、去子年正月石川郡宮腰平木屋長次郎沖船頭吉三郎船二百石積順風丸水主に被雇、船頭並私等都合四人乘組、宮腰浦にて荒物等積入、同五月下旬頃同浦出帆仕、松前御領江差心懸颿下、同七月上旬頃江差へ着岸仕、荒物等賣拂滯船仕居候內、鯡並昆布等積入、同月廿八日江差出帆、宮腰浦心懸颿登候處、同月廿九日松前沖大嶋・小嶋と申所の邊よりこち風吹出、波高に相成、防方仕居申內、楫打折船舞步行申に付、船頭吉三郎等示談の上檣切捨候へ共、元船凡六十里計の沖の方へ吹流、猶風波强、船留め申手立も無御座、如何可相成哉と心痛罷在候內、八月朔日頃少し凪に相成候所、遙かの方に帆船一艘相見え、追々程近く相成候に付、助吳候樣呼懸候へ者、難船と見受候躰にて、彼船へ乘移候樣申聞、大綱等投出し吳候に付、何れも右に繰り元船乘捨、船頭並私等四人共彼船へ乘移り申候處、風合宜敷、同三日頃に松前御領吉岡湊へ着岸仕候に付、私共難船の始末同所役人中へ委曲屆仕候處、同處御役所においで一應御尋の上、御城下於御役所再往御尋、口書等御取立、右難船御詮議方同十月上旬頃迄に落着仕候に付、私儀同所にて船頭吉三郎へ暇を乞、外船乘口等相尋居候。

一、其節城下へ淵入仕居候、石川郡大野丸屋傳六直乘五百石積船松德丸水主に被雇、塩鮭の

魚積入、船頭傳六、水主には私並石川郡大野村寅松、羽咋郡柳瀬村五三郎、鳳至郡赤神村宗七、薩摩の者の由にて勝藏、津輕の者の由にて三四郎、南部の者の由にて三平、松前の者の由にて吉五郎、都合九人乘組、同月下旬頃城下湊出帆、常州心懸颿登候處、風合不宜に付、夫より松前箱館湊へ澗入仕、日和相待居候內、風合宜敷相成に付、霜月中旬頃同浦出帆仕、極月十三日頃常州中の湊へ着岸仕、積入候鮭の魚等賣拂候處、冬海に相成申に付、翌丑年夏迄同浦に滯船仕居申內、水主の內吉五郎は暇を貰ひ上陸仕、船頭並私等都合八人乘組、魚油並燒候酒の粕・大豆積入、同四月三日出帆仕、江戶心懸颿登、同月中旬頃相州浦賀湊へ澗入仕、積荷の內魚油を同浦にて小船相雇、江戶へ積廻し爲賣拂、相殘り候燒粕・大豆は浦賀にて賣拂、同五月上旬頃空船にて奥州南部心懸颿下、同下旬頃同國八ノ戶着岸仕、鰯粕積入、六月下旬頃出帆仕、江戶心懸颿登候處、風合不宜に付、同國桑ケ崎浦へ着岸仕候處、船頭傳六氣配不相勝、乘船仕兼候に付上陸仕、勝藏儀假船頭に相成、水主には私並寅松・五三郎・宗七・三四郎・三平都合七人乘組、同七月三日桑ケ崎浦出帆仕、同月十三日江戶深川へ入船仕、鰯粕賣拂、魚油空樽三百計買入申候。是は南部邊にて又々魚油買入申圖を以買請申候。其外薩摩芋五十俵計積入、同七月廿二・三日の頃深川出帆、同日相州浦賀へ澗入仕り御改を請、同廿七・八日頃同浦出帆、船頭傳六も相待居候儀に付、桑ケ崎心懸颿下候處、風合不宜に付、房

州灘に相懸り、順風相見合居候へ共、次第に風吹增し船留り兼、豆州灘へ飄戻し候て、八月四日同國下田湊へ澗入仕、日和相待居申內、芋五十俵の內四十俵計賣拂、殘十俵と粮米一石積入、十月五日又々桑ケ崎浦心懸出帆仕飄下候處、常州鹿嶋沖にて同六日朝六ツ半時頃より俄に氣色變、大西風强く、大雨横樣に吹付、海上大時化に相成、高波打懸け、今哉船碎け可申躰に付、表を防ぎ艫を鬮ひ、何分地方へ寄申度種々相働候へ共、最早山も見失ひ方角も相知不申、如何可相成哉と、人々唯如狂氣金比羅へ奉祈誓、船頭始め一統髻を切神棚へ相納、何卒難風止申樣相祈候へ共、宜敷躰も相見え不申、益々西風吹募り、波は山の如くにて幾度歟船打越難凌に付、檣切捨候はゞ風の凌にも可相成哉と、船中示談の上鬮を上候處、則切候て可然神鬮下候に付、六日夜六時頃斧を以伐拂、碇二頭指下し船足重く仕候處、少しは動も安らかに相成候に付一と息き仕、船守護方專に相心得居候へ共、波風少も靜り不申、日々に斯樣の仕合に御座候處、同十三日曉頃少し風に相成候へ共、船損所數多にて、第一檣も無之、此儘に仕置候には迚も地方へ可寄付方便も無御座候に付、損所等取繕ひ、帆桁を檣代りに建、てんまの檣を帆げたに仕、繩ぐゝり等を以取繕ひ、帆も右に應じ小さく仕候處、風も沖より地方へ吹候に付、幸と存じ下し置候碇引揚、則帆卷上飄懸候へ共、何分船不相應の帆にて、同十四日一日飄候へ共果敢取り不申內、同十五日八時頃より又々西風烈敷吹出し、船中

騷動至極大難事と相成候に付、同夜四時頃又候碇二頭指下し、凪に隨ひ日數十五六日計流行申候處、同十二月上旬頃少々凪に相成、風も沖より地方へ吹候に付、此度は何卒神佛の御加護にて地方へ寄申度と、金比羅を一心に奉念、碇引揚前段の假帆卷上、地方へ向三日計颿候處、又々西風吹貫き、逆浪山の如くに打起り、船を搖り上げ搖り込み、覆らんとする事數多度にて、其中に船具も追々相損、晝夜斯樣の有樣にて、人々生たる心地も無御座、難澁申計も無御座候。

一、然處船艫の方甚敷音仕り、船中響渡り申に付、打驚き見請候處、楫何れへか打付候哉、羽板引さけ波にて引取、重木のみに相成船舞步行候に付、無詮方碇二頭指下し置、楫無御座ては何角も相辨不申に付、外船板繩ぐゝり等を以、右楫重木に取繕ひ楫代りに仕、難事を凌日和相待四五日相立候處、風又候地方へ吹申に付、前段假帆卷上、又もや地方へ可寄哉と存颿候へ共、兎角時節柄故風打續不申、十二月上旬頃迄右樣幾度となく颿候ては被吹戾候て漂ひ罷在、最早地方へ可取付示談も盡果、船中一統途方に暮れ當惑至極、此上は幾重にも神力を御願申計にて、流れ行候儘に相成居候。其上數十日人命限に相働候儀にて身躰疲れ切、剩へ粮米は最前下田にて積入候一石の分、此頃迄に追々給切、最早殘米四五升ならで無御座、外に賣殘候薩摩芋十俵計御座候へ共、時早く取入候分ゆゑ追々腐り付、右米のみにては給延

しも不申故、彼芋を交粥に仕、水も最前下田浦出帆の砌積入置候へ共、初發逢難風候砌より搖りこぼれ、貯用も無御座に付、雨を待檣へ樋を仕懸けて雨を取入、其頃に相成候ては食物後用方のみに打懸、外何事も不仕罷在候內、假船頭勝藏儀、先達てよりの働、且は心痛病根と相成、十二月下旬頃病死仕候。

一、此末の食物日々乏敷相成候に付、魚釣相初度候へ共、左樣の道具迚も無御座に付、帆針を曲げ、根付に相用候鹿の角有之候に付、切碎餌代りに仕、持合居糸に付け、船垣の竹の先きに結付、海中へ下げ置候へば、鱰或は鮪抔取得申に付引上げ、右芋と一つ鍋に入、右の內へ米少々宛加へ、粥に焚給罷在申候。併右鱰等釣れ不申日は、船板裏に付候しぶと申貝を取、同樣芋と交焚き粥に仕、兎角給延し申儀專一に仕罷在申候。勿論風波强儀は少も止不申、今こそ命の終歟と存候事間々有之儀に御座候。元來食事も、前段申上候趣にて不一通候へば、身体日に增弱り候て、立候事すら相叶不申場合にも相成、最早今一働と申所存出不申、殘米の分年內に給切、芋も纔に相成、翌寅正月へ移、下旬頃迄前段申通にて漂ひ罷在候所、其時より二月上旬へ懸天氣に相成、雨降不申故、用水も呑果し難澁罷在候內、寅松も死去仕候。夫より日數十二日計晴天打續、一滴の雨も降不申ゆゑ、水一切呑切し候に付、汐を汲取、灰越或は煮立抔仕見候へ共呑申事出來不申、却て惡敷、彌增困窮至極、人々打臥候儘にて、起

出て魚釣申元氣も無御座候。咽喉干せ口中更に濶も無御座、互に一言の申合すら仕得不申、打臥候儘にて、佛神を一心に願申より外何等の手段無御座候へ共、餘り喝き難忍汐を呑申候處、何れも血を吐出し、苦痛に堪兼、生たる心地も無御座候。然內二月廿日頃少々雨降申付、櫓へ仕懸置候樋より、天水土瓶に三杯計取入申に付、人々悦び先づ一口宛呑、相殘り候分大切に貯置、夫より少し息付候へ共、其頃に至ては最早食物も給果し、折節海中荒、釣魚も一切無御座候へば、水のみ有之候ても致方も無御座、必至と行當り申候。爰に焚火の消炭御座候に付、是摺潰したるを布にて漉し、一と口給候ては水にて呑下し、聊飢の足りにも可相成哉と如此仕、誠に言葉にも難盡爲躰に御座候。右樣の惡食仕居候處、同月下旬五三郎死去仕候。同三月上旬頃一日一夜計大雨降申に付、仕懸置候樋より取込、桶は不及申、あらゆる品々に夥敷取入置申候。同月中旬頃三平、引續三四郎死去仕候。何れも飢死にて、櫓或は胴等に唯打臥候儘にて、いつの間にか音沙汰もなく死去仕、誠に眼も當られぬ哀成有樣に御座候。左候へば私と宗七兩人迄相殘、誠に心細く、晝夜泣悲み居計に御座候處、四月上旬より五月へ至、鰐・鰡・鰹・鮪等其外小魚共船の四方を圍み候故、兩人にて餘程釣取申に付、櫓へ上げ干立、扨潮を汲取釜にて煮立候へば、少々塩出來申候故、前段干立候魚共塩漬に仕、悉く干立貯置き、其後の食用に仕、哀敷露命を繋ぎ晝夜相過申候。

一、勿論斯様の辛苦の中にて、方角も相分り不申、子の一つ星抔心付不申、成行候儘に浮流仕居候處、九月上旬頃海上泥水の所へ相至り、怪敷存罷在候處、向の方凡四十里計も可有御座哉、幽に山躰の物見付出、宗七と相悦、取付申度と存候へ共、何分にも楫等無之、其上船所々相損居候へば、可近寄計ひ方も無之、行儘に相成居申候處、凡一里半計も先きに、何廉色赤き物相見え候に付、不思議に存罷在候處、段々私共船へ近寄候に付、能々見定申候處、船に相違無御座、帆三枚立にて船具等都て色赤く塗、人乗居候躰に相見え、怪敷存罷在候處、既に私共船に彼船横付に仕候に付、私共櫓へ上り居候處、彼船に異躰の男八人乗組罷在候。其人躰帽子をかむり、頭はめぐりを剃り、頂丸く剃残し髪を三組に仕、右の內へ黑きふさを組込み、後ゞへ腰切りに下げ、面躰眉並眼鼻立日本人同樣、老人は鬢剃不申、長く垂れ居申候。着類は地木綿躰のものにて色黑く、筒袖にて胸元ぼたんじめ、腰切の物を着し、足は太き股引躰の物を着仕、右の內三・四人私共船へ乘移、船廻中見廻し、彼者共何廉申合候へ共言語相分り不申、私共外に可仕樣も無御座候に付、難船の始末仕形仕、手を合申候處、彼船へ乘可申樣申聞候躰に候へ共、私共數十日の惡食等にて、身体倦疲申に付腰立不申候所、彼者共私共の手を引、彼船へ移呉候に付、船中見受候處獵師の躰に相見え、不見馴魚類澤山御座候。私共水呑申度趣仕形を以申入候處、則兩人へ茶椀に一盃宛呉、其上餅樣の物二つ宛呉申に付

給申候。其形丸く、饅頭様の物にて、大さ三寸計有之、厚さ七・八分計も可有御座哉、裏表に細かき穴一面に明き居申候。給候處、先は團子様成物に御座候。且又元船は其儘にて乘捨申候。年内より死去仕候勝藏等五人は、着岸仕候所にて葬申度存、時々油明樽に入、元船底に仕末仕置候へ共、彼の異船へ乘移り候節、左様の世話仕候元氣も無御座、尤異人の手を添へ移申も如何敷、且は私共も如何可相成儀に候哉不相分に付、夫成に仕乘捨申候。夫より右團子を給候後飯吳申に付、兩人共給申候。菜は見馴不申大き成魚躰の物を大鉢に入、庖丁を添へ指出し、是を手づから切候て給申様仕形仕候に付、少々給申候。此品後に考候處、牛の身にて煮申由に御座候。米は日本の米と替り不申候。

一、夫より二日颿候處、着岸仕、彼者共の在所と相見え、異人の内四人上陸仕、殘四人と私共は岩山の腰に船を繫ぎ、暫時相待居申候處、最前上陸の人々皆々罷越、私共の手を引濱邊へ上げ吳候處、其形駕籠様の物を持來り、臺は幅三尺・立四尺計にて、柱四本立、屋根も有之、前後左右は木綿様の物を懸御座候。右臺左右の端に棒を一本宛附、前後共其棒先を左右より合せ、其合せ候所を首へ入れ、前後二人にて舁、砂濱凡三町計歩行候處人家有之、凡四十軒計も可有御座哉、其家建土塗込にて、内外共柱相見え不申、又は柱顯はれ、土少々より懸不申建方も有之、屋根は都て瓦葺にて、土間或は瓦敷御座候。町幅二三間計にて、軒を並べ

候家建に御座候。則同所中程にて、前に四間・奥行五間程有之塗込家へ連行、彼者共の居宅と相見え、私共兩人共奥の方土間へ入れ、右間に有之腰懸の内二つ指出し、腰懸可申旨申聞候躰に付、腰懸居申候處、見物人夥敷參、私共の着類抔撫せヽり見申候間に、三尺四方計の小高き足付の膳躰の物持來り、私共前に指置、飯は茶椀に入、兩人に一つ宛與へ吳、牛の塩漬の由にて煮候品給申候處、少々臭氣仕候へ共給仕舞申候。夫より幅三尺に六尺計の床樣の足付有之物を、一人に一つ宛持來吳、最前海上にて元船乘移候節、私共着類等持越置候旨にて、右床樣の上に指置候に付、則着用仕打臥申候。彼家へ着仕候砌より、番人歲三十計の男一人付添居、飯等爲給申候。彼者も同樣床持來、同間に打臥申候。翌日朝六時頃目覺候處、番人未だ打臥居申に付、私共右番人をゆり起し候處、起申に付、水呑度候と手眞似を以申入候處、則承知の躰にて水を茶椀に入持來吳申候。夫より彼者立退、一兩度參候に付、飯給度趣又々仕形を以申入候。四時頃に相成、夜前より出し置候右膳樣の物の上へ空茶椀二つ、飯は櫃樣の物に入、菜には豕の由にて、青菜と交煮に仕候を大鉢に入持來、彼男飯を櫃より出し、茶椀に入吳申に付給申候。菜は何人居候ても一つの物に入申風儀と相見え申候。右飯並豕等給餘り候品、彼番人自分に椀等持來、其所にて給仕舞申候。私共未だ身体疲居申事故、又々床に付臥居申候處、彼男たば粉を紙に卷き、らぶの太さに仕、長さも三寸計に切、其先へ火を

附呑居申に付、私共もたばこ粉給度趣仕形を以相頼み候處、則十四五本宛呉申に付呑申候。味は日本の通にて、却て宜敷様に相覺申候。たばこをインと申候。同日八時頃にも相成候處飯を呉、菜も前段同様豕と青草と煮候品を呉申候。其外薩摩芋様成物も呉、何れも給申候。其後より毎日前條の通にて、敢て變り申儀も無御座候。上陸以來飯等給申故に候哉、少々肉も付、力を得候を相悦罷在候處、私共所持の袷一枚、異人の內戲談の躰にて着用仕、私共居間へ參候に付不思議に存、是は此方の所持の品の趣、やつと手眞似仕候處、彼者打うなづき、私共を次の間へ誘引仕候に付、則參見請候處、袷等品々次の間に有之候に付、先用達の着物二三枚宛兩人共所持の葛籠へ入、持來居間に指置申候。船御往來其外書物諸帳面、元船より持來呉不申乎見當不申候。夫より十日計相立候處、兩人共惣身浮腫、私儀下痢難儀仕候所、水藥を呉申に付、日々惣身へぬり付候處、兩人共日數廿日計にて追々快方に相向ひ、不日全快仕候。私下痢は別に藥も給不申候へ共、十日計にて平癒仕候。見物人は毎日夥敷參り申候。此外商賣迚も不仕、獵業のみ仕候躰に相見え申候。其頃氣候十月頃に候へ共、著甚敷、日本の六・七月頃の様に有之、單物にて堪兼申程に御座候て、雨は稀に降申候。獸類は、犬・牛・豚・羊多徘徊仕候。犬は日本のむく犬の様成物にて、格別變り不申候。

一、然處霜月上旬頃、他の所へ可送遣様子にて仕形仕、彼番人に外七人計付添、私共兩人は

駕籠様の物に入候様手眞似仕候に付、入候處、如以前二人にて舁行、濱邊へ三町計出候處、渚に船を浮べ有之、大きさは八十石積計の船に、別に人七人罷在、私共兩人並先達て以來付添居候番人とも乘組、都合十人にて出帆仕、其船形大体先達て被助候船の通にて、矢張帆も三枚立、色はしぶ染様成物にて御座候。船中の食事は、滯留中同様に御座候。則二日二夜颿候處、町立様の所にて、家數大凡四千軒計も可有御座と存候湊躰の所へ着岸仕候處、船中より一人上陸仕、暫時相立候處、前段同様駕籠様の物二つ持來、私共彼の中へ入候様申聞候躰に付、上陸仕、則入候處舁行き、大躰四町計も歩行候と覺候處、前口五間に奥行六間計有之塗込家にて、前の方屋根等も無之日本の正力門に似寄候門形有之、其地の役人と歟相見え、彼門へ連行、九尺に三間計有之一と間へ爲落付、番人兩人付添申候。上陸後最前の所の人相見え不申、其所の人のみに相成、寢食等先は最前の通に御座候。人物男女共實敷相見え申候。裝束形最前の所と格別の違は無御座候へ共、男は羅紗の帽子、綸子或は見馴れ不申糸にて浮織の地合にて仕立候胸の間ぼたんじめ筒袖の上着、腰切又は膝切に着用仕、太き股引躰の物を足にはめ、羅紗或は繻子等にて造候履をはき居申候。婦人は髷形種々有之、金銀等の笄をさし、びんを大きく仕、耳隱れ見兼申候。耳には左右共金銀の環を付居申候。面体目鼻立相替り不申候。服先は男同様にて、上には綸子等にて胸元ぼたんじめ平袖付に仕立候を、膝切

に着用仕居申候。身柄宜敷婦人は、足首小さく歩行不自由に相見え申候。賤き人柄は形同樣。男の分髮は三つ組に不仕、頂に挾居申候。都て粗服に相見え申候。此地湊と相見え、船も數十艘潤入仕居、商賣も種々有之、前の方明け候て店と思敷所に商物を餝り有之、其品荒増反物類又は魚鳥類・菓物抔も有之、先は日本に似寄候賑々敷所に御座候。氣候は最前の所と同樣、暖き所に御座候。此地へ着仕は寅十一月にて、翌卯四月迄滯留仕候へ共、誠に著甚敷、單物一つにて凌兼申程に御座候。然處翌正月に相成候處、赤き唐紙の半切に文字を書き、門毎々々に張置、二月に相成候へば取拂申候。此地悉皆正月は斯樣に仕候風儀と相見え申候。

一、然處同月の內日は覺え無御座候へ共、兵庫船乘組の內にて、阿州の出生初太郎と申歲二十四歲に罷成候者、是も彼邊へ漂流仕候由にて、私共止宿仕候家へ參候に付、互に相名乘り、漂流の始末相咄、大きに得力申候。其後同間に罷在、何事も同樣に仕居申候。併番人は矢張兩人に御座候。同三月に相成申候處、下旬頃より宗七儀胸相痛、食事相進不申に付、其段番人へ相圖仕候處、醫者の由にて年齡三十計、服は彼地の人同樣の男一人相見え、宗七の胸先きを撫抔仕候上、一寸計の蛭二十計持來、痛所へ付、血を爲吸申候處、暫時の內に血を吸、長三寸計に相成、太さも右に隨ひ太り申候處、彼醫者躰の人塩を振懸、不殘落し申候處、跡より血出候に付、粉藥を付帛紗物を當て被戾申候。蛭は色黑く日本の蛭に相變不申候。左樣

に仕候へば胸痛少々宜敷相成候處、又候手足相痛難儀仕、食事も同様相進不申候へ共、手荒き療治抔仕候ては却て身の爲惡敷可相成哉と存、其節は醫者も乞不申、私並初太郎兩人にて介抱仕罷在候處、四月上旬頃番人共の內より、外箇所へ可送遣由にて、船に乘候様仕形仕申に付、宗七儀を私と初太郎兩人にて手を引き門口へ出候處、最前同樣駕籠樣の物出し有之、右の內へ爲乘候處、異人兩人にて舁行申候。

一、私並初太郎も同樣駕籠に乘申候處、番人一人付添、濱邊へ四町計出、去年上陸仕候箇所と違候へ共、矢張船懸り澗にて御座候。彼所に二百石積計の船一艘有之、帆は三枚立にて袋の樣に相成、船造り方は最前の通にて格別違不申候。是は私共を送り可遣用意船と相見え、右船へ乘候樣番人仕形を以申聞候に付、駕籠より出、私並初太郎と宗七の手を引、てんまに乘、彼大船へ乘移申候處、乘組八人風俗共地の通、外に番人一人、私共等都て十二人にて、彼浦出帆、十日計颿候處、風合不宜由にて、岩山の腰に船を付順風を相待居、同所に日數廿日計船を留居申候。人家共邊りに無御座、遠方に相見え申候。然內風合宜敷相成候由にて、帆を揚げ五日計颿候處又候風合惡敷相成候由にて、左右になり出澗形に相成候所へ船を入、順風を相待居申候。其邊に異船四・五艘有。右澗の際に家百軒計も可有御座哉、其建方白壁等にて、塗込有之躰に相見え申候。船中の者此所へ上陸仕、水等致用意、同所に日數十日計澗

懸り仕居候處、逐手に相成候由にて、夫より日數十五日計颿候處、私共を可屆所の由にて、城下躰の所にて澗形の所へ入、其入口にて一夜を越、翌日私共上陸仕候樣、船の者共仕形等にて申聞候に付、てんまに乘候處、船の者の內五・六人艫にて一町計押候處、着岸仕候に付、私儀宗七を背負、初太郎共上陸仕候。

一、尤其先私共着の趣、彼地方へ屆方も致置候躰にて、例の駕籠持參、役人躰の人三人計相見え、三人共乘候樣仕形仕候に付、乘申候處舁行申候。私共參候儀前廉相知居候躰にて、見物人男女共群集仕、目に及不申程にて御座候。凡四町計舁行候處御役所躰に相見え、前は土塀にて圍ひ、門塗込にて、戶は二枚有之、左右へ開き申樣に拵へ、戶は白彩色にて仁王躰の像を繪書、餘程古び居申候。右門の內へ三人共駕籠に乘候儘舁込候處、付添候異人より駕籠下り候樣仕形にて申聞候に付、三人共下り、宗七を私並初太郎兩人にて手を引、彼異人に誘れ參候處、屋根は瓦葺、柱等顯、都て木にて造候建物の內へ入候樣、仕形にて申聞候に付、則入候處、其者共何方へ歟參り、私共三人のみに相成申候。此所土間に付座し不申、三人共立儘に罷在候處、奥の方より異人幾人ともなく見え、私共を指し抔仕申候。其躰を見申候處、羅紗にて仕立候帽子の上に、金或は色替りの玉をする、其所より帽子の上へ色々奇麗なる總をたれ、着物は是迄見馴不申品、都て錦織樣成物にて結構至極、誠に目に餘り申候。併仕立

方・着川方、履に至る迄前段同様格別相變り不申候。是は彼地にても、餘程身柄の人々と相見え申候。同所にて暫相立候處、最前の付添兩人又々罷越、此所を罷出候樣に手眞似仕候に付、宗七の手を引異人共元の駕籠有之所へ參り、則駕籠に乘り候處、舁出右門を出、尤付添人兩人の異人と同樣にて、左右軒を並べ候町立の所五・六町程行候處、又々役所躰の所にて、門より奥に至迄前段同樣の所へ連行申候。此所に在合候人々も、前段の通身柄宜人の躰に相見え、是又暫時にて相濟、最前の通門にて駕籠に乘候處、則舁出し、又々町立の所四・五町計參候處、寺の樣子にて瓦葺、柱等顯候山門有之、左右に木造の仁王尊躰の佛二躰立、眞中の扉はしめ、側に小門有之、右門外にて駕籠より下り候樣、付添の異人仕形仕候に付、三人共下り、私儀宗七を背負、初太郎共三人右異人に被伴入候處、門內空地にて、見付には本堂と覺しく六間に八間計も可有之哉建物有之、勿論十間にて、門には墻を傍り、正面には見馴不申大木像立、左右には羅漢躰の佛數多並御座候。其後は每朝右本堂にて鳴物を打、坊主一人にて何か勤行仕候。僧數多罷在申候。其形頭を剃り、平人同樣牡丹じめ腰切の物を着し、足には股引樣の物を着し、履をはき居申候。右上着には木綿樣の物を鼠色に染、幅廣き襟を付、前にてかき合居申候。俗人は斯樣に襟付の上着は着用不仕、都て牡丹じめの着物に御座候。右上着は僧分の衣服にて、衣と相見え申候。右の外袈裟躰の物着用仕候儀、見受不申候。且又私

共可入園は、彼本堂躰の建物の後〻の方にて、二間半に五間計有之建物、屋根は瓦葺、柱を顯し、少々壁も塗、板敷は張渡し御座候へ共、常にはき物の儘にて上り候哉、泥付に相成居申候。右の內見申候處、眞中御厨子の內に手多有之候佛一躰安置有之、前には手輕き切れの戸張を懸御座候。右園の內へ入候處、役所躰の所より付添異人兩人は、私共を其所の人々へ引渡し申躰にて罷歸申候。

一、宗七儀、其後療治も不仕故に候哉、病氣益相募り、手足は不及申惣身相痛、食事も進不申、難症に相成候に付、先爲打臥申候。然內日も幕懸り申に付、共所の人と相見え、番人來り行燈躰の物に火をともし、藥鑵躰の物に茶を入持參、茶椀へ移し私共へ呉候に付、給候處、日本の茶に違不申候。夫より暫時相立候處、飯を横に入持來り、椀は人々別に仕、菜は大鉢にぶた・根深樣の青味を添煮に仕有之、給申候。外に玉子を七つ計、から共に切、鉢に入出候に付給申候處、塩にて味を付御座候。右食事相仕舞候處、付添の異人より打臥候樣手眞似仕候に付、持參の着物取出し着仕、打臥申候、惣て彼の邊は暖國にて、夜具は無之共宜敷故に候哉、何方にても出し不申候へ共、私共は持參の分有之事故着用仕候。尤其頃は六月中旬に御座候。則右番方兩人も同間に打臥候に付、見申候處、兩人共莫蓙一枚宛敷、夜具もなく夫なりにて打臥申候。翌朝に相成候處、右番人二人共起出、何れへ歟行申に付、私・初太郎も起

出候處、右番人面洗居申に付、私共も面洗申度存、右番人參り候に付手眞似仕、面洗度趣申入候處、淺き盥に湯を入持來候に付、私・初太郎共面洗申候。夫迄も近邊に川抔有之候へば、水にて面洗居申候。暫時相立候處、夜前の通茶を藥罐に入持來、私共前に指置候に付、宗七にも呑し、私共も呑申候處、番人も右茶を呑、四時頃に相成候處飯持來、菜は格別相變り不申候。右給仕舞候處、見物人夥敷參り候に付、番人共圍の前口にやらい樣の物にて仕切候處、其外より覗き見る者共數不知、何程となく入替來り申候。然處宗七儀次第に重症に相成、最早一命も危く相見え苦敷躰にて醫者を願吳候樣申聞候に付、私儀矢立持合居取出し、病人惣身相痛候間、藥を用ひ吳候樣書認、猶又手眞似仕番人へ爲見候處、右認候內痛と申字抔二三字も分り候哉、承の躰にて、右書物を持何方へか行申候後、昨日役所より付添參異人又々相見え候に付、私共より最前書出候內相分り候哉と、心當りの文字又候書出候處、彼人々硯筆等持參、何廉認被爲見候に付、見候處、二三字も相分候へ共仝く讀め不申、右紙の末へ書候樣にと手眞似仕候に付、又々書出申候處持行、暫時相立候へば醫者と相見え候人同道にて相見え、裝束は其地の人々に變り不申、則宗七の手を取、豚並痛申個所被見候上、何廉藥法樣の事を紙の端に相認、番人の內へ被相渡候處、何方へか行申候て間もなく紙の袋に藥を入持來り、何角申合、右醫者は被戾申候處、右藥其間の內にて土瓶に入煎吳候に付爲給、一兩日

も相用候へ共宜敷躰も無之に付、又々書出候處、醫者相見え藥も被與候に付、爲致服藥候へ共、兎角便不通にて、病躰同篇に御座候。

一、斯樣に仕日數十日計相立候處、彼役所より付添候人、奉次と歟申二字認爲見、例の駕籠持來候に付、次の所へ可送遣儀と存、三人共右駕籠へ乘候處、其所の番人等五六人も付添、四町計町中樣の所を行候へば川岸へ出申候。其川幅十間計御座候。狹き所は七八間計にて水流れ遲く、先は溜川同樣に御座候。右川中に七八十石積計の屋形船一艘、船の表には大字認候提灯を二張左右に釣並、鑓樣の物を四本立、艫には地白き木綿に文字を認候小さき流旗を二本立、役人と思敷宜き衣服着候方、上下人數は存不申乘被居申候。其裝束前條同樣、上役と歟見え候人たば粉被呑候を見申候處、きせるの形異躰には御座候へ共、日本の分と變り不申、近習役と相見候人たばこをつけ上候へば給べ、近習役へ渡申候。左候へば又つけ候て上申候。自分にて御つけ不被成候。次に私共乘候船、大きさ右同樣、表に提灯一張並鳴物を釣置、家建有之候所へ參り候節は右鳴物を打申候。艫に前段同樣文字認候旗一本立居申候。此船に私共三人、番人一人並御役人躰乘組被居候。船へ折節相通し候人一人都合五人乘組、又一艘船出申候。是も表に提灯二張・鑓四本、艫に旗一本立有之、役人躰の人數十人乘、都合船三艘出帆、白帆三枚揚颯申候。風無御座候時は艫にて押行、折節は左川縁在所へ船を寄、何

角改申候。其川左右は山一向見え不申、廣き所にて田地又は野原等にて目も及不申、川中は船澤山往來仕候。

一、彼地より出候日は六月廿日頃にて日數七日目に一ヶ所の城下躰の所へ着岸仕候處、右役人躰の方船中より二人上陸仕、書狀樣の物持參何方へか行、暫時相立候處、彼地迎人駕籠を爲釣、右船人と同道罷越、私共上陸仕り、右駕籠中へ入候樣手眞似仕、船を川岸へ横付に仕候に付上陸仕、則三人共右駕籠へ入別に乘候處、其後船は如何相成候哉見不申、彼地の迎人付添行申候。其所家建等前條同樣にて、町中四町計過申候處、其形役所躰の所にて、建方・門構等に至迄最前の通に御座候。彼門を通り、內場にて私並初太郞駕籠より下り、宗七儀病氣に付付添人へ其段仕形仕、其儘に指置、私共兩人は備付の一圍へ入候樣、付添人誘引仕候に付入申候。此所建物都て木柱を顯し建御座候。右圍の上の三方には、足高き卓樣の物に毛氈を打懸、其上に硯を置、筆立に筆を立、其後の方に椅子を飾り有之候。私共へ何廉書候樣彼付添人仕形仕、別に硯紙筆與へ申に付、私儀日本と書出候へば奥の方へ持參仕候。暫相立候處、重て役人と相見え、金の玉するゑ候羅紗の帽子を冠、衣服美敷着用方等前段同樣の人相見え、右椅子に腰を懸、其外は下役と歟見え候。衣服右同樣の人三十人計左右へ立並、私共を被見屆候躰に相見申候。其間暫時にて、最前の付添人戾り候樣仕形仕候に付退き、前段駕籠

に入候處、元の門前へ舁出し、右町三町計過去候處、又々寺樣にて手輕門構有之所へ參、其邊りに一圍の建物有之、彼前にて駕籠を下し、此內へ入候樣付添人手眞似仕候に付入申候。此建物は壁無御座、都て板ざくみにて、板敷も張、正面には見馴不申佛一躰餝り御座候。付添來候番人の外又々二人相增、都合四人に相成申候。則飯等持參、菜等前條同樣にて給べ仕舞、打臥申候。其夜は最前より付居候番人同間に打臥、翌日起申候處、右番人も起、面洗申湯を取吳申に付、私並初太郎も面洗申候處、三人の者へ藥罐に茶を入、茶椀三つ相添吳申に付、何れも呑申候。四時頃八つ時頃に相成候へば、如每も飯を吳申候。菜には豕又は不見馴塩魚、或は鯉・鮒抔澤山有之躰にて、何れも豕の油にて煮吳申候。

一、然處宗七儀日に增瘦衰、最早自身にて起臥も仕得不申、勿論病も次第に指迫り難儀仕候へ共、醫者乞候ても、病躰の樣子抔一色手眞似仕形等にて言語分り不申事故、心配至極、病人も覺悟は仕居候へ共、任苦敷、藥給候はゞ今一篇本復も可仕哉と相歎候に付、則醫者を請度旨書認、番人へ爲見候處、夫々相達候由にて醫者相見え申候。其風俗最前の通、則診察有之、煎藥を被吳、幾度用ひ候ても少しも宜方見え不申、日々相惱居申候。且此所にて彼地の暦見申候處、外の字は讀不申候へ共、月は相分り申候。其頃は最初より操覺居候月にて、則六月に御座候。私共斯樣に居泊候所は、寺の由にて坊主二人折節見申候。其形以前の通にて、

看經の躰も見受不申候。

一、彼地にて閏七月八日に相成候處、前段付添人より又々奉次と申事書爲見、所持の品仕抹仕候樣仕形仕候て、前段同樣駕籠持來候に付、宗七を抱乘せ、私・初三郎も同樣乘申候處、舁出し川岸へ出申候。川は最前着仕候節の續の川の由に御座候。右川中に役人乘船一艘、屋形にて表に提灯・鑓も有之、艫には旗を立御座候。次に私共乘可申船、大きさ等右同樣、表に提灯・鳴物を釣、艫には旗を立御座候。右船川岸へ横着に仕、私共乘候樣付添異人仕形仕候に付、三人共乘申候。外に番人二人同船仕、二艘共三枚帆を揚、右川中を颿申候。家建有之所へ至り候ては右鳴物を打、日數五日計颿、七月十二日に一ヶ所の湊躰の所へ着仕候處、船の內より一人書狀躰の物持上陸仕、暫立候處彼地の異人一人駕籠を爲持來候處、私共三人上陸仕候樣船の者仕形仕候に付、三人共上陸仕候處、迎に參り候人は通辭人の由にて、日本の者歟と尋申に付、日本の者の旨相答候處、日本詞にて駕籠に乘候樣申聞候に付、三人共乘申候。初發上陸仕候所より共地迄、言葉一向不通の所、初て日本言葉にて應對仕り、言語明白に相成、何れも大悅安心仕候。

一、送り來り候船は共所にて別れ、三人共彼通辭人指添、木柱顯れ瓦葺の家建有之町立躰の所四五町計行候處、役所の由にて門構有之內へ駕籠舁込、門內にて下り候樣通辭申聞候に付、

私並初太郎駕籠より出、宗七も重病に候へ共何れも一集に出候樣通辭申聞候に付、私・初太郎兩人の肩に宗七を懸け、見付に相建候一園の內へ通辭に被伴候處、腰懸を出候に付、三人共腰懸け居申候。建物作り方等先々同樣。右閣前方玄關樣の所に、提灯を六尺計の棒の先に付、文字を認二張建有之候。右園の上の方に卓を餝り、其上に硯並筆を立、少し退き椅子を置有之、通辭は私共側に罷在申候。暫時相立候處、重役と相見え候人御越、右の椅子に懸り、外に下役左右に三十人計立並、裝束等悉皆先々の通。然處通辭より私共へ下に居候樣申聞候に付、土間に座し候處、此地へ如何致し參候哉と相尋候に付、難船の次第委曲申述、地名は不存外國へ漂流仕、夫々被相送、今日此所へ致着候段申達候處、國名並父母有無歲幾つに罷成候哉と相尋候に付、加賀國の者にて母存命、歲は二十五に罷成候段相答候處、通辭より彼國の言葉に直し上役へ相達申候處、一人に錢四百文・扇子一本・莫蓙一枚、外に麥饅頭一鉢宛被下候に付給候處、右饅頭中は豕或は品々魚肉等刻入候物に御座候。右錢は眞鍮色、大きさ日本錢の通、少々大小御座候。文字は表に道光通寶、裏に小紋字一字有之候。退き候樣通辭申聞、則立出、又々宗七を肩に懸、最前の所へ參り、三人共駕籠に乘申候處、舁出町並の處四五町計過、前口五間・奧行四間計の家へ着、前は土塀にて、夫より直に家建屋根・瓦葺・柱等都て木を顯し、間境は壁も付、內は土間にて二階も御座候。私共三人右家の前にて駕籠より

下り、通辭誘引にて二階奥の方一間に落付候處、仙臺の者の由にて六人漂流仕候由にて、彼地へ參り居、隣の間に罷在、私共着の様子見聞仕、直様私共方へ來り、互に無事を悦び居申候處、通辭より私共三人へ寢申床を出呉候に付、先宗七を爲寢置、皆々打寄難船の始末咄合居申内飯を持來、菜は豕或は大根抔豕の油に煮候品を呉申候。家具等都て先々の通。且私共の番人二人付居、其日は打臥申候處、右番人も同間に臥申候。

一、翌日通辭相見え、外に役人躰の人指添罷越、私共所持の品々相改申候。右通辭へ其地名相尋候處、チャボと申所の旨申聞候。長崎へ來り候上承り候へば、右チャボはサフと申所の由に御座候。彼人の名前を尋候處、ショウデイと申聞候。其後毎日彼ショウデイ被見舞申に付、日本へ戻度趣申入候處、六月出船有之候に付、十一月ならでは跡船無之候間相待可申旨申聞候。是迄の食事一日に兩度に御座候へ共此所へ來候ては日に三度に相成、朝は粥、晝夕兩度は飯に御座候。日本のたいとう飯様の物にて、味大に悪敷、其外一日一人にたばこ錢として三文宛、四日目には風呂錢として六文宛被下候。たばこは付添の番人に買貰申候。味は格別變り不申候。きせるは在留中彼番人に借用仕居、出帆の節相戻し申候。風呂の儀兩三度も番人同道參り申候。其恰好大躰日本の風呂屋に似寄候て、都て石にて栅御座候。男のみ入湯仕、女は一向出合不申候。

一、扨又宗七儀同篇の處、只今にては言葉も相通じ候事故、又々醫者賴度旨申聞、則其段通辭ショウディへ相賴候處、醫者相見え、其風格先々の通にて、則煎藥を被與、日に三度宛相用ひ候へ共快氣の躰も相見え不申、二階に罷在候ては兩便等不便に付、通辭に相賴、九月頃宗七と私と兩人は下の間に座敷を轉申候。其內十月に相成、寒さに相向申に付綿入と蒲團を相賴み候處、綿入は日本仕立に仕、蒲團は三幅に仕立、並日本にて玉子と唱候帽子一つ、足袋一足被下着用仕候。其頃よりショウディの外、名不知通辭一人、右ショウディと代り〳〵相見え申候。然處宗七儀日々病氣指重り、乍居便用仕候に付、同人着物並私着物にて仕末仕居候へ共、無數の着物に候へば際限も無之事故、床板に穴を明け便用爲致申候處、十一月九日朝終に病死仕候。則私並番人よりも通辭迄相斷候處、同日晝頃役人躰の人通辭と同道、人數六七人相見え、宗七死骸相改被戻候處、早速箱一つ、木の厚さ三寸計・深さ一尺五寸計・長さ五尺計・幅二尺計に拵候を、彼方より來候人持參、死骸を入可申旨に付、私儀宗七所持の帷子を爲着、右箱の內へ爲入申候。然る處近邊の家へ御役人相見え居候て、私共に罷出候樣通辭申聞候に付、私並初太郎、仙臺の漂流人共も同道にて罷越候處、上役の由にて金の玉する候帽子等着用の人椅子に懸り、前に卓等餝り、其外下役と相見え候方左右に十人計立並、宗七病死の趣相違無之哉、且又被下候藥用ひ候儀相違無之哉と、通辭を以尋有之に付、相違無

之段申答候處、退候樣通辭申聞候に付、何れも止宿所へ罷歸候處、續て通辭罷越、死骸山へ埋可申旨申聞、人足躰の者兩人にて舁出申に付、通辭・私並初太郎・仙臺の者共も同道罷越候處、同所の町端に山有之、都て其地の人死候へば此地へ埋申躰にて、其邊墓多く御座候。右山の内一箇所穴を掘、箱の儘にて埋申候。餘り不便に存、通辭に讀經相賴候處、墓近邊に寺有之、僧一人相見え、引磬を打つて暫時讀經被致候に付、私儀通辭より錢二百文借受、右の内百文にて線香・蠟燭を買求貰ひ手向申候。殘百文は爲布施右僧へ進申候。僧の風俗前段同樣、則讀經も相濟申に付何れも罷歸申候。右死骸埋候所に墓印も無之に付、私より通辭に墓建吳候樣相賴候處、則御願申上候由にて、七日目に參詣仕候へば、石にて高さ二尺計・幅一尺四寸計に拵、表に日本宗七墓と彫付御座候。且又此地家數四千軒計も可有御座哉、日本渡海の所にて萬事能通じ申候。商家も軒を並、大きに繁昌に御座候。在留中見請候處、日本の小判樣にて、彼地の錢四貫文程に交易仕候。氣候大きに寒く、折節雪も降り申候。

一、然處十一月廿一日には彌々出帆に取極候間、其心得に可仕旨通辭より申聞、大に悅罷在候處、同廿日近邊にて、先頃宗七死去の節上役人相見え候家へ、私並初太郎外仙臺の者等も被招、私共を可送船頭爲見知合罷越候へば、御馳走御座候。其料理・酒・肴等種々御座候。右は御上より被仰付候由にて、退散の砌爲御禮直樣私共通辭同道、先達て此地へ初て上陸仕候

砌來申候御役所躰の所へ罷出候處、以前の通御役人御出、改て人々名前御尋に付、夫々申述候處、御書留有之、其上にて錢五百文宛・菓子少々宛被下候上、退候樣通辭申聞候に付、皆々罷出候處、又々通辭同道、只今迄一切來り不申役所躰の所へ連行、下役躰の者四・五人罷在、其所にて菓子少々宛、太白砂糖相副人別に被下、別に何の尋も無御座候。夫より通辭同道元の止宿所へ罷歸申候。翌廿一日出帆可致處、雪降申に付延引に相成、同廿二日には快霽に相成申に付、私等孰も通辭同道海邊へ罷出申候處、五千石積計りの船にて、立は二十間・幅は八・九間計有之、檣は三本立にて、船頭等船人百人計、外に私共乘組、同日出帆仕颿候處、凪合宜、同晦日壹岐の國山見え申旨船方より申聞、私儀は不及申、船中一統大悦仕候。祝として船の表にて色々紙にて折形仕候品を焚申候。其前船の左右に提灯を數十張燈申候。是は神佛への備物と見え申候。船中は豕或は鷄抔數品料理仕給申候。

一、十二月朔日には肥前國五嶋の山見請、彌々相喜居申候處、同二日夜四つ時長崎湊海岸より一里計隔船を留め、翌三日朝に相成候處、長崎より御指出の引船數十艘來、元船六半時に湊の內へ引入、碇を打下し船懸仕候處、長崎表御役人中樣惣人數十人計、二艘に御乘組御越、唐船へ御移に御座候。尤私共唐船に乘渡り候儀は相知れ居申由にて、直樣私共國所・名前、並如何の趣にて外國へ來り候哉と一通り御糺に付、漂流仕候趣委曲御答申上候處、名前等御書

留の上、所持の品御改、一々御書に御座候。其上私共惣身御改の上、てんまに乘候樣御談に付、則乘申候處、唐人の內通辭人並船頭等三人別船に乘、御役人中樣も最前御乘越の船へ御乘上陸仕、直樣右御役人中樣・私共、並右唐人御役所へ御召連れ御座候。唐人は上陸仕候より駕籠に乘申候。則私共御呼出、於御奉行所漂流の次第一通り御聞の上、牢揚屋へ被爲入置候段被仰渡候上、重て別に御役所において裸に被成、惣身御改、所持の品々嚴重御吟味有之、猶更於異國吉利支丹宗門等被勸候儀は無之哉と御糺に付、聊も左樣の儀無御座段申上候處、踏繪被仰付、則踏申候處、所持の品の內蒲團は御渡、餘の品々は不殘御封付、御仕抹に相成申候。私儀は牢揚屋へ被爲入置候。爲塵紙代一日九文宛被下候。其後日々御召出、初發船乘初候頃より、異國へ漂流の始抹、長崎へ着岸仕候迄の委曲綿密に御吟味有之、口書御取立に御座候。

一、右難船の始終等御聞に付、異國風土の樣子迄も有の儘奉申上候。里數等日本の圖を以奉申上候段申上候處、於異國吉利支丹等怪敷宗門抔被勸候樣の儀も無之哉と御糺に御座候へ共、聊も左樣の儀無御座候。長崎於御役所も嚴重御糺にて、踏繪も被仰付候。私宗旨は一向宗、鳳至郡皆月村善行寺旦那に御座候段申上候處、異國へ漂流乍仕、無恙歸鄉仕候儀は偏に御上の御恩澤に候間、厚存付候樣被爲仰渡、誠に以難有仕合冥加至極、御仁惠の程奉恐入候

段申上候處、向後船稼御指留、且陸地たり共他國へ罷出候儀堅不相成段被爲仰渡候趣、委曲奉畏候。段々御難題の御儀、何共可申上樣も無御座候。難有仕合奉恐入次第に奉存候。

持戾候品々

木綿蒲團　一　枕　一　木綿袷　一　同繻袢　一
同半てん　一　手貫き　一　柳籠履　一　よま　一筋
札守　八枚　御守　一包　船印　二　木綿綿入　一
紙入　一　手拭　一　脚半　二　紙　一綴
解着　一　切れ　少々　帶　一筋　矢立　一
剃刀　一　印形　一　大針　一　本　三冊

〆

於唐國貰物品々

木綿綿入　一　但サフにて貰申品仕立方日本の通。　同帶　一筋　足袋　二足　毛織小切れ　二
蓆　二枚　内一枚破捨。　櫛　一　箱　一　但鍵共。　木綿蒲團　一　引解裏表共。
棕櫚敷物　一　細引　一筋　打紐　一筋　木綿股引　二足　内一足追々着用破捨。
同繻袢　一　唐錢七十七文　但、長崎御役所にて御取揚代りとして日本の錢七十七文御渡に御座候。

雲片程本のまゝ

扇子　一本　團扇　一本　筆　六本　硯　一面
墨　二挺　白紙の本二冊　錫茶出し一ッ　猪口　五
蓋茶椀　一　紙　二帖　硝子鏡　一　紙入　一
皮砥　一　毛拂　一本　錐　二本　釣針　三
ハアカ　一　雲片程　二　指輪　二　箸　三膳
糸　四卷　雜藥　少々　牙　一　皮　一切
はんや　一包　手拭　一　錢入　二　着物　一
風呂敷　二　帽子　二　羅紗小切少々　あんへら紙入一 内に品々三入。
硝子瓶　一 但唐からし入。

〆

右持戻候品、並唐國所々にて貰申品々、如此に御座候段申上候處、前段之品々不殘御渡被下、奉請取候。

右奉申上候通少も相違無御座候、以上。

天保十五年十月十四日　彌三兵衛

御郡御奉行所

この碑を竹澤御庭に建設したるは嘉永四年十一月廿七日に在り

十月十八日。江戸に於いて製したる金城靈澤碑竣成す。

〔諸事要用雜記〕

十月十八日

一、於江戸表被仰付候碑石出來に付、仕抹方之儀御用人より申來、伺之上坂下御門內御庭之內程能場所見計、損所等出來不申樣入念仕抹致置候樣被仰出、其段及返書。且舟積運賃圖り書到來、見圖り拾兩位之由申來る。

〔金城靈澤碑文〕

金城靈澤碑銘并叙

臣 津田鳳卿 奉命撰

臣 渡邊栗 敬銘

臣 市河三亥 謹書

北陸之鎭。曰白山。雪封其巓而四時不盡。其峻逼霄。稱爲本邦三嶽之一。自古屬我藩管內。其麓跨五州。山脈蜿蜒。向北而來。至山崎莊而止。環匝三面。蒼海膺其前。中有龍蟠虎踞之都。元精鬱渟。鍾秀標瑞。具百二之形勢。實爲蜻洲之雄鎭。先公比之金陵建業城。乃其名所由也。城南數百步。有毖寒泉。淸而且漪。昔有逸人。稱曰藤五。採鑛于山。淘汰斯水焉。故

稱金澤。藤五爲人寡欲。好施不嗇。蓋藤氏第五郎。避京洛之紛華。來棲遲於此。衣褐懷玉。遁名晦迹。不求人知。故前史無足徵者。天正中。我藩祖公。自南越就封登州。三遷移鎮尾山。布維新之令。革舊染之俗。招賢任能。自西自東。士感而應之。民悅而歸之。自成都邑。逮文祿元年。恢拓都城。民人益輻湊。皆樂其生。於是。近取此水以名都城。於是乎金澤之名。昉聞于天下。迄前朝時。因營苑囿。池在其苑囿中。咫尺新殿。爰感建都之古蹤。仰祖公之創業。託物存思。乃錫嘉號。曰金城靈澤。竊比隆於有周之治。今公承統。理化休明。能纘先旨。命臣三亥大書其榜。又命臣鳳卿。叙述其事。臣栗繫之銘詞。乃勒石建之于池上。加以公親筆題額。於是。勝蹟不朽千古矣。抑斯水也。其肇知於一个逸民。遂被明主之顧。發名於文祿。錫號於文政。樹碑於天保者。以其密邇雄都。而遭遇右文之時也。涓雖然。々一檻之水。而被皇々親奎之榮。寵異至此。固不期而遇。不求而致者。豈非有數而存焉者乎。且數百年之前。誰知有今日之事。至數百年之後。永依託雄都。以與國並傳。又徵以斯文。則誰不知人以池傳迹。池亦因城託名。壹是皆賴明主之一擧。而三善皆顯哉。果然則勝蹟。眞是不朽無疑矣。臣材駑且老。固不足以應盛旨。敢陳愚衷。以寓景仰之意。臣栗繫以銘。曰

府城之南　檻泉洋溢　玆匯爲澤

克育萬物　滋潤膏沃　涵養無竭

盈科而進　成章以達　豈同溝澮
雨集皆盈　厥實深厚　粤得美名
君子所法　君道以享　遺澤流渥
黎庶遂生　休哉君德　日昭月明

天保十五年歲次甲辰正陽月

十月廿二日。浪人の徘徊を禁止する幕令を村々の高札場等に揭示せしむ。

〔御郡典〕

近年諸國在々、浪人躰之者多致徘徊候儀に付、從公儀御觸之趣、去年御算用場より申來、其節一統申渡置候通に而、右御觸之趣御高札場ゟは今度御高札に書記相渡、御高札場無之村々は、右御高札寫村々入口に建置可申旨に付、別紙寫壹通相越之候條、而々組切、早速板札に寫出來爲建置可申候、以上。

辰十月廿二日　　高澤平十郎

能州四郡十村中

近年諸國在々浪人躰之者多徘徊いたし、頭分・師匠分抔与唱、廻場・留場与號し、銘々私に持場を定、百姓家へ參り合力を乞、少分之合力錢等遣し候得ば惡口いたし、或は押而止宿を乞、

天保十四年八月十六日參照

本文は幕令なり

又は病氣抔与申逗留いたし候内には、種々難題申懸金錢ねだり取候趣相聞え、不屆之至りに候。以來右浪人躰之者、村方へ罷越何樣申候与も、決而不爲致止宿、帶刀をもいたし候者は、壹錢之合力も不致、自然不法申候者は早々指押、若手に餘り候はゞ、其所之穢多・非人に爲指押、御料は御代官、私領は領主・地頭役場江可致注進候。

一、右浪人躰之者、黨を結押歩行候儀及見聞に候歟、又は村方へ罷越候節不得指押、其所に穢多・非人等も無之場所は、立廻り先等遂穿鑿、是亦御料は御代官、私領は領主・地頭役場江早々可申立候。

右之通可相心得候。若相背候者於有之には急度可申付候。

右御觸渡之趣、今度一統江申渡候通、嚴重可相守者也。

天保十四年八月　日　奉行

十月廿三日。百姓・頭振の名に利の字を用ふることを戒む。

〔御郡典〕

百姓・頭振等都而名前頭之字を、此利之字に調候儀は、於御當國に不相成儀に候處、村方より書出候分等、調理方も不行屆向多有之候に付、以來諸書物等調方手代共心得之儀、御入念御談置可被成候、以上。

辰十月二十三日　　　　　　　　　　金澤より　高嶋庄助
口郡組々裁許名宛

十月。城中御番人の一類御預人ありたる爲勤番引する者が事件落着の上出番する期日に關して定む。

〔雜事日記〕

御城中御番人之內、一類御預人有之、勤番引之人々、當番日前日落着之分案內遲々に相成、其日朝に至り承候共、先づ御番所江罷出候儀。且公事場において落着僉議方長く相成、翌日或者翌々日江越候共、初日之日付に而落着方頭・支配人江申談候由に付、加樣之類者右奉行より申達候處を以、出番方指引有之候樣先年申渡置候。然處兎角遲々相成、御番指引方手間取候間、向後一御番拔候而致出番度旨紙面を指出候得共、都而一御番拔に者難承屆候。乍併當番日前日落着之分は、一御番拔出番之儀に相心得、當番日前々日迄落着之分は、譬遲刻相成候共無彼是出番爲致可被申候。右之通候得者、落着日振調候而者却而紛敷候間、遠所御用等相濟出番之振に相心得、都而落着日振調候に不及候。尤於公事場落着人、右奉行より頭・支配人江申談候處を落着与取候儀等、前々之通候條可被得其意候事。

甲辰十月

十一月二日。幕府、前田齊泰に表高一萬石に五百兩の割合を以て江戸城本丸造營の資を納むべきことを命ず。

〔成瀬正敦日記〕

十一月十二日

一、朔日御奉書御到來之所、筑前守樣御風氣に付、御名代御指出方之儀、聞番より荒井殿へ及御內談候所、先御用番樣御勝手へ聞番助參上相伺候所、筑前守樣御名代御指出被成候而可然旨御指圖に付、則表向江相廻、其段御屆仕候旨。且出雲守樣へ御名代筑前守樣より御賴御使相勤、二日御城へ御附使者に罷出候旨。且御禮勤之儀も荒井殿へ及御內談、於御城坊主衆を以大御目付へ相伺候所、文化之度御拜借金被仰出候節之通、御名代御廻勤に不及旨、稻生出羽守殿御指圖之旨御承知之上、御禮御使札之儀相伺、追而御用人へ相達可申上旨等、聞番より申來。且御達書寫も指越候事。

卷目之上御名江　　　　御　　名

御本丸御普請に付、金八萬兩上納仕度旨達御聽、尤之儀御機嫌に被思召候。乍然願高之通には上納に不及、一萬石に五百兩之割合を以上納被仰付候。右御普請之御用途に可被差加旨被仰出候。

出雲守は富山侯前田利保

十一月十五日

一、御上金年割等之儀、江戸表遠江守殿僉議之趣も申來居候得共、御勝手方に而御算用場奉行へ僉議有之、其趣等申上り、御書付通三ヶ年々割に而御上納之事に御詮議御治定被仰出候付、其段今便御用番より返書に申遣筈之事。

〔續德川實紀〕

十一月三日、松平加賀守・松平三河守・松平大和守・佐竹右京大夫中略、本城營作により上納金の事請ひ申せしに、さるべき事とはおぼしめされぬ。されど萬石にして五百兩、寺社奉行・大番頭は萬石にして、三百兩を收むべしとなり。

〔御家老方等諸事留帳〕

十一月十三日

一、今般從公儀炎上に付、諸侯より御上金御願之方ゟ、萬石に付五百兩宛之圖りに而、三ヶ年に御上之事に被仰出候由、江戸表より申來候狀昨日到着之事。

但、此方樣より先達而八萬兩御願立之處、只今に而は五萬兩餘御上之事に相成候事。

十一月四日。前田齊泰、久留米侯有馬賴永の妹をその子慶寧の室とすべきことを告ぐ。

通傳はつで

〔成瀬正敦日記〕

十月九日

一、有馬筑後守樣御妹、當年御十三歳に被爲成候御方、筑前守樣江御緣談之儀、先達而阿方御家來渡邊亙与申仁より、通傳を以御本宅御廣式へ申込有之旨等、先達而佐山申聞候趣、森七郎左衞門より以內狀申越、申上置候。然處御容儀之樣子等、亙より申越候而已に而譯り兼候間、外通傳を以得与承合申上候樣、佐山幷聞番江も可申遣旨被仰出候付、今日於御本宅御廣式頭幷岩田等へ以內狀申遣す。

十一月四日

〔成瀬正敦日記〕

一、左之通御用番へ被仰聞。

筑前守樣御緣組之儀、有馬筑後守樣御妹女樣當年御十三歳被爲成候由に而、御年齡等茂御相應に付、右御方与可被仰合哉与思召候。各存寄茂無之哉、遠江守江茂可被申聞候。此段先御內意被仰聞候。

十一月

十一月九日。越後糸魚川藩の吏、異國船の件に關し加賀藩領越中境關所

に通達す。

〔近藤集書〕

一筆致啓上候。寒冷之節に候へども、彌御堅固被成御勤役、珍重に奉存候。然ば東蝦夷地モロラン場所沖合に、異國船一艘滞船いたし居候に付、松前志摩守様より一番手御指出、尤異國船之仕向により又々可被及御案内旨、御同所御役人中より海岸筋連々通達有之候由に而、內藤紀伊守様衆より別紙之通溝口主膳正様衆ゟ通達有之、御同所様衆より榊原式部大輔様衆へ別紙之通通達有之由、御同所様衆より猶又當方へ右別紙寫二通相添、別紙寫之通申來候間、此段爲御知申候。尤自然異議之儀も御座候はゞ、兼而及御懸合置候通被仰合被下様いたし置候。右之段可得御意如此御座候、恐々謹言。

十一月九日　竹島俊司　判

伊井圓八　判

加賀宰相御內

境御詰御役人中様

飛札を以啓上仕候。然ば東蝦夷地モロラン場所沖合に、異國船一艘致滞船居候に付、松前志摩守殿御役人中等より先々通達之別紙寫二通之通り、糸魚川御領主松平日向守殿御家來竹島

俊司等より、別紙之通昨九日夕御關所迄、足輕飛脚を以御達申候。尤此段御用番年寄衆へ御達申置候、以上。

辰十一月十日　　山本修理　印

御算用場

〔近藤集書〕

一筆致啓上候。寒冷相帶候處、彌御堅固被成御勤、珍重に奉存候。然ば東蝦夷地モロラン場所へ異國船渡來に付、松前志摩守樣より一番手被指出候趣、內藤紀伊守樣より通達一條及御通達置候處、其後も滯船いたし居候に付、二番手被指向候處、去月九日同所出帆致し、當時帆形も不相見候趣、志摩守樣より順々御通達有之候段、紀伊守樣衆より溝口主膳樣衆へ申越候間、御同所樣衆より榊原式部大輔樣衆へ通達有之候旨、御同所樣衆より當方へ通達有之候。右之段尙又爲御承知可得御意如此御座候。恐々謹言。

十一月十九日　　竹島俊司　判

伊井圓八　判

川口彌三左衞門樣

東方權左衞門樣

柴　野　甚　助様

飛札を以啓上仕候。然ば東蝦夷地モロラン場所へ、異國船渡來之儀に付、海岸御領有之御方々より通達之趣、松平日向守殿御家來より申來候儀、先達而御達申候通に御座候。然處其後も滯船いたし居候に付、二番手被指向候處、去月九日同所致出帆、當時帆形も不相見候旨、志摩守殿等海岸御領有之御方々より通達之趣別紙之通、重而松平日向守殿御家來竹島俊司等より、昨夕足輕飛脚を以申來候段、與力川口彌三左衞門等より相達候に付、飛脚を以御達申候、以上。

十一月二十日　　　山　本　修　理

御　算　用　場

追而本文之趣、御用番年寄衆へも御達申候間、爲念御達置申候、以上。

十一月十二日。東蝦夷室蘭沖に異國船の碇泊したる報境奉行より達す。

〔成瀨正敦日記〕

十一月十三日

一、東蝦夷地モロラン場所沖合、異國船一艘相懸候に付、松前志摩守殿より一番手御指出、其段御隣領續申迄有之旨、糸魚川松平日向守殿御役人より境奉行山本修理迄、當九日申來候

紙面等、飛脚を以一昨十二日夕御用番へ修理より申越候紙面等、昨日被入御覽被相伺候趣有之に付、いづれ新川御郡奉行より富山御郡奉行江、加州御郡奉行より大聖寺御郡奉行へ、且越前御領江も加州御郡奉行より早速申迸候樣遂詮議被申渡候樣被仰出。且下筋へ御横目足輕間合に早速指遣候樣、且御手當方被仰渡置候。人々江も爲承知申聞置候樣被仰出。且加樣之趣以來廻達方之儀も被遂詮議候樣被仰出、夫々昨日將之佐へ申述置。

十一月十三日。前田慶寧明年入國すべきを以て金谷御殿の增築を命ず。

〔御家老方等諸事留帳〕

十一月十一日

一、筑前守樣來秋御入國に付、御殿之儀金谷御殿眞龍院樣と御相殿に相成、御表之方等江御建繼有之、又二之丸江被爲入候節御溜無之に付、是又御廣式之方其五郎殿等被成御座候御間筑前守樣御溜に相成、其五郎殿・豐之丞殿御部屋、元御細工所御地面より越後屋敷江懸新に出來、御座所に相成候事。金谷御建繼御入用三百貫目餘に可相成御樣子也。

〔成瀨正敦日記〕

十一月十四日

一、昨日大野へ被仰渡候覺書左之通

筑前守様來年御入國之儀御願被遊候筈に付、御座所之儀金谷御殿を御建繼、御事輕に御補理被仰付候。依之右御用向御手前主付被仰付候條、御表向之儀は竹田市三郎、御奥向之儀は田邊左兵衛申談、可被相勤候。此段可申渡旨被仰出候事。

〔恭敏公記史料〕

爲公來秋就國。以金谷眞龍夫人第同公居之。十一月二十六日創營繕。及其成以公居宅稱金谷殿。眞龍夫人居稱松之殿。

〔御家老方等諸事留帳〕

十二月十三日

一、基五郎殿・豐之丞殿、元御細工所より越後屋敷ゟ懸御住居出來之儀、暫御止に相成候事。

十一月十四日。大聖寺侯前田利平使を金澤に遣はし、當年借銀返納の延期を請はしむ。

〔御家老方等諸事留帳〕

十一月十四日

一、備後守様御使者御用人村井市郎左衛門、近江守宅ゟ今朝罷越候處、不快に付不被逢に付、

拙者今日助候に付拙宅ゟ罷越候樣御殿より以紙面申遣候所、夜中六時過罷越左之趣也。
備後守樣御勝手振甚御難澁至極之儀、兼而御承知之通に候。右に付當年御年賦金三口之分、一作御淀御願相成度旨覺書も出之、段々申述に付、尙更遂詮議、相伺候而御答におよび可申候得共、此方樣御勝手向御逼迫至極之儀も、兼而承知も可有之通如何とも被成方も無之、次第に御高借に相成、其上先般公儀炎上に付、此頃御上納金も有之候而、各心配之折柄に御座候間、迚御願通には相成申間敷、詮議も暫日間も懸り可申候間、先引取申候而も可宜、御答之儀は以紙面可申進やと申入候所、左候はゞ明日まで逗留可仕候間、明日御詮議御治定も無御座候はゞ、以御紙面可被仰下、是次第罷歸申度旨申聞候事。

十一月十六日。能登近海に異國船の航行を發見し若しくはその風聞ある時は、直に津田修理に屆出づべきことを令す。

〔御郡典〕

卷目、御算用場奉行ゟ

異國船等相見え候儀、承次第風聞たりとも、能州御郡奉行・山奉行等より、早速津田修理手合ゟ及案內に候樣仕度旨等、別紙之通同人申聞候條、御郡奉行始夫々可被申談候事。

辰十一月

私儀能州一國御縮方被仰付置候に付、能州筋浦々異國船等相見え候節は不及申に、海岸御隣國に而異國船等相見え候儀、承次第風聞たりとも、同國御郡奉行・山奉行等より早速私手合江及案内に候様仕度。併當時所口役屋敷も出來不仕候間、同所居住與力江申越候様兼而被仰渡御座候様仕度奉存候。且御郡方十村等江は、私手合與力等を以夫々可爲申渡与奉存候間、此段も御郡奉行等江兼而心得被仰渡御座候様仕度奉存候、以上。

辰十一月十六日　　津田修理

長將之佐様

十一月二十日。德川家齊夫人逝去の報金澤に達す。

〔官事拙筆〕

十一月二十日

一、今晝九時過御用番より紙面到來致披見候處、一位様當十日薨去之旨申來候に付、相公様江各御機嫌伺候間、今日中登城可相窺旨申來候に付、振之通爲及返書、夫々供爲申談候事。

一、晝八時過則登城、溜り江通候上、執筆永井簾之助に逢、申上方尋置候。追付御用番御出、外同席中退出相濟候由。夫より坊主を以、御近習頭江逢度申入、被出候旨に付松之間二之間に着座、則被出候井上井之助に付、一位様薨去に付此節奉伺御機嫌候旨申上候處、可申上申聞に而

退居、暫溜江入候處、重而坊主より申聞、則松之間二之間江座付候處、御近習頭被出、中上候處御機嫌御指障も無御座、此段可申聞旨御意之趣申聞、拜聽默禮退座。追付不指支旨に付鳥渡御用番座江出、夫より退出、兼而御約諾に付、御氣滯爲御見廻內膳樣江直に罷出候事。

一、前段之通に付、今日より普請は三日、鳴物等は當廿六日迄日數七日遠慮之旨、御用番より以紙面申來候。則振之通爲及返書候事。

内膳は奥村氏

十一月廿六日。前田齊泰及び慶寧、德川家齊夫人の靈前に香奠を供す。

〔公私心覺〕

十一月十八日

一　昨日牧野備前守殿江聞番御呼立、左之御書取相渡り候由、入御覽候。

松平加賀守

廣大院樣御法事於增上寺御執行に付、御香奠銀五枚、筑前守より同貳枚、使者熨斗目・半袴に而、來る廿六日朝六時表門通り本堂江可被獻之候。

一、御法事中筑前守本堂江參詣可有之候。

十一月

十一月廿七日。江戶城炎上の爲家中及び町・在に課したる借上銀の割合

を減ずることを告ぐ。

〔御家老方諸事留帳〕

十一月廿七日

一、今度御本丸炎上に八萬兩御上納金御願之所、一萬石五百兩之積りに而、五萬千二百五十兩餘三ヶ年に御差上之事に御書付相渡候に付、此表においても、御家中等より御借上銀百石に付二十目宛に先達而被仰付候處、今度百石十三匁御借上、七匁は被返下旨。一統右之割、町・在も右に准じ割合被返下候に付、今日先々觸出有之。

〔雑事日記〕

今般江戸御本丸炎上に付、金八萬兩御指上被成度段被仰立候處、御家中知行割を以御借上銀被仰付候趣、先達而一統申渡置候通に候。然處當月二日御指圖有之、一萬石に付五百兩之割合を以可被指上旨被仰渡、御上高五萬千二百五十兩金に相成候。依之御借上高之儀茂御減少、別紙割合書之通被仰付候。當年分過銀被返下候之條、請取方御算用場可承合候。

但、當年分最前之通上置、殘銀高來年・來々年割合被指上度人々茂有之候はゞ、其段御算用場江相達可申候。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

十一月廿七日　　　　　　　　　　　　　　長　將　之　佐

覺

一、自分知百石に付一ヶ年十三匁宛、當辰年より午年迄三ヶ年御借上。

但、當年分二十目宛之圖上納に付、過銀七匁宛可被返下候。

一、足輕等の分御切米十俵に付一ヶ年七分宛、當辰年より午年迄三ヶ年御借上之事。

但、當年分一匁宛之圖上納に付、過銀三分宛可被返下候。御給金銀、御切米に取圖り候分茂本文割合候事。

一、御手役者之分、御切米直十俵に付一匁三分宛之圖りを以御借上之事。

但、當年は二匁宛之圖上納に付、過銀七匁宛可被返下候。

右之外御借上方ヶ條書、先達而申渡置候通候事。

〔御郡典〕

能州御郡奉行江

先般江戸御本丸炎上に付、金八萬兩御指上被成度段被仰立候處、當時御逼迫之御勝手振に付、御郡方軒割を以御借上銀被仰付候趣、先達而申渡置候通に候。然る處今般右御上金高御減少之儀、公儀より被仰渡候間、御郡方等御借上銀之儀も、別紙割合書之通減少被仰付候。當年

分上納相濟候向も有之儀に付、過銀請取方或は其儘指上置、來年之處に而指次致度向も有之候はゞ、其段御算用場承合可申候。

右之趣可被得其意候事。

甲辰十一月

覺

一、町地壹軒當り壹ヶ年分八匁。

但、最前拾貳匁に而當年分上納相濟候向は、四匁可被返下候。

一、御郡方壹軒當り壹ヶ年分四匁。

但、最前六匁に而當年分上納相濟候向は、貳匁可被返下候。

右之通減少被仰付候。取立方高下見計方等之儀は、先達而申渡置候通可被相心得事。

甲辰十一月

十一月廿九日。百姓・頭振の町方に轉住せんことを請ふ者を嚴に調査すべきことを命ず。

〔郡方御觸〕

御郡方之もの、猥に町方等ゟ罷出候儀者、前々不相成儀に候所、近年等閑に相成、追々町方

ゟ罷出候者多、漸に本業を忘れ、村方人別切願出候もの相増、甚猥に相成沙汰之限りに候。依之當時兩役所ゟ人別切願出有之分、幷其許中手前迄相達有之分等、綿密遂詮議、實に難默止筋有之分、其主意相調、來正月中に可申聞候。勿論向後百姓・頭振男女とも人別切之儀、容易不承届儀者、別紙之通に候條、得其意、一統不相洩樣急速可申渡候事。

右之趣可得其意候　以上。

辰十一月二十九日

御郡奉行

改作奉行

加州三郡十村中

覺

一、割場附等小者に被召抱候もの、割場奉行等より其段申來候上、遂僉議人別切承屆申事。

一、武家奉公人年久敷罷在候もの、町方等ゟ養子・嫁入等致し度相願候者、詮議之上可承屆候事。

一、武家奉公人譜代に召仕度もの人別切之儀、其主人より申來候はゞ遂詮議承屆可申事。

一、町人与本末等之間柄に而、血脈相續之ため養子・養女之儀者、町奉行等より紙面を以申來候はゞ、遂詮議可申事。

一、癈疾之者人別切願出候はゞ、裁許十村得与遂見分、其委細申聞候はゞ可承屆候事。
一、右之外以來町方等に稼罷在、年經候而人別切之儀願出候とも、一圓承屆申間敷候事。
右之通向後之儀可得其意候事。

辰十二月

十一月。御郡方より金澤へ奉公に出づる者は稼送狀を持參すべきことを令す。

〔岡部舊記〕
御郡方より金澤へ奉公に罷出候もの共は、裁許之十村江相斷、御郡奉行・改作奉行承屆候上、十村より之送紙面を以指出候樣可仕。送無之ものは、町方借家又は奉公人宿請等相願候共、致承屆申間敷。若右躰之族有之においては、宿請等いたし候者急度可申付旨、寛政六年年寄衆より御觸渡も有之處、其後追々相ゆるみ、當時御郡方より罷出候男女奉公人共、十村より之送紙面取請罷出候者無之躰に相聞え、不埒成儀に付、今般公事場詮議之趣年寄衆江相達候條、向後御郡方より罷出候男女奉公人とも、其組裁許より稼送狀取請罷出候樣、改て御郡方江可被申渡候。尤稼送狀を持奉公人取持之もの方江相向不申ては、奉公口取持不致樣、嚴重取持人共江申渡置候條、此段も可被申渡候。

但、當時各支配之者共、武家幷金澤町方等ゟ致奉公罷在候者共可有之間、夫々取持人共にて相しらべ、稼迸狀取立方之儀は、郡々之番代ゟ取持人共より直に及引合候筈に候條、及引合候はゞ稼迸狀早速指出候樣、夫々可被申渡候。

一、各支配所之者共此表ゟ罷出、武家長屋をかり、妻子一集に相暮候もの無之哉、奉公人取持之者共にて相しらべ、左樣之者有之候はゞ、是又妻子共稼迸り狀指出候樣、右取持之者より郡々之番代ゟ引合にて可有之間、引合候はゞ稼迸り指出候樣、夫々可被申渡候。尤向後妻子召連金澤ゟ罷出、侍方長屋を借度与裁許十村に相願候はゞ、承屆、妻子一集之稼迸狀指出候樣可被申渡候。

一、前段之通稼迸り狀持參不致者は、奉公口取持不致事に相成候ては、向後新たに金澤ゟ奉公に罷出度与存候もの有之共、右稼迸り狀取請候儀を面倒与存じ、奉公に出兼候樣之儀出來いたし申間敷共難申。左樣之儀有之候ては、金澤奉公人之支とも相成儀に候條、奉公に罷出度与居村役人ゟ相斷候もの有之候はゞ、村役人共手前にて暫時も猶豫不致、裁許十村ゟ相達、早速稼迸り狀取請相渡候樣、分て村役人共に可被申渡置候。尤右稼迸取請方及遲々候樣之儀、追而相顯候においては、村役人共越度に申付候條、此段も可被申渡置候事。

辰十一月

遠所町・在等より罷出候男女奉公人共、向後裁許十村等より之稼迄り狀等取請罷出候樣、別紙之通公事場より一統相觸可申旨、御用番年寄衆被申渡候條、別紙之趣組・支配中可被申觸候、以上。

辰十一月

伊藤主馬
奥村主馬佐
篠原織部
前田兵部

大嶋五郎右衞門殿
高澤平十郎殿

十二月十一日。前田齊泰保養中なるを以て來年頭の賀を受けざるべきことを告ぐ。

〔官事拙筆〕

十二月十一日

御横目江

相公樣追々御快方に被成御座候得共、未御保養中に被爲在候。依之來年頭御家中等一統御禮

被爲受間敷旨被仰出候條、可被得其意候。且又一統年頭御祝儀獻上、御太刀等目錄靑銅目錄共、當年中取立、元日不殘指上候筈に候之條、正月朔日之日付に而、自分幷組・支配之人々、且江戶表等、幷遠所に罷在候人々目錄、當月廿一日より廿五日迄之内御奏者番ゟ相達可申候。御太刀馬代等者、右日限之內御進物所迄直に可指上候。

但、在江戶等之人々目錄等者代判人より取計可申候。

一、御家中子共御禮も不被爲請候間、尤獻上物に不及候。

一、元日者頭分以上登城刻限等、前々御留守年之節之通可相心得候。尤人日・十五日・二月朔日も平月之通出仕可有之候。

右之趣夫々可被申談候事。

十二月

十二月十九日。前田慶寧前髮を除く儀を行ふ。

〔加藤三郎左衞門御用部屋日記〕

十二月十九日

一、於御寢所御膳被召上、御櫛御なで付、畢而御のしめ・御上下被爲召、御奥ゟ御入、御出之上、五半時過於御居間、明き方へ御向御着座。御前髮御用堀田貢、扣役栗田幸作、右御規

式御用相勤。主膳初御附頭等一統御緣頰等へ伺公、四時過御首尾好被爲濟、何も退去。畢而於同所御のし・御雜煮・御吸物・御酒・御取肴。御肴御側小將相勤、出口差引御番頭。

一、右畢而遠江守殿御附頭を以御祝詞申上、御肴一折獻上、御附頭を以差上。御居間江被爲召、左之通御意、御請申上退去。

今日は都合能大慶。

〔御家老方等諸事留帳〕

十二月廿八日

一、當月十九日に、江戶表に而筑前守樣御前髮御執、萬事御首尾能被爲濟候旨、飛脚今日到來。各上下に改、御近習頭古屋喜一郎を以御祝詞申上、追付御喜悅之御意有之事。

〔筑前守樣御用留寫〕

十二月廿七日

筑前守樣益御機嫌能被成御座候。今十九日御前髮被爲執候に付、從相公樣右爲御祝儀、以御使者紗綾三卷・干鯛一箱・御樽代三百疋被進之。御頂戴相濟御殿江御出、御樂屋通御住居江被爲入。且又御客衆江も御逢被遊、夫より御老中阿部伊勢守殿・水野越前守殿・戶田山城守殿御勤、七時過御戾被遊候。其外先達而相伺被仰越候通、萬端御首尾能相濟申候。拙者儀御目見

被仰付、殊之外御似合被遊、益御健に奉見上候。

十二月十九日　　　　遠　江　守

〔官事拙筆〕

十二月廿八日

一、同刻過御用番より、當十九日筑前守樣御前髮被爲執、萬端御首尾克相濟候に付、表向御弘は無之候得共、恐悅申上候筈之旨被申談候。則晝八時過上下着用、松之間二之間に於而御家老中も一列に而、御近習頭〻筆頭播州殿初右恐悅申上候處、重而同人を以御喜悅被思召候段御意有之候事。

十二月廿二日。德川家慶、前田慶寧に檜重を贈る。

〔續德川實紀〕

十二月廿二日

寒氣を問はせられて、松平筑前守に檜重をつかはさる。

十二月廿三日。幕府の改元を告げたるの書金澤に達す。

〔成瀨正敦日記〕

十二月二十三日

一、當月十三日御用番阿部伊勢守殿ゟ聞番被召呼、年號弘化与改元之儀御書付但だん紙折紙、眞中に弘化与記有之、折懸包之上に年號与有之。御渡之旨に而、聞番助御使書等、遠江守等紙面共、御用番より被上之、入御覽。坂井

右は中飛脚歩に而申參り候筈之所、御用所御用に而早飛脚に相成候由。

十二月廿四日。金澤に於いて改元の行はれたることを告ぐ。

〔坂井氏藏文書〕

年號弘化与改元之旨、當月十三日被仰渡候由、從江戶表申來候條、可相觸旨被仰出候間、被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。且又組等之內裁許有之面々は、夫々相達候之樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

甲辰十二月二十四日　　本多播磨守
　　　　　　　　　　　前田美作守

中川平膳殿

〔司農典〕

年號弘化与改元に付、當場より相渡候諸切手之年號、今日より相改可申旨申談候條、各より仕出し之分も右樣可被相心得候、以上。

辰十二月二十六日
改作御奉行中

十二月廿四日。火災の際城中御番人の眞の鞭を携へ往來することを許す。

〔御城方御親翰御加筆物寫〕

甲辰十二月廿三日大野織人を以上之候處、翌廿四日同人を以被返下、伺之通被仰出。

御城中御番人、火事之節眞の鞭帶往來方、申渡置候儀も無之に付、臨時取捌方之儀、三之御丸御番人、石川・河北與力御番人与申合候處、與力御番に而は不指支心得之由に候得共、押引當所無之に付指支候間、指圖有之樣仕度。且右之通に候へ共、御番人之儀は往來人指引方も有之候間、鞭帶申度候。此儀別段詮議有之樣仕度旨等、去五月三之御丸御番人中川玄右衞門相達候に付、追而遂詮議可申渡候間、詮議中御番人眞の鞭指留候樣申渡置候。尙更相調理候處、享和三年五月火事之節、二之御丸詰番諸役人宅々より、家來眞の鞭持來候はゞ、乘馬与一集に指置可申候。若御近火等に而、於御城中可指引程之火事に候はゞ、其節者家來斷承屆、鞭相通候樣申渡有之候。文化之度にも諸役人鞭帶往來之儀、是迄之通与申渡御座候得共、御番人ゟ引當り候趣相見え不申候。依而當番組頭手前詮議仕候處、別紙口達書之通申聞候。右書面にも御座候通、御番人者平生御城內鑓も爲持申儀。御近火等にて往來烈敷時者、御門

下江罷出制申儀にも御座候間、鞭帶罷出候儀不指支樣可申渡哉与詮議仕候に付、奉伺候。猶更被仰出次第奉心得候、以上。

甲辰十二月廿三日　　本多播磨守

十二月廿九日。學校附小者市太郎孝行なるを以て賞賜せらる。

〔每日帳書拔〕

十二月廿九日

一、學校附小者市太郎母へ孝心之樣子被聞召、奇特之者に付爲御褒美鳥目七貫文被下候段申渡。

十二月。家中馬持以下の者の難澁を救濟する爲貸銀を許す。

〔雜事日記〕

覺

一、四百四十石以下四百目

一、三百石以下三百五十目

一、二百石以下二百五十目

一、百石以下二百目

馬持は知行四百五十石以上をいふ

一、五十石以下百五十目
來年より七月中五ヶ年賦、御切米者三月。
當時世上不融通、御家中勝手難澁之人々調達方出來不申行詰居候に付、各より願之趣茂有之候得共、臨時御物入茂打重、被成方無之御場合に候。乍併小身難澁之人々者別而指迫居候躰に付、乍御當節押而遂詮議、至極難澁之人々馬持以下之分迄、別紙割合之通當暮御貸渡可有之、返上方來年より五ヶ年賦可承屆候。御當節之儀可成丈願方仕間敷事に候間、難澁之向々精誠相撰、借用人名書知行高・銀高共可被書出候事。
但、頭分に而茂御貸渡可有之、在役之人々は役料打込馬持不滿分は、本文同樣願次第御貸渡可有之候事。
辰十二月

弘化二年

正月朔日。前田齊泰、保養中なるを以て年頭の賀を受けず。
〔成瀨正敎日記〕
正月元日

一、上々様益御機嫌能御超歳被遊候事。

一、御保養中に付御家中年頭御禮不被爲請候。元日頭分以上五ッ時過登城御祝詞可申上旨、舊臘御用番より觸渡有之に付、五つ時過致出席候事。

〔官事拙筆〕

正月元日

一、今朝五時前登城如例。但挨拶之節毎之座より少進出、御用番始江年始及挨拶候。且又三ケ日は披見之品者不出由に而、追付奥之間溜江罷越候事。

但、御用番座挨拶之節口上、先は進出御安泰と唱、御家老座之方江も同處に而申述、兩度に挨拶。平日は尤一禮。作州殿御教は如此。今日見分候處、播州殿には、上々様益御機嫌克恐悦、畢而御安泰与申上候。其外人々了簡により大同小異之事。

一、晝四時過頭分以上列居宜旨、御横目より達に而、則如例播州殿・作州殿・江州殿・將之佐殿・内膳殿・自分・雄二郎殿・大膳殿、夫々之通列座、年頭御祝詞人持出頭より申上、則申談退出候様播州殿被申談、何れも引取、都而替儀無之候事。

一、追付松之間二之間に於て、同席御家老中・若年寄一列に而、年頭之御祝詞御近習頭江逢播州殿より被申上、何れも默禮相濟、一先退去。暫立御喜悦之段同人を以御意有之、何れも

列座拜聽、退座之事。倚々眞龍院樣等には、如例三人連名以紙面申上。略之。

一、同刻過御熨斗頂戴被仰付候旨に付、御用番被申談、又々同樣列座、坊主給仕御三方出之、何れも御熨斗頂戴之、相濟御禮御近習頭を以申上、退座之事。

一、晝九時過鶴之御吸物御下頂戴被仰付候旨、是又被申談、又々列座、御吸物・御酒・御取肴頂戴之、相濟御膳奉行江御禮申上、退座之事。

但、右兩度共頂戴物之節若年寄は列座無之、常之席に而頂戴之由之事。

一、右夫々相濟候に付、加判之同席中茂下城。仍而一足先自分・大膳殿も致下城候事。

但、雄二郎殿は溜りも遠候故、兩人より茂先に下城、尤頂戴之品々は同樣。且又隙之節右溜り江咄に罷越候事。

正月四日。前田齊泰能を演ぜしむ。

〔官事拙筆〕

正月四日

一、追付四半時前御能見物處江相廻り候樣、御近習頭より申來候由に付、播州殿・美作守殿・自分・雄二郎殿・大膳殿坊主誘引、御間手前に而御近習頭歟先立、座處少手前御縁側に而、播州殿烏渡座付一禮、何れも同樣。夫より少上御縁側に何れも列座、又々御禮、手を下げ致見

物。其後ヵに御家老中・若年寄幷御近邊之人々等何れも列座、向之御間には御奏者番等何れも列座見物之事。
一、晝九半時過御中入、且御吸物等御下頂戴被仰付旨御月番被申談、追付松之間二之間に而同席・御家老中一列、御吸物・御酒・御取肴頂戴之。〈例坊主之給仕〉相濟、御膳奉行ゟ御禮、座上播磨守殿被申述。何れも默禮退座之事。
一、夕七時過重而御能相始り候旨に付、如例列座見物。夜六半時過相濟、何れも一列御近習頭を以松之間二之間に而御禮申上、退座之上、追付播州殿初何れも同道致下城候事。

御能御番組

高砂　籠　杜若　鶴龜　亂

大黑連歌　薩摩守　田植

正月十五日。前田齊泰、三月下旬を以て參覲せんとすることを告ぐ。

〔官事拙筆〕

正月十五日

一、今朝五時過登城、晝四時過出仕之面々列立之上、如例播磨守殿・美作守殿・將之佐殿・內膳殿・自分・雄二郎・大膳殿罷出、人持出頭より當日御祝詞申上候處、御用番被進出、御奏者

番も御間之內江相進候上、御用番、御前御氣滯御全快被爲在候に付、當春三月彌御出府御治定被仰出候。此段申聞候旨被申述候處、恐悅奉存旨申上。畢而復座之上、申談退出被致候樣從播州殿被申談、何れも退去相濟、追付御用番之外追々致下城候事。

正月廿五日。前田齊泰夫人、厄年に當るを以て卯辰觀音院に祈禱を命ず。

〔成瀨正敦日記〕

正月二十五日

一、左之通相伺、今日寺社奉行江末々記置候通御祈禱之儀申談。且竹田等へ伺濟之上爲承知申談。御附方之分も御祈禱料白銀五枚に而、白山に而御祈禱之儀、今日竹田等より寺社奉行へ被申談候由。

姬君樣今年御三十三歲御厄年之旨等、御住居御用人より及言上候。前廉相知不申候付、舊年御祈禱之儀も不奉伺候。天保二年御厄年之節は、前年相知候付、御厄除御祈禱卯辰觀音院においで被仰付、御札・守御肴添、女使を以被進、其節若殿樣よりは白山に而同事御祈禱被仰付、是又御札・守被上候。仍而今年も觀音院において御厄除御祈禱被仰付、御肴添可被進哉。筑前守樣よりも御先振通り御祈禱被仰付、御札・守・御肴被上候方にて可有御座哉。左候へば其段竹田市三郞等へ可申談、指懸り候儀に付引取此段も奉伺候。

御祈禱料

一、白銀　五枚　卯辰　觀音院

右姫君樣今年御厄年に付、御厄除御祈禱被仰付候條、致執行御札・守差上候樣可有御申渡候事。

正　月

二月四日。前田齊泰、病氣本復祝の儀を行ふ。

〔成瀨正敦日記〕

二月二日

一、今日左之趣共相伺、口達に而、御用番江は御座合に付、近江守殿今日も見助播州殿江罷出主税申述。

明後四日御本復御祝被爲在、同日御居間書院江御出被遊、各初被爲召候。此旨可相達旨被仰出候。

〔官事拙筆〕

二月四日

一、今日御本復御祝被爲在候に付、熨斗目・上下着用、朝五半時前追々登城。且出席前獻上之御肴一折以使者指出候事。

一、晝四時過同席初献上之御肴相揃候。御小書院御下段に飾付之上何れも見分、追付同席・御家老中・若年寄一列に而御近習頭に逢、目六上紙取排相渡候事。

一、同刻過同席・御家老中・若年寄・淇水軒老一列、松之間於二之間、御氣滯追日御全快、今日御本復御祝被爲在候恐悦、御近習頭を以申上候事。

一、晝九時過各御居間書院江被召候間、何れも蔦之御間に寄候樣御近習頭より申聞候由演述に付、同席・御家老中等御廊下江懸け脇指取寄候。追付播州殿初加判之人々被召、其次自分・雄二郎殿・大膳殿罷出候。則御居間書院御敷居外に而、一人充一寸默禮之上御敷居內御緣側方横御疊目邊江罷出、其次雄二郎殿も列座平伏罷在候處、御氣滯追日御全快、御本復御祝も被爲在、御大慶被思召候旨御意有之候に付、追日御全快御本復御祝被爲在、恐悦至極奉存候旨申上、畢而末座より退去、最前之處に而中座いたし退候。御居間書院に而はずり出候には不及旨也。相濟、御家老中等も又々三切に被爲召候由之事。

一、追付御居間江被爲召候旨に付、何れも次之御間江寄、無程加判之四人相濟、三人罷出候。御居間御緣側に而一人充默禮、御敷居內江ずり入、左之間御唐紙際に列座平伏仕候處、春寒も甚敷候處、各無事一段被思召候旨御意に付、益御機嫌克恐悅奉存候。御懇之蒙御意難有仕合奉存候旨及御受候處、御拜領之品御內々被下候旨御意に付、難有仕合奉存候旨申上、向側

御右之方に麻御上下一卷充御服臺に居有之處江指出、戴き持候而復座之處、御床御懸物拜見仕候樣御意に付、御上段際迄進出拜見、又復座之上拜見被仰付難有仕合奉存候旨申上。畢而末座より御服臺手に乍持退座、最前之處に而默禮、次之間御近習頭江當座御禮申述退去いたし候。相濟御家老中等も被爲召候由。夫より各御用番座江爲渡段々之御禮申述、於奥之間も互に恐悅等申述候。且又自分等三人は都而始而故、松之間於二之間御用部屋衆を以御禮申上候事。

一、晝九半時過頂戴物不指支旨に而、同席・御家老中松之間二之間に一列之上、赤飯・御吸物・御酒・御取肴被下之。如例給仕坊主也。右頂戴中御近習頭を以、緩々頂戴仕候樣御意有之。畢而御近習頭江御禮申上候。申上方等每々之通候事。

一、同刻過何れも御肴獻上に付被下候旨に而、御用部屋衆を以縮緬三卷拜領之。右は御居間書院横に而、加判之方々相濟、自分一人、右相濟雄二郎殿・大膳殿也。御品物木具居に而並べ有之、御禮申述戴き候上退去、最前之通各互に御禮申述候事。

拜領物

御居間に而被下之。　置物　一　卓（服紗包）　一　（此兩品一箱）

麻御上下地御紋付　一卷

御用部屋衆を以被下之。 縐紗 三卷 木具折居

一、右同席中拜領物、何れも執筆江相賴申遣、八半時過追々長持家來持參に付、執筆・坊主手傳入候上、直封相渡爲付候而爲持遣候事。

一、夫々相濟、外御用も無之旨に付、夕七時迄追々退出之事。

〔御家老方等諸事留帳〕

二月四日

一、書頃御居間書院江、年寄中二切、一切は助右衞門・雄次郞・大膳也。御家老・若年寄一切、淇水軒一切之處、耳遠に付相願はれ、年寄之次列に而一切に罷出候。

御氣滯御順快、今日御本復御祝被遊御大慶に被思召之旨御意有之、圖書御請被申上候事。

一、右相濟、追付御居間江年寄中、相濟御家老・若年寄一集被爲召、御前御上壇被遊御座候。各御前之御左御下段御唐紙之方江罷出、御下段御右に御廣蓋に拜領物飾有之、何も無事御本復御祝被遊に付被下旨御意有之、御請申上進み頂戴仕、內記江之被下方も演述仕樣にと御意。圖書御請申上、內記之分は差置、各身當り之分引ずり持、拜領之御禮申上退き候事。

右御水指・御香合兩樣共大樋長左衞門作。幷御紋附御小袖一つ御仕立無之、裏わた別に相成、一集に包有之。同役・若老大躰一樣之御品也。

一、淇水軒は別に被爲召、公儀より御拜領之內之御品に而御花生（したん竹の切口、蒔繪有之。）御花臺（金銀之象眼有之。）御紋附縮緬御道服也（矢張不仕立分。）

一、年寄中は公邊より御拜領之內之御品御床置物等一品に、御紋付御上下也。各普爲聽有之。

一、右相濟、書後松之間二之間に而例之通各並居、御赤飯・御吸物・御酒・御取肴卷鯣、坊主給事也。

右頂戴中、御近習井上井之助を以、何も寛と頂戴仕候樣御意有之。

一、若老・淇水軒は常之席に而頂戴、御禮之節松二之間に而一列、御近習頭を以御禮申上候事。

一、眞龍院樣ゟ山口藤左衛門を以、今日之恐悅松二之間に而各申上候事。

一、今日御祝に付、御赤飯は御小人以上、御吸物・御酒は御徒並以上八百何十人、御赤飯までの者入千餘之人數に相成候由。

　右は今日御用に付當番之者まで之由也。

二月十一日。前田齊泰能を演じ、物頭以上をして之を觀覽せしむ。

〔官事拙筆〕

二月十一日

一、今日御能拜見被仰付候に付、朝六時前のしめ・上下着用追々登城之事。
一、朝六時過御能相始り候間、拜見所に可相廻旨に付、播州殿始先日之御間に列座、拜見方等も同樣。併御能御前被遊候節、同席初何れも手を付居申候處、追付御近習頭手を上候樣演述に付、夫よりは御出入毎暫手を付候迄也。此外先相替儀無之、各後ゞには同席子弟・御用部屋衆等御次内之方々列座拜見、向側は御頭已上人持一統列座拜見、晝九半時過御中入之事。
一、晝八時過重而御能相始り候に付右同斷。暮六時過相濟申候事。

御番組

翁 御　弓八幡 御　八島 忠藏
野々宮 權進　望月 宮門　安宅 万十郎
須磨源氏 御　祝言岩船 兵次郎
夷子大黑　竹の子　釣狐　腰祈

二月十二日。前田齊泰の病平癒せるを以て諸郡に休日を與ふ。

〔郡方御觸〕

今般御全快、曁若殿樣御前髮被爲執候に付奉祝、御郡方一統日數二日休日可申渡候、以上。

巳二月十二日　高澤平十郎

二月十三日。前田齊泰能を演じ、番頭以下をして之を觀覽せしむ。

〔官事拙筆〕

二月十三日

一、今日茂御能拜見被仰付候に付、朝六時前熨斗目・上下着用追々登城之事。

一、朝六時過御能相始り候間、拜見所ゟ可相廻之旨に付、如例罷出列座拜見。拜見方は此間之通替儀無之。向側には物頭以下頭分等列座拜見。晝九半時過御中入之事。

一、晝八時過重而御能相始り候に付右同斷。夕七半時過相濟申候事。

御番組

翁　寢覺　權進　田村　嘉三郎

羽衣　御　卷絹　左平次　鷺　御

昭君　宮門　祝言高砂　猶吉

末廣　花子　成上り　煎物

〔御家老方等諸事留帳〕

二月十三日

一、御表之拜見人、十一日は人持より物頭まで、今日は番頭より御免之頭分隱居まで拜見被仰付候事。

二月十四日。前田齊泰の病癒えたるを以て町・在一統に赤飯を與ふることを令す。

〔諸事要用雜記〕

一、御滯中町・在之者共之內神妙之躰に相聞え居候處、今般御本復御祝も被爲在候に付、御取扱方之儀御用番へ御僉議被爲在候處、左之通詮議之趣被申上。

今般御本復御祝被爲在候付、町・在御取扱方之儀遂詮議可申上旨被仰出之趣に付、御算用場奉行・町奉行へ遂詮議可申哉之旨奉伺候通、右兩奉行へ僉議仕候處、詮議之趣別紙書立等之通申聞候。少々に而も赤飯等一統頂戴被仰付候はゞ、難有可奉存候間、別紙しらべ書之通被下可然哉。尤代銀を以御渡御座なく而は差支可申候。彌被下候はゞ、於御次御算用場奉行等へ被仰渡に而可有御座と僉議仕候。別紙三通入御覽申候。

一、御算用場奉行・町奉行相同じ申聞候者、今般御本復御祝に付、町・在御取扱方之儀、御僉儀仕候處、今般御取扱御座候時は、一統に不洩樣有御座度儀に候處、御意・御噂等と御座候而も町中下々迄は迚も行屆不申ものにて、御郡方は猶以之儀に御座候。天保六年爲冥加指上

物仕候節、御取扱も御座候得共、是は差上候村々迄に御座候。御入國之節被下方相しらべ候所、別紙書立之通にて、是者餘程之御かね嵩にも相成申候。多少には寄申間敷儀と別段相圖見、別紙に調御達申候。是等之趣を以尚更御詮議御座候様にと奉存旨申聞、書立三通出候事。

一、右町・在被下方僉議之通り可被仰付旨被仰出、矢張蒸立候而可被下思召之旨被仰出に付、其段御用番被仰出、左之通明十四日兩奉行へ被仰出候儀伺被仰出。

毎軒

赤飯　鰑　惣御郡方・遠所惣町共

御重症御滯被遊候處御順快、今般御本復御祝被遊候付、以思召赤飯等一統へ被下之。

右之趣夫々可申渡旨被仰出候。

二　月

〔郡方御觸〕

覺

一軒に付

一、赤　飯　凡圖餅米三合・小豆九勺

同

一、鍚　　　　三枚宛代拾八文図

右今般町・在之者江赤飯等被下候段、昨日申談候通に付、配當方右之通に候條、早速夫々爲致頂戴可被申候。代銀之儀者追而支配所軒數割を以、米高等被書出次第可相渡候、以上。

二月十五日　　　　御算用場

高澤平十郎殿

大嶋五郎右衛門殿

追而赤飯等代銀を以、當場より相渡候得共、於其向に致世話、品物に而頂戴之樣可被致候。且鍚之分者整兼候はゞ、いか樣にも可有取計候、以上。

二月十六日。前田齊泰の病癒えたるを祝し、是日以後三日間に亙り盆正月を行ふ。

〔御家老方等諸事留帳〕

二月十七日

一、御本復御祝筑前守樣御前髪御祝に付、町方相願、昨今明日と三日盆正月致候事。

〔上貲屋日家榮帳〕

二月十六日より十八日盆正月休日。當御殿樣御本復に付御祝、御領國中江一軒に餅米三合・

小豆九勺・干烏賊一枚・錢十文被下、偏に難有頂戴仕候以上。尤赤飯にして。

二月十八日。前田齊泰能を演じ諸士をして之を觀覽せしむ。

〔御家老方等諸事留帳〕

二月十七日

一、明日御能有之、御小將一統、御馬廻四組、定番御馬廻一組、組外二組、御射手・御異風一統、御儒者・新番組御歩一統、火矢方・御厩方・三十人頭・御細工所・御奏者所與力・御進物所與力拜見被仰付候由。筑前守樣附御歩等も拜見之由。拜見人服紗小袖・上下之由也。

〔御家老方等諸事留帳〕

二月十七日

一、明日之御能拜見所指支、席向は拜見不被仰付御樣子也。御番組略左之通。

翁　宮門　實盛　御　吉野靜　猶吉

春榮　佐平次　鞍馬天狗　權之進　船辨慶　御

祝言金札

二月十八日

一、今日御能有之。

〔諸事要用雜記〕

二月十八日

一、今日拙者組御能拜見に付、七半時過罷出、御表溜に罷在、拜見人揃之上御次へ參る。

一、今日御能、御側廻り等詰合拜見有之。拜見人多に付年寄中等無之。

二月二十日。能美郡の中に僧侶を招き多人數集合するものあるを戒む。

〔郡方御觸〕

能美郡村々之內、近來御講抔与申立、寺庵方僧侶を招、參詣人多く集め、剩御明与申躰に而、鳥目を集め候樣之儀有之体相聞。右樣僧侶を招人多に集り候儀、別而夜談議抔いたし候儀、堅不相成儀者前々申渡置候處、近年甚增長之体、先以御縮方にも指障、沙汰之限に候。以來右樣之儀一圓無之樣、村々役人を初、末々迄不相洩嚴重可申渡候。若此末僧侶抔相招人多に集り候歟、又者村方之者共迄に而も、御講抔与申立、晝夜に不限人多に寄集り候儀於有之者、急度遂穿鑿、嚴重之咎可申付、尤村役人共も越度に可申付候條、此段一統能々申渡、組切村々役人共請書取立可指出候、以上。

巳二月廿日

吉田藤馬

津田少左衛門

二月廿三日。前田齊泰瀧之間の講書等を聽く。

〔諸事要用雜記〕

二月廿三日

一、今朝瀧之間講書に付御出被仰出、五半時過御出御聽聞、無程相濟御入被遊候事。

一、講師木下仁平、論語微子之篇。

長沮桀溺耦而耕之章

一、今日御前講有之、易經廣瀨順九郞相勤。年頭初而に付、御前幷講師熨斗目・上下之事。

〔御家老方等諸事留帳〕

二月廿三日

一、今日講釋日に付御表江御出御聽聞被遊候由。右御出之儀毎前には被仰出も無之候へ共、久々に而御病後御出之事故、御用番方江御近習頭より相達候由に候得共、御用番方之執筆より御家老方之執筆まで爲知候由に候得共、若年寄方・御家老方江も昨日不申越、前日より知居たらば聽聞にも出居候而宜所、其儀も無之候。是まで御歸城後初而御出之時に而も、當朝になり差懸り御出、前日より御出之儀相知居候儀は無之、此度は別段之儀に候事。

但、年寄中之内は前日より承知に付、兩三人早めに出聽聞有之樣子之事。

二月廿四日。前田齊泰能を演じ諸士をして之を觀覽せしむ。

〔官事拙筆〕

二月廿四日

一、今朝六半時前服紗小袖・上下に而致登城、御用番出席之上御禮之趣申述候事。

一、朝五半時頃拜見所江可廻旨に付、如例罷出列座拜見。向側暫後〻に御馬廻幷子弟等拜見、其外前々之通替儀無之、晝九半時過御中入之事。

一、晝八半時前重而御能相始り候に付右同斷。夜六半時過相濟申候事。

御番組

氷　室　御　　俊成忠則　寶次郎　　軒端梅　忠　藏

唐　船　御　　雲雀山　權之進　　融　宮　門

祝言養老　伊三郎

墨　塗　惣　八　　素袍落　　木六駄

〔御家老方等諸事留帳〕

二月廿四日

一、今日御能六半時揃に付、六半時前出宅、四時頃御初り也。年寄中は播州・作州・將之佐・助右衞門・雄次郎・大膳也。皆祝言まで拜見也。御家老之分大學・拙者、祝言まで全拜見也。大學は定刻頃より出席拜見也。

一、御能相濟、御禮二之間各一列、荒木津太夫を以申上候事。

一、今日之拜見人は、御表拜見處、町同心・御鷹方御歩小頭等・定番御歩小頭等・御算用者小頭等・與力・宍生方・御普請會所下裁許・御小人頭・割場奉行支配御歩並。御次拜見所、御馬廻組外・定番御馬廻頭分嫡子・高畠右門二男・堀保左衞門嫡子・學校御用之人々也。四男

二月廿四日。前田齊泰の子利鬯宮參を行ふ。

〔見聞袋群斗記〕

二月廿四日

前田桃之助殿御宮參御着袴御祝有之なり。

二月廿六日。前田齊泰能を演じ諸士をして之を觀覽せしむ。

〔官事拙筆〕

二月廿六日

一、今日茂御能望次第拜見被仰付候に付、朝六半時過より服紗小袖・上下に而追々登城。

桃之助は當時藩臣前田貞事の義子なり

一、朝五時過御能相始り居候由に付、登城之上追付拜見所へ罷出、如例列座拜見。向側賢後〃に御馬廻幷子弟等拜見、其外前々之通替儀無之。晝九半時過御中入之事。

一、晝八時過重而御能相始り候に付右同斷。夜六時過相濟申候事。

御番組

老　松　忠藏　胡　蝶　方十郞

善知鳥　御　花　筐　宮門　弦　上　權進

呉　服　御

音曲聟　金岡　因幡堂　老武者

〔御家老方等諸事留帳〕

二月廿六日

一、今日御能揃刻限六半時揃也。脇能濟候頃出席、二番目飯御前被遊候に付、夫より拜見可致存候に付、定刻より少早めに出候事。

一、今日圖書は初よりをはりまで拜見、拙者飯より終まで拜見、其外之同役飯より善知鳥までで拜見退出之事。年寄中江州・內膳之外皆拜見之事。

御能六時頃相濟、御禮渡邊小隼人を以申上候事。

一、今日拜見人左之通。

御次、御馬廻四組・定番御馬廻三組・組外一組・頭分嫡子三十人計・御小將二人・御次稽古御用無息・御表小將之二三男・御近習勤仕之二三男・御異風一人・御醫者一人・御大工頭等・學校御用之人々。御表、御鷹匠小頭等・御步小頭等・定番御步小頭等・御算用者小頭等・御細工者小頭等・與力。

二月廿七日。前田齊泰參覲の期に就いて幕府に屆出づ。

〔成瀨正敦日記〕

三月十三日

一、相公樣御發駕御頃合御屆之儀、先達聞番より及言上置候通、前月廿七日之御目附に而、當月六日御用番靑山下野守殿ゟ聞番御屆仕候旨等、聞番より言上。

拙者儀、去る寅年夏脚氣腫相滯候以後、不相勝候に付出府延引之儀追々奉願、種々療養仕少々快方罷在候。今以差引は有之候得共、逐日和暖にも相成候間、來月下旬には押而國許發途出府可仕与存候。此段御屆申達候、以上。

二月廿七日　　　　御　　名

二月廿八日。諸士に令し百姓と相對を以て借地したるものを返却せしむ。

〔坂井文書〕

御家中之人々、御郡地之内を百姓相對を以請地いたし候儀、向後無用之段、天保五年一統申渡置候處、其以後も有之躰に相聞、不心得之儀に候。依之天保五年以後之分は此度百姓方へ取戻、右五年以前之内にも地元引渡候得者何時に而も可引取分、又者一作々々卸候分も、都而此度百姓方爲引取候樣申渡候。其内にも謂有之無據分は、其趣斷次第可及詮議候。尤是以後無謂相對請地いたし候者有之候段相聞候においては、御穿鑿可有之候條、以來心得違無之樣急度可相心得候。

右之通被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

二月廿八日　　本多播磨守

多賀監物殿

但、志村平之丞より富田儀右衞門迄三役。

二月廿八日。前田齊泰、新年以後初めて明倫堂に臨む。

〔官事拙筆〕

二月廿八日

一、例刻出席、今日は明倫堂江御出に付、晝九時過學校御奉行主附内膳殿被參候上、服紗小

袖上下着用、追付御用番之外、美作守殿・將之佐殿・自分・大膳殿引繼き學校ゑ罷出候。御家老中も、主附之外本多大學殿・山崎庄兵衞殿・中川八郎右衞門殿被出候。餘程有之、聽聞人等列座宜旨に而、內膳殿より御案內以紙面被申上候。則八時過御出之由に而、御上り口之御間正面に御兩方着座作州殿等、御家老中は御大廣間敷居際御通筋に着座。其外御用部屋衆等夫々御出迎申上。無程御出御、上段之御間ゑ被爲入候。御通之節は作州殿に准じ、鳥渡御禮仕候。夫より御上段次御間に主附御兩方、作州殿等も少し引下り着座之上、學校御横目より講書相始候旨內膳殿ゑ相達、其段御用部屋を以被申上候事。

主附は學校總奉行本多播磨守・奧村內膳

一、夫より相公樣御上段御下被爲在、御廣間御氈之上ゑ御着座、主附初何れも御敷居外ゑ進出、筋違に伺公、手を附居申候。則督學渡邊兵太夫大學三綱領講之。畢而御上段ゑ御復座之上、主附內膳殿進出、兵太夫を誘引、正面に而平伏之處、講書大儀と御意有之。御請主附ゑ申述、御取合內膳殿被申上、御襖立て申候。夫より何れも如元御敷居內に暫猶豫之上、追付初め之處ゑ何れも着座、御戾被爲在候。御立之時分は、前を御通之節も御禮に不及旨に而、手を附候迄也。御家老中之內一人御先立也。

〔官事拙筆〕

二月廿九日。前田齊泰能を演じ諸士以下をして之を觀覽せしむ。

二月廿九日

一、今日も御能望次第拝見被仰付候に付、朝六半時過より服紗小袖・上下に而登城。

一、朝五時過御能相始り候に付、拝見所江相廻り、如例列座拝見。向側御算用者・與力等拝見、其外前々之通替儀無之、晝九半時過御中入之事。

一、晝八時過重而御能相始り候に付、右同断。夜六時過相濟申候事。

一、右今日之御能同席與力抔も拝見被仰付、依而自分之與力も同様、且仕與力坪井八左衛門・牧野織江も寺社奉行より談に而今日拝見。右に付御禮申上候に不及哉、執筆江も相尋。御用番も承知之上、先年御規式御能之節は同席各申上候由先例有之候へ共、今度は御様子も違候故不及其儀旨故、御禮申上候事。

御番組

東方朔　忠則　松風御　龍田

常陸帯御　羅生門　亂御

松脂　狸腹鼓　口眞似　草びら　寶の槌

〔御家老方等諸事留帳〕

二月廿九日

一、今日拜見人頭分嫡子・寺社奉行支配・御用達之隱居・診御用等相勤不申御醫者・中川平膳組御馬廻二人・小塚與平組外七人・御異風一人・學校御用之人々・御馬方御雇・年寄中席執筆與之間せがれ・御鷹匠小頭等・御普請方岡田隼人等・御大工等御雇共・御步小頭等御算用者小頭等・町下代・御細工者一人・御細工人也。

二月廿九日。前田齊泰、德川家慶が江戶城本丸に移徙せしを以て物を献る。

〔續德川實紀〕

二月廿九日

御移徙濟ませられし御祝として、松平加賀守・松平筑前守より樽代・箱肴おの〳〵使してたてまつる。

〔御家老方等諸事留帳〕

三月六日

一、公邊御本丸御成就に付、當月廿八日御移徙に付御奉書、昨夜六時過致到來候由に而、月番美作守より廻文出、江州より來、晝也。追付內膳〻遣之。

三月十四日。前田齊泰金谷御殿に臨み囃子を演ず。

〔藤懸賴善手記〕

弘化二年三月十四日

一、今日金谷御殿被爲入候事。右於御殿御囃子被仰付、何茂見物被仰付、相濟候上指懸り御囃子御舞可被遊旨被仰出。右に付拜見所入口喰違御屛風の外ゟ、御供頭幷御供の仲間兩人奉出向、其所に而御脇刺御渡被爲遊候に付奉請取、御刀は御用達より同所に而請取、兩人共御跡より罷越、笛座の後ろに扣罷在申候。相濟御座ゟ御直り被遊候上、其處ゟ笛と地謠との間より指上候。御刀は御入被遊候御跡より罷越、最前請取候邊にて又御用達に相渡候。且右奉出向候處より御舞臺迄御往來共、御供頭御先立之事。

三月十五日。前田齊泰の病氣本復せしを以て、この日以降鎭守社に報賽の祭禮を行ふ。

〔成瀨正敦日記〕

三月十七日

一、先達而御煩之節、兩御鎭守に而每度御祈念有之、今度御本復御祝被爲濟候付、御報賽被仰付可然旨等、野尻彥六郎より相伺、當十五日・十六日・十七日學校御鎭守、十八日・十九日竹澤御鎭守に而御報賽御祈念被仰付、御代拜被仰付候。今朝學校御鎭守御代拜小左衛門相勤之。服長袴・熨斗目也。

三月十六日。前田齊泰、その子利義・利行と共に石川郡粟ヶ崎に放鷹す。

〔宮事拙筆〕

三月十六日

一、今日は朝五時御供揃、粟ヶ崎筋江相公様御鷹野に御行歩被爲在候に付、御用番之外何れも不及出席旨一昨日被申談候に付、今日不致出席候事。

〔諸事要用雜記〕

三月十六日

一、四時過御出粟ヶ崎御行歩御出被遊、御旅屋へ宮腰往還大野道より被爲入、御旅屋に御休息。夫より御歩行に而宮腰江被爲入、新船御覽、中山に御立寄御休息。重而御旅屋へ被爲入、夫より御戻り夜五つ鎌之事。

一、御子様御指續被爲入候事。

〔上貸屋日家桊帳〕

三月十六日御殿様・基五郎様・豐之丞様御三人、大野道よりおたや江御越、晝飯御上り。おたやより場所江御出、新町之浦に御手船造船在之。此船御見物被遊候。其より新町江御上り、中山に而御休。又々出町江御通り、又おたや江御越、大野道より御城歸被遊候。目出度。尤

道わり不都合なれども、粟ケ崎橋格別そんじ申に付右之通に御座候、以上。

〔見聞袋群斗記〕

三月十六日粟ケ崎及び宮腰ゑ御行歩御出あり。往還御歩行之處、百姓男女路を挾み、大聲をあげて涕き出相慶し、料らざりき今日復た君之御出遊を拜と難有り、老若とも土路に伏て涕泣する。御供人是を見て袖を沾さん者なかりき由と聞く。

三月十九日。大聖寺侯前田利平參覲の途金澤城に登る。

〔成瀨正敦日記〕

三月十六日

一、備後守樣當十八日大聖寺表御發途、松任御泊、十九日金澤御着、同日御登城被成候筈に付、右主付御近習頭に付、名書被差出候樣申談、左之兩人順先之旨書出に付相伺、右御用主付被仰付候旨、如例書取に而今日申談候事。坂井奉。

佐藤隼人

渡邊小隼人

〔成瀨正敦日記〕

三月十九日

一、備後守樣今日御着之上、御近習頭御使渡邊小隼人御用所出仕也。を以、追付御登城被成候樣如例被仰進、九つ半時過御登城、以御家老御口上被仰上候付、御通被成候樣被仰進、追付御居間書院へ御通に付、御出主稅御先立被遊御對顏之上、御料理之御挨拶被遊、御出口に暫御見合、追々御料理出之。御向詰置附候上に而御出、御引菜被遊、一と先御入。重而申上り御出、御先立織人御盃事被遊、又御入、御料理全相濟候上申上り、重而御出、御先立小左衞門例之所迄御送被遊、相濟被爲入候事。

向詰とは燒物をいふ

一、御立歸御登城如例、御口上御家老被仰上、御對顏は無之事。

三月廿二日。前田齊泰、その子利義・利行と共に能を演ず。

〔官事拙筆〕

三月廿一日

一、例刻出席、晝九時過御用番より明日御能御座候に付、拜見被仰付候旨、以御近習頭被仰出候旨被申談候に付、御禮申述候。但刻限は六半時揃、常服に而可致出席也。

三月廿二日

一、朝五時前拜見處に可相廻旨に付、前々之通罷出列座拜見。向側人持・頭分・當番之人々等何れも列居拜見、晝九時過一先御中入之事。

一、重而八半時頃御始、右同斷。夜六半時過相濟候事。

御番組

邯鄲　御基五郎殿　盛久　權兵衛　住吉詣　豐之丞殿 基五郎殿

道成寺　權兵衛　熊坂　權之進　安宅　宮門

國栖　御附祝言

庖丁聟　雪打　八句連歌　鐘の音　千切木

三月廿三日。前田齊泰能を演ず。

〔御家老方等諸事留帳〕

三月廿三日

一、今日御能被遊候に付望次第拜見被仰付旨、月番まで被仰出、主附に演述有之、若年寄にも演述之儀被申聞、御禮主付引請月番まで申述候事。

一、今日御能詰合拜見之樣子也。

一、御能御番附左之通り也。

一、今日拜見之人播州・美作守・將之佐學校出座迄拜見・助右衛門・大膳・圖書・方之助・兵部・拙者・若年寄・淇水軒。八時前御初、八半時過相濟。御能拜見之御禮荒木津太夫を以申上候事。

通小町　佐七郎　　石橋　權兵衛　　小鍛冶　御
明石　佐七郎　　八景　宮門　　實方　亮三郎
淡路　熊次郎　　花筐　權之進　　山家秋　權兵衛
八幡　　福の神

御住居は前田齊泰夫人

三月廿六日。江戸邸に於ける御次向等の省略を命ず。

〔諸事要用雜記〕

三月廿六日

一、左之通御用番美作守殿當席ゟ被仰渡。

御勝手向御難澁に付、近年御次向等御儉約方主付各□被仰付置、追々御僉議も有之候所、公邊萬事御改革、御住居向も夫々御事輕之御指圖も有之。右等之御模樣に付而者、御內輪向等御嚴密に無之而者如何に付、猶又此上格別之御僉議も可被仰付候條、精誠御省略相整候樣可遂僉議旨等被仰出之趣、去々年申渡置候通に候。然處當時御住居向格別嚴敷御省略被仰出、姬君樣御暮方等御不自由にも可被爲在程之御樣子に候處、却而御內輪向御省略不行屆樣之儀有之候而は、先以御住居向へ對甚如何敷、且御附衆氣向にも指障可申儀に候。公邊御改革後初而御在府之御儀故、分而此段申談候條、江戸表御次向等幷御廣式向御省略之儀、各無油斷

精誠可有僉議候。

右之趣可申渡旨被仰出候事。

三月廿七日。前田齊泰金澤を發して參覲の途に上る。

〔官事拙筆〕

三月廿七日

一、今日御發駕に付、朝六半時過服紗小袖・上下に而追々登城之事。

一、晝四半時過御供廻り被仰出、追付同席初御居間書院江被召候間可寄旨に付、如例蔦之間御廊下に列座。則加判之人々一切、將之佐殿外四人罷出候處、今日は天氣相も宜敷、追付留守中政事向無油斷与御意。且又播磨守殿・美作守殿江は、御城方之儀も御意。畢而何れも無事与御意有之候に付、座上播州殿應被及御受候上退去。其次雄二郎殿・大膳殿一切、御家老中等一切、夫々被爲召、御意も有之。相濟、暫席江退座、追付御供宜旨申上り候由に付、何れも御式臺列座罷出居候。出處は先日備後守樣御出之節同樣。但雄二郎殿・大膳殿は橋爪江被罷出候事。

一、晝九時前益御機嫌能御發駕被遊候。右に付御式臺鏡板江年寄中・御家老中等罷出、其五郎殿・豊之丞殿にも鏡板江御見送、同席之前側に御着座。其外階上等夫々列座罷出候事。

三月。異國船渡來の際、江戸詰人が臨時に海岸警固等を命ぜらるゝことあるべきを告げしむ。

〔觸　留〕

御横目江

異國船向後若江戸近海江渡來も候はゞ、臨時に警固並防禦等被仰付候儀可有之旨等、從公儀以御書付被仰渡有之候に付、是以後江戸表江罷越候人々爲心得申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

巳　三　月

三月。能登の百姓に一向宗寺庵昇進等の爲に醵金するを禁ず。

〔郡方御觸〕

一向宗寺庵近來爭而昇進いたし候處、旦那共之内令心得違、内々割符金等指出、剩取持候族も有之体、不埒之至に候。何れ御郡之患一統承知之通に候條、右樣取持候儀者勿論、割符金等一圓不指出之樣、改而嚴重可申渡候。其上にも右金子指出候族等有之候はゞ、近年與郡向先役共より申渡置候通、咎之上嚴重過怠方も可申付候條得其意、此段も爲心得、口郡向者勿

論、奥郡向も今一往可申渡置候、以上。

巳 三 月

大嶋五郎右衛門

高 澤 平 十 郎

能州四郡十村中

追而無詣堂等再建いたし候向も有之哉に相聞候條、是等之向も本文に準じ、割符金等指留方嚴重可申渡候。猶本文之趣內聞方も申渡置候間、於其元中も精誠聞糺可申聞候。將又此節名目を替、內々割符金等指出候向茂在之哉に相聞候條、其向譯而內聞いたし、其樣子無泥可申聞候、以上。

四月二日。前田齊泰の生母榮操院等、石川郡大野・宮ノ腰に行歩を行ふ。

〔上賃屋日家榮帳〕

四月二日榮操院樣・基五郎樣・豐之丞樣御三人、大野道よりおたやゟ御出。其より大野村御通り、出町御通り中山ゟ御休。其より新町御通り、御手船御見物被遊、其より塩橋之下かりや相立、此かりやに而御齋網御見物被遊、又候大野道より御歸城被遊候。目出度。

四月四日。この日以後石川郡大乘寺に於いて開山徹通義介の遠忌法會を營む。

〔上賃屋日家榮帳〕
金澤大乘寺において、先祖百五十回忌、尤開山。四月四日より百日之御法事、僧千人許。誠に御國一統參詣仕、尤奉加之儀は御國一統御座候。

百五十回忌は五百五十回忌なるべし

四月十一日。前田齊泰江戸に着す。

〔官事拙筆〕
四月十七日
一、夜六時過當十一日江戸表發足之早飛脚到來、同席充處遠江守殿等三人連名旅狀箱。則破封遂披見候處、相公樣益御機嫌能今十一日午之中刻御着府被遊候。先以目出度御儀、恐悅之至奉存候。御供人末々迄無滯罷越申候。此段眞龍院樣初御申上可被成候。仍之前々之通中飛脚を以可申進處、御次より御用有之早飛脚に申渡候与之本多大學殿等三人連名紙面也。

四月十三日。金谷御殿を修營するを以て立柱等の儀式を行ふ。

〔筑前守樣御用留寫〕
四月十三日
一、今日金谷御座處御普請に付、御柱建等之三御規式御祝有之候由之事。

〔諸事要用雜記〕

四月十三日

一、今日御普請方に付六半時過出席、無程大村氏・竹田氏等同道、御普請所へ參り、三御規式有之、八時前致退出候事。

四月十九日。幕府、徳川家定の女精姫を前田慶寧に嫁せしめんと求むるを以て之が拒絶を議す。

〔諸事要用雜記〕

四月廿七日

昔四半時過當月十九日出早飛脚將之佐殿・遠州殿兩名より之極内狀一通添物二品共到來、遂披見候處、筑前守樣御縁組之一件に而、被仰出之趣も有之、指急示談之上御請可申上。御前より御乞に而出雲守樣より被上候御書取寫、阿部伊勢守殿内談之口演。

筑前守樣御年頃にも被爲成候。御勤振御樣子合御宜敷段は上に茂御存じ被爲入候事故、當時大奥に被爲入候あき姫樣御縁組被遊度思召候。上より仰出され候儀は押付而被仰出候振には候得共、若々跡に而何とか御迷惑之儀も相聞候而は、折角之思召も無に成候事故、伊勢守殿極内々右之御樣子を出雲守樣迄申聞られ候旨。尤御住居も御座候處、打重り候事故内實は迷惑之筋も有之間敷哉。其他何等之差支も有之間敷哉。極内談之儀故委曲無腹藏申上候樣、右

出雲守は富山侯前田利保

御住居も云々は既に前田齊泰夫人のあるをいふ

之趣加賀守樣𛀁申上、其上とくと打合せ、近日委細申聞候樣極御內意之旨。

御請

委曲加賀守𛀁申聞御受可申上旨、且事を分け被仰聞候儀、近日參出無腹藏御內談仕べき旨申答候事。

出雲守樣御別紙之寫

此書面聞取之儘を相認め差上候。文面不都合之所は御覽分け、御趣意之所而已御校考、御承知被爲在候樣偏奉希候。

右に付段々御詮議之上、十九日御住居𛀁極御內々相廻候御書取。

筑前守樣御年頃にも被爲成に付、精姬君樣御緣組被遊度御樣子、阿部伊勢守殿より出雲守樣迄極內話之趣御承知被成、厚思召之程、先以宰相樣においては誠に難有御事に被思召候。然處元來御勝手向御逼迫至極に而、御難澁被成候所、御住居之儀は如何樣御事輕に被仰出候而も、御家に而は御振合も御座候事故、格別御事輕にも被成兼候。此上御住居打重り候而は、御內實御迷惑之筋に而、御公務を初御國民御撫育等も御差支に相成候而は不容易事故、甚御心配思召候。且は筑前守樣御年頃にも被爲成候付、兼而有馬筑後守樣御妹御似合も宜敷、其上御緣家之事故萬端御事輕、御內輪向御懇談も相整、先達御緣組御內約被仰合置候得共、當

月迄はあなた無據御差支之趣御座候而、表向之御次第は相延居候得共、不遠內御手續夫々御取極之御約諾に御座候。前段之次第に付、何分御沙汰止に相成候樣被及御答度被思召候。此等之趣姬君樣より宜御汲取、何とか被仰上方も被爲在間敷哉。此度岸倉殿等迄取繕宜申述候樣御內意之事。

右姬君樣は當年御二十か、今少も被爲在候由。御肌合も惡敷、御家格にも應申間敷躰、御好しからず御緣組と成瀨等迄御意に而、夫々御住居ゟも御相談被爲在候御事之由。

四月廿七日。幕府、前田慶寧に德川家定の女を嫁せしめんとの內意を解消す。

〔諸事要用雜記〕

一、御緣組一件に付、前月廿七日出雲守樣阿部伊勢守殿へ御呼立に付、御出被成候處、御演述之趣有之、御對顏被成度段被仰上、則御逢被仰上。畢而於御溜主稅等被爲召、今朝伊勢守殿ゟ演述之趣、只今御直に被仰上候得共、猶更被仰聞、今度御內沙汰之御事御沙汰止之儀御內願之趣、出雲守樣迄御答之御書取、委曲具に御承知被成、被仰立之御趣意無御據趣に付、伊勢守殿御介取宜達上聞候處、御許容被爲在候之間、此上被爲及御沙汰間敷候。此段被仰上御安心被成候樣御通可被成。且又大奧へ被仰込候儀御心違之趣に付、別段被仰上候趣も御序を

以御内々被達上聞候得ば、此上思召も不被爲在御樣子に御座候。御名何靡御配慮に可有御座、右等之御樣子被爲在候へば聊御懸念不被成、御安心被成候樣宜御通可被成旨被仰聞、至極御都合御宜、出雲守樣においても御安堵被成候。且御名江被仰聞候上、今夕に而も御出其段可被仰上哉御伺之處、左樣可有御座儀に候得共、先日より度々御出御苦勞之儀、不及其儀、御演述之上品を顯し無之、御承知之事而已御家來迄御家來を以御屆可被成由に付、御留守居御呼立被仰付、追付御差出可被成候。將又伊勢守殿彼是御取計も有之、御都合能御內願之通被爲整候御事、重而御出被成候得ば、御伺其節積御挨拶も可被仰述處、右之通重而御出之儀御差留に付、別段被仰込御出被成候儀も難被成に付、兼而被仰含置候趣を以、段々之御挨拶御取繕宜被仰述候而、夫々金相濟、最早少も御懸念之儀不被爲在旨被仰聞候。右御樣子眞龍院樣御初へは御書を以被仰上候に付、遮而御申上には及不申、若御尋も御座候はゞ委敷御申上被成候樣可被進旨御意に御座候。先以御內沙汰ながら御沙汰止み、御內願不容易之儀に御座候處、速に御許容被爲在、恐悅至極御同意奉安堵難有儀奉存候。右得御意度如此御座候、以上。

五月二日　　成瀨主稅

加藤三郎左衞門

御名は加賀守

大野織人様

大村肴次郎様

一、右之通公邊御内沙汰も相止候に付、兼而被仰合候有馬様御次第に移、あなたより被仰進候通り、來々未年御事輕表向之御引移に而御宜御座候間、彌御内約被遊度旨等、聞番江星野久庵申含候儀被仰出、委曲有馬様御承知に而、御同所様は前月廿六日御歸國被成候に付、御留守に而も御留守居御使者を以御内約之御都合は不差支夫々御約諾、近々其御都合に相成候筈。御名もあなた御三名御調相廻り、其内御使に而お親様御改之御約定に相成、追々御都合相成恐悦之旨。且取頻御僉議之趣も有之、五月二日に年寄中江左之通被仰出、夫前姫君様思召も御奥通御伺御座候處、何之思召も不被爲在、御一段之儀に被思召候旨被仰進に付、筑前守様江は當席御使者を以被仰進、方々様江も被仰進候。且表向御内約之聞番御使者も被遣候筈に付、其御手續久庵へ爲申談候儀等、夫々御都合被成御同事恐悦之至奉存候。右に付眞龍院様御初江之被仰進は、重便四日出に申上候筈に御座候旨申來る。

四月。石川郡宮腰にて藩有の巨船竣成す。

〔年代記〕

一、四月宮の腰に而千七百石御手船出來。

五月朔日。前田齊泰、登營して參覲の禮を行ふ。披見添紙に恐悅書等も如例書記相廻候事。

〔官事拙筆〕

五月九日

一、今晝御用番より被出候左之廻狀等播州殿より到來。

先達而申進候通、相公樣益御機嫌能前月十一日御着府、同廿九日上使青山下野守殿御出被成、御懇之被爲蒙上意。且又御參勤之御禮可被仰上旨、昨晦日御老中方御連名之御奉書御到來に付、則今朔日御登城被遊候處、於御座之間御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、御手自御熨斗蚫御頂戴被遊、重疊目出度御儀恐悅之至奉存候。次に將之佐・大學御供に被召連候處、於御白書院御目見被仰付、御威光故与難有仕合奉存候。委細之儀は以御書被仰遣候御樣子に御座候。右之趣爲可申進如此御座候、恐惶謹言。

五月朔日　長將之佐
本多大學
横山遠江守

播磨守等十人樣

将作は将之佐の誤

〔續德川實紀〕

五月朔日、月次の賀例の如し。松平加賀守參覲す。加賀守が家人長將作・本多大學拜謁す。

五月四日。本鄕邸及び平尾邸に鐵砲角場竣成したるを以て射的演習に着手せしむ。

〔成瀨正敦日記〕

五月四日

本鄕御上屋敷・平尾御下屋敷鐵砲角場、今度御修覆出來、御屆も相濟に付、御近習之面々・御異風並大組御持筒足輕稽古被仰付、其外御家中之人々諸組足輕も、追而は願次第稽古可被仰付御內意に候條、每年四月朔日より七月晦日迄、鐵砲爲御打之御屆に候間、其心得を以夫々遂詮議可被相伺旨被仰出候。

五　月　　主　　稅

右御家老大學江相達す。

五月十一日

一、左之通被仰出、御近習頭江申談。

但、御家老方にも今日夫々被申渡候由に付如此。

御上屋敷・御下屋敷鐵砲角場、今度御修覆出來、御届も相濟候に付、毎年四月朔日より七月晦日迄、御近習之人々相望候者鐵砲稽古被仰付候條、此段可有御申談候事。

巳 五 月

五月六日。前田慶寧、久留米侯有馬頼永の妹に婚を求むる爲使者を遣す。

〔成瀬正敦日記〕

五月五日

一、左之通昨日相伺置、今日將之佐へ被仰出。

筑前守様御縁組之儀、有馬筑後守様御妹女様迄被仰合候付、御內談之御使之儀、有馬様御內々御示合之處、外紙之御口上振に而、明六日御使者御座候而御差支無御座申來候間、御使者之儀等夫々被申渡候樣被仰出候。

五 月 五 日

外紙也

筑後守様御妹女様、御似合茂宜敷候付、筑前守様与御縁組被仰合度被及御內談候。御許容においては、御家老役を以、近々表立御貰被成度段可被仰進候間、卽日御許容之御答被仰進候之樣被成度、其上に而御縁組御願書被指出度思召候。此段被仰進候。

五月十七日。幕府、前田慶寧に本年秋を以て歸國すべきことを許す。

〔成瀨正敎日記〕

五月十七日

一、左之通御使東御居宅へ罷出、尤上下、加藤三郎左衞門を以申上、御付札物・御使書共持參、被入御覽候旨申述相渡す。且右に付御禮として御出之儀、明朝御出被成候節被仰上候樣申上候樣被仰付候旨も申述る。

筑前守樣江

筑前守樣御國許江御暇之儀御願書、今朝御先手內藤遠江守殿を以、阿部伊勢守殿へ被指出候所、今夕伊勢守殿江御留番被召呼、當秋御暇可被仰出旨御付札を以被仰渡候。先以御願之通可被仰出段難有思召候。此段被仰進候。

御　使

五月十七日

成　瀨　主　稅

一、昨夕御渡之御付札物左之通。

同氏筑前守儀、丈夫に相見え申候得共、兎角氣鬱仕候間、爲保養態々行步爲致度御座候處、

在府中に而は保養も行屆不申候。國許に而野山行步緩々爲致候ば、全保養にも可相成候間、筑前守儀當秋私國許江之御暇被下置候樣奉願候、以上。

五　月　　御　　名

御付札

願之通、嫡子筑前守當秋御暇被下に而可有之候。

〔見聞袋群斗記〕

五月十七日、初而御國許江御暇之御願書御指出之處、同日夕御願之通當秋御暇被仰出。

五月十八日。前田齊泰、慶寧と共に登營して德川家慶の本丸に移徙したる祝賀能を觀る。

〔諸事要用雜記〕

一、當月十八日御本丸御移徙、御祝儀之御能爲御見物、御兩殿樣御登城に付、御城之御樣子眞龍院樣・榮操院樣へ被仰上候旨に而、書取兩通到來、明日出席之上可申談等候事。

今日御登城被遊候處、御能御見物上覽之御間出御。御能初り、公方樣・右大將樣御同座に而御目見、御懇之被爲蒙上意、御見物之內御老中を以上意有之。御中入御料理御頂戴申茂、御老中を以上意有之。御能相濟、最前之通御目見被仰上、總而御三家樣御同樣之御會釋に而、御

格別之儀思召候事。

五月十八日

五月十八日。前田齊泰の生母榮操院、河北郡本興寺に參詣す。

〔諸事要用雜記〕

五月十五日

一、榮操院樣當十八日六半時御供揃に而、藥師村本興寺へ被爲入、河原市へも御立寄可被遊旨被仰出候段、瀨川久右衞門より申來候事。

同十八日

一、榮操院樣今日御行步御出被遊候段、今朝御廣式より案內有之候事。

五月廿一日。前田齊泰、その夫人を招請して病氣本復の祝賀能を演す。

〔諸事要用雜記〕

五月廿一日

一、內狀到來、十三日年頭幷御本復御祝、姬君樣御初御招請御能被遊、且出雲守樣・備後守樣・啓之介樣にも御出、出雲守樣御能被遊候由。

五月廿八日。大小將橫目等、外夷防禦に關し軍裝改善の意見を上申す。

〔控　帳〕

夷賊御防禦に御軍裝御活法之儀、先達而年寄中より申上、是迄私共よりも段々奉申上置候儀も御座候得共、得失之御見定も無御座處、御先代樣より被爲御定置候御軍裝、容易に御改茂如何与御猶豫被爲在候得共、於公邊茂御改革之御僉議御座候由に候間、衆評御聞被遊候上御改之品も可有御座。依而私共存寄も申上候上に而、御改革之御模樣も御承知被遊候而御考可被遊旨、先達而年寄中迄被仰出候段、其砌申聞奉拜承罷在候處、其後弓組之者鐵砲稽古之儀も被仰出、時勢之變革に寄御深慮御英斷被爲在候御事、誠に難有儀奉存候に付、私共其以來重々又申合候處、二百餘年來之昇平、世間一統之僭上奢靡、用途引合不申世態に御座候故、此時に當り後來之御定法とも相成可申御改方は、迚茂可難被爲成哉に奉存候。依而又打返申合候處、根元御軍裝御定は諸士御知行御宛行高之割合を以、四歩半役之御取極に御座候得者、不案内には御座候へ共、諸士相當之武役に而、御萬代不易之御定法与奉存候。若萬一時勢之變に寄、士風おのづから淳朴に立戻候節は、何れ之時なり共人々御定通り之人馬召置候儀も必相成可申儀に而可有御座与奉存候。左樣御座候得者、御先代樣より之御良法、尤御萬代御遵用被遊置候御儀可有御座与乍恐奉存候。只專ら當今之時勢に寄御斟酌御增減被遊候御儀者、元より御時代之御權道に而、御後代之御定法とは相成不申儀与奉存候。左樣御座候へば、當

時御防禦方之御時宜に寄、如何様共被仰付御宜敷儀に茂可有御座哉与奉存候に付、取分御實備之第一与奉存候趣共左に奉申上候。當時之模様御手當方蒙り候人々、御定通り之取調理に御座候に付、家來不足之分は臨時雇者を以人數高相揃候圖りに御座候得共、諸手合一時に相成候而は日用も指支可申哉。其上身過之爲之日用に御座候へば、命に拘り候場所迄可參者とも存不被申儀。御渡之人夫・夫馬迚茂、郡々村々江人高等割付臨時呼集候事故、往返彼是手間取候而、進退迅速之異船之御手當には不殘間に合ひ可申共存不被申儀。旁以御定通り之出張方は、人々心底に奉肯兼候所御座候より、平生之取調理方實用難相成哉に奉存ながら、手數も相懸り品に寄捺方に失費も相懸り、彼是泥み申所御座候而一統實意に懸り兼申候故、士氣も相立兼可申哉に奉存候。此姿に御座候而年月を送り申候得者、油斷は仕間敷儀に御座候得共、いつしか油斷に流可申哉与恐入奉存候。就而者當時異國船之御手當方に御座候へば、諸士一統精誠常に心懸人馬召置、在人馬を以速に出張方肝要之旨、且御渡之人夫・夫馬茂精誠致減少相辨候心懸尤に候等之御趣意、何与歟被仰出方茂御座候而、諸向實數之取調理に相成候者、手數も相減じ、失費茂相省き、人に拘り泥み申所も無御座、心底より奉肯取調理候事に相成申候へば、自然与實意に相懸り申儀。取調理用意方實意に懸り申候得者、士氣もおのづから相立可申哉与奉存候。士氣相立候へば、人馬之嗜も亦相勵候處江も至り易哉に奉存

候。此所御實備第一之御地盤に可有御座哉与乍恐奉存候。夫に次候而者當時西夷火攻を主与仕、專ら銃礮之大小多少を以勝算を立候戰風与承り及び申候。依之渠を伐候に者、殊に進退懸引神速に有御座度奉存候に付、右御手當方に者旗數も精誠御減之事には相成申間敷哉。指物茂精誠御差略之上、無御座而難叶分は、短小輕便之御拵方に被仰付候儀は相成申間敷哉与奉存候。且又長柄茂御省き之事には相成申間敷哉与奉存候。當今之戰鬪は古に替り、大小砲之勢猛烈に可有御座、長柄者敵味方之目に立候品。是を小者に爲持、正整之軍形を張り申候事は迚茂無覺束奉存候。却而不整之端を開き、若自然惣樣見崩之基とも相成候而者、誠に不容易儀に奉存候。將亦只今指當候所は、御筒之御都合も如何可有御座哉与奉存候得共、方今之時勢、足輕迄に而者砲隊之御分配方御手厚からず哉に奉存候に付、割場附小者之內人撰仕、追々砲術稽古爲仕候事に被仰付置候者可御宜哉与奉存候。西洋之戰法は悉皆砲隊之由に承り及び申候。元より勝敗は戰略將才に可有御座候得共、乃至兩軍之將才匹敵仕候節は、兵器之利鈍多少茂亦全く勝敗に懸り申所与奉存候。左樣御座候得ば、御家中之人々も可成丈雜人を相減じ、追々鐵砲之手を相增候事に被仰付置候はゞ可御宜哉。其上雜人多者、混亂騷擾之憂無御座共難申哉に奉存候。今般御參勤御供人暨詰人道中鐵砲爲持方之儀被仰出候趣、最前三品之御筒すら坂本迄に而御控之處、近年やう／＼御持込に相成、只今に而は御供人等迄一統

勝手に何挺成共持込候儀者、古來未曾有之御事に而可有御座、誠に一つ之大御改革与可奉申儀。畢竟於公邊時勢不被爲得止事御儀与奉存候。如斯變革仕候時節江至り申候儀、ケ樣之折柄亦御英斷之程茂若不被爲在御事にも有御座間敷哉と茂乍恐奉存、御深慮之程者難奉計恐入奉存候得共、當今之模樣時勢において御爲誠に御大事之所与奉存候に付、私共段々申合候趣奉達御聽候、以上。

巳五月廿八日　　　同役連名判

同役は大小將横目

六月十日。御次稽古等の者の外城中にて馬乘袴を着用するを禁ず。

〔觸留〕

御横目江

御城中江罷出候刻、馬乘袴着用之儀、御次稽古等之人々は格別、其餘有之間敷儀に候。別而若黨抔馬乘袴致着用儀は、僭上之至に候。以後右族無之樣主人々々より可申渡候事。

右之趣一統可被申談候事。

巳　六　月

別紙之通夫々可申談旨、御城代播磨守殿被仰聞候條、御承知被成、御同役・御同席御傳達、御組・御支配御申談、且又御組等之内裁許有之面々は、其支配江も不相洩相達候樣御申談可

被成候、以上。

六月十日　　　　　　　　御横目

定番御馬廻御番頭中

六月十一日。家中の人々の諸上納打込辨濟に關して告ぐ。

〔雜事日記〕

御家中之人々諸上納之儀、去子年打込等に被仰付候處、いまだ上納口多相成居難澁に付、今一篇緩被仰付候樣三組頭願之趣有之候。近年品々御物入指添、御借財茂過分相增、甚御危迫之御勝手振に者候得共、格別之趣を以別紙之上納方打込等に被仰付候。勿論此後聊無滯可致返納儀、急度心得可有之候。

巳六月

一、半知中役向に付銀、是迄百石に付二十目宛御算用場江上納之分。

一、諸役所銀、是迄右同斷。

右二口借用之分打込、百石に付十匁宛、一口借用之分者同五匁宛之圖、兩樣共以後諸方御土藏江上納可仕事。

一、去年諸方御土藏江打込返上被仰付後、役向に付指定り御貸渡之金銀、右御土藏江是迄數

口返上に相成候分者、其品により可遂僉議候條、借用之委曲員數共御勝手方席江可書出候事。

一、諸役所附銀等近年上納方滯之人々有之に付、去暮御貸渡銀之内を以夫々取立に相成候得共、右に付滯高多之人々は、半知中緣組等に付御取扱銀之分內上納等に相成居候に付致滯銀、早速上納可仕筈に候得共、當年より改而一ヶ年宛御算用場江上納可仕事。

但、本文御取扱銀、御知行は去年に而皆返上之處、當七月迄猶豫相願承屆置候分、尤其通上納之事。

一、近年品々依願當分之支配用承屆置候分。

一、除知上納之分。

一、諸役所より借用銀子の事打込不相成分。

右三口は此度打込に難成候之條、是迄之通上納可仕事。

以上

六月十一日　　九里歩

別紙御用番美作守殿御渡、一統可申談旨被仰聞、則御渡之覺書寫兩通指進之候條、御承知被成、御組・御支配御傳達云々。

六月十六日。前田慶寧、登營して初めて嘉祥を祝す。

〔筑前守様御用留寫〕

七月四日

筑前守様、當十六日嘉祥初而御登城被遊候處、大廣間江公方様・右大將様出御、筑前守様御緣類江御着座、御菓子御頂戴。相濟、夫より西丸江茂御登城被遊、御奏者番被謁、御下爲御禮兩御丸御老中方御廻勤被遊候。萬端御都合能被爲濟、先以恐悦御同意御座候。依之御先例之振を以、拙者共相公様・筑前守様江御祝詞申上、姫君様江も八朔初而御登城之節之振を以、詰合切御祝詞申上候。仍而各より御祝詞申上方之儀者、表方より申進候通に御座候。此段は爲御承知申進候、以上。

六月十九日　　遠江守

圖書等兩人様

〔續徳川實紀〕

六月十六日、嘉定の御祝規例の如し。松平筑前守・松平大藏大輔同じく着座を命ぜらる。

六月廿一日。犀川・淺野川出水す。

〔御家老方等諸事留帳〕

六月廿日

一、今曉之淺の川出水に而堀川邊水附家六十六軒有之由。

六月廿一日

一、夜前終夜大雨、今朝より兩川出水、橋別條無之候得共、往來危くに付往來差留。所々小橋數落候由。

六月廿四日

一、此間廿一日兩川出水之節、水附家等町奉行しらべ之惣數如左。

惣數八百六十五軒

内八十一軒　支配違

三百五十八軒　床之上水附

四百十八軒　床下迄水附

八　軒　是は天神町邊也。山崩等に而損家

有之外能美郡等所々在家・御田地等損所夥、承屆しらべ追而出之由。

〔諸事要用雜記〕

六月廿日

一、今晩淺の川出水、小橋半分流失之由。

同廿一日
一、夜前又々暴雨、淺野川出水之由。

六月廿二日。久留米侯有馬賴永の使者來りて前田慶寧との緣組を諾したることを告ぐ。

〔成瀨正敦日記〕
六月廿二日
一、九ツ時過歟筑後守樣御家老代御使者有馬豐前副使御留守居中村和三郎參上、左之通御口上、御取次大學・坂井を以被入御覽、御應答申述候樣被仰出、其段申述。坂井奉
於親樣御儀、筑前守樣ゟ御緣組之儀、御內談被仰合候通、彌御內約御極被成度、以御使者被仰進候。

六月廿二日
御使者　有馬豐前
副使　中村和三郎

〔官事拙筆〕

七月四日

一、昼九時前、前月廿四日出町飛脚傳封江戸來狀到來。執筆より指越、披見候內一通。筑前守様御儀筑後守様御妹女親姫様与御緣組御內約之儀、今廿二日大學を以被仰進、筑後守様よりも御家司代有馬豐前を以被成御承知、彌御取極可被成旨御答被仰進候旨之紙面。

六月廿四日。能登惣持寺の主僧に乘輿の儘越中境關所の通過を許したることを通牒す。

〔國事雜抄〕

能州惣持寺儀、越中境御關所、是迄病氣斷に而乘輿之儘通行有候得共、同寺儀寺柄之儀、其上公儀御關所を茂乘輿之儘通行有之に付、今般願之趣有之、格別之趣を以以來境御關所乘輿之儘被罷通候儀承屆、其段申渡候條、可被得其意候、以上。

六月廿四日　　　前田美作守

山本修理殿

六月廿六日。大小將横目等、重ねて軍裝改善に關する意見を上申す。

〔扣帳〕

銃陣修行与申儀を押立御世話被爲在候樣、私共心付之趣先達而奉申上候處、於時勢尤之儀与被爲思召候。因而如何相成可然哉、夫々共仕組方可申上旨、大村肴次郎を以被仰出候趣奉畏、仕組之粗増私共申合候趣左に奉申上候。

一、侍何茂鐵炮を以夷賊を遠間に打斃し、劍鎗之働迄手を束不申心懸、時勢において肝要之旨被仰出御座候樣仕度奉存候。

但、本文之通相成候へば、指向候處筒揃兼可申候得共、一統心得方一定仕候儀、御實備之根元与奉存候。且筒所持不仕人々、筒出來方願出候者多可有御座与奉存候。就而者御筒を初、此後新に出來之分は、雷粉仕懸に被仰付、是迄之火繩御筒茂雷粉仕懸に御直し、一統江茂同樣之趣に被仰出御座候樣仕度奉存候。

一、役旗者當分二本に被仰付、餘は筒に換之、旗捺方も當分一人持自由に相成候樣被仰出御座候樣仕度奉存候。役長柄者當分御省、是又筒に換へ候事に被仰出御座候樣仕度奉存候。

一、臨時御渡之御筒足輕、今度年寄中迄相達置申候通、平常組附に被仰付候樣仕度奉存候。銃陣之御趣意を以仕組仕候節は、御筒十五挺に而者行足不申哉に奉存候間、今十五挺割場附小者之内壯健之者相撰、一ヶ年人不替私共一組江十五人宛御渡御座候樣仕度奉存候。足輕迚茂割場向に而は、平生之御奉公烈敷相勤、稽古方行屆不申、役筒之分は尙以之儀に御座候間、

同役は大小将横目

旁以西洋流に被仰付、軍役奉行夫々指引仕、壯猶舘江罷出稽古爲仕候得者、一組全く一隊之仕組茂相整、打方等早く實用に相立可申与奉存候。其上昇平之人情を以、俄に戰場江爲臨用立候樣仕候節は、足輕以下殊に節制を以調練不仕候而者難用立与奉存候。依之西洋流編制之規則を以稽古爲仕置候へば、進退懸引之地盤出來居申候に付、實戰に臨變化之使ひ方も亦混亂不仕、使ひ易哉に奉存候。當時指向御筒等揃不申內者、調練等之節も先づ修羅筒を以重ね組に不仕、放發等變化之使ひ方も頭々了簡を以指揮相試申候茂亦可宜哉に奉存候間、右之通被仰付候樣仕度奉存候。

一、備立方等之儀者、先づ頭々了簡に御任置御座候樣仕度奉存候。何れ操練茂仕試不申而は、法則も定り兼可申哉与奉存候。

右今般被仰出候趣に付、私共內願仕罷在候趣奉達御聽候、以上。

巳六月　　　　同役連名判

右封物卷目之上如例相認、岡田氏著氣御奉書御請之御使六月十五日發足に付持參、於江戶表水原氏判形之上被上候事に示合置候處、同廿六日參着、水原氏江示合有之、同日指上候段岡田氏より申來候事。

六月廿八日。德川家慶、前田齊泰及び慶寧の暑中を問ひ檜重を贈る。

〔前田孝事日記〕

七月八日

一、前月廿八日上使御使番齋藤左源太殿を以、爲暑中御尋御檜重御拜領、筑前守樣にも右同人を以御檜重御拜領被成候。御盃事は御斷に而、御菓子・御吸物等出、御首尾能相濟申候。右之節備後守樣・前田丹後守殿、并御取持衆三島伊豆守殿等御出、御城坊主衆も參上に御座候。上使御退出後追付之御供揃に而、筑前守樣御同道、兩御丸へ御登城、御下りより兩御丸御老中方不殘御廻勤被遊候旨、遠江守等より只今申來候に付、爲御承知申進候。先以恐悅御同意に御座候、以上。

七月八日

〔續德川實紀〕

六月廿八日、暑中を問はせられて、松平加賀守・同じき筑前守へは使番齋藤左源太御使して、おの〳〵檜重をおくらせらる。

七月七日。祠堂銀借用の者にその返納を督促す。

〔雜事日記〕

各組・支配之內祠堂銀致借用罷在候處、去丑の十二月以來未指出人々有之、祠堂銀格合相違い

たし、御縮方相立不申旨等寺社奉行申聞。右銀子返納方之儀に付、前々より毎度申渡、既に昨年茂申渡置候人々茂有之處、右樣及遲滯候儀甚等閑之至に候。如何之儀に而遲滯相成候哉、各手前において被遂穿鑿、當十四日迄取立可有返納候。尙更以後茂急度相心得候樣可被申渡候。尤相濟候はゞ其段可被申聞候。

右之趣同役中江も可有傳達候、以上。

七月七日　　奥村助右衛門

七月十二日。村々に二日讀を勵行せしむべきことを告ぐ。

〔郡方御觸〕

每歲春秋御郡廻之節爲讀聞候御條目頭書之帳面之儀者、先年村々江相渡置、每月二日讀与唱、肝煎於手前一統爲讀聞、御縮方爲相守可申等に候之所、いつしか遺失之躰に而、近年者多分其かたち無之向茂有之、下々之者共御縮方不存族に相聞、斯流行候而者御縮方難相立候。因茲今度右帳面改而組々一冊宛相渡之候條、面々於手前一村一冊宛相渡、每月二日又者於村方不指支日柄を極置、肝煎方江百姓・頭振・婦住之者等に至迄不相洩呼立、右御條數爲讀聞、尙更御締方無油斷相守可申旨、念頃に申談候樣夫々可申渡候、以上。

巳七月十二日　　津田少左衛門

吉田藤馬

加州三郡十村中

〔御定書寫〕

御條目之事

一、上様御荷物船之儀者不及申、他國諸大名衆荷物船破損又者逢難風候節、彌無油斷御馳走可仕事。

一、浦方・宿方に被立置候御高札之表違背仕間敷事。

一、津留・津入共外諸事御定之品々彌相守可申事。

一、惣而目安上申儀有之候者、御郡奉行迄書付出可申候。右奉行之儀申上度候者、御算用場江可申斷候。御算用場奉行之事申上る品有之候者、御横目迄書付可出候。右之役人指置直に訴狀等於上之に者、不及理非に急度可被行曲事に旨被仰出候事。

一、御郡長上役之者申談候儀、肝煎・組合頭等惣而村方之者違背仕間敷候。肝煎等より申渡候儀、小百姓違背仕間敷候。若右役人共非分申付候者、小百姓等より直に御郡奉行江可申斷事。

一、律義成百姓等、可申上儀をも御上を恐不申上躰有之候者、御扶持人・十村等見聞之通御郡

奉行江可申聞事。

一、徒なる百姓等、中立にも成間敷儀を御上を掠、公事之下持を仕、書付爲上申儀有之候者、本人より者下持之者大罪に候之間、嚴刑可被仰付候事。

一、諸百姓申分之儀、不依何事に給人方江申斷間敷事。

一、御領分之外他國商賣之鹽入申間敷候。勿論御國之者なりといふ共、他所之鹽入申間敷事。

一、人形廻し・おとり子・他國之座頭・舞々、一夜に而も宿かし申間敷事。

一、跡々より不在來異形之諸勸進御停止之事。

一、在々之儀者、無筋者に一夜に而も宿借し申間敷事。

一、宿々之儀、一夜泊り者宿借し可申候。二夜共借り申候者、請人取可申候。勿論一夜に而も無心許者有之候者心を付、不屆有之候者押へ置可及斷候事。

一、ばくちがましき儀一圓仕間敷、別而かけの諸勝負何事によらず跡々より堅く御停止之事。

一、七木御締方之儀嚴重相心得可申事。

一、在所宮林之木、其宮之用木に遣ひ申共、伐申節者御郡奉行江相斷可申事。

一、何方に而ものげ山幷野方に木苗を植、林に仕可然所に候者、勝手次第木苗を植、林に仕立可申候。以來迄其者之林に可被仰付事。

一、たばこ本田畑に作申儀、跡々之通彌御停止之事。

一、御鷹場之内鳥死居候を見付候者、拾上取早速御郡奉行江案内可仕候。但御鷹場之外たりとも、勿論鶴・白鳥など死有之候者可及斷事。

一、在々百姓幷頭振、他國江一人も遣し申間敷候。勿論日用にも參り申間敷事。

一、從跡々他國江參候者村役人致吟味、其一類江申渡呼返可申事。

一、奉公人暇をもらひ、日用取・頭振に成候者曲言に可被仰付候。

但、引籠作を仕儀者格別に候條、村役人を以斷之上引込可申事。

一、村々百姓・頭振等人數一ヶ村切相調理、毎歲帳面に記可置候。尤如御定宗門御改堅相洩し申間敷事。

一、御郡中於浦方に船貸候者、跡々之通請人取可申。當分に而も請人取不申船乘缺落人有之候者、船貸主可爲越度事。

一、御郡之者大聖寺口留罷通候に付而者、跡々之通彌御郡奉行江相斷、通切手を取可申候。無斷罷越、後日相聞江候者可爲越度事。

一、升・秤之儀彌如御定相守可申事。

一、船乘幷商人他國江罷越、借銀等仕置、其所より及斷、惣而御上江之邪魔に相成申儀堅仕

間敷事。

一、九拾歲以上之者は勿論、惣而老人之儀子孫親切に介抱可仕事。

一、寺替・宗門替之儀、至而無據子細有之候者及斷、指圖次第可仕事。

一、新規佛法すゝめ申者有之候者、一圓聞入申間敷候。勿論早速に可及斷候事。

一、金銀・錢・衣類・諸道具何によらず、拾ひ申歟又者土中より掘出し申儀有之候者、早速可及案內候。隱置後日相知れ候者可爲不屆事。

一、所々御旅屋幷御藏近き火事之節、相極め置候村々早々罷出、火を防可申候。若不參之在所於有之者、以後遂吟味曲事に可申付事。

一、在々火之用心、跡々如申渡互に令吟味、炭・灰等置所念を入可申候。若無沙汰之仕合有之、火事於出來者可爲不屆事。

一、道中之儀者勿論、不依何方に死人有之候者、死骸に番人付置可及案內事。

一、諸事御奉行共所に逗留中者勿論、往來之刻慮外がましき儀仕間敷事。

附り、侍中往來之刻慮外之躰仕間敷事。

一、往還筋之儀者勿論、何れ之隱爲道筋共旅人相煩、其所に令逗留において者致介抱、國所委細に相尋可及案內候。若致病死候者早速夫々可申斷事。

一、往還道請取之在々より常々致普請、損じ不申様に可仕候。打捨置若及大破候者、其請取之在所肝煎・組合頭可爲越度候。勿論並松之根抔掘、道せばめ申においては、急度不届に可被仰付事。

一、宿馬無滯様に可申付事。

一、能州・越中より金澤迄取寄申給人米幷商賣米、宿々問屋において猥に無之様、第一馬形盗取不申様可仕事。

一、馬一疋に口取一人宛付可申候。一人して馬數追申間敷事。

但、口をはなし申間敷、尤馬形道中馬に乘申間敷事。

一、御郡中諸百姓、金銀・錢・米都而借り物仕間敷候。賣物に仕なし、品をかへ月延など勿論仕間敷事。

一、此以前より如申渡、在々諸百姓奢たる儀不仕、致農業專に、進退持立候様常々心懸、諸事無油斷勵し可申事。

一、衣類之儀跡々定置候通、木綿・布之外着用仕間敷事。

但、御扶持人等男女紬御免之事。

一、向後百姓之衣類、男女共紫・紅に不可染、諸色形なしに可致着用事。

一、家作之儀是又最前御定之趣相背申間敷、作事仕節者肝煎幷組合頭罷出見屆、相違無之様可申談事。

一、百姓食物常々雜穀を可用、米猥に不可食事。

一、御郡方御扶持人始め、惣百姓男女共乘物一切御停止之事。

一、神事或葬禮・年忌法事、或婚禮諸事之祝儀等に至迄、百姓に不似合不致結構事。

一、御郡中宿々共に縁組仕事、奉行え斷之上極可申候。無斷下に而縁組仕間敷事。

一、御扶持人等其外百姓共より、給人・町人え音信仕間敷事。

一、御用之儀に而も書状等村送り之儀、十村・御餌指之外者一圓送り申間敷事。

一、後生願候共、耕作稼之手支に不相成様、勿論ついえなきやうに願可申事。

一、他國之者自然缺落抔致、御領分え罷越候を隱置、後日顯候者同罪に可被仰付事。

一、御郡中在々に而、酒・地黃煎其外菓子えいやうの賣物仕間敷事。

但、宿方幷往還筋之分者、右之賣物見せ賣仕儀不苦事。

一、御國境之儀者不及申、惣而御郡中、何事によらず人多集りそうどう致事於有之に者、早速御郡奉行え可申聞事。

右御定書之通り彌無相違相守可申者也。

筑後守は有馬頼永

七月十三日。幕府、前田慶寧の久留米侯有馬頼永の妹と婚姻するを許す。

〔見聞袋群斗記〕

七月十三日、有馬筑後守樣御妹女親姫樣与御緣組、御願之通被仰出。

〔官事拙筆〕

七月廿二日

一、晝九時過當月十四日出御附方御用有之、早飛脚歩に而到來。內狀幷御書入之箱も到來。則添紙等披見之內左之來狀有之。

先達而申進候通、筑前守樣御儀、筑後守樣御妹親姫樣与御緣組之儀御願書付、前月廿七日御指出被成候處、昨十三日御登城被成候樣、前日御老中方御連名之御奉書到來に付、則御登城被遊候處、御白書院於御緣側御老中方御列座、御願之通被仰出候段御用番靑山下野守殿御演述被成、辱思召候。此段頭分以上江も可申聞旨、拙者共御前江被召御意御座候。先以目出度御儀、恐悅之至御座候。於其表も前々之趣を以御申聞可被成候。委細之御樣子は以御書被仰遣候由に御座候。

右之趣爲可申進如此御座候、恐惶謹言。

七月十四日

長將之佐
本多大學
横山遠江守

播磨守等十人樣

七月十四日。青山將監の家來齋藤三九郎の江戸に修業せんとする件を議す。

〔官事拙筆〕

七月十四日

一、今朝播磨守殿より直書越後屋敷江被指越候に付、致披見候處、長將之佐殿組青山將監家來給人齋藤三九郎与申者、於江戸表御旗本江川太郎左衛門殿手代齋藤彌九郎方江爲劔術稽古差遣、且又三州田原三宅土佐守殿家中村上定平方江爲炮術稽古指遣度段相願候に付、劔術稽古杯罷越先例も有之候へ共重品柄、其上他國江執行罷越候儀如何可有之哉、表向達候には及間敷哉被及內談候旨等被申越候に付、尙更席向先例も無之哉相調理候處、文政年中村井氏家臣國友次郎助炮術執行江戸表に罷越候節、何等之達も無之旨故、猶作州殿共示談之上被承届可然、表向被尋候には不及段及返書候事。

七月十五日。石川郡大乘寺の法會に集れる僧徒等亂暴す。

〔官事拙筆〕

七月十六日

一、播州殿より執筆堀學之丞を以被申聞候は、昨夜大乘寺集僧之內二百人徒黨いたし、諸堂を荒し亂妨之躰に付、人數指向候樣いたし度旨、四時頃同寺より申越候付、爲警固人數多指遣候。今朝之所に而は鎭り候躰に候へ共、未慥成儀は相知不申候。此上は同寺より兩刹江及屆、僉議可有之与存候。播州殿よりは右人數差向候趣を被及內達候旨被申越候事。

一、御横目永原虎一郞任序申聞候は、昨日大乘寺集僧大勢問答に事寄せ、和尙を打擲及亂妨候風評、未慥成儀は相知れ不申候へ共、先一往達置候。尙跡より何とか可達旨申聞候事。

七月十七日

一、御横目永原善太夫別席に而申聞候は、昨日御達申上候大乘寺江手先足輕指遣承候處、和尙打擲と申は間違、何れ集僧大勢逗留中、給物乏く、賄物も少候抔之儀を憤り、諸堂を荒し法具も引破、彼是及亂妨候躰。併敢而怪我人等も無之、昨夕迄に相鎭り候樣子、此段達置候旨申聞、則書立爲致置候事。

七月十八日。久留米侯有馬賴永使者を遣して、その妹の前田慶寧と縁組

本年四月四日の條參照

善太夫前にあり、虎一郞とあるべし同人なるべし

を許されたることを祝す。

〔成瀬正敦日記〕

七月十八日

一、今朝五ツ時か、有馬筑後守様御使者御家老代有馬豊前、副使御留守居中村和三郎を以、左之通御口上、且御進物・御目録共、當席御取次將之佐出席前に付、御近習頭を以被申上、御應答申述候様被仰出候旨に而、御覽濟、御近習頭より被引送、御使者退出四ツ時過也。尤右携之人々服之儀、先達而御附之通色薄成品返小紋除之。あなた御使者はかちん之由。

折紙

於親様御事、筑前守様ゟ御縁組御願之通被仰出、御同意御大慶思召候。依之御使者を以被仰進候。御惣容様ゟ右御同様被仰進候。

七月十八日

七月十九日。家中諸士の紋譜帳を幕府に提出す。

〔成瀬正敦日記〕

七月二十日

一、先達而御目付方より御談有之候御紋譜帳二冊、寛政之度之通に出來、以間番昨日御目附

方御指出有之。問番助井上要人御使書昨日上り、入御覽候事。

七月十九日。薩摩侯嫡子島津齊彬に贈る物品を調進す。

〔近敎日記〕

七月十九日

一、薩州侯御嫡修理大夫殿には、當時筑前守樣御同席之御儀故、每度於殿中御咄合等も有之、其上當時御本宅御廣式女中之內、あなた御廣式へ之手筋も有之候故、何ぞ被進度に付御望之品を爲御聞合之所、御國產之生壁細工・染繪御望之旨に付、致僉議候樣此間御意に付、左之通相伺御治定に付、夫々御用意爲仕、今日入御覽、御奥へ相廻候事。

生壁細工御聯（堀越細工）　二枚　一箱

緅筋　五本　一籠

右相公樣より

染繪御懸物地（紅白牡丹之繪）　二幅　一箱

墨形落雁　三百枚入　一箱

包御熨斗

右筑前守樣より

但、御箱御上書之調方、あなたより是迄被進候分にならひ、表向之御格に不拘輕く爲相調候事。

七月廿八日。諸士の收納米を預る藏宿業者をして倉庫の構造を完全にせしむ。

〔岡部舊記〕

御家中收納米相預け候藏宿共納藏普請方之儀、甚麁抹にて、窓戶前に出戶無之、中には屋根に土を上不申分も有之躰、甚以心得違之事に候。御藏御造作方之儀は御樣子有之事にて、町藏目當には不相成儀に候。惣而前々當場印切手之分燒米抔之節は、時宜に寄り代り米も被下候譯に候。町藏においてはいかにも大切に可相心得儀は申迄も無之、火災之儀預狀に調無之儀は、其時宜に寄取捌之品も有之故に候。ヶ樣之譯柄に候得ば、彌以入念藏拵可有之處、前段之族等閑至極之儀に候條、早速各被遂見分、修覆方嚴重可被申渡候。併し一時に相成候而は、指支之筋も有之候はゞ、當年より三ヶ年之間に加修覆候樣可被申渡候。向後藏拵致麁略置候向も有之候得ば、可及越度之沙汰候條、夫々可被申渡候、以上。

七月廿八日　　　　　　御算用場

高澤平十郎殿

大嶋五郎右衛門殿

七月廿八日。藩有の米倉にして火災に瀕したる場合の心得を令す。

〔上田舊記〕

御藏等燒失之節取捌

御米藏等近火之節、村方定之人足を以防留申儀者勿論之事に候。萬一御藏所江火移り候上、御米取出紛敷等有之而者不相成事に候。併中に者、燃杭等迄も取除候事不相成事之樣に心得候向も有之躰に候。是等者心得違之趣に候條、以後御藏幷藏所江火移り候上者、燃杭等早速取除可申候。所々奉行人等幷御代官竪諸代官等罷在縮方相立、御米助り候儀に候はゞ、時宜に寄御米爲取除候而も不指支儀に候條、被得其意、此段夫々可申渡置候、以上。

七月廿八日　　　御算用場

松崎少右衛門殿

七月廿九日。前田慶寧の益田遇所をして彫刻せしめたる雅印成る。

〔成瀨正敦日記〕

七月廿九日

一、筑前守樣御號・御堂號・御齋號之御印可被仰付旨に付、先日より御印材僉議有之、蠟石に

而御前之御印御寸法等之通出來。右彫刻等市川三亥江僉議いたし、當時益田過所儀中で可宜与申事に付、右過所へ被仰付候付、三亥より爲申談、右彫刻場所御小屋方佐藤等へ遂僉議、明小屋一間相渡、朝奥附御步横目御印材致持參相渡、夕景相濟候上御步横目御次へ上置候。尤御步横目は見廻り之筈。奥附御横目は一人充附添罷在、夕景相仕廻候節火之用心等得与見屆候筈。且小遣も二人相渡候由。右は都而御近習頭へ申談候故、御近習頭中より夫々被申談候事。

一、右御印三つ共今日出來いたし候付、奥取次より指上候。右之外にも御用有之、今日坂井氏より被申談候事。

七月。大聖寺藩の三十講に模倣したる頼母子を起さんことを議す。

〔御勝手方御用心覺〕

七　月

此度御勝手方に而僉議致し、大聖寺之三十講に習、御かね裁許之町人木谷藤右衛門等に爲引請、一組三十として組立候はゞ御借財御返辨之道も畢竟は相立仕法。相達候荒增左之趣也。

但大聖寺之割合より少し違に せ、割合相立替之由之事。

一、初會に取當候へば丸六貫目德。二番は初懸銀に五朱之利足相懸、外に五貫九百五十目德

此の法は實施せられざりしもの丶如し

銀相渡。三番は二番目迄之懸銀に利足相懸、外に五貫九百目徳銀相渡す。四番より右之通年々之懸銀に利足を懸け、外徳銀五十目落に而相渡、滿會に而は利足之外徳銀四貫七百五十目と相成。依而初め之間は過分之利に相成、後々は五朱より少高利に相成申仕法之事。

一、初懸銀六貫目、二番より五番迄三百目落に而、六番目より二十番目迄百目落二十一番より滿會迄二百目落之事。

初會

一、百八十貫目　　但六貫目懸三十人懸り

內　十二貫目　　鬮當り一人江相渡

　六貫目徳

殘而百六十八貫目

　此利八貫六十四匁　　八朱六ヶ月分

〆百七十六貫六十四匁

二會

一、百六十八貫二百目　　但五貫八百目二十九人懸

內　十七貫九百三十目　　十一貫八百目出高鬮當り渡り

六貫百三十目徳
殘而百五十貫二百七十目
〆三百三十六貫三百三十四匁
此利十五貫六百六十四匁　六ケ月分
元利合三百四十一貫九百九十八匁
右之如く段々割合有之、年に兩度會にして廿五番迄十三ケ年に而相濟、廿五會之節跡五會分は段々取拔人少に相成候に付、分相渡候仕法之由。
廿五會
一、千五百九十一貫三百六十三匁一分五厘
內百五十五貫七百三十目　鬮當り　百六貫八百目出
四十八貫九百三十目徳
殘而千四百三十五貫六百三十三匁一分五厘
此利六十八貫九百十匁三分
元利合千五百四貫五百四十三匁四分五厘
終の月

一人前百五十八貫八百八十四匁　但五人に渡す
〆七百九十四貫四百二十目
残而七百十貫百二十三匁四分五厘御益
但外に閏月之利足御徳

右凡圖に御座候間、治定之上猶算當り差略可有御座候事。

右之通にして、調子次第四・五組も出來候得ば取立之詮議之由、鈴木清之丞も申聞居候事。

八月四日。前田齊泰、慶寧の歸國後に於ける教養に關して告ぐ。

〔御附方御用御親翰帳之內寫〕

筑前守儀段々成長、當秋國許江之御暇可被仰出御樣子之儀、大慶之至に候。最早大人とも可申候得ば、附之者共尤油斷も有之間敷候へ共、作法方等萬事共心得も可有之事に候。且部屋住之儀に候へ者、在國中も諸事嵩高に無之、如何に茂手輕に取計、文武稽古等之餘暇、鷹野に不限程能山野巡見は有之可然候。養生方之儀彌無油斷樣、是等之趣竹田市三郎等初守役之者江も爲心得可被申聞置候、以上。

八月四日

横山遠江守殿

〔御附方御用御親翰帳之内寫〕

筑前守樣今度御國許𛀁初而被爲入候付、御旅中諸事無油斷相心得可申候。水道も替り申儀に候間、猶更召上り物等萬端綿密に心付可申候。金澤御着之上にも、土地に御馴不被遊儀に候條、召上り品御試等入念相心得、御養生方等之儀深切に心付候樣、小幡主膳初御附頭等𛀁も夫々可被申渡旨被仰出候。

八　月

八月四日。鳳至郡中居に於いて鑄造したる五百目玉筒を珠洲郡狼煙に据付くることを命ず。

〔前田孝事日記〕

七月四日

一、今般於中居出來之五百目鑄筒力樣、幷中打爲見分、今村武之助中居へ罷越、御筒仕揚等致見分候處、宜敷出來に付、力樣幷中打も見分致候由に而、中角三枚相達、右鑄筒同所御米藏へ相納置候段夫々及屆候事。

〔前田孝事日記〕

但、中打之節三十間計之間數之由。藥目形等之儀御異風方に而秘し申躰に而相知不申事。

七月九日

一、左之通今便及伺候事。

五百目玉鑄筒一挺製作可被仰付旨、去秋被仰出、其節伺之上能州中居鑄物師重兵衛へ被仰付候段申渡置候。然處鑄立方見分之儀、右重兵衛申聞、則當春御發駕前伺之上、御鐵炮奉行順先豊嶋康九郎へ右見分方之儀申渡置候處、則見分遂げ罷歸候旨先達而申聞、先承置候處、右御筒皆出來に付力樣等見分方之儀重而申聞、右奉行順先中島慶三郎申渡置候處、病氣に付次順今村武之助罷越候樣申渡、且力樣等相濟候はゞ同所御米藏之內へ相納置候樣申渡置候處、力樣等見分いたし候旨等右武之助別紙之通申聞。且口達を以申聞候は、重兵衛儀鑄方追々手馴候樣にも候哉、此度之分は出來方格別宜候間、御取寄御覽茂可有御座哉之旨申聞候。夫に付能州御固所三ヶ所之內、福浦・輪嶋には先達而五百目玉鑄筒一挺宛被遣置候間、新出來之御筒御取寄御覽も不被遊儀に候はゞ、狼煙へ被遣候事に表方へ相達可申候哉。右紙面一通。

〔前田孝事日記〕

八月四日

表方へ

今般能州中居において五百目玉鑄筒一挺製作被仰付置候處、狼煙へ可被遣旨被仰出候事。

八月六日。前田慶寧、歸國の際に於ける御供馬及び供奉の人數等を定む。

〔成瀨正敦日記〕

八月六日

一、筑前守樣御供馬左之通、御馬奉行兼帶より相伺。

御先馬

御拜領馬、神田栗毛星

御召馬

八千代　頭挿　尾上　越路

御用馬

黑鹿毛　鹿毛星

御使馬

最上栗毛　長瀧青　羽州栗毛

右當春筑前守樣御國江被爲入候付、御道中御供馬右之通爲御牽可有御座哉、此段奉伺候、以上。

八月六日　野村傳太郎

高畠守人

七六一

覺

一、千六百六十九人　雇之者
内六百六十六人
二十二疋　御家中乘馬
百九十八人　宿繼人足
但宿定二十五人之外
百十七疋　驛馬
但宿定二十五疋之外
右御發駕御當日、御同宿御供人馬高大概如此御座候、以上。

八月五日　加藤三郎左衛門
山崎小右衛門

八月九日。御醫師藤井方亭の病篤きを以て人參料を下賜す。

〔成瀨正敎日記〕

八月九日

一、藤井方亭儀、先達而より相滯罷在候所、此頃重症に至り候付、久々御用相勤候者之儀、拜領物之儀快安より內存願之趣有之、類例等引合遂詮議相伺、左之通快安呼立申談。

人參代

一、金三千疋　　　　藤井方亭

右病氣不輕躰達御聽候。品々御用向相勤格別之儀に付、御內々被下之候事。

八月十一日。銀仲預銀手形を新札と交換すべき期限を延ぶ。

〔雜事日記〕

當時通用之銀仲預手形百目札並小割札共、當十月中迄に引替所ゟ指出、新札与引替可申旨、去九月一統申渡置候通に候。然處未引替殘多有之躰に付、當十二月中迄月延いたし候條、右限月迄不相洩引替可申。尤午年より右札通用指留候條、其心得可有之候事。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

八月十一日　　　　前田近江守

八月十三日。前田慶寧歸國せんとするを以て、德川家慶使を遣して物を賜ふ。

弘化元年九月廿三日の條參照

八月十三日

一、四ッ半頃より、如例追々上使之御沙汰之旨申上り、西丸御小人目附御先に而松平和泉守殿御越之旨、御本丸は少し跡に成、青山下野守殿之由夫々申上る。

一、九ッ半時頃下野守殿御城下り之御付人來、如例御先立坂井、筑前守樣御同道、御表御出被遊、筑前守樣御門前へ御出迎。相公樣には御門內へ御出迎、筑前守樣御誘引大書院へ御通、相公樣上使之御跡へ付被爲入。筑前守樣上意御拜聽、御拜領之御卷物二十御頂戴、上使御座被改候上御挨拶被遊、御勝手へ（如每度大書院溜也。）御入、相公樣御出、（是迄大書院溜に被成御座也。）上使衆へ御挨拶被遊、又御勝手へ御引取（大書院溜也。）被遊、御熨斗出候間に、船之間之方より裏通御小書院横御廊下へ御廻り被遊、筑前守樣には御熨斗引之候上御出御誘引、御小書院へ上使御座付之上御勝手へ被爲入、御多葉粉盆・御茶出、引之候後、筑前守樣御出御料理之御挨拶有之、御相伴被遊候故御着座。夫より御本膳等追々出、御指身臺相濟、向詰（御燒物之事也。）筑前守樣御持參、御同所樣へ向詰御給事人上之。御給事人引候上、相公樣御出御挨拶被遊、直に一と先被爲入、御盃事等相濟、御歸前に而御近習頭より御案內申上、重而相公樣御出、御濃茶御持參被遊。夫より追々相濟、御多葉粉盆出之、引之候頃相公樣裏通御先へ御式臺迄被爲入、御見合程能時分御門內へ御出

被遊、筑前守様には御多葉粉盆引候上御請被仰上、直に御誘引、如最前御門外迄御送被遊、相濟御兩殿様御入被遊候事。

〔恭敏公記史料〕

八月十三日。將軍遣青山下野守。許初就國。賜物世子。亦遣松平和泉守。賜物公。贈兩使刀各一口。

八月十五日。前田慶寧、登營して歸國の辭見す。

〔筑前守様御用留寫〕

筑前守様益御機嫌能被成御座候。一昨十三日上使青山下野守殿を以、御懇之被爲蒙上意、御國許へ之御暇從相公様御願之通被仰出、御卷物紗綾廿卷御拜領、從右大將様上使松平和泉守殿を以、被爲蒙御懇之上意、御卷物十卷御拜領。上使之御方々江御料理出、御盃事之上御道具被遣之。御退出後追付之御供揃に而、相公様御同道、兩御丸御老中方御廻勤被遊、萬端御都合能相濟申候。且又今十五日御暇之御禮可被仰上旨、昨十四日御老中方御連名之依御奉書御登城、於御白書院御首尾能御禮被仰上、御懇之上意、其上御鷹・御馬御拜領被成。相公様にも御登城、右御禮被仰上、御下り御同道に而西御丸御老中方御廻勤、筑前守様に者若年寄中も御廻勤被遊、御戻之上御溜において御前江被召、今日之御様子雖有思召候旨御意御座候。

先以重疊目出度御儀、恐悅御同意御座候。右之趣爲御承知申進候、以上。

八月十五日　遠江守等兩人　判

圖書等兩人樣

前田圖書等は前田慶寧の傳

八月十八日。前田齊泰の子利義及び利行、金澤郊外小立野口に行歩を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

八月十八日

一、甚五郞殿・豐之丞殿、今日小立野筋より末村邊爲御行步御出之儀昨日申來、則御出被成候事。

八月十九日。前田慶寧、江戶を發して歸國の途に上る。

〔官事拙筆〕

八月廿八日

一、昔九時頃、當十九日出到來江戶狀被廻、披見候處、筑前守樣益御機嫌能同日御發駕被遊候旨等申來候に付、御用番え恐悅申述、且互に申述候事。

〔成瀨正敦日記〕

八月二十日

一、御吉所巖驛迄昨日被遣淸水貞右衞門儀、夜前五ッ半頃罷歸、益御機嫌克被爲在候旨等申聞。則夜前申上置候旨等、山森より申聞。且席へ貞右衞門今日罷出、小幡・加藤より宜申上候樣申聞之趣等申聞候事。

御發駕之節御下屋敷迄御馬上。夫より御乘輿、戶田川御越。夫より御馬上に而巖へ御着七ッ過、七ッ半前同所御發駕之旨も申聞候事。

〔恭敏公記史料〕

八月十九日。駕發江戶。橫山隆章扈從。

八月廿一日。御醫師吉田長淑蘭學修行中なるも漢法を併せ行ふべきを命ず。

吉田長淑は二代目なるべし

〔成瀨正敦日記〕

八月廿一日

一、左之通將之佐へ被仰出相達。坂井奉

吉田長淑

右故道碩養子に罷成候以前、醫術漢學治療方心得罷在候由。依之當時蘭學修業中に付、熟練候ふで漢方之治療もいたし候樣可被申渡旨被仰出候。

右は御七探元・快安より、本人内存之趣等申聞候趣も有之、委曲申上候所右之通被仰出候事。

八月廿三日。金谷御殿に於ける前田齊廣後室眞龍院の居を松之御殿と稱すべきことを告ぐ。

〔官事拙筆〕

八月廿三日

一、左之觸狀添紙面共到來及返書候事。

眞龍院樣御住居金谷御殿与相唱候樣被仰出置候處、此度筑前守樣御國江被爲入候付、御同所樣御座所金谷御殿与唱、眞龍院樣御住居松之御殿与以後相唱可申候。此段一統江可申聞旨被仰出候事。

八　月

右之通夫々可被申談候事。

八月廿五日。金谷御殿の金谷門・七十間門内を二ノ丸の格に改むべきことを告ぐ。

〔毎日帳書抜〕

八月廿五日

一、金谷・七十間兩御門之内三之御丸格合に候得共、今般金谷御殿筑前守様御座所に相成、御門内手狹に付二御丸格合に相成候旨等、御城方に而申渡有之。

〔前田孝事日記〕

八月廿八日

一、御城方より左之書取演述之事。

御横目江

金谷・七十間兩御門之内三之御丸振合に准候へども、今般金谷御殿筑前守様御座所に相成、御門内手狹に而、供之人數込合可申候條、二御丸格合に召連候筈候事。

一、御用懸り人々挾箱、御座所入口御門前に相殘可申候。若年寄以上幷御同所様附之人々は、爲持候儀不指支筈に候事。

一、御同所様御着御當日、甚右衞門坂御門幷不明門往來指留候事。

右之趣夫々可被申談候事。

八　月

八月。金箔を江戸金箔屋以外より買入れて賣捌くことを禁ず。

〔箔方諸事舊記〕

控

一、江戸金箔屋之外、職人共より直相對を以、金箔類買入候儀は勿論、其外箔屑類買入、於自宅金箔製候儀、堅不相成事。

一、改印無之金箔類、商賣致間敷候事。

一、金箔類之儀、江戸金箔屋共より、仲間内取り引、安直段を以買入、且賣出し直段之儀者、金箔屋共去亥年中申立定書之通、可相心得事。

一、金箔類、江戸金箔屋誰々方より何程買入、何程賣出し候段、差引書毎年可差出候。

右之條々堅相守、聊心得違無之樣可取扱候。

巳八月

八月。石川郡熊走村の猿を追拂ふ爲筒藥の下附を命ず。

〔前田孝事日記〕

御異風裁許ゟ

一、二百目　筒藥

右石川郡鞍月組熊走村領へ猿多く致徘徊、作物喰荒し候に付、威鐵炮を以爲追拂候間、筒藥相渡候之樣相願、右之通承屆候條、改作奉行斷次第可被相渡候事。

巳　八　月

九月朔日。前田齊泰、登營の際作法を謬りたる小者を戒飭す。

〔成瀨正敦日記〕

九月朔日

一、今朝御登城之節、御挾箱持不斗心得違仕、中仕切より內御挾箱御先へ立參り、早速小頭心付御跡へ下り候へ共、尤御番人等より指留仕候儀に而も無之候へ共、右次第奉迷惑旨御挾箱持申聞候段、三十人頭より以御近習頭申上候。且右之次第、今日御供之組頭中川平膳より小左衞門迄申聞、尤御番人見咎候程之次第に而は無之旨等申聞有之。右迷惑之儀申上、一と通り以來之儀被仰出候而可宜哉之旨、御近習頭中より示談に付、何も如在も無之事に而、中川平膳よりも申聞候趣に候間、夫に而可宜旨申答。坂井奉。

九月六日。前田慶寧金谷御殿に着す。

〔前田孝事日記〕

九月五日

一、月番より左之通申來、應及返書候事。

筑前守樣益御機嫌能御旅行、前月廿六日高田、廿七日能生、廿八日糸魚川御止宿被遊候處、親不知・駒返等山ノ下所々波打付、道造之場所打崩、廸茂同日御通行不被爲成段追々及注進候に付、同日茂同驛に御逗留被遊候。然處同日親不知迄御横目見分被仰付候處、此通に而波茂治り候へば、三日之所は御通行可被爲成段申聞候旨等、昨夜遠江守より申來候。右之趣に候處、二日夕より山ノ下御通行御指支無御座旨追々及注進候に付、翌朝五時不遲之御供揃に而、右糸魚川御發駕、姫川幷山ノ下難所々々無御滯御越、夕七半時過泊驛へ御着御止宿被遊、御供人末々迄無異儀罷越申候。將又御泊付之通に而者、津幡より御着之筈に候得共、御逗留も被爲在候に付、高岡より追込御着可被遊旨被仰出、明六日曉八時前之御供揃に而、高岡御發駕御着可被遊旨被仰出候段、只今遠江守より重而申來候。先以恐悅御同意御座候。右に付明日一統揃刻限四半時に付、各に者九時過迄に金谷御殿へ罷出候間、其御心得に而御出可有之候、以上。

九月五日

九月六日

一、筑前守様御着に付熨斗目・上下著用、御饗方も有之に付、五半時過出席之上、兩人共金谷御殿ゟ罷出る。御問饗等夫々兼而伺置候通り、渡邊治太夫ゟ申談、出來候上見分之上引取。

一、八時過追々御付人來り、大橋御付人に而何茂御出向申候。基五郎殿・豊之丞殿夫前御出、御表御書院御溜ゟ被爲入、程能時分御式臺へ御出、被爲入候時分階下ゟ御出向被成候事。

一、當席暨御近習頭、何茂對談之間に而、被爲入候方を頭にして列座、御通之節平伏御意有之候事。

一、御著之上、夫々御作法通り相濟、追付之御供揃に而、御旅裝束之儘松之御殿へ被爲入、被仰置、無程御戻り被遊候。

〔見聞袋群斗記〕

九月六日金澤ゟ御着殿なり。金谷御殿御普請被仰付御住居なり。金谷御殿と相唱候樣被仰出。御奥は眞龍院樣松之御殿と御一集なり。

〔成瀬正敦日記〕

九月七日

一、暮合御殿より呼に來、坂井氏被罷出候所、筑前守様前月廿八日糸魚川御止宿候所、風雨

兩人は側用人大野織人外一人

松之御殿は前田齊廣後室の居る所

本文は江戸に於いてなり

に而姫川滿水に付、翌廿九日・當朔日御逗留、翌二日川明きに候へ共、右二・三日之風雨に而、駒歸・親不知高波、御道造候所々損候而御通行御指支に付、同日も糸魚川驛御逗留、同日假御横目永原長之助見分に被遣候所、翌三日には御道筋御指支無之由也。右之通御逗留に付、二日同所に罷在候町飛脚早飛脚に而、同所より御書被上候に付、右御殿へ會所より指出候付、當番佐藤より當席之內呼に被越候由。依而右御書入破封被上之、坂井氏引取。且當席へ小幡等より之御用狀は、夜に入會所より相屆候付、遂披見候所、右御逗留之儀等夫々申上り、且三日五時之御供揃に而糸魚川御發駕、五日高岡御泊より、六日直に金澤御着之御圖り之旨も被仰出候旨等も申上る。

九月六日。今明日金澤に盆正月を行ふ。

〔御家老方等諸事留帳〕

九月二日

一、昨日之廻り物に、當六日・七日町中御着之御祝・御緣組之御祝に盆正月相願、承屆之段達有之。

一、盆正月先達而より殊之外張込强躰相聞候付、以前も有之振を以、當春之盆正月より不長樣申渡有之筈。

九月廿二日。前田慶寧初めて學校に臨む。

〔官事拙筆〕

九月廿二日

一、出席之上筆筒番より申聞、今昔筑前守樣九時御供揃に而、學校江初而御出被遊候。仍之伺公に一人申合可參、御用番被談候由。

一、昔九半時過出座人等相揃候旨御横目より申聞候上、其段以紙面被申上、追付返昔も到來。八時比金谷御出之案内に而、主附助作州殿御式臺正面御唐紙際に被出、御附方遠江守殿等三人は横御上り口際に列座、御先立若年寄式部殿階下、其外御附頭等夫々出居。助右衞門・內記殿は御廣間之方右御敷臺階上つゞき敷居際に伺公。後ゞには督學御横目等伺公。且其外今日之會讀出座人揃罷在候。無程御馬上に而被爲入、御玄關前御下乘、主附助之前に而御中座御意有之。益御機嫌克奉存恐悅候旨作州被申上候。夫より直經武館江被爲入、御跡より作州殿初參り、御上段際江如例伺公。此節未御襖は明不申候へ共、作州殿稽古場板之間御上段前邊に而中座被致候故、同樣にいたし候。且又御附方三人は伺公所は同樣に候へ共、御供に而直御跡より被參候事。

一、夫々列座伺公之上御襖明き、則松本流劍術等有之。名昔上候人々御覽之上、明倫堂江被

爲入候。夫より同處御襖明、入學生會讀御聽聞、御廣間內御進みに付、主附初進み出、少筋違に着座伺公。暫有之、御廣緣方席ゟ御進みに付、又々座を替御障子を正面に筋違に伺公。暫有之、鳥渡御上段ゟ被爲入、御襖立候事。

一、夫より重而經武館ゟ被爲入候に付、主附初同處御廊下際に伺公、御通之上最前同樣御襖明き候上、筒井流居合稽古名書之通夫々御覽被遊。相濟、御襖立て主附初何れも退去、最前之通御式臺階上等ゟ夫々伺公、則彼是夕七半時比直に御歸館被遊、萬端御都合能相濟申候事。

〔恭敏公記史料〕

九月廿二日。臨明倫堂經武館覽諸士講文武。是後屢臨。

九月廿七日。前田慶寧、石川郡粟崎•宮腰に行歩を行ふ。

〔前田孝事日記〕

九月廿六日

一、執筆簞笥番より左之達紙面、同役連名に而指越、筑前守樣明後廿七日四時之御供揃、御鷹野之振に而爲御行歩七十間御長屋御門通、不明門、堤町、尚書橋前田牽次郎屋敷前通、英町、折違橋、宮腰口町端より御出被遊、大野村領、新川橋御越被遊、五郎嶋村領松原通御旅屋に而御小休、同所御旅屋前より御船に被爲召、御船小屋迄御出、夫より御上り、濱通宮腰

ゟ御出、中山主計方御小休、往還通右御同様御道筋御戻可被遊旨被仰出候條、此段御達申候、以上。

九月廿五日　　　　園田一兵衛

中川八郎右衛門様

九月廿八日。前田慶寧學校に臨む。

〔前田孝事日記〕

九月廿八日

一、今日筑前守兩學校ゟ御出被遊候。御附方城州殿外年寄中一人、御家老方萬之助殿、若老式部殿被出候筈也。句讀師會讀・馬術之由也。

十月二日。前田慶寧、齊廣後室眞龍院を招請す。

〔諸事要用雜記〕

十月二日

一、今日金谷御殿へ眞龍院様初御招請に付、御慰御小謠等就被仰付候。八時より聽聞罷出候様、御附頭より御近習頭迄此間申來居、則今日上下着用罷出、於御稽古所素謠・一管一調被仰付、聽聞、御禮御附頭へ申述。且又御餕之御吸物頂戴可被仰付旨御膳方申聞、則頂戴、御

禮比良左内へ申述候事。六時過退出之事。

十月三日。疱瘡・水痘の患者を有する諸士の出勤を戒む。

〔雜事日記〕

筑前守樣御疱瘡未被爲濟候に付、御家中之面々家內疱瘡病人有之候者、三番湯懸候迄者、金谷御殿幷松之御殿・二ノ御丸江罷出候儀遠慮可仕候事。且又御番人等御目通江罷出候儀相控可申候。

一、疱瘡病人は、相見江候日より三十日相立候者、肥立次第罷出相勤可申候。

一、御水痘茂未被爲濟候に付、御家中之面々家內水痘病人有之候者、湯三度相濟候迄者、金谷御殿・松之御殿江罷出候儀遠慮可仕候。二ノ御丸江罷出候儀は不及遠慮候得共、筑前守樣御表江御出之節は、御目通江罷出候儀相控可申候。

一、水痘病人は湯三度相濟候はゞ、肥立次第罷出相勤可申候事。

右之通被仰出候旨、遠江守等演述候條、可得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申談候、以上。

十月三日　　前田美作守

十月四日。御醫師吉田長淑等、前田齊泰の診察御用を命ぜらる。

〔成瀬正敦日記〕
十月四日
一、左之兩人診御用被仰付候樣仕度、診御醫者人少故願候与申に而は無御座、姫君樣診御用御住居御番被仰付置候故、公儀御醫師衆等折々相公樣御樣子被尋候事有之節、未診不申与申候而は、彼是不都合迷惑之筋も有之候間、何分診御用被仰付候樣仕度旨探元申聞候付、相伺左之通り中川平膳へ以紙面申談候事。

吉田長淑
藤井方朔

藤井方朔は方亭の子

右相公樣診御用幷御藥調合之節、相見被仰付候條、此段可有御申渡候、以上。

十月四日

追而誓詞十一日与申談。文略。

十月八日。前田慶寧學校に臨む。

〔前田孝事日記〕
十月八日
一、筑前守樣學校御出、請順先に付九時出宅致し候。學校惣御奉行近江守殿、年寄中助右衛

門殿、御家老手前御附方庄兵衞殿、若老式部殿被相詰候事。
一、明倫堂より被爲入、直に經武館において南保虎之助劒術御覽。夫より明倫堂江被爲入、入學生幷易學御聽聞相濟。夫より又經武館江御出、中島速平居合御覽被遊、七半時頃御戻り被遊候事。
但、明倫堂に而句讀師會讀御聽聞之筈に候得共、先達而御出之節之者どもに付、右席江者御出無御座候事。
一、兩學校に而伺公所等之儀者、先代之節繪圖も有之、當時相違無之、委曲右繪圖に委く記有之事。
一、會讀等御聽聞之節、御上段より共席江御出被遊候。御見臺出居、御毛氈を敷無之候事。

十月十六日。仁孝天皇の皇子胤宮薨去せしを以て、前田齊泰その奉弔に關して幕府の指令を受く。

胤宮は是歲十月二日薨去

〔近教日記〕
十月十七日
一、胤宮樣御逝去に付、禁裏御機嫌御伺之儀、以御先例御月番江御伺書御指出置之所、御先格之通たるべく旨、御付札に而昨夕御渡。筑前守樣御伺方も、御前より御伺書御指出置之處、

於京都御伺被成候様、御付札に而是亦昨夕御渡。右に付京都詰人を以、禁裏・東宮・准后・女院御機嫌御伺、筑前守様御伺方御所司代江詰人を以御伺之儀等、夫々可申遣旨、御用人より伺有之候事。

十月十八日。前田慶寧、横山遠江守の下邸に臨む。

遠江守は横山隆章

〔筑前守様御用留寫〕

十月十八日

一、今日四時之御供揃に而、同半時頃御出、左之通御道筋に而、遠江守下屋敷江御立寄被遊候事。

金谷御門より廣坂、石引町通、經王寺横助右衛門下屋敷・横山政次郎同心組屋敷之間御通、被爲入。

一、遠江守・大膳儀、今朝六半時頃下屋敷江罷越居候處、五半時頃左之人々追々御先詰に罷越候に付、遠江守等罷出及挨拶候上、間之内を始爲致見分、家來用人松山彦太夫より御附頭江爲引渡候處、追付御縮付候之事。

但、御附方執筆兩人幷坊主兩人・小遣一人朝より相詰候事。

一、四半時過經王寺横附人來候に、遠江守・大膳門前江罷出居候處、追付御出御意有之、直に

中門通式臺ゟ被爲入候に付、兩人共御次に扣罷在、御附頭より相圖之上、遠江守儀御のし持參上之候事。

一、遠江守・大膳儀、生御肴一折充木地臺・目錄相添、以小右衞門献上仕候事。

一、無程遠江守・大膳一集に、小右衞門御前ゟ被召候に付、罷出候處、目出度与御意。且又今日御立寄に付、左之通被下之候段御意に付、今日は天氣相も宜、益御機嫌能御立寄被遊、御懇之蒙御意難有仕合奉存候旨、御請申上退去。

紗綾三卷、御廣蓋居　　遠江守

御のし

縮緬二卷　　大膳

御のし

一、右相濟、一先下小屋詰處ゟ退罷在候處、庭中ゟ御出、遠江守被召連候旨、以小右衞門被仰出候付、罷出、御先立仕、品々御意有之、應御受申上、相濟被爲入候事。

一、重而兩人ゟ御肴一折充、以小右衞門被下候に付、當座に御禮申上候事。

一、御膳被爲濟候上、追付別亭ゟ被爲入候御樣子に付、遠江守罷越居、大膳儀は勝手に相詰罷在候處、無程御供に而御入被遊、其節左之通別亭において御手自拜領被仰付。

御釜　　　一口、箱入

御印籠　　一　同

右御印籠者、大御所様より御拜領之由也。

一、別亭に釜懸置候處、御慰に手前被仰付候旨に付、遠江守儀相勤、指上候主膳江被下之、同處に心得仕置候御菓子等榴重三入御覽候處、直に爲御持に相成。相濟、夫より馬場江被爲入候に付、遠江守・大膳儀馬乘袴に相改罷出、兩人之乘馬御覽被遊、相濟御入之事。

一、七時過以主膳、兩人共御前江被召候に付、罷出候處、御菓子・御吸物・御酒等品々御饅御前において頂戴被仰付。且又今日方々樣より被進候御重菓子之內一組兩人江被下之。相濟、退候上以主膳段々之御禮申上候事。

一、暮頃益御機嫌能御戾被遊候に付、遠江守等門前江罷出候儀等最前之通り候事。

〔前田孝事日記〕

十月廿一日。前田慶寧、河北郡森下村附近に行步を行ふ。

十月廿日

一、筑前守樣明廿一日四時之御供揃に而、森下村邊江御鷹野之振に而爲御行步御出被遊候旨、御附頭より主付迄申來候段、執筆より申越候事。

十月廿二日。前田慶寧學校に臨む。

〔前田孝事日記〕

十月廿二日

一、筑前守様學校へ御出被遊候。最初於經武館平井次右衛門方劍術御覧、夫より明倫堂江被爲入、入學生會讀御聽聞。又武學校江御出、松本寶三郎方柔術御覧被遊、七半時過御戻被遊候事。

十月廿四日。金澤横堤町より出火す。

〔故紙雜鈔〕

一、弘化二年十月廿四日曉天七時前、横堤町より出火、左之町々燒失、朝四時前頃鎭火におよび候。家數等町奉行中へ達に相成候由、致借用寫置候事。

覺

一、二百五十八軒　　類燒家數

内十軒　　下堤町

外に火元下堤町淺地屋長左衛門方に而、店借池島屋善助。

内一軒支配違　津田隨分齋

十一軒　横堤町　同　御門前西町

二十四軒　御門前靑艸河岸　二　軒　惣構十間町橋番人

二　軒　惣構十間町橋番人借地

一　軒　惣構せかい橋橋番人　二十七軒　十間町　内一軒　米中買集所

二十五軒　山崎町　五十軒　上近江町　内一軒　魚問屋

四十三軒　下近江町　十八軒　下近江町三番町

二十五軒　博勞町　二　軒　同借地

六　軒　尾張町

〆

一、二軒　下堤町半燒　一、三軒　御門前西町半燒

一、一軒　せかい橋橋番人同　一、一軒　同借地半毀

一、二軒　山崎町半毀　一、五軒　博勞町同

一、一軒　尾張町同　一、三ツ　上近江町土藏

一、一ケ所　下堤町木戸　一、二ケ所　十間町木戸

一、一ケ所　山崎町木戸　一、二ケ所　上近江町木戸

一、二ヶ所　下近江町木戸　一、一ヶ所　博勞町木戸
一、一ヶ所　尾張町木戸　一、一ッ　下堤町番小屋
一、二ッ　上近江町番小屋　一、二ッ　下近江町同
一、二ッ　十間町、同之內一ッ半燒　一、一ッ　山崎町番小屋
一、一ッ　博勞町番小屋　一、一ッ　尾張町同
一、一ヶ所　十間町橋半燒

右今曉下堤町出火類燒家數等如此御座候、以上。

巳十月廿四日　肝煎　庄九郎等八人

〔江守氏筆記〕

一、當十月廿四日之火事に中買座燒失に付、南町疊屋九郎兵衞方に有之候事。

〔成瀨正敦日記〕

十一月五日

一、前月廿四日曉七ッ時前、金澤橫堤町下の方之廉之次髮結鳥屋より出火、最初之內北風烈しく、橫堤町兩側より燒立、十間町南側八半過森良齋隣迄、北側は不殘燒失。近江町は過半、

今町齋田後之方二・三間、北之方は石浦屋五郎左衛門隣、尾張町は片側三度之相角迄、博勞町白尾屋小路迄、堤町は木屋孫太郎へ少々懸り燒失。昼四ツ時頃鎭火におよび、風は西之方南之方へも廻り、後は山風に而吹返し止り候由也。

〔成瀨正敦日記〕

十一月十一日

加州金澤城下燒失之覺

一、二百七十三軒　町家

内　十三軒　毀家

一、三ツ　土藏

一、十一ケ所　木戸

一、十一ケ所　木戸番所

一、一ケ所　橋

右は前月廿四日寅の刻町家より出火、巳の刻火鎭申。燒失家數等書面之通御座候、以上。

巳十一月　御名

〔故紙雜鈔〕

一、弘化二年十月十間町火事之節、安田治部左衛門横へ道具出し置候者、道具に火移り不殘燒申候。富田も右之道具に火移り候に付、餘程危く御座候。併土藏之屋根は燒候得共、土藏に而隔、長屋等江は付不申候事。

〔官事拙筆〕

十一月廿七日

一、此間江戶表より、先達而下堤町より出火及大火候節、横堤町より十間町之間に惣構有之處、右惣構橋之所橋番之外に橋之左右家建有之候へ共、外惣構に右樣之所は無之、平生爲立退候儀は可及迷惑儀に候得共、此度致燒失候事に候間、是以後橋之左右家建之儀は爲指止可然与被思召候間、猶更申遣遂僉議候樣被仰出、別紙繪圖も到來に付、右被仰出之趣有之旨申聞相尋、家建有之候儀何ぞ謂も候哉、且立退方之儀も遂詮議相達候樣町奉行江申聞可然哉与、昨日播州も被申聞候旨に付、今日呼出坂井忠左衛門江別席に而、前段被仰出之趣も有之候間、猶相尋候處、先日以來私共も如何之譯に而家建有之哉与申合候儀も御座候。被仰出之趣も御座候はゞ取拂候共可宜、尙更得与詮議仕、何与か可相達之旨申聞候事。

十月廿八日。前田慶寧學校に臨む。

〔前田孝事日記〕

十月廿八日

一、今日九半時より筑前守樣武學校江御出、平井次右衛門方劍術、關左近方劍術、八島龍藏方劍術、絹川久左衛門方馬術、何茂入情達者之分御覽被遊候。七半時過御戻り被遊候事。

十一月四日。金澤木新保御畑の柹木を竹澤に移植する件に關し指令に接す。

〔諸事要用雜記〕

十一月四日

一、木の新保御畑柹木等竹澤へ移替之儀伺被仰出、則小笠原等江申渡置候處、大木之分は移替候而も育立兼、人力を費し候而已に付、大木之分者來春接穗に被仰付、小木に而引寄易き分は隨分生育も可仕付、來春移替可被仰付候哉与、重而恒三より申聞。則江戸表へ相伺候處、夫々書面之通と伺被仰出候旨、十九日出に申來候事。

十九日は十月なり

十一月八日。今明日前田慶寧金澤城内を巡視す。

〔前田孝事日記〕

十一月六日

一、筑前守樣明後八日天氣次第、九時之御供揃に而御城內御見分可被遊旨被仰出段、御附頭岡田長次郎より申越候に付請取遣候事。

〔前田孝事日記〕

十一月八日

一、筑前守樣明九日天氣次第、九時之御供揃に而、御城內御見分可被遊旨被仰出候段、御附頭山崎小右衞門より申越候に付請取候。右に付同役中江廻狀、一昨六日之通也。

〔諸事要用雜記〕

十一月十二日

一、筑前守樣御城中御覽之儀、當八日・九日兩日夫々御見分相濟候由。尤其節右奉行より屆有之、先便及言上候事。

十一月十二日。昨今兩日前田宗辰の百回忌法會を天德院に取越執行す。

〔官事拙筆〕

九月廿四日

大應院樣百回御忌御法事、當十一月十一日・十二日江御取越御執行に付、非常之大赦可被仰付旨被仰出、公事場奉行等江夫々申渡候。且又流刑・閉門・遠慮等之者も、御宥免之御沙汰可

有御座旨被仰出候事。

九　月

〔雜事日記〕

大應院樣百回御忌御法事御取越、來月十一日・十二日於天德院就御執行、御射手・御異風稽古幷諸組弓・鐵炮稽古之儀、御法事初前日より御法事中相止可申事。

一、鷹野其外諸殺生且又鳴物之儀、十日より十二日迄三日可有遠慮候事。

一、普請・作事之儀、十日より十二日迄指止可申事。

但、指急候普請等之儀者不及遠慮候事。

右之通被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

十月廿二日　　　奧村助右衞門

〔雜事日記〕

來月大應院樣百回御忌御法事御執行之節拜禮刻限等、十二日未の刻より申の刻迄。

右之通候條、刻限無相違樣可被相心得候。且又下乘より若黨一人・草履取一人可被召連候。尤家來不作法無之樣、嚴重可被申付候。

一、山門に而刀・扇子爲持置、御寺玄關上り口横疊二疊目にて可有拜禮候。

一、煩・指合等に而難被罷出人々は、來月七日迄書付を以可有御案內候。且又指懸り病氣等に而難被罷出候はゞ、拙者御寺江相詰罷在候間、同所江紙面を以可有御案內候。

一、服之儀熨斗目・布上下着用之筈に候。服紗小袖等着用之儀御勝手次第に候。

右之趣被得其意、御承知之驗御判形候而先々江相廻、落着より可有御返候、以上。

十月廿三日　　　　中村帯

〔官事拙筆〕

十月五日

一、御施行札下書御右筆より指出候由。右は御先例之通に付、此通調筆之儀可申談旨。

御施行札下書寫

於玉泉寺當月十一日・十二日施行米被下候。十一日朝五時より八時を限り男乞食等之やから、十二日朝五時より八時を限り女或幼少之乞食非人可相集者也。

巳十一月

〔官事拙筆〕

十一月十一日

一、御寺不指支、御法事始可申哉之旨寺社奉行申聞候に付、其通及指圖。辰刻御法事始り、

本文は前田慶寧のことに係る

物御奉行始諸處江罷出候。屛風間角二疊目頭之方江着座、少し下り作州等着座。其外寺社奉行・御奏者番・諸頭緣側に列居也。追付相濟、引續き候而寶圓寺幷瑞龍寺代僧諷經も有之。四時過相濟、溜江退出候事。

一、巳刻御法事相始可申哉申聞、其通及指圖。追付晝四半時過頃右同斷、無程相濟候事。

一、午刻御法事餘程有之相始、右同斷。追付相濟、各溜り江退去、彼是八半時頃之事。

一、右今日御法事無御滯相濟候に付、寺社奉行方丈・座見僧追々恐悅に出候事。

〔官事拙筆〕

十一月十二日

一、御法事濟寄楞嚴遶行五段之內三段目之比、金谷御殿御附頭江以紙面申上置候。前段御名代御燒香相濟、各溜江引取、餘程有之金谷御出、廣坂邊御出・大音帶刀邊・岩倉寺邊三ヶ處見番追々來、帶刀門前御通案內之頃に而、各每々有之通御出迎罷在。無程御參詣、御裝束之間江被爲入に付、助右衛門・遠江守儀も階上最前上堂之節出處邊進出、引離着座。御香爐之火宜旨寺社奉行遠州江相達、同人竹田市三郎御裝束之間入口に罷在候處、被進候而演說。則市三郎より申上、追付御出筑前守樣御燒香被遊、一先御溜江被爲入候に付、助右衛門・遠江守階下最前之處江罷出居候。追付御戾、御作法書之通階下に而和尙江、昨今大儀与御意有之。遠

州被蒙御意忝被存候旨御取合被申上、則御戻遊候事。

〔溫敬公記史料〕

十一月十二日赦。

十一月十二日。江戸廣德寺に前田宗辰の百回忌法會を執行す。

〔成瀨正敦日記〕

十一月十二日

一、今日於廣德寺、大應院樣百回御忌御茶湯御執行に付、五ッ半時頃施餓鬼初り候旨御案內申上、四ッ時御法事濟寄、御參詣御指支無之旨重而御案內申上候付、四ッ一分御出御燒香等被遊、四ッ八分五厘御歸殿被候事。

御參詣は前田齊泰

十一月十三日。諸士に對する借知の率を減ずべきことを告ぐ。

〔諸事要用雜記〕

十一月十三日

一、今日御借知等之內被返下候趣、左之通被仰渡。

御勝手向連々御難澁至極に付、追々增御借知被仰付、別而天保八年より三箇年半知茂被仰付、其後茂御借知被仰付、何茂可爲難澁儀御心外に付、少に而も御連方御手輕にも相成候はゞ、

被返下度思召に候得共、近年稀成不作、或は御上金、其外彼是不時御費用茂打湊、追々御出増に相成、御省略之儀は其廉も不相見得、總様御不足之處は御調達而已を以繰合候事故、御借財者次第に相嵩、當時不容易御勝手振に而、中々御借知等被返下候所に而者無之候得共、御家中茂益難澁之様子被聞召候に付、格別之思召を以、今般御借知幷御役料知等御借上之内、當年一作別紙割合之通被返下候旨被仰出候條、猶吏人々手前遂儉約、勝手取續候様心懸可申候。

右之趣被得其意、組・支配不相洩様可被申渡候、以上。

十一月　　　　　　奥村助右衛門

御借知等一作被下候割合

一、二百石迄　　　　　　全

一、二百十石より二百九十石迄　　半高

一、三百石より九百九十九石迄　　三箇一

一、千石より二千九百九十石迄　　四箇一

一、三千石以上　　　　　　五箇一

一、御切米等之分も右割合を以被返下

一、御役料知等之分、自分知七百九十九石以下全、八百石已上は是迄之御借上之半高當り被返下。

一、平士以下足輕之分も、一作之儀に付代銀圖りを以被返下。

但、頭分手替足輕等之儀は是迄之通に候事。

十一月廿五日。大雪に付き往來の取除を命ず。

〔雜事日記〕

頃日俄に深雪に至り候處、武士屋敷並町家共往來雪除方等閑之場所茂有之、往來指支候躰に付、早速雪取除、道幅廣いたし、往來不指支樣可相心得候事。

右之趣一統可被申談候、以上。

十一月廿五日

御横目〻

但十七日・十八日・十九日雪降五尺計積。

〔小木貞正献本〕

深雪之折柄に候條、來年禮二月〻懸相勤可然候。且又深雪に付、武士屋敷幷町家共、早速往來道幅廣いたし候樣等、先達而申渡置候處、追々雪取除方等出來之躰に候得共、打續積候故

に候之哉、中に者今以道狹き場所も有之候之條、尙更近邊申談、無油斷早速致道廣、往來不指支樣可相心得候。

右之趣一統可被申渡候事。

十 二 月

十二月十四日。白山銅山を廢したるを以て、その主任たりし者に與ふる慰勞金額を議す。

〔成瀨正敦日記〕

十二月十四日

一、白山銅山今度御指止に付、主付罷在候彌十郞・宗藏へ被下方、辰之助に爲相しらべ候所、似寄之例も申聞候に付、今度は出役もいたし候故、左之通可被下哉与伺候樣、內狀に申來伺遣す。

一金三百疋宛

木村彌十郞

倉岩宗藏

十二月十七日。能登に於ける幕府領を無年限に加賀藩預領とし、從來の

施政と收納方法を改むべきことを告げらる。

〔成瀨正敦日記〕

十二月十七日

一、昨夕阿部伊勢守殿御勝手へ此勝手へ御呼出は少し間違も有之哉。闘番御呼立に付、定助・井上要人罷出候所、左之通御書付・御書取兩通御渡之事。

卷目之上御名

御　名

御預所之儀、是迄政事向私領同樣、御取箇永定免皆金納之處、以來外御預所並之通可被心得候。

御別紙に

以來無年限に而御預被成候事。

十二月廿二日

一、昨日荒井殿へ富永御進物之御使相勤候節、御預地之儀猶又御内談におよび候處、御内慮之趣阿部殿へ御内談之儀御支も有まじく旨等被申聞。依而其段申上、今日阿部殿へ脇田御書取致持參候筈之事。

十二月廿八日

今晩阿部殿御勝手へ聞番御呼立に而、御預地之儀無年期御預に被仰付候儀は、早速御國表へ被仰遣可被仰渡。是迄之通り被成置度旨御願立之儀は、春に至り御沙汰も可有之旨、御口達に而被仰聞候旨、聞番罷歸申上候事。

〔諸事要用雜記〕

舊臘廿九日出內狀中要々左之通。

一筆致――

一、御預地之儀に付被仰渡之趣、先便內々早々申上候。無年期与被仰渡候儀は御願通候得共、政治向私領同樣永定免皆金納之儀は、以來外御預ヶ所等並之通御心得被成候樣被仰渡候儀、誠に御存外之儀御當惑に而、御政治向御私領御同樣与申所改り之趣下方へ申渡候儀、誠以不容易儀に付、御僉議之上早速阿部伊勢守殿へ被伺、御內意之趣御書面御差出に而、右御差圖御座候迄は下方へ申渡之儀御見合成候儀は相成間敷哉と被仰達置候處、昨廿八日夕阿部殿へ聞番被召呼出、御勝手不急度御達を以被仰聞は、無年期御預所与申儀は、早速御國許へ可被仰渡、御書面を以被得御內意候趣は、御國許へ被仰渡儀先被控置候樣可仕、春に成何与か御沙汰有之べく旨被仰渡候段聞番申上、先々少し御緩に相成宜段奉存候。先便內々得貴意

候趣、未表發無之事故、爲御心得旁其段乍御用多中爲渡得貴意候。外は期來陽候、以上。

十二月廿九日　坂井

成瀬

大野等

十二月十八日。徳川家慶、老中をして前田慶寧の寒中の安を問はしむ。

〔筑前守樣御用留寫〕

御奉書寫

一筆令啓達候。公方樣・右大將樣益御機嫌能被成御座候間、可御心易候。將又寒氣甚付而、無異在之候哉被聞召度思召候。此旨可相達由、依上意如此候、恐々謹言。

十二月十八日　戸田山城守忠溫

青山下野守忠良

牧野備前守忠雅

阿部伊勢守正弘

松平筑前守殿

〔恭敏公記史料〕

將軍使老中奉書訪寒中起居。世子有此事特例也。遣馬回頭謝。

十二月十八日。前田慶寧學校に臨む。

〔前田孝事日記〕

十二月十八日

一、九時御供揃に而武學校ゟ筑前守様御出被遊候に付、主付代美作守・年寄中助右衛門幷大膳、御家老方兵部、御附方庄兵衛、若老式部罷出相詰。七半時過相濟御戻之事。

一、弓術吉田左門、劒術笠間義左衛門、鎗術加藤増之丞。右何も當時入情達者に仕る者御覧之事。

本年八月十一日の條參照。

十二月。銀仲預銀手形の引換期限を更に延ぶべきことを告ぐ。

〔雑事日記〕

當時通用銀仲預手形百目小割共古札之分、當十二月中迄納替可申、來午年より通用指留候段先達而相觸候通に候。然處當月中通用之古札無據引替方相後、來正月ゟ相殘候分茂可有之哉に付、右等之分は春に至候而も引替可相渡候條、其段相心得、尤無油斷引替可申事。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩様可被申渡候、以上。

十二月　本多播磨守

正月朔日。前田齊泰、江戸城に登り年頭を賀す。

〔成瀬正敎日記〕

正月朔日

一、上々樣益御機嫌克御超歲被遊候事。

一、今朝六つ時之御供揃に而、懸流六つ半鎌に而御出御登城、九つ半頃御歸殿表御式臺より御作法書之通被爲入候事。尤西御丸へも御登城被遊候事。

一、今朝御登城に付、御待請四つ時過与被仰出候旨、御近習頭中より廻状有之候事。

一、今日御禮人頭分以上五つ半時揃之旨、舊臘御横目より廻狀有之。服熨斗目・半に而供廻りいつも之通り、但小將一人は上下着用御庭口より出る。四つ時前より出席いたし候事。

正月三日。前田齊泰、上野の東照宮等に詣づ。

〔成瀬正敎日記〕

正月二日

一、左之通相伺御近習頭に申談、御香一炷相渡す。

明三日五半時不遅之御供揃に而、上野御宮幷惣御靈屋御參詣、御本坊御勤、夫より廣德寺江御參詣可被遊旨被仰出候。

御宮へ御參詣に付服御改に候。常照院御立寄無之、御裝束は於廣德寺可被召替候。

正月三日

一、昨日之御供揃に而、五つ八分過御出、九つ前御歸殿被遊候事。

正月十五日。本郷邸の火見櫓・長屋等類燒す。

〔成瀨正敦日記〕

正月十五日、快晴

一、夕七つ時前白山御殿跡出火之旨板入、無程見直し近板入、御近火に相成、烈風に而火勢强、暫時大火に相成候。夕七つ半頃か御庭へ御出、高山より御覽被遊但御供人は御式臺へ相廻り居候。御供人御持柄迄御居間先二枚開へ相廻候付、當席奥取次等御側廻りも刀を帯御居間へ引出橋より相廻る。に付、當席も罷出候樣御意に付御供に出る。暫御覽被遊、御入被遊候所、追々火勢强、本鄕通りへ火出、大御門前三度之邊火懸り候付、御屋敷內御巡見可被遊旨被仰出、御供人表御式臺前へ相廻、表御式臺より御出、御門前に暫被爲入、夫より大御門脇二枚開へ御入、中御門前通中之口御門より奥之口御式臺より御入之事。

正月十六日

一、左之通御用番青山殿へ御届方、將之佐より被相伺、伺之通与被仰出候事。

昨十五日夕本郷丸山邊より之火事に而、御名本郷上屋敷南之方火之見櫓一ヶ所、同所續內長屋一筋、且又南門續外長屋六間計、曁本郷木戶際辻番所一ヶ所類燒仕、人馬怪我無御座候。此段御屆申上候、以上。

正月十六日　　　　御　名　內

〔見聞袋群斗記〕

正月十五日本郷丸山より出火にて御藩邸之南火之見櫓御類燒なり。外御別條なし。大火にて佃嶋迄燒延るなり。

正月廿四日。前田慶寧學校に臨む。

〔官事拙筆〕

正月廿四日

一、今晝學校經武館稽古爲御覽筑前守樣御出に付、九時過爲伺公罷出候。奉行助は播磨守被相勤。其外伺公大勝・內記、御附方に而圖書、若年寄式部も被出候事。

一、不指支段每之通御案內申上り、返書も御附頭より到來之上、晝八時頃御馬上に而筑前守樣御出、御白洲に而御下乘、夫々例之通伺公、委曲は略之。直に經武館江被爲入候に付、御

跡より罷出、如例御上段横列座伺公之事。
一、夫より萩原勘太夫方組打稽古相始、畢而敷物等取拂、不指支上山崎六左衛門・山崎岩之丞方劒術稽古相始、畢而左右御障子取拂候上、水越五郎左衛門方鎗術稽古も有之候。且右者何れも入情達者之人々に而、則彼是夕七半時過相濟候事。

嘉永四年十一月廿七日參照

二月八日。金城靈澤の碑石を江戸邸より發送す。

〔成瀨正敦日記〕
二月八日
一、金城靈澤之御碑石、金澤表へ船積に而被遣候付、舊臘會所奉行へ遂僉議置、幸伊豆船之內八百石積、金澤より大坂へ爲御登米積受に向候船有之に付、右船頭へ相渡積越候筈之所、此頃出帆爲致候旨に付、今日右碑石御庭口より車積に而引參り候事。
惣運賃三十七兩相渡候事。

二月八日。德川家慶、前田齊泰に放鷹に依りて獲たる鶴を贈る。

〔成瀨正敦日記〕
二月八日
一、九つ時前か、御城當番坊主より上使彌之御沙汰之旨申越候旨、聞番より申上。

一、九つ時過上使伊奈熊藏之旨、御城へ附置候者罷歸申聞候旨、聞番より申上る。且又御城坊主連名之紙面も從跡入御覽。

一、夫より暫有之、御横目所より申談有之、何れも上下着用いたし候事。尤服紗也。

一、九つ半頃歟、御小人目付より御案内申來、申上り候由。

一、八つ時前御城下り之御附人御案内申上り、追付御表御出、水戸橋通候付水戸橋之御案内も申上、本郷三丁目之御案内に而御式臺へ御出、上使御見懸に而御式臺階下、御式臺より御右之方ゟ御出迎、御誘引被遊、大書院ゟ御通、上意御拜聽、御鷹之鶴之所ゟ御進御頂戴。（但右鶴は上使より少し前に御到來、御玄關に御使番兩人出迎受取、聞番先達に而大書院へ持出罷在、御頂戴被遊、上使御着座被改候間引入。）御自分御挨拶相濟、被爲入、（大書院溜に扣被遊候。）御熨斗・御火鉢・御多葉粉盆出候上、重而御出、御菓子、御挨拶被遊御入。御取持衆御相伴に而御菓子出、御吸物・御盃出一通、御銚子引候上に而御引茶御持參、被爲入。御相伴へは御給事人濃茶・薄茶迄。不殘相濟候上、御取持衆より御請被仰上候樣御挨拶に而御出、御請被遊、直に御誘引に而上使御退出、最初御出迎之所迄御送、上使乘馬之上御引被遊、御勝手座敷御取持衆（坊主溜）・備後守樣（御小書院溜）与御逢、相濟被爲入候事。

一、上使衆御盃事は御斷之旨聞番より申聞、申上置候事。

崩御は正月廿六日にあり二月六日御發喪

二月九日、松平加賀守のもとに使して、御鷹の鶴を贈らせらる。

二月十日。幕府、仁孝天皇の崩御を告ぐ。

〔成瀨正敦日記〕

二月十日

一、主上御不豫之所、御養生不被爲叶、去六日被遊崩御候旨京都より申來、今日御書付出候。御樣子之旨、戸倉善佐より內々申越候旨、聞番より申上る。御書寫も指越候旨に而上る。伊勢守殿御渡、大目付ゟ

主上御不豫之處、御養生不被爲叶、去六日被遊崩御候に付、爲伺御機嫌、明十一日惣出仕之事。

但、西丸ゟも惣出仕之事。

二月十一日

一、前段之御供揃に而今朝五つ半時過御出、兩御丸御登城被遊、九つ八分御歸殿之事。御服御服紗・麻之御樣子也。

一、主上崩御に付、昨十日より十四日迄五日、普請・鳴物遠慮之旨、今曉小屋觸あり。

二月二十日。仁孝天皇崩御せしを以て金澤に於いて本日より五日間普請・

同役は家老

鳴物の停止を命ず。

〔御家老方等諸事留帳〕

二月廿日

一、左之廻文同役一統江月番より來。

今月六日主上崩御に付、普請・鳴物御停止之旨等、大御目付衆より御書付到來之由に而、同十二日不時立町飛脚歩を以、將之佐等より別紙寫之通只今申來候に付、普請・鳴物等今廿日より廿四日まで日數五日遠慮候樣、一統相觸申候。此段爲御承知申進候。則別紙寫壹緘相廻可被申候、以上。

二月廿日　　奥村助右衛門

今月六日主上崩御に付而、普請・鳴物一昨十日より十四日迄五日御停止之旨、大御横目衆より御書付を以申來候に付、寶暦十二年七月之振を以、御屋敷中夫々申觸候。其表之儀者前々之振を以可有御申觸候。右御書付寫進之候條、右之趣眞龍院樣初御申上可被成候。右に付不時立町飛脚歩を以申進候、以上。

二月十二日　　將之佐等兩人

美作守樣

追而於其表も、寶暦之節諸殺生・普請・鳴物等五日遠慮之儀に申渡候旨返書に申來居候。此段爲御承知申進候、以上。

〔若年寄方御用留〕

二月廿日

一、去る六日主上崩御に付、於江戸左之通伺濟に而今日飛脚到來、三十人頭・御横目・御鷹匠小頭へ申渡、今廿日より廿四日迄五日之間鳴物遠慮、御鷹御殺生控申渡候事。

主上去六日被遊崩御候に付、普請・鳴物昨十日より當十四日迄五日御停止之旨御書附相渡候に付、御屋敷中鳴物等五日遠慮之儀申渡候旨昨日將之佐より演述仕候に付、御殺生方等相控候様申渡候。依之相しらべ申候處、寶暦十二年七月、安永八年十一月主上崩御之節、鳴物遠慮日數之通此表・金澤共五日宛御相控申候間、今般茂昨十日より當十四日迄日數五日御殺生方相控候様可申渡旨奉存候。於金澤も鳴物遠慮日數之通御鷹等相控候様可申遣哉と奉存候。猶更奉伺候事。

二月十一日　　本多大學

二月二十日。幕府、仁孝天皇の崩御を弔し奉る爲香奠を献すべきことを命ず。

二月廿一日

一、先帝御諡號被上候迄は、於京都は先帝与可奉稱旨、京都御沙汰書に相見え、此表御作法書に而は、大行天皇与可奉稱由之事。崩御に付、御香奠白銀二十枚於京都可被指上旨等、昨日御書附相渡候。右に付禁裏御踐祚有之候故、東宮様を禁裏与奉稱に而、御書中にも其通也。御機嫌御伺、且御香奠御備之御使者物頭も京都江被指出候付、御所司代酒井若狹守殿江之御書、幷禁裏附明樂大隅守殿・渡邊筑後守殿江御連名之御書、都合御書兩通、當廿三日之御日附に而出來、御用人立會校合、入御覽、今日將之佐江御渡。右は於金澤御使人江御渡に相成、且御使人は來月五日・六日頃發足之筈之上、且右御使人へ御渡之御口上書は、御用所に而出來上候付、入御覽、是亦今日將之佐へ御渡に相成候。右之趣今便申遣候付、御席に而今日へ相延有之候由也。

一、筑前守様より御香奠被献候儀、御家に御先例無之に付、昨日御用番阿部殿へ、聞番を以御伺書御指出置之事。

二月廿二日

一、先帝崩御に付、四品十萬石以上より御香奠、幷禁裏爲伺御機嫌京都江使者被指出候様、當廿日御書附相渡候所、筑前守様より御献上等之御先例無御座に付、相公様より御用番阿部殿江昨朝御聞番御伺書御指出置之所、昨夕阿部殿江聞番御呼立に而、御香奠幷御機嫌伺之儀、

於京都被成御伺候樣、御伺書に御付札に而御渡に付、右御伺書等御覽濟、御用人江相渡す。

二月二十日。金城靈澤の碑を石川郡大野浦に回漕することを江戸會所に上申す。

〔諸事要用雜記〕

二月廿日

以書付御願上候

一、御碑石一本 長五尺六寸 幅四尺六寸 厚一尺五寸 同形此目方凡 四百貫目程。

右御碑石、今般此表より御國許大野浦迄御積廻し御座候付、右廻船大野着船仕、同所御役所江御屆奉申上候はゞ、同御役所より村役人被仰付被成下置、元船より陸揚迄之艀下船、幷事馴候人足三十人程御差出し、無遲滯水揚相成候樣奉願上候。且右艀下舟賃幷人足賃等、多分之儀不申樣被仰渡有之樣被成下置度奉存候。尤御大切之御品に御座候得者、大野着岸次第急速水揚被仰付、水揚相濟出帆被仰渡候得者、江戸御廻米御積所江差向候付、大野に而滯船無御座候樣奉願上候。依之此段以書付奉願上候、以上。

弘化三年二月　　佃屋文治

御會所

二月廿五日。仁孝天皇崩御せしを以て、前田慶寧奉悼の使者を幕府に派遣す。

〔官事拙筆〕

二月廿四日

一、筑前守様より御機嫌伺之御使者有之に付、御渡之御書五通、竹田市三郎席に指出候に付、受取、御用人大屋武右衛門相招渡之候事。

〔加藤三郎左衛門御用部屋日記〕

一、右御使者澤田秀之助明日發足之様、此間御用人より申聞、則相伺、窺之通被仰出候に付、夫々御使書等も出來之上、頭弓岡亮左衛門　澤田秀之助誘引、交名相唱候に付、相招、盆に載候儘御使書等渡之、彌明日可致發足候。御書者御用人より直に受取候様申渡候事。

二月廿四日

一、主上崩御に付、公儀に御伺御機嫌之御使、御大小將澤田秀之助明日發足に付、罷出御用相伺候付、御用無之段申遣候。且御渡之御書、竹田氏越後屋敷へ持參、御用番へ被相達候。

御本丸　　西丸　　若御年寄　　大奥

右一通宛。

二月廿六日。前田慶寧、金澤城二ノ丸を巡視す。

〔諸事要用雜記〕

二月廿六日

一、先達而被仰出候通り、筑前守樣今日御居間廻り等御覽に付、九時前より大村氏被罷出、拙者儀は風邪に付不參。九半時之御供揃に而同刻過御出、奥之口より御上り、御居間書院に暫御待合、肴次郎御先立に向候而御出被遊、御近習頭詰所前より御居間廻り夫々御覽、御膳所も御覽、夫より蔦之間御廊下通御表へ御出被遊候。蔦之御間御廊下仙人之御杉戸外より、御城代播磨守殿御先立之事。

一、重而蔦之御間御廊下通り御入、御居間書院へ御溜、御供廻り被仰出、此時仙人之御杉戸之内御附方に而御先立、夫より追付奥之口より御戻り。

但、御出入共御近習頭始御式臺階上へ罷出候事。

御居間御覽之節、播磨守殿・美作守殿・圖書殿御供被致候事。

〔恭敏公記史料〕

二月廿六日巡二丸城。

二月。懸作高を本村に取返す場合に故障なからしむべきことを告ぐ。

〔郡方御觸〕

天保八年高方御仕法之刻、懸作高取返方之儀被仰渡、追々本村ゟ可取返旨等委曲申渡置候通に付、寄々取返候向茂有之候。然處元直段不相知分者、當時之直段に可取返儀に付、懸作人に而者過分之代銀申張、取人者又格別直安く買返可申与申張、彼是遲滯に相成、或者取返之村方に而、取人共せり合申分いたし、又者懸作人賣をしみ候。彼に寄せ是に託し申延などいたし、煩敷及申分候族茂有之、懸作高買返之儀申出候とも、兎角不果敢相聞、甚以不相當沙汰之限に候。高代銀之儀抔者、大体並合茂有之儀、双方實意を以示各、五ヶ村役人加詮議候へ者、速に相辨筈に候條、已來取返方申出候はゞ、彼是遲滯無之樣急度可申渡候。將又組裁許においても、無謂詮議延々に相成候向も有之哉に相聞、難心得儀に候。取人共せり合候儀抔者、豫而申渡置候趣も有之儀、遲滯に相成儀先は無之筈に候。尤入組難相辨分者、早々申聞可請指圖候。乍然取返度趣申出、無謂遲々におよび候族も有之候はゞ、詮議之上品に寄急度曲事に可申付候。

右之趣得其意、一統不相洩樣早速可申渡候、已上。

午　二　月　　　　改　作　奉　行

諸郡御扶持人・十村中等

二月。御郡奉行、海邊手當の爲輪島出張所及び遠見番所の位置を定む。

〔郡方御觸〕

御算用場奉行ゟ

異國船渡來之節海邊御手當方御用に付、御郡奉行輪島出張所并遠見番所等出來方之儀に付、御郡奉行紙面等取立追々被指出、詮議之趣被申聞候。依之右出張所、別紙繪圖之通輪島に被仰付候。

一、遠見番所之儀、福浦者別冊圖書之通出來、輪島崎は是迄之燈明堂に建添、是亦別冊圖書之通出來、金剛崎は山伏山に在之燈明堂に而相辨候儀に被仰付、敷物代等御渡可在之候。

一、宇出津鐵炮稽古場等、并同所に役所形相建候儀、別紙繪圖之通出來被仰付候。

一、留書足輕之儀、出張中二人宛爲相詰、且引拂後小遣迄に而者締方茂不行屆に付、留書一人宛爲相詰、小遣之儀も兩人召仕度旨、御郡奉行申聞候通承屆候。右小遣百姓等之內召仕、一人三百目宛被下候儀、是亦承屆候。右出張所等、宇出津役所取毀候古木相用、別紙外作事方圖書之內、雜用引去所方引請出來に被仰付候。出張所式臺与申茂、指出迄に而相辨候得者、尙又御入用可相減旨御郡奉行申聞候由に候間、共通相心得、惣体御入用減方尙更精誠遂詮議、出來之儀可被申渡候。則別紙繪圖等六品相渡候。出張所等引高之儀者、最初被申聞候与者地

元相減候間、改而被書出可被申聞候事。

三月三日。前田齊泰の行列、江戸城和田倉門附近にて阿部伊勢守の先驅と衝突す。

〔成瀬正敦日記〕

三月八日

一、昨夕阿部伊勢守殿御勝手へ聞番御呼立に付、脇田平之丞罷出候所、當三日御下城之節、和田倉御門邊に而混雜之儀は御承知可有之、右は思召も有之儀に候哉、御尋申候樣伊勢守殿申候旨、公用人を以被申聞候付、平之丞何等承知不仕事故、如何之時宜に候哉与內々公用人へ承り見候へ共、品は不申聞、同所に而阿部殿御行逢之節混雜いたし候儀之旨に付、猶更供方之者致僉議候上及御答可申上旨申述罷歸、其段以奧取次申上、いづれ御尋も有之事に候得ば、不取敢明朝御挨拶之御使相勤可申哉之旨相伺、今朝相勤候筈之旨等古屋申聞に付、其時宜相尋候所、今朝よりも其節御供之表小將へ承り見候所、御下城之節水戸樣之跡へ越前守樣、其跡へ御引續に而桔梗之方御出之所、阿部殿大手之方御越御進みに而、越前守樣之横へ御並被成、和田倉御門御通り、夫より横に御通可被成所、越前守樣御人數之內切れ不申故御見合

に而、此方樣御箱之先へ御通り懸り之所、御箱持見合不申故、阿部殿御家來御箱持之棒端押へ候故、三十人小頭罷出、道具に手を御懸被成なと申て、少し押返し候樣にも相聞得候へ共、格御駕籠脇よりは得与見得兼候。右に付混雜はいたし候へ共、毎もか樣なる事は折々有之、御供頭別目に懸り候程之事は見受不申旨。猶又御供頭等聞糺有之候はゞ可相分哉之旨に付、御供頭江僉議之儀申談置候所、人見・九里相同じ申聞有之候は、段々新番・御歩・三十人頭等得与承糺候得共、前條之時宜に而指て御無禮成程之儀は無御座。併阿部殿与申儀は其節何れも心付不申故、其節御歸之上何等も不申上。且是程之混雜は毎も有之事故、其節譯而申上候程之儀とも不存、御横目よりも一と通り混雜いたし候旨及言上置候族に而、御供方僉議いたし候得共、何等替り之事も無御座旨等申上り候付、其段申上置。

三月六日。前田齊泰、仁孝天皇の崩御を弔し奉る爲使者を金澤より發す。

〔近敦日記〕

三月廿八日

一、仁孝天皇へ御香奠白銀二十枚御進献之御使者、大組頭田邊左兵衞儀、當月六日金澤發足、同十五日京着、翌十六日於泉涌寺御進献相濟、同十八日徳大寺殿邸に而、禁裏・女院・准后樣御機嫌御伺之御使者相勤候旨等、詰人より當十九日立正六日便に而申越候紙面等、入御覽候

事。

一、右同様に付、筑前守様より御香奠御進獻等之儀、諸人を以御所司代被御伺之候所、御香奠白銀三枚以御使者御進獻被成、禁裏初御機嫌も御伺被成候樣御指圖に付、國元より使者指立候而は日延に相成候得共可申遣哉、此表詰合之者を以可被指出哉之旨も相伺候所、御勝手次第と御指圖に付、同十八日德大寺殿亭へ、禁裏御初御機嫌御伺之御使者奧村典膳相勤、同十九日泉涌寺御香奠御進獻之御使者も典膳相詰候旨、是亦夫々言上、御用人より入御覽候事。

三月七日。前田齊泰、增上寺參詣の際の宿坊を淸光寺に定む。

〔成瀨正敦日記〕

三月七日

一、增上寺御參詣之節、御宿坊以前より通元院之所、先住代文政十二年正月か不埒之申上方有之に付、當分淸光寺へ御宿坊御賴置に而相濟來候所、先達而より通元院へ如元被仰付候樣仕度旨、同院幷外坊中よりも每度願之趣有之候得共、先其儘に相成居候所、當四日增上寺方丈より御使僧を以、如以前通元院へ御宿坊之儀、同院幷坊中願之通被仰付候樣。淸光寺儀は申談方も可有之旨に而、御賴之趣申來居候。依而何とか御答御使を以可被仰遣儀に付、御用

人・闘番へも遂僉議候所、通元院に相成候時は、當時院中大破にも相成居候事、指當御手當過分に可相成、只今清光寺何等御指支も無之事に候間、先此儘相成居候而可宜与示談治定に付、其段申上相伺候所、先清光寺に是迄之通り可被成置旨に付、右之趣增上寺之御口上御用人より相伺、大小將御使に而今日被仰遣候。

三月十二日。前田慶寧、學校に臨む。

〔官事拙筆〕

三月十二日

一、今日經武館稽古御覽之內、吉田三家的も初而御覽に付、射場伺公處等繪圖も有之候へ共、猶更罷越何れも見置、左之通着座處等及示談治定。九半時前不差支旨督學より申聞に付、如例以紙面申上置、追付返書も到來、御出案內有之上、夫々每々之出處江罷出居候事。

一、追付晝八時前、御馬上に而筑前守樣學校江御出、御白洲に而御下乘、奉行助前に而御中座、御意有之。益御機嫌克恐悅奉存候旨申上候。夫より直經武館江被爲入、御跡より罷出、夫々如例御上段横着座、稽古不差支旨御横目申聞、加藤三郎左衛門江申述、申上り、追付御襖明、石丸彌太郎・越山一丞方稽古御覽。中程に而明倫堂講書不差支趣右同斷に付申上置、前段稽古濟寄に而御襖建則稽古爲止、各御先江參り、明倫堂續御廊下際伺公、御通之上御上段

際ゟ各着座、講書相始候旨申上、御襖明、則經書講之、助教加人西坂常人也。濟寄、經武館不差支旨又々申上置、無程相濟御襖建、前段之處ゟ伺公罷在候事。

一、夫より重而經武館ゟ被爲入、都而右同斷。則木村喜右衞門方劍術相始、濟寄射場不指支之旨申上置、無程相濟御襖建候に付、着座處改め、障子を向ふにし、同處御上段際に振替り其儘に而着座、御通之上御跡より罷出、射場御上段御障子際に奉行助御杜角邊に少しひずみ着座、作州等は少し下り眞直に着座伺公、其外夫々出所等略之。竹田等之內は奉行後ゞ方に着座也。則吉田左門・吉田左近右衞門・吉田平助方弟子的御覽、二手充也。三家三切に而、入情達者等之分相濟候處、重而御好之御樣子に而、御射手等其外出座之人々的御覽。右は御横目ゟ直に竹田等內より談有之躰。夫々相濟、御横目より相濟候旨申聞候故、其段は竹田等內ゟ申述、申上候。畢而階上等ゟ如例何れも罷越居候。無程直に御戾被遊候事。

三月十四日。前田慶寧、江戸に向かひて金澤を發す。

〔公私日錄〕

三月十四日

一、六半時過出席、服紗小袖・上下。

一、御供之竹田氏等五時出宅被相揃候。

松之御殿は眞龍院の所居

本文は江戸に於いてなり

一、御膳被爲濟、御上下に而五つ時過松之御殿へ被爲入、御伺御機嫌被仰上、御盃事被遊候御樣子に候。暫有て御戻り、於御用之間拙者共被爲召、畢而於御居間相公樣御附使者之御近習頭被爲召、御直答、御附頭誘引相濟、遠江守・庄兵衛被爲召御意有之。夫より御留守に相殘候主膳・三郎左衛門被爲召、御緣頰ゟ罷出、益御機嫌能被遊御發駕恐悅奉存候段申上る。無事にと御意有之。御請申上退去。指續松田平之助等御留守に相殘り候御附頭何茂一同被爲召、御意等同前。右以前基五郎殿・豐之丞殿爲御見立御出に付、御逢之儀被仰進、御附頭御先立、於御居間御對顏、御熨斗御側小將差上之。姬君樣御附使者河野四郎右衛門呼置、御出御直答、御先立自分、御使者誘引、御附頭相濟御入、基五郎殿等無程御退被成候。

一、五半時過御旅裝束に御改、松之御殿へ爲御暇乞御出。御供數御平生御城內之御供數に而、何茂旅裝束也。御出之節御發駕御供廻被仰出候。松之御殿に而は御對顏、御熨斗被進、無御手間取追付御戾り被遊候。右御出御戾り之節、基五郎殿等階上內より左之方へ御出被成候。

一、御供相廻り、年寄中等御玄關前ゟ被罷出、夫々宜所に而申上り、四つ二步益御機嫌能被遊御發駕候。

〔成瀨正敦日記〕

三月廿一日

一、筑前守樣當十四日御發駕に付、同日不時立足輕早飛脚今日到來、右ニ傳封之旨に而小幡・松之御殿御附頭・二御丸御廣式頭より之紙面三封、幷今石動驛より高田より之傳附、割場奉行より夜五つ半時頃迄越、受取遣す。小幡よりは、筑前守樣十四日四つ時之御供揃に而、四つ二分益御機嫌克御發駕被遊候旨等申上り、高田よりは暮頃今石動御着被遊候旨申上等也。依而御近習頭中迄御紙面爲持遣、入御覽、坂井氏へも承知に申遣す。

〔成瀨正敦日記〕

三月廿七日

一、筑前守樣御儀、當十八日より泊驛御逗留、十九日・廿日も姫川等御指支、廿一日御指支無之旨申上、同日曉天七つ半時泊驛御發駕、山下難所々々御越被遊、姫川御越被遊候處、追々增水いたし候に付、御人數全越不申內御使馬迄は越候由指支、市三郎等・圖書殿も持鑓等從者少々迄越渡り、御道中奉行は兩人共相殘、御人數三分二計は相殘候由。同日糸魚川御泊、翌日殘御人數御待合に而、同驛に御見合被遊候內、晝後迄に追々不殘姫川越來候へ共、御發駕御指支、同驛に御逗留被仰出候旨。依而宿觸飛脚指立候付右に傳附、右之趣共竹田等より言上、御道中奉行よりも言上、尤圖書よりも被申上、將之佐より入御覽候事。

〔成瀨正敦日記〕

三月晦日

一、筑前守様當廿五日善光寺驛迄御着被遊候所、犀川・筑摩川出水、御渡船御指支に付、俄善光寺驛不時御泊被仰出、翌廿六日・廿七日も減水いたし不申に付、善光寺御滯留被遊、明日川明之樣子も未相知れ不申旨等、廿七日同所より町飛脚・早飛脚步に而今朝到來。右委曲竹田等より申上。右に付朔日御着之儀は相成不申故及言上候旨、且御道中奉行よりも申上候。且筑前守様より御書も被上候事。

〔成瀨正敎日記〕

四月二日

一、筑前守様前月廿五日俄に善光寺様御止宿被遊候所、同廿八日迄御逗留、廿九日犀川・筑摩川共追々減水いたし、御渡船御指支無御座に付、同廿九日九時之御供揃に而同驛御發駕、兩川無御滯御通行、八半時矢代驛江御止宿被爲遊。右に付御泊附先達而之通御繰延、來月五日夕御着可被遊旨被仰出之旨等、竹田等より言上、御道中奉行よりも同樣言上。其外奉札御容躰申上り等も到來、夫々御近習頭中迄爲持遣、入御覽。

〔御家老方等諸事留帳〕

三月廿二日。富山侯前田利保の江戸上屋敷災に罹る。

三月廿九日

一、當廿二日曉、出雲守樣江戸表御屋敷御廣式長局より出火、御住居向不殘御燒失之由富山より申來る。

是月は大盡なり

〔諸事要用雜記〕

三月晦日

一、當月廿二日不時立早飛脚、廿七日より廿八日迄糸魚川に逗留、今日到來左之通申來。今晩八時過、下谷茅町稻荷邊出火与近板打候處、無程出雲守樣御屋敷內より出火之旨及屆、御同所樣、御廣式下部屋より出火、御住所向不殘御燒失、御屋敷內御鎭守等者此方樣御人數を以消留、御長屋等者相殘候由。備後守樣に者風筋不宜候得共、格別風も無御座ゆゑ御屋敷中御別條無御座旨。壽正院樣早速御立退、御本宅御廣式江被爲入候所、六時過及鎭火候に付無程御戾り被遊候。右に付御前御差扣之儀、今朝御用番戸田山城守殿へ御伺被成候處、卽刻不及其儀旨被仰渡候。尤當御屋敷中聊御別條無御座候。相公樣御初方々樣、御機嫌御指障も不被爲在、恐悅御同然奉存候。右に付今日□時前□不時立町飛脚早飛脚步被差立、前段之趣其表方々樣へ年寄中より被申上候筈に付、譯而御次より不被仰進候間、是等之趣爲御承知申進候、以上。

備後守は大聖寺侯前田利平

三月廿二日

大野・等　　坂井

〔見聞袋群斗記〕

三月廿二日。富山藩邸御焼失、金二千兩御使にて被遣。

三月廿七日。加賀藩所藏の和蘭字書を藤井方亭の遺子方朔に貸與す。

〔成瀨正敦日記〕

三月廿七日

一、御藏本蘭書之左之二部、藤井故方亭借用罷在候所、せがれ方朔儀も同樣借用仕置度旨相願候付、一と先返上爲致、其段申上借用被仰付候付、方朔へ相渡す。

はるま　　全二冊

ひゅぶねる　　全二冊

右二部共字書之由。

四月五日。前田慶寧江戸に着す。

〔成瀨正敦日記〕

四月五日

一、筑前守樣益御機嫌克八つ鐘下御着被遊、中之口御式臺より御上り、御溜へ被爲入候上、當席被爲召候付、小左衛門罷出候所、御着御案內、御機嫌御伺之御口上被仰上候付、小左衛門申上、追付御前御居間書院へ御出、（上之口より御出、御先立主税。）御着座（御刀持、御先立共御入口に扣罷在る。）之上、（小左衛門四之間左へ相廻り居。）小左衛門を以御對顏可被遊旨被仰進、御居間書院御敷居之外より二疊目位御出、御禮被遊、內へと御挨拶之上、御敷居之內へ御着座、（此節御敷居外に而御佩刀御取被遊候。）御挨拶、御のし上之、御禮被仰上、御のし引候上、御同道之儀被仰進、上之口より御見物所通り御同道、御住居江御入被遊。

四月六日。御郡奉行、金城靈澤の碑の石川郡大野湊に到着したることを報ず。

〔諸事要用雜記〕

四月六日

一、先達而舟積を以被遣候御碑石幷御手水鉢等、夫々到來之旨御郡奉行より屆有之。

但、御碑石者兼而申談候通、明日竹澤へ持屆候筈に申來、且御手水鉢者九日に指出候儀申談候事。

同七日

一、御碑石重目に而今日は御庭へ持屆兼候段申來、昨日小笠原へ申談置候に付重而右之趣申

弘化二年十二月條の參照

談る。

同九日

一、御碑石到來之儀、今便申上候筈に候得共、未見分も不致に付、當十一日天氣次第見分之儀小笠原へ申談置、本便及言上候筈也。

但、到來之趣執筆迄爲申遣置候事。

四月八日。銀仲預銀手形の引換期限を延ぶ。

〔雜事日記〕

當時通用之銀仲預手形百目札幷小割札共、古札之分引替方當正月ゟ殘候分茂可有之に付、共分者春に至候而も引替可相渡旨、去る十二月申渡置候所、今以引替殘茂有之躰に付、當五月中限古札不殘引替可申候。最前より數度月延茂申渡候上之儀に候間、右限月過候而引替指出候共不承届候條、其段相心得無油斷引替可申候、以上。

四月八日　前田近江守

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

四月十三日。徳川家慶、前田齊泰に就封の暇を賜ひ且慶寧の出府せしを勞す。

將之助は將之佐

〔溫敬公記史料〕

四月十三日。將軍遣戸田山城守來賜休暇。右大將亦遣山城守。

〔恭敏公記史料〕

四月十三日。將軍遣老中戸田山城守來勞。兼許溫敬公之就國。招請溫敬公景德夫人喬松君命囃子。

四月十五日。前田齊泰登營して就封の辭見し、慶寧は參府の禮を行ふ。

〔續德川實紀〕

四月十五日、月次の賀例のごとし。尾張中將宰相に轉ぜらる。松平加賀守就封のいとま賜ひ、御鷹・馬を下さる。加賀守家人長將之助・前田圖書拜謁す。

〔溫敬公記史料〕

四月十五日。登城謝之。長將之佐・前田圖書謁將軍。

〔恭敏公記史料〕

四月十五日。同溫敬公登城謁將軍。爲參府給暇也。

〔官事拙筆〕

四月廿四日

一、今晩御用番より被差出候左之江戸來狀、添紙廻狀共到來に付、遂披見致承知書等相廻候。

別紙左之通。

一筆致啓達候。一昨十三日以上使戸田山城守御國江之御暇被仰出、白銀・御卷物御拜領。白

右大將樣も御同人を以御卷物御拜領。昨日御老中方御連名之依御奉書、今日御登城被成候處、

於御座之間御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、御手自御熨斗鮑御頂戴、御鷹・御馬御拜領被成、

重疊結構成御儀目出度恐悅之至奉存候。委細之儀者以御書被仰出候御樣子に御座候。將又將

之佐・圖書御供に被召連候處、於御黑書院御目見被仰付、其上御卷物拜領仕、御威光故与難

有仕合奉存候。

右之趣爲可申進如此御座候。恐惶謹言。

四月十五日

長將之佐

前田兵部

前田圖書

遠江守等十一人樣

四月十七日。金澤淺野水車町より火を失す。

〔官事拙筆〕

四月十七日

一、今晝八時過水車町より出火、次第に大火に及び候。右同斷に付以使者出席斷、御用番江相達候。當月御用番は痔疾に而不被出、助作州被勤、承知之由。且今日出席各風邪等に而不被出、併遠江守父子は被出候由。右火事鎮火は夜五時過頃、尚委曲類焼家數等別記に有之事。

〔故紙雜鈔〕

一、弘化三丙午年四月十七日晝八時前、淺野水車町越中屋喜十郎方同居人平野屋茂右衛門後家とよと申者より出火。

〔故紙雜鈔〕

一、弘化三丙午年四月十七日晝過、淺野町水車より出火、夜五時頃鎮る。風强く、其上組屋敷えんしやうに火移候哉、直に大樋金くさり橋迄焼抜、今一口は大衆免すなはせ邊少し殘り、七曲の小路上土藏作り之家を限り留る。下本通りのこらず焼失、裏卯辰邊山の麓は大抵のこり申候。

一、其頃之風說、丙午年故火はやく用心可致旨に而、則廿一日丙午の日故、家々屋根へ水を洒ぎ申候。

一、右火事前十六日之夜、月之出以之外赤く御座候事。

一、十七日右火事中夜六時過、又々他に火事有之由かまびすし。火消所々太鼓を打申候。併是は餘り長火事ゆゑ、人數一返引上げ候分、又押出候に付太鼓打申候由也。

〔故紙雜鈔〕

一、弘化三年四月十七日馬場六番町より出火、類燒家左之通。八時出火、暮過及鎮火候事。

覺

一、千百九十七軒　類燒家數

内十五軒　水車町　内八軒　支配違
十八軒　立川町　内五軒　同
三十七軒　下牧町　内六軒　同
七十三軒　中牧町　内八軒　同
二十六軒　上牧町　内三軒　同
四十九軒　同中通り
四十九軒　同横町
二十五軒　同西町

二十六軒　同穴町　内二軒　支配違
二十九軒　七曲り
五十軒　龜淵町　内二十一軒　同
二十八軒　井波町　内二十二軒　同
十四軒　淨光寺前
二十二軒　心蓮社門前　内六軒　同
十二軒　善導寺門前　内六軒　同
百廿一軒　山の上町　内二軒　同
二百十四軒　春日町　内三軒　同
十一軒　寶藏町　内二軒　同
六十八軒　上田町　内七軒　同
六十四軒　森山町　内七軒　同
十三軒　山下町　内一軒　同
二十九軒　談議所町　内十軒　同
七十一軒　大樋町　内一軒　同

御支配違百四十二軒
外三軒　毀家　二軒　半毀　六つ　土藏
二ヶ所　番所　三ヶ所　木戸
右私裁許類燒如斯御座候、以上。
四　月　兵次郎次助
市郎右衞門孫六

覺

一、二百四十一軒　類燒家數
內三　軒　公事場足輕組地　四　軒　前田式部殿家中
三　軒　武士屋敷　四　軒　寺　庵
二十六軒　御仲間組地　十一軒　町附足輕組地
三十二軒　中　組　四十一軒　大　組
二　軒　御小人組地　五　軒　御坊主組地
二十三軒　大衆免村　十四軒　山上村

五十八軒　談議所村　一　軒　町附足輕組續割場
右私共裁許之外、他支配地類燒家如斯御座候、以上。
午四月十八日　肝煎四人

〔日用雜記〕

一、四月十七日晝九つ半時過頃淺野川馬場六番丁邊より出火いたし、大衆免皆燒申候。夫より金屋町・高道・山の上町・春日町茶橋より金くさりの橋迄の內半分兩方共燒申候。其夜五つ時火事鎮申候。且六つ時頃火消中ゟ御横目中より引揚之樣被致指圖候に付、被引揚候處、玉井賴母樣火情强く被見請候に付御出馬有之候。生駒右膳樣・寺西要人樣等右同樣御出馬有之候。其夜五つ時頃御引揚之由。但三千軒餘茂燒失いたし候風說に御座候。

〔每日帳書拔〕

四月十七日

一、大衆免町家より出火、及大火、奉書火消申渡候事。

四月十八日。前田齊泰、江戶を發して就封の途に上る。

〔官事拙筆〕

四月廿六日

一、夜前御用番より被差出左之江戸來狀添紙に而四時過到來、致承知書等相廻候事。

相公樣益御機嫌能、今十八日晝九時前御發駕被遊候。依之中飛脚を以申進候。

右之趣眞龍院樣初御申上可被成候、以上。

四月十八日　　　　前田兵部等兩人

前田近江守樣

〔溫敬公記史料〕

四月十八日。駕發江戶。五月三日到于金澤。扈從長將之佐。

〔官事拙筆〕

五月朔日

相公樣當廿七日糸魚川に而御逗留之御樣子に付、昨廿八日魚津附同心共を以泊驛迄指遣承合候處、姬川洪水に而岸崩、暫昨朝より追々山之下親不知・駒返り高波に相成、昨日之處茂糸魚川御逗留に相成申候御樣子之旨、魚津同心之者早飛脚到着仕候に付御屆申上候、以上。

午四月廿九日　　　　富田織人

前田美作守樣

〔官事拙筆〕

五月二日

昨廿八日糸魚川より申進候通、相公様益御機嫌能御旅行被遊、姫川出水に付御逗留之處、次第減水御渡船御指支無之に付、今朝五半時之御供揃に而糸魚川御發駕、姫川幷山之下難處々々無御滯御越、七半時泊驛江御着御止宿被遊候。御供人末々迄無異儀罷越申候。先以恐悦御同意に御座候。將又來月三日曉八時之御供揃に而、高岡御發駕可被遊旨被仰出候。尤御泊附者先達而相極候通に御座候。此段眞龍院様初江御申上可被成候。今晩山本修理より早飛脚差出候に付傳封此段申進候、以上。

四月廿九日　　長將之佐

前田近江守様

四月二十日。先の火災により困窮する者を收容して粥を給す。

〔官事擔筆〕

四月廿二日

一、町奉行水原清五郎・坂井忠左衛門別席に而、今度類燒之者共之內小前之者共飢に至候躰に而、居候處も無之難儀仕候様子に付、大衆免町・高道町・春日町三ヶ所に一昨日より救小屋を建、粥を爲焚爲給候處、人高千人餘に相成申候。併是より人多に可相成躰にも無御座、追

缺字は虫喰

々細くゝり拵いたし居住仕候者も御座候。此段一應達置候旨に而、人高覺書も差出、則受取書添爲致右同斷之事。

〔諸事要用雜記〕

四月廿四日

一、左之通町奉行持參口達に而も申聞に付、今日急便内狀を以申上候事。

當十七日水車町より出火烈風に而大衆免等・高道町筋より大樋町迄歟千軒餘燒失仕。右ヶ所は小前者多、常々救置候者不少御座候處、今度甚急火に而道具等持運候間茂無御座、過半皆燒候樣子に而、指當致方茂無御座、不便之爲躰に付、早速御救方之詮議仕、先十日夕より粥焚相渡申候。千軒建候内困窮者四百五十軒計御座候。粥相渡候人高昨日迄之所一日千七百人計に御座候。近年材木等高貴、其上先達而堤町等大火後別而直段も引立、大工日用等手張申候に付、本通筋相應之家すら急に假圍茂仕得不申体御座候。尤難澁者に而細くゝり小屋茂仕得不申、便り申身寄等之者茂無御座者共は、右小屋へ入置申儀申渡、小屋不足も仕候得ば建增茂仕圖御座候得共、大抵夫々便りヶ所等御座候哉、右小屋入仕候者は人少に御座候。是迄救方には家持之者迄に而、同居借家人へは救方無御座振に御座候得共、今度之儀は□詮議仕右等茂一躰に粥相□不仕、先只今之處指當□有御座間敷哉与奉存候。

候儀茂御座候得共、[ ]之儀御序を以被仰上可被下候事。

四　月

水原清五郎
坂井忠左衛門

四月廿四日。建築材料の價格を低廉ならしむべきことを命ず。

〔每日帳書拔〕

四月廿四日

一、近頃材木類其外繩蓆抔直段以之外引上、御家中等へ雇候日用賃錢抔も過分に引上候樣子相聞候。無謂右樣之族有之間敷儀候條、引下げ相應之直段を以商賣等いたし候樣、町奉行等へ申渡候事。

四月廿六日。前田齊泰の子利義・利行、石川郡白山宮に行步を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

四月廿六日

一、今日恭五郎殿・豐之丞殿白山ゟ御行步御出被遊候。折惡敷降に成候事。

四月。宮腰町奉行里見亥三郎、錢屋五兵衛の船頭に渡海免狀を與ふ。

〔宮腰町内記〕

加州手船宮腰町錢屋五兵衞才許船頭・水主共九人乘、永代渡海於浦々異儀有間鋪者也。

加賀宰相内

弘化三年四月　　　　里見亥三郎

津々浦々役人中

五月三日。前田齊泰金澤城に着す。

〔官事拙筆〕

五月三日

一、今日御着城に付、昔九半時前服紗小袖・上下に而追々登城。御用番は今朝例刻より被出候事。

一、昔後津幡御供廻り、森下・大樋御立之御附人追々到來。右大樋より之御附人參候上、そろ〳〵遠江守・播磨守・助右衞門・雄二郎・大膳橋爪へ罷出居候。美作守は御城代當月主附之由に而御式臺江被出、御家老中も御式臺なり。三之丸には寺社奉行始役懸り人持・諸頭出居候。無程大より御先三品追々着、淺野川大橋御通行御附人も到來、遠州江直に相達點頭被致候。無程追々御人數着、御持柄見え候前之比各蹲踞、筆頭遠州三之丸方を頭にして順に橋之角少放れ

持柄本の儘

平伏也。諸役人等は二之丸方を頭に列し平伏也。則相公様御馬上に而前を御通之節、今日は天氣も宜敷御着城御大慶被思召候。各も無事与御意有之。遠州御受等被申上候。此時何れも少進み出御禮仕候。御通過之上追付登城候事。

一、益御機嫌能御着城被爲在候付、各夫より御用番座に而恐悦申述、畢而互にも申述。御用番は來月御用番自分に恐悦被申聞候事。

〔成瀬正敦日記〕

五月四日。富山侯前田利保が江戸邸燒失に就き加賀藩より助資を得たるを謝せる報金澤に達す。

五月四日

一、出雲守様御燒失に付、先達而於江戸表御用之間へ將之佐被爲召、御助成方御僉議之趣御發駕前申上り、金二千兩御振替被進候に付、右之趣御發駕御當朝四月十九日御家老富田大隅呼立、將之佐より被申談候付、右御禮御出も可被成所、御保養中に付重而同人を以被仰上候旨等、江戸表御圖書・兵部より二十四日出に申來候紙面、御用番より被入御覽候事。

五月九日。大聖寺侯前田利平、江戸より歸邑の途金澤城に登る。

〔成瀨正敦日記〕
五月七日
一、備後守樣前月廿六日江戶表御發駕、當八日金澤御着被成候付、同九日御登城之樣可被仰進哉。同日は松雲院樣御祥月之儀に付御料理等は不被進御儀与、先例等御用番より申上る。御作法附等今日被相伺候之通与被仰出候。且同日御參詣日に付、其後御登城之事に被仰出候事。
五月九日
一、八つ時頃備後守樣御登城、御口上御家老承り、以御近習頭申上、御對顏可被遊候間御居間書院へ御通り之樣、以御家老被仰進、追付御通、御茶・御たばこ盆出之。追付上之口より御出御對顏。其節御熨斗上之、暫御對談被遊、無程御挨拶被遊、如例御人之御杉戶迄御送被遊被爲入候事。

五月十日。石川郡相川新の儀左衞門孝行を以て賞せらる。
〔見聞袋群斗記〕
五月十日。石川郡相川新村の孝子儀左衞門に御褒美あり。

五月十一日。前田齊泰囃子の舞を演ず。

五月十日

一、明十一日晝九半時揃御囃子有之候に付、出席之人々望次第拜見被仰付旨、以御近習頭被仰出候由、御用番各江申談候に付、御禮之趣申述候。

五月十一日

一、晝八時過御舞臺拜見所江廻り候樣案內に付、同席・御家老中等每々之所江罷出、御近習頭入口迄誘引も有之、則左之御番組之通有之。御前御舞拜見之節は手を付居候處、手を上拜見候樣以御近習頭被仰出。依而始終に手を付候事每々之通。且今日詰處御見通しに成候故、御出御覽之節は手を付致見物候事。

御番組左之通り

繪馬 僔 東北 御 善知鳥 權兵衞

邯鄲 宮門 小袖曾我 万十郎 碇潜 忠藏

歌占 御 昭君 權兵衞 祝言須磨源氏 權進

右夫々相濟、退去之上松之間於二之間各一列に而、以御近習頭拜見之御禮座上播州より被申上候事。

一、追付夕七半時前何れも致退出候事。

五月十三日。前田齊泰、金澤郊外七ッ屋口に放鷹す。

〔官事拙筆〕

五月十三日

一、今日九時之御供揃に而御鷹野に御行歩御出。依而御出相濟、追付九半時前御用番之外各退出。

〔諸事要用雜記〕

五月十三日

一、九時過御出七つ屋口より御鷹野御出、暮六時前御歸殿被遊候事。

但、御供拙者罷出る。御獲柄鷭等廿四・五も有之。御拳も數有之。天氣も穩に而御慰被爲成候事。

五月十四日。二條齊信の使者金澤城に登り金子融通を求む。

〔官事拙筆〕

五月十二日

一、二條樣御使者西村出雲守儀一昨日到着。依之先例之通總代見舞旁、年寄中・御家老中一

自分は奥村助右衛門

人宛旅宿江可罷越之旨に付、今夕自分相勤候樣、昨日御用番より被申談罷越候筈。御家老方に而は今枝被參候旨。

一、夕七時過上下着用、供立常より相增、則出宅、堤町中宿組屋徳右衛門方へ參候。坊主一人罷越居候。今枝は少前被來候由也。夫より以坊主御使番呼立候處、則入江半藏參出に付、旅宿間圖り之樣子等相尋、萬端承合候處、委敷申聞有之。且追付御案內可申上之旨申聞退去。此中宿座敷江兩人通り居候內、茶・干菓子も出之、併暫時故菓子は不取上、其儘にいたし置候事。

一、夕七つ時過、旅宿不指支申來候に付、助右衛門・內記同道、暫時之間故步行に而、則盛砂等有之門より入、上り口に而家來江刀渡し、式臺階下侍江爲渡挨拶候處、誘引、其處曲り狹き處通筋に御使番兩人列座及挨拶。其所少過、閣き間より一段高く誘引人爲知、夫へ上り候處、御使者西村出雲守出向、挨拶誘引。二之間より上之間床橫障子側着座、兩人は障子後にし、向うて右之方に着座、始而逢候及挨拶。且暖和之砌彌御賢勝目出度存候。今度は遠路御使者御苦勞に存候。御見舞旁、同役總代致參扣候旨而々申述。夫より暫時咄合候。且出雲守より、今度從二條樣御賴之趣、登城之上御口上書を以被仰進筈候得共、尙又何分宜と被申聞、應而及答。追付退出、最前に有之通、則暮頃致歸宅候事。

中川八郎右衛門は家老

五月十四日

一、今日晝四時過、二條樣御使者登城之筈に付、例刻上下着用登城。各も同斷。但內膳氣滯に而登城無之。

一、晝九時前御使者西村出雲守登城。御大廣間ゟ被通、御家老中之內より御口上之趣承之、覺書被受取、各へも披見に被出。相濟、御家老方より直に被上候由。追付挨拶に可出旨に付、加判年寄中・御家老中一切に、虎之間方より廻り挨拶に出、面々挨拶之上引取。重而遠江守等五人出候處、出雲守從二條樣御命之趣申述候上、右に付乍輕少拜受物被仰付候旨も被申聞候に付、座上遠江守より蒙御懇命、其上拜受物被仰付忝仕合奉存、御禮之趣宜と被申述候處、歸京之上可相達被申聞、則退去。重而內膳爲名代助右衛門壹人罷出候處、右同斷拜聽之上、尙更內膳ゟ可申聞旨申述、則退出。次に御口上承、中川ゟも拜受有之由。其外は御命迄也。夫より御作法書之通り御料理等出、委細は略之。且御前御直答可有御座處、御疝邪氣に被爲在、其儀無之、御家老中之內より御返答御口上に申述候由。右御使者饗應後、御間拜見も有之由之事。

一、彼是八時前頃追付退出之旨付、年寄中・御家老中實檢之間方後にし、御式臺橫板間に一列見迄り出居候。追付御奏者番誘引、座前に而挨拶有之、御式臺通退出有之候事。

一、右相濟、外御用も無之に付各下城。夫より直に播磨守・近江守・將之佐・助右衞門同道に而、西村出雲守旅宿江罷越、式臺玄關に而御命幷拜受物御禮、播州・近江守一切、將之佐・助右衞門一切、兩人宛一集申述、座上之者口上述、同樣に宜と述、且交名も申置。則夫より直に面々歸宅いたし候事。

〔成瀨正敎日記〕

五月十四日

一、今日二條樣御使者西村出雲守儀登城に付、表向上下着用に候へ共、御次內は常服に而先罷出候事。

一、二條樣御內用之御口上、且御狀も被進、御家老八郞右衞門御取次、以大村被申上候付、夫々入御覽候所、此間御用番より伺有之候通り、追而可被及御答旨、當座之御答被申述候樣、大村を以八郞右衞門へ被仰出候事。

但、右御內用御口上書取は、禁裏來年御卽位・大嘗會等に付、右大臣樣御勤向に付二千兩御借用御賴也。右覺書翌日御用番へ以大村御渡、遂僉議被相伺候被仰出候事。

〔官事摘筆〕

五月十六日。前田齊泰學校に臨む。

五月十六日

一、今晝學校御出に付、晝九時過、遠江守初上下着用學校へ致出座候事。

一、晝八時過奥之口御出案内に而、主附近江守・將之佐、伺公には遠江守・播磨守・助右衞門・大膳・内記・萬之助・大學・八郎右衞門、若年寄式部は御先立也。夫々御作法之通り罷出居、追付御乘用に而御出、御白洲御式臺前に而御下乘、奉行前に而御中座御意有之、御請等江州より被申上。夫より明倫堂御上段ゟ被爲入、各横ゟ如例伺公。無程講書初候旨、學校御横目より奉行主附に達、御用部屋を以て被申上、御襖明候處に而、奉行始御廣間内ゟ進出、筋違に伺公候處、御上段御下り、御廣間御氈之上御着座、御見臺も上り候上、大學三綱領教授廣瀬順九郎講之。畢而御上段ゟ御復座、御見臺引之處ゟ、主附近江守教授順九郎誘引、正面に而平伏候處、講書大儀と御意有之。御請、蒙御意難有仕合奉存候旨、江州御取合被申上。御襖建、各御上段横ゟ復座、追付御廊下口に向ひ着座罷在候。夫より經武舘へ被爲入、加藤増之丞方鎗術、山森武太夫方鎗術稽古御覽。相濟、各如最前御式臺階上等ゟ伺公、追付御戻り、都而每々之通替儀無之。

〔藤懸賴善手記〕

五月十八日。前田慶寧、江戸城に登り本丸造營成就の祝賀能を覽る。

五月十八日

一、六時頃御出、筑前守樣御本丸江御登城被爲遊、暮六時過御歸殿被遊候事。御城御造營御成就に付、御祝儀御能御拜見之事。

但、御出之節御提灯神田橋邊迄相建、御下り之節大手酒井與四郎邊より相建候事。

朝御供

御右　薮田　池田　御大小將より加人　御横目　脇田平之丞

御左　古屋甚兵衛　篠島　御近習番より加人　澤田宅左衛門

上下御供　御大小將御番頭指支候に付御表小將御番頭より　津田判太夫　荒木津太夫　津田

晝御供

御右　飯田　嶺　御大小將より加人　和角孫左衛門　御横目代　九里辨之助

御左　人見昌之進　稻垣　和田

上下御供　中川平勝　宮川久兵衛　改田

一、右に付晝御供人四時過御殿江相揃、其段御横目所江及案內、九時前御横目所より相廻候樣申來、夫より御番頭等同道に而、一統御作事御門より出、順之通致馬上、南御門前通り御登城御道筋之通り罷越、酒井雅樂頭殿表門邊に而致下馬、夫々代り合申候。且交代罷歸候者

も、右所に而順之通馬上致、前に記候通之道筋より罷歸、一先中之口前へ相揃、御横目指圖之上引取申候事。

但、引取之刻限は八時頃之事。

一、朝御供人迎之從者、御横目所より申來候通、中之口前腰懸爲揃、押足輕致指引、昔御供人江指續罷越候事。

但、朝御供人鎗爲持不申者、鎗迄取寄候。從者乘馬とも、昔御供之者召連候分を召連罷歸候事。

一、昔上下御供之者は、御横目所より案内之上、惣御供より一足先江罷歸候事。

一、殿中詰御用無之事。

但、御燒飯御溜に而被召候故之由事。

一、御燒飯御用有之、池田相勤候事。

一、交代之節從者召連方、若黨兩人・鎗・挾箱・笠籠・草履取・馬之事。

一、御燒飯例之通御玄關前に有之御挾箱に入有之に付、御挾箱共爲持罷越、中之口に而爲取出、直に聞番江相渡。

但、古屋殿申談に而、以後も右之通相勤可申旨に付、本文之通相勤候事。

一、今日切御茶碗御用有之に付、御燒飯者一集に取揃致候事。御茶碗箱御服紗包に相成、御燒飯と一集に相成居申候。

五月十九日。前田齊泰能を演ず。

〔官事拙筆〕

五月十九日

一、今日御能拜見に付、朝五時前上下に而出席、各も追々同斷。

一、五時過拜見處江廻り候樣案内之處、助右衞門・雄二郎・御家老中等一兩人之外未被出。則前々之通御舞臺向うて右之横御緣側江列座、後ニには成瀨主稅等御近習勤仕人々等、服上下に而拜見、向側御間には御表勤仕當番之頭分等夫々列座拜見。都而拜見方等去春之通故略之。彼是晝九半時至一先御中入之事。

一、晝八時過重而御能相始り、都而右同斷。彼是暮六時過則相濟申候。御番附略左之通。

御能御番組

伏見　御　　藤戸　爵　　藤　御

二人靜　權進　　富士太鼓　宮川　　船橋　權兵衞

舟辨慶　附祝言　御

文角力　舟鮒　梟山伏　吹取　瓢の神

一、右相濟、松之間於二之間同席・御家老中等一列に而、以御近習頭御能拜見被仰付候御禮、座上遠江守より被申上候事。

五月十九日。金澤安江町より火を失す。

〔官事拙筆〕

五月十九日

一、夜五時過安江町筋出火に付、追付致出席候。御用番并將之佐・內記・方之助・式部先に出席。夫より大膳・庄兵衞・播磨守・近江守も追々出席。其外者風邪等に而以使者斷之由也。右火事次第に及大火、奉書火消六人被談、彼是翌曉七時前漸鎮火寄に而、未火事所御横目よりは達無之候へ共、御用も無之旨に付各致退出候事。

〔成瀨正敦日記〕

五月十九日

一、退出後六つ半過に而も可有之歟、安江町高田亥次郎隣町家より出火、急に鎮り不申に付、即刻出席いたし、暫相詰罷在候所、鎮火はいたし兼候へ共、御城は火の粉等も參り不申事故各退散。拙者は一類前田主馬方へ相見廻候所、堤町へ延燒にて氣遣しくに付、暫見合罷在、

九つ半頃同所は氣遣無之、下火に相成候付致歸宅候。惣而鎮火七つ時過也。

翌日承り候へば、潰家共町家九十九軒、外二軒武士屋敷燒失之由。

〔故紙雜鈔〕

一、弘化三年五月十九日夜五時前、安江町より出火、左之通燒失、曉天七時過及鎮火候事。

一、火元不知

一、七十六軒　安江町

内一軒毀家　一軒半毀

一、十軒　同町地借

内一軒支配違　二軒毀家　一軒半毀

一、九軒　下堤町

内一軒　同町地借

一、六軒　袋町　〆百一軒

外に武士屋敷　百石　組外　安江町横小路之内　高田亥太郎

三百石　御馬廻組　末寺前末　佐藤兵馬

右肝煎上山市藏より借用寫置候事。

右火元は安江町松任屋善兵衛与歟申者手代、主人之銀を盜出し、其儀を掩ひ隱さんとの爲火を付候よし。右之者出奔いたし候得共、越前地にて捕へられ、同年十月磔之刑に處せられ候也。

〔毎日帳書拔〕

五月十九日

一、安江町高田亥太郎邊より出火、及大火、奉書火消申渡。

但、此時二條樣御使者逗留中に而、旅宿近火に付外宿へ立退せ候事。

五月廿四日。二條齊信の使者に金子貸與申込の一部を許容す。

〔成瀨正敦日記〕

五月廿五日

一、此度二條樣より御振替金御頼に付、御用番へ遂詮議被申上候樣被仰出置候所、於御勝手方御算用場奉行へも遂僉議、金子千兩御振替被進候而可御宜、且御返濟方之所、當時天保十一年御振替千俵之御返濟、殘八百俵之內三百俵は、千兩之內に而只今御返濟、殘五百俵は當年より申年迄三ヶ年に御返濟、此度之千兩は翌酉年より御助力米之內を以、百俵充二十ヶ年に御返濟与申御算用場僉議之趣等申上り、出雲守〻可申述書取下物、別段申述共兩通も出來、

以主税被相伺候之通与被仰候所、重而右兩通以大村被上之、御家老江直に仰出候樣申上候付、入御覽、執筆へ相渡、調筆出來之樣申談置。

五月廿四日。火防に注意すべきことを告ぐ。

〔雜事日記〕

近頃度々出火有之及大火候。火之元之儀一統油斷は有之間敷儀候得共、頃日多分天氣茂打續宜敷候間、猶更嚴重相心得可申候。放火付草躰之品茂所々有之樣子相聞江候條、侍方等屋敷廻を初、町家至迄別而入念可致候。自然疑敷者茂有之候はゞ召捕置、早速及斷可申候事。

五月廿四日　　前田美作守

五月。質商の利率と限月の變更を許す。

〔郡方御觸〕

小松町質屋共利足之儀に付、同所町奉行等紙面に覺書相添被出之候。然處當町奉行よりも、質屋共相願候由に而、利足之儀者一歩三朱宛爲取請、限月者是迄十ケ月切に申渡置候得共、以來十三ケ月切に承屆置候而も苦かる間敷哉之旨及內達候に付、當分右之通町奉行切に聞屆候儀承置候段申渡候條、遠所町・在之儀も同樣に候間、夫々無急度御算用場より可被申渡候事。

閏五月四日。鳳至郡院内村直次郎が父の代牢を請ふ爲公事場に駈込みたる事情を取調べしむ。

〔諸事要用雜記〕

閏五月四日

一、公事場奉行江左之趣相尋候樣被仰出、則呼出伊藤主馬へ申談候處、奉畏追付可被申上旨之事。

御預所鳳至郡院内村直万せがれ

直　次　郎

右支配人より縮申付有之處、前月六日番人之透を考、公事場へ駈込、父之代牢相願、孝心之至に付不及代牢、父出牢之儀伺有之。直万儀は輕罪之者之旨に付、其節伺之通被仰出候。右之通人縮も有之者之處、孝心之至を見込候儀は不一通儀も可有之、如何躰之樣子に候哉、日書も上り不申に付、委曲之樣子御分被遊兼候此段御尋。

閏五月六日。竹澤天滿宮に龍蛇神を合祀す。

〔成瀨正敦日記〕

閏五月二日

一、今度於江戸表御受被遊爲御持に相成候龍蛇神御眞像、森辰之助へ寫被仰付候に付、此間申談置、昨夕より致別行、今日より御次へ罷出候付、波之間御縁側に屛風圍出來、奥附御横目足輕被指出候樣、栂へ此間申談置。

閏五月六日

一、龍蛇神、今日竹澤御鎭守へ御相殿に而正遷宮有之候。尤野尻彥六郞へ被仰付候事。

閏五月八日。前田齊泰、瀧之間の講書を聽聞す。

〔官事拙筆〕

閏五月八日

一、今朝瀧之間講釋御聽聞可被遊旨、栂源五左衞門を以被仰出候由。例刻より早めに出席相始り居候に付、直に瀧之間御敷居內に伺候。遠江守・大膳被出居候。御見通しに不相成故、手を付不申候。則御儒者助敎新井周藏孟子講之。追付相濟、御入之上見計ひ退出いたし候事。

本文は奥村助右衞門の手記に係る。栂源五左衞門は側用人

閏五月八日。石川郡本吉町紺屋三郞兵衞に御金裁許を命ず。

〔官事拙筆〕

閏五月八日

一、此間示談之上以御用部屋伺置、其通被仰出候に付、左之書立御算用場奉行有賀寛兵衛相招、於席相渡候事。

本吉町　紺屋三郎兵衛

右之者苗字爲名乘、御かね裁許被仰付、所奉行直支配被成置候樣仕度旨紙面等指出候に付、格別之趣を以御かね裁許申渡、如最前一代切苗字相名乘候儀、且直支配之儀も承屆候條、本吉湊裁許江可被申渡候事。

午閏五月

〔御家雜抄〕

弘化三年閏五月

一、本吉町紺屋三郎兵衛儀、最前苗字御免、御調達方御用相勤。就中天保七年違作に付越後米御買入之節も、全御用立候所、同九年能州江居住被仰付置候得共、同十四年御引替所御調達金も上納仕候に付、住所如元被仰付。其後御調達方御用立候付、苗字爲名乘、御かね裁許被仰付、所奉行直支配被仰付候樣願に付、如最前一代切苗字相名乘候儀承屆、御かね裁許申渡、本吉湊裁許直支配之儀も承屆可申哉之旨窺、窺之通被仰出。

閏五月九日。前田齊泰、蓮池御庭に金城靈澤碑を建設すべき位置を檢す。

〔成瀬正敦日記〕

閏五月九日

一、今日八つ時之御供揃に而、蓮池御庭江御出可被遊旨被仰出、金城靈澤御額・御碑文建所之御好等可被遊旨に付、當席兩人共罷出る。八つ時頃御出被遊、御先へ罷越、八つ半過右御用相濟候故、兩人共外御用無之旨御意之由金谷申聞候付、致退出候。

閏五月十一日。前田齊泰夫人江戸城西ノ丸に登る。

〔諸事要用雜記〕

閏五月十一日

一、姫君樣當二日西丸御登城被遊候段申來候事。

閏五月十三日。先の罹災者中給人に借知一作限り免除することを告ぐ。

〔官事拙筆〕

閏五月十三日

一、今般先頃火災之節類燒之人々江、格別之趣を以御借知一作被返下候に付、右書立覺書、今枝内記與力之内右之者有之故、同人席江相招相渡候處、奉畏早速可申渡、於私も難有仕合奉存候旨被申聞、退去。夫より寺社奉行始諸頭一人充相招相渡候處、夫々當座之御禮も申聞

候事。

閏五月十四日。前田齊泰能を演す。

〔官事拙筆〕

閏五月十四日

一、追付梅源五左衛門席江出、今日御能被遊候間、望次第拜見被仰付候段被仰出候旨申聞候。且御家老中江も可及演述旨も申聞に付、夫々可爲申聞旨申述候。則遠州初江も申聞、御家老中之附本多大學、若年寄中前田式部座江相招、夫々申聞候處、御禮被申聞、御用番より引受、以御近習頭御禮申上置候事。

但、追付御始に而、未出席無之人々も有之、拜見處江相廻り候故、執筆より可申達之樣申入置、直には不談候事。

一、晝四時過御能始り居候間、拜見處江可廻旨に付、遠江守・助右衛門・大膳・御家老中も、如例右之方御舞臺横拜見處江罷越列座拜見、其外御次內等拜見人も後〻に如毎列座、向側には詰合御奏者番始諸頭等右同斷。追付播磨守・美作守・將之佐も追々出席、右同斷。則左之御能二番有之、彼是晝九半時頃一先御中入之事。

一、晝八時過重而御能等相始り、前段之通夫々拜見、夕七半時前相濟候事。

八六〇

御能等御番組左之通。

天　鼓　忠　藏　高野物狂　御

御仕舞等　歌　古　万十郎

飛鳥川　御　一調 龍田川邊　長右衞門 新　助

八　島　直次郎

隅田川　權兵衞　殺生石　權進　亂　權兵衞

閏五月十七日。紀伊侯德川齊順逝去の報金澤に達す。

〔官事拙筆〕

閏五月十七日

一、晝四半時過、當九月出御用人御用に而十日ゟ延日圖り早飛脚到來。前日兵部等より之紙面紀伊大納言樣御所勞之處、養生不被爲叶、當八日曉子之下刻御逝去被成候に付、姫君樣御定式御半減、十月四十五日之御忌服被爲受候旨等、且右に付普請は八日より三日、鳴物は七日遠慮申渡有之由。此表鳴物等遠慮之儀前々之通可相伺旨等旨等申來候に付、追付先例引しらべ、伺書兩通等以御用部屋上之、伺之通被仰出候に付、普請は今日一日、鳴物等は明後廿九日迄三日遠慮之筈に、夫々每々之通觸付候。

姫君は前田齊泰夫人

閏五月廿一日。長將之佐家來毛受莊助に儒者を命ず。

〔官事拙筆〕

閏五月廿一日

一、昔四半時前各出席之上、御横目席江相招、長將之佐家來毛受莊助名書渡之、罷出居候間、各誘引に而席江指出候樣申渡候處、追付指出候旨申聞、各列座御用番左之通申渡之。

新知　百二十石　　毛受莊助

御儒者に被召出、新知如此被下之。

閏五月廿二日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事要用雜記〕

閏五月廿二日

一、今日九半時之御供揃に而、兩學校へ御出被仰出候事。

閏五月廿五日。前田齊泰、火矢方の大筒を觀る。

〔成瀨正敦日記〕

閏五月廿五日

一、火矢方手合之大筒御覽可被遊旨、此間被仰出申談置。今日火矢方小川群五郎・小川七郎

左衞門持參いたし、御居間先御庭に而御覽被遊候付、御横目へ申談爲相廻、群五郎等兩人、外に棟取火矢方御細工人兩人手傳に入、夫々相飾る。但御庭二枚開より内は、三十人者八人計爲出爲持運候事。群五郎等爲引候上御覽被遊、相濟、群五郎等相廻し爲相仕廻、相返候事。

一、今日御覽之御筒十貫目筒・六貫目筒・一貫目筒一挺充、外に敵鉾与申數仕懸之小鑄筒百五十目計之玉之由。五挺充之分二箱、御覽被遊候事。

六月朔日。金澤の町人能登屋左助、江戸金座より金銀箔の請賣を許されたるを以て苗字を許さる。

〔每日帳書拔〕

六月朔日

一、左之通申渡候旨に而町奉行出之。

卯辰西養寺前

能登屋左助事　越野左助

右之者今般江戸表金座より金銀箔類請賣等いたし候儀御聞届に付、苗字相名乘度段願出候。右職柄に依而苗字相名乘候儀は願之通承屆候。しかし御老中方へ御達無之筋有之節は、苗字持には御達無之、家持左助与御達之筈に候。

右之通可被申渡候事。

六月三日。鹿島郡金丸の孝女いとに賞賜す。

〔見聞袋群斗記〕

六月三日。鹿嶋郡金丸村の孝婦いとに御褒美被下。

六月十一日。德川家慶が前田齊泰の暑中を問ひたる奉書金澤に達す。

〔官事拙筆〕

六月十二日

一、夜前宿繼御奉書到來之由に而、各揃候上松之間常之席進出、播磨守・美作守・將之佐・助右衛門・大膳・御家老中一列に而拜見。兩人充一集拜見、御家老中も同斷。畢而互に一禮復座。御用番若年寄式部㠯拜見被談。夫々相濟、重而座進出、同席御家老中一列大村肴次郎相招、暑氣御尋宿繼御奉書到來、恐悅奉存候。私共御奉書拜見被仰付、難有仕合奉存候旨、座上播磨守より被申上、畢而復座之上、若年寄㠯拜見申談、御禮等申聞候趣も被申述、御奉書も返上有之候事。

六月十四日。相模浦賀に米船の入港したる報金澤に達す。

〔成瀬正敦日記〕

六月十四日

一、當月初相州浦賀表江異國船二艘渡來あめりか船の由。に付、松平大和守殿・松平下總守殿御暇被下、御堅め所へ被參候樣六日夜被仰渡。其外近所之萬石以上之御面々にも、浦賀奉行より申達次第御人數被仰出候樣、大目附より御書付出候旨等、四日出聞番內狀に申越、戶倉善佐より指越候書面等左膳より上之候事。

六月廿三日。前田齊泰、瀧之間の講書を聽聞す。

〔官事拙筆〕

六月廿三日

一、今日瀧之間講日に付朝五半時頃出席。

一、追付講書御聽聞之旨に付、瀧之間之處江助右衞門・大膳着座いたし居候。則御出、御襖明御聽聞。經書助教加藤甚左衞門講之。頭分以上如例聽聞人も有之、晝四時前相濟被爲入候事。

六月廿三日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事要用雜記〕

六月廿三日

一、今日九半時之御供揃に而、兩學校へ御出被仰出候事。

一、九半時過學校より御案内に而御出被遊、御先江大村・拙者參る。初め明倫堂に而句讀師會讀御進み被遊御聽聞。夫より入學生會讀之席へも御進み、醫學は其處より御聽聞。其内經武館宜段申上り御出、的御覽之御座所へ被爲入、三手先一建廿三人程充御覽。畢而御射手中江も御好的被仰出、何茂仕候。都合六組に而相濟、七つ時過御戻り被遊候事。

七月朔日。防火の手段を充分にすべきことを定火消役に告ぐ。

〔御用番方毎日書立書拔〕

七月朔日

一、定火消役筆頭津田內藏助席江相招、左之覺書渡之、同役江申談候樣申聞候事。

去年以來出火之節每度及大火候。消防方之儀は各役前之事に候得者、尤由斷は無之筈に候得共、猶更申談出精被相勤、何分不及大火樣相鎭可被申候。

一、近年家來之內騎馬之者抔、中には裝束等僭上成躰有之。且携候品を以猥に人を雜立、怪我人も有之躰相聞候。將又引揚之節、町幅に人數を張、下々がさつ成儀も有之由相聞江、不心得之至に候。向後右等之族無之樣、主人々々より下々迄嚴重に可申付候。

右之通可申渡旨被仰出候事。

午七月

〔雜事日記〕

定番頭江

火事之節無用之人々火事場江不罷越筈御定茂有之候處、次第に相緩み入込候者多、無用之者早乘いたしがさつ之族有之、中に者人込之內江乘込、怪我人等茂有之由相聞候事。

一、火事之節辻立之者多、往來等之障に相成、且馬上之人々江聲を懸馬を驚し、不作法之趣共相聞江候事。

右之趣に付前々より相觸置候所、近頃次第に猥に相成、御締方指障候條、向後右族無之樣急度可相心得候。尤自今右躰之者有之おいては、廻り方役人相見咎、名前承屆候條、被得其意、組・支配等不相洩樣被申渡、尤家來末々等申渡候樣可被申談候事。

七月

右之趣一統可被申談候事。

七月九日。能登中居の鑄物師に壹貫目玉の大筒製作を命ぜしむ。

〔御家老方等諸事留帳〕

七月十日

本年十月二十日の條參照

大村脩次郎は側用人

一、一貫目玉鑄筒製作被仰付、能州鑄物師十兵衛也。繪圖も差出、昨日大村脩次郎を以入御覽相伺候處、伺之通被仰出。

〔諸事要用雜記〕

十月廿日

一、中居に而出來之一貫目大筒出來、昨日御家老方より入御覽、於御居間先御覽被遊候目形七・八百貫目之由也。

前田齊泰の誕生日は七月十日なるも同日は齊廣の忌日なるを以て之を避けしなるべし

七月十五日。前田齊泰、その誕生日を祝して囃子を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

七月十五日

一、今日御誕生日に付御囃子被遊、眞龍院樣にも夕景御入之由。

七月十八日。能美郡附近に大風あり。

〔御家老方等諸事留帳〕

七月廿八日

一、能美郡邊當十八日之大風に而吹潰家百四・五十軒も有之。

但、越前地は格別に中、人家等大破損之由也。

七月十九日。火矢方の大筒等を充實するの方法を講ずべきことを命ず。

〔成瀨正敎日記〕

七月十九日

一、左之通御家老主付大學へ被仰出、主税相達す。且右に付御入用方も可有之候間、御借手方も被示合候樣被仰出候旨も相達す。

小川家火術之儀は、御先代樣段々御世話被爲在、火矢所等も被建置、御細工人も被指添、御手厚に被置候所、近來追々御省略に而、年々御渡方も相減就而は、御貯用之御筒等御修覆も不行屆、纔に近年打試之儀御聞屆之族に候。然處今度御貯用之御筒等御覽も被遊候所、前々御貯用之內燒筒等に相成、御貯用高相減候躰被聞召候。當時海邊御配方も有之處、右火術之儀は格別御手當にも可相成、殊に御先代樣右樣被成置候儀旁、御時節柄には候得共、今一篇御引立可被成思召候條、猶更遂詮議可被相窺候。此段可相達旨被仰出候。

七月

七月廿四日。靑山將監の家來齋藤三九郎の石川郡打木濱に於いて大筒を試射することを許す。

行届不申由に付の次脱文あるべし

〔毎日帳書拔〕

七月廿四日

一、青山將監家來齋藤三九郎、於打木濱大筒打試之儀願出候付、僉議之趣窺之處、被仰出之趣有之に付、小川群吾郎等稽古場之儀等御家老方へ相尋候處、往古は打木濱幷能美郡湊浦兩所に而稽古仕來候處、獵幷蠶に相障候旨に而、元祿元年より打木濱は相止、湊浦一ヶ所に成候由。稽古筒は一貫目・六貫目・十貫目を重に稽古いたし候由。元祿年中迄者年置稽古被仰付、其後は折々被仰付、寶暦九年之頃より稽古不被仰付由。然處文化十二年右稽古之儀相願、其節最初打木濱与相願候得共、往來留も行屆不申由に付、湊浦に而力様之通稽古仕候得ば、縮方殊輕相立候旨等に付、其段申上候所、打木濱に而打候樣被仰出。

七月廿五日。前田齊泰學校に臨む。

〔官事拙筆〕

七月廿五日

一、今晝九半時御供揃に而、學校經武館御出被遊候旨、伺公出順に付御用番より被談、則九時過主附將之佐退出後、追付大膳同道退出、學校江致出座候。御家老庄兵衞・若年寄式部も引續被出候事。

一、稽古出座人等相揃不差支御案内、例之通主附より以紙面被申上候上、彼是八時過御出、御乗用也。直に經武館江被爲入候。伺公方等之儀毎々之通故略之。追付稽古不差支段御横目より達、則被申上、御襖明、澤田宅左衛門方居合等相始。畢而御襖建、出座人振替候上、重而關小太郎方劍術等、先達而出情人御覧殘り之分兩人、幷御好之品等稽古御覧。夫より出座順に而勝負等も有之。彼是七時過相濟、直に御戻り、伺公方等例之通、庄兵衛暫被居殘候。相濟、主附之外追付致歸宅候事。

七月廿九日。黒川良安御醫者に召出さる。

〔成瀬正敦日記〕

七月廿三日

一、當時青山將監手醫師黒川良安与申者、本越中御郡方出生之者之由に候所、蘭學宜いたし、當時諸國にも算へ候程之者之由御聽立居候。御用にも可相立儀に候間、被召出候而も可宜哉之御內意に候間、御內々年寄中御僉議可有之旨被仰出候付、右御內意之趣今日御用番遠江守へ主税於別席相達、僉議之趣被申上候様にと申達置。

七月廿九日

新知八十石被下、御醫者に召出　　　　　　　　　　黒川良安

右は蘭學宜、醫術も相應にいたし候由に付、被召出候由。

七月晦日。青山將監、齋藤三九郎をして鑄造せしめたる大筒の試射を石川郡打木濱に行ふ。

是月は大盡なり

〔成瀬正敦日記〕

八月朔日

一、西洋流火術者齋藤三九郎与申もの、去年歟青山將監方へ召抱に相成、先日よりもるちる大筒鑄立出來、右大炮稽古方爲致度旨將監より段々願有之、御用番より被相伺、打木濱に而打試等御聞届に相成、則昨晦日打試出來いたし候由。

〔長谷川源左衛門筆記〕

本年七月廿四日の條參照

今茲弘化丙午の秋、老參政青山洪水軒君、西洋の新神火器大炮を造れり。其名をモルチール・ハンドモルチール・野戰炮といふ。各要務あり。この三箇の新神器の如きは、蓋し未だ北陸七州これを權輿するものあらず。老參政これを始製す、實に北地の先鋒嚆矢と云べし。僕これに銘して、未雨徹土先霜戒氷と云ものは、君の高志その源あるを敬感するが爲なり。今や其眞志の起る所の因を記し、又其銘の基づく所の深意を略解し、人をして感發の道を開か

んと欲す。凡そ人の常情に於る、誰かそれ義に向ざるものあらんや。然れども勇なるもの少く、義を見て能く爲すもの終に稀なり。特り老參致の如きは寛厚の長者にして、其眞義を見て果斷するの大勇あること、又その比なし。僕昔時父に從て初見し、陪講すること今に至て五十三年の久しきに及びて、義行はれ言聞かる。恩遇一日の如し。昔時僕の壯なるや、北狄ヲロシヤなるもの來りて、皇國の東北界を窺ふと聞きて、竊かに國に報ぜんことを欲し、自ら地球を造て彼此の形勢を辨じ、火炮を錬習して此賊を豫防せんことを思ひ、その談屢參政君に議して、此の君の深志あることを見る。近年又ヱゲレス等の海賊、やゝもすれば本邦に迫らんとするの機あり。然るに世人多くは本朝の地勢を知らずして謂らく、賊船の來る只崎陽・津輕若くは東海の浦賀に在るのみとし、火炮の術は我國に古傳の名秘ありて足れりとして、日新の妙藝あることを考へず。愚なるかな。夫れ本朝は東洋正帶中の一大島にして、四方八面皆それ連環の海濱に非ざるものなし。賊の來路最も廣しと云ふべし。今國家閑暇にして患なき者の如しと云へども、賊の狡猾なる何れの海濱に向て其虚を探り伺ざるの理有らんや。老懷中夜にこれを憶へば寢ることを得ず。起つて之を訟へんことを欲すれども、微臣の愚忠達するに由なし。徒に感慨するのみ。頃者聞く、西洋の火炮や累年戰國に長じて、新眞の妙藝殊に開け、崎陽の高島秋帆その妙秘を傳へ得て、西國の諸侯は皆これに服して、專

ら之を主用す。中にも肥前侯は明敏にして大に之を悦び、我が天正・文祿の鋒を洗ひ出さんと稱して、此火器を造製せること數百に及べりとなん。實に然らば、それ賊は必ず西國を避て他境に入らんか、其災甚るべからざるの害を生ぜんことを懼る。又此に天なる哉、天保の末年我邦の人齋藤三九郎なる者ありて、此全傳を得て國に歸る。僕雀躍して之を青山老參政に進む。此れ固より參政の宿志に吻合せるが故に、斷然として悦で之を臣とし、果然として費に吝ならず。其重臣徳田・佐雙・藤村・河野・松坂の五人に命じて造炮の工を督せしむ。三九郎の傳へたる、自ら其火器を造り、其火藥を製し、其火炮を放つ、此の三術を兼ね、其藝備れりと云べし。此に今年孟秋下旬、其の工初て就る。僕大に悦で謂らく、今老參政君高年七十に過て、其盛擧斯の如きは、實に此れ淇澳の綠竹猗々たる徳風あり、果して有斐の君子衛武に比すべしとし、敬嘆の餘り君の高志を書き出して君の眞面目を表し、此銘を作り之を炮上に刻して永く其孫子に貽り、君の精意を示し、後人を勵して不言の教を不朽に垂んとす。

八月八日。前田齊泰、瀧之間の講書を聽聞す。

〔諸事要用雜記〕

八月八日

一、今朝瀧之間講書御聽聞御出被遊候事。

八月十日。前田齊泰、先に女院崩御せしを以て禁裏・准后の御機嫌を奉伺せしむ。

〔成瀬正敎日記〕

八月二十六日

一、女院崩御に付、禁裏・准后御機嫌御伺之儀、公邊へ以聞番御伺之所、京都詰合之者を以御伺可有御座旨御指圖に付、其段京都詰人へ申遣置候所、當十日禁裏・准后爲伺御機嫌、傳奏衆御亭へ參上之儀、御所司代受指圖、奥村典膳相勤、筑前守樣よりも御同樣に付、岡田豐之丞相勤、同十二日勅答相濟候旨等、夫々御用人迄重上紙面、御用人より入御覽候事。

八月十一日。前田齊泰、石川郡宮腰に放鷹を行ふ。

〔宮事拙筆〕

八月十一日

一、今日は七つ屋邊宮腰口に御鷹野に、九時之御供揃に而御行歩被爲在候付、御用番御家老中主附之外御出後九時過何れも致退出候事。

〔諸事要用雜記〕

女院は新清和門院、本年六月二十日崩御

八月十一日

一、今日九時之御供揃、同刻御鷹野御出被遊、暮頃御歸殿被遊候。御供同席大村氏被罷出候事。

一、今日御獲柄左之通。

御拳　小鷺二

八月十九日。前田齊泰、能を演ず。

〔官事拙筆〕

八月十九日

一、例刻出席、今日御能被遊候御樣子に付、拜見相願候而差支間敷哉、以執筆播州殿より成瀨等之内江被聞合候處、不指支旨に付、則播磨守・美作守・助右衛門暫拜見仕度旨、播州殿より以御用部屋被願置候處、追付勝手次第拜見被仰付候旨、以同人被仰出、御用番より被申談、御禮申述置候事。

一、夫より拜見處江相廻り候。彼是九半時前頃也。尤今日は御表之人々拜見は無之旨に而、御襖も處々建居、御緣側拜見處次御間に而、播州殿に准じ帶刀脫し各此處に脇指有之。例之御緣側江參り列座拜見之。御能女郎花中ばより末之方也。右相濟、御中入之旨に付、一先三人共致退去

候事。

但、今日遠江守・大膳も尤出席候へ共、隙入有之不被顯事。

一、晝八半時前重而御始之旨に付、拜見處ゟ相廻り候。則三井寺御能相濟、美作守・助右衛門は退去、追付以御近習頭拜見之御禮松之間於二之間一列申上之。相濟、夕七半時前則致退出候事。

御能番組左之通。

放生川 御　　女郎花 宮門　　三井寺 御

小督 基五郎殿・豐之丞殿　　融 僖　　附祝言

九月朔日。側用人等書を金澤に發して、前田慶寧の兵學稽古の事等を議す。

〔富田儀右衛門日記〕

九月朔日

一、來る四日出、左之通小幡氏等へ可申遣候事。

一筆啓上仕候。――然者兵學御稽古御用有澤判平申聞候備立等算木御扱並城圖之儀、右箇條之節一通り申上候得共、右者別段御稽古無御座候而は、御覺被遊候儀も難被爲成候。依而當

前田圖書は家老にして世子の傅たるもの

時御稽古日六々と廿一日都合四日之內、廿一日を右兩樣御稽古日に相極め、御抱守之內へも被仰付、不宜所は判平相直し可申。左樣之所御覽被遊候得ば、御稽古に可相成候。右之趣釆女吉よりも申越候旨申聞候に付、其段申上候處、判平申聞候通可被遊旨御意に付、左候者相公樣ゟ私共より可奉伺候間、其上に而御始可被遊儀可御宜旨申上置候條、御伺可被仰越候。兵學御稽古之儀は、御表に而も御用之間に而成瀨氏等之內被相詰迄に而、外に御相手抔と申儀無御座樣承り罷在申候に付、一往奉伺儀可然哉と示談之上申上候。

一、江戶近海ゟ異國船渡來之節、臨時防禦等被仰渡儀可有之旨御書付到來、御觸渡御座候。右之節當時詰高を以御手配之儀、夫々御內しらべ可有御座儀勿論に候。萬一御留守年に右樣之儀御座候へば、若殿樣御出馬可被遊、是又夫々御手配可有御座候へ共、圖書殿內々被申聞趣も御座候。御道中如手配被成進候得ば宜儀、必左樣にも可有御座候得共、一向不奉承知、其固りに心得罷有候も不安心成ものに御座候。御隱密之品故、私共彼是申には不及儀にも可有御座哉に候へども、少し御模樣承知仕罷在度儀に御座候。成瀨氏等御內談御座候而は如何可有御座哉。密々御內談申上候。御考可被下候。右之御序に御部屋御軍裝も相定り不申由。此節御僉議中と歟申譯にも御座候哉。御附之人々指物等相心得度候而も出來不申、自ら武備怠り之端とも可相成儀に御座候。中古格別長き御部屋住も不被爲在事故、御詮議も起り不申

竹田市三郎富田儀右衛門は世子の側用人

小幡主膳・加藤三郎左衛門は前田齊泰の近習頭

坂井小左衛門は側用人

哉。若殿様には末長き御部屋住之御儀、其上連年異國船渡來物騒敷時節に候得ば、何と歟取頻御詮議有御座度事に奉存候。右之趣御考、御模様次第御内談可被下候。

九月三日　竹田市三郎

富田儀右衛門

小主膳様

加三郎左衛門様

〔富田儀右衛門日記〕

九月廿九日

當三日之貴書相達、――然ば兵學御稽古御用有澤判兵衛申聞候旨に而、備立算木御扱並城圖之儀、右箇條之節一通り申上候得共、右者別段御稽古無御座而は、御覺被遊候儀難被爲成候間、當時御稽古日六々と廿一日之內、廿一日を右兩様御稽古日に御極、御抱守之内へも被仰付、不宜所は判兵衛相直し可申、左様之所御見聞被遊候得ば御稽古可相成、右之趣釆女吉よりも申越候旨に付、其段被仰上候處、其通り可被遊旨御意に付、左候はゞ相公様江御伺可被成旨被仰上置候。兵學御稽古之儀は御相手も無、御人拂に相成居申儀、一往御伺可有之儀と御申合之由、御尤に奉存候。今日御次江罷出、小左衛門江申含置候間、相濟候上否可申上候。

一、江戸近海ゟ異國船到來之節、臨時防禦等被仰渡儀可有之旨、先達而被仰渡候。依而當時詰高を以御手配御内調理可有御座儀は勿論に候得共、萬一御留守年に右樣之儀御座候得ば、若殿樣御出馬可被遊、是又夫々御手配可有御座候得共、圖書殿内々被申候趣も有之、御道中如御手當被成進置候哉。決而左樣にも可有御座候得共、一向御承知無御座、其圖りに御心得爲御濟置候も御不安心に付、御模樣御聞置被成度。御部屋御軍裝も相定り不申由。御附之人々指物等心得度候而も出來不申、自ら武備之怠り共可相成儀、取頻御詮議有御座度思召候段等、一々御尤御同存に御座候。如何樣御隱密之品には御座候得共、御互には御樣子も密々奉承知罷在儀に付、先今日小左衞門ゟ内々相咄、御含之趣共委曲申入候所、御尤之儀に御座候。前段臨時防禦被仰渡候節、御手配之儀如何樣御帳冊になりと御認可被進置儀と奉存候。内々御互より小左衞門迄、御模樣相伺候趣を以可奉申上置候由申聞に付、夫に而も宜儀に候はゞ、其趣に取計吳候樣申入候所、右之趣に申上置候方速に御詮議も御治定相成、可御宜旨申聞候。御部屋御軍裝大躰御治定之筈、御附之人々御合紋等、御細工奉行ゟ御渡に相成候哉、其儀は不奉承知。尙又御樣子も可奉伺置、前條之儀もいづれ折角御詮議中に候間、無程夫々御治定に可有御座段申聞候間、右樣御承知置可被下候。

九月十四日　　　　　　　　　　加藤三郎左衞門

竹　市　三　郎様

富　儀右衛門様

〔富田儀右衛門日記〕

九月廿九日

一、先便被仰遣候毎月廿一日備立算木御取扱城圖御稽古之儀、曁右之節御抱守之内御相手被仰付候儀、坂井小左衛門を以奉伺置候處、御勝手に御稽古被遊候樣被仰出候間、右樣御承知御申上被成候樣奉存候。竹田氏へも御演述可被下候。

右之箇條、當十九日出内狀に申來り、則申上置候事。

大原は長家の御武具惣主附

九月二日。長大隅守の與力河野久太郎、江戸浪人松下健作に就き大炮の製作を傳習すべき許可を受く。

〔大砲御用留〕

九月二日

一、大原十郎左衛門殿より、今般江戸浪人松下健作御當地ゟ罷越候に付、河野久太郎西洋流大炮爲鑄度段申聞候。御差閊も無御座候哉之旨、御用番樣ゟ御内談有之候處、御用番樣より相達御内聽所處、不被爲在思召候。勝手次第爲鑄可申旨御談之事。

他國人に候得共、請人取置逗留致候に付、逗留中爲鑄候儀は不指閊候よし。

且又銅之事も御聞合被遊候處、隨分埒明候由に候間、いか程と申數可申上旨も御談候事。

右吹場は吹屋を賴候而可宜哉、土田惣助を以承合候事。

九月十日

一、吹屋九左衛門貸呉候哉之旨、四日に土田宗助ゟ賴候處、隨分御貸申候。私方に有之候品は、何成共御貸可申旨申聞候。

出座は奥村助右衛門

九月七日。前田齊泰學校に臨む。

〔官事拙筆〕

九月七日

一、晝九時過、大膳同道に而學校ゟ出座、御家老中は中川、若年寄式部も引繼被出。則八時前（御馬上也）御出、明倫堂ゟ被爲入、無程講書初り、木下仁平講之。御聽聞畢而經武館ゟ被爲入、八半時御用番將之佐も被出、武藤杢兵衛方居合等、島澤儀左衛門方槍術稽古御覽、夕七時過御戻り被遊候。

九月七日。藩の財政逼迫するを以て嚴に諸向の經費を緊縮すべきことを令す。

九月七日

一、左之書取御勝手方播磨守殿大村ゟ被相渡、左之役々へも申談候様被仰聞候由。

御近習頭　御能方　御賄奉行　奥御納戸奉行　御茶堂方　御右筆　御書物奉行　南御土藏奉行　金山方

御勝手御運方御逼迫至極に付、其以來格外御省略、種々御仕法も被仰付候得共、近年不時御物入等打湊、悉皆御調達を以御辨用に付、當時御手繰方等必支与御指支に相成候。然處江戸表等色々無御據過分之御入用も相向候處、被成方も無之、當盆前諸向渡り方等、幷御調達銀御返濟も指支、一統渡り方も御指押に可相成所、左候而は御調達等も出來兼候付、誠に無理成當座御調達を以漸御辨じに相成候付、年々以御借財相嵩候。右之通實に御逼迫至極之御勝手振に候處、其時々御調達も出來御辨用に相成候事故、諸向においては御勝手も御取直之樣にも存込候哉、其已來每度御省略之儀被仰出も有之候得共、近くは惣躰相弛申躰に而、いつとなく御入用多に相成、願方等茂追々致增長候。此儘にては必至与御指詰り之處ゟ可被爲至候條、御平生向等御入增無之、且不時御入用も實以御打捨置難被成品は不及是非、其他は一圓御指省に相成候樣、自・他國共御省略之筋相弛不申樣相心得、定・不時御入用精誠を盡相減

候樣、厚心懸可遂詮議候事。

丙午九月

九月十三日。小川群吾郎等をして江戸浪人松下健作に就き西洋流火術を學ばしむ。

〔成瀨正敦日記〕

九月十三日

一、江戸表より浪人松下健作と申者、先日より此表へ罷越、將之佐殿用向も有之逗留いたし罷在候。右は水野越前守殿御家來松下壽水与申者之せがれに而、西洋流火術者に而功者なる者の由。依而小川家之人々入門いたし、委く承り候はゞ、火術彌委く相成可宜与之御內意に而、先右御內意之趣內々小川群吾郎呼立申聞、存底相尋候所、聊存寄も無御座、右樣被仰付候へば別而難有儀与申聞候に付、猶又御奉行へ申談、健作手前內々爲承合候所、未熟至極には候へ共、入門等仕度与申人々も御座候へば、尤相傳可仕与申居候由に付、其段委曲申上、今日左之兩人御次へ呼立、左之通申談候。且健作方へ罷越候儀等は、猶吏町奉行へ相達引合候樣等申談候事。大野 奉

小川群吾郎

近年西洋流火術行はれ候躰に候處、御家には右火術傳も無之に付、各江附屬可被仰付思召候。然所此頃江戸浪人松下健作与申者、御當地逗留罷在候由に而、右火術相應相心得罷在候躰候間、此者江便り、自分に入門之心得を以、全く相傳を受候樣に与之御內意に候事。

〔溫敬公記史料〕

九月十三日。命小川定位・小川忠富。使學西洋火術。

九月十四日。東本願寺、使者を前田齊泰等に遣はして末寺の竣成を謝せしむ。

〔御家老方等諸事留帳〕

九月十四日

一、東本願寺より今度末寺上棟に付御國恩爲御挨拶使僧被下、相公樣江腰屛風・晒布一箱か・御菓子一箱、筑前守樣江晒布一箱・御菓子一箱か、年寄中江晒布五疋・扇子一箱、御家老・若年寄江晒布三疋・扇子一箱、寺社奉行・御算用場奉行・御郡奉行等先々準御贈物有之樣子。右拜受有之に付、當十六日・十七日・十八日之內に宅々江御使僧相勤、御贈物持參之由、今日月番より演述有之。

九月十七日。前田齊泰、青山將監が鑄造せしめたる大砲を覽る。

〔近教日記〕

九月十七日

一、青山將監家來齋藤三九郎製造いたし候モルチル等、西洋流之大筒二挺十貫目玉と三貫目玉也。洪水軒より被入御覽候付、今日割場人懸申遣取寄、御庭先御庭へ御手廻りに而爲廻候事。

十月二日。前田齊泰能を演ず。

〔官事拙筆〕

十月二日

一、今日は御能拜見に付、朝五時過登城、少前拜見所江廻り候樣申來候由也。追付雄二郎・遠江守父子・美作守も被出、追々拜見處江罷出候。前々之通御緣側也。後ﾆには御近習勤仕之人々子供も拜見。向側、詰合諸頭等・執筆共も拜見被仰付。井筒御能相濟、彼是九半時過一先御中入之事。

一、晝八半時頃重而相始り、何れも拜見右同樣。彼是夜五時過相濟候事。

御番組左之通。

大　社　御　八　島　爵　井　筒　御
正　尊　宮　門　春日龍神　基五郎殿　祝言伏見　豊之丞殿
八　幡　前　釣　狐　弓　矢

十月八日。前田齊泰、瀧之間の講書を聽聞す。

〔官事拙筆〕

十月八日

一、例刻出席、今朝は瀧之間經書講日に而御聽聞も有之。助教新井周藏講之。四時前相濟候旨。內記・式部聽聞被出候由。

十月十三日。前田齊泰、諸士の風俗に關して親翰を與ふ。

〔官事拙筆〕

十月十三日

一、例刻出席、晝四時過御用之間江被召候に付罷出候。御親翰二通被渡下。一通之分は諸士風俗等之儀に付被仰出候趣に而、且御意は、金龍院樣御代以來段々被仰出之趣も有之候處、兎角次第に等閑に相成候故、今度又々被仰出候間、一統江可申渡。今一通之分は猶更遂詮議可申上旨に而御渡、御家中收納米拂過等之儀に付御親翰也。右奉拜戴、難有思召御尤之御儀

奉存候。猶更僉議仕、自跡可申上及御請、懷中仕退座、各江拜戴に指出、拜寫幷書立も爲致候事。

〔早川氏藏文書〕

諸士風俗之儀に付、先年金龍院樣段々被仰出之趣有之候處、不被爲遂候に付、右御主意致貫通候樣被成度、其以來每度被仰出、行狀儉約等之儀に付而も追々被仰出之儀も有之。其砌少は志氣も相立候躰之所、無程流れ候儀者、何茂存込薄き故に候哉。且久々御借知も被仰付置候得共、臨時御入用も指湊、乍御心外于今御借知被返下候樣之御場合江も至兼、何も可爲難儀与御推察被遊候得共、不被爲得止事被仰付候事に候。諸士困窮之樣子も難被默止、小身等之人々不被行屆御取扱之儀も有之候得共、中には勝手不仕抹之人々者、不筋之族も有之躰に被聞召。是等は御借知全被返下候者、右樣之風俗は相改可申哉に候へ共、前文之通無是非被仰付候事に候へ者、是等之處致會得、是迄之習俗を離れ、聊も廉恥之志相立、少宛成共風俗立直り候樣被遊度御事に候。將又文武稽古も追々被爲相進度与、御仕向方も被仰付候得共、兎角年若之人々曁無息之輩之內にも志薄、惰弱之風俗も有之躰、父兄之敎諭も等閑故に候。何も前文之次第致會得、豫而も被仰出候通、他を不見合、各志を相勵候樣有之度儀と被思召候。畢竟久々御煩被爲在、時々之御敎諭も不被爲行屆故与、今度又々被仰出候。此後

油断之輩は、品に寄不被得止事、被加御厳制候場江至候而者、御心外之御事に候條、頭・支配人得与相心得、一旦之事に不相成様念頃に可申諭候。於各も僉議有之、夫々可被申渡候事。

御別紙

一、近來諸士勝手難澁に付、中には不筋之調達方も有之、收納米算違等にも候哉、拂過之人々茂有之體に候處、猶豫之内表向不相聞濟候由に候得共、下々に而は其様子も相聞可申、是等も折々耳立、誠に士氣之變敗嘆息之至に候。

一、諸士家内曁下々衣類等之儀、先達而申渡有之、不心得之者は廻り方之者見咎候筈に而、月々達聽候處、近くは見咎候者茂薄く候。追々諸士家内を始、一統麁服に相改り候儀に候哉。改方等兩手合名目而已之様に相成候而は如何に候。猶是等僉議之事。

両手合は盗賊改方及び金澤町奉行配下の足軽

一、女出合宿之儀、前々令禁止候處、人氣遊惰に流れ、右體之場所兎角不相止體に而、事に寄り折々は達聽候品も有之候。此儀に付而は、町奉行江申聞候品も候條、尚更各においても取締方僉議之事。

一、殺生方增長無之様、兼而申渡候趣に而、年若之人々勤仕之餘暇、曁無息之人々抔稽古之暇日に岩乘之試も可有之候得共、萬事を抛ち獲物を貪り候様之風俗は不可然候。別而重役相

勤候人々者、急度心得も可有之事に候。
右等之箇條僉議可有之事。
右十月年寄中ゟ御渡。

十月十三日。女出合宿の禁止を勵行すべきことを命ず。

〔成瀬正敦日記〕
十月十三日
一、左之通被仰出候付、執筆へ書取爲調、町奉行水原清五郎へ申談。
女出合之儀は前々御停止候處、右樣之場所兎角不相止躰、事に寄折々は御耳立候儀も有之候條、取締有之、紛敷渡世方之者は、相應之生業に爲改候樣、可遂僉議旨被仰出候事。

十月十五日。前田齊泰、金澤郊外大豆田口に放鷹を行ふ。

〔諸事要用雜記〕
十月十五日
一、今日九時之御供揃に而、御鷹野御出之儀、昨日被仰出候。
一、今日御子樣方御同道之儀被仰出候由之事。
一、九時過御出、大豆田口より御鷹野被遊、宮腰口より夜六半時御戻り被遊候事。

十月十九日。前田齊泰、鳳至郡中居鑄物師に製造せしめたる大筒を觀る。

〔諸事要用雜記〕

十月廿日

一、中居に而出來之一貫目大筒出來、昨日御家老方より入御覽、於御居間先御覽被遊候。目形七・八百貫目之由也。

十月二十日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事要用雜記〕

十月二十日

一、今日九半時御供揃に而、兩學校御出被仰出置、則八時前御出被遊候事。

十月廿四日。前田齊泰能を演ず。

〔官事拙筆〕

十月廿四日

一、今日御能拜見被仰付候に付、朝五時前出席、各も追々同斷、則御禮之趣被申聞候に付、以御近習頭御用番より引受申上。且御家老中等御禮之趣、主付內記より被申聞、是又同斷。青山は腰痛難儀に而不被罷出事。

本年七月九日の條參照

一、朝五半時前御能相始り候に付、如例拜見所ゟ相廻り候。御表之方拜見人は御廣式頭・御作事奉行・御普請奉行・割場奉行等之躰。諸合組頭等は拜見無之。且吉谷北洲於同所拜見被仰付候。將又今日執筆共も拜見不被仰付御樣子に付、諸向拜見不被仰付候節も相願候へば拜見被仰付候例も候由に而、堀學之丞等何れも相願度旨御用番ゟ申聞候に付、各ゟも示談之上、例も有之故御用部屋ゟ於別席、不苦儀候はゞ拜見被仰付候樣仕度旨申述置候處、追付以執筆、今日は御間狹にも候間、奥之間執筆迄拜見可被仰付被仰出候旨に付、其段執筆共ゟ申談候。仍之中之間執筆共は、書後御用濟候上、例も有之旨故爲引取候。右御能二番相濟、一先御中入之事。

一、晝八時過重而御能相始り、右同斷何れも拜見、彼是暮六時頃相濟候事。

御番組左之通り。

調伏曾我　御　鉢木　基五郎殿　住吉詣　權之進

張良　宮門　海人　御　附祝言

鷺　泣尼　鬼之繼子

十月。能美郡に於ける百姓の風儀に就いて諭示す。

［郡方御觸］

我察は粗暴の義

能美郡村々人氣次第に惡敷相成、我察振廻間々有之体。或者村々休日之儀、若者共亦者奉公人抔より、不時に村役人江申達、定之外休日いたし、村役人より彼是申入候得者、後日仇をいたし、既に去年德橋組中村之者共、右体之儀在之。且村方若き者共等不能了簡儀在之候得者、申合除け者にいたし、中直りには酒抔爲振舞、不時成費も在之。則板津組長崎村之者共、右樣之儀有之に付、兩村共其節夫々詮議之上、嚴重咎方茂申付候儀、面々承知之通に候。尤右兩村にも不限、心得違之者共有之哉に粗相聞え候。ケ樣之人氣押移、追々致增長候而者、先以御縮方難相立に付、無據嚴重之咎方も可申付場に至り、さすれば人々難儀之筋に相成候儀、誠に氣之毒成事に候。因玆今度改而心得方左に申渡候。

一、休日之儀、前々より村々に而定有之儀に候間、改而組裁許江爲書出置、右之外不時休日堅不相成。若何与歟謂有之休日いたし度儀有之候はゞ、村役人・十人頭・長百姓相談、納得之上可致休日候。若き者共等願に寄、休日一圓不相成候事。

一、村々に而除け者にいたし候儀、先以在之間敷儀。殊更中直りに酒等爲振舞候儀抔、甚不埒之至に候。假令年忌・法事・祝儀たりとも、身分不相應之振廻等堅不相成候事。

一、村々に而酒小賣いたし候儀不相成候。其內宿立或者往來筋稼所に而、酒小賣不致而難成向者、小賣人名前爲書出置、酒計少々宛爲致小賣可申候。中に者煮賣体之儀いたし候者も有

之哉に相聞得候間、左樣之儀一圓不相成。右循立等之外酒小賣堅不相成候。若心得違之者於有之者、急度咎方可申付候條、兼々廻り藤内共見廻方可申付候事。

右之通得其意、夫々嚴重可申渡候。畢竟是迄其許中取締方不行屆哉、第一村役人・長百姓共取締方等閑故与相聞得候。萬一以後若き者共等不埒之申分等いたし、外村々人氣にも指障候程之儀有之候得者、時宜により其村一統過怠申付候儀茂可有之候。左候得者一村之難儀与相成事に候間、村役人共長百姓に而急度相心得、若き者共等不所存之儀有之候はゞ、常に無油斷申諭、惣而一村之人氣柔和に相成候之樣、勿論耕作稼無怠出精いたし候樣心懸可申候。斯申渡候上にも不心得之者於有之者、速に可申出、急度咎方可申付候條、是等之趣譯而嚴重申渡、村役人共請書取立、面々奥書を以可指出候、以上。

午十月　　加州御郡奉行

改作奉行

能美郡十村中

〔毎日帳書拔〕

十一月五日。越前永平寺開基波多野三左衛門家傳の一粒金賣弘の請を許す。

十一月五日

一、越前永平寺開基波多野三左衞門家傳之一粒金、御領國中爲賣弘、波多野文二郎与申者致順廻度旨願出候段、永平寺より申來。僉議之上往還筋宿々幷町立之ヶ所致順廻候儀差支不申、其餘里中村々之儀は止宿方等差支候旨に付、往還筋宿々並町立ヶ所迄承屆候段可申渡旨、伺之通被仰出事。

十一月七日。前田齊泰、來年三月中に參覲を命ぜられたることを告ぐ。

〔御家老方等諸事留帳〕

十一月七日

一、來春御參勤御時節御伺之處、來三月中御參勤可被成旨御老中連名御奉書寫到來、拜見被仰付、各列座如例致拜見候事。

但、御禮月番引請被申上候事。右若年寄江は別に拜見之事。

十一月八日。前田齊泰、瀧之間の講書を聽聞す。

〔官事拙筆〕

十一月八日

一、例刻出席、月次瀧之間經書講釋御聽聞中に付、直様同處江伺公、追付内記も被出候。追

付相濟被爲入、則引取候事。

十一月十九日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事要用雜記〕

十一月十九日

一、今日九半時之御供揃に而、兩學校御出被仰出、則八時前御案內申上り御出被遊候。入學生會讀・諸組會讀數席有之、於御上段御聽聞。暫有之堂中へ被爲入御聽聞。其內林六左衛門方稽古不差支旨申上り、御上段へ被爲入、夫より經武館へ被爲入、林六左衛門方出情人御覽。相濟、平稽古御覽。其內馬術不差支段申上り、近藤□左衛門方代師範片山久右衛門方稽古乘馬不差支段申上り、夫々全御覽、相濟御戾り七時過之事。

但、出情人へ御意之儀御主付へ達。

十一月廿一日。家中の借知一部を本年限り免除することを告ぐ。

〔御在國若年寄方御用留〕

十一月廿一日

御上御難澁に有之借知銀被仰付置候御家中、一統難澁之段聞召。依之御借知之內割合之通一作被下返候條、猶更儉約相心得、勝手取續候樣にと御趣意之旨、月番座に而申立被相渡候事。

御勝手向連々御難澁に付、追々増御借知等被仰置、何茂可爲難澁儀に付、被返下度思召之處、近年打續御物入、去年以來茂不時成御入用共指添、彌増御手繰方六ヶ敷、不容易御勝手振に而、何分不被爲行屆候。乍然御家中難澁之樣子茂被聞召、深御心痛被爲在、格別之思召を以、御借知幷役料知等御借上之內、當年茂一作別紙割合之通被返下候旨被仰出候條、猶更人々手前遂儉約、勝手取續之儀心懸肝要に候。

右之趣被得其意、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

十一月　　　　本多播磨守

御借知等一作被返下割合

一、二百石迄	全
一、二百十石より二百九十九石迄	六　歩
一、三百石	四歩半
一、三百十石より四百石迄	四　歩
一、四百十石より九百九十九石迄	三ヶ一
一、千石より二千九百九十石迄	四ヶ一

一、三千石より九千九百石迄　五ケ一

一、一萬石以上　六ケ一

一、御切米等之分茂右割合を以被返下。

一、役料知等之分自分知七百九十九石以下全、八百石以上は是迄御借上之半高當り被返下。

一、平士被下足輕之分茂被返下。

但、頭分手替足輕・被下足輕等之儀は是迄之通。

一、逼塞・遠慮等被仰付置候者不被返下候事。

十一月廿四日。江戸浪人松下健作將に歸國せんとするを以てその待遇を議せしむ。

〔諸事要用雜記〕

十一月廿六日

一、當廿四日御用番より左之通被仰出。

江戸浪人松下健作与申者、先達より此表江參り居、西洋流炮術聞えも有之に付、小川兩家弟子入被仰付候。然處不遠一先罷歸、來春中又々罷越候筈に候。夫々右兩家へ傳授も仕候上は、何と歟御合力、暨御館入等に而も不被仰付而者相成間敷哉。猶更健作身元之儀被承糺候而、

右等之趣僉議有之候樣思召候。且右弟子入に付、西洋流之筒も二・三挺被仰付候筈に候。右樣浪人江筒被仰付候儀も、御差支無之譯に候哉。猶更是等之處も、聞番僉議被申上候樣被仰出候。

十二月朔日。江戸近海に異國船渡來の際の臨時警衞は小將頭の一隊に之を命ずべきことを告ぐ。

〔御親翰帳之内書拔〕

十一月晦日

江戸近海異國船渡來之節、臨時警衞之儀豫而被仰渡有之に付、是以後在府中被仰渡次第、詰合之小將頭一手合、先手物頭貳人・聞番一人・使番一人指副指向可申候。且右手合江與力貳人・步者貳人相渡可申候條、兼而心得方夫々可被申渡置候。委曲之儀は小將頭へ直に可申聞候。先手物頭等江は、小將頭可示合旨も可被申渡候事。

十一月晦日

〔諸事要用雜記〕

十二月三日

一、江戸近海異國船渡來之節御人數被差向候趣、當朔日御小將頭・御先手・御使番江、夫々於

表向被仰渡有之候事。

一、右に付江戸表しらべ方御用意之御品壹卷、御內用方より指上、御家老ゟ御渡、左之通今日申渡。

於江戸表近海異國船渡來之節は、被仰渡次第御人數被差向候に付、御小將頭へ被仰渡候。右に付御武器御用意方、別紙一卷御渡被遊候。彼地御貯用之品相調理られ、御不足之分來春江戸表へ被差遣候條、夫々被申渡之樣被仰出。

內記殿へ達す。

御武器御用意可被仰渡置分

一、御　弓　　十五張

但、小道具共

一、征　矢　　三千筋

但、一張二百筋宛

一、矢　箱　　三　荷

一、御鐵炮　　四十挺

但、小道具共

一、玉　薬　八千放分

但、玉目一兩一挺二百放宛

一、玉　箱　五　荷

一、長　柄　鑓　拾五本

但、笛卷十段鞘折形

一、長柄持番刀　二十腰

一、貝　大　鼓　一　組

一、侍　具　足　二十領

但、與力二人江御渡其餘御用意物

一、御歩ウルミ朱具足　二　領

但、貝・太鼓御歩江御渡

一、足輕革具足　百　領

但、六十六領御渡物其餘御用意物

一、弓足輕指物シナヘ絹　三十四枚

內　小頭黑に白筋違二筋　二　枚

平　黒に白筋違二筋　三十二枚

一、鐵炮足輕指物シナヘ絹　九十二枚

內　小頭赤に白筋　二筋　四　枚

平　赤に白筋違二筋　八十八枚

一、割場附小者羽織笠　四十三

但、矢玉箱持・長柄持・太鼓負江御渡之分

一、御貸馬具　二十四分

但、與力二人江御貸渡、其餘馬持以下御貸渡御用意物

一、割場奉行へ左之通書取を以て別紙一卷御渡、昨日申渡之筈。

割場奉行江

御在府中江戸近海異國船渡來之節、警衛被仰渡次第、詰合之御小將頭等被差向候筈に付、右手合江御渡候。足輕・小者等別紙之通兼而相心得、乍去臨時詰合之內を以相辨候樣被仰出候事。

（去乍本の儘）

割場奉行江可被仰渡人馬高

一、御弓足輕　十八人

小頭　二人
平　十六人
一、御鐵炮足輕　四十八人
小頭　四人
平　四十四人
一、割場附小者　四十三人
矢玉箱持　二十一人
長柄持　二十人
太皷負　二人
一、御貸馬　二十匹
右於江戸、臨時御小將頭斷次第可相渡候。

十二月四日。德川家慶が前田齊泰の寒中を問はしめたる奉書金澤に達す。

〔官事拙筆〕
十二月四日
一、寒氣御尋宿繼御奉書、今曉到來之由に而、則御用部屋拜見被仰付候旨被仰出、如例年寄

中等一列席、座を進み各拜見之。畢而御用番より若年寄江も拜見被談、相濟、同席・御家老中一列に而、御奉書到來之恐悅、次に拜見之御禮、御用部屋相招、座上遠江守より被申述候事。

十二月五日。江戶近海に異國船渡來の際警衞の任に當るべき小將頭に豫め密令を交附す。

〔成瀨正敦日記〕

十二月五日

一、江戶近海異國船渡來之節、警衞被仰渡、御小將頭等一手合被指出候儀に付、御小將頭中へ御渡物箱一つ御直封、外御親翰一箱、今日以織人飯尾吉太夫へ御渡之事。

〔諸事要用雜記〕

十二月五日

一、御小將頭へ、江戶近海異國船渡來之節臨時防禦之儀付、御親翰一箱幷御渡之物一箱、今日當席を以御渡、飯尾吉太夫へ相渡。

今般申渡候在府中江戶近海手當方、其方棟梁之儀に候條、臨時人數可指出候節は、先手物頭兩人・聞番一人・使番一人指副候筈に申渡置候間、萬端可申談候。尙指向候人數書一卷並備之圖一枚相渡置候。武具之分は在江戶之表納戶奉行、人數・貸馬之儀は割場奉行江、豫而

其心得申渡置候條、臨時相違可請取候、以上。

月　日

小將頭中

在府中江戸近海手當方人數積り

一、小將頭　一人
一、大小將番頭　一人
一、大小將橫目　一人
一、大小將　十八人
內番頭代　一人
長柄奉行　一人
一、先手物頭　二人
一、聞番　一人
一、使番　一人
一、與力　二人
但乘使役

一、歩　　　　　　　　　　二　人
但、貝・太鼓指副
一、弓足輕　　　　　　十八人
　內小頭　　　　　　二　人
　　手替　　　　　　一　人
一、鐵炮足輕　　　　四十八人
　內小頭　　　　　　四　人
　　手替　　　　　　四　人
一、矢箱持小者　　　六　人
一、玉箱持小者　　　十五人
一、長柄持小者　　　二十人
　內小頭　　　　　　二　人
　　手替　　　　　　三　人
一、太鼓負　　　　　二　人
　以上

一、組頭・物頭自分目印鑓爲持可申事。
一、家來之分詰合候人數を以て可致出立事。
一、若黨は革具足可爲着用事。
一、小者は羽織・笠可爲着用事。
右在府中兼而其心得可申渡置事。

十二月九日。前田齊泰、幕府に屆出づべき系譜を發送せしむ。

〔成瀬正敦日記〕

十二月九日

一、公儀江御指出之御系譜、當九日中御指出可被成旨之所、御しらべ方相後れ候付、暫御延引之儀御屆に相成居候所、此頃出來に付御帳等出來、御判は小之分御用ひ、御帳御印無之今日入御覽、江戸表聞番迄御渡、宜取計及御達候樣被仰出、其段今便早飛脚を以申遣す。

十二月十一日。前田慶寧の婚禮前に當り江戸邸御廣式向の費用を節すべきを告ぐ。

〔諸事要用雜記〕

十二月十一日

一、左之通御用番より被仰渡、御本宅頭へ申渡方は追而詮議申渡候筈之事。

御勝手向御難澁に付、御次向等御儉約方主付各內被仰付置候處、去々年御住居向格別嚴敷御省略に付、御內輪向御省略方不行屆樣之儀有之候而は如何に付、於江戶表御次向幷御廣式向御省略之儀被仰出候趣有之。其節申渡置候通に候。然處來年筑前守樣御婚禮之上は、江戶表御廣式向御廉多に茂相成可申儀。其砌御嵩高に相成候得ば、押移御定例之樣に相成、其節に到候而は品に寄容易に御改被成兼候樣之儀も可有之候。依之只今より萬端心付、御仕來之儀も成丈御事輕に相成候樣取計、其御振合を持込候而、親姬樣御引移之上茂物事御嵩高に不相成樣、各油斷なく被相心得、御廣式頭江も申談精誠可有僉議候。此段可申談旨被仰出候事。

十二月二十日。金澤茶屋町の名稱を改む。

〔兩茶屋町一件〕

是迄茶屋町上之通　愛宕一番町
同　中之通　同　二番町
同　下之通　同　三番町

右之通今般町名相改候條、此段可被申渡候事。

十二月廿一日。前田慶寧、齊泰夫人を招請す。

〔恭敏公記史料〕

十二月廿一日。招請景德夫人于屬宅。應夫人命使陸原大次郎講論語孟武伯問孝以下三章。夫人垂簾聽之。

十二月廿二日。賭の諸勝負禁止の前令を勵行せしむ。

〔小木貞正献本〕

かけの諸勝負者御制禁に候處、心得違之者も有之、且正月者勝手向等に而小兒抔之遊事与名付、博奕に似寄之慰事不苦儀之樣に存候族茂有之躰相聞候に付、寛政元年委細被仰渡置候通、かけもの仕、勝負を以慰与いたし候儀者、御停止之事に候條、猶更無違失急度可申渡旨被仰出候事。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

十二月廿二日　本多播磨守

志村平之丞殿

十二月廿三日。明倫堂教授廣瀨順九郎、前田齊泰の子利義及び利行の名

乘を撰進す。

〔成瀬正敦日記〕

十二月廿三日

一、基五郎殿・豐之丞殿御名乘、來春被進候付、廣瀬順九郎明倫堂教授江考被仰付候付、先日申談置候所、此間二三通り充考指出候。相伺候上、左之分御治定に付、則今日折紙に調、順九郎より指上候事。

基五郎殿　　義ノリ

豐之丞殿　　行ミチ

十二月廿四日。諸鳥の落羽を弓矢奉行に差出すべきことを命ず。

〔郡方御觸〕

諸鳥落羽拾取、御弓矢奉行江指出方等之儀に付、別紙兩通御算用場より相渡候に付、寫相越之候條、得其意、以後之儀嚴重申渡、其許中於手前無油斷取立可指出候。先々早々相廻、從落着可相返候、以上。

午十二月廿四日　　大嶋五郎右衛門

能州四郡十村中

寳暦九年御類焼後、御矢御用に可相成諸鳥落羽拾取指出候樣、御郡方等江申渡置候處、新川郡迄每歳少々宛拾羽指出候得共、其餘御郡等より者一切不指出に付、鴇羽等甚拂底に而御用支に相成候体。其上近年者鴇丸羽肉付之儘に而、所々致賣買候体相聞候に付、御弓矢奉行より御家老中江相達、御紙面被相渡候に付、寫相達候。御郡方等より不指出儀者、麁略に相心得候体に相聞候條、以來者諸郡等共一統無油斷、各手合江取立、御弓矢奉行江被引渡、其段當場江も可被申聞候。且又右体御用支にも至候條、肉付丸羽自分に不致賣買、當町魚問屋江指出候樣、急度可被申渡候。以後等閑之族等於有之者、嚴重咎申付候條、此段譯而可被申渡候、以上。

十二月十八日　　　　　御算用場

高澤平十郎殿

大嶋五郎右衛門殿

寳暦九年御類焼後、御郡方幷遠所町方江、諸鳥落羽拾上候得者、指出在之候樣被仰渡御座候處、新川郡迄者拾羽少々宛每歳指出候得共、近年是亦指出方無御座、其外御郡方等都而指出不申に付、先年より每度御達申上置候通に御座候。文化五年矢天井御用之御矢出來被仰付候砌茂、前段之趣に而、黒丹衣等甚拂底至極に御座候に付、格別御詮議御座候而、以來之儀茂

被仰渡御座候而、御郡方幷遠所町方ゟ嚴重相心得、指出候樣御達申上置候處、則被仰渡御座候得共、諸向より指出方無御座、黑丹衣・鴇羽等甚拂底至極に御座候而、御用支に相成申候。ヶ樣之儀御座候而者、其上中興者鴇丸羽肉付之儘に而、所々ゟ指出賣買仕候体に相聞申候。ヶ樣嚴重被仰渡、御弓矢彌御用羽拂底に相成申候間、以來相對賣買不仕、當所魚問屋ゟ指出候樣嚴重被仰渡、御弓矢所ゟ指出候樣仕度御座候。左候得者、尾羽善惡により御仕切銀之內を以代銀相渡可申候。兎角遠所町方等御縮方茂相立不申候。相對賣買仕候黑丹衣・鴇羽等之分者、如何共御縮方御達申上候手段無御座、何れ遠所出役所において嚴重詮議御座候而、當所魚問屋迄指出方御座候樣被仰渡御座候樣仕度御座候。曁當所魚問屋抔に者、少々宛所持仕候者も有之体に候得共、魚問屋ゟ指出不申哉、自ら御用羽集兼、必至与御用支に相成候間、魚肝煎等ゟ嚴重申渡候而指出候樣、町奉行幷御郡奉行中ゟ嚴重被仰渡御座候樣仕度奉存候。此段御達申上候、以上。

午十二月　　　　　　　　　　　　　木村九郎等四人

今枝內記樣等七人

十二月。家中の人々の道中に持參すべき荷物の重量を限定す。

〔雜事日記〕

御横目ゟ

大御目付は幕吏のなり

御家中之人々道中往來持參之諸荷物貫目之儀に付、天保十四年大御目付衆より御書付相渡之節、一統申渡置候通に候處、今以過貫目荷物有之哉に相聞候條、以來別紙貫目付寫之通違失無之樣可相心得事。

右之趣被得其意一統可被相觸候事。

十二月　　長將之佐

覺

一、駄荷本馬　　三十六貫目小付共、外に四貫目用捨。

但、四箇附に而過目に相成候者輕尻二疋、又は小付に而過目に相成候者人足一人相立可申。

一、乘本馬　　二十貫目小付共、外に四貫目用捨。

但、過目相成候者人足一人相立可申候事。

一、荷輕尻　　十八貫小付共、外四貫目用捨。

但、過目相成候者本馬に相成可申事。

一、乘輕尻　　五貫目小付共、外三貫目用捨。

但、過目相成候者乘本馬に相成可申候事。

人足一人五貫目

右御定目形如斯候事。

午十二月

十二月。前に遊廓たりし茶屋町・石坂町の家屋を改造すべきことを命ず。

〔兩茶屋町一件〕

茶屋町裁許肝煎　清左衛門

石坂町裁許肝煎　九兵衛

女出合宿之儀御停止之處、今以心得違之者有之體相聞。以來右樣之儀於相聞は、宿者勿論、集合居候男女名前承糺、夫々嚴重可申付候。且茶屋町・石坂町家建、嵩高成二階作り、或は身分不相應之間數所持之者、都而通例之家に相改可申候。尤見分方申渡置候條、早速取懸り、來春迄に不殘爲相改可申事。

弘化三年十二月

十二月。非人小屋の收容者六百三十人を算す。

〔温敬公記史料〕

十二月。貧民在悲田院者六百三拾人。

正月朔日。前田齊泰、金澤城に於いて年頭の賀を受く。

〔官事拙筆〕

正月元日

一、朝六半時過登城、其外追々同斷。

一、晝四半時過列立宜御横目申聞候に付、以御近習頭申上、各御小書院江相廻り、御用番之外遠江守始瀧之間御敷居際江寄居候。無程御出、遠江守・播磨守・美作守・近江守・將之佐・助右衛門・雄二郎・內膳・大膳・內記・大學・庄兵衛・八郎右衛門・式部迄獨禮被爲受、相濟、御禮人相濟候旨御用番御敷居內江進入申上、夫より於御大廣間人持・頭分一統御禮被爲受、則御入、何れも引取候事。

一、鶴之御吸物御下御內々頂戴被仰付候旨、御膳奉行杉野貞之助席江出申聞候に付、各江も御用番より申談。御家老中等江は主附大學相招夫々被申談候樣、若年寄江も演述有之樣申述。且又同刻過御臺所奉行渡瀨七郎太夫よりも、御嘉例之通一統江御のし頂戴被仰付候旨、右同斷申述候に付、是又夫々同樣申談候事。

一、御熨斗等頂戴不指支旨に付、於席同席・御家老中列座、坊主給仕御三方出之、何れも順之通御のし頂戴之。相濟以御臺所奉行御禮申上候事。

一、引續き鶴之御吸物・御酒・御取肴錫頂戴。右同斷相濟以御膳奉行御禮申上候事。

一、二番座御禮人列居宜旨、御横目申聞如例以御近習頭申上、晝九時過御出、御大廣間御下段に御着座。最前伺公等に而御禮不申上人持・頭分幷御大小將より坊主頭迄一統御禮。各前之通伺公相濟、被爲入候刻於御居間書院三之間筑前守樣御側小將等之御禮人も有之、伺公は無之。右人々退候以後於舟之間御表小將一統御禮、伺公遠江守。相濟被爲入候事。

正月二日。謠初を行ふ。

〔官事拙筆〕

正月二日

一、今夕御謠初之節、甚五郎殿・豐之丞殿御同道に而御見物御出之御樣子、此段爲心得申達候旨、成瀨主稅より以執筆申聞候事。

一、御謠初に付各八半時前より追々登城、万之助斷、近江守儀疝邪快旨に而今夕は登城有之候。且又大膳儀御盃頂戴無之故不及被出候へ共、御作法爲見受被出候儀は勝手次第之段、先達而奉達御聽、其通被仰出、申談有之候に付、則被出候に付、以御近習頭大膳儀御作法見受

度旨に而罷出居候旨申上置候事。

一、夕七時過御流頂戴人相揃候旨、御横目申聞候に付、寄置候様申談、則揃候旨等以御近習頭申上候。追付宜旨に付又々申上、各御大廣間江相廻り候。則無程御出、近うと御意有之、御廣緣着座處より御敷居際御疊之上江各進入列座。夫より遠江守・播磨守・美作守・近江守・將之佐・助右衛門・雄二郎・內記・大學・庄兵衛・八郎右衛門・式部迄御盃頂戴、御家老中等は返上無之。畢而役懸り人持青山將監等、物頭已上段々御流頂戴、御肴役美作守・助右衛門相勤。則相濟、御規式相濟候旨御意有之候に付、御規式首尾克相濟、恐悅奉存候。私共御盃頂戴、何れも御流れ被下難有仕合奉存候旨、座上遠江守申上、暮頃被爲入、各引取候。夫々御作法書之通替儀無之候事。

正月四日。打初・射初・乘初の儀を行ふ。

〔官事拙筆〕

正月四日

一、今日御鐵炮御打初御規式首尾能相濟候旨。

一、晝九時前、御射初之人々相揃候旨申聞候に付、寄置候樣申談、申上置、於御大廣間吉田家御射手一人充御覽被遊、被爲入何れも引取候事。

一、御異風裁許林久太夫、森權太夫席江出、御打初御規式首尾能相濟候旨申聞、交名申り附等差出候。依之前段御射初・御打初御祝儀被下物御目錄相渡候筈に付、御横目相招、其段申渡、檜垣之御間御緣側江寄置候樣申渡候處、追付寄置候旨に付、則於御緣側御横目差引左之人々一人充指出、拜領物被仰付候旨御用番申渡、御目錄御用人より渡之、御禮申聞退去之事。

御射手等

吉田家

吉田才一郎

北村八太夫

御異風

國府清馬

高嶺八太夫

一、夕七時前御馬乘初相濟、御馬奉行奥村友左衞門、御馬方坂野忠兵衞席へ出、御規式相濟候旨申聞候に付、前段之通御横目へ申談寄置候上、於御緣側御用番申渡、御馬乘へ御目六御用人より渡之候儀等、右同斷之事。

御馬乘

高桑五兵衛
明石磯五郎

正月十一日。前田慶寧疱瘡に罹る。

〔諸事要用雜記〕

正月廿二日

一、今日晝頃當十五日立不時早飛脚到來。

筑前守様十一日より御熱氣被爲在候處、十四日より御發物被爲在、十五日御疱瘡御治定被爲在、御筋合も宜、御輕痘に被爲在候由申來候事。

〔恭敏公記史料〕

正月十一日。公罹痘瘡。是日初熱。將軍經景德夫人貽紅縮緬製大達磨・大耳突及紅色懷嚢。

正月十八日。將軍使奏者番稻垣安藝守問疾。右大將亦同。

正月十一・二・三日序熱。十四・五・六日出齊。十七・八日水膿。二十・二十一・二十二眞膿。

正月二十五日初浴。二十八日再浴。二月朔三浴。

二月十一日拂床。

正月廿三日。前田齊泰、瀧之間の講書を聽聞す。

〔官事拙筆〕

正月廿三日

一、例刻出席。今朝瀧之間經書講釋廣瀬順九郎講之。御聽聞も有之候由之事。

正月廿四日。前田齊泰學校に臨む。

〔官事拙筆〕

正月廿四日

一、今晝九半時御供揃に而、明倫堂江被爲入候に付、御用番御家老中主附之外服紗小袖・上下に而、九時過退出學校江爲伺公被出候。則八時過御出、八半時過御還城之御樣子之事。

〔諸事要用雜記〕

正月廿四日

一、今日明倫堂御出被仰出、晝八時前御案内に而追付御出、御服御上下・御服紗也。御先立候當席幷御近習頭等罷越、有賀・大野罷越。何茂上下着用、例之通於明倫堂御出向申候。追付御出、御上段江被爲入候上、宜段御主付より被申上、其段申上る。御襖明御下り被遊、御上段前御廊下之外に御敷氈初めより敷有之候處へ被爲入、暫之內當席御先立、御見臺御表小將持出上之。無程講師廣瀬順九郎、扣加藤甚左衞門、三綱領一章講じ、御聽聞被遊。相濟、御見臺引候上、直に御上段

へ被爲入、御氈御近習勤仕□□。無程講師御前へ罷出、大儀之旨御意、將之佐御取合申上退去、御襖建之、伺公等宜付、御直に御戻り被遊候事。

但、講師御意幷敎官之人々聽聞之御禮、將之佐殿被申上、奥御取次へ申入候事。

是月は大盡なり

正月晦日。德川家齊の七回忌法會を神護寺に執行す。

〔官事拙筆〕

十一月十二日

十一月は弘化三年

文恭院樣七回御忌御法事、來正月於神護寺御執行に付、御導師常照院々代海心院被仰付候段可申渡候。

一、右御法事に付、前々之通赦被仰付候に而可有御座候。死刑・拷問來正月朔日より御法事相濟候迄相止候樣、公事場奉行等江可申渡候。右近例公邊御法事之振を以奉伺候。

〔官事拙筆〕

正月晦日

一、今日於神護寺文恭院樣七回御忌御法事御執行。朝六時過のしめ・長上下着用御寺江罷越候。

一、辰之刻御法事相始り、五半時過相濟、何れも溜々江引取候事。

一、夫より巳之刻御法事畫四時過相始り、右同斷、同半時過相濟候事。

一、夫より午之刻御法事餘程有之九時過相始り、右同斷、同半時過無御滯相濟候事。

一、追付御參詣御用意不差支旨に付、右之通御案内申上置候處、八時過御供廻り之案内、次に二御丸奥之口御出之見番に而各溜所迄出懸居候之處、次之見番不罷越候へ共御作法も聞え候旨御横目申聞候に付、惣奉行始繪圖之通出處ゟ罷出居候。御玄關階下左之方御法事奉行助右衞門、右之方院代海心院罷出、階下端若年寄八郎右衞門、其外ト右之方寺社奉行玄蕃罷出、年寄中等は階上夫々列居。無程御裝束にて御參詣、御白洲横に而御手水之上、夫より又御步行階上御上り、御法事殿敷居內に而鳥渡御拜、相濟御戾。其節階下に而院代ゟ、今日は天氣相も宜、無御滯相濟御大慶被遊候旨御中座に而御意有之。御懇之御意之趣難有仕合奉存候旨、御法事奉行御取合申上候處、其次自分ゟも御法事無御滯相濟候、誠大儀与御意有之候に付、無御滯相濟恐悅奉存候。御懇之蒙御意難有仕合奉存候旨及御請。則御戾被遊、何れも引取候事。

自分は奥村助右衞門榮通

二月朔日。前田齊泰の子利義・利行名乘を授けらる。

〔諸事要用雜記〕

二月朔日

一、今日基五郎殿等江御實名被進候に付、御出之儀兼而被仰進置、御着、御入之上御都合伺之上、御鈴通申上、無程御表江被爲入、奥之口より御溜へ被爲入、御出之趣御近習頭を以被仰上、御通之儀被仰進、御前御居間御上段へ御出、御手寄へ御實名折掛包之分二つ、一集に御小蓋にのせ上置。基五郎殿等御一集に御脇刺御取、二之間御敷居之外へ御出、直に御右之方御襖際へ御着座下もより三疊目。二疊目。其時御實名被進候段御意、御一方づゝ御上段へ御上り、御實名書御直に被進、御頂戴御復座。豐之丞殿にも御同様御復座之上、御熨斗三方配膳役持出、御二方様へ指上、引候時目出与御意、難有思召旨御禮被仰上、御退去。御次に而被進候御名書御渡に付、御一方様御名札指し、幷順九郎考指上候引書之處迄、小紙に調相添候而、御廣式頭へ相渡候事。

〔見聞袋群斗記〕

二月朔日

基五郎殿・豐之丞殿江御實名被進る。基五郎殿には利義、豐之丞殿には利行と被進。

二月三日。百歳の老齢者に物を賜ふ。

〔溫敬公記史料〕

二月三日。賜年百歳者物。

二月九日。前田齊泰學校に臨む。

〔官事拙筆〕

二月九日

一、例刻出席、今書九半時御供揃に而、學校江御出被仰出候旨に而、伺公出順播州之處、欠席に付次順自分に付、供九時に揃候樣坊主江申付置、則書九半時前主附退出後、追付大膳同道退出、學校江致出座候。出席中可書記儀無之候事。

一、書九半時過則學校江出座、御家老方に而庄兵衞、若年寄式部も被出候。稽古不差支御案内も毎々之通有之、彼是八時過奥之口御出之御附人に而、主附初御式代階上等江罷出居候。無程御出、階上に而將之佐江御意有之。助右衞門等御廣間御敷居際伺公前に而も如例鳥渡御中座。夫より明倫堂御上段江被爲入、各伺公處江着座。追付稽古不差支旨主附より被申上、御襖明、無程御廣間中央江御進み、諸組會讀御聽聞。何も其處江罷出、御左之方筋違に着座伺公。追付經武館稽古不差支旨も被申上、無程御上段之處江被爲入、御襖建、各經武館御通筋口江毎々之通着座罷在候事。

一、追付經武館江被爲入、御跡より罷越、御上段横に例之通伺公。稽古不差支旨被申上、無程御襖明、飯尾誠次郎方劍術先出情人一人御覽。相濟、御襖建、重而申上り候上御襖明、常

稽古御覽も有之、彼是八半時過御歸館、伺公等最前之通。但暫庄兵衛被居殘候。都而伺公方等督學抔も同斷、何等替儀無之故荒增記之候。夫々相濟、追付夕七時前致歸宅候事。

〔見聞袋群斗記〕

二月十四日。前田齊廣夫人眞龍院還曆の祝賀を行ふ。

二月十四日。眞龍院樣御本卦之御祝。

〔諸事要用雜記〕

二月十五日

一、昨日眞龍院樣御本卦御祝に付、御入被遊候に付、當席三人共恐悅罷出、御附頭を以申上候事。

二月十七日。前田齊泰能を演じ、齊廣夫人眞龍院の還曆を祝す。

〔官事拙筆〕

二月十七日

一、今日御能拜見に付、朝五時過彼是五半時前拜見處〻廻り候樣申來候に付、遠江守・美作守・助右衛門・雄二郎・內膳・大膳・御家老中等も拜見處〻相廻り候。前々之通御緣側に而、後。には御近習勤仕之人々等子共も拜見、向側當番之人持・諸頭等執筆共も拜見被仰付。俊成忠

則相濟、彼是九時頃に而一先御中入之事。

一、晝八時過重而相始り、何れも拜見右同斷、彼是六時前相濟候事。

御番組左之通

養老 權進 俊成忠則 基五郎殿 松風 爵

道成寺 御 鶴龜 宮門 猩々 豊之丞殿

松 楪 財寶 福の神

但、今日之御能は眞龍院樣御本卦之御祝此間有之、右御祝御含之御能之由候事。

二月廿二日。前田齊泰の子利義・利行金澤城松之間に移る。

〔宮事拙筆〕

二月廿二日

一、先達而松之間御普請御成就、今日より基五郎殿・豊之丞殿右御間江御引移被遊。且基五郎殿には御額に御角入も有之候に付、服紗小袖・上下着用、檜垣之間上屛風圍之處に而年寄中・大膳・御家老中等一列に而、基五郎殿御角入被爲濟候恐悦以御近習頭申上候處、追付以同人御喜悅被思召候旨御意之趣も有之候。且同時に松之御殿頭江も右同斷御祝詞眞龍院樣江申上、夫々座上遠江守より被申述候。右は松之御殿御間支に付呼立に成候事。

松之御殿は松の間と異なり

〔見聞袋群斗記〕

二月廿二日甚五郎殿松之御間江御引移り御葊之樣被仰進、同日御額直し・御袖留御祝有之なり。御年御十五なり。豐之丞殿には御十三ゆゑ、御表御住居は不被仰進候へ共、强て御願に付御許容、二月廿二日御一集に松之御間江御引移りなり。

二月廿七日。德川家慶等使を遣はして前田慶寧の酒湯に浴するを祝す。

〔官事拙筆〕

三月五日

一、筑前守樣御疱瘡御順快御酒湯被爲引候旨等、前月廿七日不時立町飛脚早飛脚歩之分今日到來。則來狀を以御用番より演述も有之候。以上使御拜領物等有之候委曲申來。紙面之内荒增爲覺左に記之。

今廿七日筑前守樣御疱瘡御酒湯爲御祝儀、御兩殿樣江公方樣・右大將樣より上使有之段、內々御城坊主衆より申來。且又御本丸より上使若御年寄本庄安藝守殿、西御丸よりも若御年寄松平玄蕃頭殿御越之旨申來候段聞番申聞候に付、組頭・御用人・御横目江申聞、夫々不指支樣前々之通可相心得旨申渡候。

一、御殿揃刻限之儀、上使提灯引に而御出宅之御樣子に而、曉七時与申渡候。

啓之助は富山侯前田利友

一、御兩殿樣御名代之儀筑前守樣より啓之介樣江御賴之處、御承知に而御出被成候事。

一、安藝守殿朝六半時前、玄蕃頭殿五時前御越、御大書院江御通、筑前守樣御疱瘡御酒湯爲御祝儀、相公樣江御拜領物被仰付候旨、御兩方共御同樣御申述。時々御名代啓之介樣御拜聽、圖書江被仰聞候趣別紙に相調上之申候。筑前守樣江上意之趣も被仰聞候に付、竹田市三郎を以御同處樣江申上候。右相濟、御小書院江啓之介樣御誘引被成、御兩方共御料理は御斷、前田右近殿御招伴に而御菓子等出之。畢而啓之介樣御請被仰遊、安藝守殿五時前、玄蕃頭殿五半時頃御退出被成候。

右等之趣に付、御用番よりも御用有之候に付、今日不時立町飛脚早飛脚步申渡申進候條可被達御聽候、以上。

二月廿七日　　前田圖書等兩人　判

横山遠江守樣

〔恭敏公史料〕

二月廿七日爲酒湯床拂賀。將軍使若年寄本庄安藝守。來賜縮緬五卷樽肴。右大將使若年寄松平玄蕃頭貽樽肴。右府夫人貽樽肴。

〔續德川實紀〕

二月廿七日

松平筑前守疱瘡酒湯によて、小老本庄安藝守して卷物五・一種一荷をおくらせられ、父加賀守に一種をおくらせらる。

三月六日。前田齊泰、慶寧の病癒えたるを祝し能を演ず。

〔御家老方等諸事留帳〕

三月六日

一、今日御能拜見に付五つ時前登城致候所、五つ時過御始り也。

一、献上物木具据御小書院ゟ飾付、年寄中・江州之外皆御家老中・若年寄・洪水軒まで一列、御近習頭里見亥三郎を以御疱瘡御順症御肥立被遊、御酒湯も被爲引爲御祝儀上使有之恐悦、御酒湯祝に付献上物仕候趣遠州被述候事。

一、檜垣之御間に而御赤飯・御吸物・ぼら・御酒・御取肴各並居、洪水軒も同所頂戴、相濟御膳奉行を以御禮申上候事。

一、今日當番一統上下着用御能拜見被仰付、頭分以上恐悦御帳に付候由之事。

一、御能拜見之御禮松平加久丞を以申上候事。

一、御能御番組略左之通也。

玉之井　御　彌三右衞門　麻生　幸三郎

鉢木　權之進　久左衞門　北條種　萬藏

御中入

弱法師　御　全作　入間川　八三郎

大江山　豐之丞殿　生藏　素袍落　長左衞門

雞龍田　宮門　森之助　勝ぐり　九郎兵衞

輪藏　御　甚助　附祝言

三月十二日。江戸浪人松下健作再び金澤に來る。

〔諸事要用雜記〕

三月十六日

一、松下健作當十二日金澤ゟ參り、右者申遣候上出府之筈之處、如何と及察當候處、於彼地齋藤三九郎之兄とやら、三九郎御召抱に相成候に付松下にも不及抔申慣し、面目を失候儀に付、右張合に而出懸候由申聞候旨。依而筒被仰付方之事僉議之振申來、モルチイル・ホヲイ、

申來は前田齊泰の旅行中へなり

スル之二品三挺も被仰付可然、其餘は火矢方に而被仰付候事に可申談と申來。夫々內狀入御覽、僉議之通り可被仰付、御入用之儀御勝手方へ達有之樣夫々及返書。

三月十三日。前田齊泰、金澤を發して參覲の途に就く。

〔諸事要用雜記〕

三月十二日

覺

一、千八百六十七人　御當日御供人高

內　六百四十八人　雇者

二十九匹　御家中乘馬

百八十九人　宿繼人足

但、宿定廿五人之外

百二十七匹　宿繼馬

但、宿定廿五匹之外

右御發駕御當日御同宿之御供人馬高大綱如斯御座候、以上。

三月十日　富永左膳

前田美作守は扈從なり

〔官事拙筆〕

三月十三日

一、今日御發駕に付、朝五時前服紗小袖・上下に而登城いたし候。各も同斷之事。

一、晝四半時前御供廻り之頃、追付同席初於御居間書院被召候旨に付、如例蔦之間御廊下に列座。無程加判之人々美作守外五人罷出候處、今日は天氣相も宜敷、追付留守中政事向無油斷与御意有之。益御機嫌能追付御發駕被遊恐悅奉存候。御意之趣奉畏候旨座上遠江守より被申上候處、重而何も無事与御意有之に付、御懇之蒙御意難有仕合奉存候旨右同斷被申上。畢而播磨守江は御城方之儀も御意、應被及御請、何れも退去。其次靱負・内膳・大膳一切、御家老中・若年寄・青山洪水軒一切、夫々被爲召御意有之退去、相濟暫席江退座。此間に美作守江各及暇乞候。追付御供宜旨申上り候由に付、何れも御式臺江相廻り候。靱負・内膳・大膳は橋爪江被罷出候事。

一、彼是晝九時前益御機嫌能御馬上に而御發駕被遊候。御式臺鏡板左内之方を頭に年寄中、御家老中等右之方、且又甚五郎殿・豐之丞殿にも左之方鏡板江御見送、同席前に御着座。其外階上等夫々列座人も有之。且又階下に而無事に与御意之趣も有之。座上遠江守應而被及御請

候。橋爪之方ゟ御通過之比何れも引取候事。

〔諸事要用雑記〕

三月十三日

一、今日御發駕御供揃五時揃に付、同刻宅發足、罷出候上相揃。

一、御旅裝束に御召替、追付御居間書院ゟ御出、眞龍院様御附使者御直答、夫より年寄中等・式部被爲召、御意有之事。

一、右相濟、御子様方御對顔、御のし被進、直に御奥へ御同道。御供宜段申上り、前に御案内申上御出被成、御先ゟ表御式臺へ被爲入候事。

一、御供宜段申上、御奥より御出、御熨斗指上、九時前益御機嫌能御馬に而御發駕被遊。御城中御作法如前々。森下迄御馬、夫より御駕籠、倶利伽羅下坂埴生手前に而提灯付候。六つ三分石動御着被遊候事。

三月十四日

一、今朝五時過石動驛御發駕、例之通御見立、夫より宿建騎馬、暫歩行、無程降になる。福岡御小休御發駕、暫被爲入、御供人雨具になる。高岡御宿入之頃より追々晴る。四半時高岡御着被遊候事。

一、九時過瑞龍寺御參詣被遊、同半時過御戻り被遊候事。

一、今日古御城跡御巡見之時分、配膳役一人・御近習勤仕兩三人可被連、且有澤采女吉同人せがれ九八郎被召連旨に付而、夫々申談る。且山森罷出候に付直に召連候。右被召連候人々之儀御横目中へ申談る。且被召連候人々從者は、又々御本陣際へ罷出候節之通りに而、御城境御門外に何茂殘る。夫より美作守初草履取一人之事。

但、美作守殿は草履取一人之事、當席より申達す。

一、八半鎌御巡見御出被遊、七半鎌下御戻り被遊候事。

一、初め被爲入候節御馬上、御戻り御歩行、且町奉行御城跡御巡見中御先立致候。右前に御城番之足輕御先へ相立候。御先供は御巡見中御跡へ續參る。御駕籠・御馬も御跡より參り候得共、是は外に殘り候方宜と存候。且又御戻り御旅屋御園内御巡見被遊、夫より關野社內御覽被遊、拜殿等へも被爲入、直に御歩行に而御戻り候事。

三月十五日

一、今朝六時過御發駕、高岡町端に而御提灯引け、小杉等御小休、夕七半頃魚津江御着被遊候事。

一、於魚津引網被仰付、大鯛七・八枚外小魚餘程引上げ候。

一、右八枚之分二之丸へ三枚、松御殿へ二枚、御本宅へ三枚被進候儀被仰出、於御膳所塩中談、町奉行へ直に相渡候。松御殿・二之丸之分紙面二通、是又町奉行江相渡。金澤へは飛脚、江戸之分は十九日三度へ傳付と申渡。

一、引網何茂見物被仰付候。美作守も見物被仰付、被罷出候。御肴右之通に付、被下候分無之候事。

三月十六日

一、今朝六半時御供揃に而、同刻魚津驛御發駕被遊、所々御休、八時頃泊驛御着被遊候事。

三月十七日

一、今曉七時過御本陣江罷出る。且夜前境奉行迄御道中奉行より申遣、糸魚川川方御役人より昨日之紙面、此躰に而は今晩風雨等無之候はゞ川場御差支無之旨申來居候處、昨夕より之風雨に而者如何可有哉と境奉行迄尋遣置候處、猶更追々可及注進旨に而、其後七半時過、増水に及御渡船御差支、境川・青海川も水増御差支之旨に而、御近習頭中も各御本陣に相詰候處、右之通に候處、右躰に而者當驛に御逗留可被遊哉と御道中奉行より相伺、則伺之通被仰出、左之通旅宿觸有之。

姫川御差支に付、今日當驛に御逗留被遊候段被仰出候。

一、右に付今日者旅籠代都而半拂之事。

一、御家中乘馬飼料代之分は用意に不及候。

右之趣早速御供人旅宿々々相觸可申候事。

三月十七日

三月十八日

一、糸魚川御役人江、御道中奉行より川方之事に付紙面を以申遣候處、右飛脚江只今從是可申遣与認置候由に而飛札指越、姫川追々減水に相成、今日御渡船御差支無之旨申來候事。

一、右之通に候處、山之下出役之者より注進申來、風立に成、親不知波高に而今日御通行御差支候段申來。

一、夕御膳後追付之御供揃に而、濱邊御巡見可被遊旨被仰出、御横目へ申談、御近習頭へも申談る。

一、八つ一分御歩行に而御出、當所町端御藏所御覽、右之内に備荒倉斤前爲開、御米積之處御覽被遊。夫より濱江御出、獵師引網之儀御郡奉行より申談置候由に而、則御目通に而引上。相濟、元之御道より七分過御戻り被遊候事。

三月十九日

一、今曉親不知又々波高之由注進有之候へ共、全く波とも不相聞、普請出來無之由。仍而六半時前泊驛御發駕被遊、御道中奉行御横目川場へ出候に付、御旅館取次同道御先參り、御差支之有無境迄御案内申上候筈に示合置候處、境へ右御旅館取次來參、追々引波に而御差支無之由境より之飛脚參り申聞、道普請も出來之由注進申聞候。依而境御立被遊、親不知へ被爲入候處、波も靜に成、御無難に御通行、駒返も御無難に而御通行。姫川一ヶ瀬に而舟一艘充甚難澁、其上川場に而甚之風烈に成、南風成候ゆゑ、波者次第に靜り、川は夕景少増水之躰に候。夜六半時能生へ御着被遊候事。

三月廿日

一、今朝六半時過能生驛御發駕被遊、所々御小休等被遊、七時前高田驛へ御着被遊候事。

三月廿一日

一、今朝六時高田御發駕被遊、所々御小休等被遊、七つ時過柏原驛御着被遊候事。

三月廿二日

一、七半時過御旅館へ出、六時過柏原御發駕被遊、半道も行御提灯引け候。犀川・筑摩川無滯御越、益御機嫌能七時過矢代江御着之事。

三月廿三日

一、六時過矢代御發駕被遊、所々御休被遊、七半時小諸江御着被遊候事。

三月廿四日

一、今朝六時過御旅館江出、夜明に而追付御發駕被遊、所々御小休等被遊、七時坂本江御着被遊候事。

一、夜四半時過餘程之地震に付、急速御旅館へ罷出候處、尤御目覺被爲入、則奉伺御機嫌候。美作守殿も罷出、被伺御機嫌候。御道中奉行初表向之人々も追々罷出、美作守殿へ迄伺御機嫌候由之事。

但、大分嚴敷、勿論覺不申地震也。坂本邊に而は六十七年來無之事と老人之咄之由。續而少さき分度々有之事。

三月廿五日

一、今朝五時御供揃に而、同刻過坂本御發駕被遊、御關所暨安中・高崎騎馬、所々御泊附之通御小休被遊、七時倉ケ野へ御着被遊候事。

一、今日晩も地震之氣止不申、夜に入小雨に成る。

三月廿六日

一、今朝六半時過倉ケ野御發駕被遊、所々御小休等被遊、七時熊谷御泊江御着被遊候事。

三月廿七日

一、今朝六時御供揃に付、七半時御旅館へ出る。六時過熊谷御發駕被遊、所々御小休等被遊、七時頃浦和江御着被遊候事。

三月廿八日

一、今朝六時御供揃に而、御時計少繰上り居候哉、同刻過浦和驛御發駕被遊、蕨寄に而提灯引、御下屋敷へも御立寄、同所より御馬に而四つ七分益御機嫌能、追分口御門より御着府被遊候事。

一、筑前守樣六時御供揃に而、喬松丸殿にも御同樣、爲御待受御下屋敷へ被爲入、御式臺江御出向、御同道に而御入、御近習番詰所邊に而御殘り、御溜へ被爲入、御着之御歡御近習頭を以被仰上、追付御二人樣とも御通御對顏、御のし三方配膳役上下着用上之、爲御持之御菓子豫而御膳奉行へ申談置指上候付、御小將より上之。暫御間有之、何時に而も御戾り被成候樣被仰進、御供宜付、御暇之上御二人樣とも御戾り、御先江被爲入候事。

一、右御戾り之上御供相しらべ、御洗足等・御膳、相濟追付同所御發駕被遊候事。

一、四つ七分奥之口御式臺より御着被遊、筑前守樣・喬松丸殿同所階上江被爲在、御見懸被遊階下江御下り御挨拶。夫より御先立大村、階上江眞龍院樣御附中村治兵衛罷出、席前通、御

居間四之間より三之間同所に姫君様御附使者久留孫太夫殿罷出被居、御先立より唱、只今到着之御意。夫より御稽古所通御入遊被候事。

三月廿三日。大聖寺侯前田利平、參覲の途金澤に着す。

〔官事拙筆〕

三月廿三日

一、前段之通備後守様昨夕御着、今朝六時過御供揃に而松任御立被成、御旅館金浦屋次郎兵衛方被爲入候筈之旨、昨晝爲聞合相知れ、且御着之上松之御殿御機嫌伺に御出、夫より兩御寺御參詣被成候旨に付、右御留守之處江罷出候得者御邪魔に有之間敷与、見番爲遣案内次第罷出候圖りに相定候。

一、罷越候上御旅館江御着之御様子、松之御殿江御出御道筋之儀も爲聞合、見番之者内膳方より被遣置候。然處四時過歟御旅館江御着之案内有之。松之御殿より兩御寺江御出之御道筋は、大手より新堂形横御通之旨之事。

〔御家老方等諸手扣〕

三月廿三日

一、備後守様今日御當所江御着、御旅館金浦屋也。御勝手方主附御用番に付御近習頭丹羽榮

等迄呈書、御機嫌相伺候事。

三月廿四日。前田齊泰、上野坂本に於いて地震に會す。

〔諸事要用雜記〕

四月朔日

一、前月廿四日御道中於坂本驛地震、信州邊大變に而、追々樣子相知候處、越後高田より此方所々損所有之、野尻・柏原・牟禮不殘潰家、善光寺過半燒失、死人千計も有之由。犀川之上山押込候哉、水干に相成候由。丹波嶋者家も五・六軒潰候由。併右川水干に相成候付、何時押出可申哉も難計と、各山江駈上り候處、大地處々ひらき、四尺計も地落入候處も有之由。死失人も有之躰に候。追々注進之內、備後守樣廿二日立之御飛脚之者承り合候趣餘程委く候。何れ前代未聞之由に候事。

一、右に付交代人指留、並今日出候三度山道往來之儀伺有之事。

〔見聞袋群斗記〕

三月廿二日坂本驛御泊之處、夜半信州地大いに震ふ。先に諸臣交代にて罷歸る者有により、急に信州へ人をやり、扈從等之存歿問はしむる。此儀誰も不心付、思召にて急速人を被遣、公上州坂本驛御逗留、安否御聞き及び御發駕なり。御供人一統奉感稱と承るなり。

廿二日は廿四日の誤なり

〔毎日帳書抜〕

四月朔日

一、前月廿四日夜地震に而、信州筋等所々潰家等出來、山抜も有之、餘程之地震之躰。然處御參勤御道中柏原より御使後いまだ御便も無之、同日者坂本御泊之御日圖に付御樣子無心許、依而不時立日圖早飛脚步を以申遣可然と遂示談候事。

三月廿四日。木村采右衛門・永山平八等、越後中屋敷にて地震に會す。

本文は木村采右衛門の筆記に係る

〔弘化四丁未年三月越後信濃地震之記〕

三月廿一日永山平八同道金澤出立、同廿四日越後中屋敷驛止宿いたし候處、同夜五半時頃、東南之方より大濤を打懸候樣之物音いたし、屋梁動搖、席上之品々不殘傾倒、襖・戶障子飛はづれ、すは地震と駈出し候處、地上步行難致程の儀に而、めり〳〵と鳴渡り、暫して相止。驛中婦女老人を扶け幼を負ひ、爰かしこに打集泣さけび、男子は家財を荷擔して東西に奔走し、或は火を用心せよと呼はるも有。又逸れ馬を搜し求るもあり。驛中騷動一方ならず、止宿の旅店抔二階裏之大梁抜落、土藏も二箇破壞いたし、戶障子・鴨居・根太浮はづれ、其上終夜地震相止不申、翌朝迄に十七・八度相震申候。右之次第故驛中明家にいたし、家の前後明地へ出候族。予も笠を冠り筵の上に其夜を明し、翌廿五日同驛出立高田江參候處、道傍宮社

之鳥居幷石佛・石塔之類不殘打倒し、高田市中家の損じ中屋敷よりは甚敷、通り筋之内やね石軒端に落ち、潰家七・八軒計見かけ候。即死人も有之由。又面部大傷有之ものも多く見かけ申候。是は迯出候節家上の石に撃れ、右樣傷損いたし候由。町中不殘戸を閉し、飮食・草鞋之類求かね候。人馬繼立も差支、同所に數刻相待居候內、西越後等の消息相知れ、名立驛抔は强き地震と申位にて家の破損無之、柏崎近在も同樣之由。但今町驛は娼樓屋五・六軒打潰し、死傷人も有之由。同日荒井驛止宿、廿六日關山宿、兩日とも田の中に打臥、廿七日關川止宿、同所に二日逗留。關川左り之方山手に大谷と申公領、家數四十軒計有之所、山抜にて三十軒計打潰し、六十人程即死いたし、高田より關川迄之內一宿々々に潰家之數多く、道路之陷裂も夥敷、田切坂は尤甚敷、廿九日關川宿出足信州ゟ相懸候處、越後にくらべ候得者早急之强當りと相見ゟ、野尻驛は十之七潰れ、其上十八軒計燒亡いたし、潰れ殘候家迚も傾撓(カタガ)り、就中住居は相成不申。牟禮一宿にて、即死百三十人・馬十疋与士人申聞候。荒町宿は牟禮驛程には無之、善光寺驛は牟禮同樣皆潰れ之由。殊に善光寺は三月十日より如來開帳に而遠國之人打集り、驛中五・六千人程も泊り合候處、十之七・八は死傷いたし、且急之埋葬も出來不申に付、穢臭數里に相齅(ニホヒ)候由。是は家に壓れ候而已ならず、地震中七・八箇所より火起り、市中不殘燒失、唯如來堂幷山門計燒殘り候次第。夫故右失火之ために横死いたし候もの多く、予

見懸候中にも、江戸近邊之者之由にて、柱に足を挾まれ迯出候事不相成、其中焔氣來り半體たゞれ、されど一生懸命にて足を拔取り命を助り候よし。尤歩行も致得ず、駕籠にて旅行いたし候を見かけ申候。其外困苦流離の狀目も當てられぬ事共計に而、善光寺より右之方山入小市・稻荷山諸村も同樣皆潰れ之由。飯山・松代城も餘程崩れ損じ、城下も大半打潰し、其上飯山・稻荷山は火災も有之。右地震より犀川水流一滴も來らず、依川之事常水より倍にも有之べき時節に右之族ゆゑ、基潰れ之處難計に付、川中島鄕中居民不殘岡田山ゑ迯上り、丹波嶋驛抔は問屋役人兩三人家之前に舟を繫ぎ居殘り、旅人ゑも右之段申入通行爲致不申よしに付、予は長沼驛に相廻り、能布川渡しを越、是は筑摩川下、流水有之。福島宿ゑ相越、兩驛とも舟二艘川意有之に付、宿役人ゑ水源之樣子相尋候處、小市より二里計上に山平林と申有之、兩側斷崖にて犀川上流此所より流出候處、虛空藏山与申岩山地震に而川中ゑ崩出水流を塞候。右川上に新町与申廣野有之、松代領に而山中三萬石与唱候膏腴地ゑ、日々大水灌注、民家悉沈沒いたし候。依而松代侯より長沼・福島等之宿役人御呼立、若基決患有之時は川緣諸寺に而早鐘を撞候事に申渡に付、中島諸村晝夜安眠いたし候もの無之与申聞候。其上福島驛ゑ相向候處、晩景に付夜通し旅行も難儀に付、兼而承り傳へ候大笹街道ゑ相懸り、其夜は井上村与申所に止宿。同晦日仁禮峠を越え、上州大笹驛に止宿、翌朔日信州沓掛驛ゑ出、碓氷嶺を越え申候。

去る廿四日より朔日迄、晝夜兩三度づゝ山鳴震動相止不申。丹波島東は前文之通に而通行不致候得共、追々跡より追及之者に相尋候處、矢代・戸倉は越後關山邊同樣之當りに而潰家有之、榊・横引・上田・岩鼻も崩落候得共、上田よりは家之損無之よし。しかし地震は上州筋中に不及、江戸表も相震候樣子。且上州にて尾藩之士に逢相尋候處、名古屋も同夜同刻正座難成程之地震にて、木曾路は鹽尻邊潰家も有之よしに承り候。誠に前代未聞之地災、後年之ため荒增を爰に記。

四月四日江戸到着。

三月廿四日。金澤に地震あり。

〔官事拙筆〕

三月廿四日

一、今曉四時比餘程强地震有之、其後も兩三度又々ゆり候。右に付兩御廣式江爲伺御機嫌罷出候儀に而も可有之哉、播磨守は御廣式方に而外引番には成兼候へ共、近にも候故家來迄以紙面爲尋遣候處、播州方に而は不罷出圖り候由。依而自分も罷出候儀は尤指止候事。

但、右地震自分等は覺無之程之地震、ゆり樣は格別にも無候へ共、餘程長くゆり候也。前段之通其後間有之兩三度も地震、其内大小も有之。翌朝六時前後之比も兩度、日之内も兩

三度至而小さき地震も又々有之。何れ久々無之地震に候事。

〔弘化四年地震之記〕

一、金澤三月廿四日夜四つ時暫前地震、餘程長く候得ども格別之事無御座候。鴨居等に懸たる物落る程にも無之、夜之内六・七度も動く事有之、翌日より晦日迄少々充度々地震有之事。

一、越中高岡邊は鴨居に掛たる物落ると云。

一、能州田鶴濱長公之御菩提所東嶺寺棟木落る。因之長公より御役人早速發足之由、河野久太郎殿物語也。七尾近邊土藏損所も有之、酒多くこぼれ申候よし。跡に承り候得ば、金澤酒造も大抵一軒に二石計はこぼれ申よし。

一、小松より申來候は、大抵金澤と同樣にて少々之事也。

本年三月十三日の條參照

三月廿八日。前田齊泰江戸に着す。

〔官事拙筆〕

四月六日

一、昨日御用番より被指出候前月廿八日江戸表より早飛脚歩、美作守等より之左之紙面添紙共到來に付致承知書、落着に付翌朝越後屋敷江遣之候事。

相公樣益御機嫌能、今廿八日四半時過御着府被遊候。先以目出度御儀恐悅之至奉存候。御供

人末々迄無滯罷越申候。此段眞龍院樣初御申上可被成候。依之前々之通中飛脚を以可申進處、御次より御用有之早飛脚に申渡候、以上。

三月廿八日　　前田圖書

前田美作守

本多播磨守樣

本文今こゝに附載す

〔日記〕

八月廿二日

一、弘化四年御在府詰高

總高二千五百十八人　　但江戸在住共

内

一、二百十七人　　與力以上

一、四十四人　　御步

一、十四人　　筑前守樣御附御步

一、二十四人　　定番御步

一、二十七人　　御算用者

一、二十二人　御料理人
一、六　人　御細工者
一、六十九人　御小人
一、四十四人　御手廻
一、三十一人　御臺所附同心
一、十四人　同　板本
一、六十六人　同　小者
一、九人　御作事方
一、三人　御預地方足輕
一、一人　同　小者
一、百一人　御厩方
一、六十九人　坊　主
一、六十四人　大組足輕
一、三十八人　御持弓足輕
一、三十八人　御持筒足輕

一、六百十八人　　割場附足輕等
一、二十九人　　御下屋敷定番足輕
一、七百八十人　　割場附小者
一、二十四人　　御手木足輕等
一、百三人　　三十人組等
一、五人　　大島忠太夫等組足輕等
一、十一人　　御先手等手替
一、六十六人　　鳶之者
一、十四人　　田中彥四郞等組足輕
一、十三人　　笠松六郞等組足輕
御步以下〆二千三百四十一人
右當御在府詰人等如斯御座候。
八　月
此外又家來打込大凡三千人許なるべし。飯米一日分十五石。

三月廿九日。德川家慶、使を遣はして前田齊泰の參覲を勞せしむ。

三月廿九日

一、今日上使御內沙汰有之、四時過出席相揃候上被爲召。

一、四半頃御表江御出、御飾御覽、御同道に而御出被遊候事。

一、今日彌上使戶田山城守殿御越之旨、御小人目付を以申來、兼而御近習頭へ申談被置候。爲御知方等夫々相濟。

一、今日上使御退出後、追付之御供揃に而御老中方御廻勤之儀伺被仰出候段、御大小將御番頭より御近習頭へ演述有之候事。

一、九つ一分過爲上使戶田山城守殿御越、御兩殿樣御出向、御城下に而御表江被爲入、大書院三之間に御見合、昌平橋御付人に而御廣間邊迄被爲入、三丁目に而御式臺へ御出。無程上使御見懸に而、御門下江御兩殿樣にも御出、御挨拶之上筑前守樣には御跡へ御付、御通り、上意御拜聽。夫より御小書院江御通り、御料理御相伴に而、夫々御例之通相濟、御受被仰上候。前に筑前守樣御式臺御送り之處迄御先へ御出、相濟、御勝手座敷坊主衆溜御小書院溜江も被爲入、御入之事。

一、今日啓之介樣御出無御座、御重引者前田右近殿御引被成候事。

上意

松平加賀守

參勤之段達上聞、大儀被思召候。上使被成下候。追而御目見可被仰付候。

一、右九つ七分過相濟候事。

三月。西洋炮術に熟達する者を加賀藩に招致するの許可を幕府に求む。

〔御親翰帳之內書拔〕

異國船渡來之節警衞向之儀、彌嚴重致し、人數・武器之手當等、是迄よりは一段手厚に相心得、且若近海江渡來候者、臨時警固幷防禦等被仰付候儀も可有之候間、平常火炮等之用意可申付旨、去寅年御觸達御座候。併而其手當仕置候得共、猶更火炮等厚用意致し置申度。依而者西洋之炮術は便利之儀共有之候付、右炮術心得罷在候他國之者國許江呼寄、鐵炮等申付候而茂、指支之儀も有御座間敷哉、御問合申上候事。

三月

松平加賀守家來

岩田內藏助

御付札

書面之通者不苦と存候。尤箇名目・員數等御屆致し可然候。

三月。江戸詰人に衣服その他の儉約を旨とすべきことを告ぐ。

〔觸留〕

江戸表御式臺を初、御表向都而綿衣等麁服着用可致旨等、前々被仰出置候へ共、當時別而嚴敷御省略中之儀に候間、尙更麁服着用可致候。上使等押立候御客之節は輕絹類相用、御一門樣方等御出之節前日爲御知之分も、常御見廻懸り之振に候得ば綿衣等着用可致候。御內輪相勤候人々は猶以可爲麁服候事。

但、何とか御含に而御設有之御客之節は、其時々着服之儀御客方より可申談候。

一、武器之儀に付天保十一年被仰出之趣有之、成丈雜用者相省、鎗數等文政十年以前之通爲持可申旨被仰渡置候通に候間、無益之雜具抔爲持候儀堅可爲無用候事。

一、江戸詰中於御貸長屋無益之參會致間敷候。都而小屋幕方等之儀質素に相心得、入ざる慰事抔に長じ、費ケ間敷儀勿論有之間敷候事。

一、餞別幷土産物堅可爲無用候。併身近親類等輕少之品も難成と有之候而は、却而情實に當り不申儀も可有之候間、至而近き親類等日用之粗品抔少々贈候儀は可爲其分候事。

一、足輕以下之者共も、尤小屋幕抔分限不相應之族無之樣可相心得候。御門外たりとも綿服之外は着用不相成、尤夏之服茂右に可准候。刀・脇刺拵も金銀相用候儀は堅不相成候事。

但、御家中家來若黨・小者之內にも、衣類等不相應之者も有之樣子に候。以來其主人より嚴重に可申渡候。

右等之儀に付而は、前々より被仰出之趣御參勤之時々申渡候へ共、追々嚴重被仰出之趣申渡候故、享和三年以來分而不申渡候。然處心得違いたし、麁服相用候儀は無之躰。其外無用之參會等之儀も每々嚴重被仰出申渡置候處、是亦心得違之人々有之躰に付、自今之儀嚴重可申渡旨被仰出之趣、天保六年御發駕前一統申渡候得共、年數も相立候事故、猶又今般改而右之條々可申渡旨被仰出候。追々嚴敷御省略等被仰付候得共、色々無御據不時御入用も指湊、且定式御入用も次第に相增、御勝手御運方御急迫至極之御時節に候間、一統奉恐察、猶以無用之費を相省、精誠遂勘辨、聊も御難題に不相成樣急度相心得可申儀可爲肝要候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々江嚴重可被申渡候事。

三　月

別紙寫之通美作守殿御渡、各樣江も可及御演述之旨就被仰聞候致廻狀候、以上。

三月七日　富永左膳

三月。諸士の生活を儉素にすべき從來の令を勵行せしむ。

〔小木文書〕

自他は自國他國の義

諸士風俗等之儀に付度々被出、就中近く茂被仰出候處、一端之事之樣に成行、無程相ゆるみ候而者、御意外之御事に被思召候。今度江戶詰之人々心得方之儀に付、被仰出之趣も有之、是迄度々被仰出候得共、中には暮方抔も兎角自由を構、おのづから銘々難澁に逼り候躰。依而自・他共儉素に相暮申可旨等、今度御發駕前御馬廻頭・御小將頭御前江被爲召被仰出之趣、中川平膳等申談有之候條、彌以他を不相見合、各志を相勵、是迄被仰出置候趣共無油斷可被相心得候。此上御趣意不致貫通而者、誠に以申譯無之儀に候。尙追々可申談儀も可有之候。

三　月

今般音地新兵衞殿被申談候趣別紙一通爲御承知相廻申候。御廻達留より御返可被成候、以上。

三月廿七日　　中川甚之助

四月朔日。前田齊泰登營して參覲の禮を行ひ、慶寧は病氣快癒を謝す。

〔諸事要用雜記〕

四月朔日

一、今朝六時御目覺、御湯相濟候上、御膳之時分か筑前守樣御供廻りに而御表江御出、御提灯引け御同道に而御登城被遊、於御座之間御參勤之御禮被仰上、筑前守樣に者於御白書院御病後之御禮被仰上。兩御丸共御參勤之御禮、幷筑前守樣御病後之御禮被仰上候。御禮御老中

御謁。筑前守様にも御白書院於御縁頬、兩御丸共御病後之御禮被仰上候趣、御謁に相成、相濟御同道に而御老中方御勤被遊、九時過御歸殿被遊候事。

〔官事拙筆〕

先達而申進候通、相公様益御機嫌能前月廿八日御着府、同廿九日上使戸田山城守殿御出被成、御懇之被爲蒙上意、且又御參勤之御禮可被仰上旨、昨晦日御老中方御連名之御奉書到來に付、則今朔日御登城被遊候處、於御座之間御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、御手自熨斗蚫御頂戴被遊、重疊目出度御儀恐悅之至奉存候。次に拙者共御供に被召連候處、於御白書院御目見被仰付、御威光故与難有仕合奉存候。委曲之儀は以御書被仰遣候御様子に御座候。右之趣可爲申進如斯御座候、恐惶謹言。

四月朔日　前田美作守

前田圖書

〔續德川實紀〕

四月朔日、月次の賀例のごとし。松平加賀守はじめ、參覲のもの二人。

四月二日。震災により江戸・金澤間の旅行は中仙道を取ることを屆出づ。

〔諸事要用雜記〕

四月二日

一、左之通御屆有之候事。

加賀守爲用事、家中之者並定飛脚之者順次中山道追分口より北國海道江懸往來仕候處、右道中筋今度地震に而、越後・信濃路之內皆潰之宿驛も有之、人馬繼立難相成躰御座候間、暫之內中山道より美濃・近江・越前江懸旅行爲致度奉存候。且又道中繼人馬之儀、一日十三人十三匹充繼立申候。順路之儀にも無御座候間、此段御屆申上候、以上。

四月　　　　　　　　　　　　　松平加賀守

四月二日。鹿島郡田鶴濱に火災あり。

〔御家老方等諸手控〕

四月五日

一、能州田鶴濱村二百六十軒餘之所、當二日出火、二百十六軒外土藏・納屋等三四十計燒失之由。

四月四日。前田慶寧の婚禮に際し節約を緩くすべからざることを告ぐ。

〔諸事要用雜記〕

四月四日

一、左之通美作守殿被仰渡、御近習頭へも申談候樣被仰聞、夫々申談る。
御勝手向御難澁に付、御儉約方之儀追々被仰渡置候通に候。然處連々御廉多に被爲成候に付而者、定式御入用次第に相嵩、其上不時御物入も指湊候付、專御調達を以御取續有之故、彌以過分之御借財に相成候。近年段々嚴敷御省略も有之候得共、中には其通に而相辨兼候品も有之、無據最前之通御改之儀なども有之故、御勝手御急迫之處御緩かに相成候趣に心得候人々も有之哉に候。今度筑前守樣御婚禮も被爲在候へば、彌増御多端に相成候儀に候處、右御慶事之折柄御調子合により、不斗御省略之御取締相弛候而は、自然与御平常向迄も押移、是迄之御僉議方立戻り候樣に相成候得ば、畢竟御勝手御運方被成方も無之御場合に至り可申。左候而者不容易御事に候條、猶此上御省略之儀無油斷精誠遂僉議、心付候儀は無泥可申聞候。
此段可申渡旨被仰出候事。

四月六日。前田慶寧、久留米侯有馬慶賴の妹崇姬に結納を贈る。

〔成瀨正敦日記〕

四月朔日
於親樣御歲幷御姓左之通。
一、御歲天保三壬辰年壬十一月二日御出生に而、當未御十六歲。

御姓村上源氏。

右之通御座候、以上。

三　月

一、親姫樣御諱之事御問合に相成候所、右之趣迄申來、御諱は御奥通御伺も有之旨申來。則御奥へ女中文に而崇子与被稱、御差支も無之哉与申來居、大村氏被相伺候所御宜旨御意に付、其段御廣式頭申渡被置候。依而崇子与御治定に成候事。

〔諸事要用雜記〕

四月六日

一、今朝從筑前守樣御結納被進候に付、表向八時過揃。依而七時過出席、服無地のしめ・同上下に而罷出る。

一、六時繰出候筈之處、彼是遲刻に成、提灯引宜段申上り、御表ゟ御出被遊、御式臺階上ゟ御出被遊、御結納被進候品行列御覽被遊候。筑前守樣には夜之內之儀に付、引出橋より御出、御溜へ被爲入、御對顏、重而御同所へ御扣、御表へ御出之節御同道被遊候事。

一、右御出之節、喬松丸殿にも御出可有御座旨被仰出、夫々申談、引出橋より御勝手通り、御使者之間後御廊下より、階上筑前守樣御脇へ被爲入之節御飾御覽、御同道被遊、新御廊下

中務大輔は久留米侯有馬慶頼にして弘化三年十一月兄頼永の後を相續

江御殘被遊候事。

但、後刻御道具之節も御出之筈。是は御出入衆も御越之儀に付、御式臺に而は御差支、依而裏御式臺へ被爲入候筈も昨日夫々申談、御横目幷寺田兵馬へも申談置候事。

一、九時前筑前守樣御入、無程御居間へ御通り、今日御祝之御料理、於居間御一集に御祝被進候事。

一、九時前御居間書院江御兩殿樣御出、圖書被爲召御意有之候事。

圖　　書

今日者首尾能大儀。早朝より大儀。

筑前守樣御意

目出大儀。

一、八時前中務大輔樣より御答禮、御家老御使者參り、御進物等彼是取しらべ中、御道具繰出之御付人、夫より昌平橋之御付人に而御表へ御出、大書院三之間に御見合之内三丁目來り、啓之介樣・右近殿御式臺階上疊之處へ被爲入、御出入衆は階上より御下へかけ被罷出候。

一、御前御式臺疊之處へ御同道御出、追付御道具夫々罷通、相濟八つ三分御入被遊候事。

一、八半時頃有馬樣より御結納御祝儀被進候。御答禮之御使者有馬大和參上、於御大書院御

口上御聞に付御出被遊、夫々御作法通り相濟、筑前守樣にも御作法通り相濟候。夫より重而御出、御直答是又御作法通り相濟候事。

一、七半時過御小書院御客御通り宜段申上、御兩殿樣御出御逢、熨斗相濟、御料理之御挨拶に而被爲入、筑前守樣に者御引菜上之口より御出、御上客啓之介樣・前田右近殿迄御引、其外者御給事人、相濟被爲入、御同所樣重而御出、御盃事夫々御料理相濟、御兩殿樣御出御挨拶、御直に御小書院溜今日之御取持之御方に付、御取持之御挨拶も被仰述、夫より大書院溜久留孫太夫殿、夫より御勝手座敷幷坊主衆溜江御立寄、夜六半時前歟夫々相濟候事。

一、右相濟、御囃子七番御手役者切り、御近習當番切拜見、夜四半時過相濟候事。

四月七日。前田齊泰・慶寧共に久留米侯有馬慶賴を訪ふ。

〔諸事要用雜記〕

四月六日

一、明七日增上寺御參詣御延引、同日六半時之御供揃に而筑前守樣御同道、左之通御勤可被遊旨被遊旨被仰出候。

御通被仰達候。

水戸樣

御通被仰達候。

中務大輔様

四月六日

〔諸事要用雜記〕

四月七日

一、五つ七分御出、昨日被仰出候通、水戸様等筑前守様御同道御勤被遊、八時前御歸殿被遊候事。

四月十日。今明日金澤の市民前田齊泰の旅中無事を祝して盆正月を行ふ。

〔毎日帳書拔〕

四月九日

一、今度下道中大變之様子之處、御道中益御機嫌能御着被遊候爲恐悦、明十日・十一日町中盆正月仕度旨相願、承屆候旨小紙申聞。

〔日家榮帳〕

一、殿様三月十三日御發駕、魚津に而三日御滯留。右大地震夜坂本御旅舘、御宿内指障り無御座、翌廿五日朝坂本御發駕被爲在候。同廿八日江戸目出度着被爲在候に付、四月十日・十一

右大地震は三月廿四日のものなるべし

日休日御國一統御祝申候。

四月十日。犀川・淺野川・手取川共に出水す。

〔御家老方等諸手扣〕

四月十日

一、昨日より大雨不止、今朝より風烈し。此間寒し。兩川出水、犀川橋往來止。夕景より晴。

四月十五日

一、當十日風雨、兩川共・手取川餘程之洪水、損所・水附家・御田地水押等多有之由屆有之事。

四月十三日。前田慶寧の夫人入輿す。

〔諸事要用雜記〕

四月十三日

一、今曉八時美作守殿爲御輿迎被罷越候。

一、今日御入輿に付六時過出席、相揃候上被爲召。

一、四時筑前守樣御出に而當席被爲召、今日御婚禮に付、其已來段々被懸御心御世話被成進、難有思召候旨御口上被仰上、則申上る。追付御對顏之趣被仰進、御居間江御通り、御熨斗配膳役上之、相濟御退出被成候事。

但、御直に御住居江被爲入候由之事。

一、今日御入輿前、御表御客衆江御兩殿樣御對顏之筈に候へ共、筑前守樣御取込にも可有御座、御前迄御逢可被遊候間、御居間御引取後御勝手に御扣被成候樣被仰進、則申上る。

一、今日御小書院御祝之御客出雲守樣等四時御出に付、御勝手座敷之御客も追々御越に付、御表江御出、御小書院上之口より被爲入。出雲守樣・啓之介樣・前田右近殿其外御出入衆兩頰に御揃、御出御挨拶。追付御料理之旨御挨拶に而被爲入。夫より御大書院溜御廣間上之間初而御逢小笠原又六郎殿、夫より御勝手座敷へも被爲入、御入被遊候事。

一、右之頃三田御出輿之御付人來候事。

一、四つ七歩昌平橋御付人に而御表へ被爲入、大書院三之間に御扣被成、本鄉三丁目御付人に而御式臺へ被爲入、追付御入輿御行列御覽被遊、益御機嫌能九時御入輿之事。

一、御供之御家老有馬大和・同御中老馬淵貢御表江相廻り、御料理相濟、御目見之習禮も有之。宜段申上り、八時過大書院江御出、御熨斗三方御表小將持出、御右御手寄江上之。美作守二之間上之方へ罷出、追付大和御家老代竹田市三郎誘引、二之間御敷居之內へ罷出交名唱候。此時今日者天氣も靜に大慶と御意。美作守御取合申上、直々御手熨斗被下旨同人演述。大和御次へ退き帶劍有之、罷出御取合之美作守座付之邊より膝行、御側へ進み御手熨斗被下、

退き御禮之時御手熨斗之御禮御取合申上。御使者退去、次に御中老馬淵貢御次第同前。相濟御留守居中村和三郎組頭誘引、御目見御意無之。相濟御入被遊候事。

一、八半時御表御客御大書院に而御盃事宜段申上候。御緣頬之方啓之介樣・右近殿、御襖之方出雲守樣、夫より御出入衆何も兩頬に御座付、御吸物膳、御土器三方・御□三方兩頬へ一向充指出、御相伴衆江者數之御土器指出。御前上之口より御出、啓之介樣御盃事、其御盃右近殿、相濟御襖之方出雲守樣御盃事被遊、御納。夫より數之御銚子に付、其間御休息之御間に御見合被爲入、御吸物膳引候上御出、御退出に付御挨拶、相濟御入之節、御料理之間通に而寶生大夫御通懸御目見。夫より御□□之間に今日之御取持衆御溜、其處へ御立寄、夫より御居間書院江御着座。美作守今朝御輿迎相勤、披候上被爲召候筈之處、彼是御取込に付、只今被爲召、左之通御意、御禮申上退去、相濟御入之事。

美　作　守

今日者早朝より大儀。首尾能大慶。

四月十三日。前田慶寧夫人を東御前と稱せしむ。

〔御家老方等諸手扣〕

四月十二日

一、當十三日親姫樣被御引移之上東御前樣奉唱候樣被仰出。

親姫は崇姫なり

四月十五日。德川家慶、前田慶寧の成婚を祝して物を贈る。

〔諸事要用雜記〕

四月十五日

一、今日御婚禮濟爲御祝儀、御兩殿樣江上使有之に付、姫君樣江右御案內御使之儀御近習頭へ申談る。

姫君は前田齊泰夫人

一、筑前守樣五半時御上り被遊候。御同道に而御表へ被爲入、上使御都合夫々御一　被爲在候事。

一、御本丸より之上使村田幾三郞殿四時過御越、御兩殿樣御出向、夫々御作法通り相濟、御受之後筑前守樣に者御式臺へ御出被遊、御先立、大書院三之間之外御廣間取續御廊下へ御出向、御先へ被爲入、暫御入被遊。重而西丸より之上使石卷猪十郞殿御越、從右大將樣・御簾中樣御拜領物有之。夫々御本丸之通相濟、被爲入候節、御勝手座敷幷坊主溜・啓之介樣へも御對顏、御入被遊候事。

一、右相濟御膳被召上、筑前守樣にも御辨當被召上。無程御奧へ公方樣より上使村田幾三郞殿御越、夫々御作法通り相濟、御菓子濟寄に、御本宅より御案內に而、御兩殿樣御同道、引

出橋より御出被遊、御廊下に暫御見合、御用達より御左右に而、御書院御襖御近習頭開之、御出御挨拶被遊、御兩殿様御送等無之、直に被爲入候。夫より上﨟差支代り表方佐山罷出、御請有之相濟候事。

一、今日上使御退出後追付之御供揃に而、兩丸御老中御勤に付、御口上書聞番より下物差出、調箪申談、校合之上入御覽、聞番へ相渡す。

一、九半時過御出、御同道に而御老中御廻勤被遊、八半時過御殿に御戻り之事。

四月十六日。東本願寺前門主越前吉崎に下向するを以て、百姓の參詣せんとするものは裁許十村の許可を得べきを命ず。

〔郡方御觸〕

近々東本願寺先御門主、越前吉崎に御下向之由に候。先年茂同所に御下向有之、門徒之者冥加錢等指出申儀、曁參詣等堅不相成段、天保九年之節改作方・御郡奉行より申渡置候得共、其節密に參詣等いたし候者茂在之、御締方行屆兼候体に候條、此度之儀茂前々申渡通、嚴重可相心得儀に候。併稀成儀に付、其内耕作方指障にも不相成、參詣致度もの在之候はゞ、其段裁許に相達、聞屆を請罷越可申候。乍然密に罷越候者於有之者、嚴重可申付候。此段夫々可被申渡候、以上。

四月十六日

高 澤 平 十 郎殿

大嶋五郎右衛門殿等

右寫之通申來候に付、相越之候條、得其意、參詣等堅不致樣本文之趣不相洩樣可申渡候。併稀成儀に付、其內耕作方指障にも不相成、參詣いたし度ものは、其段其許中ゟ爲相屆、指遣可申候。先々早速相送り落着より可相返候、以上。

四月十八日　　大嶋五郎右衛門

能州四郡十村中

本年四月二日の條參照

四月廿四日。震災により信越の通過困難なるを以て中仙道を取るべきを命ず。

〔小木文書〕

今度地震に而、越後・信濃路之內皆潰之宿驛も有之、人馬繼立難相成躰に付、御家中之人々幷飛脚之者、暫之內中山道より美濃・近江・越前ゟ懸け旅行之儀、道中御奉行深美遠江守殿ゟ御屆有之候條、當春交代等之人々、右街道より可致通行候。宿賃等茂右之圖りを以割符有之筈に候。

右之趣被得其意、組・支配等不相洩様、一統可被申談候事。

未四月

別紙中山道より旅行之儀に付、遠藤數馬殿より兩通之趣被成御承知、先々早速御廻落着着より御返可被成候、以上。

四月廿四日　　　　　　　　　　山本辨左衛門

小本孝吉樣

四月廿五日。徳川家定、前田慶寧夫人に物を與へて成婚を祝す。

〔諸事要用雜記〕

四月廿五日

一、東御前樣江、今日右大將樣・御簾中樣より、御婚姻爲御祝儀、以御女中衆奉文を以一種一荷充御拜領被成候。且右御禮女使を以從御前御勤、兩御丸御老中方へは其段御屆、筑前守樣より者兩丸御老中へ御禮、大奥へも女使、御身當りよりも女使之事。

一、今日御婚姻御整に付、御内證より今日公方樣御初江、御前・筑前守樣・東御前樣より御獻上物、相濟女使佐山相勤拜領物被仰付、右御禮者女使序に被仰上候事。

五月朔日。前田齊泰夫人江戸城に登る。

〔諸事要用雜記〕

五月朔日

一、今日姫君樣爲年始御本丸へ御登城、夜五時過歸御被遊候由之事。

一、右に付御出前幷御歸殿之上共、女使例之通。女使伺申談候事。

五月二日。前田齊泰、慶寧の成婚を祝し能を演ず。

〔諸事要用雜記〕

四月廿三日

一、近々御參府後年頭、幷今般御婚禮濟御祝被爲兼、姫君樣へ不押立御料理被進、筑前守樣・東御前樣江も御料理被進、喬松丸殿・和田倉御前樣・壽正院樣にも被爲入、御料理被進、其節御能も可被仰付候。右主付御近習頭共內被仰付申談候。御日取之儀者追而被仰出候事。

五月二日

一、今日御招請に付、提灯引け三人共出る。

一、筑前守樣六半時過御上り、長圍爐裏通り、燕之御間に御溜代り出來、御持參之御品御近習頭を以被上、無程御廣緣通り御居間へ御通り、御奥へ被爲入候事。

但、御刀も右御廣緣通り相通り候。御戻りは御能濟候上に候へば、毎も之御溜に相成筈。

其節者御刀、御近習番へ入相立候而出し候筈也。

一、今日右大將樣御成に付、中入過に和田倉御前樣御出之筈。依而暫御遲に付、御能者無御構御始め之筈也。

一、六半時過池之端樣御出之由に付、例之通御白洲へ一兩人當席ゟ罷出る。和田倉樣者五時過御出、是又罷出る。

一、肥後守樣兼而御約束に候得共、右大將樣御成御門前通御に相成、依而御出不被成候。出雲守樣等御三方樣は御出被成候。於御見物所麵類、幷御中入後御提重等指出候筈に御客方へ申談る。且御出入衆・坊主衆も御能拜見有之候事。

一、和田倉樣御入御遲刻に付、初め御三獻之御都合之處、御中入之事に相成候。依而御同所樣之外御揃之上御熨斗、無程御能御始と相成候事。

一、御中入御三獻幷御料理被進、其節例之通御銚ゟ當席一人充立合之事。

一、望月御能相濟、御兩家樣へ御對顏被遊候事。

一、御能七半時過相濟、夜六半時御締御用無御座旨に而、夫々立合引受候事。

一、御婚禮濟御祝に付、御到來之御肴御吸物に被仰付、年寄中等御次廻りへ夫々頂戴被仰付候事。

一、和田倉樣等御戻り之時分、御白洲へ罷出候筈に付、大村氏被相殘、御二方樣共御戻之節被罷出、四半時頃御戻り被遊候事。

五月六日。江戸に往來する者の中仙道及び北國街道中便宜の道路を擇ぶべきことを告ぐ。

〔成瀬正敎日記〕

別紙美作守殿御渡、各樣江も可及演述旨被仰聞候付、爲承知寫相廻申候、以上。

五月六日　　　　多賀建物

富永左膳

成瀬主稅樣等十二人

組頭江

信州路異變に付、御家中之人々を初木曾街道通行之儀、先達而申渡置候通候。然所北國海道人馬繼立難相成場所は、相對雇に而繼立候得ば道路通行相成可申体に付、御家中之人々を初、指急候御用向に而致旅行候者は、中山道追分宿より北國海道江相越、人馬繼立相成候宿驛は御定之通繼立、尤指支之場所は相對雇に而通行之儀、道中御奉行衆江御屆相濟候條、交代等右兩海道之內勝手次第可罷越候。發足方之儀は猶更會所承合可申候事。

右之趣夫々可被申談候事。

五月十三日。前田慶寧の當秋に於ける歸國を廢すべき年寄中等の意見を決定す。

〔官事拙筆〕

五月十二日

今朝播磨守より被出之。

一、筑前守樣當秋御國江被爲入候御内定之處、信州路異變に付、只今之處往來差支、追々常往來は支不申而も御通行は迚難被爲成可有之に付、外街道御通行之儀御伺等有之、夫々御願立可被遊思召に被爲在、猶更遠江守等了簡も無之哉御尋之趣江戸表より申來候。御同所樣御儀は江戸表御誕生故、江戸表之儀は御地盤之御居處之樣に被思召、御國に被爲入候儀は他處江被爲入候樣之思召も有之。此思召御立直不被爲在候而は、往々御國江被爲入候儀を御いとひ被遊候樣に被爲成候而は、何歟に付御爲宜ヶ間敷。依而當秋之處何卒御國江被爲入候事に相成候樣、御附之人々より段々申上候趣も有之。御成立之御爲には御國江被爲入候儀可御宜、遠江守等了簡に候。併此間申聞有之候趣に而、當時之御勝手振故、今・來年にも如何共被成方無之樣之處江可被爲到哉。此間心付申聞之趣は、一通り御入用而已之處を以被申聞候儀与

存候。右段々無御據御樣子も有之故、此等之處も奉恐察、各存寄承度旨御算用場奉行一統相招申聞候處、御勝手向之儀は當時御調達而已を以御取續之事故、何程御不足与申に而も無之、御調達さへ出來候得ば無御支儀に御座候。當時御議定も宜敷故、隨分御調達調候得共、御借財は次第に相增、畢竟如何可相成哉与何も心配至極仕候。依而は被爲成候程萬事御欠不被爲成而は不相成儀与奉存候。其上近年打續色々御物入も有之、當年は御婚禮に付不時御入用、此後も右御廉に付指定り御入用も相增、且又信州筋異變に付交代人等中仙道往來に相成、此等に付而も不時之御費相懸り、此後も下筋御本陣等より定而願方も可有之、何歟に付當年は餘程之不時御入用相增可申事与奉存候。先日も御達申候通、當秋外街道より御通行被爲在候へば、來春迚も御同樣可有御座、左候得ば相公樣御歸國も又外街道可被爲成、纔半年之內三度之外街道御通行に相成、過分之不時御入用相成申候間、何卒被爲成候儀に候はゞ、當秋之處は御猶豫被爲在候樣仕度奉存候。當秋御國ゟ被爲入候得ば、差當て加樣之處御手支有之与申に而無之故、達而御國ゟ被爲入候儀御差留申上候事は仕兼候得共、御借財次第相增候而は御議定も立兼可申、左候へば只今之樣之御調達も調申間敷、其上當年順氣之處も如何可有之哉。若不作等有之候而は、此御取扱方被成方も六ケ敷のみならず、世上之樣子も違候へば、御調達之處も其先々指支候へば無覺束儀に奉存候。何れ御調達而已を以御取續之御勝手向に

候へば、甚危御勝手与申ものに候間、此處得与御詮議御座候樣仕度、御成立之儀は何共申上兼候へ共、當秋御國江不被爲入迚、往々御國江被爲入候儀御厭被遊候處江被爲至候与申に而も被爲在間敷哉。思召さへ被爲立候得ば、御國江被爲入候儀は如何樣とも可被爲成儀、思召不被爲立候時は、たとひ當秋御國江被入候とも、往々御國江被爲入候儀御厭不被遊樣被爲成候共難申上候与奉存候。其上去々年も秋御國江被爲入、御在國之内御行歩等は毎度難被爲成、又當年も秋御國江被爲入候而、毎も時節之惡敷折御國江被爲入候樣に相成候而は、却而如何にも可被爲在哉。此上當秋彌御國江被爲入候儀被仰渡候共、私共初御勝手方之人々に而も御尤之御儀とは不奉存候。併御附方之人々に而は了簡も違可申候得共、私共に而も其處親敷不奉存事故、左程には不奉存候。夫よりは此御時節不時成御入用相増候儀、何共恐入申候間、此上得与御僉議之上被仰渡候樣仕度旨等、段々申聞候事。

五月十三日

一、各相揃候上、前に有之當秋筑前守樣御國江被爲入候儀御猶豫之詮議之趣、江戸表江可被申遣返書下物於奥之間入披見、及示談候處、申合も有之候上、各存寄も無之旨に付、明日出早飛脚歩申遣候筈。

五月十四日。先に中仙道通行を命じたる令を取消し、通常の如く北國街

道を取らしむ。

〔小木文書〕

定番頭〻

今度地震に而越後・信濃之內皆潰之宿驛茂有之、人馬繼立難相成躰に付、御家中之人々幷定飛脚之者、中山道より美濃・近江・越前〻懸旅行之儀申渡置候得共、此節人馬繼立方申渡有之、十三人十三疋繼立之儀指支不申旨に付、御家中交代等之人々下通り可致通行候。

右之趣被得其意、組支配――以上。

未五月

別紙之通り旅行之儀に付、九里步殿より兩通之趣御承知被成、先々早速御廻、落着より御返可被成候、以上。

五月十四日　山本辨左衛門

小木孝吉樣

五月十七日。前田齊泰、慶寧等と共に平尾邸に臨む。

〔諸事要用雜記〕

五月十七日

一、今日御下屋敷御出に付大村氏被罷出、其段昨日奥御取次を以申上る。六半時御供揃に付、提灯引け出席。御膳後不被爲召候へ共、三人共御居間へ罷出る。兎角折々降、御乘切りも被遊筈之處、御不都合に付暫御見合之事。

一、五時過追々晴に付、筑前守樣中之口通り御上り、御供廻之上、御廣式ゟ御案内申上。喬松丸殿御出、南御門通り御下屋敷へ被爲入、中之口前御通り之御案内に而、筑前守樣一先御溜へ被爲入、直に中之口より御出御扣。追付御前御出、御馬乘に而筑前守樣御同道、南御門より御下屋敷へ被爲入候事。

一、御供廻りに而御途中御相乘之人々、當席初追分より御先ゟ出、松平甲斐守殿御下屋敷より御相乘之筈に候事。

一、喬松丸殿右同所邊迄御先へ被爲入、夫より御同道、御早乘被爲在候在候筈之事。

一、七半時過御下屋敷より御歸殿被遊候。尤御歸殿後御機嫌伺等無之。

［諸事要用雜記］

五月廿一日。會津侯保科容敬・容保父子本鄉邸に臨む。

五月廿一日

一、例刻出席相揃候上被爲召。

一、四時過肥後守様等御出宅御付人より追々來り、同半時頃御兩殿様御出向、御小書院へ御通り被遊、緒之御吸物御盃事被遊、御引菓御前御持參、相濟御入、御膳被爲召上候。

一、若狹守様御口上之內、筑前守様へ此度御婚禮之御禮有之に付御盃事有之筈に候得共、御斷に而御盃事不被遊候事。

一、御料理前御盃事之內、若狹守様へ御刀、御出入內藤遠江守殿御持參被進之候事。

一、御出前御先使者以、左之通御進贈被成候事。

會津蠟燭三百挺　若狹守様より

吸物椀五十

鮮鯛一折

交御肴一折　肥後守様より

一、御料理相濟、御休息之御間江被爲入、御裝束御直被成、九時過御兩殿様御小書院上之口より御出、御前御誘引に而燕之御間より御廣縁通り御通り、御兩様御見物所之邊より□之者御出向申、御先立代り合直に御居間縁通り御庭へ御出、喬松丸殿に□口外へ御出向御挨拶。夫より筑前守様御跡に付御同道、直に□御物見へ被爲入候。坊主者御休息之間前より出、御庭之內始終御附添申候。夫より傘之御亭へ被爲入、御涼臺に暫被爲入。夫より

御馬見所江御上り、追付三亥父子幷宗益出、席上書畫被仰付、其内御吸物幷御提重出、都而坊主衆御取持仕。餘程御間有之、夫より豫而可被進御約束之御馬兩疋を牽上げ、御馬見所前へ御下り御覽被遊、二三篇爲走、御用無之に付牽入。夫より重而所々御廻、高山下御亭へ被爲入、御茶上之、高山へも御上り、夫より新御亭へ被爲入、御吸物・御硯蓋上之、御住居より被爲入候。御置物之内へ御くわし入有之分御取はやしに相成、羹物幷に當座鮓御指身等出、――などゝも被遊。同所に而日暮、御表夫々宜付、坊主衆より申上御引取に相成、最初之通り御誘引に而、御小書院上之口より御通り、御兩殿樣共下もへ御引退。其節御小漬之御挨拶被遊、被爲入。御小漬相濟、御兩殿樣共御出、御挨拶之上追付御退出。例之通御式臺階上迄御送被成、直に坊主衆へ御意、暫御大書院上之間に御見合、御勝手座敷宜に付被爲入、御挨拶相濟御入被遊候事。

一、於新御亭拙者共三人共被爲召御意、御盃被下候事。

五月廿六日。能美郡の百姓等、小松本蓮寺に押寄せ騷擾す。

〔官事拙筆〕

五月廿七日

一、今夕小松町奉行より左之紙面到來。

小松町西照寺・能美郡園村來生寺、一昨年東本願寺より持下り候御書一件に付、昨廿六日夕小松町本蓮寺江百姓躰之者罷越、同夜同寺江押寄打毀候旨致內達候段、同寺より町會所江及內達候に付、寺庵には候へ共私支配處に罷在候儀、自然百姓共町方江騷込候而は、若町方之者共致心得違入交出候儀も出來可申哉与、爲御縮方手先足輕并町役人共等夫々致手當置候旨。此節梯川水高にも御座候故、水防之趣に仕事々敷無之樣に取計置候段、町方等御用定番御歩野崎覺太夫等より飛脚を以申越候付、此段御達申上候。早速御縮方夫々被仰渡候樣仕度、指懸候儀に付先盜賊改方并御郡奉行江も私より及演述置申候。猶更異變之儀御座候へば、早速御達可申上候。尤右之趣罷出御達可申上筈に御座候へ共、風邪難儀仕候に付先紙面を以御達申上候、以上。

五月廿七日　　　　　　　　服部貞右衞門

奧村助右衞門樣

五月廿八日

一、寺社奉行より與力を以、當廿六日小松本蓮寺江百姓躰之者罷越申聞之趣有之、同處町奉行より演述に付、役僧呼立尋候處、其譯百姓躰之者罷越、下女江申捨にいたし立去行衞不知。其後何等異變も無之故不達申、併替儀も候得ば早速可相達旨申聞候旨、執筆迄申越候事。

一、御算用場奉行水原清五郎別席に而、右之一件御郡方足輕より指出候紙面別紙共三通出之。若外より御聞も有之候而は如何与先入披見候旨申聞。則受取置候。右は百姓騷込候与之內通等有之、小松町方手當方出張餘り嚴重過候風說等、委細書略之事。

一、前段御算用場奉行江爲念心得談置候儀故、改方武田九郎兵衛も呼に遣、及遲刻候故私宅江參出候樣爲申遣、今夕自分宅江參出に付、書院於二之間逢、小松町奉行幷御郡附足輕より申越候紙面も爲承知爲見、心得方爲念申談候處、是又此間演述之趣も有之、早速手先之者呼寄遂評議、今朝十人計遣し、內通等に罷越候躰之者など候はゞ早速引揚參候樣申談遣申候間、尤油斷は不仕旨等申聞候事。

（割註：拙宅は中川八郎右衛門）

五月廿八日。大聖寺侯前田利平、關東筋川々普請を命ぜられたるを以て使者を金澤に遣はして助資を求む。

〔御家老方諸手扣〕

五月廿八日

一、野口岩佑等五半時前拙宅江來、備後守樣今度於江戶表關東筋川々御普請被蒙仰、難有御仕合被思召候。末公邊より御ヶ條は不被仰渡候得共、過分之御上納金に可相成、江戶表に而御願被仰上候筈。此表江御詮議も可有之候間、何分宜取計之程御賴之趣覺書に調、口達相添

申述候。御先例之處御上納高如何程之者と相尋候處、一萬三・四千兩彼是一萬五千兩計之者と申聞、委細相調御勝手方席江出置候。且只今御願之高も相知不申事、外に御用も有之間敷、今日にも被引取候哉と相尋候處、御指圖次第罷歸可申旨申聞に付、尚更今日出席之上申合、以紙面令申進旨申入置候事。

五月。祠堂銀借用の家中にその返濟方に關して告ぐ。

〔觸　留〕

定番頭江

寶圓寺等御寄附祠堂銀幷御寺方等祠堂銀、前々御家中之人々借用之所、天保十一年諸上納打込等に被仰付候得共、祠堂銀之儀は右利足を以年々御寺務方御趣意に付、無利足打込には難相成品。併ながら御寺方等渡り高幷裁許之者渡り方も減少之上、七朱三十ヶ年賦に相改候儀承届置候處、借用之人々不會得之族茂有之躰、返納方等閑に押移、當時御寺方等三季渡り方差支、御算用場より借用を以相渡候場に至り、際限茂無之次第に候。依之今般右場江茂申渡、段々巨細に取しらべ之上、惣貸付高之内御算用場銀幷寺社所調達銀等、祠堂銀に不相當分結込貸付に相成居候故、借用人不心服与茂相聞候に付、右場銀子も有之候得共、今度格別之趣を以右銀高都合四百七十七貫九百目餘見消之儀遂詮議候所、當時貸附高一貫目に付百七十三

匁宛借用人手前見消に相成候。且又殘元高之内、今石動幷城端宿用銀、先年祠堂銀江結込貸付方承届置候分、當時借用高に致割符候得ば、元高百目に付六匁一分六厘宛相當り、此分見消には難相成候得共、祠堂銀等打込置候儀不可然。依而此分當時利足御償、無利足五ヶ年賦を以當年より御算用場江別取立に申渡候條、右場江可差出候。殘元高全祠堂銀に付、御仕法前之分改而當年より三十ヶ年賦、御仕法後之分二十ヶ年賦、兩樣共利足是迄之通相心得、證文相改可申候。御當節右樣御取扱茂有之儀致會得、是以後每歲限日通聊無遲滯寺社所江可指出候。

但、證文改方等之儀は寺社所可承合候事。

一、當時元利滯居候分、此度元高江結込證文相改可申候。前段之通仕法相改候上、若返納方遲滯有之人々は、收納米之御算用場において致除知、每歲半納平均直段を以元利共爲遂差引可申事。

一、當年より祠堂銀新借用之分、利足一步之筈に候事。

右之趣一統可被申談候事。

未五月

六月九日。前田齊泰、子女の養育方を簡易にすべきことを命ず。

〔成瀬正教日記〕

六月十八日

一、有賀氏より以内狀、當九日出町飛脚到來之御用狀、幷大野氏等より之内狀も送り被越受取遣す。

御子樣方御養育方之儀、御自分樣御發途前御直に御意被爲在候通に付、別紙之趣御廣式頭江申談、年寄女中等江も夫々可申渡旨被仰出候。右之御儀に付、榮操院樣御内意も有之御樣子候間、猶更別紙之趣被申上、自然御同所樣御好之御趣意も有之候者、宜取計引直、夫々被申談候樣被仰出候間、左樣御心得可被成候。右之趣爲承知播磨守江も申達置候被仰出候條、宜御取計可被成候、以上。

六月　　大野織人

　　　　大村肴次郎

成瀬主稅樣

御子樣方御養育方、近年次第御嵩高相成、追々御出生茂可有之候處、ケ樣之譯に而者、却而御成立方にも宜かるまじく被思召候。仍而御仕來に不拘、格別御手輕に御養育方之儀、遂僉議候樣被仰出候。

弘化三年九月二日の條參照

六月十四日。長氏與力河野久太郎の松下健作より傳習監造せる大炮の試射を出願す。

〔大砲御用留〕

一、六月十四日今日御筒目方等達る。

覺

一、モルチール　筒重六十八貫目
鐵丸重五貫三百目
臺重七十貫目計

一、ホイッスル　筒重百三十五貫
鐵丸重二貫二百目
車臺重二百貫目計

一、野戰筒　筒重二十六貫五百目
鐵丸重九十八匁
臺重三十一貫五百目

右昨年松下健作鑄立候大砲、當七月中に樣打爲致度奉存候。但臺金具等仝出來仕候上は、每年稽古打仕度奉存候。此段宜被仰上可被下候、以上。

六月十四日　　河野久太郎

小林紋太夫樣

大原十郎左衞門樣

小林平右衞門樣

長右衞門樣

河野は長氏の仕與力
小林以下は長家の家臣

六月十五日。前田齊泰の子利順諱を受く。

〔諸事要用雜記〕

六月十五日

一、犬松丸殿へ御實名被進候に付、御出之儀此間被仰進置候處、今晝前引出橋通り御出、御居間書院御緣頰御屛風圍之內に御溜、御近習頭被爲召、御出之趣被仰上。追付御居間へ御通り之儀被仰進、則御通り、御居間二之間入口に而御脇刺御取、直に二之間へ御出、御目通りに而御中座、御左之方御襖際より横疊三疊目に御着座。其時御實名被進候段御意、御前ゟ御實名御右筆調筆之分御小蓋にのせ上置、自御手被進、御頂戴御復座之上、御熨斗三方配膳役上之、目出与御意、難

有思召に而御請被仰上、直に御退出、御三之間に暫御扣之上、御居間江被爲入候樣御取次を以被仰進被爲入候上、御花押折懸包に而御小盞にのせ、包のし添、御直に被進、御頂戴御退去。右御禮當席被爲召被仰上、御退出之事。

但、御近例通り御禮御使者御肴一折被上候等。方々樣へは御普爲聽等無之。

一、被進候御實名左之通、陸原大次郎考上る。

御實名　利順(トシヨリ)

周易下象傳云。利有攸往順天命。

六月。家中の人々に先祖由緒一類附帳を改めて提出すべきことを命ず。

〔觸　留〕

定番頭江

年寄中席江御家中之人々先祖由緒一類附帳、先達而差出置候處、年月を經候間、此度增減等相改、當八月中迄に可差出候。帳面口張等に不及候。本組與力、且御步等之內御知行被下候人々之分茂、最前之通可差出候。當時御咎被仰付置候人々は、代判人より可指出候。舊宅之分は跡目相續被仰付候上早速可差出候。將又以後跡目等被仰付候時々無違失可差出候事。

右之趣組・支配有之面々江可被申談候事。

六　月

七月八日。家中の人々江戸往来等の際の荷物に過量なからしむべきこと戒む。

〔觸　留〕

御横目江

御家中之人々江戸表往來之節、荷物目形御定より過貫目相成居候人々有之に付、近年道中御奉行衆より被指越候趣等時々申渡置候得共、今以心得違之者茂有之躰に而、此度追分宿改所より取縮方之儀等嚴重申越候趣有之候。是迄數度相觸置候通に候處、等閑之至に候。此上公邊より御察當有之處江至り候而は、不容易儀に候條、過貫目無之樣嚴重相心得可申旨被仰出候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々江申渡候樣、夫々可被申談候事。

七　月

別紙之通夫々可申談旨、御城代播磨守殿被仰聞候條、御承知被成、御同役御傳達、御組・御支配御申談可被成候。且又御組等之內裁許有之面々者、其支配江茂不相洩相達候樣御申談可被成候、以上。

七月八日　　御横目

組外御番頭衆中

七月廿三日。長氏の與力河野久太郎の監造せる大炮を石川郡打木濱に観る。

富若は長又三郎連弘の子連恭

三島續は人名なり

〔大砲御用留〕

一、七月廿三日去年以來被仰付候大砲、今日御退出後於打場御覽被遊候に付、夫々餝置候事。

一、夕八つ半時御出、富若樣も御同道に而御出御覽被遊候。

一、全御出來之品野戰筒迄なり。ホイッスル並モルチールは全く出來不仕候に付、臺迄御覽被遊候。右相濟、小筒之調練十二人組御覽被遊候。三島續十二手續入御覽候。右相濟候而、まだしきもの御覽被遊候段被仰出候に付、山本與五郎・河野文太郎十二手續御覽被遊候。

一、野戰早打之手續入御覽候。

一、シユンドルス水中に入候而御覽に入候。

一、粉藥入。シユンドルス入。ヘイプ入。

一、ゲツインドロンドを燒入御覽候。

一、ホイスを燒入御覽候。

一、大坂鐵の大割・小割・千割・向鎚地等御覽被遊候。

一、右相濟、御目付被仰付。

其以來何茂入情にいたし、ケ樣に相成御悅被遊候。調練を何茂入情にいたし候哉、能揃候。

社中江も宜可申入旨御意被遊候事。

七月廿五日。河野久太郎、その監造せる大炮の試射を石川郡打木濱に行ふ。

〔大砲御用留〕

一、七月廿五日曉七つ時頃、篠原監物殿・御嫡子勘六殿・御次男釆女殿御出之事。

一、町旗幷圍繩は十五町迄昨日張置候に付、今曉未明に町旗二十町迄、圍繩も仝爲張候事。

一、昨日暮合迄に土俵仕懸致置候に付、今朝夜明候而直に筒樣致候事。

一、朝六半時過野戰筒一つ・小ホイッスル樣打、五時頃又右之通り樣打、何茂無難之事。

一、五半時頃ホイッスル樣し、又モルチール樣し、又篠原殿モルチール樣し無難なり。又四時過右之通樣候處、何茂無難なり。

一、九時頃よりモルチール稽古打、但土俵。篠原殿モルチール稽古打、但臺敷板有之候。ホイッスル稽古打、但土俵。夕八時頃に野戰筒臺に懸、三發致候事。

土俵とあるは車臺の未完成なるによる

一、モルチール相濟次第爲認候。又野戰筒も濟次第爲認、追々金澤江迄遣候。玉箱も跡より爲認迄遣候事。

一、十一月十四日重五郎來り、御筒に銘彫候事。

一、モルチールの銘。

十二貫目玉筒。弘化三年十月十七日鑄造。同四年七月二十五日様之。江戸住松下藤原正綱。鑄匠江戸住長谷川常次郎。監造河野久太郎。

弘化四年三月、木匠野村理三郎。同金澤住登澤次作。同同千田安兵衞。

弘化四年七月、鐵匠金澤住中條屋新右衞門直行。

一、ホイッスルの銘。

六貫目玉筒。弘化三年十月廿五日鑄造。同四年七月廿五日様之。江戸住松下藤原正綱。鑄匠江戸住長谷川常次郎。監造河野久太郎。

弘化四年三月、木匠野村理三郎。同金澤住登澤次作。同同千田安兵衞。

弘化四年十月、鐵匠金澤住中條屋新右衞門直行。

一、野戰筒の銘。

百五十目玉筒。弘化三年十一月十日鑄造。同四年七月廿五日様之。江戸住松下藤原正綱。

鑄匠江戸住長谷川常次郎。監造河野久太郎。

弘化四年三月、木匠野村理三郎。同金澤住登澤次作。同同千田安兵衞。

弘化四年四月鐵匠江戸住松尾仙太郎。

七月。郡奉行、その役所に張文のありたる時御算用場に持參する手續を改めんことを稟請す。

〔上田舊記〕

私共役所等に張文有之節、御算用場江持參、御横目立合開封可仕儀に御座候處、遠所江引越人張文有之毎に出府仕候而者、支配所御用支に相成候儀も有之。且又加州・能州向に而も、兩人共出役中張文有之、御用先指支、引戻り御算用場江持參仕兼候儀も可有御座。依而以後張文有之節、支配所等御用に而指支御算用場江持參仕兼候節者、添紙面を以相認、手先留書爲持、御算用場江指出可申候間、於御場御横目御立合御開封之上、樣子被仰談候樣仕度候事。

弘化四年未七月　　　　三州御郡奉行

七月。藩の收納藏の設備に關して令す。

〔岡部舊記〕

諸郡共御藏之下々敷取替方、等閑之族に相聞得候。元來下々敷之儀は、古ぬか等取除、年々新たに出來可申筈之處、右樣等閑に相成居候儀は、代官共においても不行屆次第に候。依而當御收納米積入迄に早速取替、掃除方等入念に相心得候樣可申渡。尤當八月中旬より拙者共出役致見分候條、可得其意候。將又中には御藏番人幷代官裄等江、下敷請負之姿に相成居候ヶ所も有之躰。右樣之儀は甚不相當儀に候條、以來右樣之儀無之樣、急度相改可申候。且又先達而申渡置候りん木之儀も、追々無油斷遂詮議可申事。

右之趣夫々可得其意候、以上。

弘化四未七月

改作奉行

諸郡御扶持人中

組裁許中

八月三日。德川家慶、前田齊泰等に放鷹によりて獲たる雲雀を贈る。

〔御家老方諸手扣〕

八月十一日

一、當三日相公樣・筑前守樣御鷹之雲雀御拜領之由、江戶狀到來相廻今枝より來。

〔諸事要用雜記〕

八月三日

一、今日筑前守様御勝不被成候に付、上使之節幷御廻勤も御名代備後守様へ御頼に相成候。

昨日市三郎等より相伺、同人より聞番へ申談、備後守様へ御使者相勤候由之事。

一、□半時頃御表へ御出、備後守様御名代御勤に付、上意御拜聽之御習禮被成進、相濟御入被遊候事。

一、八時前爲上使御使番松下善太夫殿御越、例之通御出向、筑前守様御名代備後守様にも御作法通り御出向有之、上意御拜聽、夫々御例之通相濟、御請被仰述、御退出、始之通御送り被成。御入之節御勝手座敷等所々御逢被遊候事。

但、上使御通り候上八時打候事。

一、御時刻も移り候に付、御登城は不被遊旨被仰出候事。

八月八日。前田齊泰の子利順の居を御表に移すべきことを報ず。

[御家老方諸手扣]

八月八日

一、喬松丸殿御奥に御暮被成候得共、次第に御成長被成、御稽古事有之に付御表御住居被仰進、燕之御間假板圍被仰付、當分御住居に被仰出、御しつらひ御入用三十二貫目餘之由江戸

表より申來。

八月廿四日。前田齊泰の子直會金澤に生まる。

〔成瀨正敦日記〕

八月廿四日

一、八つ半時過御廣式頭より內々申越、御產婦之方催之樣子に候間退出相見合候樣申來、見合罷在候所、暫有之、御廣式頭より以紙面、御產御催之旨申越候事。右に付今日出先指留置候樣會所へ申遣置候。

一、暮前永原貢御次迄罷出、御產婦之方八つ半頃より御催之所、申之中刻御男子樣御出生被遊、卽刻森快安等相診之所、御丈夫に被爲在候旨申聞候段、貢申聞候事。

〔見聞袋群斗記〕

八月廿四日申の刻、於二之御丸御廣式御男子御誕生、蟇目御用奧村助右衞門なり。

八月廿四日。下曾根金三郞製作の揚火玉江戶より到着せしを以て、小川群五郞にその模造を命ず。

〔成瀨正敦日記〕

八月廿四日

一、下曾根金三郎殿製作之揚火玉二つ、幷唐金筒一本、江戶表より到來。右は平井善棠より上候分に候間、小川群五郎等へ相渡、玉は開候而得与見受、右同樣製作方出來いたし候哉相考可申上。右品々昨日有賀氏迄相屆、今日幸小川群五郎罷出居候付、右兩品相渡夫々申談候事。

八月。當夏以來多雨にして金澤の道路破損するを以て之が修理を士庶に告ぐ。

〔觸　留〕

御橫目江

當夏以來降續、御家中人々居屋敷廻り、幷町方等往來高低石高之所茂有之、別而小町之分損所多、且橋之溝蓋等損候而茂急に不加修理候故、非常之節馬上氣遣敷躰に候條、町並申談、右樣之儀無之樣相心得可申候。中に者道作いたし候ヶ所茂有之候得共、町並不申合候故、却而高低出來、夜中抔者別而氣遣敷由に候條、前々申渡置候通、町並申合一樣に相成候樣相心得修理可申付候。右之趣前々より申渡置候所、近年猥に相成候條、急度相心得不絕修理可申付候。

右之通一統可被申談候事。

九月二日。前田齊泰、天皇の卽位を賀し奉らん爲使者を金澤より發せしむ。

〔官事拙筆〕

八月十一日

津田內藏助

先達而內證申渡置候處、當秋御卽位に付京都ゟ之御使者、御手前被仰付候條、來月差入に發足之心得可有之、日限之儀は追而可申渡候事。

〔官事拙筆〕

九月朔日

一、津田內藏助儀、京都ゟ之爲御使明日發足、今日呼出、御口上書等御用人より指越候分、席ゟ相招渡之、彌明日致發足候樣申渡置候。

〔温敬公記史料〕

九月二十三日天皇行卽位禮。遣津田正行京都師奉賀獻物。

九月四日。前田齊泰、高松侯松平賴胤等を招請して能を演ず。

〔諸事要用雜記〕

九月四日

一、今日御客有之御能被遊候付、表向御客懸り六時揃与申來、同刻過出席之事。

一、六半時過より讃岐守様・肥後守様・若狭守様追々御出、御兩殿様とも例之通御廣間御縁頬迄御出向、御小書院へ御通り被成候。五時過追付御能御初めに付、御見物所へ御通之儀被仰進、組頭御先立御見物所へ御通、出雲守様等へ者御居間之御見物所へ御通被成候。玉の井相濟、御前御出御逢に而、御兩殿様御相伴うきふ御吸物等被進、御中入於御小書院御料理御三方様御一集に出、御前に者御中入後之御能被遊候に付、御料理之御挨拶幷御引菓者筑前守様被遊候趣被仰出、其段御客方へ申談、坊主衆を以申上る。夫々相濟、重而御見物所江御通り、一番相濟御兩殿様御出、其内出雲守様等にも被爲入候様御意に付、其段御見物所へ罷出申上、御近習頭御誘引、鏡之御間通り、右御見物所へ御通り、御吸物等被進。相濟、出雲守様等には重而御居間之御見物所江被爲入、重而御兩殿様御出、御小漬も出、御能相濟暫於御見物所御咄、御供宜段相知、御前等御入、御客御三方とも御小書院江御復座、御兩殿様共御出、御挨拶之上御退出、例之通御使者之間御杉戸迄御送り被成候。其時に坊主衆へ　　　、夫より御出入衆御逢、御兩様に者小漬中に付御對顔無之、夜四時過相濟候事。

讃岐守は松平頼胤、肥後守は保科容敬、若狭守は保科容保、出雲守は富山侯前田利友なるべしと雖當時尚敍爵前にあり

九月四日。前田齊泰の子直會の七夜の祝儀を行ふ。

〔官事拙筆〕

九月四日

一、今日今般御出生之御男子樣御七夜御祝に付、朝五時過熨斗目・上下着用、二御丸御廣式に罷出、御吉例之通御弓矢等指上、且御誕生之爲御祝儀御肴一折目六相添献上、夫々以御廣式頭上之。畢而御のし・御たばこ盆・薄茶・御吸物・御酒・御取肴頂戴之。相濟五百八十之御餅・鯣一折被下之、段々之御禮申上、方々樣にも御七夜御祝詞申上、彼是四時過致出席事。

一、御用部屋有賀寛兵衞席ゟ出、左之通被仰出置候由にて、覺書も差出候故遂披見、尚更何もゟ可申談旨申述、遠江守御演述。御家老方八郎右衞門・若年寄式部も相招、御同役御演述有之候樣。右に付兩御廣式ゟは御七夜御祝詞罷出申上、靜之介殿ゟは御機嫌も相伺候等。江戸表相公樣ゟ者御名御定り之恐悅も、今日附九日出に以紙面申上候等之旨も申述置候事。

今般御出生之御男子樣御名靜之介殿与被稱、殿付に唱可申候。右之趣何茂ゟ可被申聞候。此段可相達被仰出置候。

九月十九日。小川群五郎等、松下健作をして製造せしめたる西洋流大炮を試射し、その相傳を得たることを屆出づ。

九月十九日

一、小川群五郎・小川七郎左衛門儀、西洋流大筒共打試に、松下健作等召連湊浦へ致出役罷在候所、夫々力様等相仕廻昨夕罷歸候旨、今日兩人共御次へ罷出及届、出來之御筒共いづれも御用立宜旨、且揚火等も打試、其外相傳之品々打試候旨等申聞、町附書取も指出。留略す。今便共趣申上置。

一、群五郎・七郎左衛門兩人より、今度健作召連參り居候下職人之内金具師に、阿蘭陀細工いたし候者有之、御用之透に被爲拵候旨に而、ぜんまい仕懸之船形（浦島之廻りに而玉手箱乍釣竿等有之筆箱之内に磁石仕込有之。）盃臺、銀之盃共一箱、先日御次へ致持參、不苦候はゞ御内々指上度旨申聞候付、其段伺置候所、爲指上候樣被仰出候付、今便江戶表へ指出候事。

九月廿二日

一、小川兩家松下健作江御内命致入門、西洋流大炮等致傳受候付、町奉行迄願之趣有之に付、遂僉議、今日左之通町奉行へ書取相渡候事。

小川群五郎
小川七郎左衛門

小判十兩宛

右西洋流鑄筒就被仰付候、松下健作江入門被仰付候處、今度力様も相濟、全致相傳候付、健作へ挨拶方爲入用如斯被下之候事。

九月

一、松下健作儀、被仰付置候御筒力様、曁小川家相傳方も全相濟候儀に付、御用無之候間、勝手に引取之儀申談候様、今日町奉行呼立申談。且御筒出來彼是骨折に付、左之通被下御目録等も引渡候事。健作召連來居候下職人共江も、左之通被下方町奉行へ相渡す。

金三十兩

生絹三疋

御目錄

松下健作

鑄物師 常次郎

宗次郎

仁助

金三百疋宛

鍛冶方 仙太郎

竪覺書

富次郎

重五郎

九月廿三日。東本願寺末寺遷佛式を行ふ。

〔上賃屋日家榮帳〕

未年九月廿三日

金澤御坊御遷佛、御國中三等報中不殘、幷講中御供。ぼさつ八人。

九月廿四日。長氏の與力河野久太郎に大炮の製造法を傳へたる江戸浪人松下健作に賞賜す。

〔大炮御用留〕

一、九月廿五日松下健作昨夕御用宿御引揚に而、拜領物有之候。依而爲知候事。

松下健作江金三十兩、下職人一人江三歩宛。

一、廿六日今日松下健作並下職人も不殘大浦屋幸右衞門方江引移申候。

一、右に付健作儀は來十月一杯も逗留致し、下職人者近日相返申候由に付、其段大原殿江御達申。被下方は來月中頃迄に被下方も御座候樣にと奉存候段御達申置候事。

一、十一月十二日今日松下健作呼寄、輕く振舞、御贈方相渡候事。

三等報中本の儘

呼寄せたるは河野久太郎

口上

去年不圖も當地御通行被成候に付、私共より暫御逗留相願、御許容被下候內、大炮出來方何茂申合相願候處、只今に而者全御出來被下候趣相達候處、益被致大慶候。乍些少私より目錄之通致進上候。聊御禮之驗迄に御座候。

十一月十二日

金三兩　染絹二端　以上

九月。陪臣中勤學の爲江戶等に赴かんとする者は督學をして學業を試みしむべきことを告ぐ。

〔雜事日記〕

定番頭江

陪臣之內江戶表等江爲勤學罷越可申者、此度詮議之趣有之、以來學業之樣子於學校督學等試候筈に候。依而前廉主人々々より直に督學江相達、聞屆候者承屆可申候。

右之趣夫々可被申談候事。

九　月

十月二日。前田齊泰、慶寧と共に登營して天皇の卽位を賀し奉る。

孝明天皇の御卽位は九月廿三日に在り

〔諸事要用雜記〕

十月朔日

一、今度御卽位に付、明二日兩丸へ惣出仕四時御揃之旨、御書付到來に付、左之通御出奉伺、申談る。

但、筑前守樣へも御書付到來之事故、分而被仰進は無之事。

明二日五時過之御供揃に而、筑前守樣御同道兩御丸御登城可被遊旨被仰出候。

十月二日

一、今朝五つ三分御出、兩御丸御登城被遊、八時前御歸殿被遊候事。

〔觸留〕

十月十八日。女院崩御の報金澤に達し、前田齊廣夫人その喪に服す。

女院御所崩御之段申來候。依而普請は今日一日、諸殺生・鳴物等者今十八日より明後廿日迄三日、遠慮之筈に候。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

十月十八日　　長將之佐

〔成瀨正敎日記〕

十月十八日

平田内匠紙面の内

一、昨十三日大宮樣門院號宣下、新朔平門院与奉稱、以來は女院樣与被稱候。依之皇太后宮大夫以下悉被止候事。

一、禁中女院御別廓に成、同日申刻御薙髮、同夜戌刻崩御候。

一、女院崩御に付、眞龍院樣實御妹之御忌服被爲請候旨、御附頭より以紙面申越、有賀氏より被送越候事。

十月十九日

一、女院崩御に付、普請は昨日一日、鳴物等は明二十日迄三日遠慮之儀、夜分觸出有之候事。

十月廿八日。德川家慶、前田齊泰等に放鷹により獲たる鴨を贈る。

〔諸事要用雜記〕

十月廿八日

一、今日上使御退出後、御廻勤御口上幷御勤御順、聞番より上る。夫々調筆申談る。

一、今日彌上使之儀申來、無程御城下り御付人追々參り、昌平橋御付人に而御出向被遊、大書院三之間へ御見合之内三丁目御付人參り、御兩殿樣にも御式臺へ御出、追付御拜領之御鳥

幷上使御使番村上周防守殿御越、敷附に而御鳥に御手被添披露之、御使番等ゟ御渡。御前幷筑前守様鏡板へ御出向、御大書院ゟ御誘引、上使之御方より坊主衆を以、御一集に御頂戴之儀に被仰聞候に付、（御作法とは違候）御兩殿様とも御一集に上意御拜聽、御鳥へ被爲寄候節、上使御進御手を被添、御受取御頂戴被遊、二之間落懸之邊に而御使番等ゟ御渡、直に御自分之御會釋相濟、夫より御熨斗等差出、御菓子御出入衆御相伴に而差出。夫々相濟、御火鉢引、相濟御兩殿様にも御一集に御出、御一人充御進み被遊、御受被仰述、筑前守様に者直に御先へ御玄關ゟ、無程御先立に而上使御退出、最初之處迄御送り被遊候。御入之節御勝手座敷幷坊主衆溜・御小書院溜幷御用所續ゟも被爲入、夫々御逢、相濟御入被遊候事。

一、御入之上、上使を以御拳之鴨御拜領上使之旨、且筑前守様御拜領之恐悦申上る。且又筑前守様へ、御兩殿様御拜領之恐悦申上る。

一、八半時頃御出、御老中方御廻勤被遊、暮頃御歸殿被遊候事。

〔官事拙筆〕

十一月十二日

一、今晝御用番より狀箱入廻狀到來披見候處、前月廿八日上使御使番村上周防守殿を以御拳之鴨一つ御拜領、筑前守様にも右御同人を以御拳之鴨一つ初而御拜領被成候旨等、江戸表よ

り申來候紙面に添紙に而到來。右に付御兩殿樣ゟ十三日附連名紙面を以、筑前守樣初而御拜領之御祝詞十四日出申上候事。

十一月四日。前田齊泰の子利順、額直・袖留の儀を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

十一月四日

一、今日喬松丸殿御額直等御式、四時前夫々相濟候由、寺田兵馬申聞候。右に付申上、何時に而も御表へ御出之儀兵馬へ申聞候事。

一、御表宜に付御出之儀申上候處、喬松丸殿御表ゟ御廻被遊、御持參之御肴等御近習頭を以御口上被仰上、追付御前御居間書院ゟ御出被遊候に付、御同間ゟ御通り之儀織人罷出申上、御出口迄御誘引、夫より二之間御敷居より四・五尺計下ゟ喬松丸殿御出御禮被仰上。其時織人罷出、今日御袖留等に付御禮被仰上候段申上、今日は目出うと御意、難有思召旨御直に被仰上、御退去、相濟御入被遊候事。

一、右相濟、御居間ゟ御通之儀御近習頭を以被仰進、則御通之上御居間上之間ゟ御出、喬松丸殿二之間入口に而一寸御禮、直に御左之方二之間御敷居より横疊三疊目にひづみ御着座、配膳役御熨斗指上、御頂戴相濟、肴次郎被進候御刀持參、御祝被成被進候段申上、御取被成

御禮。其節幾久と御意。其節御腰物御頂戴難有御仕合思召旨御取合申上、御刀御渡引、相濟御禮被仰上
御退去。

一、右相濟、段々之御禮當席を以被仰上、御退出之事。

〔見聞袋群斗記〕

十一月四日

喬松丸殿御額直御祝、御袖を被留るゝなり。

十一月十一日。前田齊泰等、先に徳川家慶より拜領せる鴨を披露す。

〔諸事要用雜記〕

十一月十日

一、御兩殿樣御拜領御拳之鴨、明日御一集御披付、御吸物頭分以上江御兼合頂戴被仰付候條、此段可申談旨被仰出候段、大野織人申聞、頂戴人揃刻限夕八時、服のしめ・上下着用之旨同人申聞候事。

十一月十一日

一、今日御招被遊候御客御揃付、追付筑前守樣御出被遊御對顏、無程御表宜、美作守等新御廊下へ寄置候段御近習頭より申上り、御同道御出、美作守等列居之處に而一寸御膝御付、御

意有之。筑前守様にも御意。夫より御小書院上之口より御兩殿様共御出、御挨拶之上、一先御引入、追付御のし三方指出、御本膳居付候上申上、御兩殿様共御出、御吸物御兩殿様共上、御挨拶御頂戴、御客何茂御頂戴被成、御兩殿様御入。夫より二之膳より段々出之、御引菜筑前守様引被遊候付、御勝手に御扣被遊、御上客之御四方江御引被遊、相濟御入。夫より御吸物出、御案内申上、御兩殿様共御出、御案内申上、御兩殿様共御出、御土器三方等出、數之御土器も出候上、相公様御出、備後守様・啓之介様江御盃事、夫より御張付之方出雲守様・前田丹後守殿御盃事被遊、御入、御三方引――、追付筑前守様御出、御盃事御次第同事。相濟御入被遊候。夫より追々相濟御退出に付、御逢之方々宜に付、御兩殿様御同道御出、御小書院之御客江御挨拶、夫より御取持之前田又五郎殿等五人御臺子之間に而御逢、夫より御大書院溜久留孫太夫殿等三人、夫より御廣間二之間上席御侍竹村平十郎・下席大念英次郎等七人、夫より御勝手座敷山田佐渡守等十二人、夫より坊主衆溜江も御立寄、相濟御入被遊候事。八半時過也。

一、御侍衆御通懸之時分一寸御膝御付、今日はと御意被遊候事。

一、今日於御表、御拳之鴨従御兩殿様頭分以上頂戴付、長圍爐裏之間において何茂頂戴御禮、御兩殿様共此御殿御近習頭席へ當席初申述候。御近習頭身分之御禮は、當席江被申述候。且

兩御家樣は富山侯及び大聖寺侯

筑前守樣へ之御禮は御近習頭引受、小幡氏等を以申上り候筈之事。

十一月十三日。前田齊泰能を演ず。

〔諸事要用雜記〕

十一月十三日

一、今日御舍之御能に而、御兩家樣幷前田丹後守殿御出、御出入衆も依願五人御越、且御兩家樣等於御見物所麵類指出、御中入後も御吸物差出、御料理等は於定席指出候事。

一、今日和田倉樣・池之端樣御出被成候。出席中御出之御方□御往來御白洲へ罷出る。

一、御能五時過初り、夜四時前相濟候事。

張　良　爵　　景　清　寶生大夫　　誓願寺　御

碇　出雲守樣　　春　榮　御　　船　辨　慶　備後守樣

十一月十五日。大聖寺侯前田利平、關東筋川々普請を命ぜられたる際助資を得たるを謝す。

〔官事拙筆〕

備後守樣御書之寫

一筆令啓達候。此表宰相樣・筑前守樣益御機嫌能被成御座、恐悅至極奉存候。次各彌可爲御無異、珍重存候。然者今般關東筋川々御普請御用被仰付候處、上納金昨十四日致皆納候。右に付段々御難題之儀共相願候處、御助成被下、以御餘光首尾克相勤、誠以難有仕合奉存候。各にも種々御心盡之程、不淺致大慶候。右爲可申入如斯候、恐々謹言。

十一月十五日　　松　備後守利平

遠江守等九人殿

十一月十九日。會津侯保科容敬等、本鄕邸に臨みて乘馬を試む。

〔諸事要用雜記〕

十一月十九日

一、今日中務大輔樣も御出候筈之處、昨晚筑前守樣へ御直書を以御斷之由也。

（中務大輔は有馬慶頼）

一、五半時過肥後守樣・若狹守樣御一集に御出、例之通御出向、於御小書院御對顏之上御入、備後守樣にも御出御逢被成。追付御馬場へ御出に付、御馬乘袴に御着替之儀被仰進、備後守樣にも於御定席御召替、重而御出、書院ゟ被爲入、御馬場夫々宜付、御前に者路次も悪敷御先へ御馬場へ被爲入、御馬見所に御待被遊。追付筑前守樣御小書院上之口より御出、御誘引に而表［　］御廣緣通り御居間へ被爲入、同所御緣より御庭へ被爲入候。喬松丸樣に者御庭

口迄御出向、夫より御同道御馬見所へ被爲入。夫より追々御乘馬暨乘馬も被仰付、八時過より少し御庭御廻り、御居間御緣へ御入。御前に者御先へ御入被爲入、夫より御同道御誘引に而、御奧へ御通り被遊候。備後守樣にも御一集に御通り候事。

一、御小書院より御通之節、御先立當席より相勤候。御居間よりは脇刺取候者御先立する。筑前守樣に者今日御鈴通り御出、御表通り御出は無之候。尤此儀御伺之上也。且又筑前守樣迄御出向之節は、小幡氏等御先立也。

一、夜四時過夫々御表宜段申上り、御退出之節初之通り、御先立御廣緣通り被爲入、御小書院ゟ一寸御座付、其處へ御供宜段御客方より申上、追付御退出。其節御式臺階上迄御兩殿樣共御送り、備後守樣にも同所迄御送り、其所に御殘り、跡御對顏は無之事。

十一月廿五日。家中より徵する借知の一部を當年限り免除するを告ぐ。

〔若年寄方御用心覺留〕

十一月廿五日

御勝手向御難澁に付御借知等被仰付置、何茂可爲難澁儀に付、被返下度思召に候處、打續候御物入不時成御入用共指湊、御手繰方六ヶ敷、何分不被爲行屆候。乍然御家中難澁之樣子も被聞召、深く御心痛被爲在、當年も一作去年之通被返下度思召候得共、去年來不時成御入用

共打重り、其上上方筋大風に而御廻米過分御損失も有之、御手繰方必至与御指支に付、重々御詮議も被仰付、格別之思召を以御借知幷役料知等御借上之内、當年一作別紙割合之通被返下候旨被仰出候條、猶更人々手前遂儉約、如何樣共いたし勝手取續之儀心懸肝要に候。

有之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

十一月　　　　前田近江守

御借知等一作返下割合

一、百石以下	全
一、百一石より二百石迄	六歩
一、二百十石より二百九十九石迄	四歩半
一、三百石	四歩
一、三百十石より四百石迄	三ノ一
一、四百十石より九百九十九石迄	四ケ一
一、千石より二千九百九十九石迄	五ケ一
一、三千石より九千九百石迄	六ケ一
一、一萬石以上	七ケ一

一、御切米等之分も右割合を以被返下。
一、御役料知等之分自分知七百九十九石以下ハ、八百石以上は是迄御借上之半高當被返下。
一、平士被下足輕之分も被返下。
但、頭分手替足輕・被下足輕等之儀は是迄之通。
一、他國町人等御合力扶持、幷御手役者等之分も、去年之通被返下。
一、遠慮等被仰付置候者は不被返下候事。

十一月廿九日。西洋流大炮を製造したることを幕府に届出づる爲使者を發す。

〔成瀨正敦日記〕
十一月廿九日
一、松下健作ゟ被仰付候西洋流御筒、公儀御屆方有之候間、御筒目玉目等爲書出候樣、江戸表より申來候付、左之通書出、今便大野氏等へ遣す。

覺

一、ホウキツル　口徑五寸二分　玉目六貫目　一挺
一、モルチール　口徑六寸六分　玉目十二貫目　二挺

一、ハンドモルール　口徑四寸　玉目三貫目　二挺

〆五挺

右今般西洋流御筒出來高如此御座候、以上。

未十一月　小川群五郎

小川七郎左衞門

有賀寛兵衞樣

十一月廿九日。前田齊泰、來春歸國の際中仙道を取ることを定めたる報金澤に達す。

〔成瀨正敎日記〕

十一月廿九日

一、下海道地震後いまだ折々鳴動等も有之、其上變事場所宿々も復し兼候躰に付、來春御歸國御道筋之儀御內々御僉議有之、前月御道中所留書等中仙道へ內々見分に遣有之候處、前月末罷歸、何等指支も無之旨見分之趣、美作守殿より被申上、思召次第与伺有之候付、指而差支も無之躰に候間、來春中仙道通御通行可被遊与思召候間、其心得に而僉議被致候樣、當十日頃美作守殿へ被仰出有之候由、內狀に申來る。

十二月十六日。德川家慶、前田慶寧に放鷹によりて獲たる雁を贈る。

〔諸事要用雜記〕

十二月十六日

一、今日筑前守樣へ鷹御拜領之上使、御使番坂井右近殿御勤之旨申來候事。

一、今日筑前守樣へ上使之時分、御前も御出被遊候筈に候得共、少々御風氣に付御出不被遊候間、聞番示合御取持衆を以上使之御方へ御達可有之旨、御客方并聞番へ申談候事。

一、今日諸大夫被仰付候御禮御廻勤も、筑前守樣御名代被遊候筈。後刻御同所樣上使之御禮御廻勤之節、右御名代之御勤、御立歸御自分上使之御禮御勤被遊候筈之事。

一、八半時過御城下りより追々御付人來、筑前守樣例之通御出向、追付御拜領之鷹二參り、無程上使御使番坂井右近殿御越、御誘引於御大書院上意御拜聽。相濟御くわし出、夫々相濟御退出之節最初之處迄御送り被遊候。御入之節御出入衆等江御逢被遊候事。

但、御表御出之節御前御出無之に付、此御殿御近習之人々御供無之。拙者儀者兼帶之廉に而御供罷出候事。

一、右上使相濟候上、御前江罷出恐悅申上る。且筑前守樣にも同樣申上候事。

一、上使相濟、七時頃筑前守樣御名代之御勤、并御同所樣爲拜領之御禮御勤被遊候事。

〔續德川實紀〕

十二月十六日

松平筑前守はじめ、使して御鷹の鴈たまはるもの十二人。

〔官事擷管〕

十二月廿五日

一、當月十六日筑前守樣江上使御使番酒井右近殿を以、御鷹之雁二御拜領被遊候旨之來狀に付、早速相廻し候。

十二月十八日。前田齊泰の子利順、居を御表に移す。

〔諸事要用雜記〕

十二月十八日

一、今日喬松丸殿御表へ御引移被成候儀に付、携候人々上下に付、當席上下に而出席之事。

一、晝前喬松丸殿御表へ引出橋通り御引移被成候事。

一、御移方相濟、追付御居間へ御通り之儀被仰進、御溜へ被爲入、夫より御居間へ御通り、御前御出、例之通二之間御襖之方へ御着座、其節配膳役御のし三方差出、御頂戴、首尾能目出うと御意、御受御禮被仰上、御退出之事。

卯年は天保十四年

弘化二年十二月十七日参照

公用人は老中の家臣

原五郎左衛門は御算用場奉行

十二月二十日。幕府、能登の預所に對し加賀藩が永定免皆金納とする舊制を復することを告ぐ。

〔御親翰帳之内書拔〕

御預所去卯年より三箇年期を以御預之段被仰渡候處、去々年に而年限滿に相成候に付、是迄之通無年限に而御預に相成候樣被成度趣、御願書御指出之處、是迄御政事向御私領同樣、御取箇永定免皆金納之處、以來外御預所並之通御心得可被成旨御書付御渡、以來無年限に而御預之旨別段被仰渡候に付、右年限之儀は下方江被仰渡、御預所外並之通と申儀に付而は、何卒是迄之通之御預處に相成候樣被成度旨、阿部伊勢守殿江被得御内慮候趣御書面被指出。右並之通と被仰渡候儀は、下方江被仰渡御見合に相成居、委曲時々其表江申參居候通御座候處、去廿日伊勢守殿江聞番御呼出、御預所之儀先達而被仰達候趣も有之候處、追々被仰聞候次第も有之候付、此度別段之儀を以て御内願之通被仰出候旨等、御書取御渡之由に而、大野織人を以被渡下。且別段公用人服部九十郎より聞番江申聞候は、御預處之儀外々樣には皆不納之御届有之方々も有之、又御取扱方御手荒成方も有之に付、先達而年期御預之儀等被仰渡候御趣意に候。此段以後之爲御心得申達置候樣被仰付候旨申述候由、聞番より申上候段被仰出候に付、其表江可申遣旨相達御聽申進候。則御書取差進候條、原五郎左衛門江御申渡可被成

候。先達而被仰渡之趣、下方江響居不申儀に候得ば、尤此度分而申渡候にも被及間敷と存候、以上。

十二月廿四日　　　美作守等兩人判

助右衛門樣

其方御預所之儀、先達而相達候趣も有之候處、追々被申聞候次第も有之候に付、此度別段之儀を以內願之通被仰出候。委細之儀は御勘定奉行可被談候。

御預所之儀に付、先達而阿部伊勢守殿江被仰達置候趣有之候處、御內願之通被仰出候旨、別紙に申進候通に候。然處御勘定所江去廿一日御呼立に付、御預地方御算用者增田半四郎罷出候處、御預所文化度以來諸色賣買手狹に相成、鹽・稼・駒賣捌等潤助相減、又は右代金等之儀に付而も、村方及難儀候趣も品々相聞江候間、以後取計向に精々心を用候樣可被致。且享保七年御預所被仰付候節御渡之御書付は別紙之通に而、兼而被仰立候趣とは齟齬いたし候廉も有之旨被仰渡候由に而、別紙山崎守衛より入御覽候に付、大野織人を以被渡下。享保七年御書付寫此度御渡之分は、御預地方役所にも相見江候由に候へ共、先達而より被仰立候御書付は、文化五年御次に相見江候御書付寫、人見吉左衛門を以牧呂左衛門江御渡之分に而、相違之儀は有之間敷筈之處、如何之譯に候哉。則別紙寫之通に候。猶更其表江申遣、御しらべ有

之筈之由。將又諸色賣買等之儀は、先達而巡見上使相濟候砌、御勘定所より被仰渡候趣有之に付、其節石野右近より及御達候趣有之由之處、同樣之趣此度被仰渡候躰に候間、猶更可遂僉議旨織人申聞候。則別紙五品差進候條、猶更原五郎左衛門に可被遂御僉議候、以上。

十二月廿四日

美作守等兩人　判

助右衛門樣

〔御親翰帳之内書拔〕

昨廿日組頭竹内清太郎殿より御剪紙を以、今日御勘定所に罷出、御取筒差出方に可相達旨申來候に付、御算用者增田半四郎罷出、右懸り相達候之處、御勘定御奉行石河土佐守殿・松平河内守殿、吟味役佐々木修輔殿・關保右衛門殿、右組頭清太郎殿懸り御勘定高橋平作・石川新助立會を以、別紙書取之趣被仰渡候付、前々之通請書相認差出申候段、半四郎罷歸申聞候。依而右書取、幷享保七寅年六月廿八日水野和泉守殿御宅において御渡之御書付寫貳通、都合三品奉入御覽候、以上。

十二月廿一日

山崎守衛

○

申渡

以下は前文末段に謂ふ別紙五品なり

山崎守衛は物頭にして預地の事を兼ぬ。

松平加賀守

御預所

其御預所之儀、文化度政事向私領同様相成候以來、諸色賣買手狹に相成、鹽稼・駒賣捌等潤助相減、又は右代金等之儀に付而も、村方及難儀候趣も品々相聞江候間、以後取計向に精々心を用候樣可被致候。且享保七寅年御預所被仰付候節相渡候書付は、別紙之通に而、兼而被申立候趣とは齟齬いたし候廉も有之候間、爲心得寫相渡候。

右は阿部伊勢守殿御指圖に付申渡候。

（）

一、諸國御藏所之御仕置は大切之事に候處、不功者成代官は手代まかせにも致置候哉、御藏所之內百姓困窮におよび、其風俗よろしからざる儀共有之趣に相聞江候。今度新規代官に可被仰付者、別而御吟味之御事に候得共、不足之儀に候條、追而相應之者被仰付候迄は、何れも家來差遣、御年貢收納致させ候樣にとの御事に候。

一、御仕置之儀に付、大法は御勘定所江可被承合候へ共、其所之只今迄之致らせをば聞合被申間敷候。畢竟下に而申付候儀には、筋あしき儀共も有之事に候故、件之儀は止候樣にとの御事に而、何れもへ御預け被仰付候事。

致らせ本の儘

一、右之通に候間、唯今迄其所相勤候手代など、其筋を存候と申立候共、一切召抱被申間敷候。勿論名主・庄屋など風儀あしく候はゞ、早々差替候樣に可被申付候事。

一、御年貢收納之儀を始、其外村々江家來差廻し候儀、隨分數すくなく、可成程は家來差遣し不申樣に可被相心得候。並御預處筋に懸置候家來も、是又人數すくなく可被申付事。

一、御年貢納方之儀百姓に得心致させ、定免に相極候樣連々以可被申付事。

但、只今迄高免・下免地面不相應之所は、連々直し候樣可被申付事。

一、公事訴訟裁許申付候儀、格別之儀は御勘定所江可被相達候。大概之儀は手前に而可被申付候。但右何程迄は手前に而可申付哉と之事、幷御預所にかけ置候家來員數之儀は、追而可申達事。

以　上

松平加賀守

日野小左衛門御代官所

高壹萬四千石　　能　登　國

右之處御代官所被仰付候內、從當年御預所被仰付候間、口米をも可被致所務候。御仕置其外諸事入念可被申付候。且又御勘定奉行より、追而目附帳相渡候。以後右代官より可引渡之候。

但、右御預箇所之內、給領などに相渡候儀有之候はゞ、御勘定奉行より可相達候間、可被得其意候、以上。

寅　六　月

享保七年六月廿八日、御老中水野和泉守殿御宅ゟ御招に付、菊池十六郎參出之處。能州之內土方領一萬四千石餘、日野小左衞門御代官所、向後御預地に被仰付候條、政務之儀無遠慮被申付、刑罰に可被行者は、領國如人民に而、尤不及被達上聞候。然ば二箇年は物成被收納、一箇年分は金子を以一萬三千石之高可被上之、山川竹木小物成は都而不及被上候。

寅は享保七年
この一通は即ち藩の記錄に存したる者

十二月廿一日。幕府、前田齊廣夫人及び慶寧夫人に歲暮の祝儀を贈る。

〔諸事要用雜記〕

十二月廿日

明廿一日眞龍院樣ゟ歲暮御祝儀御拜領物有之候得者、御禮勤可被遊、東御前樣も御同樣有之候得者、筑前守樣御禮勤可被遊に付、明日御同道□時御供揃に而、御用番戶田山城守殿へ御勤可被遊旨被仰出候。

同月廿一日

一、今日上使之若林源藏殿より、於御廣式御兩殿樣御逢之儀御斷被成度旨取計くれ候樣、聞

番迄被仰越候旨、岩田內藏助申聞、則申上候處、左候へば其趣にと御意に付、御逢〔　　〕御心得被成候樣可返書旨聞番へ申談。

一、今日九時前御廣式ゟ之上使夫々相濟候事。

一、九時過御出、御用番戸田山城守殿へ、以上使眞龍院樣御拜受物之御禮、筑前守樣東御前樣御拜受物之御禮、御同道御勤被遊、御歸殿被遊候事。

十二月廿五日。前田齊泰能を演ず。

〔諸事要用雜記〕

十二月廿五日

一、今日御能、詰合拜見、上下也。御前白鬚・半蔀・鉢木被遊候事。

一、今日和田倉樣・池之端樣御入に付、奉伺御機嫌候事。

十二月廿六日。前田齊泰の子直會の色直の祝儀を行ふ。

〔官事拙筆〕

十二月廿六日

一、例刻出席筈之處、今日靜之介殿御色直御祝に付、朝五半時過服紗小袖・上下着用、二御丸御廣式ゟ罷出、御肴一折目錄相添、以御廣式頭上之。畢而御のし・御たばこ盆・薄茶・赤飯・御

吸物・御酒御取肴頂戴、紗綾二卷拜領之、段々之御禮申上、四半時前致出席候事。

十二月廿六日。前田齊泰の子直會を年寄前田近江守の養子たらしむる件を議せしむ。

〔御家老方等諸手扣〕

十二月廿六日

一、靜之介殿御儀、近江守江養子被仰付度思召候。各存寄無之候はゞ、近江守江御内意爲申聞、其上に而表向可被仰出、御指急に而御留守中にも被遣度御樣子之旨也。江戸表美作守等江被仰出申來、右暮合相廻來、追付先江遣之。

〔官事拙筆〕

十二月廿九日

一、近江守登城之上於奥之間、此間從江戸表申來候大野織人を以、近江守未出生も無之に付、靜之介殿御儀養子に被仰付度被思召候御内意之趣申談候處、存懸も無御座難有仕合奉存候旨御請被申聞候に付、示談之上今日早飛脚歩に申渡、返書に申遣候。遠州調筆自分封じ、上書兩名にして印押、今日遣之候事。

但、右は當月十七日急便に傳封、美作守等兩人より之内狀此間到來、遠江守披見之上以紙

面被遊候に付、披見候處右之通御內意之趣、何も存寄も無之候はゞ可申談、御急ぎ被遊、御留守中にも御引移之儀被爲成候程に被遊度思召之旨等も申來候。

十二月廿八日。畫師佐々木泉景、御醫者格を以て待遇せらる。

〔宮事拙筆〕

十二月廿八日　佐々木泉景

泉景儀、畫道格別達者に而、及極老候迄數十年御用向情に入相勤候付、御醫者格被仰付。

泉景の前職は御細工者小頭並

附録年表

天保十年　己亥　皇紀二四九九

正月　○朔日前田齊泰、金澤城に年頭の賀を受く。(一)

○二日謡初を行ふ。(二)

○四日諸郡に夫食米等を貸與せんことを稟請し、尋いで許さる。(三)

○十一日金谷御殿に福引を行ふ。(四)

○十七日米價高直なるを以て米切手所持の者に賣出を命ず。(五)

○十八日文政四年の改作法改革を復元すべきことを命ず。(六)

○十九日本多播磨守家來高橋彭次郎、本多大學の小者小左衛門を斬殺す。(一三)

○二十日前田齊泰、政務に關する意見を諸士に徵す。(一八)

○廿一日金澤石引町より火を失す。(一九)

○廿一日領國の女京都より歸る際關所通手形を請けたるものゝ取扱に就いて京都詰人より通牒す。(二〇)

○廿六日學校に文宣王の木主を納む。(二一)

二月　○朔日初めて上丁の日に學校に釋菜の禮を行ふ。(二二)

○五日改作方の用務に村役人ならざるものをして關係せしむべからざる事等を十村に令す。(二三)

○十八日能登口郡の貯用林を御郡奉行の支配に屬し、御扶持人十村をして主附たらしむべきを告ぐ。(二四)

○廿四日御算用場内に縮所を設くることを許す。(二五)

○廿七日前田齊泰の子利義及び利行、卯辰觀音山に宮參を行ふ。(二五)

○廿八日村方に於いて走人を豫防すべきことを告ぐ。(二七)

○學校頭を廢して督學を置く。(二八)

○百姓・頭振より提出したる願書は裁許十村の速に之を上達すべきことを命ず。(二八)

○新に能美郡舟場島村・出合島村・將棊徂明島村及び石川郡蓮上島村の名を設く。(二九)

三月　○十七日御扶持人十村以下の湯治を出願する手續を定む。(三〇)

○廿一日越中に百姓の逃亡する者多きを以て人を派して實情を檢せしむ。(三一)

○廿二日竹澤天神社前の地を蓮池御庭の園内に入る。(三二)

○廿四日復元潤色により百姓を十村支配としたるも、諸向引合方は之を御郡奉行より爲すべきことを告ぐ。(三三)

○廿六日前田齊泰・齊廣夫人等濱遊を行ふ。(三四)

○郡方の火災に用ふる水旗の制を定む。(三四)

四月

○八日學政を修補す。(三五)

○十日前田齊泰、奧村榮實の職を辭せんとする意を郤く。(四五)

○十八日明倫堂の生徒を入學生と稱すべきことを定む。(四六)

○十八日前田齊泰、異風の士の町打を石川郡打木濱に觀る。(四七)

○料理商賣の者、同業者增加せしを以てその取締に關し出願す。(四八)

五月

○十六日竹澤御屋敷庭方用の戶室石切出の件を議す。(五一)

○十八日前田齊泰能を演ず。(五二)

○二十日前田齊泰、蓮池御庭に於いて射手の技を觀る。(五二)

○學校に於ける敎育の方針を示し、且大祿の者の子弟の出席を督促す。(五二)

○一昨年以來の凶荒に居住者を失ひたる家屋あるを以て、十村等に命じ取締の方法を講せしむ。(五五)

○諸郡に役人と稱し徘徊する者あるを以て之が取締を十村に命ず。(五六)

六月

○二日前田齊泰、參覲の期を延ぶべきことを告ぐ。(五六)

○三日軍書流行の件に就いて議す。(五七)

七月

○二日前田齊泰、再び參覲の期を延ぶべきことを告ぐ。(五八)

○四日蓮池御庭内の蠑螺山に三重石塔を置く。(五九)

○四日學政修補に付き文武稽古の次第を定む。(五九)

○廿三日前田齊泰、石川郡粟ヶ崎に行步を行ふ。(七〇)

○晦日前令を奉じて速に田畠の蔭樹を伐採すべきことを命ず。(七一)

○前田慶寧の敎養に關し亂舞の稽古を後にすべきことを上申す。(七二)

八月

○石川・河北二郡に浮塵子發生す。(七四)

○四日前田齊泰能を演ず。(七六)

○五日前田齊泰、堂形馬場に臨み馬上の士の射術を觀る。(七六)

○七日石川・河北及び能登口郡に浮塵子の驅除を命ず。(七九)

○八日諸郡十村等の一昨年來改作方に出精せるを賞す。(八一)

○十一日前田齊泰、參覲の爲に金澤を發す。(八二)

○廿二日幕令に依り難船の荷物を取揚げたるものゝ受取るべき割合を示す。(八三)

○廿六日前田齊泰江戸に着す。(八五)

○廿八日德川家慶使を遣はして前田齊泰の參覲を勞ふ。(八五)

○明年開山泉滴和尚の二百回忌法會を營まんとするを以て、天德院に相對勸化を許したることを告ぐ。(八六)

九月

○朔日前田齊泰登營して參覲の禮を行ふ。(八七)

○十二日當年の酒造高を三の一に止めしむ。(八八)

○十五日大聖寺侯前田利平襲封の後初めて前田齊泰を訪ふ。(八九)

○十六日前田齊泰の子利義を大聖寺侯前田利平の假養子たらしむべきことを定む。(九〇)

○二十日前田齊泰、其の子利義の生育を幕府に屆出づ。(九〇)

○廿三日富山侯前田利保本郷邸に來り、江戸城西丸造營の爲助資を得たることを謝す。(九一)

○廿四日諸郡の乞食は一村限りにて之を介抱すべきことを令す。(九二)

○廿七日大聖寺侯前田利平、明日江戸を發し歸邑するを以て本郷邸を訪ふ。(九三)

○能美郡の十村田中三郎右衞門虫塚を建つ。(九四)

○二日前田齊泰の女方姫金澤に生まる。(九五)

十月

○五日大聖寺侯前田利平の加賀侯に對する口上の格式を改むべきことを承認す。(九五)

○六日菜種油缺乏するを以て魚油・臭水油・木之實油を混用すべきことを命ず。(九六)

○十一日前田齊泰の女方姫の七夜の祝儀を行ふ。(九七)

○十二日大聖寺侯前田利平歸邑の途金澤に宿す。(九七)

○二十日前田齊泰の女方姫逝去す。(九七)

○廿四日前田齊泰の妹厚姫等、竹澤御庭に建設する石塔風鐸の資を贈る。(九九)

○廿九日小兒科の藩醫として高島正籲召抱の件を議す。(一〇〇)

十一月

○廿二日加賀三郡に虫害あるを以て貸米を行ふ。(一〇一)

十二月

○能登口郡の山方支配に關して議す。(一〇二)

○朔日前田齊泰登營して從三位に陞叙せらるゝの命を受く。(一〇三)

○五日銀仲預手形の古札を引替ふべき期限を延ぶ。

すべきことを命ず。(一一五)
○五日前田慶寧と水戸侯德川齊昭の女との婚約に關する報金澤に達す。(一一七)
○十三日幕府、前田齊泰の東海道を經て就封するの請を許す。(一一七)
○晦日道中に於いて御横目以下の携行すべき鎗數に就いて告ぐ。(一一九)
○晦日富山・大聖寺藩より下屎を移入するものに米穀を以て價を支拂ふこと勿らしむ。(一一九)
○手跡を指南する者に讀書・算術等をも敎授すべきことを諭す。(一二〇)
○苗代に筵闈を施すべきこと等を命ず。(一二〇)
○兩本願寺別院再建の爲寄進する材木運搬により橋梁を破損するなかるべきを告ぐ。(一二一)

三月

○二日前田慶寧、弓初及び乘馬初の儀を行ふ。(一二二)
○十三日前田齊泰就封の暇を受く。(一二六)
○十五日前田齊泰登營して就封の辭見す。(一二六)
○廿一日前田齊泰夫人江戸城西丸に登る。(一二六)
○廿一日幕府、江戸城西丸普請御用に當れる前田齊泰の家臣に物を賜ふ。(一二七)
○廿二日前田齊泰歸國に付江戸出發の期を定む。(一二九)
○廿二日越中に於ける百姓の逃亡者の件を議す。(一

(一〇四)
○六日德川家慶使を遣はして前田齊泰の西丸造營の功を助けたるを賞す。(一〇四)
○十一日物價高貴なるを以て諸士に貸銀を行ふ。(一〇六)
○十三日笠舞の非人小屋積雪に依りて倒壞す。(一〇八)
○十五日前田齊泰登營して位階陞敍を謝す。(一〇九)
○廿三日金澤に於いて前田齊泰の從三位に昇敍せられたることを告ぐ。(一一〇)
○廿八日前田齊泰、江戸城西丸に登り新營の建築を觀る。(一一一)
○廿八日前田齊泰、飛鳥井家に立烏帽子紫懸緒相傳の誓文を發送す。(一一一)

天保十一年　庚子　皇紀二五〇〇

正月

○朔日前田齊泰、江戸城に登り年頭の賀を行ふ。(一一三)
○十四日本郷邸廣式に於いて福引を行ふ。(一一三)
○廿六日道中にて諸士の携行する鎗數等は文政十一年以前の舊に復せしむ。(一一三)
○前田齊泰、使者を京都に派し位階昇進を謝せしむ。(一一五)
○百歳以上の老齡者に物を賜ふ。(一一五)

二月

○二日前田慶寧の本郷邸内に於ける居館造營に着手

一二九）
○越中産五ヶ中折の専賣問屋を廢し平賣を許す。（一三〇）

四月
○六日前田齊泰、江戸城に登る際その玄關前に挾箱一個を作ふことを許さる。（一三一）
○九日加賀藩の醫師井方亭の次男三郎、暦編制の爲幕府に徵さる。（一三二）
○十八日前田齊泰江戸を發して歸封の途に就く。（一三三）
○廿二日奥村丹後守、非人小屋の名義に關する意見を前田美作守に與ふ。（一三七）

五月
○六日前田齊泰金澤城に着す。（一四一）
○十六日前田齊泰、奥村丹後守に勝手方御用を命ず。（一四三）
○廿四日前田齊泰學校に臨む。（一四八）
○廿七日前田齊泰初めて翁の能を演ず。（一四九）
○虫害の再生を慮り豫め驅除の方法を示す。（一五〇）

六月
○五日非人小屋に收容せらるゝ出牢者を別郭に置くことを定む。（一五四）
○十八日前田慶寧の本郷邸内に於ける居館上棟式を行ふ。（一五四）
○廿二日天德院開山泉滴和尙の二百回忌法會大海供養を營む。（一五五）
○廿二日大小將原田又六郎知行を召放さる。（一五七）
○廿五日前田齊泰學校に臨む。（一五五）
○廿六日前田齊泰、祖先の法會を二朝執行に復すべきことを告ぐ。（一五五）
○廿六日高辻以長の臣長尾采女來りて助成を求む。（一五七）
○廿八日祠堂銀返還の方法を改む。（一五八）
○諸士より借知の比率を改め、又諸士の借財返辨の方法を定む（一五八）

七月
○二日天保八年以前町・在に貸渡したる米銀の返済方を令す。（一六三）
○十二日昨今兩日前田齊廣の十七回忌法會を天德院に執行す。（一六五）
○十二日前田齊廣の十七回忌法會を江戸下谷廣德寺に行ふ。（一六七）
○二十日鳳至郡中居鑄造の禁裏獻上燈籠に御用の繪符を用ひて通過すべきことを告ぐ。（一六七）
○廿三日前田齊泰學校に臨む（一六九）
○廿四日石川・河北二郡に於いて蔭樹たる松の伐採の手續を定む。（一六九）
○廿七日前田齊泰、老臣を召し拜領の諸品を觀覽せしむ。（一七〇）
○村方の夐雜微收方法を定む。（一七二）

八月

○醫者を開業するものに試驗を施行すべきことを令す。(一八〇)

○二日前田齊泰、犀川に御歩の水泳を觀る。(一八一)

○三日金澤城外堂形米廩の番所燒失す。(一八二)

○十三日前田慶寧の本郷邸内に於ける居舘の名稱に就いて議す。(一八三)

○十四日困窮により乞食するものゝ取扱に就いて令す。(一八四)

○十五日明倫堂に於いて釋菜の禮を行ふ。(一八六)

○十九日前田慶寧の本郷邸に建造する居舘を東御居宅と唱ふべきことを告ぐ。(一八七)

○廿二日前田齊泰、本多播磨守及び奥村丹後守二人に二ノ丸及び金谷兩御廣式御用を命ず。(一八八)

○廿六日前田齊泰學校に臨む。(一九二)

九月

○朔日前田齊泰夫人江戸城に登る。(一九三)

○六日藩侯の御側廻を改め御居間小頭等を廢したる理由を告ぐ。(一九三)

○六日前田齊廣夫人、齊泰の生母榮操院と共に卯辰山に行歩を行ふ。(一九四)

○十五日前田齊泰、金澤の郊外千日町口に放鷹を行ふ。(一九四)

○十七日前田齊泰學校に臨む。(一九五)

○廿二日前田齊泰、石川郡宮腰に行歩を行ふ。(一九六)

○廿四日前田齊廣夫人、河北郡藥師村附近に行歩を行ふ。(一九七)

○廿五日念佛行者義賢金澤に來る。(一九七)

○廿七日前田齊泰の生母榮操院、河北郡藥師村に行歩を行ふ。(二〇〇)

十月

○五日前田齊泰、富山侯前田利保が西丸普請助役の功を賞せられたるを謝する爲幕府に書を送る。(二〇〇)

○七日五ヶ山の鹽硝を買上ぐる爲町藏の借上を命ず。(二〇一)

○八日前田齊泰の子利義・利行水痘に罹る。(二〇二)

○十三日二條齊信の使者金澤城に登り金子調達を求む。(二〇三)

○十五日前田齊泰の子利義・利行の水痘癒え酒湯を浴す。(二〇六)

○十八日幕令により速に文政小判及び壹歩判等の引替を了すべきことを告ぐ。(二〇六)

○十八日前田齊泰、金澤大豆田口に放鷹を行ふ。(二〇七)

○廿一日前田齊泰學校に臨む。(二〇八)

○廿三日前田齊泰、陸原大次郎に瀧之間に書を講ぜしむ。(二〇八)

○廿七日前田齊泰、金澤郊外七ツ屋口に放鷹を行ふ。(二〇九)

十一月　○二日前田齊泰、その子利義と共に放鷹を行ふ。(三一九)
○八日御廣式御用本多播磨守・奥村丹後守二人、前田齊廣夫人に財政困難の狀を告ぐ。(三二一)
○九日御廣式御用等、前田齊泰の生母榮操院に財政困難の狀を告ぐ。(三二一)
○十六日前田齊泰學校に臨む。(三二三)
○廿二日町方教導の件に關して議す。(三二三)
○廿四日光格天皇崩御の報京都より金澤に達す。(三二四)

十二月　○四日光格天皇崩御の報江戸より金澤に達す。(三二五)
○十二日京都の御用商人大森三郎兵衛に金子貸與を許す。(三二五)
○十五日前田齊泰、光格天皇崩御し給ひしを以て使者を發遣す。(三二六)
○廿二日前田齊泰能を演ず。(三二七)
○石川郡粟ヶ崎村應右衛門及び向粟ヶ崎村德兵衛を御扶持人十村列とし御金御用を命ず。(三二七)

天保十二年　辛丑　皇紀二五〇一

正月　○朔日前田齊泰、金澤城に於いて年頭の賀を受く。(三二八)
○二日謡初の儀を行ふ。(三三〇)
○十七日前田齊泰、その子慶寧に本郷邸の御廣敷より東御居宅に移るべきことを命ず。(三三一)
○十九日百歳の老齢者に物を賜ふ。(三三二)
○廿三日前田齊泰の子利義の武藝稽古場を定む。(三三三)
○廿四日前田齊泰如來寺に詣で、歸殿の際十村等の拜禮を受く。(三三三)
○廿七日前田齊泰夫人江戸城に登る。(三三三)

閏正月　○七日前田齊泰の生母榮操院の治療を大庭探元の外加藤邦安に命ず。(三三三)
○十五日表小將等に帶佩の練習を努むべきことを命ず。(三三四)
○十八日前田齊泰能を演ず。(三三五)
○御扶持人等、村萬雑の賦課方法に關して協議し御算用場の承認を受く。(三三六)

二月　○六日前將軍德川家齊薨去の報金澤に達す。(三三三)
○六日前田齊泰學校に臨む。(三三四)
○九日前將軍德川家齊薨じたるを以て習謡・鳴物等を遠慮すべき日數を定む。(三三五)
○十日昨年の命により御供道中をなす者の携ふる武器の數を復舊するも、會所銀の貸與を増額せざることを議す。(三三七)
○十一日前田齊廣夫人の父鷹司政熙薨去の報金澤に達す。(三三八)

○十四日光格天皇の御諡號治定したりとの報金澤に達す。（二三九）

○十五日前田齊泰、鷹司家に金子を贈るべきことを命ず。（二四〇）

○十九日御勝手方御用を奥村丹後守一人に命ず。（二四一）

○廿一日幕府、前田齊泰にその外祖父鷹司政熙の薨去を弔す。（二四二）

○廿六日森快安、前田齊泰の生母榮操院の病を診す。（二四三）

○廿七日文政金銀引替方の手續を告ぐ。（二四三）

三　月

○朔日前田齊泰の生母榮操院を診する爲京師より醫師を招かしむ。（二四三）

○四日前田齊泰の生母榮操院の病むを以て參覲の期を延ぶることを幕府に屆出しむ。（二四四）

○六日絹・紬の入質禁止の令を解かんことを議す。（二四五）

○六日老牛馬を他國に賣出すことを禁ず。（二四六）

○十四日他國御使人たる者に貸與する金高を改定す。（二四六）

○十四日石川郡本吉に鰯の大漁あり。（二四八）

○十八日小松御馬廻に使用せしむる賃馬の件を議す。（二四八）

○十九日京醫山本安房介、前田齊泰の生母榮操院の病を診す。（二四九）

○十九日御勝手方の難澁を救濟すべき諸士の意見は直に御次に上申することを得しむ。（二五〇）

○二十日德川家慶、前將軍の遺物を前田齊泰等に贈る。（二五一）

○廿三日大聖寺侯前田利平參覲の途金澤城に登る。（二五一）

○廿七日京醫山本安房介金澤を發して歸洛す。（二五三）

○在江戸の諸士に不時拜借を容易に許さゞるべきを告ぐ。（二五三）

○諸郡村々組合頭出張の際支給すべき料米の額等を定む。（二五四）

四　月

○四日寶圓寺の山門再建を命ず。（二五五）

○五日三味線彈の婦人を招きて遊興したる諸士に譴責を命ず。（二五五）

○十一日年寄中等の今年の借知はその出願を待つべきこととす。（二五六）

○十一日前田齊泰、金澤を發して參覲の途に就く。（二五六）

○十一日銀子預手形の一部を小割札と引替ふることを決す。（二六一）

○十五日當年の借知高は昨年の通りたるべきを告ぐ。

(二六二)
○十六日強烈の雷鳴あり。(二六三)
○十八日東本願寺新門跡遷化の報金澤に達す。(二六三)
○十九日武田秀平をして製せしめたるぞんがらすを江戸邸に送る。(二六四)
○廿一日文政金銀等引替手續に關する前令を改む。(二六四)
○廿四日前田齊泰江戸に着す。(二六五)
○廿六日徳川家慶使者を遣はして前田齊泰の參覲を勞せしむ。(二六六)
○廿八日前田齊泰登營して參覲の禮を行ふ。(二六六)
○御廣式女中の服裝は佳節以外紬・木綿に限るべきことを命ず。(二六七)
○一季奉公人の故なく退き又は給銀を貪ることを禁ず。(二六八)
○石川・河北二郡山々の落葉掻は定日の外之を爲さゞるべきことを稟申す。(二六八)

五月

○朔日新堂形の清水にて染物を爲し又は療用に供する件に關して議す。(二六九)
○七日先に水戸侯徳川齊昭その女を前田慶寧に嫁せしむるを約したるも變改の狀あるを以て議す。(二七二)
○七日小松城の濠埋浸したる件に就き議す。(二七二)
○十五日金澤に於いて前田齊泰着府後の狀を披露す。(二七三)
○廿四日江間篁齋等、醫學集會の指引を命ぜらる。(二七三)
○廿六日前田齊泰、その夫人等を招請す。(二七四)

六月

○二日前田慶寧、本郷邸内東居宅に移る。(二七六)
○十二日前田齊泰の子利鬯金澤に生まる。(二七七)
○十八日前田齊泰の子利鬯の七夜の祝儀を行ふ。(二七八)
○十八日從來布及び木綿以外の入質を禁じたる令を解除す。(二八〇)
○十九日前田齊泰その子利鬯を家臣前田圖書の養子とすべきことを告ぐ。(二八一)
○二十日大聖寺侯前田利平の家老山崎權丞金澤に來りてその借用したる米銀返濟の件を交渉す。(二八三)
○廿二日無高所の百姓が取高をなすには入百姓の名目を以てすべきことを告ぐ。(二八四)
○廿三日藤井方亭、前田齊泰の生母榮操院の病を診す。(二八五)
○廿六日幕府、前田齊泰の江戸城門内にて挾箱を作ふの方式を改むべきことを命ず。(二八五)

七月

○五日百歲の老齡者に物を賜ふ。(二八八)
○六日御郡方より藥鑵を他國に販賣すべからざることを告げしむ。(二八八)

○十七日前田齊泰、慶寧の東御居宅に臨み囃子を見る。(二八八)

○二十日前田齊泰、會津侯松平容敬の新錢座の邸に臨む。(二八九)

○廿一日百姓等の遊藝を習ふことを禁ず。(二九〇)

八月

○四日郡方の者に役儀を命ずる際知音により周旋を求むる等のことを戒む。(二九二)

○十五日明倫堂に釋菜の禮を行ふ。(二九二)

○廿一日前田齊廣夫人野田山の廟所に參詣す。(二九三)

○廿二日蓄米を行ふを以て藩の米廩を增置せんとす。(二九四)

○廿五日前田慶寧と水戸侯徳川齊昭の女との婚約に關して聞番より齊泰に報告す。(二九六)

九月

○朔日東御居宅成就せしを以て關係者に賞賜す。(二九七)

○十三日東本願寺末寺再建の手斧初を行ふ。(二九八)

○十九日前田齊泰能を催し、大聖寺侯前田利平之に臨む。(二九八)

○二十日今後獻上の鮮鯛に代ふるに金子を以てすべき幕命を受く。(二九九)

○廿二日能美郡に降雹あり。(三〇〇)

十月

○四日石川郡宮腰錢屋五兵衛の下役をして領内の船數調査の爲出張せしむべきことを告ぐ。(三〇〇)

○十六日分限高一萬石に對し籾百石の割合を以て圍穀を行ふべき幕命を受く。(三〇二)

○十六日收納米の品質を精良ならしむべきことを令す。(三〇三)

○十八日石川郡宮腰錢屋五兵衛の子喜太郎に扶持を給せんことを議す。(三〇五)

○十八日鷲羽・鶴羽等を拾ひたる者は御郡所等へ差出すべきことを令す。(三〇五)

十一月

○二日前田齊泰の子利鬯の色直の祝儀を行ふ。(三〇七)

○九日昨今兩日前田治脩の三十三回忌法會を寶圓寺に執行す。(三〇九)

○十六日御側衆等出會の際に於ける酒食に付き申合せをなす。(三一〇)

○廿四日前田齊泰の子利鬯、家臣前田圖書の養子としてその邸に移る。(三一一)

十二月

○朔日前田慶寧、通稱を又左衛門諱を利住と稱す。(三一三)

○廿五日前田齊泰登營して能を觀る。(三一三)

○三日先に降雹により損耗を生じたる能美郡諸村に償米を與ふることを決定す。(三一五)

○六日鹿島郡大津村の入海を開發する爲土砂を白濱村に取るべきことを許す。(三一五)

○十五日前田齊泰の生母榮操院の病癒え床拂を行

ふ。（三二六）

○十六日天保通寶錢の流通を圓滑にすべきことを告ぐ。（三二七）

○廿七日高直の菓子・料理等を禁ずる幕府の令を傳ふ。（三二八）

○御郡方算用場役の勤方を告ぐ。（三三二）

天保十三年　壬寅　皇紀二五〇二

正月

○朔日前田齊泰、江戸城に登り新正を賀す。（三三三）

○十六日前田慶寧、齊泰に伴はれて閣老を訪ふ。（三三三）

○廿三日前田齊泰夫人江戸城に登る。（三三三）

○晦日德川家齊の一周忌法會を神護寺に執行す。（三三三）

○羽咋郡上田村に住する舞々三郎太夫の身分に關して議す。（三三四）

二月

○百歳の老齡者に物を賜ふ。（三三七）

○十四日薪材の價格を公定す。（三三七）

○十五日前田慶寧初めて德川家慶に謁す。（三二八）

○十八日明倫堂に釋菜の禮を行ふ。（三三〇）

○廿二日前田慶寧江戸城に登り、正四位下左近衞權少將に任じ、偏諱を賜ひ、筑前守と稱す。（三三〇）

○廿六日前田齊泰、會津侯松平容敬夫人等を招請す。（三三三）

○晦日前田慶寧の叙任口宣受領の爲使者を江戸より發せしむ。（三三三）

三月

○四日金澤に於いて前田慶寧の元服を披露す。（三三五）

○十一日大聖寺侯前田利平の用人來り、その十萬石待遇を舊に復して減ぜんことを希望すとの意を告ぐ。（三三五）

○十三日前田齊泰就封の暇を受く。（三三六）

○十四日今明兩日前田慶寧叙任せられしを以て金澤に俗正月を行ふ。（三三六）

○十五日前田齊泰登營して就封の辭見す。（三三七）

○十八日前田齊泰江戸を發して就封の途に上る。（三三七）

○家中の士にして前田慶寧の名に觸るゝものを改めしむ。（三四三）

四月

○定火消の職務執行に關する心得方を定む。（三四三）

○朔日前田齊泰金澤城に着す。（三五三）

○三日奧村丹後守御勝手方御用の職を辭せんと請ふ。次いでその意を果さず。（三五四）

○四日前田齊泰、石川郡北安田にて捕獲せる白雉を觀る。（三五六）

○十三日幕府、前田齊泰夫人の獻上品を簡易にしその費を省くべきことを告ぐ。（三五七）

○十四日前田齊泰就封の後初めて學校に臨む。（三五八）

○廿二日前田齊泰・利義・利行共に能を演ず。（三五九）
○廿四日前田齊泰の生母榮操院病癒えたるを以て重ねて床拂の祝を行ふ。（三五九）
○廿七日前田齊泰能を演ず。（三六〇）
○廿七日物價方役所を廢止することを告ぐ。（三六一）

五月

○六日前田齊泰、石川郡弓取川筋に放鷹す。（三六二）
○十一日成瀨主税、御次向及び兩御廣式御儉約主付を命せらる。（三六三）
○十一日大聖寺侯前田利平歸邑の途金澤城に登る。（三六三）
○十四日金澤鍛冶町より火を失す。（三六五）
○十五日宮芝居を許可すべきことを議す。（三六六）
○十九日前田齊泰、その子慶寧以下の費用を節減すべきことを告ぐ。（三六六）
○廿一日前田齊廣夫人、自今家族相互の贈答を廢すべきことを告ぐ。（三六八）
○廿一日前田齊泰夫人江戸城西丸に登る。（三六九）
○廿二日前田齊泰金谷御廣式に臨む。（三七一）
○廿四日前田齊泰の子利義・利行初めて劍術を學ぶ。（三七二）
○廿八日衣食住に關し侍以下の心得を諭す。（三七二）
○廿九日前田齊泰數日前より脚氣を患ふ。（三七五）
○御歩並以上の子弟にして十四歳に達したる者等の學校へ届出を怠るべからざることを告ぐ。（三七六）
○商人の高利を貪ることを戒む。（三七七）

六月

○五日金谷御廣敷の經費を減ずべきことを告ぐ。（三七九）
○十二日前田齊泰の病氣平癒祈禱を白山宮及び金澤觀音院に命せしむ。（三八〇）
○十二日足輕・坊主・小者の生活に關して諭す。（三八〇）
○廿一日前田齊泰の病氣平癒を能登一ノ宮及び倶利伽羅に祈願せしむ。（三八二）
○廿五日前田齊泰、京醫小林豐後守を召して病を診せしむ。（三八三）
○廿六日諸士の明倫堂に出席を督促す。（三八四）
○晦日前田慶寧、森快安を遣はして齊泰の病を診せしむ。（三八五）
○本年に限り諸士よりの借知を廢することを告ぐ。（三八五）
○金澤の町年寄より町人の風俗に關する心得を諭す。（三八六）

七月

○七日前田齊泰夫人の費用を減ずべきことを告ぐ。（三八九）
○八日前田齊泰夫人使を遣はして山王社の祈禱札を齊泰に上らしむ。（三九〇）
○廿八日履物の制限を定む（三九〇）

○晦日郡方に嫁娶及び葬儀を簡易にすべきこと令す。(三九一)
○寺家・社家の風俗に關して諭す。(三九二)

八　月

○朔日前田慶寧登營して八朔の祝儀を行ふ。(三九六)
○十日西本願寺末寺再建の爲にする勸進に應ずべからざることを告ぐ。(三九七)
○十七日明倫堂に於いて欽定四經等を飜刻せんことを議す。(三九八)
○二十日前田齊泰の脚氣稍快癒す。(三九八)
○廿四日豐作なるを以て特に收納米の調製を嚴にせしむ。(三九八)
○廿五日京醫小林豐後守金澤を發して歸洛す。(三九九)
○廿八日前田齊泰京都の樂人を招きて舞樂を演せしむ。(四〇〇)
○從來文字金銀と記したるを改めて保字金銀とすべきを告ぐ。(四〇三)
○聟養子相續後死したる際未婚の幼婦に關する處置に就いて告ぐ。(四〇四)
○石川郡中宮より薪木出を川流とする件に就いて告ぐ。(四〇四)

九　月

○十二日八丈島の宇喜多孫助等に金穀を贈與する爲その目錄を製す。(四〇五)
○江戸に於ける藩邸の面積に關して屆出づ。(四〇六)
○婦人の服飾に對する取締方を令す。(四〇七)
○御郡奉行より百姓の衣食住に關して令す。(四〇九)
○郡方に於いて花火を打揚ぐることを禁ず。(四一二)

十　月

○八日前田齊廣夫人、齊泰を訪ふ。(四一三)
○十八日銀仲發行の銀子預手形を新札と引替ふべき期限を延ぶ。(四一四)
○二十日疱瘡流行するを以て家族に患者を有する年寄中等の遠慮缺勤すべきことを命ず。(四一四)
○廿八日收納米受取の任に當る下代等の釃し米を利するを停め、下敷米を興ふべきことを令す。(四一五)
○祠堂銀の返濟を遲延することなかるべきを告ぐ。(四一八)
○能美郡湊村を町並の取扱たらしめんことを請願す。(四一八)

十一月

○二日江戸に於いて琉球人見物の件に就いて告ぐ。(四一九)
○四日前田齊泰の子利匡頃日疱瘡を患ふ。(四二一)
○五日水野越前守より領内に産する塩硝賣渡の交渉ありたるを拒絶す。(四二二)
○七日前田齊泰の病輕快に赴くを以て醫師の當直を廢す。(四二三)
○十二日金澤横傳馬町に火災あり。(四二三)
○十八日德川家慶、前田慶寧に放鷹によりて獲たる

雁を贈る。(四二三)

○廿九日學校校正方西坂余所之助その著乗統別史を藩侯に呈す。(四二三)

○頭・支配人にその配下の武藝勤惰の狀を調査せしむ。(四二四)

○手取川川流しの薪材拂下の件を告ぐ。(四二五)

○沖船頭・水手等は船持の便を計り成るべく自國に於いて稼業すべきことを告ぐ。(四二六)

○能登屋佐助、町奉行に潰し箔製造の許可を請ふ。(四二六)

十一月

○二日幕府、前田齊泰に來年三月を以て參覲すべきことを命ず。(四二八)

十二月

○十五日幕令に基づき祠堂銀・町會所貸附銀の利子を低下すべきことを告ぐ。(四二九)

○十六日越中五ヶ山製塩硝の一部を他國に販賣することを許すに決す。(四三〇)

○廿三日横目博勞を廢し、在博勞の株立を止むることを決す。(四三〇)

○廿六日金澤に於いて流質の期限を改めて十ヶ月とすることを告ぐ。(四三一)

○廿九日新番御歩の娘又は姉妹を御次女中に任用し得べきことを定む。(四三三)

○前田齊泰の病全癒せざるを以て明年頭の賀を受けざることを告ぐ。(四三四)

○博奕類似の勝負を禁止することを告ぐ。(四三五)

○新に石川郡地黄煎村・十一屋村の名を設く。(四三五)

天保十四年　癸卯　皇紀二五〇三

正月

○朔日前田齊泰保養中なるを以て年頭の賀を受けず。(四三六)

○朔日前田慶寧本郷邸に於いて初めて頭役以上の年賀を受く。(四三七)

○二日前田慶寧江戸城に登り初めて年頭祝賀の禮を行ふ。(四三七)

○十九日鏡餅直しの祝儀を行ふ。(四三八)

○廿三日錢屋五兵衛の新造船一艘を買上げて藩の御手船とす。(四三八)

○晦日徳川家齊の第三回忌法會を神護寺に執行す。(四三九)

二月

○四日一向宗寺庵が寺格昇進の際に於ける勸化の件に關し通牒す。(四三九)

○四日諸郡各村の肝煎交代に際し同苗の速かに之が處置を爲すべきことを告ぐ。(四四三)

○六日前田齊泰來る三月の參覲を延期すべきことを告ぐ。(四四三)

○六日江戸に於ける領內の產物問屋に出荷する手續を告ぐ。(四四四)

○六日領内船舶の權數調理役を錢屋五兵衛に命ず。(四四四)
○十日能美郡湊村を町並の取扱とすることを命ず。(四四五)
○十一日金澤城河北御門の屋根を葺替ふるを以て通行を禁ず。(四四五)
○十二日前田齊泰夫人江戸城に登る。(四四六)
○十四日明倫堂に釋菜の禮を行ふ。(四四六)
○十四日前田齊泰の子利義及び利行の病疱瘡と治定す。(四四六)
○十七日百歳の老齢者に物を賜ふ。(四四八)
○十八日彗星顯る。(四四八)
○廿四日百姓の子弟を町奉公に出すべからざることを令す。(四五〇)
○廿七日前田慶寧と婚姻の内約したる水戸侯德川齊昭の女、疱瘡を以て逝去したるの報本郷邸に達す。(四五一)
○家内に疱瘡・痲疹等の患者を有するもの丶城中勤仕に就いて告ぐ。(四五一)
○家中の士の養子出願の件に就いて告ぐ。(四五二)
○當分馬市を廢することを告ぐ。(四五三)
○流質の限月等に關する郡方の取扱を規定す。(四五三)
○越中礪波郡菅作村々の肝煎等、その菅を金澤笠市に賣出す手續を稟議す。(四五五)

三月
○朔日前田齊泰の子利義の疱瘡癒え酒湯を浴す。(四五八)
○朔日前田齊泰その子利順の生活を質素にすべきことを命ず。(四五九)
○朔日金城靈澤の碑文作製を津田鳳卿等に命ず。(四六〇)
○九日前田齊泰、參覲延期のことを幕府に屆出づ。(四六二)
○十一日大聖寺藩の江戸千駄木に於ける下屋敷長屋類燒す。(四六三)
○十六日本郷邸に於いて德川家慶の日光參詣中火之元等に用心すべきことを告ぐ。(四六三)
○十八日諸士の武藝に秀でたる者を賞す。(四六三)
○廿七日前田齊泰、石川郡宮腰に於いて捕獲したるクイザメを覽る。(四六八)
○廿七日百姓の女子にして恣に尼僧となることを禁ず。(四六九)
○武藝稽古に執心する者の交名を定期に屆出づべきことを命ず。(四六九)

四月
○朔日前田齊廣夫人野田山の廟所に參詣す。(四七〇)
○六日江戸に於いて德川家慶の日光參詣中辻番所警固のことを定む。(四七一)

〇八日前田齊泰再び參覲を延期すべきことを幕府に屆出づ。(四七二)
〇十日郡方に於いて他國より入込みたる流浪者を止宿せしむることを禁ず。(四七三)
〇十三日東本願寺末寺再建に就き立柱式を行ふ。(四七三)
〇廿四日大聖寺侯前田利平參覲の途金澤城に登る。(四七三)
〇廿七日前田齊廣夫人石川郡宮ノ腰等に行歩を行ふ。(四七五)
〇明倫堂の會讀に人持組の士の缺席屆出方心得を定む。(四七六)

五月

〇二日前田齊泰更に參覲の延期を請ふ。(四七七)
〇七日京醫小林豐後守、前田齊泰の病を診す。(四七八)
〇十日前田齊泰能登にて捕獲したる海豹を見る。(四七九)
〇十二日百姓の住宅に關する制限を令す。(四七九)
〇十三日老中水野越前守、前田齊泰夫人の費用合力を節減すべきことを告ぐ。(四八三)
〇十三日御算用場奉行石野右近以下の辭意を却下す。(四八五)
〇十三日京醫小林豐後守に能を觀覽せしむ。(四八六)
〇十七日京醫小林豐後守歸洛す。(四八七)
〇晦日米の俵裝を改善する爲御藏所に見本を備付くべきことを命ず。(四八七)
〇馬匹の他國出通行札料に關して通牒す。(四九〇)

六月

〇四日本郷邸御廣式の經費を節減する爲老女二人にその主任を命ず。(四九〇)
〇六日前田齊泰の病未だ全く癒えざるを以て、年寄等に特に政務を怠らざるべきことを諭す。(四九一)
〇十八日諸士の頭分等に特に儉約の實行を令す。(四九三)
〇廿三日羽咋郡鹽濱村に三兒を生みたる者あるを以て扶持米給與の件を議す。(四九五)
〇前田齊泰、領内海岸の防備を更に嚴にし、鹿島郡所口に人持組の在住を置く等のことを議せしむ。(四九六)
〇町人に武藝を敎授するを禁ず。(五〇三)

七月

〇六日郡奉行、十村以下の家作にして法に觸るゝものを撤すべきことを命ず。(五〇三)
〇八日幕府、加賀藩に預所としたる能登の地に本年より三ヶ年の期限を附することを告ぐ。(五〇四)
〇十日家中奉公人等の酒店その他に於いて强請し又は騷擾するものあるを戒む。(五〇八)
〇十九日旱天なるを以て雨乞を行はしむることを議す。(五〇九)

八月

○廿二日前田齊廣夫人の疾病癒と治定す。(五〇九)

○幕命により異國船の江戸近海に渡來したる際加賀藩より出張せしむる人數等を屆出づ。(五一〇)

○再び郡方に家作の制限に關して令す。(五一三)

○十六日浪人の徘徊を禁ずる幕令を傳ふ。(五一六)

○十七日幕府、能登の預所檢分の爲勘定所の吏を派遣すべきことを告ぐ。(五一七)

○廿二日能登預所檢分の爲出張する幕吏の宿舍を急に改造すべきことを命ず。(五一八)

○廿四日本年豐作なるを以て租納の際監査を嚴にせしむ。(五一八)

○廿九日海岸防備の爲鹿島郡所口在住を津田修理に命ず。(五一九)

○幕府、盲人にして市中に住し琴・三味線・針治・導引を業とする者の座法を正すべきを告ぐ。(五二二)

○町方居住の者の家作に關して令す。(五二三)

九月

○二日諸商人・職人の金銀箔を押したる看板を用ふることを禁ず。(五二四)

○六日能登金剛崎・輪島・碆浦に遠見番所を置くを以て設計を命ず。(五二四)

○十八日御郡方より商用の爲他國に赴くものに人別出願せしむ。(五二六)

○廿三日前田齊泰參覲延引の屆書を幕府に呈す。(五二六)

○廿六日御鷹場に關する規定の改められたることを告ぐ。(五二七)

○廿八日銀仲預手形を新札と交換すべき期限を延ぶ。(五三〇)

閏九月

○四日幕府、能登の預所檢分を中止するを以てその派遣の吏を召還すべきを告ぐ。(五三〇)

○十七日村御印燒失の場合に於いては御算用場奉行よりその寫を下附すべきことを定む。(五三一)

○十八日家中の士御日柄に鳥構又は川殺生を爲すを禁ず。(五三二)

○石川郡寺中大野湊神社神主より金澤城內東照宮奉仕の狀を具申す。(五三三)

○町人等家賣買納得の際酒食を饗するを得ざる禁令を嚴守せしむ。(五三四)

○料理業の者高價の飲食物を調ふべからざる等のことを令す。(五三五)

十月

○八日諸浦に船頭・水手稼方の主附を置き、その取締に當らしむることを令す。(五三五)

○廿四日前田齊泰重ねて參覲延期願を幕府に提出す。(五三七)

十一月

○十八日幕令の趣旨により酒造株を改めて酒造稼と稱せしむべきことを告ぐ。(五三八)

十二月　○廿四日前田齊泰の子利鬯髪置の儀を行ふ。(五三九)
○廿八日金子と銀子との交換比例を改定す。(五三九)
○十九日前田慶寧袖留の儀を行ふ。(五四〇)
○家中難澁の馬持以下の士に貸銀を許す。(五四〇)
○前田齊泰保養中なるを以て來年年頭の賀を受けざることを告ぐ。(五四二)

是歳　○御塩吟味人の勤方を改定す。(五四三)

弘化元年　甲辰　皇紀二五〇四

正月　○朔日前田齊泰保養中なるを以て年頭の禮を受けず。(五四六)
○四日前田慶寧袖留せしを以て祝賀の爲能を催す。(五四七)
○十日越中新川郡黑部山の銅鑛を採掘せしむべきを以て之が準備を郡奉行に命ず。(五四八)
○十九日城内に鏡餅直しの儀を行ふ。(五四八)

二月　○二日越中に大風・暴濤あり。(五四九)
○四日前田慶寧の月次及び五節句に登營すべき願書提出の件を令す。(五四九)
○四日越中に再び大風・暴濤あり。(五五〇)
○廿四日前田齊泰病むを以て參覲延期の意あることを家中に告ぐ。(五五〇)
○加賀大乘寺及び越中國泰寺に先住の遠忌を執行するを以て相對托鉢を許す。(五五一)

三月　○十一日幕府、前田齊泰の參覲延期の請を許す。(五五二)
○十一日緝之閣講釋に學校助教加人を當つることを許す。(五五二)
○二十日前田慶寧の月次及び五節句登營の請を許さる。(五五三)
○廿四日諸公子石川郡宮腰に行歩を行ふ。(五五三)
○廿六日御射手後藤駒次郎の發明せる臺弓を藩侯の覽に供すべきことを議す。(五五四)
○廿七日前田齊泰夫人江戸城に登る。(五五四)

四月　○朔日前田慶寧初めて月次登營を行ふ。(五五五)
○五日昨今兩日前田光高の二百回忌を天德院に執行す。(五五五)
○十四日表小將弓術御次稽古の射場を金谷文庫より三ノ丸に轉せんことを議す。(五五九)
○廿六日犀川及び淺野川に於いて毎歳九月朔日より三月晦日まで漁撈を禁ず。(五六〇)
○能登口郡に耕作奉公人缺乏するを以てその處置に就いて通牒す。(五六一)

五月　○五日前田慶寧初めて節句の登營を行ふ。(五六八)
○十日大聖寺侯前田利平歸邑の途金澤城に登る。(五七〇)
○十日前田慶寧江戸城本丸火災に罹るを以て閣老を

訪ふ。(五七二)
○十二日前田齊廣夫人寶圓寺及び天德院に參詣す。(五七三)
○十七日江戸城本丸燒失の報金澤に達す。(五七四)
○廿一日前田齊泰江戸城本丸燒失を報せる奉書に對し返簡を上る。(五七五)
○火事の際世子前田慶寧に馬上にて邂逅したるもの丶作法を告ぐ。(五七六)

六月

○十二日昨今兩日寶圓寺に於いて前田吉德の百回忌法會を執行す。(五七七)
○晦日昨今兩日天德院に於いて前田齊敬の五十回忌法會を執行す。(五七八)
○江戸城燒失に付き諸侯の献資に關する雜說を藩に告ぐ。(五八一)
○十村等、能登口郡の百姓が奉公を廢して日雇となるを禁止せられんことを禀請す。(五八四)

七月

○八日銀手形缺乏するを以て金銀の交換比率を公定し、之が混用を許す。(五八五)
○九日前田齊泰更に參覲を延期すべきことを告ぐ。(五八六)
○十日旱天減水するを以て家中の屋敷に用水を引入るゝことを禁ず。(五八六)
○十三日末期養子たる者の養母に對する服忌に就いて定む。(五八七)
○諸郡船舶に極印を施すものは舊に依つて其郡の御扶持人を以てせんことを答申す。(五八八)

八月

○三日德川家慶、前田慶寧に放鷹により獲たる雲雀を贈る。(五八九)
○廿一日天の網にて雲雀を捕へ及び雲雀の賣買を禁ずる前令を守るべきを告ぐ。(五九〇)
○廿三日前田齊泰、その子利行と共に石川郡粟崎を經て宮腰に行歩を行ふ。(五九一)
○廿四日能登口郡の十村等、收納米取扱方に關し規定す。(五九二)
○盲人の琴・三味線・針治・導引を業とするものは檢校の支配に屬すべきことを命す。(五九五)

九月

○六日江戸城災に罹るを以て家中・町・在より献金の割合を定む。(五九六)
○十日前田齊泰、江戸城本丸燒失せしを以て造營の資を上らんことを請ふ。(六〇二)
○十一日幕府、前田齊泰の參覲延期の請を許す。(六〇三)
○十五日前田齊廣夫人眞龍院、本多播磨守の別亭に臨む。(六〇三)
○廿三日銀仲預手形を新札と引替ふべき期限に就いて告ぐ。(六〇五)

○廿四日石川郡白山村領の銅山を休山とすべきことを命ず。(六〇六)

○廿四日小鷹及び天之網を禁ずる三里以内の村附を公示せんことを議す。(六〇六)

○給人の百姓より夫銀を繰上げ借受くることを禁ず。(六〇七)

○領内の富豪に對し調達銀を命ず。(六〇八)

○大小横目等、前田慶寧の入國の時期に就いて議す。(六一〇)

十月

○六日前田齊泰、金澤の郊外大樋口に行歩を行ふ。(六一七)

○十日前田慶寧の字及び號を選定す。(六一七)

○十三日水戸領の百姓本郷邸に至り徳川齊昭の謹愼解除に斡旋を乞ふの願書を提出す。(六一八)

○十四日鳳至郡皆月村彌三衞異國に漂流して歸着せしを以てその口書を徴す。(六三二)

○十八日江戸に於いて製したる金城靈澤碑竣成す。(六五二)

○廿二日浪人の徘徊を禁止する幕令を村々の高札場等に掲示せしむ。(六五四)

○廿三日百姓・頭振の名に利の字を用ふることを戒む。(六五五)

○城中御番人の一類御預人ありたる爲判番引する者が事件落着の上出番する期日に關して定む。(六五六)

十一月

○二日幕府、前田齊泰に表高一萬石に五百兩の割合を以て江戸城本丸造營の資を納むべきことを命ず。(六五七)

○四日前田齊泰、久留米侯有馬賴永の妹をその子慶寧の室とすべきことを告ぐ。(六五八)

○九日越後糸魚川藩の吏、異國船の件に關し加賀藩領越中境關所に通達す。(六五九)

○十二日東蝦夷室蘭沖に異國船の碇泊したる報境奉行より達す。(六六二)

○十三日前田慶寧明年入國すべきを以て金谷御殿の増築を命ず。(六六三)

○十四日大聖寺侯前田利平使を金澤に遣はし、當年借銀返納の延期を請はしむ。(六六四)

○十六日能登近海に異國船の航行を發見し若しくはその風聞ある時は、直に津田修理に屆出づべきことを命ず。(六六五)

○二十日徳川家齊夫人逝去の報金澤に達す。(六六六)

○廿六日前田齊泰及び慶寧、徳川家齊夫人の靈前に香奠を供す。(六六七)

○廿七日江戸城炎上の爲家中及び町・在に課したる借上銀の割合を減ずることを告ぐ。(六六七)

○廿九日百姓・頭振の町方に轉住せんことを請ふ者

を嚴に調査すべきことを命ず。(六七〇)
○御郡方より金澤へ奉公に出づる者は稼送狀を持參すべきことを命ず。(六七二)

十一月 ○十一日前田齊泰保養中なるを以て來年頭の賀を受けざるべきことを告ぐ。(六七四)
○十九日前田慶寧前髮を除く儀を行ふ。(六七五)
○廿二日德川家慶、前田慶寧に檜重を贈る。(六七七)
○廿三日幕府の改元を告げたるの書に達す。(六七七)
○廿四日金澤に於いて改元の行はれたることを告ぐ。(六七八)

十二月 ○廿四日火災の際城中御番人の眞の鞭を携へ往來することを許す。(六七九)
○廿九日學校附小者市太郎孝行なるを以て賞賜せらる。(六八〇)
○家中馬持以下の者の難澁を救濟する爲貸銀を許す。(六八〇)

弘化二年　乙巳　皇紀二五〇五

正月 ○朔日前田齊泰、保養中なるを以て年頭の賀を受けず。(六八二)
○四日前田齊泰能を演せしむ。(六八三)
○十五日前田齊泰、三月下旬を以て參覲せんとすることを告ぐ。(六八四)
○廿五日前田齊泰夫人、厄年に當るを以て卯辰觀音院に祈禱を命ず。(六八五)

二月 ○四日前田齊泰、病氣本復祝の儀を行ふ。(六八六)
○十一日前田齊泰能を演じ、物頭以上をして之を觀覽せしむ。(六九〇)
○十二日前田齊泰の病平癒せるを以て諸郡に休日を與ふ。(六九一)
○十三日前田齊泰能を演じ、番頭以下をして之を觀覽せしむ。(六九三)
○十四日前田齊泰の病癒えたるを以て町・在一統に赤飯を與ふることを命ず。(六九三)
○十六日前田齊泰の病癒えたるを祝し、是日以後三日間に亙り盆正月を行ふ。(六九五)
○十八日前田齊泰能を演じ諸士をして之を觀覽せしむ。(六九六)
○二十日能美郡の中に僧侶を招き多人數集合するものあるを戒む。(六九七)
○廿三日前田齊泰瀧之間の講書等を聽く。(六九八)
○廿四日前田齊泰能を演じ諸士をして之を觀覽せしむ。(六九九)
○廿四日前田齊泰の子利鬯宮參を行ふ。(七〇〇)
○廿六日前田齊泰能を演じ諸士をして之を觀覽せしむ。(七〇〇)
○廿七日前田齊泰參覲の期に就いて幕府に屆出づ。

(七〇二)

〇廿八日諸士に令し百姓と相對を以て借地したるものを返却せしむ。(七〇三)

廿八日前田齊泰、新年以後初めて明倫堂に臨む。(七〇三)

〇廿九日前田齊泰能を演じ諸士以下をして之を觀覽せしむ。(七〇四)

〇廿九日前田齊泰、德川家慶が江戸城本丸に移徙せしを以て物を献る。(七〇六)

三月

〇十四日前田齊泰金谷御殿に臨み囃子を演ず。(七〇六)

〇十五日前田齊泰の病氣本復せしを以て、この日以降鎭守社に報賽の祭禮を行ふ。(七〇七)

〇十六日前田齊泰、その子利義・利行と共に石川郡粟ケ崎に放鷹す。(七〇八)

〇十九日大聖寺侯前田利平參覲の途金澤城に登る。(七〇九)

〇廿二日前田齊泰、その子利義・利行と共に能を演ず。(七一〇)

〇廿三日前田齊泰能を演ず。(七一一)

〇廿六日江戸邸に於ける御次向等の省略を命ず。(七一三)

〇廿七日前田齊泰金澤を發して參覲の途に上る。(七一三)

〇異國船渡來の際、江戸詰人が臨時に海岸警固等を命せらるゝことあるべきを告げしむ。(七一四)

〇能登の百姓に一向宗寺庵昇進等の爲に醵金するを禁ず。(七一四)

四月

〇二日前田齊泰の生母榮操院等、石川郡大野・宮ノ腰に行歩を行ふ。(七一五)

〇四日この日以後石川郡大乘寺に於いて開山徹通義介の遠忌法會を營む。(七一五)

〇十一日前田齊泰江戸に着す。(七一六)

〇十三日金谷御殿を修營するを以て立柱等の儀式を行ふ。(七一六)

〇十九日幕府德川家定の女精姫を前田慶寧に嫁せしめんと求むるを以て之が拒絶を議す。(七一七)

〇廿七日幕府、前田慶寧に德川家定の女を嫁せしめんとの内意を解消す。(七一九)

〇石川郡宮腰にて藩有の巨船竣成す。(七二二)

五月

〇朔日前田齊泰、登營して參觀の禮を行ふ。(七二三)

〇四日本郷邸及び平尾邸に鐵炮角場竣成したるを以て射的演習に着手せしむ。(七二三)

〇六日前田慶寧、久留米侯有馬頼永の妹に婚を求むる爲使者を遣す。(七二四)

〇十七日幕府、前田慶寧に本年秋を以て歸國すべきことを許す。(七二五)

○十八日前田齊泰、慶寧と共に登營して德川家慶の本丸に移徙したる祝賀能を觀る。(七二六)
○十八日前田齊泰の生母榮操院、河北郡本興寺に參詣す。(七二七)
○廿一日前田齊泰、その夫人を招請して病氣本復の祝賀能を演ず。(七二七)
○廿八日大小將横目等、外夷防禦に關し軍裝改善の意見を上申す。(七二七)

六月

○十日御次稽古等の者の外城中にて馬乘袴を着用するを禁ず。(七三二)
○十一日家中の人々の諸上納打込辨濟に關して告く。(七三二)
○十六日前田慶寧、登營して初めて嘉祥を祝す。(七三三)
○廿一日犀川・淺野川出水す。(七三四)
○廿二日久留米侯有馬頼永の使者來りて前田慶寧との縁組を諾したることを告く。(七三六)
○廿四日能登惣持寺の主僧に乘輿の儘越中境關所の通過を許したることを通牒す。(七三七)
○廿六日大小將横目等、重ねて軍裝改善に關する意見を上申す。(七三七)
○廿八日德川家慶、前田齊泰及び慶寧の暑中を問ひ檜重を贈る。(七三九)

七月

○七日祠堂銀借用の者にその返納を督促す。(七四〇)
○十二日村々に二日讀を勵行せしむべきことを告く。(七四一)
○十三日幕府、前田慶寧の久留米侯有馬頼永の妹と婚姻するを許す。(七四八)
○十四日青山將監の家來齋藤三九郎の江戸に修業せんとする件を議す。(七四九)
○十五日石川郡大乘寺の法會に集れる僧徒等亂暴す。(七五〇)
○十八日久留米侯有馬頼永使者を遣して、その妹の前田慶寧と縁組を許されたることを祝す。(七五〇)
○十九日家中諸士の紋譜帳を幕府に提出す。(七五一)
○十九日薩摩侯嫡子島津齊彬に贈る物品を調進す。(七五二)
○廿八日諸士の收納米を預る藏宿業者をして倉庫の構造を完全にせしむ。(七五三)
○廿八日藩有の米倉にして火災に瀕したる場合の心得を令す。(七五四)
○廿九日前田慶寧の爺田調所をして彫刻せしめたる雅印成る。(七五四)
○大聖寺藩の三十講に模倣したる頼母子を起さんことを議す。(七五五)

八月

○四日前田齊泰、慶寧の歸國後に於ける敎育に關し

(七〇二)
○廿八日諸士に令し百姓と相對を以て借地したるものを返却せしむ。(七〇二)
廿八日前田齊泰、新年以後初めて明倫堂に臨む。(七〇三)
○廿九日前田齊泰能を演じ諸士以下をして之を觀覽せしむ。(七〇四)
○廿九日前田齊泰、德川家慶が江戸城本丸に移徙せしを以て物を献る。(七〇六)

三月

○十四日前田齊泰金谷御殿に臨み囃子を演ず。(七〇六)
○十五日前田齊泰の病氣本復せしを以て、この日以降鎭守社に報賽の祭禮を行ふ。(七〇七)
○十六日前田齊泰、その子利義・利行と共に石川郡粟ケ崎に放鷹す。(七〇八)
○十九日大聖寺侯前田利平參觀の途金澤城に登る。(七〇九)
○廿二日前田齊泰、その子利義・利行と共に能を演ず。(七一〇)
○廿三日前田齊泰能を演ず。(七一一)
○廿六日江戸邸に於ける御次向等の省略を命ず。(七一二)
○廿七日前田齊泰金澤を發して參觀の途に上る。(七一三)

○異國船渡來の際、江戸詰人が臨時に海岸警固等を命せらるゝことあるべきを告げしむ。(七一四)
○能登の百姓に一向宗寺庵昇進等の爲に醵金するを禁ず。(七一四)

四月

○二日前田齊泰の生母榮操院等、石川郡大野・宮ノ腰に行歩を行ふ。(七一五)
○四日この日以後石川郡大乘寺に於いて開山徹通義介の遠忌法會を營む。(七一五)
○十一日前田齊泰江戸に着す。(七一六)
○十三日金谷御殿を修營するを以て立柱等の儀式を行ふ。(七一六)
○十九日幕府德川家定の女精姫を前田慶寧に嫁せしめんと求むるを以て之が拒絶を議す。(七一七)
○廿七日幕府、前田慶寧に德川家定の女を嫁せしめんとの内意を解消す。(七一九)
○石川郡宮腰にて藩有の巨船竣成す。(七二一)

五月

○朔日前田齊泰、登營して參觀の禮を行ふ。(七二二)
○四日本郷邸及び平尾邸に鐵炮角場竣成したるを以て射的演習に着手せしむ。(七二三)
○六日前田慶寧、久留米侯有馬頼永の妹に婚を求むる爲使者を遣す。(七二四)
○十七日幕府、前田慶寧に本年秋を以て歸國すべきことを許す。(七二五)

六月

○十八日前田齊泰、慶寧と共に登營して徳川家慶の本丸に移徙したる祝賀能を觀る。(七二六)

○十八日前田齊泰の生母榮操院、河北郡本興寺に參詣す。(七二七)

○廿一日前田齊泰、その夫人を招請して病氣本復の祝賀能を演ず。(七二七)

○廿八日大小將横目等、外夷防禦に關し軍裝改善の意見を上申す。(七二七)

○十日御次稽古等の者の外城中にて馬乘袴を着用するを禁ず。(七三一)

○十一日家中の人々の諸上納打込辨濟に關して告く。(七三二)

○十六日前田慶寧、登營して初めて嘉祥を祝す。(七三三)

○廿一日犀川・淺野川出水す。(七三四)

○廿二日久留米侯有馬頼永の使者來りて前田慶寧との縁組を諾したることを告く。(七三六)

○廿四日能登總持寺の主僧に乘輿の儘越中境關所の通過を許したることを通牒す。(七三七)

○廿六日大小將横目等、重ねて軍裝改善に關する意見を上申す。(七三七)

○廿八日徳川家慶、前田齊泰及び慶寧の暑中を問ひ檜重を贈る。(七三九)

七月

○七日祠堂銀借用の者にその返納を督促す。(七四〇)

○十二日村々に二日讀を勵行せしむべきことを告く。(七四一)

○十三日幕府、前田慶寧の久留米侯有馬頼永の妹と婚姻するを許す。(七四八)

○十四日青山將監の家來齋藤三九郎の江戸に修業せんとする件を議す。(七四九)

○十五日石川郡大乘寺の法會に集れる僧徒等亂暴す。(七五〇)

○十八日久留米侯有馬頼永使者を遣して、その妹の前田慶寧と縁組を許されたることを祝す。(七五〇)

○十九日家中諸士の紋譜帳を幕府に提出す。(七五一)

○十九日薩摩侯嫡子島津齊彬に贈る物品を調進す。(七五二)

○廿八日諸士の收納米を預る藏宿業者をして倉庫の構造を完全にせしむ。(七五三)

○廿八日藩有の米倉にして火災に瀕したる場合の心得を令す。(七五四)

○廿九日前田慶寧の徳田過所をして彫刻せしめたる雅印成る。(七五四)

○大聖寺藩の三十講に模倣したる頼母子を起さんことを議す。(七五五)

八月

○四日前田齊泰、慶寧の歸國後に於ける教養に關し

て告ぐ。(七五八)
○四日鳳至郡中居に於いて鑄造したる五百目玉筒を珠洲郡狼煙に据付くることを命ず。(七五九)
○六日前田慶寧、歸國の際に於ける御供馬及び供奉の人數等を定む。(七六〇)
○九日御醫師藤井方亭の病篤きを以て人参料を下賜す。(七六二)
○十一日銀仲預銀手形を新札と交換すべき期限を延ぶ。(七六三)
○十三日前田慶寧歸國せんとするを以て、德川家慶使を遣して物を賜ふ。(七六三)
○十五日前田慶寧、登營して歸國の辭見す。(七六五)
○十八日前田齊泰の子利義及び利行、金澤郊外小立野口に行歩を行ふ。(七六六)
○十九日前田慶寧、江戸を發して歸國の途に上る。(七六六)
○廿一日御醫師吉田長淑蘭學修行中なるも漢法を併せ行ふべきを命ず。(七六七)
○廿三日金谷御殿に於ける前田齊廣夫人眞龍院の居を松之御殿と稱すべきことを告ぐ。(七六八)
○廿五日金谷御殿の金谷門・七十間門内を二ノ丸の格に改むべきことを告ぐ。(七六八)
○金箔を江戸金箔屋以外より買入れて賣捌くことを禁ず。(七七〇)
○石川郡熊走村の猿を追拂ふ爲筒藥の下附を命ず。(七七〇)

九月

○朔日前田齊泰、登營の際作法を誤りたる小者を戒飭す。(七七一)
○六日前田慶寧金谷御殿に着す。(七七二)
○六日今明日金澤に番正月を行ふ。(七七四)
○廿二日前田慶寧初めて學校に臨む。(七七五)
○廿七日前田慶寧、石川郡粟崎・宮腰に行歩を行ふ。(七七六)
○廿八日前田慶寧學校に臨む。(七七七)

十月

○二日前田慶寧、齊廣夫人眞龍院を招請す。(七七七)
○三日疱瘡・水痘の患者を有する諸士の出勤を戒む。(七七八)
○四日御醫師吉田長淑等、前田齊泰の診察御用を命ぜらる。(七七八)
○八日前田慶寧學校に臨む。(七七九)
○十六日仁孝天皇の皇子胤宮薨去せしを以て、前田齊泰その奉弔に關して幕府の指令を受く。(七八〇)
○十八日前田慶寧、横山遠江守の下邸に臨む。(七八一)
○廿一日前田慶寧、河北郡森下村附近に行歩を行ふ。(七八三)
○廿二日前田慶寧學校に臨む(七八四)

十一月　○廿四日金澤横堤町より出火す。（七八四）
○廿八日前田慶寧學校に臨む。（七八八）
○四日金澤木新保御畑の柿木を竹澤に移植する件に關し指令に接す。（七八九）
○八日今明日前田慶寧金澤城内を巡視す。（七八九）
○十二日昨今兩日前田宗辰の百回忌法會を天德院に取越執行す。（七九〇）
○十二日江戸廣德寺に前田宗辰の百回忌法會を執行す。（七九四）
○十三日諸士に對する借知の率を減ずべきことを告ぐ。（七九四）
○廿五日大雪に付き往來の取除を命ず。（七九六）

十二月　○十四日白山銅山を廢したるを以て、その主任たりし者に與ふる慰勞金額を議す。（七九七）
○十七日能登に於ける幕府領を無年限に加賀藩預領とし、從來の施政と收納方法を改むべきことを告げらる。（七九七）
○十八日德川家慶、老中をして前田慶寧の寒中の安否を問はしむ。（八〇〇）
○十八日前田慶寧學校に臨む。（八〇二）
○銀仲預銀手形の引換期限を更に延ぶべきことを告ぐ。（八〇二）

弘化三年　丙午　皇紀二五〇六

正　月　○朔日前田齊泰、江戸城に登り年頭を賀す。（八〇三）
○三日前田齊泰、上野の東照宮等に詣づ。（八〇三）
○十五日本郷邸の火見櫓・長屋等類燒す。（八〇三）
○廿四日前田慶寧學校に臨む。（八〇四）

二　月　○八日金城靈澤の碑石を江戸邸より發送す。（八〇五）
○八日德川家慶、前田齊泰に放鷹に依りて獲たる鶴を贈る。（八〇五）
○十日幕府、仁孝天皇の崩御を告ぐ。（八〇七）
○二十日仁孝天皇崩御せしを以て金澤に於いて本日より五日間普請・鳴物の停止を命ず。（八〇七）
○二十日幕府、仁孝天皇の崩御を弔し奉る爲香奠を獻すべきことを命ず。（八〇九）
○二十日金城靈澤の碑を石川郡大野浦に回漕することを江戸會所に上申す。（八一二）
○廿五日仁孝天皇崩御せしを以て前田慶寧奉悼の使者を幕府に派遣す。（八一三）
○廿六日前田慶寧、金澤城二ノ丸を巡視す。（八一三）
○懸作高を本村に取返す場合に故障なからしむべきことを告ぐ。（八一三）
○御郡奉行、海邊手當の爲輪島出張所及び遠見番所の位置を定む。（八一五）

三　月　○三日前田齊泰の行列、江戸城和田倉門附近にて阿部伊勢守の先驅と衝突す。（八一六）

○六日前田齊泰、仁孝天皇の崩御を弔し奉る爲使者を金澤より發す。(八一七)

○七日前田齊泰、增上寺參詣の際の宿坊を清光寺に定む。(八一八)

○十二日前田慶寧、學校に臨む。(八一九)

○十四日前田慶寧、江戸に向かひて金澤を發す。(八二〇)

○廿二日富山侯前田利保の江戸上屋敷災に罹る。(八二三)

○廿七日加賀藩所藏の和蘭字書を藤井方亭の遺子方朔に貸與す。(八二五)

四月

○五日前田慶寧江戸に着す。(八二五)

○六日御郡奉行、金城靈澤の碑石川郡大野湊に到着したることを報ず。(八二六)

○八日銀仲預銀手形の引換期限を延ぶ。(八二七)

○十三日德川家慶、前田齊泰に就封の暇を賜ひ且慶寧の出府せしを勞す。(八二七)

○十五日前田齊泰登營して就封の辭見し、慶寧は參府の禮を行ふ。(八二八)

○十七日金澤淺野水車町より火を失す。(八二九)

○十八日前田齊泰、江戸を發して就封の途に上る。(八三四)

○二十日先の火災により困窮する者を收容して粥を給す。(八三六)

○廿四日建築材料の價格を低廉ならしむべきことを命ず。(八三八)

○廿六日前田齊泰の子利義・利行、石川郡白山宮に行歩を行ふ。(八三八)

○宮腰町奉行里見亥三郎、錢屋五兵衞の船頭に渡海免狀を與ふ。(八三八)

五月

○三日前田齊泰金澤城に着す。(八三九)

○四日富山侯前田利保が江戸邸燒失に就き加賀藩より助資を得たるを謝せる報金澤に達す。(八四〇)

○九日大聖寺侯前田利平、江戸より歸邑の途金澤城に登る。(八四〇)

○十日石川郡相川新の儀左衞門孝行を以て賞せらる。(八四一)

○十一日前田齊泰囃子の舞を演ず。(八四一)

○十三日前田齊泰、金澤郊外七ツ屋口に放鷹す。(八四三)

○十四日二條齊信の使者金澤城に登り金子融通を求む。(八四三)

○十六日前田齊泰學校に臨む。(八四六)

○十八日前田慶寧、江戸城に登り本丸造營成就の祝賀能を覽る。(八四七)

○十九日前田齊泰能を演ず。(八五〇)

○十九日金澤安江町より火を失す。(八五一)
○廿四日二條齊信の使者に金子貸與中込の一部を許容す。(八五三)
○廿四日火防に注意すべきことを告ぐ。(八五四)
○質商の利率と限月の變更を許す。(八五四)

閏五月

○四日鳳至郡院内村直次郎が父の代牢を請ふ爲公事場に駈込みたる事情を取調べしむ。(八五五)
○六日竹澤天滿宮に龍蛇神を合祀す。(八五五)
○八日前田齊泰、瀧之間の講書を聽聞す。(八五六)
○八日石川郡本吉町紺屋三郎兵衛に御金裁許を命ず。(八五六)
○九日前田齊泰、蓮池御庭に金城靈澤碑を建設すべき位置を檢す。(八五七)
○十一日前田齊泰夫人江戸城西ノ丸に登る。(八五八)
○十三日先の罹災者中給人に借知一作限り免除することを告ぐ。(八五八)
○十四日前田齊泰能を演ず。(八五九)
○十七日紀伊侯徳川齊順卒去の報金澤に達す。(八六〇)
○廿一日長將之佐家來毛受莊助に儒者を命ず。(八六一)
○廿二日前田齊泰學校に臨む。(八六一)
○廿五日前田齊泰、火矢方の大筒を觀る。(八六一)

六月

○朔日金澤の町人能登左助、江戸金座より金銀箔の請賣を許されたるを以て苗字を許さる。(八六二)
○三日鹿島郡金丸の孝女いとに賞賜す。(八六三)
○十一日徳川家慶が前田齊泰の暑中を問ひたる奉書金澤に達す。(八六三)
○十四日相模浦賀に米船の入港したる報金澤に達す。(八六三)
○廿三日前田齊泰、瀧之間の講書を聽聞す。(八六四)
○廿三日前田齊泰學校に臨む。(八六四)

七月

○朔日防火の手段を充分にすべきことを定火消役に告ぐ。(八六五)
○九日能登中居の鑄物師に壹貫目玉の大筒製作を命ぜしむ。(八六六)
○十五日前田齊泰、その誕生日を祝して囃子を行ふ。(八六七)
○十八日能美郡附近に大風あり。(八六七)
○十九日火矢方の大筒等を充實するの方法を講ずべきことを命ず。(八六八)
○廿四日青山將監の家來齋藤三九郎の石川郡打木濱に於いて大筒を試射することを許す。(八六八)
○廿五日前田齊泰學校に臨む。(八六九)
○廿九日黑川良安御醫者に召出さる。(八七〇)
○晦日青山將監、齋藤三九郎をして鑄造せしめたる大筒の試射を石川郡打木濱に行ふ。(八七一)

八月

○八日前田齊泰、瀧之間の講書を聽聞す。(八七三)

○十日前田齊泰、先に女院崩御せしを以て禁裏・准后の御機嫌を奉伺せしむ。(八七四)

○十一日前田齊泰、石川郡宮腰に放鷹を行ふ。(八七四)

○十九日前田齊泰、能を演ず。(八七五)

九月

○朔日側用人等書を金澤に發して、前田慶寧の兵學稽古の事等を議す。(八七六)

○二日長氏の與力河野久太郎、江戸浪人松下健作に就き大炮の製作を傳習すべき許可を受く。(八八〇)

○七日前田齊泰學校に臨む。(八八一)

○七日藩の財政逼迫するを以て嚴に諸向の經費を緊縮すべきことを令す。(八八一)

○十三日小川群吾郎等をして江戸浪人松下健作に就き西洋流火術を學ばしむ。(八八三)

○十四日東本願寺、使者を前田齊泰等に遣はして末寺の竣成を謝せしむ。(八八四)

○十七日前田齊泰、青山將監が鑄造せしめたる大炮を覽る。(八八五)

十月

○二日前田齊泰能を演ず。(八八五)

○八日前田齊泰、瀧之間の講書を聽聞す。(八八六)

○十三日前田齊泰、諸士の風俗に關して親諭を與ふ。(八八六)

○十三日女出合宿の禁止を勵行すべきことを命ず。(八八九)

○十五日前田齊泰、金澤郊外大豆田口に放鷹を行ふ。(八八九)

○十九日前田齊泰、鳳至郡中居鑄物師に製造せしめたる大筒を觀る。(八九〇)

○二十日前田齊泰學校に臨む。(八九〇)

○廿四日前田齊泰能を演ず。(八九〇)

○能美郡に於ける百姓の風儀に就いて諭示す。(八九一)

十一月

○五日越前永平寺開基波多野三左衛門家傳の一粒金賣弘の請を許す。(八九三)

○七日前田齊泰、來年三月中に參覲を命ぜられたることを告ぐ。(八九四)

○八日前田齊泰、瀧之間の講書を聽聞す。(八九四)

○十九日前田齊泰學校に臨む。(八九五)

○廿一日家中の借知一部を本年限り免除することを告ぐ。(八九五)

○廿四日江戸浪人松下健作將に歸國せんとするを以てその待遇を議せしむ。(八九七)

十二月

○朔日江戸近海に異國船渡來の際の臨時警衛は小將頭の一隊に之を命ずべきことを告ぐ。(八九八)

○四日徳川家慶が前田齊泰の寒中を問はしめたる奉書金澤に達す。(九〇二)

○五日江戸近海に異國船渡來の際警衛の任に當るべき小將頭に豫め密令を交附す。(九〇三)

○九日前田齊泰、幕府に屆出づべき系譜を發送せしむ。（九〇六）
○十一日前田慶寧の婚禮前に當り江戸邸御廣式向の費用を節すべきを告ぐ。（九〇六）
○二十日金澤茶屋町の名稱を改む。（九〇七）
○廿一日前田慶寧、齊泰夫人を招請す。（九〇八）
○廿二日賭の諸勝負禁止の前令を勵行せしむ。（九〇八）
○廿三日明倫堂教授廣瀬順九郎、前田齊泰の子利義及び利行の名乘を撰進す。（九〇八）
○廿四日諸島の落羽を弓矢奉行に差出すべきことを命ず。（九〇九）
○家中の人々の道中に持參すべき荷物の重量を限定す。（九一二）
○前に遊廓たりし茶屋町・石坂町の家屋を改造すべきことを命ず。（九一三）
○非人小屋の收容者六百三十人を算す。（九一三）

弘化四年　丁未　皇紀二五〇七

正月　○朔日前田齊泰、金澤城に於いて年頭の賀を受く。（九一四）
○二日謠初を行ふ。（九一五）
○四日打初・射初・乘初の儀を行ふ。（九一六）
○十一日前田慶寧疱瘡に罹る。（九一八）
○廿三日前田齊泰、瀧之間の講書を聽聞す。（九一八）
○廿四日前田齊泰學校に臨む。（九一九）
○晦日德川家齊の七回忌法會を神護寺に執行す。（九二〇）

二月　○朔日前田齊泰の子利義・利行名乘を授けらる。（九二一）
○三日百歲の老齡者に物を賜ふ。（九二二）
○九日前田齊泰學校に臨む。（九二三）
○十四日前田齊廣夫人眞龍院還曆の祝賀を行ふ。（九二四）
○十七日前田齊泰能を演じ、齊廣夫人眞龍院の還曆を祝す。（九二四）
○廿二日前田齊泰の子利義・利行金澤城松之間に移る。（九二五）
○廿七日德川家慶等使を遣はして前田慶寧の酒湯に浴するを祝す。（九二六）

三月　○六日前田齊泰、慶寧の病癒えたるを祝し能を演ず。（九二八）
○十二日江戸浪人松下健作再び金澤に來る。（九二九）
○十三日前田齊泰、金澤を發して參覲の途に就く。（九三〇）
○廿三日大聖寺侯前田利平、參覲の途金澤に着す。（九三九）
○廿四日前田齊泰、上野坂本に於いて地震に會す。

(九四〇)

○廿四日木村釆右衛門・永山平八等、越後中屋敷にて地震に會す。(九四一)

○廿四日金澤に地震あり。(九四四)

○廿八日前田齊泰江戸に着す。(九四五)

○廿九日德川家慶、使を遣はして前田齊泰の參覲を勞せしむ。(九四八)

○西洋炮術に熟達する者を加賀藩に招致するの許可を幕府に求む。(九五〇)

○江戸詰人に衣服その他の儉約を旨とすべきことを告ぐ。(九五一)

○諸士の生活を儉素にすべき從來の令を勵行せしむ。(九五二)

四月

○朔日前田齊泰登營して參覲の禮を行ひ、慶寧は病氣快癒を謝す。(九五三)

○二日震災により江戸・金澤間の旅行は中仙道を取ることを屆出づ。(九五四)

○三日鹿島郡田鶴濱に火災あり。(九五五)

○四日前田慶寧の婚禮に際し節約を緩くすべからざることを告ぐ。(九五五)

○六日前田慶寧、久留米侯有馬慶賴の妹崇姫に結納を贈る。(九五六)

○七日前田齊泰・慶寧共に久留米侯有馬慶賴を訪ふ。

(九五九)

○十日今明日金澤の市民前田齊泰の旅中無事を祝して盆正月を行ふ。(九六〇)

○十日犀川・淺野川・手取川共に出水す。(九六一)

○十三日前田慶寧の夫人入輿す。(九六二)

○十三日前田慶寧夫人を東御前と稱せしむ。(九六三)

○十五日德川家慶、前田慶寧の成婚を祝して物を贈る。(九六四)

○十六日東本願寺前門主越前吉崎に下向するを以て、百姓の參詣せんとするものは裁許十村の許可を得べきを命ず。(九六五)

○廿四日震災により信越の通過困難なるを以て中仙道を取るべきを命ず。(九六六)

○廿五日德川家定、前田慶寧夫人に物を與へて成婚を祝す。(九六七)

五月

○朔日前田齊泰夫人江戸城に登る。(九六七)

○二日前田齊泰、慶寧の成婚を祝し能を演ず。(九六八)

○六日江戸に往來する者の中仙道及び北國街道中便宜の道路を擇ぶべきことを告ぐ。(九七〇)

○十三日前田慶寧の當秋に於ける歸國を廢すべき年寄中等の意見を決定す。(九七一)

○十四日先に中仙道通行を命じたる令を取消し、通常の如く北國街道を取らしむ。(九七三)

○十七日前田齊泰、慶寧等と共に平尾邸に臨む。(九七四)
○廿一日會津侯松平容敬・容保父子本郷邸に臨む。(九七五)
○廿六日能美郡の百姓等、小松本蓮寺に押寄せ騷擾す。(九七七)
○廿八日大聖寺侯前田利平、關東筋川々普請を命せられたるを以て使者を金澤に遣はして助資を求む。(九七九)
○祠堂銀借用の家中にその返濟方に關して告ぐ。(九八〇)

六月
○九日前田齊泰、子女の養育方を簡易にすべきことを命ず。(九八一)
○十四日長氏與力河野久太郎の松下健作より傳習監造せる大炮の試射を出願す。(九八三)
○十五日前田齊泰の子利順譲を受く。(九八四)
○家中の人々に先祖由緒一類附帳を改めて提出すべきことを命ず。(九八五)

七月
○八日家中の人々江戸往來等の際の荷物に過量なからしむべきこと戒む。(九八六)
○廿三日長氏の與力河野久太郎の監造せる大炮を石川郡打木濱に觀る。(九八七)
○廿五日河野久太郎、その監造せる大炮の試射を石川郡打木濱に行ふ。(九八八)
○郡奉行、その役所に張文のありたる時御算用場に持參する手續を改めんことを稟請す。(九九〇)
○藩の收納藏の設備に關して令す。(九九〇)

八月
○三日德川家慶、前田齊泰等に放鷹によりて獲たる雲雀を贈る。(九九一)
○八日前田齊泰の子利順の居を御表に移すべきことを報ず。(九九二)
○廿四日前田齊泰の子直會金澤に生まる。(九九三)
○廿四日下曾根金三郎製作の揚火玉江戸より到着せしを以て、小川樺吾郎にその模造を命ず。(九九三)
○當夏以來多雨にして金澤の道路破損するを以て之が修理を士庶に告ぐ。(九九四)

九月
○二日前田齊泰、天皇の卽位を賀し奉らん爲使者を金澤より發せしむ。(九九五)
○四日前田齊泰、高松侯松平賴胤等を招請して能を演ず。(九九五)
○四日前田齊泰の子直會の七夜の祝儀を行ふ。(九九七)
○十九日小川樺吾郎等、松下健作をして製造せしめたる西洋流大炮を試射し、その相傳を得たることを屆出づ。(九九七)
○廿三日東本願寺末寺遷佛式を行ふ。(一〇〇〇)
○廿四日長氏の與力河野久太郎に大炮の製造法を傳

へたる江戸浪人松下健作に賞賜す。(一〇〇〇)

○陪臣中勤學の爲江戸等に赴かんとする者は督學をして學業を試みしむべきことを告ぐ。(一〇〇一)

十月

○二日前田齊泰、慶寧と共に登營して天皇の卽位を賀し奉る。(一〇〇二)

○十八日女院崩御の報金澤に達し、前田齊廣夫人その喪に服す。(一〇〇三)

○廿八日徳川家慶、前田齊泰等に放鷹により獲たる鴨を贈る。(一〇〇四)

十一月

○四日前田齊泰の子利順、額直・袖留の儀を行ふ。(一〇〇五)

○十一日前田齊泰等、先に徳川家慶より拜領せる鴨を披露す。(一〇〇六)

○十三日前田齊泰能を演ず。(一〇〇七)

○十五日大聖寺侯前田利平、關東筋川々普請を命ぜられたる際助資を得たるを謝す。(一〇〇八)

○十九日會津侯松平容敬等、本郷邸に臨みて乘馬を試む。(一〇〇九)

○廿五日家中より徴する借知の一部を當年限り免除するを告ぐ。(一〇一〇)

○廿九日西洋流大炮を製造したるを幕府に屆出づる爲使者を發す。(一〇一一)

○廿九日前田齊泰、來春歸國の際中仙道を取ることを定めたる報金澤に達す。(一〇一三)

十二月

○十六日徳川家慶、前田慶寧に放鷹によりて獲たる雁を贈る。(一〇一四)

○十八日前田齊泰の子利順、居を御表に移す。(一〇一五)

○二十日幕府、能登の預所に對し加賀藩が永定免皆金納とする舊制を復することを告ぐ。(一〇一六)

○廿一日幕府、前田齊廣夫人及び慶寧夫人に歳暮の祝儀を贈る。(一〇一七)

○廿五日前田齊泰能を演ず。(一〇一八)

○廿六日前田齊泰の子直會の色直の祝儀を行ふ。(一〇一九)

○廿六日前田齊泰の子直會を年寄前田近江守の養子たらしむる件を議せしむ。(一〇二〇)

○廿八日講師佐々木泉景、御醫者格を以て待遇せらる。(一〇二一)

就業

侯爵前田家囑託　日置　謙

不許複製

昭和十八年五月二十五日印刷
昭和十八年五月三十一日發行

〔非賣品〕

東京市目黑區駒場町八百六十一番地
著作者　侯爵前田家編輯部

東京市淀橋區東大久保町二丁目三百十七番地
發行者　石黑文吉

石川縣金澤市高岡町九十番地ノ二
印刷者（中石一二八）高橋豐吉

石川縣金澤市高岡町九十番地ノ二
印刷所　明治印刷株式會社



